51 Shukyo
5 May–Sept v.6
1895

宗教

○合本第八巻

（自第四十三號 至第四十八號）

主義之宣言

抑も宗教は上帝を知覺し、自ら神意と信ずる所に從ひ、生活の方向を決する所のものなり、

。。

…テリアン教徒は、誠實に上帝を尊崇し、宗教的智徳と生活とを探求するの徒に向つて同情を表し、交友たらん事を希望するものなり、

日本ユニテリアン教徒は、上帝の天父なる事、及び人類の同胞なる事を信じ、此雑誌を奉じ以て完全なる眞理と正道との本領を、世界…す、

…テリアン」教の何者たる…にせんが爲め、左に…的主義及び其普通信仰

…テリアン教的主義

…は口碑的教權によらず…人道、科學的眞理を以…す、…法は全く自由討究を以…法となす、…は個人的及び社會的…く人類の徳性を最も…せしむるを以て目的

…テリアン教徒の信仰

…は信ず、宗教とは人類の上帝に關する觀念及び人類の義務なる者（上帝の意志とも稱すべき義務）に關係する所以を自然に表明するものなり、

二 ユ教徒は信ず、基督教の根本的教理は上帝を天父となし人類を同胞となすものなり、

三 ユ教徒は信ず、上帝は永遠無窮の權力、智惠、慈悲にして物質界、精神界の源泉、教導者及び整理者なり、

四 ユ教徒は信ず、人類は宇宙間創造力の最も高大なる生産物なり、故に人類は發達すべき智力と精神とを賦與せられ、宗教的及び道徳的感覺を有し、且つ上帝を知覺し、無究なる生命の希望を有す、故に人類は上帝の子と稱するに足れり、

五 ユ教徒は信ず、新舊約全書は古代人類幾多の著書を蒐集せるものにして固より誤謬の存するあるも人類の宗教的性質を表明せる最良書籍の一なり、

六 ユ教徒は信ず、基督は精神界の最大なる豫言者なり、宗教的教訓を垂れ以て人類を導きたる諸師の最高なるものなり、

七 ユ教徒は信ず、諸宗教は相互優劣の差あるべきも、其本源同一なにして、其目的も亦實際同一なるを以て互に良友なり、

PACIFIC UNITARIAN SCHOOL FOR THE MINISTRY
NON MINISTRARI SED MINISTRARE
INCORPORATED MAY 12, 1906
BERKELEY, CALIFORNIA
THE GIFT OF
C. MacCauley

宗敎

宗教合本第八卷目次（自四十三號至四十八號）

社説

○犯罪の研究……（二五七）
○日本ユニテリアン協會の目的を論して世人の誤解を正す……（三一七）
○社會法則の性質……（三八一）
○宗教の觀察的研究……（四三三）
○佛教に所謂「諸法無我」を論す……（四九一）

論説

○意志自由と倫理學……山本艮吉……（二七九）
○吠檀達學派と大乘佛教（續）……落木子……（三四五）
○健康性の宗教ザラツストラ教（一）……木村鷹太郎……（三五一）
○健康性の宗教ザラツストラ教（二）……仝……（三九四）
○日本祖先祭……蓮沼磐雄……（四〇二）
○日本祖先祭（續）……仝……（四五七）

10846

○今日の宗教は果して教育的勢力を有するや……ドクトル、オブ、フイロソフイー……藏原惟廓……(四四〇)
○今日の宗教は果して教育的勢力を有するや(續)……仝……(五〇二)
○露國の理想と其地位……小西增太郎……(四五四)
○個人主義を論す……飯塚陽平……(四六二)
○神道實行教……管長……柴田禮一……(四九九)
○性善惡說を評す……山本貝吉……(五一一)
○飮食法……大內青巒……(五四七)
○宗教家の進退……布川靜淵……(五四九)

講演

○思想界の變動……文學博士……元良勇次郎……(二七〇)
○日本獨立の氣象……久米邦武……(三三〇)
○倫理の進步と日本人……文學博士……加藤弘之……(三九〇)
○日本人種と商業術……飯田旗郎……(五五三)
○哲學の話……文學士……松本文三郎……(五六七)

批評

○「先哲未言」の創見……布川静淵……(二八七)
○島地默雷師の大乘佛説論……雄山人……(二九六)
○松本文三郎氏の「公孫龍子」を讀む……田岡嶺雲……(四〇九)
○加藤博士の一論文……佐村德介……(四六八)
○田岡嶺雲氏の評論に就きて……文學士　松本文三郎……(五一二)
○諸法無我の難に答ふ……高木笠天……(五七九)
○松本文學士に答ふ……田岡嶺雲……(五八四)

史傳

○日蓮上人……笹川鍋麿……(五二六)

雜錄

○西藏佛教の探檢(完)……汀水生(二九九)、○神道家の覺醒を促す……(三〇二)、○美術と風俗との調和……(二九六)、○貧民救濟……(三六〇)、○基督教に於ける佛教の感化……(三六三)、○印度佛徒是唯物論者……(三六五)、○ナ、を讀みて……杉村縱横(四一四)、○荀子の性惡論……(四一九)、○西園寺文相の談話……(四七三)、○佛教界の革新期……(四七五)、○宗教心の制限……(四七八)、○釋迦は如何なる種族なるか……(四八一)、○女學雜誌記者の自由派に對する評論……(五三二)、○思想の生涯……(五三五)。○布教上の二大標準……(五三七)、○教界改革の困難…

…(五三九)、○レヴイツト氏の誤解に對するマツコーレー氏の書翰………(五八九)、○レヴイツト氏に質す……竹内楠三(五九四)、

時　評

(二九九頁以下)○佛教大會、○宇宙神教第一總會、○第十回組合教會の年會、○福音同盟會、○岡山孤兒院、○澎湖島の基督教會、○印度事情、○占領地の宗教、○支那人の宗教心、○下間鳳城師の殉死、○戰地に聖書を送る、(三七三頁以下)○今後の佛教界、○明治清教徒記者の所謂實驗、(四二五頁以下)○ソクラテス降誕祭、○先進學院卒業式、○眞言律宗の分離、○廿七年度同志社報告概要、○日本基督傳道會社の略歷、○天主教傳道の出來、○臺灣の基督教、○米國女子高等教育の進步、○組合教會の廿七年度統計、○日本正教會の財政、○日本帝國と羅馬法王、

彙　報

宗報 第四拾參號（明治廿八年五月五日）

社說

犯罪の研究

社會を改善し國家の發達を助けんとする有志の人をして常に歎息止む能はざらしむるものは、我邦犯罪者の數比較的に多く、又近來增加の度極めて强き所の事實なり。第十三回帝國統計年鑑の示す所によれば、明治二十五年十二月末の調査に於て、在監人の實數は携帶乳兒を除きて七萬五千六百九十八人なりとす。而して同時の人口は四千百〇八萬九千九百四十八人なるを以て、在監人の全人口に對する割合は大約五百四十三分ノ一にして、人口百に付き〇、一八四となるなり。即ち、帝國臣民の五百四十三分の一は極めて不名譽なる罪囚となりて獄裏の生活をなせるものなり。之を歐洲列國に比較するときは、確かに我邦は犯罪者の過多なるものの一に數へられざるべからず。これか例證として玆に二三の國の割合を揭げんに、西紀一千八百九十二年、即ち、我明治二十五年の調査によれば、佛國在監人の總數は僅かに二萬五千人にして、人口百に對するときは〇、〇六五たるに過ぎず。和蘭は一萬六千人にして之を人口に比較すれば、百人に付き〇、〇五〇となる。又白耳義は僅かに四千人にして之を人口に割あつれば、百人に付〇、〇六五となるなり。今以上三個國の在監人の比較數と我邦の在監人の比較數（〇、一八四）とを對照すれば、我邦在監人の過多なること佛蘭西、白耳義に殆と三倍し、和蘭に殆と四倍すること一目して自ら瞭然たるべし。

（一）　犯罪者增加の傾向

我邦の在監人は他邦と比較してその割合の多きのみならず、年々著しく增加する傾向あるものなり。在監人の增加に絕對的增加と比較的增加とあり。即ち、絕對的增加とは單に在監人の實數が前年より若干の增加をなしたる事實を指すものにして、例へば明治二十五

年には在監人に二千四百四十人の増加ありたりと云ふが如し。比較的増加とは全人口に對する割合の増加にして、例へば明治廿四年の割合は百人に付〇、一七九なりしが、廿五年の割合は〇、一八四となれるを以てこれ即ち〇、〇〇五だけ比較的増加をなしたるものなり。固より罪囚の増加と云へば絶對的増加にあれ、或は比較的増加にあれ、何れにても歎息すべきことに相違なしと雖ども、絶對的増加のみなれば左程恐るべき現象にはあらず。そは罪囚の増加するに先きだちて全人口の増加あるものなればなり。例へば明治廿五年には二千四百四十人の罪囚を増加したりと雖とも全人口には既に三十七萬一千二百六十三人ほどの増加ありたるものなれば、罪囚の數にもかばかりの増加あることは蓋し自然の勢に外ならざるなり。故に絶對的増加のみにては實際罪囚の増加する傾向即ち罪悪が國民を蠶食する實勢を現はすものにあらず。果して罪悪の蠶食力が増加するか、或は減少するかを實際に示す者は犯罪者の比較的増減にして若し一國罪囚の上に於て比較的減少あらんか、假ひ絶對的數の増加あるも毫も憂慮すべきにあらずと雖ども、之に反して若し比較數の増加即ち割合の増加あらんか、これ誠に恐怖すべき現象たるなり。然るに我邦近來の傾向は累年比較數の増加を現はすもの丶如し。左の統計はその一斑を示すに足らん。

（第一）

	人口	在監人	百ニ付
二十一年	三九、六〇七、二三四	六〇、七二九	〇、一五三
二十二年	四〇、〇七二、〇二〇	六三、六六二	〇、一五九
二十三年	四〇、四五三、四六一	六九、〇八〇	〇、一四六
二十四年	四〇、七一八、六七七	七三、二五三	〇、一七九
二十五年	四一、〇八九、九四〇	七五、六九〇	〇、一八四

（但し玆に擧げたる在監人は無論携帶乳兒を除きたるものなり）

以上統計の示す所によれば人口百に對する在監人の割合は明治二十三年を除く外は凡て漸次的増加を表はせるものにして、二十二年と二十三年との差は極めて著しきものなり。即ち、二十二年は二十一年より〇、〇〇六増加し、二十四年は二十二年よりは〇、〇二〇増加し又二十五年は二十四年より〇、〇〇五増加したるものなり。されば二十一年より二十五年までの左監人の割

合は著しく增加せることは明かなる事實にして、二十五年の割合は二十一年に比すれば〇、〇三一の增大あり、又この五年間に進みたる比較的增加の力は平均每年〇、〇〇八弱に當るべし。之によりて考ふれば明治二十一年より二十五年迄の在監人の比較數は每年平均〇、〇〇八弱の割を以て增加し來れるものにして、若し假りに二十五年の人口に基きて之を計算すれば、〇、〇〇八てふ比較數は大約三千二百八十人となる。即ち、犯罪人は累年人口の增加と比例して始終同一の割合に增加する外に、更に每年三千二百八十人宛增加する理なり。若し社會に著しき變動なければ、將來も亦大抵同一の割合を以て增加するならん。これ實に歎息すべき現象にあらずや。

（二）　犯罪者の社會に及ぼす影響

犯罪と云ふ以上は如何なる種類のものにても多少社會の秩序を亂し國家の發達を妨ぐる有害の現象なることは言はずして自ら明かなり、然りと雖ども今殊更に犯罪者の社會に及ぼす影響と題するものは、放火犯と火災、竊盜犯と盜難などの如き社會の或一部分が崇る直接の結果を指すにあらずして、數多の犯罪者が間接に社會全躰の上に及ぼす影響を謂ふものなり。夫れ我邦犯罪者の人口に對する割合が上述の如く累年增加するてふ事實は我國民一般の上に莫大なる損失と害毒とを與ふるものに外ならず。假令犯罪者の爲め直接に害を崇らざる者も其社會の一員として生存する以上は間接に種々の方面より其影響を受くることを免るべからざるを以て、犯罪上の問題は社會一般の利害と密接なる關係を有するものと云ふべきなり。これらの關係は種々の方面より考察することを得べしと雖ども、今便宜の爲め左の二點に區別して少しく之を論ぜんとす。

（イ）　經濟上の影響――生物を組織するものは個々の細胞なるが如く、社會を組織するものは個々の人民なり。又個々の細胞は特有の生理的作用を現はして生物躰の生活を保持する如く、個々の人民は各々特有の働作を有して社會の生活を維持するものなり。故に凡そ正當なる一定の職業を有して獨立の生活をなし、

社會に對する自己の本分を盡して他の權利を害せざるものは、假令微力なる一民と雖ども、悉く社會生存の一原素として有用ならざるはなし。然り而して若し有毒の性質を有する細胞、生物の組織中に加はらんか、忽ち全躰の生理的作用に變化を起して漸次生活力を弱はめその生命を危からしむるが如く、若し社會組織の中に國家の目的に反しその意向を害するが如き邪惡なる性質の人民加はらんか、忽ち社會生理の上に變動を生じ、從て社會一般の活動力を減し、その發達を妨ぐるものなり。固より立憲政躰の國家の如く既に高度に發達したる文明國に於ては、假ひ數多の有害なる人民、即ち犯罪者を生ずるも、國家の統御力によりて之を禁制し得るものなれば、決して社會の滅亡を來たす如き憂はなかるべしと雖ども、然れども之を處分する爲めに消耗さるゝ社會の生活力は隨分著大なるものにして、夫れだけ社會の正面的活動を減少するものと謂はざるを得ざるなり。

抑も一國の消費せざるべからざる財力に正面的の働をなすものと反面的の働をなすものとあり。鐵道を布敷し、教育の普及を計る如きことに消費する財力は凡て正面的の働をなすものにて、道路の破損を修膳し、犯罪者を處分するが如きことに費す所の財力は反面的の消費に過ぎず。凡そ社會經濟(廣き意味の)の主眼とする所は反面的消費を成るべく減少するにあり。而して多額の反面的經費を要する間は未だ以て進步したる社會とは言ふべからざるなり。然るに我邦目下の狀態を以てすれば、既に述べたる如く犯罪人の現數實に多く、又年々增加の傾向あるを以て、之れが爲め莫大の經費を投げざるを得ず。年々地方稅及國庫より支出する所の警察費、裁判費、監獄費等の莫大なる經費は之を證するにあらずや。警察、裁判等の費用は暫く措き、七萬五千餘の在監人の爲めに消費する監獄費のみにても、明治二十五年度の統計によれば三百〇七萬七千九百二十九圓四十二錢五厘の巨額にあらずや。是れ囚人の雇賃錢及び其他の役業より生じたる收入を差引きたる純然たる消費金のみなり。されば此費額は全く社會

の生活力、發達力を減少するものにあらずして何ぞや。又他の方面より見るときは社會を組織し之を活動せしむる原力となるべき人民中七萬五千有餘は、社會の生活に對しては、全く無力なるものにして、恰かも枯死せる細胞の如し。若し此等の人民をして各自の活動をなさしめ、社會上に活かしおかば、忽ち社會の病毒を來たすを以て、莫大の國力を消費して、之を社會的關係より除去せるものなり。故に同胞國民中七萬五千餘の人は常に社會の活動に關しては苟も係はる所なし。果して然りとせば吾人は四千百萬餘の人口を有すとするも、その中七萬五千餘は社會的關係より云へば全く無きものと思はざるべからざるなり。

（ロ） 風敎上の影響――七萬五千餘の在監人は何時も同一の罪囚にあらず、絶えず新陳代謝するものにて近年の統計によれば毎年二千數百の出入あるものゝ如し。然して一たび入監するときは大に前非を悔て改心するものなきにあらずと雖ども、又毫も悔改の徴なきのみならず反て悪性を養成するもの少なからず。最近の統計によれば遷善悔悟の徴効あるものは無きものよりも少數なるが如し。即ち左の統計は其百分比例を示すものなり。

（第二）

	二十五年	二十四年	二十三年
悔悟の徴効有るもの	四一、八四	四三、八七	四七、八九
悔悟の徴効無きもの	五八、一六	五六、一三	五二、一一

此統計を一見せば在監中に於て遷善悔悟の情念を起す囚人の比較的に乏しきことを推して知るべきなり。而して悔悟せざる徒は出獄後も依然として自らその行爲を改めざるのみならず、恐くは尙ほ一層罪悪に増長するものなるべし。故に再び同様の犯罪をなすか、或は他種の犯罪をなすに至る。是れ我邦に再犯以上の罪囚極めて多き所以にして、その割合は平均十中の五より七八に達すと云ふ。左の統計は以て其一班を示すに足らん。

（第三）

	二十六年六月末日調	二十六年十二月末日調
初犯	一四、〇九六	二九、四六七
再犯以上	一六、九一〇	三四、一七九

（此内二縣の調査を脱す）

斯の如く改悔の情念起らずして再犯以上に及ぶ如き罪囚は自ら悪事を働くのみに止らず又己れの知友を誘掖して共に悪事を犯さしむるものなり。是れ罪悪の益々蔓延する一因なり。又此等の罪囚は故意に他人を誘掖せざるも、その家庭に於て知らず識らずに邪悪なる氣習を家族に傳ふることあり、或は社交上に於て思はず他人を悪化することあり以て社會に罪悪の氣習を擴むるに至る。是れまた罪悪の蔓延する一因たるなり。又性質極悪なる罪囚が在監中に初犯者を感化する勢力の極めて强大なることは驚くべきものにして到底教誨師の説法の能く及ぶ所にあらず。若し一たび悪念を起したるものにして之れに接せんか、到底永く抵抗する能はざるべし。されば監獄内の悪化は犯罪者を益々増加せしむる一因たるなり。斯の如く此等の罪囚は恰かも傳染病者の如く、その罪悪を社會に蔓延せしむるものなるを以て、犯罪者の増加するに随ひて社會の空氣は汚れざるを得ず。若し社會の空氣にして罪悪に汚されんか、國民の德育上に著しき影響を及ぼすものにして、假令善良なる教育制度を立つるも到底充分なる効果を奏する能はざるなり。罪囚が社會に影響を及ぼす力の强大なる程、教育、宗教等の如き德化事業はその効を奏する度弱きものたること疑なし。犯罪者の風教上に及ぼす影響夫れ怖るべきにあらずや。

（三）　犯罪減省に必要なる研究

我邦犯罪の形勢は以上論ずる如くなるを以て、是れが減省の策を講ずるは目下の急務にして、一日も猶豫すべきにあらず。然りと雖ども概して我國民は犯罪上の問題に關しては甚だ冷淡なるものにして、當局者の外には殆ど之に意を注ぐものなきが如し。若し斯くの如くにして止まんか、到底犯罪者の減省を見る日は來らざるべし。故に吾人は一般國民を刺戟して犯罪上の問題に注意を傾けしめんことを切望するものなり。苟も社會の改善者を以て自ら任ずる士は進て此問題の爲めに力を盡さゞるべからず。

夫れ犯罪者の減省を圖る方法に種々あり。或は一定の制限内に分房の制を立てゝ罪悪の傳染を防がざるべか

らず、或は教誨の方法を改良して大に有効ならしめざるべからず、或は刑餘者保護の良法を發明して再犯を豫防せざるべからず。夫れ若し此等の方法にしてその當を得んか、犯罪減省の成効を見る期して待つべきなり。今その一例をして大分縣出獄人保護會社の成蹟を擧げんに、同會社は明治二十三年三月に創立せられたるものにして、二十七年十一月に至るまでに保護を受けたる出獄人の總數は五十四人なりしが、被保人の成蹟は左の如し。

（第四）

一當時他家の家僕となり居る者	二人
一當時妻帯自治の業を營む者	四人
一他家より貰ひ受けられたる者	十三人
一資金を積み歸村せしもの	二十六人
一不結果逃走せしもの	九人
一合計	五十四人

（大日本監獄協會雜誌第七十八號）

今之を便宜の爲め百分比例に計算すれば、成蹟の善良なるものは八五、一八となり、不結果のものは一四、八二となる。若し之を第二表と對照せば著しき差異ある者なり。之れ固より一會社の成蹟に過ぎざれば之を以て一般の標準と見るべからざるは勿論なりと雖ども、亦以て聊か刑餘人保護會社の效力を推すに至らん。

此等の方法或はその他の方法によりて犯罪者の數を減し、以て社會の病根を絶たんとするに當り、第一に緊要なるものは犯罪人に關する確實、精細なる知識なり。即ち、犯罪人が依て活動する所以の心理的法則、社會學的法則を明かにするを以て最も緊要となす。恰かも一種の病症を治療せんとするに當りては先づ之れが病理に通じおらざるべからざるが如く、社會の疾病を治せんとするに當りては須く犯罪の法則に通じおらざるべからざるなり。若しこの知識を缺かんか、之れ恰かも病理を知らずして患者に對するが如く、心理に通ぜずして有効の教育家たらんと望むものゝ如く、到底その効を奏する能はざるは言はずして明かなり。

然るに此の如き知識は外國に於て研究したる結果を知りたればとて充分なるにあらず、僅かに多少の參考たるに過ぎざるなり。そは彼れと我れとは大に人情、風俗

を異にせるを以て、彼れの狀態を以て必ずしも我れを計るべきにあらず。これロンブロゾー等の研究したる結果にして我邦の狀態と全く相異するものあるを以ても知るべきなり。故に犯罪の如き社會上の問題につきては、物理、化學等の如き簡單なる現象に關する研究とは大に異なるものにて、決して外國に於て調査したる結果に依るべきものにあらず。一々自國の事實を觀察して精密なる獨立の研究をなし、日本人に固有の法則を發見せざるべからず。斯の如き知識にして始めて實地に適するものとなる。若し夫れ萬國共通と云ふが如き抽象に過ぎたる法則に至りては所謂空理に偏するものにて、到底實際の用に立ち難きなり。されば吾人か目下の急務となす可きものは犯罪的事實を觀察して種々の材料を蒐集するにあり。而して若し一部分の法則にても發見するときは忽ち之を實地に應用してその眞否を撿し、果して正確なることを認めば直ちに之れが應用を擴めて犯罪減省の事業を助くべきなり。此等の知識を總括して罪質學（Criminology）てふ名稱を附す。

（四）　罪質學の範圍

罪質學（クリミノロジー）とは犯罪の種類を區別し、犯罪者の身躰上幷に精神上の特性を觀察し、又其過去及び現在の境遇を調査する等の如き觀察的方法によりて發見したる犯罪に關する一切の法則を指すものなり。斯の如き法則は犯罪人に關する種々雜多なる事實を撿察してその中より概括し得べきものにして、最初より畫然研究の範圍を規定し置くべきにあらずと雖ども、亦一方より考ふれば材料の蒐集に便ならんが爲め、略ぼ研究すべき方面を指定し置く必要なきにあらざるなり。左に極めて粗略なる研究の區分を記せん。

（イ）　犯罪者の形躰と犯罪との關係

以國罪質學の大家ロンブロゾー及び此學派の說によれば犯罪者には一種特有の形躰上の特質ありて常人と相異するものなり。又此等の特質は犯罪の種類の異なるによりて相異するものなり。故に犯罪者はその形躰の構造上より或種の犯罪をなすべき特質を有しおるもの

と謂はざるべからず。例へば氏が犯罪者の搆造は一般に不規則なるもの多しと云へるが如き、又大なる頤、突出したる耳、眇目、濃髮、ヒッ込みたる額等の如きは犯罪人中に多く現はるゝ相なりと云へるが如き、又放火犯と竊盜とには黒髮のもの最も多しと云へるが如き、犯罪人の頭蓋骨は大抵小なりと云へるが如き類是なり。又近來坪井正五郎氏はガルトン氏發明の重撮寫眞法を應用して觀相法の實驗をなし、東京感化院なる三種—竊盜、怠惰、剛情—の惡性兒の面相を重撮せられしことあり　（東洋學藝雜誌第百七十五號）。若し氏の方法にして充分試驗の後好結果を得て、譬へば竊盜犯の面相とか殺人犯の面相とか云ふ如き一定の面相定まらんか、ロンブロゾの云が如き犯罪者の模型を得ることとなるべし。各人の氣風が顏面に何時も表出され遂に一種の面相を造ることとは生理上隨分想像し能はざるにあらずと雖ども、實際上果して斯の如きこととあるか、又尚ほ進でロンブロゾの云ふが如き犯罪者の模型存するか否かは今日の所にては未だ疑はしき問題なり。然りと雖ども兎に角ロンブロゾーは許多の事實を集めて立論したるものなれば、吾人も亦た我國の犯罪者に就き充分注意して此方面の研究をなさゞるべからず。我國に於ても之に類似する如き俗諺少なからず能く此らをも穿鑿を盡し、果して斯る必然的關係あるや否やを知らざるべからず。

（ロ）犯罪者の心狀と犯罪との關係

次に研究すべきは犯罪者の精神の狀態なり。之れ犯罪の直接原因とも云ふべき者にして最も必要なりとす。之を分ちて感性と氣習との二類となすことを得べし。

感性の研究———此部の研究に於ては犯罪者が外物の刺戟に感應する度の强弱を定むる者なり。ロンブロゾー派の學說に從へば、感性の度は犯罪者と常人との間に於て著しく相異するものとす。即ちロンブロゾ及びマーロ一の說によれば、一般の感覺に於ては犯罪人の感應力は常人よりは六分の一弱く、苦痛に感應する力は五分の二弱きものなり。又ロンブロゾの云ふ所によれば犯罪人の氣象に對する感應は常人よりも鋭きもの

にして、雷雨、暴風などの前には著しく感ずるものゝ如し。次に視覺については大抵色盲にして、又聽覺は一般に鈍きものなりと云ふ。斯の如く概して感性の鈍きは、從て道德上の感情を薄弱ならしむる一因たらさるを得ず。果して感性上に於て常人と異なる所あるか、如何、之れ充分研究せざるべからざる點なり。

氣習の研究――――茲に氣習と云ふは心の上の習慣を總稱するものにして、即ち思想及び感情の一定の傾向を指すに外ならず。夫れ各人の心情を異ならしめ、從て其行爲に著しき徑庭を生ぜしむる所以のものは抑も何ぞやと云ふに、之を心理學上より分解すれば左の四因となるべしと信ず。

第一は其人の心中に存する感情の種類なり。例へば慈悲、正義などの如き高尙なる感情を有する人あり、又殘忍、嫉妬などの如き邪惡なる感情を有する人あり。而して後者の好みてなす所は前者の見るに忍びずとする所なり。斯る感情の種類の差は各人の行爲をして大に異ならしむる理由中の重もなるものとなるべし。

第二は異類の感情相互の間に於ける力の相異なり。夫れ吾人の行爲、氣質は感情相互ひの競爭によりて定まるものにして、善良なる感情の勝つときは善行となり、邪惡なる感情の勝つときは惡行となる。而して如何なる感情が其人に取りて最も強大なる力のものなるかは人々大に相異するものにて、慈悲心の最も強き人あり、嫉妬の情の極めて強き人あり。斯く各人に於ける感情の比較的勢力は大に相異するものなるを以て、その行爲の上にも亦著しき相異を來たすものなり。

第三は觀念結合の習慣各人同一ならざることなり。例へば一の銅像に對するに當り、美術上の觀念を喚起するものあり、古代の人物を回想するものあり、又尊敬の念を起して崇拜するものあり。斯くの如く同一の觀念より生じ來る他の觀念は人によりて大に相異するものなれば、これによりて各人の行爲を著しく異ならしむ。迷信誤想によりて犯罪をなす人の少なからざるは此理によるものなるべし。

第四は觀念結合の多少及び結合力の弱強を云ふものな

り。夫れ觀念の組織甚だ簡單にして少數の觀念の結合ある人あり、又た種々雜多の觀念一定の秩序によりて結合する人あり。即ち前者は思慮なき人にして、後者は思慮深き人たるなり。又觀念の結合力に各相異あり、其人によりて多少異なるものなれば之また行爲に影響せざるを得ず。

以上の四因中前の二者は通常感情と稱するものにして後の二者は理性と稱するものなり。此らの四因により て各人の行爲は支配さるゝものなれば、親く犯罪者を觀察してその氣習を明かにし、以て如何なる心狀が犯罪を起したる主要の事情なるかを明かにせざるべからず。若し之を明かにし、又その人の氣習を充分に認めたる以上は既に之を敎化する道を發見したるものと云ふべきなり。個々の犯罪者に接して其氣習を明かにし、而して之を分類するときは如何なる種類の犯罪者は如何なる氣習を有すとの眞理を發見することを得べし。敎化の根本的手引となるものは此知識を措きて他に求むべからざるなり。

（八）　自然界の變化と犯罪との關係

自然界の變化とは氣象、温度、地勢などの變化を云ふものにして、此等の變化は犯罪の種類及び其數に著しき響影を及ぼすものなり。例へば、統計學者の說によれば、故殺犯の如きは別して暑熱の影響を感ずるものにて、毆打創傷の重きもの、尊屬親の毆傷の如く、七月、八月を高度の月となす、此兩月は人間暴擧の最も盛なる月なりとす。又强姦罪、就中幼者に對する强姦は、一種著明の進退を爲すものにて、重罪の中にありては空氣温度の影響最も判然たるものなり、即ち別きて五六七八月に多く最高は六月にあり、之に反して寒冷の月は甚だ少し、而して最低は十一月にありと云ふ。斯の如く犯罪の種類及び數は其氣候と相關することと甚だしきものなれば此等の統計を明かにするは實に緊要なる研究たるなり。

（三）　社會的境遇と犯罪との關係

是れ犯罪の研究中最も必要なる方面なるへしと信す。今便宜の爲め之を分ちて犯時の境遇、過去の境遇の二

類となすことを得べし。

犯時の社會的境遇――犯時の境遇とは犯罪をなす當時の社會に對する己れの位置を指すものにて、即ち犯罪と直接の關係を有する社會的事情なり。例へば家族の不和より犯罪をなすものあり、貧苦に迫りて犯罪をなすものあり、牽束の烈しきが爲め止むを得ず犯罪を企つるものあり。此らの社會的事情は犯罪上に著大なる影響を有するものにて。その氣習は左程悪性にあらざるも、境遇に制せられて止むを得ず罪を犯すものあり。今此れが一例として中村襄氏が「罪囚の種別」と題して實地の經驗を報告せられたるもの丶中「犯情極悪ならざる囚人」てふ一部を茲に掲げん。

此の種に屬する囚狀は、左の如し

一　年齢は、四十歳以上七十歳以下のもの多し

一　職業は、人力車夫、輕子業、紙屑拾、飴賣、下駄の齒入等の賤業者

一　罪質は、屋外の窃盗、無代飲食、遺失物隱匿等、頗る多し

一　犯由は、糊口に迫りたるものなるが故に、無上の不景氣、米價の昂低、氣候の寒暖等は、此の囚人の增減に大に影響す

一　世上に於ける生活は、最下にして、終日働くも五六錢、乃至二十錢内外の金を得るに過ぎざる、謂ゆる其の日暮と云ふ者にして其の半は、一定の住所なく、木賃宿等に宿泊するものとす、故に、疾病又は雨天等の續くときも、亦、犯罪の原因となることあり

一　性質は、大抵醇朴愚鈍にして、一丁字をも解せざるもの多し

一　刑名は、重禁錮、刑期は、十五日乃至六七月にして、初犯者再犯以上の者、共に相半せん

一　得る所の贓は、二三錢の飲食代、又靴壹足、傘壹本、又は鍋釜一個、若しくは、薪炭數個、其の甚しきに至りては、薩摩芋一本等にして、要するに、其の金額壹圓に超過するもの尠なし

一　獄中に在るときは、官吏の命令に畏服し、抗言若しくは抵抗するが如きもの絶ゑてなし、服役は藁工等に類するものを多く執らしむ其の氣性は、大抵臆病にして、他の悪奴を懼るゝと鬼神の如し、之と親み昵む如き勇氣は更になし、然れども、刑期滿ちて出獄するを敢て喜ばざるもの丶如し、其の情を察するに、世上にて、日夜衣食に苦しまんよりは、寧、獄裡に在りて衣食の供給を仰くに如かずと、思惟するもの丶如し、故に、滿期後、尚、在監せんことを懇願するもの、往々之あり

右種に屬する囚人は犯罪の目的、饑寒の急を免れんとするにあれば、彼の奢侈を目的とするもの、或は習慣性の犯罪者などとは大にその性質を異にするものにして、其途を得れば即ち止む、其途を得ざれば即ち止まず。故に監獄の搆造、遇囚の方法は如何に完全するも是のみを以て減少の効を見るべからざるや明かなり。

されば犯罪を促したる當時の社會的事情を明かにし、大躰の點に於て兩者の關係を定むるは實に必要なる研究と謂はざるべからず。

過去の社會的境遇――過去の社會的境遇とは幼時の家庭及び敎育、交友の善悪、財産の有無、職業の種類等の如きその人の生涯に關する一切の事柄を云ふものなり。精密に各囚人の歴史を調査して之を記錄し、目下我が監獄に於て實施せる「囚人身分帳」の如き精細なるものを造り、之れに漸々比較的研究を施さば、過去に於ける一種の事柄と或種の氣習或は犯罪とが不變の關係を有することを發見するに至らん。之れ此研究の目的とする所なり。左の統計は純粋に過去の境遇のみを示すものにあらずと雖ども、幼少の時に棄てられたる事實が遷善悔悟に如何なる影響を及ぼすものなるかを示すに足るべしと信ずるを以て、之れが一例として玆に掲げん。

（第五）　悔改の徵効百分比例

	廿五年	廿四年	廿三年
有父母	四四、八六	四五、七八	五〇、二〇
棄兒	三六、八四	二〇、〇〇	二一、五〇

斯の如く確定不變なる關係を發見することを得ば之を應用して、囚人の戒護、敎誨、保護等の業に於ける成効を見ることを得べし。此種の法則は囚人敎化の上に著大なる利益を與ふるものなることを疑ふべからず。

（五）　結論

以上述べたる四方面より精密なる觀察を施し、その結果として得たる所の知識を秩序的に集めたるもの即ち罪質學なり。斯くの如き知識に基きて犯罪人の種類を區別し、敎化の難易に關する階級を定め、以て病的犯罪、不可治の習慣的犯罪、可治の習慣的犯罪、一時の犯罪等の别を立て、是れが適當なる處分を施さば犯罪減省の上に著大なる効果を見るならん。

吾人の切望する所は今後我邦に於て社會の實事を研究する傾向の大に盛ならんことなり。犯罪研究の如きことは單に少數の當局者のみに放任しおかずして、有爲の學者中專心之れが研究に從事せんとするもの起らざるべからず。多數の有力者協力して之が研究を進むる

にあらずんば到底罪質學の發達を見るべからざるなり。若し罪質學にして發達せざらんか、犯罪者の減省は勿論萬般の德化事業は効を奏する能はざるべし。それ病理學の社會衞生に必要なるが如く、罪質學は宗敎、敎育、犯罪豫防等の德化事業に缺くべからざるものにて、若し犯罪の原因、法則等を明かにするにあらずんば到底之を豫防し、撲滅する途を講ずることできざるを以てなり。

論說

思想界の變動

文學博士　元良勇次郎

思想界の變動と云ふことに就いて御話を致す積りであります諸君は昔し有名な一休和尙と云ふ禪師のことは御存知でありましやう。此人が種々人の意想外のことを言ひ且することは今更珍しいことでもありませぬが。或時に高札を立て何時何日に魚を食べてそれを生きながら吐き出す云々と云ふ廣告をしました。さうすると世間の人はそれを見て是は奇躰なことであるから是非見たいものであると云ふので其日になると多數の人が其處へ集つて來ましたさうであります。それで人は集つてもう今に一休和尙が出るだらうと思つて待つて居ると一休出で來りて魚を料理して食べたさうです。すると今に生きながら吐くだらうかと思つて見て居るがチツカラ吐かぬ一休も色々として眼を白黑とやつて居るけれども吐かぬ。さうすると一休が言ふには今廣告をして置いた通りに魚を食べて生きながら吐ふと思つて骨を折るが出て來さうもないから今日は是丈けでお仕舞にしやうと云つたと云ふことであります。それで中には失望する者もあり。或は人がさう云ふ事に迷ふから迷を解く爲にあゝ云ふ事をされたのであると云つて悟る人もあり。又一休が奇怪な事をするのは今に始つたことではないと云つて諦めて仕舞つた人もあり。色々口々に話をしやつて其日のことは濟んだと云ふ話でありさすが。實は私も思想界の變動と云ふことは餘程面白いことであるから斯う云ふ事に就て話して見たいと思つて題は拵へたものゝどうも思ふ樣に甘く考が出て參りませぬ。先づ是で仕舞ひと云ふことに

は致さぬ積りでござりますけれども。乍併或は思想界の變動と云ふ題が實に面白いからどう云ふ面白いことがあるかと思はれたならば或は俄に失望せらるゝ御方があるかも知れませぬ。其邊は前以てお斷りを申して置きます。

此頃は時節柄で演說をすれば敵愾心があるとか或は歌を云へば軍歌であるとか云ふ樣に人の氣が皆戰爭の事に傾いて居る樣であります。連戰連勝實に日本の有樣がどれ程に進むかと思ふて居る時に又一方に日本國民に弱點があると云ふことも考へ彼方此方も考へを廻して見るならば或は御互に將來の注意になることもあらうかと考へるであります。思想界と云ふは言葉の上で意味明瞭である。乍併思想界と云ふものはどう云ふものであるかと云つて其定義を與へると云ことになれば少し六ヶ敷やうである。簡單に云へば人々の心中に浮んで來る所の考と考とを寄せ集めて總括したるものを思想界と云ふので。別に六ヶ敷意味のある譯ではないのである。例へば實業社會と云へば製造をする或はそれを賣捌く或は鑛山を掘る或は鐵道を布くと云ふ樣な實地の物に就いて事業をする人を實業家と名けさう云ふ人の集合より起る出來事全躰を括めて實業社會と云ふ。又政治上に就いて運動する人より起る出來事を總べて括めて政治社會と云ふので。丁度其樣に人々の思想上から起つて來る所の出來事は色々ある或は新聞紙に現れるもの或は雜誌に現れ或は演說に或は社交上に或は個人と個人とが互に寄り集つて時分の話の上に現れる所のこと皆是等を括めて思想界と云ふ。思想界の現象は丁度物質上の現象と同じく絕へず、變動のあるもので。天氣のことに譬へて見ると能く分る。天氣と云ふものは今日は暖かな天氣かと思ふて居ると明日は雨が降る。今朝の樣に雨が降つて風が吹いて居るかと思ふと丁度正午[ヒル]頃になつて天氣になる。天地間の現象が轉變して往く樣に人の思想界も矢張轉變して往くので。今日は號外が來て戰爭が勝つたと云へば早や人の思想が變動して居る。或は今日は談判がどうかうと云へば直ぐ其方に思想が向いて居る。思想界の變動して往く工合と社會上に起つて來る出來事は常に釣合つて往くのであります。併し實際都合能く釣合つて往けば申分なき譯だが茲に諸君の注意を煩はし度きとがある。國民の氣質は樣々なもので夫程に心配するに及ばぬ事に大變心配するとがある。又夫程賞めるべきことでないことを賞めるとがある。夫程恐れることでない

ことを恐れるとがある。此等の事に就て段々と御話を致さうと思ふのであります。

總て社會上にある思想界と云ふものは矢張一個人の心の現象と同じもので人の心の現象が其人の身躰の狀態と相對して往つて居る樣に思想界と云ふものも其社會の物質的狀態と始終相對して往くのであります。それで今如何に人の心が身躰と相對して居るかを證せんため。身躰の變狀が如何に心の上に影響をするものであるかと云ふ樣なことから段々と說き始め。遂に此思想界の變動のことを御話申さうと思ふ。御互は皆心を持つて居りますが此はどの樣なものであるかと云ふことに就ては人々の學說種々でありますから強ち私が斯うであると極めるのではありませぬが私は私の思ふた處丈けを御話申すのであります。人の心の狀態は身躰の健全なるや否やに依つて變るもので身躰が健全であれば心も自然健全である。身躰が不健全であれば心も從つて不健全である。通常吾々が餘り注意せぬ所に身心の相關係して居ることは心理學上有機感覺と云ふとに就て著しく現はれて居る。身躰の生活する間は血液が循環し皮膚の上を空氣が壓し着物が常に皮膚に觸れて居る食道には食物がありて俗に云ふ腹工合を善からしめ或は惡しからしむ、此等は心の本なる氣分を拵へて居るのであります。是等のことが完全であれば心も先づ健康なものである。是等のことに於て一度何かの障害が起きた時分には直ちに心の上に變動を生ずる。例へば病氣の爲に皮膚の感覺を失ふことがある。斯の如き病人は自分の身躰は石である或は自分の身躰は木で拵へたものであると云ふ樣なことを思ふて居るとがある。それは皮膚の感覺が無くなる處から起つて來る所の一種の精神病であります。或は自分の身躰を惡魔が持去つて仕舞つて自分の身躰はないと云つて居る精神病者がある。又自分か胃の腑はないと云ふことを信じて居る精神病者もある。或は自分は既に死んで仕舞つて居る、今斯うして居るのは別のものであると云ふことを信じて居る精神病者もある。此等は總て身躰中の一部の神經が痲痺する所から其處に有機覺感の缺乏を生し爲に身躰の不健全幷に精神上に不權衡の考を生して來るのであります。夫故に概して申せば神經が總て痲痺することなく各神經が能く働く時には精神は確かなものである。然るにもし一部の神經が痲痺した時には必ず妄想を惹起し所謂精神病になる。狂人になる。又催眠術と云ふものがある。催眠術と云ふのは五六年

前に「コツクリサマ」と云つて世間に流行したものと類似したもので眠りを催するのである。一度人を眠らして置いてさうしてそれから色々のことを話かけると云ふ一種の術である日本では幻術とか魔術とか云ふことを云つて居ましたが即ち催眠術のことであります。此事に就ては種々面白き御話もありますが今特に御話申したいのは一二の點であります

催眠術に掛つた人は狐憑きの如くに本性を失ふて仕舞ふ。此催眠術に掛つた人に於て殊更に吾人の注意すべきことは或一種の感覺は非常に強くなり或他の感覺は感覺力を失ふと云ふとであります。例へば今此處に誰も人が居らぬと云つて仕舞へば本人は何程見ても見ることが出來ぬ又今此處に何處の何某と云ふ人が見へたと云ふと實際其人は居ないでも其人が見へる或は觸覺は殆ど麻痺して仕舞ふ夫故に本人の此邊（頬ノ邊ヲ指示シ）摑むけれども一向知らない其に引き換へ温覺と云つて温氣に感ずることは非常に鋭敏なもので實に驚くべき程である。本人の頬の邊りに手をやると直ぐに手の温氣に感ずる私自分の試驗では是位（頬ヨリ少シク離レタル狀ヲ示シ）でありますが人の話を聞き書物などに書いてあるのには五尺或は六尺位の處へ手を置て居るのが分る。觸覺には無感覺になつて居りながら温覺には非常に鋭敏になる。又眼の感覺でも見へぬと云へば感覺が無くなつて仕舞ふのですが此處に何々があると云つて殊更に見せれば眼には非常に鋭敏になる。例へばトランプの哥留多の裏を見せるに一々其區別が分る。顯微鏡で見た程明瞭に見へて居る。斯の如く概して或事には感覺を失ひ或事には鋭敏になると云ふのが催眠術に掛つた人の一般の狀態である、さう云ふのは何處から起るかと云ふと神經活動の圓滿或は平均を失つて活動の工合が一部分に片寄つて仕舞ふたから精神上に變化を生じて來るのであります。心理學者或は生理學者の說に依りますれば發狂者と通常人との違ひは左の通りである。通常の人に於ては全部平均して何にても感ずる又始終外界の物を見て若し此方に誤つた感情かあれば外界の刺戟の爲に正されて往くのである。然るに一度何か神經活動の上に障害を生ずるときは一部の神經が非常に活動を強くし外の活動を止めて仕舞ふそれが爲に神經病を惹起す。或は内の活動が非常に強くなつて來ると外界から來る刺戟を打消して仕舞ふと云ふことがある。例へば精神病に依ては自分の考へて居ることばかり分つて居る。自分の考へて居

るとばかり見へて居るが此處に誰が居るとも少しも其方には注意がない。夫故に內の活動が強くなつて內界と外界の活動の平均を失ふと云ふ如きとである。それが即ち精神病或は發狂者と云ふことになるのであります。丁度其樣に國民の精神或は思想界と云ふものが矢張それと同じである。若し國民の意思が或事には非常に感覺が強くなつて或事には感覺がないと云ふことがあるならば其國民は多少精神病的であると云はねばならぬ。又或都會は鋭敏であるけれども地方へは一向感覺が行渉つて居らぬと云ふことであるならば先づ是は不健康の國家である。日本の狀態に就いて考へて見るならば多少吾人は思ひ當る所があるであらうと思ふ。日本人は今更申すまでもないことであるが餘程鋭敏な人間であると云ふことは世界中擧つて許して居る。又吾々御互も鋭敏な人間であると思ふて居る。然し地方に往つて地方の有樣を見ると東京の有樣とは實に懸隔が甚しいのである。東京の人は一般に鋭敏であつて、思想も餘程發達して殆ど歐羅巴人と違はぬのみならず或事に於ては歐羅巴人より善いこともある乍併地方はまだ考が廣つて居らぬ。若し國に神經と云ふものがあると假定めたならば神經の傳達が甚だ遲い。日本の神經の傳達力を早くして東京に一度聞いたことが速かに地方に廣がる樣にして日本國の智識布及を計るは敎育者の忽にすべからざるとであると思ふ。若し今の儘にして神經の傳達力を失つて居るならば漸々之が日本國の神經病を惹起すことはあるまいかと遠慮するのである。或は又日本國の幾分が催眠術に掛つた人間の如くになつて居る所もある。或事には非常に鋭敏である。日本人程鋭敏な人間はないと思ふて居ると或事には夫程鋭敏でない。例へば日本人は社交上或は道義上の事に就いては隨分鋭敏であります。乍併商賣上の事に就いては淡泊過る。素より其細かな事實は吾々が餘程研究を遂げた上でなければ斷言することは出來ませぬけれども普通一般の觀察よりして考へるならば此說の當れるを見る。或は日本人は西洋の思想を入れると云ふ方のとには隨分鋭敏であるけれども其割合に社會道德と云ふ方には鋭敏でない所がある。或は敎育と云ふことには鋭敏であるけれども宗敎と云ふことには餘程冷淡な人種である。さう云ふ風に或事には鋭敏であるかと思ふと或事には鋭敏でない其工合は被催眠者に能く似て居る。故に日本國が健全なる國家の上に立つた所の健全なる思想界を養成しやうと思ふならば先

づ日本國の神經傳達力を能くし又一部の事に神經を鋭敏にし其爲に外の感覺を失ふとなく凡て平均に感覺を養はねばならぬ。何事に就けても夫相應の判斷の出來る樣に健全なる思想を養はねばならぬ。啻にそれのみならず又心の內と外との平均を附けて往かなければならぬ。內の事ばかり見て外が見へなかつたならば——例へば私が今諸君の前に立つて諸君のことを考へずに只自分の心中にあることを考へ且つ言つて居つたならば狂人と言はれるより外に仕方がない。故に日本と云ふ國が宇內の大勢に對し如何なる位置に立つて居るかと云ふことを見て日本國の思想界が此と能く釣合ふて往かなければならぬ。宇內の大勢を忘れて實際日本と云ふ國が世界の如何なる位置に居るかを知らず。或は妄想により自國を以て實際の有樣より小なるものたるが如き觀念を有すれは是れ即ち一種の精神病である。日本は强國であると云ふ方の思想か妄想を生し自國を或は又思ひ過きると云ふ病症を惹き起すともある。故に日本國は諸外國に對し釣合を失なはぬ樣にするとこそ必要である。

今迄御話申した通りに此東京と云ふ一部分に日本國の感覺が集らずに地方に早く傳はる工風をすること、又一部の事ばかりに感覺が強くして外の事に感覺の鈍なるを防ぐ爲に總ての事に平均する樣に感覺を養ふこと、又日本と云ふ考があつて世界のあることを忘るれば一種の精神病者になるから日本と海外諸國との關係を明にすることに依つて吾々は日本の思想界を健全に保つことが出來るであらうと思ふのであります。乍併將來の思想界は今迄の思想界と違はねばならぬ。今迄の日本は小さな日本である今より後の日本は膨脹した處の日本である故に思想界も夫丈けの變動を受けて小さな思意が膨脹せねばならぬ。其思想を膨脹させるには種々吾人の注意すべきことがある其中に於て唯一二の自分の思い付いたことを御話申す積りであります。

先づ政治思想の變動。政治思想の變動と云ふことに就ては政治上の事にも涉ることがありませうから私は細かな事は申しませぬ。唯一の注意すべきことが玆にあるのです。今迄の日本と今後の日本とを對照して政治上及敎育上に關する變動は何であると云ふと吾人が同化力を養ふの必要と云ふとである此のことは此頃チラホラ新聞紙或は雜誌等にも見へて居るやうでありますが日本と云ふ國が膨脹したので領地には新日本人が出來る若し萬一新日本人が舊來の日本人の思想を變更す

ることがあつたならばそれは日本の膨脹が日本の害になるのであります。それで吾々は同化力に依つて新日本人を日本人の樣に變化して仕舞はねばならぬ。日本の臣民たる所の感情及思想を彼等に抱かしむると云ふことが政治上及敎育上今日の急務であらうと思ひます。

次に社交思想の變動。社交と云ひまするは御互が互に交際する所のことを指して社交と申すので。國の未だ文明に進まない時或は假令ひ文明に進んでも其交際社會と云ふものが誠に狹い時分に於ては交際と云ふものは共に感情に基いて起る所のものであつて。段々其廣がるに從ひ交際に禮義と云ふものが附いて廻つて來るので。例へば昔日の交際社會の有樣を考へて見ると禮義も何もない。唯親切づくで。天氣の好い日に出會へば今日は好い天氣であると云ひ。惡い天氣に出會へば今日は惡い天氣であると云つて。それで濟むが。德川の時分になつて政治の盛な時分には禮義の必要が起つて來て。唯今日は暑くござります寒くござりますでは通らぬ。暑くござりますと云ふにも高貴の人に對しては如何自分より下の者には如何。一寸道で出會つて辭宜をするにも頭を少し下げて宜いとか或は半分下げねばならぬとか或は地面まで頭を付けねばならぬとか云ふ禮義作法がある譯である。禮義作法か行はれて來た時には其禮義作法に從はねばならぬ。さう云ふ風に段々社交の變化と社會の變化は相伴ふて來るのである。それで今迄は重に日本人同志の交際であつたが。今後は段々外國人も澤山交際をする樣になりませうから交際は實に廣くなる從つて私は必ずしも禮義作法を正しくしなければならぬと云ふのではない。禮義作法も要するが茲に一つ吾人の大に注意すべきことがある。昔日から金錢の貸借などでも貴君に貸します何時何日迄に返されたしと云つて其日迄に返濟すれば證文も何も要らぬ。乍併若し濟せぬときは書類か必要になる。即ち此によりて借主を脅迫するの手段となる。、又日本の習慣では是を法庭に訴へるは餘程私談の調ひ難い時である。成るべく丈は法庭に持出さずに事を濟まさうと云ふのである。乍併今日の世界の有樣を見るに法庭は法律を以て各個人を保護する爲に設けてあるのだから法庭に持出すと云ふことは必ずしもさう不道德と云ふことでない。少しのことでも之を法庭に持出すと云ふことが一般に行れて居るのです。さう云ふ社會の有樣ですから日本人が法律思想無くして廣く交際して居たな

らば大に損害を受けることがあるだらうと考へる。金錢の貸借の如き其中の一であるけれども總て約束上に關係したことで先方は若し間違つた時には法庭に持出すと云ふ積りで約束をする。此方では親切ずくだから法庭に持出す等のことはなからうと思ふて居ると存外のことに出會つて法庭に於て大に苦しめられると云ふことは是迄も其例は少なくない。是から先きも澤山あらうと思ひます。西洋人は法律思想が發達して居るから何をするにしても法律思想に依つて事を爲して居るから若し間違つた時には法庭に持出しても事が整ふて居る。然るに若し日本人にして法律思想に乏しきときはそれが爲に自分は心に思はぬ罪を犯し大に損失を受けることがあるに違ひない。故に日本の一般の人民に法律思想を養成するは必要なことであると考へるのである。一つ證文を書くにしても。一つ人と約束するにしても正式にせねはならぬそう云ふ習慣を養成すると云ふことは思想の變動と共に起つて來る必要のとてあると思ふのであります

又道義思想の變動。道義思想は是も亦今日迄日本に行はれて居つた道義思想と今後行はるべき道義思想とは大に變つて來ねばならぬ。何故なれば是迄は小さな日本國内丈けで行れて居た所の道義思想である。今後は世界萬國の競爭場裏に立つて世界と競爭をせねばならぬ位置に立つものである。故に思想は大に變動をせねばならぬ。細かく分類すれば又枝葉に涉るから極く大躰の處に就いて之を論ずれば是迄の道德思想の主眼とする所は何處にあるかと云へば、先づ國民が騷動をせぬ樣に。能く大人しくして居ると云ふことで。自分の家の子供に就いて言へば。子供が喧嘩をしたり或は親に逆つたりすることをせぬ樣に。親の命令に從つて大人しくして居れば宜い。子供は智惠はなくても活潑でなくても大人しいのが是迄の道義思想であらうと思ふ。例へば地方などへ參つて見ても此人民は穩和な人民である大人しい人民であると云ふ所は道義思想のあるものであると云ふとを意味して居る言を換へて云へば慾の少ない不活潑な人間でも事を起さぬ面倒を惹起さないものそれが德川時代の道德では專一である。仁義を說いても忠孝を說いても詰り德川家保存の處に往くので。乍併今後の道德は大に變らねばならぬ唯大人しくして居たならば何時の間にか世界の競爭に負けて仕舞はねばならぬ。競爭の社會に立つのでありますから道德と云ふものも慾の深い活潑な道德でなければな

らぬ。慾と云ふものは人に備つてあるので私の考では慾と云ふものを圓滿に發達させると云ふことが道德の本であると云ふ考である。慾が偏するから惡事が起る。慾を圓滿に發達させたならば惡と云ふことは起るものでない。例へば他事を措いて金錢を得るの慾のみ發達すれば種々弊害を生ずそれは慾が偏したのである名譽も保たねばならぬ自分の社會に對する位置も保たねばならぬ金も得ねばならぬ義務も盡さねばならぬと云ふ風に慾を圓滿に發達させたならば決して惡心の起りやうはない。若し名譽を求めんとして他事を忘れたならば或は眼前の名譽を得んため種々惡手段を用ゆる樣になる。慾の偏した處は戒めねはならぬ。それは何處までも戒べきであるが慾其物は決して惡いものでない。人に付いて居る活動力であつて若しも人にして慾がなかつたならば活動力がなくなる。さう云ふものは生存競爭の時に於ては第一番に敗北するものである。慾を圓滿に發達させると同時に之を平均させると云ふとが並行せねはならぬ。然るときは決して間違は起らないのみならずそれが人の道德であつて社會の競爭場裏に於て勝を制する處の人間である。是思想は亦地方に往つて見ると實に事情に適して居る。或地方の如きは實に人民は宜しい何も不足はないが慾が少ないと云ふは憐れなものである。さう云ふ者に種々の手段を用ひて慾を惹起さなければならぬ。そこが是迄の道德と今後の道德との違ひであらうと考へるのであります。終りに宗敎思想の變動。宗敎のことは隨分六ケ敷ことでありまして是には諸君の御說もあり。異論の多いことでありますから決して斯うと云ひ切つて仕舞ふことは出來ませぬ。乍併私自身に一說がありますからそれを御話申すのであります。宗敎と云へば神を拜すると云ふことが何れ根本になつて居るに違ひない。乍併世界の人智の未だ開けざる時に於ては人智の及ばぬ處のものを皆神として居たものである。人智の及ばぬ處に奧床しい處がある。併し世界の内に區別をするならば人文界以内と人文界以外とする。人の智惠で以て知り能ふ處の範圍内之を人文界以内と云ふのである。人文界以外と云ふのは人智に依つて量り知ることの出來ぬ人智以外の處を指して云ふのである。宗敎の根據となるは重に人文界以外で人の智惠で推量ることの出來ぬ極く奧床しい處にある。併し宗敎と云ふものは人の智惠で以て知り能はざる人文以外の處に根據を置くのであるからどうしても人の想像に依らねばならぬ。人の

想像に依つて根據を置くのであるが私の考では人智の屆かざる所は想像に依るとも人智は到底屆かぬ所であると思ふ。人の知れぬ處は知れぬ人の知れぬ處に知れたことがあると云ふことはどうしても云へぬ。知れぬ處は知れぬ。文明世界の宗教は矢張人文以内になければならぬ。人の知り能ふ範圍内に於て宗教を立つると云ふのは餘程六ケ敷樣であるがさうでない。世界には時と空間と云ふものがあつて此明治二十八年の日本國と云ふものには是丈けの人間が住つて斯う云ふ世界である。乍併是に時を附加へて明治の初年から二十八年までの間を考へると種々變化して今日まで來て居る。又其前を考へると二千有餘年の間種々變化して遂に今日の日本と云ふものが出來て來たので。今後の日本國も種々樣々の變遷を經て段々と發達して往くことであります。そこで私共は此小さな身軀を以て何の某と云ふ。此一人は實に小さなもので詰らぬものである。乍併何千年の間段々と續いて發達して往く所の日本國と云ふものは大きなものである。天壤無窮實に極りなきもので。往古を考へれば日本の歴史は實に人間の智惠で量り知ることの出來ぬ神代に始つて段々發達して今日に至り。今日から又何千年先まで發達して如何程大きな國になるか量り知ることの出來ぬものである。其大きな日本國の中の何の某と云ふ者は唯極く僅なものである。而して無窮なる社會の發達が即ち吾人の崇拜すべきものである。吾人一個人實に此小さな者は此大きな社會のために身を犧牲にすると云ふ事が即ち宗教であらうかと思ふのである。夫等の事に就ては種々說もありませう。社交上の變動、道義思想の變動、宗教思想の變動總て是等のことは今日一の大問題である。啻に大問題であるのみならず私自身の考へる處に依れば斯う云ふ樣な變動が是から段々起つて來るであらうと思ふのであります。自分の思ふた所を述べて今後御互に此研究の一の參考にしたいと思ふたのであります（拍手大喝采）

自由意志と倫理學

山本良吉

團々たる一塊、夕に海嶠を出て、旦に山峰の間に入る。日に日に加はれとも終に大ならす、日に日に減すれとも終に小ならす。盈ちては欠け、欠けては盈つ。止めんとしても止まらす、行かんとしても行かす、唯己か

欲する所に從ふ。或時は姿を隱して、騷客をして梅香の一入なるに驚かしめ、又或時は影を牖隙に投けて、空閨の孤婦をして郎何時かと嘆かしむ。行雁其面前に鳴いては、萬里の羈客望鄕の念に堪へす。容を明鏡に映しては、失意の人空しく一年幾度か圓なると吟す。月や月や、汝何の意あつてか盈ち、何の意あつてか欠くる。

谷風習々として枯骨を拂へは、娑婆たる瘦枝俄に萬層の綠雲に覆はる。時來れは花を開き、節到れは實を結ふ。一年の好懷須臾に盡き、北風情なく肌を襲へは、直に其華美の粧を脫きて、深く谷神の妙に隱る。嗚乎誰か草木心なしと云はん。

高きに登つて遠きを望み、苟も物の以て饑餓を醫すへきあれは、直に走つて之を食ひ、食ふて腹に滿つれは則ち臥す。臥する時も、來つて己を苦むる者あれは、爪を磨き牙を銳くして奮進突擊、必す其敵を粉碎し、力の能くする所を窮めすんは已ます。之を意志なしといふは狂のみ。

凡そ大にして日月星辰より、小にしては蜉蝣子孑陵寫鳥足の類まて、宇宙に在る者、一として意志を有せる如くならさるはなし。彼等は果して生命を有するか、精神を有するか、自己の意志を有するか。昔者莊子と惠子と濠梁の上に遊ぶ。莊子曰く、儵魚は出て遊ひて從容たり、是れ魚の樂也と。惠子曰く、子は魚に非す、安んそ魚の樂を知らんやと。莊子曰く、子は我に非す、安んそ我か魚の樂を知らさるを知らんやと（莊子外篇秋水第十七）。我は固に宇宙萬物に非す、而して宇宙萬物か果して精神意志ありやなしやを知らす。聞く、デカルトは動物を精神なき者となし、之を苦むれは聲を發すは、猶ほ物躰を打ちて響の生すると同一なりといへりと。有りやなしやは余知らす。然れとも人か日常彼是に關して經驗せる所に由りて之を觀るに、彼等は決して自由の意志を有せさるに似たり。饑至れは則ち食ふ、彼等は饑を抑ゆる力なき也。苦來れは則ち避く、彼等は苦を忍ふ能はさる也。彼等の動くは猶ほ物躰の動くか如く、十を以て之を抛ては十步を進み、百を以て之を抛ては百步を進む、彼等を支配する法則は唯自然の法則あるのみ。人に至ては則ち之に反す。

快樂は我の欲する所、然れとも若し其道に非されは、咫尺の內に在りとも取らさる也。苦痛は我の惡む所、然れとも義の存する所は死すとも避けさる也。渴しても盜泉の水を飮ます、死すとも姬周の粟を食はす。利

を捨てゝ義に赴き、非を去つて是に就く。人に自由なくんば、世に何を善あらんや。

意馬の走る所、心猿の狂ふ所、或は一時の邪念に惑ふて義理の存する所を忘れ、倫を亂し道を敗り、身を惡魔の奴隷に供して、心を清淨の界より脱す。人に自由なくんば世に何を惡あらんや。善惡の別なくんば何を道德あらんや、何を倫理學あらんや。

倫理學とは如何なる學なりや。古より學者の此學を研究せる者頗る多く、人に由つて其意見定義を異にす。或は行爲の學と曰ひ、或は善行の學と曰ひ、或は義務の學と曰ひ、或は道德の學と曰ひ、或は至善の學と曰ひて、其定義を附すると一ならず。而れども其定義の如何に關らず、其研究する實際の對象に關しては、皆同一、若くは多少相似たる意見を有するが如し。蓋し倫理學者中、最も事實の陳列と研究とにのみに意を注ぎ力を用ひ、唯道德に關れる事實の發達變遷史を述べて、以て一部の倫理學を成せりと謂へるはスペンサーなり。氏の "Data of Ethics" は、其大なる哲學組織の一部として、社會進化の方法を說明せる者としては、多少の價値なきに非れども。所謂倫理學としては、終に當然 (Should) を解釋し得ずして、讀者に裨益すると極めて少し。然れども其倫理學の如何なる者なりやを論ずるには、實に左の說あり。

"I conceive it to be the business of Moral Science to deduce, from the laws of life & the conditions of existence, what kinds of action necessarily tend to produce happiness, & what kinds to produce unhappiness. Having done this, its deductions are to be regarded as laws of conduct; and *are to be conformed to* irrespective of a direct estimation of happiness or misery." (P. 57. アイタリツクは吾が爲也。)

知るべし、氏の倫理學は決して徒事實を研究するに止まらずして、更に人の行爲を規定すべき者、而して氏の "Data" 幷に近來出版せる "Principles" の如きは、未だ充分に氏の志を成したる者に非ざるを。

シヂウイツクは其見識の深博なると固よりスペンサーの倫に非ず、其倫理學を定義せるや曰く

"I prefer to consider Ethics as the science or the study of *what ought to be*, so far as this depends upon the voluntary action of individuals" ("Method of Ethics," B. I, C. I, アイタリツク

は吾か爲也)と。

ヴントは科學を分ちて説明的と規定的の二となし、而して倫理學を以て後者の最も根本的の者となせり。規定的科學とは如何なる者なるか。氏は曰く

"Dieser betrachtet die objecte mit Rücksicht auf bestimmte Regeln, die an ihnen zum Ansdruck gelangen, und die er zugleich als Forderungen jedem einzelnen Objecte gegenüber zur Anwendung bringt" ("Ethik," Einleitung, I.)と。

以上は唯二三有名なる學者の説を列ねたるに過きされとも、倫理學の如何なる者にして、學者か之を如何に考ふるやは、是に由つて推察するを得ん。今日に於ては、倫理學は唯某現象の記述に止まりて、命令規定すへき性質の者に非すと云へる學者は蓋し多からさるへし。若し唯心の現象を研究し、人心は何を好み、何に因て動かされ、如何なる方法に從ひて働作し、何を目的として進む者なりや等の問題を調査するに過きされは、是一種の心理學のみ。然らされは則ち一種の社會學若しくは歴史に過きさるのみ。安そ之を呼ふに倫理學を以てすへけんや。若し倫理學か人の行爲の學問となり、責任の學問となり、至善の學問となり、心理生理社會歴史諸學の外、別に獨立せる一科學とならんと欲せは、必すまづ道德的理想を設け、人をして善を爲さざるを得さらしむる程の權力を握らさるへからす、即ち命令的ならさるへからす。

倫理學は既に命令的ならさるへからす、倫理學か命令的なるには、此に命令せらるへき者なかるへからす、命令に從ひ得る者なかるへからす。之を法律に例へんに、某々の事を爲し若しくは避くへしと命するは法律の性質也、されとも若し之に從ふへき臣民なく、臣民ありとも、外國との關係よりして、自國の法に從ひ得さる制限の下に立つとすれは、法律當に何をか命令すへき。法律ありとも、從ふ者なくして、法律全くなきと擇ふ所なし。倫理學も亦此の如し、倫理學か成立し得るには、先つ其命令に從ひ得る力を有する者なかるへからす、換言すれは自由意志は倫理學の存立には豫定せさるへからす。

然りと雖單に自由意志と云へは、其意茫漠として誤解に陷り易し。今聊か學者の意見を記して以て其意義を明瞭にすべし。

蓋し意志自由の説は古より有り。中古の神學的倫理に至て一たひ大に氣焔を吐きしか、近來に至つて其思想

の人心に入ると特に深く、倫理心理學者の之を論する者極めて多し。其中に就いて、最も精しく自由意志の異説を分解して、其是非を匡さんとせるは、ヘフヂングとす。氏は自由意志に六義ありとして、一々之を批評す。其第一義は極端の自由説にして、宇宙の現象は皆原因結果相連續し、綿々として永久に亘つて滅せす、人か目に見、耳に聞く所の事は、皆因果界中の一節たり、然れとも獨り人の意志に至ては、全く此等の關係を離れて、高く他の現象を支配する法則以外に出つ、是故に人か自由なりとは、何事なりとも思ふか儘に、全く過去と關係なく志望さるゝと云ふに在り。

第二義に至ては稍之と異にして、唯心外強迫のなきとのみを表す。然らは則ち意志か自由なりとは、前説の如く、全く原因なくして志願するを得るの謂にはあらて、唯其志望する人格の以外に在る力の牽制を受けすとの義に外ならす。斯の如きは之を意志の自由と云はんより、寧ろ行爲の自由と云ふに如かす。

第三義は更に之と異にして、内部強迫より自由なりとの意を表す。例へは快樂又は豫期より起りたる志望を自由と謂ふに反して、苦痛若しくは恐怖より起りたるは、之を不自由と稱すべし。冷然として平靜なる時は、如何なる事をも成し得る樣に思ふ者なれとも、情内に激し、氣、外に表はれたる時は、己、己の內にあらすして、其欲する所の事も容易に成し難きとあり。此等は即ち內部的強迫にして、之を脱したる有樣をは自由と稱するを得。

第四義にては意志の能力力度及ひ資質(Das Vermögen, Die Kraft und Die Tüchtigkeit des Willens) を表するを得。此義にては、意思は果して其過去より獨立し得るや否やの問題に非すして、如何程達し得るやの論となる。夫の中古に於てアウグスチヌスとペラギウスとの有名なる爭論も、實は此義に關る者にして、意志現象か他のと同一の法則に從ふや否やを論したるには非す。

第五義には撰擇の自由を謂ふ。然れとも既に撰擇と謂ふ、何んそ因果の法を消すに足らんや。夫れ撰擇には先つ撰擇せらるへき者なかるへからす、即ち種々の行爲の觀念なかるへからす。人は此種々の觀念を比較輕重して、而して其趨く所を定む。之を定むるには一定の傾動(Antrieb)若しくは離れたる動性(?, Affekt)に由らすして、觀念感覺か多方的爭論を爲したる結果に由る。此の如くば自由の反對には非すして、盲動(Blind-

heit)の反對を表す。此撰擇の自由に由りて、吾人は夫の一時の動情傾動によりて起りたる行爲よりは更に深き複雜を見るを得る也。此義にては、自由意志とは成熟したる自識的意志なれとも、尙ほ其行爲の當時に在りては、我は是より他に行爲する能はすといふを免れす。凡そ撰擇の自由といへは、先つ撰擇せらるへき材料を豫定せさるへからされは、數多の觀念を有せさる者には、此自由の有る理なし。過去の如何に由りて其自由の如何定まる。自由も畢竟純粹の自由に非さる也。

第六義は意義甚た狹隘にして、唯倫理的動機に支配せられたる意志の義に過きす。倫理的動機に支配せらるゝには、某々の思想感情か支配權を握りて、他は之に從はさるへからす。此る自由は感覺的及ひ自利的の向傾(Trieb)及ひ激情(?, Leidenschaft)に反對す(Ethik, V., 2.)。

氏は以上の六義を揭けて、而して後自由論者の謬見を研究して其非を駁す。而れとも其實全く從法性(Regelmässigkeit)を否認する極端自由論者即ち第一義を採れる者に對しての攻擊として之を覽る時は、大に筆鋒銳利當るへからされとも、今日に於ては既に殆と此等の僻説を採る者なく、如何なる自由論者と雖、多少の從法性は之れを認め、其從法し居る間に、尙ほ且つ自由ありとなすなり。ジヤチーの如きは制定説(Determinism)に三種ありとなし、第一を行爲の原因か行爲者以外に在る塲合とし、之を外部的制定説即ち受動性と呼ひ、第二を行爲の原因は內部に在れとも、衝動に制定せらるゝ塲合とし、之を內部的制定説即ち自發性と曰ふ、第三を原因は內に在りて、思想に由りて、制定せらるゝ塲合として、之を合理的制定説即ち自由と云ふと曰へり(Theory of Morals, B. III., C. VI.)。是に至りては自由必然の二説全く相合して一の新自由説を成す。ヘフヂングか力を極めて反對せる自由意志も、此に至ては殆と批難すへき餘地なきに似たり。

ヴントの論法は稍之に異なるに似たり、曰く、自由とは、一物か自識せる動機に由て、直に其行爲を制定し得る力を云ふ。自由の反對は强迫にして、即ち行爲の原因か自識以外に在るを謂ふ。敢て自由撰擇ありと曰はす、撰擇は即ち自由なる也。撰擇若し自識より生すれは、之を自由と稱するも固より不可なし。自由の意識は人に告けて、人は强迫を受けすして働作すと曰へ

とも、決して吾人は原因なくして動作すとは曰はす。又吾人を制定する動源(Bewegungsgrund)吾人の根本的特性、及ひ生活の運命より獨立すとは曰はさる也と(Ethik, 3A., 3C., a und b.)。之を要するに現今にては、前世記の始に於ける如き極端自由説を唱ふる者甚た少きを知るべし。

自由意志に關れる學者の意見を列記するは吾か目的に非す、余は唯自由意志に幾多の意義あるかを明にせる序に、聊か現今學者の之に關はれる説を附けたるのみ。凡そ人は如何なる意志を有し居る者にもせよ、余か關はる所に非す。人か行爲の際、撰擇の自由ありと信するは事實也。眞に果して然りや否やを問ふと勿れ、人は自由の意志を有せすとも、其の之を有すると信するを削る能はさる也。是果して錯覺あるか、余は敢て之を否認せす。黒板に白字を書けは、白字は實際よりは遙に大となりて人の眼中に入る。人は謂ふ是錯覺なりと、其實際より觀れは或は錯覺ならん、然れとも其錯覺あるとも、亦同く事實ならすや。今ま錯覺の故を以て、黒板に於ける白字の用を沒すべけんや、倫理の學に於ても亦此の如し。眞正の事實は姑く論せす、其の人の意識に見れたる所に於ては、人は自由なり、強迫の念なき也。人は自由なりとの觀念に據りて、倫理學か成立し得る也、倫理學か成立せんとせは先つ之を豫定せさるへからす。

之を他の學に例へんか。論理學は命令的の學問也、人に正しく論すへしと命す。而れとも自ら人か果して正く論すへき能力を有するや否やを論せす、又其能力の如何なる者なりやを研究せす、之を既定の事實として、而して后論を立つる也。今若し此事實を充分に證明せる後に非れは、論理學を成す能はすとせは、論理學は其成立の爲には、姑く他の學の成立を俟たさるへからす、而して科學の分業を如何かすへき、物理の學は空時と物體物質との關係の學問也。而れとも人か果して空間物躰物質を知覺し得るや、抑も空間物躰物質は果して實存せる物なりやの如きは、物理の毫も關せざる所。此等の存在能力を豫定せされは、物理學は成立せさる也。若し必す之を研究議定せされは、物理の學に入るへからすとせは、學者は先つ希臘の大古に返りて、アリストートルと同樣の研究をなさゝるへからす。アリストートルと雖其研究の範圍は廣けれとも、決して各科を論せる時に、毫も豫定せる所なかりしには非す。凡百の事實、一々之を證明せる後に非れは議論をなす

へからすとせは、千萬年を經るとも、世終に科學の成立し得る時あるへからす、余倫理學に就いても亦之を言ふ。

意思自由の字は古來より永く用ひられたる所にして、其當時に於ては固より信と謂はれたるも、今よりして之を觀れは、多少明瞭を欠く所なきに非す。凡そ意志の自由と曰へは、意志なる單獨の力か自由を有して、他の力と相關る所なきか如き感なきに非す、是即ちヘフチンクの批評の已むを得さる所以にして、亦一理なきに非す。されと今の學者は、多くは之を意思のみに附せすして、全躰の人格の有する所となす。ヴント曰く、撰擇若し自識より起らは、之れを自由といふ。然れとも此自識とは、通常の心理學的の義にて言ふのみにはあらす、心理學にては、自識は單に我識(Ichbewusstsein)と同けれとも、今のは

"Die tieferen Bedeutung eines Bewusstseins der eignen Persönlichkeit mit allen ihren auf der zurückgelangten willensent wickelung beruhenden Eigenschaften" (Ethik, 3A., 3C., a)

を有すと。ジンメルも亦曰く、我とは唯意志のみに非すして、其他の、總ての內容もて特殊となりたる一个性にして、性質思想感情の綜合なれは、全く形而上的の者なるべしと。

"Das Ich noch nicht flosser Wille ist, sondem ein durch alle möglichen sonstigen Inhalte charactersierte Individualität, ein Komplex von Qualitäten, Gedanken, Gefühlen, vielleicht gar ein metaphysisches Etwas."—Einleitung in die Moralwissenschaft, 2B., S. 137.

之を要するに、若し意志自由をして唯單に意志ある一能か自由なりとの義ならしめは、如何にして人は此觀念を有するや、如何にして此現象を說明し得べしや等の問題は、全く心理學の範圍に屬す。心理學は、精神の一現象として之を研究すべき也。若し、之に反して、諸能を具有せる人間にして始て自由なりとせは、人間とは如何なる者なるか、人格とは如何なる性質を具ふる者なるか、又意識自識とは如何なることを意義するか、此現象を論理的に解釋すれは如何なる事を含むや等の問題は、純正哲學智識論等の研究すへき所之を孰れにても、倫理學の範圍內には屬せさる也。倫理學は唯之を豫定し置けは可なり。

シヂウイクは其「倫理學史」に於て、倫理の研究事件を

擧けて次の如くす。（一）人間を个人と見做して、其善又は安寧の成分及ひ條件を研究す。是は（甲）德行又は（乙）快樂の通性と特種、及ひ之に達すへき手段の調査なり。（二）義務又は道德法の原理、及ひ最も主要なる細條を研究す（但德行と差別すへき事に限る。）（三）義務を認識する能力、或は更に廣く人の知能か行爲に關る部分と、其の諸種の好惡に對する關係を幾分か吟味す。（四）人間自由意志を多少調査す（C. I., §5.）。是に由て觀る時は、自由意志は明に倫理學の一部をなせとも、更に他の處に於て「余か自由意志の問題を畧せしは、是迄述べし學者の中には、此困難なる曖昧なる問題は或は少しも議論の中に入らす、又或は議論の中には入れとも、殆と其倫理學上の價値を沒するの觀あり。而して此の如くするは即ち吾意見と一致せるに由る」と（Ibid., C. IV., §18.）。又曰く「孰れの見よりしても。此自由意志の爭論に關する純正哲學上の問題を決するとか、一般の實際上に重要なりとは思はれす」と（"Method of Ethics," B. I., C. V., §3.）。氏の此問題を藐視せるは是に由て知るべし。ジンメルも又曰く、單に規定的道德學（Norschreibende Sittenlehre）即ち理想の概論か、全く自由の問題に關るを要せさるは明瞭なるか如しと（"Einleitung in die Moralwissenschaft," 7k.）。是皆自由問題を倫理學以外に斥くる者。

嗟乎日月星辰禽獸草木は運動ありといへとも、其意明ならす、其意明なりとも、其心知るへからす。之に意識ありといふと雖、人の空想に過きさるのみ。唯人間に至りては、自識は實に其の獨り有して、之をして他の萬有と差別あらしむる所の者。自由は日常の實驗上の事實也、其研究の何科に屬するを論する勿れ、規定命令をして毫厘の意義たにあらしめんと欲せは人は之を豫定せさるへからさる也。人の萬端の行爲を規定すへき倫理學は、是なくしては成立するを得さる也。

批評

『先哲未言』の創見

布川靜淵

加藤博士より「先哲未言」と題する小冊子を惠送されしは、十六日にして本稿中四回分は、十七日夜に記し殘一回は、十八日に記したるものなり、元 某新聞紙上に揭載すべき筈なりしが、理論上に偏するを以て「宗教」紙上を汚すことゝなしぬ、故に一回毎に新聞紙上に揭くる如き躰裁あり、文辭從て整はず、讀者之を諒せよ、
五月十九日　稿者識す

第一　はしがき

夜來の春雨そぼふりつゞけて未だ、はれやらざるも早起快然、例によりて机上にうづたかまる書類を繙讀しつる折、加藤博士より一小冊子を惠送せらる。開封すれば珍らしや「先哲未言」と題す、本月の哲學雜誌に掲けられし別刷と知らる、先哲未言の創見とはそも何者ぞ、一讀し來ればこれ博士がものせる「强者の權利の競爭」に對して獨逸の一二の新聞紙が創見なしと評せるに答へし文なり、我學界に於て第一流の地位を占むる加藤氏の創見と稱するものは、果して如何のものなるやを斯に紹介するに先たち一言すべきことあり、曾て博士が該書を世に公けにするや、われは某紙上に於て僅かの鄙見を陳じ、その後二三氏の所說に對して傍より評言をなし、本年一月頃また某新聞紙上に於て該書に對する獨逸新聞紙の批評に就て、一言したることありき、かく該書に對して屢々細評を試みたる所以のものは、われの專攻する社會學上の問題たりしが故にして、わが眼中には唯眞理なるものありて著者評者といふものあらず、抑彼說に對しては取るべき所と取るべからざる所とあるを信せしを以て、學說上の評論に於ては何等の人をも眼光に映せしめざりき、斯にまた更に一言するも蓋し徃時と異なることあらじ、

一昨年の暮なりけん、加藤氏の該書を評するの折に云ひき、所謂智識の進步とはその資質の多種にはあらで、そが分量の增殖をいふものともいはなん、數千年以來げに智識の分量に至りては積重する所少からずと雖、その資質に至りては變更するものいと少なし、されば新說と云ひ創見といふものも世には稀に見る所、此說に關してはヘルワルドその「開化史」に述べ、グムプロヰッチまた「社會學原理」及びその他に於て、此文字をあからさまに用ゐることなしとするも、その旨意を論じたり、またエーリングは「權利の競爭」を著はして論せしことあり、加藤氏の所說は是等を基礎として組成したるふし少なからざれば、一讀したる所を以て見るに目新らしとも思はれずと、その後一年有餘を經て獨逸の新聞紙が評する所を見るに、わが云ひし所と同樣なる評言を加へしもの多きが故に、某新聞上に於て一言したりしが、博士も「御記載の如く小生が餘り他人の說を引證せしは大に誤解を招くの媒介と相成候殘念の至り云々」と申越されにき氏は彼新聞紙の評中、創見なしとの言に服されすして、自ら信じて創見なりとする諸點を發表すべしと報道されき、「先哲未言」は即ち

その創見を説かれしものなり、

是に對して評言を試みんとせば、加藤博士より遙かに博識なる人を俟たざるべからず、博學者、多讀家の最も勝れしもの之を能くすべし、我學界其人必すやあらん、既に先哲といふ、數千年以來今日に至るまでの思想家の説を辨じたるものならんを要す、博士が眼孔內に横はる先哲は、其數幾何あるやわれ之を知らず、而かも博士が廣く涉りし思想界中、未だ博士の如き言を爲せしもの之れなきを確信して始めて、此言を立てられたるに相違なかるべし、若し之を評するものあらんか、其人や亦た自らの眼孔に映じたる所の先哲の思想界に求むるなるべし、之れ博學者、多讀者の能くする所なり、

「先哲未言」に對しては所説の是非を論すると能はず、所説の是非善惡は此場合に於て何等の益なし、唯博士の創見を信する所は果して創見とするに足るや否や、此般の言は先哲未だ言はざるや否やの如何にありとす所説の當否に對してはわが言はんと欲する所今尙ほ數多あり、然とも先哲といふ廣漠無邊の思想界中に之を探索して、博士と爭はん學識もなく亦餘暇もなし、されば斯には單に先哲未言の創見といふ所を紹介するに止むべし、世の學者たるもの若し此創見に對して、果して先哲未言のものなるや否やを説明せば、學界の爲めに有益なるとなるを信ずるなり、夫れ説を學界に立てゝ自信を發表す、偶々辨駁するものあれば、餘す所なく之に答辨するは立論者の任なり、われは博士の勇氣と自信の深きとに先つ感せすんはあらず、説の是非は暫らく措き自信の深きと博士の如きは、我學界稀に見る所、博士に多とする所は斯にあり、そも創見とは何者ぞや、

第二　三項の創見

人事界の歷史ありて以來幾千年の星霜、また短しとせず、この間に發達したる思想、また尠なからずとなす、されば古來先哲と稱すべきもの數多あり、渠等が曾て思惟せる所、後進の傳唱する所眞に多岐、之を一々に悟覺し悉く記憶せずば、その先哲未言と信仰する思想も、その實は渠一人の眼孔中に映じたる先哲に止まりて、未だ古今東西の悉くを包括網羅し得たりと云ふべからず、

さりながら博學者なる加藤先生は、廣く思想界に涉れる碩學なり、世の讀書家と同一視すべからず、博士の眼孔中に映する先哲の數必すや多からん、唯哲學社會

學法理學倫理學等の無形上に關する智識は、物理天文地學等の智識に比して、やゝ分明ならざるふしも尠からざれば、容易に先哲未言と斷定し難きものなり、例へは或種の格言的のものも之を演繹したらんには、いと廣やかなる境界にまで推延し得べく、先人がしかく確言せざることも、後人が發見したらん如きことは、既にその中に包括しつる如きことまゝあり、思想界の變遷する次第を見來れば、此般の消息を辨じ得べし、蓋し古人の思想と時代の影響とより形造らるゝ思想は、いとさわなりとす、學者は此間に立つて先人の未だ言ひ及ばさることを發見し、漸々積重して大なるを致す、されば先哲未言の創見の如きは、必すしも多數なること能はずと雖、その効や沒すべからざる價値を有するものなり、加藤博士が社會學上の研究に於て創見ありとせば、これコント以來ハルトマンに至るまでの社會學史上に、一大光輝を放つもの、吾人之を了知することなくして可ならんや、われの紹介を惜しまざる理由こゝにあり、

加藤氏の原本は、獨逸文の方二百頁にて、邦文の方二百四十餘頁あり、この一卷を通じて少なくとも三項の創見ありと云はる、二百餘頁中概見すれば先哲の言を擧くる所、いと多くして匆々に一讀し去りたるものは、獨逸新聞紙の評言の如く他人の説をのみ樣々に配合したらん如く思ふべし、われもしか思へり、博士もまた殘念のことしてけりと云はる、さりながら孰らく思へば多數の引證は、これ自家の立脚點を強くせん爲めの方便と見るべく、此方便のさわなる點にのみ着眼して、創見の存不存を見徹する眼孔なきは、まことの評家とは云ふべからざるなり、著者の之に服せざるは尤もの次第、さて三項の創見とは、左如き者にぞある、

第一　吾人の權利なるものは概して強者の權利の認許せられたるものに外ならざること即ち之を換言すれば吾人の權利なるものは概して認許を經たる權力に外ならざること

第二　愛の德も亦人類開化の爲めに絶對的必要のものにあらざるのみならず却て大に不利なる場合少なからざること

第三　各國の交際上には本來道德の存すべきものにあらざること

加藤先生の所謂先哲未言の創見とは、この三項なり、一見明白の言、先哲未だ言はざるものなりとなん、あはれ世の學者之を評論してその眞價を定めよ、

曾て某氏が宇宙は一大動物なりと我觀せりと叫びき、

或人之を創見と呼ばりし、われは以上の三項に就きて同じく明者の輩出を望まざるを得ず、而してこの三項や果して事實に適するや否やは問ふべからず、說の是非を云はしめば少くとも、第二第三項に就ては論ずべきとあり、されど此塲合には唯果して創見なるや否やを證すべきのみ、その創見に誤れるものあるや否やは問ふべからずとせば、唯多識なるものゝ判斷を俟つはわれの位置なり、以下少しく三項に對する加藤氏の意見を記し、世の判者の料に供せん、詳細の說に至りては原本によるをよしとす、

第三　創見の說明

第一項、吾人の權利なるものは概して、强者の權利の認許せられたるものに外ならざるとに對する、加藤氏の說明を聞くに、悉く原本中の要領に外ならざれば極めて簡畧に叙しおくべし、

古來の說は權力を限制して玆に權利始めて立つと云はざるはなし、(一)は國家の法制により權力の限制を以て既存の權利（天賦權利）を有効ならしめたりとし、(二)は國家の法制により權力の限制を以て未存の權利を生したるものとなす、共に天然の權力を權利の妨害物と認めて惡性のものとなし、獨り權利を以て吾人の利益を平等に增進する所の良性のものとなす、(三)は權利なるものは全く權力より生したれとも、權力は粗野暴猛なる性質を具ふるものなるに、此權力の限制せられて權利となるときは、遂に全く高尙優良なる性質となるとし、(四)は單に吾か一個躰の權力のみより權利は生するにあらず、吾れに權力あれば他人にも亦權力あるとなれば、此兩個の權力相合するときは、必す互に制限せられさるを得ざるが故に、兩個の權力の互に制限せらるゝの理より玆に始めて、兩個の權利の萠芽を生することゝなし、(五)は權利が認許せらるれば權力となり、權力が認許せらるれば權利となるとなすも此說は權利と權力とを二個の固有物としたり、又(一)と(三)の如きは善惡の性を附したる如き共に、與せざる所、何となれば善惡の如きは比較的のものにして、天然既存のものにあらざればなり、故に從來の限制主義に反して認許主義を主張す、强者の權利其實は權利にあらずして全く權力なるものゝ認許せられたるを以て之を權利となす、(五)の說は二個の固有物としたるが故に取らずと、之に就きては既に當時論議せられしとありき、博士が創見の一とする所は即是れ、

第二項、愛の德も亦人類開化の爲めに絕對的必要のも

のにあらざるのみならず、却て大に不利なる場合少なからざるとに對する説を聞くに、佛教の如き基督教の如き愛の德をもて、萬德の冠となし、動物の上にまで愛を施せと云ふ、愛他のとたる社會の組成に就て必要なる辨を俟たざれども、然れども更に吾人々類の進歩發達の次第を歴史上に徴して研究するときは、決して宗教德教の勸誘せるが如き絶對的愛他の德によりて進歩發達せるにはあらずして却て、不愛によりて進歩發達を來たしゝとは決して少しとせざるなり、若し治者が非常の大權を弄したるとの如き、決して愛他の主義に合する者に非さりしも、此弄權なかりせば社會の統一を促し秩序を立るともなく、遂に國家の創立を見るの時あらざりしならん、開化歐人か基督の愛他主義を奉して、狹隘なる歐洲に蟄居して他州の野蠻未開國を奪掠するとを爲さゝりしならば、決して今日の開化の十分の一をも得ると能はざるは明かなり、されば愛他は人類界に於て決して絶對的必要にあらざるのみならず、往々大に不利なる場合あると甚た明瞭とす、結局純然たる愛己を必要とせざるべからずと、是れ創見とする所の二なり、

第三項、各國の交際上には本來道德の存すべきものにあらざると、古來の説によれば道德は、吾人々類が相互の交際に於て盡すべき至大義務とせど、之れ全く社會進化の理に反するものなり、道德は唯此社會の維持と進歩の爲めの要具として、天然的に次第に發生上進したが、されば共に維持進歩を謀るの必要なき人類相互の間、即ち各國互の間に道德を必要とするの理はあらず、但開明なる各國の臣民相互の間にありては、國家と國家との間とは大に趣を異にして殆んど、國内臣民の間に於けるが如く道德の行はるゝとゝなれり、各國交際上に不道德を許すとに至りては、先哲に聞かさる所にして創見と信する三なり、

以上は加藤博士の創見とする三項の要領なり、其所説に至りてはわれ人の曾て批評したるものあり、斯に之を再びするを好まず、當時此説の創見なるや否やはわれの問ふ所にあらざりき、然るに創見なしと評せるものに「先哲未言」と題して更らに世に公けにせらる、されば其所説は評するに及ばざるなり、然れども此創見の性質に就ては、一言し置かざるを得ず、何となれば是等の説たる曾て評したる如く、裸躰的のものなれば或は其裸躰のみを見來りて、却て誤解を招き人生道德上、不測の見を懷くものなしといふべからざればな

り、換言すれば未だ社會學上の智識に乏しきものは、意外の思ひを爲して、思想界道德界を亂すか如きとなしとも云ふべからず、現に是等の說を誤解して奇怪なる道德說を爲すものもあるやに聞く、故に世人の誤解せざらんことを希ふがまゝ、老婆心の餘り一言すべし、實に止むを得ざるに出づ、

第四　創見の性質

上來叙し來れる所を以て之を觀るに、所謂創見と非創見とは間一髮の事に屬するもの多きが如し、而かもその間一髮の微妙なる際こそ、學者の最も苦慮する所なるべけれ、蓋し哲學社會學等に屬する思想上の事は、不圖したる一點より僅かに意見を異にするに止まれば、大凡の人はしかく意を留めざるものなり、さりながら哲學上思想の變遷し來れる歷史を讀みたらんものは、學派の分るゝ、思想の緻密となる、全く間一髮の微妙なる際より來れるを知るべし、デカルト以後佛國の哲學者の異見を觀よ、カント以後獨國の哲學者ハルトマンに至るの異見を觀よ、又コント以後英國哲學者等の異見を觀よ、眞に先哲未言の創見と稱するは、間一髮のとなり、而して其價値や詢に大なるものなり、蓋し思想界の變遷に深く思ひを寄するものにあらずは、此般の消息を味ふべからず、

さて加藤博士の創見三項と稱するものゝ中、第一項は原本に於て甚た明瞭に論せられしかば、博士が古來の意見に比して異なれるものあるは、われの既に認めたりし所、他の二項に至つては、しかく思ひ當らざりしが、博士の論說の要點にてありしが故に、彼此論議せざりき、蓋し彼の著はこの三點を經緯して、論じたる事を認めたりしが故なり、而して今日特に彼三點こそ、創見にてありしとの言を聞き、今更の如き心地せられぬ、思想界の創見と云ひ非創見と云ふものゝ、間一髮なりといふ所以は又加藤氏の言に徵して知るに足らん、第一項に就て云はく、フロエトベルの云々の說は大に余の說と相似たる所あれども、併し同氏は元來權力と權利とを二個の固有物と認むるものなるが故に合はずと、然り先哲等の見解を察し來れば殆んと一樣の見あるものゝ如し、されど間一髮とは相互に最も似たる所に於て、尙權利と權力とを二個と認めたると否とにあり、而かも之を認むると否とに依りては、其源泉げに一步を隔つるに止まるも、下流に至りて莫大の相違を來さずとせず、加藤氏の信ずる萬界天則一致主義に於て、必すしも之れ云はざるを得ざる點なり、

第二項は別に論すべし、第三項に就て云はく、ホッブス及び徂徠の兩碩學が、道徳は天地自然に存せず、君主が始めて之を制定したりと説きし意より推論するときは、自ら各國間に道徳の存せざる道理となるべきは當然なれども、併し兩碩學も恐らくば未だ其邊には考へ付かざりしならんと思はるれば、兎に角各國間には、本來道徳の存すべきものにあらずとの説は、余が始めて唱道せしものと信ずと、之れわれの先きに論じたる如く、先哲が確言せざる所も之を演繹し去れば、後人が創見と認むるものを包括しつる時も、之れありと云へる所以なり、去りながら先哲未思に非ずして先哲未言なり、假令相互に歸着を一にすべきものなるも、若し確言を爲さゞりしならんには、先哲未言といふに於て毫も妨げず、さればこそ創見と稱するものは、まゝ機一髮の間にありて存するものと云ふなれ、

以上は加藤氏の創見が、果して創見なるや否やを判別して言を立てたるにあらず、われは今之を判別するの器にあらず、唯加藤氏が創見と云へるものに就きて、機一髮の消息を述べたるのみ、假令斯かる性質の創見なりとするも、果して創見なりとの判別明かになりたらんには、そが報酬は著者の頭上に拂はるべきものなり、

第五　前項の續論

以上卒爾に四回分をものして送付したる翌朝、加藤博士より特に「先哲未言」を批評せよ、大に利益を得べしと申越されぬ、されどわれは創見云々に付、始めより言を立てんと期せざれば、進んで第二項の性質を論じ、併せて加藤氏が奉する主義の誤解されざらんとを述べて止まん、

第二項は一見妙なるものなり、愛の徳も亦人類開化の爲めに、絶對的必要のものにあらざるのみならず、却て大に不利なる場合少なからずとは、歴史の外面、其結果を大觀して以て歸結せしめたるもの、猶ほ殺戮弄權不徳掠奪戰鬪の如きも亦人類開化の爲めに、絶對的不利のものにあらずして、却て必要なる場合少なからずと云ふが如し、博士は之を以て先哲未言の創見なりとせり、他の二項は暫く措き、此創見は隨分有り來りし思想の反面を穿ちたるに外ならざるが如し、何となれば戰爭の爲めに樣々の害毒を流すと同時に、文明の進歩に對して大に利する所之れありといふ思想は、久しき以前より傳唱されしものなればなり、唯之を反面に於て愛の徳の方に向けしのみ、

而かも愛の徳に對する此反面的思想は、進化主義を奉

するもの、歸着せざるべからざる點なり、先哲は概して斯かる見識を有したりしや、否やは暫く措き宗教德教等に於て愛の德を絶對的必要と說きしには、抑も故あり、

彼等は後世の所謂惡事の爲めに、人類開化を來せし事多少之れありしを認めざるにもあらざらん、而かも其及ほす所の害毒は、愛の德敎の及ほす利益に比すべき性質のものに非ず、戰爭の如き弄權の如きは人生一般に害する所多くして、利する所尠なきを看破して、特更らに不利なるものとのみ考へしなるべし、即ち眞理を見出すといふ事より寧ろ當時の利害の觀念に束縛せられしなり、然るに今進化主義より觀じ來れば、戰爭に義と不義との別なく、善惡の區別素より古今東西に於て相異なるものとすれば、且つや時所位の如何をのみ計りて、立論するに非れば必すや學理上の眞實を發表せざるを得ず、歷史上の古事に容喙して感情的人物等の攻擊を受くる如きは、學者として耻つべきとにあらず、換言すれば學界は政治界より廣漠なるものなれば、何事にも頓着するとなくして、唯事實に合する眞理と認むれば、之を唱道するを憚らざるは現世の常なり、されば宗教德教等の部面に於ては、到底愛の德も絶對的必要のものにあらずなんとの說を立つべからざるなり、唯學者として之を言ふとを得べし、

古來の先哲中には宗教其他感情上の制裁を受くるとありしもの多し、近世に至りては事物解說の方法、着眼點に於て異なるのみならず、事物の天則發見上には未來の理想を交へざるが故に、今後も漸々驚くべき所謂創見を出すものあるべし、古人多くは理想を交へ、多少爲めにする所ありてその眞相を發表せざりしが故に創見も亦尠なかりしなり、されど眞は眞なり、時所位によりて變すべけんや、加藤氏が所謂第二項の如きは、先哲が言はんと欲して言ひ得ざりし性質のものと云ふべきか、

餘論

唯之れ解說上の事なり、未た以て勸誘的となすべからず、外面の結果より推理して歸着したるものなり、善惡の觀念を立てゝ行爲の動機如何、良心云々を問ふたるものにあらず、何となれば或種の解釋と其主義を異にすればなり、若し之を覺らで解釋と勸誘とを同一視し、事實より觀したる見解と吾人の心情が自然に希望する理想とを混合する如きとあらば、それは甚たしき誤謬なり、

創見の性質を論じたれば、序でながら一言を記して誤解者の爲めに供す、左の主意は曾て原本を評する時、己にものしたる一部なり、今尙ほ世に誤解者あれば止むを得ず、斯に繰返す、

加藤氏一流の說く所は、最近獨逸社會學者等と大に似たるものにして、社會學の幼稚なる今日に於ては先つ進步したる見解なり、今日は學說上稍自由の言を爲し得るが故に、些かの虛飾なき裸体的我觀を立つ、されば理想云々を以て之を咎むべからず、特に倫理上に關する今日社會學者の所說を取りて、直に以て今後行爲の法則と見做すべからず、從來斯くありしとの說を見て、之を勸誘するは不可なり從來支配し來れりとする天則に從ふと同時に、人情の向ふ所の理想をも苦慮する所ありて、始めて行爲の法則を立つることを得べし、社會學上組織的の解說を誤認して、人間萬事塞翁の馬と敎訓するは、甚だしき誤りなり、後進の徒にして往々社會學上倫理學上の思想に欠くるものは、己と相異の主義を奉するもの丶解說を目して、理想なしと云ひ、或は直に之を行爲の法則と信ずるものあり、共に偏屈の輩なりと評すべし、

創見云々に就ては尙ほ許すべきこと少なからず、而かも思はず所說の部に入りしが故に長文をなせり閑を得て又論議することあらん(十八日脫稿)

島地默雷師の大乘佛說論

雄　山　人

明治年間の敎學界に博覽井上哲次郎氏に及ぶものなしとすれば識見亦た恐らくは島地默雷師に及ぶものなけん、師が讀經眼の講說を聞き師が耶蘇敎一夕話を讀むもの、誰か師が非凡の眼光を有するに敬服せざらん、師は實に活ける大乘なり、出家の維摩なり、一時神佛混淆政敎一致の際にあたりて信敎自由の大義を唱呼し佛敎をして今日あるを得せしめたる師の手腕は當時の俗僧をして師を呼んで髯の耶蘇と云はしめしばかり進步的なりき、習慣格式虛禮虛唱の外、ほとんど又一物を餘さざる本願寺の門末能く此の如き一人物を生ず、奇と謂ふべし、師の如きは眞に今日進步的佛敎徒の先登と云はざるべからず、吾人亦た夙に師の敎へを崇り幸に佛敎の一端を窺ふを得るもの、常に師を推して我黨の光明となせり、然るに此光明も老ひては又更に光る能はざるものか、今日敎學界の風潮亦昔日の比に非

ず、佛教研究の進歩實に驚くばかりなるにも拘はらず、近く「宗教」に於て余の「大乘非佛説問題」さへ既にあらはれたる時勢を毫もかゝる時勢なりと氣附かれずして、依然陳腐なる大乘佛説論々證を吾人公衆の前に示さるゝ師の見識には實に驚入らざるを得ず、四月八日釋尊降誕會演説會席上に於ける師が「言語道斷」と題する演説の筆記載せて三寶叢誌第百三十三號に在り、吾人は今其筆記中大乘佛説に關する師が意見を抄出して如何に師の説が當年の意氣に似ざるかを見ん

佛は一切衆生の機類が千差萬別であるから、據なく千差萬別の法を説かれた、今日も依經宗別と申して色々樣々に宗派も分れ、聖道門あれば淨土門あり、頓敎もあれば漸敎もあり、顯敎あれば密敎あり、大乘もあれば小乘もある、之を突合せて見ると反對の事もあるが(中略)、ツマリ其者〲に信解得道の出來る樣、八萬四千の根機がある故、隨つて八萬四千の法門を説かれた、

成程佛の説法なるものは此の如きものなるべし、然れども應病與藥と云ふことは大乘小乘共に佛説と云ふことの確證せられたる上、其大乘小乘の議論の撞着を説明する論據にして、初めより之を以て大乘の佛説なることを證し得べきものに非ず、然るに師は之を以て大乘佛説論を證せんとするもの丶如し、

佛は大醫王の如くであるから田舍の藪醫者竹菴とは違ふ、風邪にも下痢にも只葛根湯の一點張にやる如き竹庵先生には非ず、大醫王の如しとあれば應病與藥、種々の法藥を與ふることが出來る、此大醫王を竹庵同樣に一方に片付けて佛は小乘ばかり説た、大乘は佛説でない抔云ふは言語道斷なる佛説が分らぬからの事で、所詮一方の見解では佛の躰は分りません、

若し佛は大醫王なり應病與藥を行ひ得と云ふ理由を以て大乘も亦佛説なりと云ふを得ば、儒敎も亦佛説、耶蘇敎の一部も亦佛説と云ひ得べし、佛如何に大醫王なればとて其應病與藥には必らず程度あらん、即ち小乘の範圍内に於ける應病與藥とか、小大二乘を通じての應病與藥とか、諸宗敎一般の應病與藥とか是なり、而して今の問題は此應病與藥の程度如何に在り、初めより應病與藥なるが故に大乘佛説なりと云ふが如きは論點を全く取違へたるものと云ふべきのみ、況んや釋迦の大醫王なることと、其説法の應病與藥なることとは是れ獨り佛徒自身の誇稱する所にして世人一般の容易く首

肯することに非ず、若し世人一般をして之を首肯せしめんと欲せば先づ大乘の佛說なるを證せざるべからず、大小二乘共に佛說ときかば此に世人も初めて釋迦は大醫王なりとの考を生ぜん、然るに今や此の如き能證所證を顚倒して所證の應病與藥を以て能證の大乘佛說論を證せんとす、師も亦論理を蹂躪する人と云ふべし、師語を次で曰く

西洋人抔が大乘非佛說の說を信ずるも全く無理ではない、彼等は多く錫蘭或は暹羅、緬甸の佛敎を傳聞して夫が先入となりて居る故、後に聞く所を怪むのである、

夫れ然り、豈夫れ然らんや、

元來錫蘭抔の佛敎は小乘の一部にて、其佛敎を學んで夫が先入主となり、且つ大乘非佛說と云ふことは小乘其者か自ら云ふ說なる事故、之を執するも無理はない事なれど、今日之を日本人が舁出して得々たるは、今に至りて漸く氣が付たと云ふ樣な話にて、甚だ學問の淺薄なりし事を自首し、仰いで唾すると一般です、

大乘非佛說論果して誤ならば小乘其者が之を云ふ、何故に無理はない事なるか、若し又其說として果して眞ならば印度の佛徒が之を唱へしとも唱へざりしとも、小乘家が之を論ぜしとも論ぜざりしとも、今日吾人が此の如き問題を呈出するに何の故障かある、聖德太子も十七憲法を制定したれど明治二十二年には又々立派なる憲法の御發布ありたり、凝然大德に三國佛敎傳通緣起の著あるに師及び生田氏は近頃三國佛敎略史を著はせしと云ふに非ずや、學問は益す進んで先人の發明を擴張するを貴ぶ、大乘非佛說果して眞理に近くば、之を舁出して大に論爭すること何の子細かあらん、要は說の眞僞如何に在り、一言も正面より非佛說の誤解なることを證せずして、唯橫の方より之を學問淺薄とか仰で唾するとか評して居るは、氣樂は則ち氣樂なりと雖も、氣樂なる支那兵遂に千練萬磨の皇軍に敵し難かりしを思へば、師も亦終に李鴻章一樣の恨に接せんのみ

到底小乘では大乘の境界はわからぬ故、初は小乘を確守して居るが、扨後には其小乘に自ら疑ひを起し來る樣になると、遂には大乘に入らねば滿足出來ぬことゝなる

是れ別問題なり、此說果して誤なくんば釋迦の說きし小乘は龍樹馬鳴等の大乘に及ばずと云ふまでなり、之

によりて大乘佛說と云ふことの證し得らるゝに非ず
佛の金口の上には立破に備はりて居ることも、小乘の根機では之に心が傾かぬ、夫故假令ひ有りても無きが如くです、然るに馬鳴、龍樹、天親等は正しく大乘を世の中に發見して弘通せられた、
是亦大乘の立派に佛の金口に備はりて居し證明とはならず

要するに大乘非佛說問題は容易ならざる大問題なり、唯知識、莊嚴、顯揚諸論の佛說論と出定後語、赤裸々諸書の非佛說論とを對陣せしめしのみにて勝敗の決の何れに在るか大抵推測し得べし、況んやビユルノーはじめ西哲諸氏の議論亦た仲々侮り得べきものに非ざるをや、又況んや我文科大學に於ける井上博士の比較宗敎學講義は既に佛敎に入りて早晚此問題をも精密に研究し始めんとするに於てをや、豈に何時迄も太平樂ついて之を念頭に懸けざるを得べけんや、今に於て島地師の如きは奮然他に先ちて嘗て他の點に於て吾人後進を導き玉ひし如く又此點に於て吾人を導く所なかるべからず、然るに此「言語道斷」中の一節の如きは啻に吾人を導かざるのみならず、却つて吾人を迷はしむるものなり、是れ皇軍の境に逼るを聞きて部下を警醒せんとはせで、豎子何をか能く爲さんと大言せるため、終に將士を惰眠せしめし支那將と何の簡ふ所かあらん、吾人は僅々二年前に佛國開敎の壯擧を唱へて天下の耳目を聳動せし師が、今日此の如き論理曖昧なる演說を青年に聞かしむるは是れ師老ひたるに非ずして焉んぞ能く此の如くならんと思ふなり、然れども退いて熟ら思ふに師の老は師自身の罪に非ず、師が左右、時勢を解せず學問に通せざるの徒、常に圍繞するの罪なり、師若し晚年大に奮はんと欲せば何ぞ无學の凡僧、阿諛謟佞の小才子輩を遠けて之に代るに學あり識あり而して又血あり骨あり淚ある一群進步的新佛徒を以てせざる、師既に一たび進步的佛徒の巨魁たりき、今日何ぞ再び其先進たるを辭すべけんや、妄言多罪、亦聊か佛敎の爲に計るのみ

雜錄

西藏佛敎の探檢（續）

汀水生抄譯

彼れ語を續で曰く
我悲哀をして卿が安靜を妨げしむる勿れ若し世界の

苦痛ずるあらば吾焉ぞ樂しからん卿等の執着する此生存は如何なるものぞ幸福の狀態か或は將た悲哀の狀態か卿瞬間たりとも人生の生活に滿足し又改良の念慮を苑れし事やある今と云ふ今に於て滿足なるや卿は遼遠の地より遙々旅行したれば種々樣々の人民に交接したると甚多し貴賤貧富老若男女中其運命に甘んじて他に優れる冀望を有せざる者を知れる歟一人として眞に幸福なりし者なく幸福ならん者なく又滿足する者あるなし此世は實に悲哀に纒綿せられ包擁せらる生存其ものは即ち苦痛なり盖し肉躰の存する限りは需用益々增加し遂に滿足する能はず然り人生は最好境遇にある時と雖ども幸福にあらずして苦痛の狀態にあり稱して幸福と云へるものは一時苦痛を脫離せしに外ならず宇宙は之れ悽其悲愴の充滿する所落膽失望の淵に沈淪せる億兆の懊惱煩悶は一々楚々として余に迫る億兆の懊惱煩悶するあるに我獨り焉ぞ微笑するを得ん。

於是余は轉た快興を催し彼が容姿の象嚴と周邊の萬籟俱に寂なりしを以て不知不識余が思想は再化身の事に一轉せり再化身は之れ東洋神秘の最要現象にして余は之が硏究に苦辛せしと雖も茫然として會得する所なかりし。

達賴拉嘛

卿は再化身の永劫不朽の眞理を疑へる傾あり然れども何物か之より明白なる前世に於ける生存の情態を想起する能はざるは取りも直さず化身など云へるものゝ無き事實なりと卿は考察するならん然ども卿か現世に生れ來りてより二歲に至るまでの事物を記憶し得るや記憶する能はずと雖も其間存立したる證は先天的智識にありて存す卿が死と云へるは存在の他の情態に移るの謂に外ならず。されど少しく考へ見よ過去の情態を記憶するは幸福にあらず若し現世の記臆を把持して他界に覺醒するとを想像せんか此等の記臆を芟除せんとを願ふにあらずや此等の記臆は恰も地獄の惡魔の如くに吾等を苦しむるが故なり謬妄の冀望痴愚の思想罪惡の記臆は何人と雖とも芟除せんとを希ふなり忘却は冀望し得る最大幸福なり昔希臘人の最大慰籍たりしはレセァンの流に靈魂を洗ひ凡て過去の記臆を忘却するにありたり一生存は一生存每に悲哀を增加す新に再生すれば其世に生存する間十二分の失望困難ありされば何の用ありてか過去の煩悶懊惱を記臆するとをせん。

彼れ眼眸を閉ぢ默然たると數分悒鬱の容姿は一變して天日の光照燿如たり余は説話し茲に終を告げたるならんと思ひ將に坐を退かんとせし時彼が不思議の眼光は尙ほ一度余に執着の念を起さしめたり彼れ悠然として語氣を強め

過去は夢幻にして現在のみ獨り實現なり未來は多く幻影に屬す吾等は常に現在の情態に滿足せずして不斷幸福快樂を茫乎たる未來に望む吾等の幸福は常に明日にあり或は常に一週一年の後にあり然れども其日は決して來らず冀望する目的は梨園の鳥に誘はるゝ如く一樹に至れば鳥は去て他樹に轉じ終生之に到達するとなくして遂に北邙に移る老人が夢幻の過去を回顧する時は眞理躍如として潑溂し來り身は固と痴愚の梨園にありたるを釋然悟了し若し同一の經驗を經ざるを得ずとせば最早再び生活するを願はざるなり卿等の固執宗教が教ゆる不滅の如きは存するものにあらず他界に覺醒して百花爛熳たる花園の如き劇朗の妙音洋々たる樂室の如き或は尊嚴なる老仙の王坐にありて禮拜者の絕へざる如きは牽强附會のみ吾等の世界なる『自今後』は欲する儘にして極樂地獄は何處にもあり再化身即ち間遏なき存在は淺薄なる學者の云へる如き想象的理論にあらずして尊嚴犯す可らざる事實なり吾等は始て此に生存する者に非ず始あるものは必ず終あり或一定時に人生の存在を初め而して永劫に存在せんが如きは出來得可らず若し或出來事にして時間及び空間に於て唯僅に一回のみ發現するものならば發現し得べき事物は最早發現し盡くるなるべし蓋し吾等は永劫を經過し來りたればなり。

於是余は一言を試たり之れ記臆すべき對面中余が初て發したる語なり

わが哲學者も之と同一の論結に達せり然れども其論結たるや單に理論の順序を經たるものにし敢て事實を待て後然るにあらず。

拉嘛應答して曰く

吾等は事物を論出せず唯之を觀ずるのみ懷疑不正確と云へるものは幕の後に存するにあらず西洋文明は物質の一面にのみありて大悟達觀を罵るは之れ適當の視官なきが爲なり。

海底に住活する動物にして白頭翁（おきなぐさ）と呼べるものあり一枝の肉幹は其體軀にして花辨の如く廣がれる鬚を有し以て汲々唯營養物を獲んとを勤む視官なきを以

て世界は全然暗黑にして他の動物の如き官能なく唯觸官の一あるのみ然れども同種族にして發達し進化したるものは既に視官を有するに至れり盲目時代と經過して進化し來りたる動物は其中の或ものゝみ他に先て視官の作用をなすに至りし如く珊瑚嶼に生長する一群の白頭翁中或一二が他に先で進化し以て視官を有するに至り茲に初て奇異なる物體を見或は未だ曾て見たるとなき形色の世界を實現し而して未だ視官を有するまでに發達せざる同族に之を告ぐるも決して氷釋せず又信憑せざる可し否盲目者は唯一笑に附し去らんのみ之れ知覺機關の未だ備はらざるが故なり。

茲に余は達賴拉嘛と第一回の對面を了れり而して余白亦將に盡きんとす余は人種風俗地理等に關する事よりも印度及び西藏の玄妙哲理に亘れるものを多く縷述したるは單に旅中の變事を記するは固より余の目的に非ざるを以てなり西藏の佛教問題は甚だ廣大にして余が十八ヶ月間ボットランドを蹐跡して獲たる觀察は亦た甚だ夥多にして現世紀の終まで此論文を經續するも徹底盡きざる可し然ども今茲に分界線を畫かざるを得ず圖らず遂に長文をなせり今や好んで東洋を觀察し討究する者簇々として起り來れり而して吾人は此一大美觀を呈する蓮華の境寰より將に教を受け之を實現せんとするの秋なり十九世紀に於ける我西洋文明はハラン、アル、ラシッド時代の亞剌比亞に於けるよりも尚一層怪訝に堪へざるもの多し五十世紀の昔より經驗を保繫し來り東洋思想を畜積する敏捷優等の人民を討究するに當り得たる所は欠々たる一端のみマクス。ミユーレルの起て烱眼を放ち以て婆羅門拉嘛及びリグヴェダの古文書を研究し初めたるは僅々二十五年前の事なり東洋に一境寰あり其天地太古に屬すと雖ども靈智妙能滾々として潑溂し燦燿たる光熙を放ちて以て一段人目を惹く賢人東方より來れり矣。

(完)

神道家の覺醒を促す

今や我が日本國民は世界の競爭場裏に立ち、旭日の勢を以て漸々膨脹せんとする機運に向へり。然るに國民の膨脹に二樣の方面あることを忘るべからず。即ち、一は外形上の膨脹にして、先づ帝國の版圖を擴大し、之に殖民して種々の事業を起さしめ、以て國家の富强を致すにあり。又一は精神上の膨脹にして、日本國民

の氣習、風俗を以て他の人民を同化するにあり。換言せば、他邦の人民を日本化して、吾人と同樣なる感情を有する帝國臣民となすにあり。之を國民の同化力と稱す。此等二樣の膨脹は必ず始終相伴ひ相助けざるべからざるものなり。若し夫れ國民が外形上の膨脹をなすのみにして、精神上に於ては他國人の爲に厭倒せられ、彼等の同化を受けざるを得ざるに至らんか、是誠に歎息すべきことにして、精神上の日本國民は漸々衰微に赴くものと謂はざるべからず。若し斯の如くにして日本の國粹を亡ぼし、良風美俗を棄て他の國風に化せらるゝ如き悲運に至らざるべからずとせば、寧ろ外形の膨脹をなさゞるの勝れるに如かず。然るに今や外形上の擴張は彌大ならんとするに至れり。而して之に應ずる精神的膨脹の準備は何處にあるか。苟も帝國臣民たるもの奮起一番以てこれが準備に奔走せざるべからざるなり。夫れ我邦武力の強なる能く敵國を征服して、廣大なる邦土を占領するに至りたり。然るに今後此等の人民を開導して知識を與へ道德を養ひ、純然たる吾人の同胞となし、之を統一するは全く文化の力によらずんばあらず。即ち、文化の力を以て精神上の征服をなすにあり。之を純然たる帝國臣民となして統一するに當り、尤も至要なるは彼等の腦中に吾人と同樣の國民的感情を與ふるにあり。而して先づその主要なるものは日本の國體を知らしめ　至尊の威德を感ぜしめ、以て　至尊に對する無上の尊敬心を養成するに外ならず。若し此感情にして缺亡せんか、これ純然たる日本臣民と云ふべからざるなり。之をなすは主として敎育と宗敎とによるものなるべしと雖ども、我邦今日の狀態を以てすれば、その適當なる宗敎なき極めて遺憾とする所なり。若し夫れ之を實行するに當りて外國傳道會社の配下にある宗敎に依らんか、決してその目的を達する能はざるのみならず、反て外國の風俗習慣を傳播する弊害あり。又未來世に重きを置く所の宗敎を以てせんか、人民の發達を害すること少しとせず。又種々の敎義を輸入し崇拜物を附加せんか、彼等が固有の迷信と衝突を起して大に民心を混雜せしむ。要するに吾人の切望する所は、日本の國體を敎へて、以て　至尊の聖德を覺らしめ、感泣以てその恩化を慕はしむるを得るに足る方法を得んとするにあり。固より之れが爲め佛敎も大に關て力あるに相違なしと雖ども、吾人の不滿足なる所蓋し少からず。若し玆に吾人の充分なる希望を云はしめば、國家の事業として實行するにも

あれ、或は個人共働の事業として之をなすにもあれ、とに角何宗にも依らざる國民的團躰を組織して之を行ふに如かずと雖ども、之れ目下隨分困難なる企なり。然らば之を措て他に如何なる方法を取るべきかと云はゞ吾人は神道に一大改革を加へて之に當らしむるを以て最も善からんと信ず。夫れ神道の宗教たるや、我國民固有の宗教にして、その教義の根本とする所　皇祖、皇宗の聖德を記銘し、その遺訓を崇奉し、至尊を敬畏して君臣の分を明かにし、以て臣民たる本分を全ふせんことを教ゆるにあり。即ち、純然たる國家的宗教にして、その精神たるや以て能く異邦の民を同化するに適するものと云ふべし。然りと雖ども、之を傳ふるものゝ多くは無教育なるが爲めに、神道の本根的精神に附着せる種々の神話を正當に解する能はずして、世人に種々の迷信誤想を起さしめたること實に多しと謂はざるべからず。又た不德不義の徒にして世人の迷信を機會として、甚だ卑劣なる所行をなし社會の批難を受くること常に少からず。故に今日社會に實際行はるゝ所謂神道の教會なるものに至りては實に腐敗極れるものにして、彼等の職務とする所は、重に病者の爲めに祈禱して、神水を賣り、神符を授くるに外ならず。又たま〳〵教壇の上より道を説かざるにあらずと雖ども多くはその躰裁極めて賤劣にして之を聞くに忍びざる如きものなり。斯の如き有樣なるを以て、今日實際の神道を以てすれば彼等が世人を德化する能はざるは云ふまでもなく、自個の德義すら守り能はざる如き次第なれば、神道と云ば三文の價値もなき宗教の如く教育ある人々より思はるれども、是れ只だ今日の教會が腐敗せるのみのとにして、神道の根本的精神には苟も關係なき者と云はざるべからず。されば神道今日の急務と云ふ可きものは非常なる改革者の現出して、一大革命をなすにあり。若し然らずんば神道は漸々腐敗して終に如何なる運命に立到るや知るべからず。さればにや、二三有志の徒は之を歎息するの余り、時に憤慨の文字を連ねて之を天下同教の徒に訴ふことありと雖ども、殆ど一人として之に應ずるものなきに似たり。

吾人の神道家に向て改革を求めんとする所は左の諸點にありとす。

第一、同教中の有識者が互に同盟して先づ一の新團體を組織し、全く病者の祈禱を廢して布教のみを以て目的となすべし。是れ神道教導職を以て一種の營業となす如き徒を放逐する良策なり。若し之を實行して、教

會は全く營業的のものにあらず、教化的團體なりと云ふ觀念を世人に與ふるにあらざれば決して實際の改革は行はれざるべし。

第二、此團體の根本的教義を明かにし、その他の迷信を一切除くべし。即ち、根本教的義とは吾人が前に述べたる神道の根本的精神を指すものなり。

第三、此根本的教義に基きて社會を德化するを以て目的となし、歴史上の實例によりて皇室の尊嚴を教示し國體を明かにして、臣民の本分を感銘せしむことを勉むべし。而して之をなすに當り全く合理的方法に依るべし。決して一般の教育ある人に諾納せられざる如き背理的説明をとるべからず。

第四、成るべく祭典、儀式等を減省して教化の方面に力を盡すべし。

第五、此團體中に一の學校を立て將來の宗教家たるに必要なる教育を與ふべし。これまでの學校の如く單に皇典を教ゆるのみを以て主とせずして將來の實際世界に立て活ける人間を教化し得るに必要なるだけの知識を與へざるべからず。(宗教第四十一號社説一五八頁參考)

今吾人の心に浮べる所の至要なる問題は以上の五點に外ならず。此等の點に基きて神道を改革し、之を蓋へる諸の迷信を放棄し、俗物を驅逐し以て本來の主義を顯さば、極めて優等なる國民的宗教を發見するを得るや蓋し疑ふべからず。

神道の教ゆる所はその根本國民的たるが故に眞正の宗教とすべからずと主張する論者あり。又神道には別に教典とする程のものなく、その説く所甚だ淺薄なるを以て將來の宗教たる價値なしとする論者あり。然りと雖ども、吾人の見る所を以てすれば、國民的なるが故に之を尊ぶなり。その性質の世界的なるを大に尊ぶ人ありと雖ども、斯の如き宗教は甚だ抽象的のもの故、之を實地に應用するに至りては是非ともその國の特性を容れざるべからず。例へば、佛教の支那に入りては支那の風俗を取り、日本に入りては日本の風俗を取れるが如し。是れ即ち、世界的宗教と雖ども之を一定の地に應用するに至りては是非國民的となりて應用さるゝにあらざればその効を奏せざるを以てなり。又その教ゆる所甚だ淺薄なりとする人あれども、是れたゞその教義の哲學的ならざるを以ての故にして、吾人の尊ふ所はその教理の哲學的、形而上學的、神智的ならずして、單に君臣間の教訓たるにあり、日本の歴史と共に

發達したるにあり。若し神道を以て世界的の宗教となさんとする人あらば、これ恐く大なる誤謬なるべけれども、國民的なるが故に、普遍なる哲理を説かざるが故に我國民を教化するに足らずと云ふものあらば亦大なる愚論ならずや。

若し夫れ神道にして吾人が以上述べたる如き方針を取りて奮發一番大に改革する所あらんか、我が國民を教化するに適せる宗教とならん。而して之を以て、新占領地の人民を教化せば、純然たる日本國民を養成するに尤も近かるべし。夫れ我が國民の外形的膨脹は愈々大ならんとする今日に於て、彼等を教化する方法の切要なる今更ら反復せずして明かなり。神道家の大に覺醒すべきは今日を措てまた何れの日か之れあらん。

美術と風俗との調和

嘗て佛國にありて油畫を修めたる黒田清輝氏の裸躰美人一たび博覽會に顯はれしより、忽ち之に對する世評囂々として起り、之を天眞の美なりとして賞賛する者あれば、又之を醜の醜なり博覽會の一大汚點なり風紀を亂すものなりとして痛斥するものあり。是即ち美に對する異種の感情、思想が一大衝突を惹起せるものなり。我邦古來の美感と歐洲人の美感とが衝突を生じたるものなり。而してその衝突の點は要するに、裸躰畫は美術となすべきものなるか、又若し之を以て美術となすべきものとすれば美術と風俗との關係如何と云ふ二點にあるべし。此の二問題は美術上、教育上随分價値ある問題にして、決して一時の感情にまかせ、己れ一個の獨斷を以て輕々に論定すべきものにあらず、一は深く國民固有の感情を察し、又一は精密に美術の學理を考へ、然る後公平なる斷定を下すべきものなり。そは今回出品せる一面の油畫が果して風俗を亂すや否や、又之を美術舘内に排列して公衆に縱覽せしむべからざるか如何等の問題は暫く措くも、全躰此種の問題は將來國民の氣習を養成する上に著大なる關係を有するものなればなり。故に吾人は此回の衝突を機會として天下有識の士が美術と風俗との調和を如何になす可きかとの問題を充分研究せられんことを望む。茲に吾人が有する卑見の一端を吐露して暫く他に高説の出づるを待たん。

第一、美術の品題――此は美なる物なり、彼は不美なる物なりとの差別物の實性上に於て本來定まりおるに、

あらず、吾人がそれに對して美てふ一種の快感を覺ゆるときは、之を美なる物と稱し、又吾人がそれに對して醜てふ一種の不快感を覺ゆるときは之を醜なるものと名くるなり。然るに各人の境遇によりて感情は多少變するものなれば、如何なるものが美なるかは必ずしも萬人一樣なるにあらず。殊に洋の東西を異にし、時の古今を隔つるに至りては、美感を惹起するものゝ甚しく懸隔するは自然の理なり。教育あるものにも、教育なきものにも、佛國の社會に育ちたる人にも、日本の社會に育ちたる人にも悉く一樣に美感を與ふる如きもの決して存するにあらず。是必竟するに身躰の狀態、自然界の影響、社會の感化等によりて定まるものに外ならず。然るに人の美を感ずるは一方に於ては外界に本來美なるもの存し、他方に於ては吾人の内に之に應ずる一種の能力ありて、兩者相互の一致より起る現象の如く思ふ人多し故に「眞の美に古今東西の別あるなし」とか、或は「彼等に殆んど審美眼なし」とか言ふ如き言をなすものありと雖ども、これ甚だしき謬見たるのみ。一として外物に實性上より美醜の別あるなく、又吾人に美感と稱する一種の直覺力あることなし。唯だ或る境遇の下に造られたる心狀の上に一種の物躰が映ずるときに美醜の感生ずるのみ。されば同一の社會に生長し、殆ど同樣なる境遇の下に立つ人が集合するときは、その間に殆ど一致する所なきにあらず。之に對して起るものは即ち美術なり。故に一種の美術品――繪畫、彫刻等の如き――にして日本人に美を感ぜしむるもの必ずしも歐州人に美なるにあらず、往々此に對しては美術にして彼れに對しては醜術なる場合なきにあらず。只だ或種類の美術は一社會の人集、或は之と類似の心狀を有する他社會の人集にのみ通して美なるものと云ふべきなり。是各社會の特有の境遇によりて起りたることにして、單に美術上より見れば、如何なる種類の品題を美とするも、毫も高下の別あるにあらず、(固より技藝の巧拙は別問題なり)。唯だ最も美に感ぜしむる品題を以て最もよしとするより外に途なし。是を以て巧妙なる裸躰畫の前に立ち毫も野卑なる感情を起さずして眞に美と覺ゆる種類の人に取りては裸躰畫は即ち美術たるなり。之に反して、裸躰畫を見て卑醜見るに忍びずと思ふ人には美術たらざるなり。決して前者を以て美感の優等なるものともすべからず、又後者を以て美感の幼稚なるものとも定むべからざるものなり。美感の上より見るときは各自が美と感

ずるものを以て美術となすより外に途なく、是全く各人の自由たるなり。

第二、美術品の制限――以上論じたる所は全く美術上の快樂を獨立的に見たるものなれども、吾人が實際の生活に於ては決して美術上の快樂のみにて滿足なるにあらず。種々の快樂を得之を適當に調和して生活せざるべからず。故に若し美術上の快樂にして他の尙ほ强力なる快樂と衝突するか、或は强力なる苦痛と相關係する塲合には之を抑へざるべからず。如何となれば若し之を抑へざるときは一部の快樂の爲めに全躰の快樂を失はざるを得ざればなり。是を以て實際美術上に幾分か制限を立てざるを得ざるに至る。

然るに若し自己の經驗上全く快樂の衝突なき時は如何なる美術品を撰ぶも可なるか。是れ單に個人的方面よりのみ見れば然りと雖ども、實際吾人は全社會の一員として生活する者なれば、社會全躰の快樂と衝突するか、或は社會の發達を害する如きものは之を抑制せざるべからず。是れ各人が社會に對する必然の義務たるなり。されば茲にまた美術上に一の制限生せざるを得ず。此點より見れば吾人は己れに美の快樂を與ふればは如何なる美術の品題を撰ぶも全く自由なりとは決して云ふべからざるなり。故に若し一個人にして社會全躰の妨害となる如き美術上の嗜好あらんか、之を抑制して漸次滅せざるべからず。又若し社會の發達に利益を與ふる如き美術上の嗜好を發見せんか、之を國民一般に擴張すべきなり。

以上の所説を裸躰畵の上に應すれば如何なる結論を生すべきか。我國民固有の感情より云へば、裸躰畵は高尙なる美の快樂を與ふるものにあらずして、美術としては適せざるものなり。國民の氣習は裸躰畵を以て甚だ醜なるもの、見るに忍びざるものとなすなり。されば裸躰畵は歐洲人の眼には美術なるも、我國民の眼には醜術たるものとす。是決して彼れの美感は發達の高度にあるものにして、我れの美感の尙ほ未だ幼稚なる故にあらず、全く双方事情を異にするを以てなり。然るに將來斯の如き種類の美術を我國民に奬勵して、歐洲人と同樣なる感情を養成する必要あるか如何、これ一考すべき問題なり。既に論じたる如く若し社會發達の爲め必要なる感情ならば、之を國民の腦裏に養成せざるべからずと雖ども、之に反して不必要なるものならんには勉めて之を養成する必要なきは勿論なり。されば何を以てか我國民固有感情に適合せざる裸美人の

畵を樂む情を勉めて養成する要あらんや。將來我國民が此の種の美術を以て必ずしも美と感じ得るやう學ばざるべからざる理由は毛頭なきなり。斯の如き理なるを以て、我が國民の風俗に適合せざるものにして、社會の發達に必要ならざる以上は、之を我邦の美術界より排斥するも何の不可か之れあらん。若し美術は單に撰題、意匠等の上のみに限らずその技術の上よりも見ざるべからずとの理由を以て斯る醜畵を我が美術界に加へんとするものあらば、實に愚の至りと謂はざるを得ず。そは巧妙なる技術は決してこれのみに限らず、充分他の品題の上に施さるべければなり。故に社會發達の上に利益ある美感を益々養成する美術は之を奬勵して發達せしむべし。之れ決して國民の風俗と衝突すべきものにあらず。美術をして善良なる風俗と調和せしめざるべからざる所以蓋し此點にありと云ふべきなり。

雜報

佛敎大會

在京都 從黃生

全國佛敎大會なるものは竟に是れ一個の不成功なる示威運動に過ぎざるか各寺院をして百八の梵鐘を叩かしめ各戸をして六色佛光の靈旗を翻へさしめし事も大袈裟に智恩院の山門と同じほどの高さなる花塔を築き各宗の「所謂高僧」なるもの盛裝して之に臨みたる第一日の釋尊降誕會こそや丶俗眼を驚かすほどの價はありつれ第二日第三日の如き彼等大會の徒が大會の精神骨髓として重すべき大會議大演說會に至りては落莫たる光景之を前日の盛觀に比して百花爛熳たる初一日より俄に萬目蕭條たる秋天に入れるが如き感なきに非ざりき吾人は今更事新しげに件の大會が如何なる地位にありて如何なる信用を有せるもの丶手に企てられたるかを說くを要せざるべしはた吾人は彼等の討論演說に向つて些の批判をさへ加ふるを要せざるべし吾人は唯事實をありのまゝに語らん事實をありのまゝに語ること自身既に千嘲萬罵に代ふべきものあれば也

大會議は四月十日より京都市會議事堂に於て開かれき會するものとては僅に五六十名、平井金三氏擧げられて議長席に就き喋々愚論を鬪はして其第一日は唯第一號第二號議案なるものを辛く議了し得たるのみ第二日に於て大演說會を開き第三日に於て更に殘餘の議案と二三の建議案とを議して所謂其大會なるものは此に終を告げたり、今試に其議案なるものを列擧せんか

議會提出案

（第一號）

明治廿五年四月八日知恩院集會堂ニ開キタル第三回全國佛教大懇話會ニ於テ議決シタル(全國同盟佛教團)維持法案ヲ提出スル左ノ如シ

全國同盟佛教團維持法案　提出者　大會委員

第一條　同盟佛教團ハ會員組織トス

第二條　會員ヲ左ノ四種ニ別ツ

一名譽會員　一特別會員
一正會員　一準會員

第三條　名譽會員ハ貴族幷ニ各宗管長各宗本山住職及ヒ高僧內外名望家ヲ推撰ス

第四條　特別會員ハ本會ニ功勞アル者幷金貳拾五圓以上本會ニ寄贈シタル者トス

但全國佛教大會ニ於テ特別贊成員ニ推撰シタル者ニ限リ本條ノ特別會員ニ推撰スルヿヲ得

第五條　正會員ハ一ケ月金貳圓以上ヲ寄贈シタル者トス

第六條　準會員ハ一ケ月金六拾錢以上ヲ納付スル者又ハ一時金六圓以上ヲ寄贈シタルモノトス

第七條　本會々員ハ左ノ會員章ヲ贈ル

一赤綬章　名譽會員
一綠綬章　特別會員
一紫綬章　正會員
一黃綬章　準會員

第八條　本會ノ徽章ヲ佩用スル者ハ佛教上ニ係ル總テノ會合ニ參シ特ニ優待ヲ受ルノ榮アルヘシ

但本條ハ各宗本山及會合ノ主任者ニ協議シ實行スヘキモノトス

（第二號）

乞食僧侶取締案　提出者　南原義株

（第三號）

佛教家年回葬事ニ酒肉禁止各宗本山ヘ建議案
提出者　南原義株
贊成者　段証依秀
仝　松本光道

（第四號）

佛教日刊新聞發行ノ事　提出者　菅龍貫

（第五號）

僧侶如法履行ノ事　提出者　段証依秀
贊成者　伊佐喜七

（第六號）

各宗僧侶平常戴帽一定各宗本山ヘ建議案　提出者　南原義株
贊成者　松本光道

（第七號）

佛教學院設立案　提出者　立花司

（第八號）

佛教議會法案
表德規則　提出者　加藤誠俊
贊成者　廣瀨貞次郎
仝　田島教惠

（第九號）

假面的佛教者取締法案　提出者　西座新右衛門
贊成者　段証依秀

（第十號）

佛教德育女學校設立　提出者　吉森梅
清水トミ
西川ミサヲ

右議案ニ對シテハ各提出者ヨリ詳細ノ說明ヲ致スヘキニ付之ヲ省略ス

其議案の茫漠として捕へ所なき大約右の如し第三號議案を除いてはほとんど皆な無用の議案なり自ら乞食僧

侶の如き假面的佛教者にして如何で他を取締ることを得べけん日刊新聞の如き學院設立の如き之を此に議決して如何ほどの効果を生し得べきか、末輩の徒相集りて喋々之を議すといふとも議は議のみ、其議をして眞に天下に行はれしめんとせば自ら他に人物を要す、此人物の乏しき所以是れ佛教徒の墮落して起つ能はざる所以に非すや人あらば議決なしと雖も可、苟も人なくんば百萬圓顱の一致決議ありとするも竟に何をか能くせん彼等は這般の事理をだに解する能はず

大會未だ開かれざる時西京多數の青年佛教徒は多く同情を寄せざりき然れども吾人は尙一縷の望を之に繫ぎき今にして之を思へば彼等が同情を寄せざりしことの先見に服せざるを得ず、佛教徒の事業は其初の華麗にして其終の落莫たるを常とす全國佛教大會なるものも亦同一の運命を免るゝ能はざりし也

宇宙神教第一總會

四月十六日より十九日まで東京麴町區飯田町の中央會堂に於て開會したり、其出席議員は、ケート、レヴヰツト、吉村秀藏、星野久成、山田源次郎(以上教師)安部保次郎、赤司繁太郎、長野直一郎、城貫一、(以上傳道者)成瀨靜一、遠藤武藏(以上信徒總代)の十一氏にして役員及諸委員の撰擧を行ひケート氏總會長に、星野久成氏總會書記に當撰したり、其議決の重要なるものは九州地方に一傳道地を新開すると、次年度より諸連合區に賦課金をなすと、婦人傳道者の養成法を調査すると等なり、

又全國を當分の中三大區に大別し、星野久成氏東京聯合區會長に吉村秀藏氏大阪聯合區會長に當撰し、仙台聯合區は總會長直轄する事となせり、次年度に於る諸教役者の配置左の如し

（東　京）星野久成氏、安部保次郎氏、楠勝彦氏　｝東京聯合區
（靜　岡）山田源次郎氏、藤戸太三氏
（大　阪）吉村秀藏氏、佐藤潔氏
（名古屋）赤司繁太　氏　｝大阪聯合區
（九　州）城貫一氏
（仙　臺）長野直一郎氏　｝仙臺區

因に云ふ宇宙神教々會は從來米國ユニヴアーサリストミツシヨンの派出所の如き、有樣なりしが、今回憲法を規定し始めて日本宇宙神教々會なる獨立團體を組織し主權は總會の掌握する所となれり、但し經濟上は尙ほ未だ全く米國ミツシヨンの補助を免る能はずと雖も既に主權を掌握せし以上は進んで自給を計るを將來の方針と爲すと也

（基督教新聞轉載）

第十回組合教會の年會

組合教會大會は本月七八の兩日大阪に於て開かる、その議案左の如し、

第十回組合教會總會幷傳道會社年會議案

第一　組合教會規約の修正案

（第六條以下十條を加へ現在の六條を十一條とす）

第六條　本局　組合教會本局を京都に置く

第七條　本局事務　本局にて左の事務を所理せしむ

一、傳道會社に關する一切の事務

二、組合諸教會統計報告の調製幷出版

三、安息日學校科程、祈禱會其他教會全體に關する出版物

四、牧師傳道師雇聘の相談幷紹介

五、傳道教會其他補助を受くる教會の補助

六、會堂新築に關する事件

七、神學生養成費

第八條　役員　常議員八名巡回傳道師幹事會計各一名とす

第九條　撰擧　常議員は每年總會にて撰擧し巡回傳道師幹事會計は常議員にて撰定する者とす

第十條　寄付金　傳道會社への寄付金は勿論其他の寄付金は各自の指定に從ひ之を使用する事を務むべし

第十一條　修正　此規約は總會出席員三分の二以上の同意を經るに非れば改むる事を得ず

第二　傳道會社組織變更の件

（全體に關する改正案）

一　日本基督傳道會社はアメリカンボールド從來の指定寄付金を謝絕する事

但し篤志寄付金は内外人及何會社を問はず申受る事

一　アメリカンボールドの從來の盡力に對しては篤く謝意を表し且つ宣教師諸氏に向ひ教會及び傳道事業の既に發達したる地方を引上げて他の必用多き地に働かるゝやう勸告すると

一　アメリカンボールドの指定寄付金を謝絕したる上は吾儕教役者たる者は勿論信徒に於ても十分の克己義捐を爲して從來の事業を萎縮せしめざる樣務むる事（規則草案は畧す）

福音同盟會

大日本福音同盟會第八回は本月七日より九日迄京都市議事堂に於て開かる。其規則の摘要左の如し。

同盟會規則の摘要

第一條　主義及び目的

本會は普通に福音主義と稱する諸教會相互の懇親を深くし共同の事業を企て基督教の精神を世間に發表するを目的とす

第二條　組織

本會は一教會三人以下の代員及び内外教師傳道師を以て組織す

但し本文の資格に拘らず本會の議決を以て特に議員たらしむるを得

第五條　會合

本會の會合は事務、報告、論文、朗讀、役員選擧、議事、懇談、演說、說教、聖晩餐式を執行す

岡山孤兒院

明治二十二年一月毫厘の資産を有せず、一書生の空拳を以て只一片の至誠其生命となり財産となり、僅かに三人の孤兒を育てしを起源とし、今日にては殆んど三百の孤兒を養ひ、七年の間に我國第一の孤兒院となれるものを岡山孤兒院となす、現今同院は其事業を活版、理髮、農業、機業、鍛冶、大工の諸部に分ちて實業に

就かしめ、且つ敎育を施し優等のものをして他の學校に入學せしむ今や全院は八棟の建築物を有し、農業部の如きは岡山、日向の二ヶ所に分置し、日向の農業部は六十町歩の田地を有し、五十四名の孤兒の生長せるもの其耕作に從事すと云へり、此の如く事業を大成したるの人を石井十次氏と名く。氏が今日迄如何に辛苦し如何に忍耐して其事業に盡したるかは載せて全院より出版せる岡山孤兒院なる一冊子に在り、一讀人をして覺えず涙あらしむ、天下薄志弱行の宗敎家特に佛敎徒は是非一讀せざる可らず、これ基督敎徒の事業なりとして漫過する勿れ、今櫻井生なる人の同院を訪へる記錄中より同院孤兒の狀態を抄す、

孤兒の狀態

行て孤兒院を見れは、夥多の男女孤兒は、彼處此處に散在して、或は職業に餘念なきあり、或は隨意氣儘に群集嬉遊せるあり。彼等は皆石井氏を父とよび氏もまた彼等を以て、實子と分つとなし。予氏の案内につれて、院内を巡觀するに、曾ては乳なく、食なく、凍餓に苦しみ、骨と皮とに瘦せ衰へたらんも、今は慈悲深き人を父として、凍餓の虞もなく、身躰も肥滿し、赤らなる豐頰に健康無病を證せる孤兒等の親睦和合して、睦々の狀ある、其いぢらしさ、言葉にも筆にも及び難く、仁心義膓の士女をして、之を見せしめなば、慈悲の涙の一滴を制すると能はざらんと共に、之を養育する石井氏の實に末頼母しさをば羨まん。氏は自から此大幸福を喜ぶと甚し。予の目擊したるものゝ中に、七八歲と思しき數名の孤兒の入浴せるありき。彼等の三四は睦し氣に混浴して諧樂談笑しつゝあり、一人は槽外に在りて、火を燃し居たりき。かゝる諧和の狀、蓋し他に見る能はざる處ならんか云々

而して此等の孤兒は或は震災に或は洪水に其家父母を失ひ、我は疫にかゝりて途中に死せる巡禮の子あり、或は貧苦に迫られて父母に捨てられ其父母鄕貫を知らざるものあり、晝間は嬉戲何事も知らざるも夜中時に其父母を夢みて母よ〳〵と連呼し、轉た人をして斷腸の思に堪へざらしむるものありと云へり（反省雜誌第十年第四號）

澎湖島の基督敎會

毎日新聞特派員花田節氏が四月十四日澎湖島馬公城より同社へ通信せるものに曰く、

基督敎の傳道に熱心なるは、他の宗敎の遠く及ばざ

る所、彼亦た此島に教會を設く、中尉岡田哲藏氏は基督教信者なり、戰爭終るや中尉一日一老爺に逢ふて筆談を始め、澎湖教會の東門外に在るを知り、嚮道となして教會に至る、宣教師は英國人ダンカン、フエルゲツソンと云ひ、日本軍の澎湖島來襲を聞きて臺灣に逃れたりと、老爺は潘吾陳と呼び、本年五十七歲信者の一人、能く握手の禮を知り、中尉其勞に酬んが爲め銀貨を與ふ、流石は宗教信者、老爺辭して受けず、中尉は氣の毒に思ひ「我謝汝好意」と書せば、漸くにして之を受く、之れ亦た基督教の感化力か、殊に宣教師は文明の輸入を勉むるもの丶如く、教會内には宗教に關する書籍の外、更に萬國通鑑、自西徂東、富國策、談天等の書及び支那語に譯したる說教の草稿、其他詩篇、日曜學校のカード、猶太地圖、加南地圖等あり、「自西徂東」は諸種の雜事を記したるもの、「談天」は天文等に關するものなり、

印度事情

嘗て自ら印度を跋涉せられたる文學士堀俊氏は過般東邦協會に於て「印度事情」と題して自ら觀察し來れる所を講演せられたり。その中より特に本紙に關係あるもの數件を茲に掲げん。

◎風俗　國風尤も神を尊び嚴格なる儀式を以て之れを祭る人民の名稱はバリヤと唱え固く舊習を守りて神を敬す英政府の嚴法と雖ども又之を如何ともする能はざるなり而して性懶惰一日勞働して生活の資を得れば其の盡くる迄決して働作することなく平生裸躰にして唯褌二枚を有するのみ其の一枚は常に頭上に載せて酷熱を防ぐ其身長五尺より六尺に及び力概ね二人を兼ね髯は毿々兩方に分れ其端を縄の如く編みて耳に狹めり彼の釋迦佛の額上に黑子を戴きある如き彼れは暑を凌ぐ爲めに牛糞を燒きて付けたるものにて土人皆之に倣へり

◎貴族と平民　貴族と平民との懸隔甚だしきもの印度の如きはあらざるべし貴族は甚だ平民を賤みて若し途中に於て摺違ふ時若し其衣服の相觸る丶あれば汚れたりとて直ちに之を捨て去り又手を觸るれば甚しきは其の手を截斷するものあるに至る英政府印度を占領せしより二百年法を出して嚴に之を禁ずるも猶能く行はれざるなり嘗て貴族罪を犯して禁錮せられしに當り平民をして食を運ばしめしに遂に食はずして死せしものありしかば流石に英政府も遂に其法を廢止せりとまた以て其相懸隔するの甚しきを見るに足る

◎宗教　ブラマ教佛教カルリヤ教基督教回々教等あり貴族は總て白牛の尾に取追りて死すれば極樂往生を爲すものなりと妄信し從て牛を尊び馬を賤むの風を生じ牛を畜ふものを指して富家となすに至る佛壇は常に牛糞を水に混じ之を拭ひ去るが故に黒々したる光澤を掬すべきも近けば悪臭紛々鼻を掩はしむ

◎婚姻　熱帶地方は身躰の發育速かなるを以て概十三歳頃より結婚し女子は我邦の如くヲシロイなるものを塗けずして風俗黒きを尊ぶが故に所謂ヲクロイとて黒き光澤なるものを塗り付け而して袈裟の如きを斜に交叉して乳頭を掩ひ腰部にはジヨナなるものを纏ふて部下を掩ふ其行くや銅羅鐘を叩きて之を送り婿家に留まる一週間にして里歸りをするなり

◎葬禮　其死するや裸躰のまゝ臺に載せて墓地に行き送葬者中第一に親きもの唱名して一同燒香し銅羅喇叭を合奏して之を吊ふ

占領地の宗教

國民新聞通信員伊東連之助氏の蓋平城より同社へ通信したるもの中に曰く、

◎宗教は儒佛混合にして教理卑下なり丹青金壁たる石造の堂宇三個を並べ建て中央阿彌陀如來の像を安置し兩側の堂宇孔子關羽五帝三王の像を祭る國人尤も關羽を尊崇す戶々孔子を祭る

支那人の宗教心

左の一節は五十嵐光龍氏が通信中より拔摘して四月十四日中央新聞紙上に掲げられたるものなり。茲に又之を轉載す。

清國人は何宗教を信ずると云ふ一定の觀念なく只自身の福利を祈るより外の念慮更になし故に佛教を信ずると思へば忽ち道教を信じ忽ち喇嘛教を信じ又回々教等種々の宗教を混合して己れに都合よきものを信ずるものゝ如し蓋し現今行はるゝ宗教は佛教、喇嘛、回々、道教等にして佛教は重もに禪宗を多しとす

僧侶は一般無學にして筆談を爲し得るもの至て少なく衣食の爲に僧侶となりしもの多し僧侶に二種あり一は辮髮を垂れ一見土人と異らず一名之を道師と云ふ此等は唯寺院を守ると云ふに外ならず一は剃髮せり受戒の僧と然らざるものとの二種あり受戒の僧は圓頂に灸六個あり以て戒僧と然らざる者との別を爲す戒僧は稀に見る所にして多くは不受戒の僧而巳土人葬祭の際財産あるものは二三の僧を招きて讀經するも財なきものは之を招かず兩親とか妻子とかの死する時は死屍の側にて少くも三日以上は慟哭するを例とし隣人又慟哭の爲

に來たる兩親若くは妻子を失ひたる時は必ず喪服を着す一般の土人一度妻を失へば再び娶るを得ずと云ふ余山東省龍睡灣小西庄の土人の家に泊せし時其主人は周仁倫と云ひ曾て妻を失ひ孤獨の身なり余等筆談せしに少く文字を知るを以て妻を失ひて再び娶るを得ざること幷に其際一周間程哭泣し今尙新年の始めには墓地に至り哭泣せりと物語れり正月元日は必ず寺院にて稽首九拜し又祖先の墓に至り白紙を備へて歸へる其何の理たるを知らざれども歲首に福を招くの祈念と爲すもゝの如し

下間鳳城師の殉死

西本願寺從軍布敎使として南征軍に從ひ陣中央の惡疫の流行するや日々病歿者の葬に會し靈魂を弔ひ閑あれば病院に入りて患者を看護する等に盡瘁せしに遂に其身病毒に侵され馬公城の病室に寂したり師は年齡かに三十三にして前途有望の人なりし趣なるに惜むべし聞く東西本願寺の從軍布敎使は其數十人以上あるも其職に斃れしは師を始とす

戰地に聖書を送る

横濱居留地二十六番聖書館は戰地に聖書を寄贈するとの許可を受け既に二十五萬卷を寄贈したりと

社説

日本ユニテリアン協會の目的と論じて世人の誤解を正す

確實なる知識を得んとするに當りて、自ら經驗を積み獨立に思考するは最も重要なることに相違なしと雖ども、己れ一個の力のみにては未だ以て完全なるものと謂ふべからず。須らく、己れと異りたる境遇の下に立ち、反對の觀察、思考をなしたる人々の意見をも顧ることを要す。そは何人にても、その思想が多少自己の境遇に制限せらるゝは免るべからざる所なるを以て、自ら確實普遍の知識と認むるものも一種の偏見たらざるを保すべからざればなり。若し夫れ己れ一個の判斷のみを頼みて、毫も他人の意見を容れず却て之を排斥する如き徒に至りては、到底、確實普遍なる知識を得る能はざるべし。一社會或は一時代に於ても亦斯の如し。各々事情の異なれる社會に於て、許多の星霜を經て發達したる異種の思想を總合して、その中より始めて普遍確實なる知識を發見することを得べきなり。教權の强盛なる時代にありては、各人若くは各派が己れと反對なる意見に對して異端、邪説、外道など云ふ如き悪感情を起すものなりと雖ども、今日の如き研究的精神の活々たる時代に於ては決して斯の如きことあるべからず。若し己れの未だ思ひつかざる如き異種の説を聞くことあらんか、忽ち之を異端、邪説などとして排斥せざるのみか、却て己れが研究の好材料として歡迎すべきなり。是れ各人が到底己れ一個の境遇に於て得べからざる性質のものにして、社會が附與する特種の賜とこそ云ふべけれ。苟も今日知識の進歩を計らんとするものならんには、反對の意見、異種の學説を度外視して豈可ならんや。

故に吾人は日本ユニテリアンとして固より獨立の意見

を有するものなりと雖ども、己れの意見のみを以て獨一無二萬世不易なる眞理と確信し、一切他の意見、批評、勸告等を排斥して顧みざる如き固陋の徒にあらず、汎く世人の思想に注意して漸次自己の不完全を補はんことを勉むるものなり。吾人が日本ユニテリアン協會と稱する一團体を組織し、將來大にこれが發達を計らんとするに當り、世の論者が誠實なる心情より種々の批評、勸告などを與へらるゝは、吾人の頗る滿足する所たり。然れど世の論者が是まで屢々吾人に與へられたる批評は多くは未だ日本ユニテリアン協會の目的とする所を正當に了解せずして出でたるものに似たり。故に其評論を熟讀するに（悪文字を排列したる不誠實なるものは除き）議論精巧にして感服すべき點少からずと雖ども、要するに多くは吾人が意のある所に觸れずして、各々自己流の見解を附し、自ら想像上に日本ユニテリアン協會の主義、目的等を描きて、之を批評せるものに過ぎざれば、折角の批評、勸告等も左程の利益を與へざりき。思ふに、日本ユニテリアン協會の目的は一見する所既に何人にも明らかなるが如くにして、其實未だユニテリアン自身が定むる通りに、世人に解せられざるもの丶如し。是れその性質が諸他の宗敎的團躰と全く相異するに由るものなるか。若し夫れ世の論者にして、他の宗敎的團躰と大にその性質を異にする日本ユニテリアン協會の目的を世間普通の宗敎と同一の論法を以て臆測し、之に隨意なる批評を試むることをなさば、單に思想界の騷擾を増すのみにして、蓋し双方の間に實際上の利益なかるべしと信ず。故に吾人の切望する所は世の論者が日本ユニテリアン協會の目的の存する所を正當に了解することゝ、日本ユニテリアン協會を評論することゝを判然區別し、先づ虛心以て其目的の存する所を充分明かにせられんこと是なり。日本ユニテリアン協會が世人の所謂宗敎たる資格を具ふるか、具へざるかは暫く措き、斯々の目的を以て社會に運動せんとする團躰なりとのことを充分明らかにするは論者に取りて第一に必要なる次第ならずや。若し夫れ吾人が一切の運動を統一する目的にして

未だ世人に明かならずとせんか、平素經營する所恐らくは徒勞に屬するならん。是を以て數年以來ユニテリアン主義に關し吾人が屢々論じたる所を或は茲に反復するなきを保せずと雖ども、上述の如き次第なるを以て敢て日本ユニテリアン協會の目的を論じ世人の誤解を正さんと企つる所以なり。

第一　日本ユニテリアン協會の目的は
諸宗敎の研究にあるか

吾人は佛典、バイブル等の如き經典が一種特別なる權威を有することを認めず、又釋迦、孔子、基督等の如き古代の聖賢が特別の意味に於て神聖なりしこと、叡智なりしことを信ぜず。故に如何なる聖賢の立てたる道と雖ども、單に聖賢の道たる故を以て尊ぶものにあらず、之を自由に研究してその價値ある所を發見するに至て始めて之を尊ぶものなり。又古來如何に厚く世人の信仰せし敎義と雖ども、之を天啓の敎義なりとして、吾人の不完全なる知識もて是非を論ずべからずとするにあらず、自由に之を討究することに躊躇せざるものなり。吾人は斯の如く敎義の眞否を判ずるに當り決して理性の外に權威を認めず、各自の知力を以て自由に討究して、その中より眞正にして價値ありと自認する所のものを撰擇せんとするものたるや明かなり。

夫れ一般の宗敎にありては各々所依の敎典の確定せるありて、其敎義畫一し、何人と雖ども之を動かすべからざるにより、宗敎問題に關する討究全く自由なりと云ふべからず。たとひ或點までは自由なりとするも、一定の限界を越ゆれば理非を問はずして諸納せざるべからざる敎義あるなり。故に宗敎上の問題を研究すると云ふも、其實、敎義の解釋、布衍に止まるか、然らざれば敎義を辨護する方法を得るに過ぎず。然るにユニテリアン協會にありては一として獨斷的敎義あることなく、無制限に自由討究てふことを主張するを以て、此一點は特に世人の注意を引くに至れり。是を以てユニテリアン協會は格段なる自己の本領とてはなく、諸宗敎を自由に研究するを以て唯一の目的となすものなりと想像する人少からず。斯る想像を懷く人の見解に

よれば、日本ユニテリアン協會は宗教研究者の團躰たるに過ぎざるものと云ふべし。今斯の如き想像を以て吾人を批評せんとする一二の實例を擧げて之れを論ぜん。

本年三月發刊の反省雑誌(第十年第三號)に於て、長風生と號する人「ゆにてりあんを排す」と題して盛にユニテリアンを批評せられたることあり。その議論の理非は措て茲に論ぜず、今吾人が説明の實例として必要なる一部分を引用せんに、氏はマツコレー氏の言によりてユニテリアンを諸宗教研究の手段なりと解して大に攻撃を試みたるものゝ如し。然るに氏は全くユニテリアニズムとユニテリアンとの間に差別を立てず、又マツコレー氏の意のある所を充分了解せざるより、斯の如き議論をなすに至れるなり。マツコレー氏の言とは、本年二月氏が中西牛郎氏の質疑に答へたる書中に「ユニテリアニズムは或る確立したる教義(ドグマ)に非ずして之を研究する手段(メソッド)なり」と云へるものにして、其意ユニテリアニズムと云ふ主義はミンヂズムとかプレズビチーリアニズムとか云ふものゝ如く、或る確定したる教義の集合を指すものにあらずして、如何にして教義を研究するかとの方式(メソッド)のみを一定するものなりと云ふにあり。即ち、屢々吾人が云ふ如く自由討究とか、口碑によらずとか、理性の判斷に任すとか云ふ如き研究の方式を定むることを指すものにして、マツコレー氏が本年二月に至て始めて世に發表したるものにあらず、ユニテリアニズムが吾邦に來りし以來絶えず唱ふる所の、また實行しつゝある所の事柄に外ならず。然り而してユニテリアニズムてふ名辭を以て一括せられたる方式(メソッド)によりて得たる信念を有する人之をユニテリアンと稱するなり。而して其信念に至りては如何に相異する所あるも決して之に關渉することなし。これ即ち、ユニテリアニズムの教義にあらずして、方式たる所以ならずや。斯の如き徒互に集合して道徳的團躰を組織すこれユニテリアン協會たるなり。能く此關係を明かにするときは、ユニテリアン若くはユニテリアン協會を以て單に諸宗教研究の一運動たるに過ぎざる如き誤

解を免ることを得べし。

又之と少しく趣を異にすれども、吾人が說明の一例として擧げざるべからざるは、「宇宙神敎」記者が先月發刊の「宇宙神敎」(第四卷第九號)に於て「彼我異同の辨」と題し、同じくマッコレー氏の書に基き、日本ユニテリアン主義と宇宙神敎との相異を辨じたるもの丶一部なり。記者はマッコレー氏が中西氏に答へたる三主義を掲げて曰く、「以上の三主義によりて視るもユニテリアニズムは宗敎と言はんより宗敎研究の一方法と言ふべきものたるや明白たり」と。實に然り。氏が書中の三主義は單に研究の方法を示すものに止まらざるが如しと雖ども、此點は暫く論ぜず、兎に角ユニテリアニズムが敎義にあらずして、宗敎研究の方法たるや記者の言ふ所の如し。果して然りとすれば、宗敎研究の方法たるユニテリアニズムと、此方式によりて得たる結果即ち合理的信念を基礎として社會に運動せんとする團躰、即ち日本ユニテリアン協會とは自ら別物たるや明かなり。然るに記者は一方に於てユニテリアニズムは宗敎研究の一方法なりと云ひながら、忽ち他方に於て「ユ敎の三主義は神人の關係に言及せず」と云へるは正しく方法とそれによりて得べき信念とを混同せるものにあらずして何ぞや。吾人未だ嘗て論理の方式中に事實上の知識を含まずとて責むるものあるを聞かざるなり。夫れ神人の關係を云ふは敎義なり、方式にあらず。さらば敎義(ドグマ)にあらず方式(メソッド)たるユニテリアニズムの基本的主義に於て神人間の敎義を定言せざるは蓋し當然のことにあらずや。又同記者は論じて曰く

前略敎義的論戰過ぎ去り紛擾の雲霧消え失せさるの曉、人類はユ敎の三主義が宗敎の合理的基礎たるを悟了せんと期せるに似たり、然るに宗敎若くは信仰の系統にして諸他の宗敎の經過したる後に在つて遺存すべきものは固より宗敎の要素を包含するものたらざるべからず、即ち唯た冷腦に合するに止らずして人類衷情の需要に應ずるものたらざるべからず、而して吾人は未だユ敎の三主義を以て宗敎の要素を含蓄せるものとは見做すを得ず、否宗敎の第一義を道破し得たるものとも見做すを得ず、固より夫三主義は三主義としての價値を有するならんも活動すべき宗敎的眞理たるは尚は未だし云々

之によりて之をみれば「宇宙神敎」記者が根本的思想に於てユニテリアン主義を誤解し、吾人が宗敎研究に關して採る所の方式と宗敎的團躰として社會に立つ所の

主義とを混同して論じたるものなるや明白なり。又同記者はマッコレー氏が書中の三主義中初めの二主義をのみ見て第三の主義に深く意を注がざるものゝ如し。然るに第三の主義に至りては決して宗教研究の方法と見るべきものにあらず、慥かに運動の目的を示すものたるや明かなり。されば此らの三主義を以てユニテリアニズムは宗教研究の一方法に過ぎずと斷定するは實に大躁輕にあらずして何ぞや。記者が「吾人はユ教の意義に關してユ教徒と論爭を試みんと願ふ者にあらず」と云へるが如く吾人も亦同記者と論爭を願ふものにあらずたゞ吾人の主義を誤解せられざらんことを願ふにあるのみ。

吾人は佛教に偏せず、基督教に賴らず、如何なる教權の下にも立つことなくして、獨立自由に諸宗教を研究し、理性に訴へて取捨の撰擇をなし得る權利あるものなることを表白せんが爲めに研究の方式を畧ぼ定むるなり。これ吾人はオルソドクスの徒の如く教權の爲めに思想の自由を奪はれざることを示す爲めに立てたる主義にして、決して目的にあらざるなり。自由に諸種の宗教を研究し、その中より價値ある觀念を撰擇して、吾人が精神的生活の發達を計らんとするものなり。ユニテリアンは悉く宗教專攻の學者の如く、單に諸宗教を研究して自然の法則を發見せんことを以て目的となすにあらず、合理的の信念を得んが爲の一手段として之を研究するに過ぎず。「自由討究は諸宗教よりせば手段となり、ユニテリアン自身よりせば目的なり」などと云へるは吾人を誣るの甚しきものと謂はざるべからず。要するに日本ユニテリアン協會が力を極めて自由討究てふ主義を主張する所以は、一方に於ては教權を排斥し、他方に於ては人をして合理的信念を得せしめんとするより出づるものにして、決して宗教の研究のみを以て最終の目的となすにあらざるなり。

第二　日本ユニテリアン協會の目的は舊教義を廢して新教義を立るにあるか

佛教にても基督教にても凡て教會と稱する團體には必ず確定不可動の教義ありて、之を保持し、之を擴張せ

んことを勉むるものなり。即ち、教會がなす所の諸種の運動は他の教義を排して己れの教義を擴張するを以最終の目的となす。例へは、學校を立てゝ少年を教育すると云ふも己れの教義を吹き込まんか爲めなり、學理を研究すると云ふも己れの教義を辨護せんか爲めなり。斯の如く諸教會の目的とする所畢竟己れが教義の保護、擴張に在を以て、日本ユニテリアン協會も亦基督教、佛教等の教義を排斥して、自己特有の新教義を立つるを以て目的となすものゝ如く想像せる人蓋し少からず。固よりユニテリアン協會は舊來世に行はれたる教義と稱するものを極めて排斥するものなり。そは古來宗教上の教義が多少人類の發達を助けたることは拒むべからざる事實なりと雖ども、我邦今日の狀態に在ては、之れ反て人智の進步、道德の改良を妨べき有害物たるに過ぎざるを以てなり。夫れ釋迦の教義とか、孔子の教義とか、基督の教義とか云ふ如きものが思想の自由を束縛し、道德の改革を妨げて社會の發達を遲々たらしむることは吾人の日常目擊する事實ならずや。是を以て日本ユニテリアン協會は一切教義と云ふ如き衆人の思想を强ひて束縛せんとするものを我邦の思想界より排斥せんことを勉むるものなり。然りと雖ども吾人が他の教義を排斥するは、更に自己特有の教義を立てんとするものなりと云ふに至りては實に誤解の甚だしきものと謂はざるべからず。吾が協會は凡て教義と稱する性質のものを有せず、また將來之を得んことを願ふものに非ず。果して己れに一定の教義なしとせんか、無きものを擴張することなきは言はずして明かなり。要するに、吾人は社會の進步を妨ぐる有害物たる故を以て、教義を排斥するものにして、毫も之を亡ぼして更に自己特有の教義を立てんとする如き志あるものにあらさるなり。

抑も我が協會が一般の宗教的團體の如く、一定したる教義を有せざることは夙に表白せし所にして、近來米國ユニテリアン協會の代表者たるクレイ、マッコレー氏は「ユニテリアニズムは教義にあらずして教義を硏究する方式なり」とまで極論せしにも拘はらず、尙ほ

未だ吾人を誤解して、何か敎義を有するものゝ如く又有せざるべからざるものゝ如く、想像する人の少からざるは何ぞや。これ種々の事情によることならんと雖とも、思ふに、ユニテリアン敎と稱する名稱は大に與て力あるものなるべし。英語のユニテリアニズムは決して敎義をのみ表す語にあらずと雖ども、邦語を以て何々敎と云ふときは一般に佛敎とか、儒敎とか、基督敎とか云ふ如き一種の敎義を指すものと思はざるを得ず。故に世人はユニテリアン敎と聞けば必ず一種の敎義を含むべき筈なりと思ふは當然なりと雖ども、其實然るにあらずしてユニテリアン敎と云ふ一種の敎あるにあらず、ユニテリアン主義と云ふに過ぎざるなり。而して此ユニテリアニズムと稱する主義は如何なる主義なりやと問ふに、世人の既に知る三大主義に外ならず。吾人は此三大主義に基きて一種の團躰を組織し、一定の目的に向て社會に働かんとするものなり。世に往々普通の信念と敎義とを混同するものあり。この二者、一見、相似たるが如しと雖ども、其實質に至りては全く相異するものなり。例へば、ユニテリアンにして法華經を以て宗敎書中最も貴ぶべき經典と信ずるもの多數ならんか、一の普通信念定まるべし。これ外見上、日蓮宗の信徒が法華經を獨一無二の經典と崇むるに異ならずと雖ども、其根本的思想に於ては彼れと此れと大に相違するものあり。即ち、一は自由の判斷によりて之を貴び、他は敎權の勢力によりて之を崇む。一は自由なり、他は束縛なり。前者は理性の指導によるものなれば、若し道理上法華經よりバイブルの優等なるを發見するものあらば忽ち此を捨て、彼に就くも自由にして、依然ユニテリアンたるを得べしと雖ども、後者にありては然らず、法華經は所依敎典として定まれるものなれば理非を問はず何人も信從すべきものたり、若し之をバイブルに劣るとするものあらんか忽ち日蓮宗の敎敵たらざるを得ず。斯の如く兩者の性質極めて相異するものにして、敎義と云ふ以上は敎會が一般の會員に信從せしむべき權利を有するものなれども、普通の信念に於ては則ち然らず會員多數の考

へやうが一致したりと云ふに過ぎざるを以て、決して一般に斯く信せざるべらずと強ふべき性質のものに非ざるなり。吾人は米國ユニテリアン協會に於ける普通の信念と我邦に今後發達すべきユニテリアン協會普通の信念と大に相違する所なかるべからずと信ず。然るに往々ユニテリアン協會に向て己れの敎義を明かにせよ、其信仰を畫一すべしなど云ふ如き要求なきにあらず。これ全く吾人の本旨を了解せざるより起る所の要求なり。要するに、吾人はユニテリアン敎と云ふ一種の敎義を有するにもあらず、又將來之を立てんとするにもあらざることをよく理會するに至らば此種の要求忽ち消失せんのみ。

第三　日本ユニテリアン協會眞個の目的

以上論じたる如く日本ユニテリアン協會の目的とする所は、單に、諸宗敎の研究に止まるにあらず、又他敎の敎義を排斥して更に自己の敎義を立てんとするにもあらずとせば、何を以て目的となすものなるか。請ふ吾人をして少しく之を論ぜしめよ。

人類を發達せしむるに最も重要なる事情となるべきものは敎育なり。夫れ敎育は現世紀の理想を次世紀の社會に實現し、又次世紀の理想を其次の世紀に於て實現し、以て現世紀は前世紀より一段高く、次世紀は現世紀より尙ほ一段高からしめ、人類をして無限に發達せしめんとするものなり。然りと雖ども若し之を學校敎育の如き短少なる時限内に限りおかんか、蓋しその効果甚だ少かるべし。そは種々の事情の爲め充分なる學校敎育を受け得る人は比較的に少く、又たとひ正當に學校敎育を終りたる人と雖ども、夫れのみにて以後全く修養をなさゞるものは充分なる發達をなす能はずして生涯を終らざるを得ず。是を以て學校敎育の外に社會敎育とも稱すべき一種の敎育ありて絕えず學校敎育を補ひ、人類の發達を助けざるべからず。斯の如き方法を以て、社會一般の思想、感情を開導し、迷信誤想を正して確正なる觀念を得せしめ、邪惡なる感情を消滅して善良なる感情を得せしめ、以て社會の生活を漸々高尙ならしむることをなさば、人類の發達を助く

ることと著大なるや蓋し疑ふべからず。この方法たるや、偏辟なる一種の教義によるべからず、須く社會の發達を以て目的となし、確實なる學理を基礎として之を開導するものたるべし。夫れ從前の教育にありては兒童の脳中に論語とか孟子とか云ふ如き種類の教訓を注入するを以て主眼となしたるものなれども、斯る教育の不正なるは既に明かなることゝなれるを以て、今日の學校教育にありては兒童の發達てふことを最終の目的となし、これに適當なる材料を與て自然の活働を補ふに過ぎざるなり。社會教育に於ても亦之と同樣にして、若し人類自然の發達を遂げしめんとするに、教義を注入して思想の自由を束縛せばその素志を遂ぐる能はざるのみならず、反て自然の發達を害するものなり。故に社會教育の法則たるや個人教育の學理と毫も異なる所なく、常に人類發達の階級に從ひて、適當なる材料を供給し、以て自然の活動を補ふに止めざるべからず。

日本ユニテリアン協會の目的とする所は日本國民の教育者となりて之を發達せしめんとするにあり。我國民を理想、即ち圓滿なる社會に導かんとするにあり。如何なる方法によりて之を導かんとするか、請ふ少しく之を論せしめよ。

今日の教育に於て最も緊要なる三個の概念は（一）目的即ち如何なる人を作るべきかとの理想、（二）教育に必要なる學理、（三）開發的方法等なり。日本ユニテリアン協會が我國民の發達を助けんとするに當り、また此三概念に基ものと云ふべし。（第一）國民を如何なる所に導かんとするか、曰く、至善の世界なり。是即ち、最も善しと想像する理想上の社會を指すものにして、之を極樂と云ふも、天國と云ふも、神の國と云ふも其名稱は何れにしても可なり。然るに、至善の世界とは如何なる性質の社會なるか、これ極めて困難なる問題なり。恰かもヘルバルト派の教育學者が德てふことを以て教育の目的となせども、たゞ形式的のものに止まりてその内容を明かにする能はざるが如し。若し至善の世界の性質にして明かならずとせば、吾人が社會を

導かんとする目的は至て曖昧なるが如しと雖ども、これ獨り吾人の上にのみ存するにあらずして、倫理學者一般の上に存する困難なり。この種の問題は吾人の獨斷を以て定むべきものにあらずして、汎く國民の精神を研究してその中より發見すべきものなれば、將來我國民の上に心理的、倫理的等の方面より研究を進むるに從ひて漸次明かになるべしと信ず。されば今日の所を以てすれば、教育ある多數の人々が共に至善と感ずる如き社會を以て吾人の理想と假定しおかざるべからず。蓋し斯く假定するより外に途なければなり。實際の運動上に於ては此假定的目的を以てせば左程差支なかるべしと思はる。即ち、日本ユニテリアン協會は至善の社會を目的として國民の發達を計るものなり。ユニテリアニズムの基本的主義と稱する三則中の第三に掲ぐる目的は則ち之を表はすものとす。之を以て視るもユニテリアニズムが單に宗教研究の方法たるのみに止らざるや明かなり。斯の如く至善界を目的として個人を感化し、社會を改革する之を德化主義と稱す。これ吾人が嘗て本誌第四十一號に於て大に主張せる所なり。

(第二)、以上論じたる如き目的に向て人類の發達を計らんとするに當り、常に欠くべからざるものは確實なる知識なり。吾人若し萬有の變化する天則を知らざらんか、毫も進歩すること能はざるべし。吾人が依て立つ所の基礎となり、依て進む所の路となるものは確實なる學理に外ならず。是即ち、ユニテリアニズムの基本的主義の第一則に合理的大道、科學的眞理を以て基礎となすことを示せる所以なり。若し夫れ人類が特別なる超自然力によりて、所謂神明と交通することを得るとすれば、科學以外に何ほ確實なる知識あるやも知れずと雖ども、若し斯る奇蹟的默示なしとせんか、科學以外に何も確實なる眞理なき筈なり。是を以て吾人は他の宗教に於けるが如く、科學の外に自家特有の眞理とか教義とか云ふ如きものを有せざるなり。然るに往々吾人を誤解してユニテリアン協會は冷淡なる科學上の知識を教義となし、之を說教するもの丶如く想ふ

人なきにあらず。甚しき誤想と云ふべし。夫れ吾人が科學を以て唯一の基礎となす所以は、若し科學的知識によりて吾人の當さに進むべき道を明かにし、又之に依て萬有を支配するにあらざれば、吾人は殆ど無力なるものたらざるを得ざればなり。

（第三）、兒童の教育に開發的方法の必要なるが如く、社會的教育に於ても亦開發的ならざるべからず。夫れ人類を導かんとするに當りて、此は善なり、彼は悪なり、斯く信ずべし、然か信ずべからずなど丶一定の教義を立て、注入的、束縛的に教訓するも到底その効を奏すべきにあらず、反て人類を卑屈、軟弱になし、大に其發達を害するものなり。故に各人をして自ら經驗せしめ、自ら思考せしめ、而して自ら善悪正邪の判別をつけしめざるべからず。然るに古來一般の宗教家が人を感化せし事實を考ふるに悉く注入的、强迫的にして、教權を益々强大にし、一定の教義を立て理非の判別を許さずして命令的に之を信仰せしめしものなり。教義、教權が如何に人類の發達を害せしかは歴史に徵して明なるにあらずや。夫れ吾人の人を感化せんとするや、極めて斯る有害の方法を排斥し、一事一物も最初より斯々信せざるべからずと命令するに非ず、自由に討究せしめ、自ら判斷せしむるものにして、其の間に毫も關渉する所なきなり。而して各自が自由に討究したる上に於て、自ら眞なり善なりと判斷する所を撰ばしむるものにて、即ち、開發的に教育するものに外ならず。これ吾人が一般の教義に關して自由討究を主張する所以にして、ユニテリアニズムの基本的主義の第二則に吾人は全く自由討究を以て研究の方法となすと云へるものなり。論じて玆に至れば吾人が三大主義の一として自由討究てふことを主張する所以は單に宗教の研究を以て最終の目的とするにあらずして、他の事柄を成就せん爲めの一手段たるや彌々明かなるに至るべし。

以上論ずる所によりて既に明かなる如く、日本ユニテリアン協會は至善界を發達の理想となし、科學的知識に基き、各人をして自由に討究せしめて、日本國民の

發達を計るを以て目的となすものなり。是れ即ち、吾人が眞個の目的の存する所にして、一切の事業は悉く此目的の下に統一せらるゝものと云ふべし。

第四　餘論

抑も日本ユニテリアン協會は宗教と云ふべきものなるか、然らざるか、これ近來隨分議論の存する所なるが如し。「宇宙神教」記者の如きはユニテリアニズムの基本的主義が神人の關係に言及せざるを以て、ユニテリアニズムは宗教にあらずと斷定せるに似たり。然るに今日の思想界に於ては有神論と無神論とは全く反對の性質を有する說として見るべからず。有神論と云ふ中にも種々あり、又無神論と云ふ中にも種々あり、決して一樣に論すべきにあらず。而して種々の有神論と種々の無神論とを共に集めて比較するときは、有神と無神との區別決して判然たるものにあらず。故に神の觀念の有無を一刀兩斷に定むる如きことは今日の複雜なる思想界にありては到底望むべきにあらず。若し一歩讓りて之を區別し得るとなし、神の觀念の有無を以て宗教の限界を立て、無神論は宗教にあらずとせんか、日本の佛教は宗教たらざるなり。そは彼等は自ら無神論たることを主張するものなれば、その教義の分解を待たずして先づ宗教にあらずと判定しおかざるべからざるや明なり。

又甞て「佛教」記者は吾人が積極的に信仰を有せざる故を以て、ユニテリアニズムは宗教にあらずとせられたり。然るに所謂信仰とは如何なるものを云ふか。或は鬼神に對する心識、未來世の實在に對する確信等の如きものを指すものか。若し然りとせば佛教もその實質に於ては之を說かざるにあらずや。若し又佛者が色界の假相に過ぎざるを觀じて實相の眞如界に歸向するが如き信念を指す者ならんか、ユニテリアン中にも亦斯の如き信念なきに非ず。これ吾人の判斷に苦む所なり。ユニテリアン協會は其性質大に異なるものなれば、從來世人が宗教として分類したるものゝ中に入るべきや否や吾人之を知らず。吾人は宗教と云ふ名稱を附せられざるも亦可なり。たゞ日本ユニテリアン協會と稱す

る團躰は斯々の目的を以て社會に運動するものなりとのことさへ明かにならばそれにて滿足するものなり。マツコレー氏も「ユニテリアニズムは……道義をのみ説くものとの非難を受けたること一再にして止らず然れどもユニテリアン敎徒は此非難を以て寧ろ最高の賛辭と思惟するなり」と云へり。夫れ日本ユニテリアン協會は既に上述せる如き遠大の目的を以て社會に立つものなりと雖ども、未だ極めて幼稚にして、その力微々たるものなれば、諸事不完全を免れず。是を以て世人の誠實なる批評を容れ、漸次改進する所あらんとするものなり。然るに世の論者が舊來の宗敎的標準を以て吾人の所説を判定し、その宗敎たる資格を有するか有せざるか等の批評を加へらるゝは既に無益なり。たゞ必要なるは斯る團躰が社會に必要あるか、なきか、又成効し得るか、得ざるか、又方法の適否如何等の問題を論ずるにあらんと信ず。

論説

日本獨立の氣象

久米邦武

私は日本獨立の氣象と云ふ題を今日は揭げましたが、氣象と云ふは漠たる字なれど、其漠たる字の方が却てお話に宜らうと思ふ。夫で先づ獨立と云ふことの意味より解釋致しませう。

一躰世の中は唯漫然たることが自然と人の慣習に染みて、それが遂に何んとなくそれを唯斯んなものと自分獨り信ずるやうに多くなるもので、獨立と云ふことも日本の獨立と云へば何う云ふことかと言つて見ると、矢張漫然たる人が多くあるのです。先づ獨立と云ふことは諸君も素より御承知であらうが、孤立と云ふこととゝは違ひます、孤立と云ふは人に交際はぬ……斯う云ふことで、一箇人が人に交際はぬと云ふとも、國が交際をしない……。外の國と交際はないと云ふことも、是は出來ることでない。地球上に土地を占めて一國をなして居て、外の國と交際はないとは到底出來る

ことでないけれど、日本には何んとなく此獨立と云ふことを孤立と云ふ意味に思ふて居る人が多くあります。是は先づ多くは國學家がさう思ひ易い。夫は何ぜなれば、日本は海中の孤島である、四面海であるからして、古い時代よりして別段に神が此日本を生んで：：：大八州と云ふものを生んで、別段に人民が繁息して居る。日本と云ふ國は一の神の種が繁息して此國をなして居ると、斯う云ふ世の中であるからして孤立と云ふ考へになつた。其據る所の大八州と云ふ說よりさう云ふ考へが出て來るけれども、大八州と云ふものを元神が生んだ時は何う生んだか、まづ一つ糺せば西南は何處まで生んだと言へば其の境は分らぬ、東北は奥州まで生んだか、奥州までは生まなんだか、何處まで生んだか、其の境は判然しない、それでも既に日本と云ふものは別段に出來た國でないと云ふことが知れます。全躰四面海の中に居れば成程來るものもなく、此方から往くものもないたらうと云ふ考へがあるだらうが、是は逆だ、島國と云ふものは船に乘働くことを皆な、否、海岸のものは利いて居るから、古い時代より非常に船で乘働いて近海を廻つて居る。夫で極く古い所を言つたなら、日本からわきへ往つたか、わきから此方に來たか、其處は分らないけれど、何れ日本近所の海岸を乘働いて、向ふからも來、此方からも往つて、大概朝鮮から支那の海岸は皆な古い時代より交際をして居るなんです――居るに違いない。又近頃までも乘働いて居ました。それで孤立と云ふ考へは却つて海岸は孤立が出來ない陸地の方が孤立である、たとへば西藏或は伊犁などは陸地の旅行が出來ないから、其の處より外の國を全く知らずに孤立同樣にして居れど、却つて海岸なれば向ふへ船で渡るから、日本の國柄より言へば孤立は出來ない。然し日本でも旅行の出來ぬ人、先づ高い所を言へば大和山城に御座つた貴族、それから學問上で言へば學問に凝つて、窓の外に出ない、本許り讀んで、船の樣子も、周圍の人民が海上を乘働いて生活することも、全く分らずに居る人は、大八州の國は外の國と交際はないと云ふやうな考へが出て來るので、此孤立は決して日本の特性ではないのです。

もう一つは排外感情：：：：外國人を入れつけぬと云ふ考へ、是が日本の獨立の精神であると先づ人が思ふて居ます。日本に昔より排外的の感情があつたかと言へば、是も決して日本古來よりの特性ではない。是は德川が寬永年間に鎖國をやつたからしてさう云ふ考へに

なつたので、其以前は、日本は往古より此海上を乘働いた、此近海を非常に乘働いて居た人民である。それが手足を縛つて遂に外に出ることはならなくなしたので、それも全く鎖國は出來ないで、一口は明けて日本へ和蘭唐人の來る處にした。其唐人は政府との交際がなかつたから私に來たので、其支那人に往來どもに利益を取らせて、さうして日本人の手足を縛つて居つたので、此鎖國の惡いことは近來は誰れも言ひますが、私は逆に鎖國も今日になつては一つは益があつたといふことを一寸申上げませう、詰り言へば鎖國ゆへに二百五十年許り人民を止めて日本人を纏めたと云ふ、それだけの効能はあつたと思ひます。今日で日本人と云ふものは先づ日本に纏つた、丁度其時に支那も滿清から取られて皆な辨髮になつたから、今でも支那人の記しには皆な辨髮をダラリと下げて、惡口を言へば豚の尻尾と云ふが……豚尾と云ふが、世界中に記しがついて纏つた。支那と云ふ國は他に類のない記しがついたが、日本はさう云ふことはなしに鎖國と云ふことで人民が纏つたのは、先づ一の効能であらうと思ひます。此鎖國の間に日本はどう云ふことを講究したかと云ふに、漢學を頻に講究した、日本で漢學が晩年の發達をしたのは此鎖國の時代である。此漢學は孔子の學問で其本領は春秋――春秋は何う云ふものかと言へば、王室を尊び夷狄を攘ふと云ふのが本領である。夫だから夷狄と云ふものを斥くる、夷狄は禽獸――畜生であると、斯う云ふことを唱へるのは漢學者一般の口癖になつて居ます。だからして自然と排外感情と云ふものが、さう云ふことを言つた所から段々強くなつて、遂に尊王攘夷の論を唱へ、其の爲に徳川家は亡びた、斯う云ふ歴史になつて居る、是からして結んだ排外感情です。しかし外人と言へば拂ひ退ける、入れることはならぬと云ふとは世の中に逆も行はるべきことでない、それが爲に日本が獨立したとでは決してない、唯二百五十年間、最も此百年間許りにさう云ふ感情が強よまつただけで、近い所を言へば尊王攘夷の論が今に影が殘つて居ると云ふまでゝ、日本の獨立はそれでもない。

も一つは、是は少し獨立とは縁がはなれるけれど、侵略と云ふことである。近來頻に日清戰爭は日本が又侵略主義を起して來たと、斯う云ふ世間の評判である。亞米利加の或新聞などは能く日本の贔負をして書いて居たが、侵略の説になつては打消す證據を得ないからと云ふて、或所へ其新聞記者が尋ねたと云ふことを聞

きました。そふ聞いたから是は怪しからん、日本は侵略主義でない確かな證據を有たないとは怪しからん、是迄外に向つて他國を侵略したことが日本の歴史にない、然るに侵略でないと確めることは出來ないとは、それは日本の事情を知らないのからである。何れ侵略主義と云ふのは侵略主義の國人が自分の心にさう寫るからのことであらうとは言ましたけれど倚考へると、支那人は日本の鎖國にならぬ以前に日本より非常に侵略を受けたことがある、それで支那より以前の事を考へて日本は又侵略を始めた、又所謂倭寇と云ふものが此節始つて來たと、斯う云ふ考を以てさう云ふのであらう、實は其倭寇と云ふものは日本政府からしたのではない、日本政府の統轄力が薄弱であつたから、皆ながアバレて近海を非常に乘働いて居つた結果で遂りに侵した、それが爲に日本が侵略の名を受けて居るのは實は日本人は知らなかつたのです。近頃山東省から福建などゝ段々合戰が續いたに就いて、種々探出して倭寇と云ふものゝ侵略した樣子が段々と世間に分つてきたが、先づそれから評判さるゝとと見へる。さうすれば是は武士、……昔の武士が斯う云ふ名目を一つ殘したので、日本と云ふ名で侵略したと云ふことはないのです。

そこで先づ孤立と鎖國と侵略——孤立、排外感情、それに侵略主義と云ふことは、私が出して居る題の獨立と云ふことには取つて除けなくてはならぬ。其外に獨立の氣象はあると、斯う考へて往かなくてはならぬ。それで日本の古來外國に對する歴史に就いて概略を申しませうが、今の侵略主義に似寄つたことが。日本歴史にもあるのは、神功皇后の三韓征伐、實は新羅征伐、豐太閤の朝鮮征伐、此二つが日本で先づ外國を征した歴史で皆さん御承知、誰れでも御承知のことであるが、是が多く侵略のやうに話しがなつて居ます。

先づ神功皇后の三韓征伐と云ふのは、　三韓ではない新羅であるが、歴史に書いてある所では、彼の筑前の向ふに朝鮮と云ふのがあるかないかも分らなかつたに、神のお告げで寶の國があつて金銀の澤山出る所だからそれを取りに往かう、往かうとの評議に仲哀帝が御不同意であつて、其後崩御になつたから神功皇后が討取つて新羅を屬國となしたと、斯う云ふことに書いてある。皆な世間さう思ふて居る、即ち侵略で、最も惡い侵略　　金のあるのを見て向ふに往つて金を持つて來ると云ふので極く／＼惡い、即ち泥棒であるが、

實はさうぢやない。其新羅國は昔し素盞嗚尊の國で、多分は彼新羅で崩御になつたのであらうと思ひます。それから崇神帝の時に任那府が出來て居る、以前より三韓……三韓と云ふは朝鮮半島の地で、三韓とは後のこと、日本は元同國であつたと云ふのは私の說で素より歷史上に見えて居ます。但神功皇后の事は文章を能く見ないからで、あれはサニハといふ言葉、中臣の烏賊津と云ものが、沙庭に立て、それに神が乘移つて託宣があつた、其託宣の言葉に向ふの國は近い所で、金銀の國があるのをやるから取れと、斯う云ふ神樣の託宣であつたから、熊襲征伐を止めて向ふに渡ることになつたので。丁度神功皇后が懷姙中で、懷姙と云ふことが知れて居つたに、往つて歸つてから筑前で御安產があつた位で、彼方にお出でになつたのも暫くのと、素より日本の土地であつたから、隨分譯もなかつた事で、是は段々調べると分るからそんなことは畧すとして、詰り向ふが叛いて居つたのに、神功皇后が自らお出でになつたから、直ぐに降服した、向ふが叛いたのを往つて降服させられたのである。

それからもう一つは天智帝が百濟高麗に援兵を出された事。其時は日本が敗軍して百濟は亡びたけれども、其時の百濟の援兵は日本の非常な義兵であつたから、唐より直ぐに使をやつて和戰を結んで、其後は唐と餘程親密になつたから、負けはしたけれど日本の武威はそれで揚つた結果になつて居る、是は決して侵略でない。

夫から後の豐公の征韓は朝鮮王が豐公の命を聞かないから、遂に朝鮮人をバラッシて仕舞つたが、それつきり濟んで、朝鮮の地は尺地も日本に畧しては居ない。併しバラッシたには違いないから、朝鮮が怨を結んでそれを侵略と云ッても仕方はないけれど、それは日本の主義ではない、時の勢でさう云ふことになッたので、其結果はどうなッたと云へば、侵略を頻にやッたかと云へば、鎖國をして少しも向ふに渡らなくなッた、だから侵略主義とそれで云ふことも出來ない。

總で日本の歷史上に現はれた政府よりの侵略と云ふことは先でない。けれども倭寇が支那へバレコンダことは長いことで、彼も實に困ッたのです、是には困りて居るから、此一條は或は獨立氣象と云ふ內に……餘程此處へ考へを置かねばならぬことであると思ふけれど、政府が之を以て侵略したでもなし、又侵略の爲に往ッたでもないのです。

日本と云ふ國は最初より申す通り海の中であるから船の働きが上手で、此近所を頻に乘働いて居たから、古い時代より支那朝鮮の海岸へは深い交際があッて、貿易其外早くよりやッて居る。私の說では朝鮮の南方より支那東海岸、福建、呂宗あたりは日本と同じ人種で、元は連合した國と云ふことを明治二十二年の暮史學會を起した時、其雜誌の始に出しておきました。是から段々後になッたら私の說を確めることが出て來るだらうと思ッて居たら、此節の戰爭でも益々出て來た、是から未だ出て來ると云ふことを信じて居ます。そふいふ所からして日本は支那と交際を暫くも絕つことは出來ないで。最初申す通り德川の鎖國の時も矢張唐人船は來て、彼方のものを持つて來たから、海外の交際は日本はもう人民に結びついて暫くも絕へることはならんと云ふまでの關係を持つて居る。然るに日本が是迄獨立の躰面を維持して居つたのは、何によりさう云ふ氣象が發したかと考へると、日本人民には早くより自ら衛る力、即ち自衛力と云ふものが早くより發達して居る。所謂自分の身躰を守り、自分の國をば守るの力が强かつたと思ふ、そこで是に就いて一つ歷史を引いてお話を致しましやう。

此日本の古來の歷史に政府も知つたことで、外國人が日本に妨害を加へて來たのを討拂つたことが三度ある。其外まだあつたでせうけれども、書いてあるのは先づ三つの大きい事件、——一は後一條帝の寬仁三年、是は西洋紀元千年の頃で、其時支那には金と云國があつて支那を半分以上取つた强國であるが、それが猶起りがけて女眞といつた。女眞は今の咸鏡道のあたりで、朝鮮の刀伊と云ふを案內にして俄に筑前博多に討寄せたから之を刀伊の賊とも云ひます。其時に藤原道隆の次男に有名な藤原隆家と云ふ人が眼病をわづらうて、療治の爲に大宰權帥になつて大宰府に下つて居た其時であつたが、其隆家の差圖で警固所に命じて討拂つた。其時の大宰府の役人は大族で、先づ後世の大名で、原田家の先祖、又は肥前の前介源知と云ふ人を始め、對馬壹岐のものまで皆んな戰ふて討拂つた。段々京都より勅命が下つた時はもう、賊は退いて逃げて仕舞つた、之を刀伊の賊の亂と云つて先づ古來珍しい大亂であつた、それを皆な九州武士が防ぎました。實は藤原隆家卿と云ふのは京都では人物であつたけれど、弓矢の道は知らぬ方であつた、併し御頭であつたから隆家卿隆家卿と云ふが、實は九州武士——警固所詰合の武士が

近所のものと一緒になつて討拂つた、即ち九州人の自衛力を發して討拂つたのてある。是は其時の小右記に詳はしく書いてありますが、其中に斯ふ云ふことが書いてある、戰爭の時、馬を馳せながら射よ、臆病に似たりといつたから皆な馬を馳せて射たとある。それは馬を馳せて向ふへ進みつゝ射よ、唯弓を射て防ぐ計りてはいけないと云つたので、支那人の戰爭を見ますれば、唯立つて防ぐ計りである、然るに馳ながら射よ臆病に見ゆると言ひ、皆なが掛り口になつたと云ふのは、此時代は源平の戰より。百年程前であるに、其時からして斯う云ふ氣象である――こふいふ氣象だから戰爭仕掛けた外國人と云へば直ぐに討拂ふたので、是が刀伊の賊の亂の歷史である。

其次は世に高名な文永弘安兩度の蒙古襲來である。是は世に隱くれないから詳しくは申しませぬが、此文永の時は既に其用意はあつたけれど、鎌倉の北條時宗はまだ漸く元服した許りで十五六歲の子供であるから、元は鎌倉の緩怠より起つた其時分の吉田一位と云ふ人の吉續記に書いてある位で、實は俄に向ふよりやつて來たので、其時少貳經資大友賴泰が九州警固の家であるから、其軍配で防いたので、其時に九州のものは悉く驅付けて面々に我劣らじと防いた。さうして少貳大友の軍配と云ふけれど、筑前より對馬にかけた長い戰面の防ぎであるから、實は銘々の働きで非常な戰であつたので、實は蒙古は其戰に困つて防ぐこと出來ずに逃げ出したのに、丁度其時分に颶風が起り、是は彼處の名物の大風で散々になつて逃げた。弘安の時は又兵を增して來たけれど、其時はずつと石垣などをついて用意をして居つたが、是も戰の時は中々烈しくして、中には向ふの船に飛乘つて戰ふたといふ。即ち今度黃海の戰に比敵艦が殆ど危くなつたから、向ふの軍艦に飛乘つて戰はうと云ふことを既に申合せて、飛乘る覺悟をしたと云ひますが、飛乘らなかつたのは向ふが破れたからで、是が日本人の自衛力で、先づ外の國には餘り例のない戰ひをする、それで水雷艇も必死になつて往くと云ふことは日本の特色である。是が昔よりの自衛力である。弘安の時の戰を見ると、其時にもさう云ふ氣象を發して居ます。

もう一つは世の中に一向知れない、それは後崇光院看聞日記にのつて居る、應永の二十六年に蒙古が九州に押寄せた。其時の蒙古と云ふのは今の盛京省の占領地よりは北に當る所のオランカイだらうと思はるゝ、そ

れが又朝鮮と合併してやつて來た。其時の九州探題は澁川義俊で少貳滿貞と共に對馬に渡つて戰ふて討退けました、其有樣を詳しく看聞日記に書いてあるが、其時も大風が吹きました。是に就て少し話があるのは、朝鮮より日本紀行と云ふ本を持つて來て三十圓に賣らうと云ふ書林があつたが、たつた二冊で……先づ二圓位なものを三十圓と云ふのだから買ひはしなかつたが、其中を見たら、紀行の詩に文章が幾らも題の下に書いてあるから、少しばかり拔書したが、其後元奈良縣知事をした小牧昌業君が買つたと聞きました其本は二十七年朝鮮より日本に來た使節が自筆の紀行で、前年の戰の始終が書いてあつたが、夫れに據ると日本も對州に騷動があつて、或は蒙古の兵を招き入れたかも知れない、併し唯今申す通り是は對馬で討拂つた、さうして其時の澁川少貳と云ふのは非常な讎敵で、平常戰爭許りして居る仲だから、外敵が來ても斯んな時では防ぐとが六ヶ敷からうと思つたら、防ぐ時になると澁川と少貳と一緒になつて防いだ、是が日本の特色で、平常は自分の勝手に戰をやるけれど、國を衞る時になるとすつかり一致して防ぐ。日本人が外國人を防いだ歷史の政府まで關係のある歷史の載つて居るのは此三つである、此歷史を見ても日本人は自ら衞る力の强いと云ふことが分つて居ます。

偖其自衞力と云ふものはどう云ふ所から發したか、日本の人種にさう云ふ性質があるか、又は敎育かどう云ふものであつたかと云へば、此に一つ考へなくてはならん。所が人種と云ふ論は其種に依つて色々性質が違ふとだから、斯んなことまで天然の人種に任すことは出來ない、若し其が任せられるならば日本と云ふ人種は神樣の子孫ばかりとは言はれぬ、素より雜派で朝鮮支那色々なものが這入つて居れば、自衞力のある奴もあり、ない奴もあり、種々雜多でなくてはならぬに、日本人は一色に皆な自衞力に富んで居る。さうすれば氣象と云ふものは其所の一般の氣風に依つて變はるものと思はねばならん、それでどう云ふ譯でさう云ふ自衞力が出たかと斯う考へて見れば、私の考へでは是は妙なことからして、敎育でもなければ、政府の仕向けでもない、何となくさう云ふ氣象になつたので、所謂成かゝりと云ふものであると思ひます。それは日本の昔しの有樣を見ると、日本と云ふ國は京都の公卿、それと後に武家になつた即ち地方の豪族、下の小給人、此三つで日本の土地を古來所領して居ました。是は長く

なるから極く簡單にお話をしますが、之を名をつけると領家、日本の土地を領した家と云ふことで、領家は即ち京都に日本全國の土地領主が居つた、それをば領家と云ふ。それから其領家よりして支配人を出してあるが地頭と云ふ、それは其土地に居つて支配をする、それから其下に給人と云ふて小給の人があつた、此三段で日本の土地を所有して居ました。

其領家と云ふものゝ起りは、素より日本で能く云ふことで、日本は神國で神樣がおつくりなさつた、其神の子孫、即ち天之御中主の正統を受けたのが天子樣で、其次の産靈神の後が藤原家を始め齋部伴部など云ふ文武の家があつた、其外にもまだあつた、それが分れ出て、其系統を引いたものが互に婚姻をして一家族になつて、さうして皇室と云ふものが立てられた。皇室は朝廷である、全國の土地と云ふものは神樣のお造りなさつたものだから、今でも田をつくれば神に幾らか上げなくては大風が吹いたり、大雨が降つたりする、土地を耕して生活するものは神の力を藉らなければならぬからして、神の子孫が此方に御座るから、其御支配を受けると云ふので、皆んな段々とそれに頒いたので。さうして野蠻のエミシなんと云ふものは山の中に追込んで、土地を開いては御領地となし、遂には開いて山の中に及び、山の隅までも開けると云ふ順序になつたそれで日本の土地は先づ朝廷が天の御中主と産靈の神との御末で領主におなりなすつた。斯う云ふことであつたから、それに背いたならば非常な大風が吹いたり、大雨が降つたりすると云ふ感情を以て、今で譬ふれば眞宗の信仰者が門跡樣に上げるやうな譯で貢を上げました。それ故に天子樣に幾らか上げる、隨分朝廷には上げますけれど、往々に取り方が多くなると苦情をいひ出した。凡そ何れだけ上げたかは分らぬけれども、先づ十分の一、一割許りを上げて居つたけれど、實際を言へば一割よりまだ少くない、それは神樣だから欺す所もあるから、(笑ひ)千五百町ある所を千町と云ひ、百町許りに當る分を上げればそれで滿足なさるから、さう云ふことをして居た樣です。

然しそれを唯持つて居る、計りには往かないから其他に支配人が出來て、其支配人は昔しの國司とか縣主とか云ふのが天子樣の支配人、又貴族よりも支配人に當る所のものを出した。其人が往くと先きではスベラしい神樣の所から來た人であるから屋形を造つて應對して、其支配するものに又一割、一割五分許り上げる、

其處に來るものだから出します。即ち信徒が門跡樣へ上げる外に御寺樣へ年々寄進を出すと同じやうです。其人が差配して居つて、所有して居る地は隨分大きいのは非常に大きいのがある。一郷とか數村差配して居ますが、中には小さいのもあり、正しく分けたものでないから大に錯雜して居ました。

其下に給人と云ふものがある、是は昔しよりの法で其下に奴隸を使ふ、農民の一番低いもの、牛馬の代りのものがある、給人は自分で耕やすもあり、或は農民を使つて耕やして居る、中には一村を有つた奴もあれば、一村を幾つにも割つて有つたものもある、是を給人。小給のものと云ひます。大概此三段で日本の土地は持つて居たが、追々と世が進んで來るに從つて京都より段々取り方が多くなると地頭がやらない、地頭には又給人小給のものがやらないと云ふやうなことで、色々な騷ぎが起つて來ました。是は既に大化二年の詔にも書いてあるが、其頃よりして夫等の喧嘩で戰爭は常に斷へなかつたと見えて居る。後には此三つの軋りあいから喧嘩が烈しくなつて來た、喧嘩と云ふが即ち戰爭で、弓矢を持ち或は刀を持ちて喧嘩をする、即ち戰爭である。其時の有樣を今譬へて見ると、神樣の末の京都は極く優柔くて抵抗をなさらない、チョット言へばゴムで拵へた輪のやうであるが、下の地頭と云ふものは土地が足らない所から近處を侵畧する考へを生じた、或は京都を欺して公事をするとか、境を推廣げるとか、色々な喧嘩を仕掛て、其地頭の喧嘩が追々烈しくなつたのが武家の起る根源で、金屬で拵へた輪である。之を細かく話すと日本の歷史を數日話しても盡きぬやうなもので、日本の歷史は先づ之を研究するやうなものです、因てチョット例へを二三お話して置きます。

木曾義仲と云ふ人が木曾に隱くれたのは、平家からどうかしたやうに人は思ひますが、さうでない、あれは姪の悪源太義平と叔父の義仲の親木曾先帶刀先生義賢と領地の喧嘩で、義平が義賢を殺して奪ひ取つたから、義仲は幼少の時木曾の山の中――山の中ではない木曾近處の權頭中原兼遠に養はれて生長したから木曾義仲となつた、是が喧嘩の一つ。

もう一つは足利尊氏――足利の先祖が足利を持つたから名乘つて居る、實は足利家と云ふものは參州が本國で、其以前の先祖が足利となつたのは……實は足利と云ふ所は佐藤家の地面で、佐藤と云ふのは藤原氏で

後世佐野の本家である。源三位賴政が宇治川の戰に、平家方の足利又太郎忠綱と云ふものが先陣をし破つた、此又太郎忠綱が領地をば源家のものであると云つて公事をして、遂に源家に取つて仕舞つたからして源家が足利と唱へるやうになつたので、佐藤は非常にそれを鬱憤して平家方をなして、遂に勤王黨になつた、是も地面を取られた一つ。

もう一つは千葉介と上總の介の兩家が橘木の庄を兩方から爭ひ、其爭ひから仲が惡くなつて遂に喧嘩をしたことがある、是等は地頭株の喧嘩をした例である。

それで前にも云ふ通り段々地頭株の喧嘩が烈しくなつて來たので、鄉村の締りのない所から、土地のものも互に自衛力を發揮して、わきより亂暴を仕掛けて種々な名義を以て妨害して來るから、其妨害に打勝たうと云ふことを常に申合せて、村々へわきより仕掛けて來ると直ぐに起つてそれを叩き揃ふと云ふ仕組をば思ひ〳〵になして來たのです。それでもし村々で防ぐことが出來ないと、領主が一族一致して村々のものを纏めて防ぐ、一族同士をば何一黨といひ、又他族でも近村互に申合せた大勢の組を一揆と云つて、他より妨害すると、即ち侵略主義でやつて來ると、直ぐ起つて防ぎました。其時分一黨一揆のものゝ弱味を見せると、後に人より侮を蒙るから、一番鎗とか、一番驅けとか、まつしぐらに突込んで往つて皆な戰つた、若し死ねば跡で村より妻子をかくもうて呉れると云ふのが、日本の一般の習慣であつたのです。斯の如く喧嘩力が強く、どこまでも喧嘩して仕方がない程であつたけれども、其內端の喧嘩に強いのは畢竟仇を排斥すると云ふ力が強いものだから、外に對する所の力となつて、外國より攻來る時になると、內端喧嘩を忘れて、一揆となり一味となつて、さうして向ふを防ぐ。其防ぐ時は石垣をついた、柵を持などするも面倒だと云ふ氣で、直ぐに掛つて敵と戰ふた所です。此勇氣を養ふたのは朝廷……領家の統轄力が薄弱なのと、地頭が自分の國を——領地を固める力の強いのと、其間に小給のものが摩擦されて自衛力を發したからして、日本人が他に向ふ時は必死になつて、戰爭の時は向ふに突込んで必死になつて往くと云ふ、斯う云ふ氣象になつたと思ひます。又一方から云へば意地と云ふことを女までが思ふて居る、それが今にも習慣になつて、村々で水喧嘩、或は草苅場の喧嘩、町內でも町內町內の喧嘩と云へば、直きに一致して此町內が負けてはならぬと云ふことを

皆な誰れでも思ふて居る、子供まで思ふ、それが即ち自衛力で、實は喧嘩力が強い、皆な喧嘩力がある。此喧嘩力と云ふものが元何處から出たかと云ふと、詰り意氣地を重んじた結果で、自分が負けては一生の恥、一族の恥、村の恥と云ふ所から、意氣地のないものも仕方なく意氣地を出さなくてはならず、又意氣地の強いものは喧嘩をして困る、是が日本の氣風に自然となつて、太平の時でも意氣地のないものは誰も心配して意氣地を立てさせる、女までそう云ふやうに養育をしたのが、今に殘つて居ます。

夫れでは武士道と云ふものは喧嘩をして、唯に人と喧嘩をするが主義のものかと云ふと、それは一種の武士癖と云ふまでゝ、實は中々さう云ふ緩かなることではない、唯必死になつて命を捨てると云ふ――常に喧嘩をすべきものでない。是は早い時代であるが、前の刀伊の賊の時分に馬を馳せて射よ、臆病に似たりと云ふた位で、其比渡邊綱が卜部季武に話した言葉に、常の心は臆病にあれと、斯う云ふことがあります。是が武士道修練の言葉で、平常には臆病にあれと云ふは、いざ大事と云ふ時に死を決して武名を立ねばならぬから、常に喧嘩などに必死のことをなすものでない、常の心は臆病にあれと云ふたのです。斯ることは皆な武士道に餘程大切なので、其後までも色々の本に武士道を研究したことがある、斯う云ふことの研究を常にしました。所が後世自然と武士道が廢れて來て、人が眞の必死と云ふことを本統には研究しないで、必要のないのに喧嘩をしたり、喧嘩を買ふて常の心を喧嘩に用ひて居るのは、渡邊綱などの心とまるで反對して居ます。近代に肥後の熊本に豪傑組が――後に其餘派を神風連と云ふがありました、其豪傑組の或豪傑が話した言葉に、是は喧嘩の仕樣を研究して居つたのであるが、人が刀を抜く時に心得がある、赤くなつて刀を抜く奴ならば直きに叩き落して宜い、是は譯がない。唯青くなつて抜いた時は早く逃げる工風をしなければならぬ、本統だから逃げなければならぬ。（笑ひ）其中には色を變へずに抜く奴がある。さう云ふ人に出あへば其までとあきらめといひましたと、是は或人の話であるがチョットしたことであるけれども面白ひ。

最う一つは鎌倉武士の氣質といふものゝ一と事を御話しましやうが。是は東鑑にある、畠山重忠と云ふ人が源平の戰に非常に大功があつた、素より源家の大功臣で、其大功に依つて伊勢の國の沼田の御厨やを恩賞に

賜つた。是は大神宮の御領地で、其下受をする株である。所が其頃の武士と云ふのは餘程無頓着で朝廷の政治の法律を知らない。色々亂暴狼藉を働ひたが、其時畠山重忠が代官に命じて御厨の治め方を任せてやつた所が、代官が其納め物を掠取つたか、何んだか知らぬが、私慾を行なつた所からして、大神宮より訴へを起されて公事となつた、所が大神宮様だから餘程やかましい、遂に畠山重忠も召捕られて千葉胤正にお預けになりました。千葉胤正の所に暫く預つてから胤正は鎌倉に出仕して重忠は預けられてより寢食を斷つて非常に瘠せたと頼朝に申したら頼朝は餘程御考へなさつた。重忠の申開きは自分は一向知らなんだと云つたから、早速許されて、胤正が重忠を連れて鎌倉に一緒に來たら、重忠は其時の一座の人に向つて、各々方は是より恩賞をお受けなさつたならば、代官の人を持つて居るか居らぬかを能くお極めなされ、若し代官になる人を持たぬならば恩賞は御辭退なされ。此重忠は潔白と云ふことが自設であつたに、此代宮の人撰が惡くて非常に恥をかきましたと、斯う言つて其座を起つてずつと武藏の國に歸つて仕舞ひ、夫れから暫く外に出ませんでした。さうすると取沙汰が段々あつて、重忠は非常に欝憤である、彼れ程の功臣が重罪も犯さないのに禁錮されたが、甚だ欝憤で謀叛を企てると云ふ段々取沙汰があつて、梶原景時が侍所であつたから其事を頼朝に言上したから。それは容易ならぬことゝて、小山結城和田義盛等其頃一番の老功のものを頼朝の前に呼寄せて、右の重忠の聞へがあるが、一應人を遣はして問糺すか、直ぐに討手を差向けるか、どう思ふと評議になつたら。結城朝平が進み出て、重忠程の忠臣が謀叛すると云ふことは怪しい、殊に彼は神を非常に敬する人で律氣な男であるに、どうも其事は怪しいから、一應人を遣はされる方であらうと言つたら、一統も同意して、下河邊行平と云ふものに其座で其方往けと仰付になつて、止むを得ず往くことになりましたが。扨往つた末に聽て重忠を連れて來ました、さうして侍所に來て、景時に向つて私は少しも左樣な覺へはないと申開きをした。然らば起請文をされよと梶原がいひましたれば、重忠が私は國に歸つて百姓の所有品を掠めて世渡りの仕度をなすなどゝ云はるゝなら、私に取つて實に恥であれど、謀叛を起すと云ふ評判を受けたのは、私の弓矢に取つて面目である、(弓矢の面目とは名譽である、武士道の名譽だと云ことです)。そふして私

は源家に對して二心ないことは兼て皆なに知れて居る筈である、私に限つてさう云ふことはせぬ筈である。殊に私は心と言葉と違へたことは是迄一度もない。私は噓を言はぬと云ふ氣象を持つて居るから、謀叛を企てたか企てぬか起請文には及ばぬと言ひ放したから、景時も其儘賴朝に言上したら、賴朝は重忠を召して何んとも尋はなく、外の話しにてすみ、跡で下河邊行平に、此節重忠を無事に連れて來たのは大きな手柄であつた、其褒美に呉れると云つて、刀を貰ひました。其後に下河邊が實は其時に重忠の所に往つて、御邊は斯う云ふ聞へがあるから來たと云つたら、さ樣なことを世上にとりはやされる樣では生きて面目ないと云つて割腹しやうとしたから、刀を押へて其がために自分が參つた、若し此事に就いての切腹ならば、拙者がどこまでも弓矢の朋輩の譯を以て、一命に掛けて此事の辯明をするから、死ぬことはやめられよと、其場で精神を以て言つたら遂に思止つたと話しました。賴朝は餘程それを氣遣ひ、始めから重忠はどうなるものかと氣遣つたに、無事に生かして連れて來たから、大安心をして其褒美に行平へ名刀を賜つたのであります。か樣に此時分は弓矢の面目を重んじて、家に名譽を與へると云ふが大事なことであつたから、喧嘩をして弓矢の名を汚すこと、又罪を受けても、利慾のための罪過だの或はたくみごとをしたなど丶云ふことは非常に恥ぢたもので、さうして却つて謀叛を企てたと云はる丶は自分の面目であると、さう云ふことを公然たる大事な所に於ても云ふ位で、日本の武士と云ふものはそんな氣象なものでありました。

今に殘つて日本の獨立を立て拔いた氣象は全く此であると私は認めます。それが今に村々町内まで矢張喧嘩について意氣地がなくてはならぬと云ふのも其時の風が殘つて居るので、是で是迄の日本は獨立して居たと斯う考へます。所が此の氣象はもう今日では次第に消ゆる、消ゆるだらうと思ふ。なぜなれば最初譬へた通りにゴムの輪のやうなフワリとした大政府が、今はづつとしまつて固くなり、金屬のやうに固くなつて、もう優柔しなことがないやうになりました。さうして總てのことが確乎たる條理を以て軋り合ふ、金屬の兩輪にて軋り合ふやうになつたから、今までの風は其間に微塵にくだかれて仕舞ふ譯て。其證據は村々でも水喧嘩することも出來なければ、草刈場の喧嘩も出來ない、町内でも喧嘩は出來ない、どこまでも喧嘩することは

出來ない、日本中に自衛力と云ふものは先づ不用になつて仕舞つた。而して一方には種々な道理が段々明るくなつて來て、學問が次第に進んで來ると、唯死ぬことを考へる許りでは往かない。今までの自衛力と云ふのは戰爭の時ばかりで、戰爭のない平和の時は隨分愚なもの、武士と云ふものは愚なものでした。是は現に私共は幾らも知つて居る、神風連なども皆な愚だつた。武士は愚をば却つて宜いことにして居ました。だから自衛力と云ふものはまだ眞の自衛にならない、唯外寇、……即ち向ふから喧嘩を仕掛けられた時に唯防ぐと云ふばかりで、實は自分の身躰は犧牲にして居たと考へなければならぬ。何ぜならば皆な君主と云ふものゝ祿に使はれて、家臣となつて居たから、君主の命とあらば制縛監禁切捨も勝手次第、捕へやうが、毆ふが、活かさうが、殺さうが、なんでも勝手に任せて、即ち自分の身躰を人に賣切つたやうなもので、自立心は少しもないものであつた。最う一つ云ふと自己の思想と云ふものがまるでない、斯う思へと云はるればさう思ふと云ふ譯だから、眞の獨立の氣象は少しも發達せず、殆と愚のやうで、否、全く愚なものであつた。だから是は馬鹿だと思つて、何か誘して扱落しにする智慧にかけると自衛力是迄の謂ゆる獨立の氣象はありながら、ピヨコ〳〵容易にやッつけられて仕舞ふものでした。

斯ふ云ふ次第であつたから、是迄の自衛力をばま一つ擴張して來て、他から自分の一身には妨害を受けない、自分の身には外面にも內部にも人の妨害を受けない、自已獨立の氣象を十分に發揮しなければ、是から後の自衛力はもう武士道では迚も往けませぬ。其事に就いては就れ是からは學問で種々研究して往かなければならぬけれど、何れ適當な考へがなくてはならぬ。それだから今日獨立の氣象と云ふことのお話をして、是迄の獨立の氣象を推して見れば、自衛の力から發したものであるから、之を擴めて、平和の時にも自衛力を全ふするにはどうすれば宜いかと云へば、正理と云ふことを枉げぬと云ふ、是に力を留めなくてはなるまいと思ひます。即ち道理と思つたら命を捨てゝも枉げないと云ふ氣象を平常に養はなくては、是からさきは往けないと斯う考へて居る。是は隨分人にあることであるが、子供の時より道理を枉げることを敎へることがある、申さば先づ是は女親……女親の子を育てるに道理と云ふことを言はなければいゝが、言ふ、言へば守

れば宜いが——そんなことをするものでないよと言ふ、譬へば客の菓子を頻りに取りたがるから、そんなことをするものでないよと言ふ、そふ云つたらそれが道理だから、道理を云ふた上は泣死しても構はぬ、うッちやつて置くと宜いのに、兒が段々と身軀をゆすつて泣くと、(笑)客も默つて居られないから其菓子を出してやる、さうすると女親は此子はどうもわんぱくで仕樣がありませぬと云つて之を食はせる。それだから子供は一旦叱られた所が、身軀をゆすつて泣けば必ず母は負けるものと斯う考へて、段々とゆすり樣泣き樣が強くなり。遂に自分一己の專斷を以て天地の正理を枉げて仕舞ふ癖になります。始めより道理と云ふものは枉がるものと思ふ所からそんな根生になるので、子供を育てるにも一旦道理をいつて聽かした後は、假令泣かうが構はぬ、泣死することはない、道理と思ふことはどこまでも推し通すと、遂には道理を枉げぬ氣象を養ひ成すと私は見込んで居る。是だけの方の中には隨分さういふことをした方もあり。しない方もあるだらうが、した方もしない方も道理と云ふものは其通りで、道理を枉げればもうそれまで、もう自分が即ち自立の力がないと思ひ、道理と思ふたら決して一分も枉げない。其時は例へば外國が幾十艘の軍艦を持つて來ても、此は道理であると思ふならどこまでも日本を保護して戰はなければならぬ。(拍手喝采)

吠檀達學派と大乘佛敎(接第四十號)

落木子

其二　因果論　吠派は因果同一論を取り因中有果論を主張す、元來因果の理法を抽象的に論ずるとは、佛敎に至りて始めて行はるゝとにして、他の印度諸敎に未だ見ざる所なり、佛敎に外道の因果論を批評して、邪因邪果と言ひ、無因有果と言ひ、有因無果と言ひ、無因無果と言ふも、大抵皆因果法の或る事物に適用せられたる上のとなり、數論派は因中有果論を取り、勝論派は因中無果論を唱ふ、何れも因果の關係を生ずる事物に就て論ぜるものなり、然に佛敎に六因四緣五果と言ひ、若しくば十因四緣五果と言ふは、純然たる因果律を論ずるものにして、其趣き大に相異なり、故に彼と是とは全く別問題なり、隨て是を以て直ちに彼を駁するは稍正鵠を失へるものに肖たり、

今余が此に因果論と題するは、亦或る事物に適用し

たる具躰的因果論にして、抽象的因果理法論に非ず、而して具躰的因果論に於て、吠派は數論派の如く因中有果論を取り、勝論派の因中無果論を排撃せり、此點に於て吠派は又た大乘佛教と相合する所あり、前に記せるが如く吠派は本躰たる梵天の分出に依り、世界を現出すと說くが故に、原因たる梵天の中に既に世界を生ずべきもの具備せりと主張するものなり、其言に曰く若し原因たる麻の中に油の存することなかりせば、結果たる油を出すこと能はず、砂より油を出さゞるが如し、之と同じく結果たる世界は原因たる梵天中に存するが故に梵天より世界を生出するなり、則ち因中果あるなり、又原因存すれば其結果を知覺することを得れども、若し然らざるときは其結果を知覺することを得ず、例せば原因たる土は結果たる瓶中に存するが故に瓶を知覺するを得れども、土若し瓶中に存せざるときは瓶決して知覺し得べからず、之と同しく原因たる梵天が世界に存するが故に結果たる世界は知覺せらるゝなり、則ち因果同一なりと言はさるへからず、

佛教に至りては勿論此の如き幼稚の論なし、然れども其證明の方法を異にするのみにして結局吠派の因中有果論因果同一論に歸するの說亦大乘佛教中に在り、第一唯識論に現行種子の關係を說くもの是れ胥たり、萬般の現象は各各既に阿賴耶識中に其胚種の存するあり、其胚種の開發現出せるもの是れ現象にして名けて現行と言ふ、現行の各各相分れて相混せさるは原因たる種子が元來各別に存するが爲なりと、是れ一種の因果同一論なり、因中有果論なり、次に實大乘圓敎に至りては尤も極端に因果同一論を說くものなり、華嚴に一心法界論あり、天台に實相緣起說あり、一々微塵の萬象は他の一切萬有の原因にして他の一切萬有の一々も亦各其他一切萬有の原因なり、一切の現象は元來一々微塵の現象中に含有して一即一切一切即一なり、一切の現象は一々の現象中に本來具有せるものの發現せる結果に外ならすとす、是れ論理究盡の因果同一論なり、因中有果論なり、

其三　迷妄世界　吠派は現象世界を以て全く迷妄浮幻となし、梵天以外に一の實在なしと論せり、而して迷妄浮幻は無明に依て生す、無明若し去れは無明に依て生せる現象世界從て滅するなり、譬へは繩を見て蛇と爲す此蛇は繩を知らさるの無明より生す、而れとも其繩たることを知れは其明知せさることに依て生せる蛇從て亡するが如しと、

大乘佛教に論する所ろ亦然り、曰く萬物の眞相は一相平等無別なり、然るに妄念の爲めに差別を生す、實我實法の執着是なり、此執着に依て起る現象を偏計所執性と言ふ、然るに一切の現象差別は皆吾人の心念に依て生するものなり、何れも假りに存せるもの、實在せるものに非すとす、此の如き見解に對する現象を依他起性と言ふ、之れ有に似て其躰無なり、之に反して眞如は圓滿眞實の自存躰なるが故に圓成實性と名く、是を三性の說と言ふ、之に就て吠派と同一の譬喩あり、則ち蛇は偏計所執性、繩は依他起性、麻若しくは藁は圓成實性なり、吠派未た三性の設を立てされとも說の相近き此に至て顯著なるを見るなり、

吠派は更に論歩を進めて曰く、唯一梵天の實在を取りて其他の一切を排するとは單に經驗的の自己を絕滅するのみならす、吠陁の教旨も合せて滅無せさるへからす、何となれは吠陁の教旨も亦均しく衆多と言ふとを豫想するものなれはなり、豈に啻に吠陁の教旨を滅無するのみならんや、解脫の教則をも亦滅無せさるへからす、解脫の教則には師弟の相對を豫想せり、師弟相對すれは二にして一に非す、故に勿論虛妄なり、虛妄の立脚地にある人の教ゆる所ろ何を以て眞實なるを得んや、但し一切の經驗的行爲は吾人が眞相に躰達するに至らさる限りに於て眞實なり、此れ夢中の幻像が醒めさる限りは眞實なると醒時と異らさるが如し、吾人本來梵天と同一なるとを忘れ、經驗的差別的の自己を以て實在の我躰となせり、之れ自ら梵天と同一なるとを覺知する迄は眞實なれとも、一度自己の梵天と同一なるとを知るに及んては經驗的自己の虛妄となると恰も夢の醒むるに及んて夢想の虛妄なると異ならす、

此れ殆んと破相大乘家の說なり、前に引ける起信論の文中、因レ言遣レ言の如きは、眞如の名目も唯其他雜多の假名に執着するを避けしめんとて設けたるものにして、其實眞如も亦終に除却すへき假名のみなるとを說けるなり、宗密禪師の原人論大乘破相教の章下に曰く、所變之境既妄、能變之識豈眞、若言ニ一有一無一者、則夢想與ニ所見物一應レ異、異則夢不レ物、物不ニ是夢一、寤來夢滅、其物應レ在、又物若非レ夢應ニ是眞物一、夢若非レ物以レ何爲レ相、故知夢時則夢相夢物似ニ能見所見之殊一、據レ理則同一虛妄都無ニ所有一云々、此れ唯法相教に於て、心を眞とし、心の製作たる外物を妄とするの、未た理を盡さゝるとを論するものなり、三論玄義七十三丁に曰く、百論正破レ外、傍破レ內、餘二論(中論十二門

論）正破ㇾ內、傍破ㇾ外、所ニ以三論破ニ內外ㇾ者、一切衆病不ㇾ出ニ二種ㇾ、一外道邪畫起ㇾ迷、二內人稟ㇾ敎失ㇾ旨、若破ニ斯二ㇾ則衆病皆除、と是れ外敎者流の惑を破するのみならす、且つ合せて自家の敎をも破し去らされは、徹底證悟に至るへからさるを說くものなり、諸部の般若は盛に此意を說けるものなり、又華嚴法華涅槃の諸經も一面より見るときは同様の說を爲すものなり、

(5)心理的觀念　精神は梵天其者なるか故に變化生滅なし、變化生滅あるは身躰の事なり、然るに梵天と精神との關係に二樣あり、一は公開敎に說く所にして精神は梵天の一部分なりとし、他は內秘敎の取る所にして精神と梵天とを同一となせり、公開敎の所說は眞實の意に非す眞實の意より言へは一切の精神は梵天其者にして梵天以外の精神なし、神精は梵天の一部分に非す、梵天の變成に非す、梵天と異るにもあらす、徹頭徹尾梵天と同一なり、梵天たる精神其者は迷なきが故に苦痛なし、苦痛は唯迷にあるのみ、此迷は吾人が吾人身躰の感覺の如き規定を有するより起るなり、此規定は無明の爲めに名稱と形狀とを生したるより起るなり、則ち苦痛は自心以外に一物の求むへきなく厭ふへきなきとを領解せさるより起るなり、

大乘佛敎亦之と同しきとは上來說く所に依て推續せらるゝなり、原人論直顯眞源章に曰く、一切有情皆有ニ本覺眞心ㇾ、無始以來常住淸淨、昭々不昧、了々常知、亦名ニ佛性ㇾ、亦名ニ如來藏ㇾ、從ニ無始際ㇾ妄想翳ㇾ之、不ニ自覺知ㇾ、但認ニ凡質ㇾ、故耽着結ㇾ業、受ニ生死苦ㇾ、と無始の妄想は本來眞如と共に常住にして常に眞如を汚せり、眞如を汚すと言ふも眞如自身を損するに非す、眞如と無明と同一なるが故に無明側面より見れは無明と躰を同する眞如は汚さると言ふて不可なきのみ、左れとも眞如側面より見れは如何に雜多變化の規定を生すとも眞如の眞如たるとに於て曾て少しも變せさるなり、則ち眞如は自性本來淸淨なり、然るに二者本來同一なるとを悟らさるより差別固執して個人の精神を生す、此れ苦痛の存する所なり、

吠派は各個の精神を梵天と同一なりとするが故に梵天を全知全能となすが如く又各個の精神をも全知全能となすなり、此に對して大乘圓敎に於ては一心法界一念三千の說あり、皆个人の精神を全和全能と見做すものなり、

吠派又曰く無明精神を刺戟して主觀客觀を別ち其間を遮斷す、斯く遮斷せらるゝときは精神は主觀として

は不完全なる知識的能力となり、客觀としては不完全なる知識的對象となると、

起信論に不覺(則ち無明)に依て能見と能現とを生すと言へり、能見とは主觀たる知識的不完能力なり、能現とは客觀たる知識的不完對象なり、又唯識學上に有名なる精神作用の四分三分二分一分の説は亦此點の論辨に外ならす、

(6)解脱論　吠派に解脱と言ふは個人の精神が現象世界を離れて萬有の本躰たる梵天と合一するとなるが故に、解脱せる狀態と梵天とは同一なり、此狀態に達するには萬有知識を得さるへからす、則ち吾人個人の精神と梵天と同一無別なるとを覺悟せさるへからす、

大乘佛教も亦現象世界を以て迷妄浮幻となすものなれは、此を離るゝを以て解脱となすなり、而して解脱を得るには之を外に求むへからす、自家固有の精神即ち一切萬有の本原たる平等不變の眞如なるとを照見するに在り、大乘諸教の觀心修行、要するに皆此點に結歸せさるものなし、

然れとも吠派に内秘教と公開教とあり、專ら萬有知識を得るを以て解脱の唯一方策となすは内秘教のとにして是れ直ちに通俗に適用し得へきに非す、多くの信者は信仰に依らさるへからさるが故に、階級解脱の制を設け、漸次近より遠に、卑より高に到らしむ、其階級を十四段となし、梵天は第十四段則ち其最後に在り、左れとも此梵天は劣等梵天にして亦生滅あるなり、劣等梵天滅するに至りて始めて唯一本躰たる梵天に歸沒し、再ひ輪廻するの患なきを得るなり、

大乘佛教にも頓教と漸教とあり、利根の菩薩は頓教に依り、初發心の一瞬時俄かに圓滿の知識を領得して眞解脱を得るなり、左れとも鈍根劣機のものは斯かる頓速の教に耐へす、故に種々の設計方策を施し巧みに引導し來りて漸次其機を調熟するの漸教あり、華嚴の會坐に文珠普賢の二菩薩のみ能く證語したれとも、其他は凡て聾啞と一般少しも領解する所なきを以て、則ち方法を改めて阿含方等般若法華涅槃の順序を設けたるも是れが爲なり、と法華經及ひ之に準する諸經論殆んと是等の説を以て塡充せり、故に富永仲基氏の如きは法華一部皆佛教諸説の讃詞にして他の諸部の所説の外別に法華の特有なる教義なしと言へり、其言の當否は今論するの必要なし、但し吠派に公開教と内秘教とを別てるは大乘佛教に頓教漸教顯教密教權教實教圓教別教等の別を立つると其趣きの甚だ相肖たるとを知る

へきなり、

附言

此く比較し來りて其類似點の多きを見れは吠派と大乘佛敎との間に何等かの關係あるとは何人も疑はさる所なるへし、勿論大乘佛敎は吠檀達學派より來れりと斷するは假令誤謬なしとするも甚た不充分なるを免れす、若し大乘非佛説論をして眞ならしめは、大乘佛敎は婆羅門敎より來れりと言ふへきも大乘の敎理たる廣大無邊際にして決して婆羅門敎の一部分たる吠檀達學派の能く包容し得る所に非す、大乘佛敎中には數論の分子あり、勝論の分子あり、瑜珈あり、尼夜耶あり、弭曼薩あり、思ふに百種の外道諸宗は皆大乘佛敎の海中に流入して同一鹹味となれるならん、來ニ至法華會上ニ、總開ニ會廢ニ前四味麤ヲ令レ成ニ一乘妙ニ、諸味圓敎更不レ須レ開、本自圓融不レ待レ開也（天台四敎儀集註上二十四丁）と言へるもの豈に啻に所謂ゆる佛敎に限らんや、華嚴經探玄記一卷五十八丁に六種の華嚴經あるとを說けり、其中の第一に曰く、初恒本者、不思議品云、一切法界虛空等世界悉以ニ毛端ニ周遍度量、一一毛端處於ニ念々中ニ化ニ不可說不可說佛刹微塵等身ニ、乃至盡ニ未來際劫ニ一々化佛身有ニ不可說不可說佛刹微塵等頭ニ、一々頭有ニ不可說不可說佛刹微塵等舌ニ、一々舌出ニ不可說不可說佛刹微塵等音聲ニ、一々音聲說ニ不可說不可說佛刹微塵等修多羅ニ、一々修多羅說ニ不可說不可說佛刹微塵等法ニ、一々法中說ニ不可說不可說佛刹微塵等句身味身ニ、復不可說不可說佛刹微塵等劫說ニ異句身味身ニ、音聲充ニ滿法界ニ、一切衆生無ニ不レ聞者ニ、盡ニ一切未來際劫ニ常轉ニ法輪ニ、如來音聲無レ異無レ斷不レ可ニ窮盡ニ、解云、此通ニ樹形等異類世界ニ各毛端處念々常說無レ有ニ休息ニ、此非レ可ニ結集ニ、不レ可レ限ニ其品頌多少ニ、亦非ニ下位所ニ能受持ニと、更に此意を推す繹るに、時間的には無始曠劫より盡未來際に徹し、空間的には前後左右四角上下に亘り、限なく涯なき萬有は一として然るべき眞理を表示せさるものなし、此萬有が表示せる所ろ則ち清淨法身佛なり、清淨法身佛とは則眞如の異名なり、萬有全躰を包括して餘す所なし、此萬有包括の清淨法身佛は一相平等無別不變なるか故に、特別なる四肢百骸五官あるに非す、四肢百骸五官互に圓融具通するものなり、故に眼として之を見れは一切萬有皆眼なり、耳として之を見れは一切萬有皆耳なり、舌として之を見れは一切萬有皆舌なり、耳たるものも、眼たるものも、鼻たるものも、其他身躰としての諸部分皆舌なり、之れ清淨法身佛の

廣長舌なり、清淨法身佛此廣長舌に依て說法するを華嚴經と言ふ、故に華嚴經の說法は或特別なる時間、特別なる塲所特別なる佛の特別なる舌を假りて出つる者に非す、萬有の常時遍在して必す然るへき眞理を顯示する所以則ち華嚴經なり、故に萬有の無限なるが如く華嚴經も亦無限なり、故に華嚴經は一定の編輯を爲し得へき者に非す、又鈍根劣機の能く領解保持傳布し得る所に非すとなり、然らは則ち大乘佛敎の至極は單に婆羅門敎の諸派を包ぬるのみならす、世界の一切諸敎を合するのみならす、一切學說を容るゝのみならす、實に宇宙間の一切現象を一括したるものなり、偉觀莊景又此右に出つるものなし、然りと雖も此れ只大乘佛敎の他の諸敎諸學諸術諸藝諸業諸務より以て無意無識的に發現する維多宇宙の萬象に至る迄て包攝し盡して餘す所なきを言ふのみ、毫厘の以て大乘佛說論を助くへきものなし、大乘佛敎の高尙曠博なるは其佛說たるが爲めに然るに非すして單に然るが爲に然るのみ、然り而して今日多くの大乘非佛說論者が主張するところ、大乘敎は非眞理なりと言ふに非す、大乘敎は淺薄なりと說くに非す、大乘敎は淨梵王の太子たる悉達の所說に非すと言ふに在り、故に右の如き華嚴經を擠き出して之に答へんとする大乘佛說論者あらんには是れ既に悉達太子の口に大乘佛敎を說かさりしを言ふに同しきなり、然れとも是を詳かにするは本論の目的に非す、余は今此の如き論說あるを見れは大乘佛敎は一切世界の事々物々を以て其敎說とするが故に其內の一小波瀾たる婆羅門敎諸派を取ると固より恠むに足らさるを一言せるのみ、

（完）

健康性ノ宗敎ザラツストラ敎

木村鷹太郎

佛敎の厭世、非社會的なるは既に否む可からずなれり。之に反して近頃漸く我國固有の實行上の主義なる神道に着眼する者出で來り、敎說上眞正の國粹を發揮し、健全なる實行上の法則を立て、以て我國の敎えとなさんとするの勢を生ぜり、これ實に吾人の全力を以て賛成する所にして、又吾人の常に此くあれと主張する所なり。何となれば神道は健全なる思想より發し、生々を主義とし、且國家的なるを以て、我國敎とするに於ては善良至適なる者となす。是を以て吾人は彼の悲哀厭世の佛敎の如きは之を排斥

し、以て此國粹たる健康有爲の神道を以て國家の原理となさんと欲す。而て吾人は世界の諸宗教を比較して、大に我國の神道の意を得たるの一宗教を發見せり。これ即ち波斯のザラッストラ教なり。故に吾人は此教理（專ら倫理實行的の教理を述べ、傳説及び儀式等は此處に畧す）を我國人に紹介し、聊か神道研究の參考に供せんと欲す。嘗て哲學會雜誌第六十號に於て坪井九馬三氏の「ザラッストラ教の大意」と題して述へられたるものあり、讀者幸に參考あれ。

ザラッストラ教を研究せんとする者はZend-Avesta（マクス、ミュラー氏出板 Sacred books of the East IV, XXIII, XXXI 三卷）及び Pahlavi Text（右 V, XVIII, XXIV三卷）を繙くべし。余が今此處に述ぶる所は、「アベスタ」のみに據りたるものにして、又實に其大畧たるに過ぎず、他日又時を得ば Pahlavi Text中の所説をも紹介することあるべし。されども諸君が又各自に此健康性の宗教を研究し、大に我國の神道組織上に利益を與へられんことを勸む。（因に記す、右等の書物は東京上野圖書館にもあれば、在京の人は就て見られよ）

古イランと呼びたる高原あり、ザグロス山脈の南北の平野に於て「メデス」人及びペルシャ人住したり。而てメデス人はザグロス山の東北部に住し、ペルシャ人は其東南部ペルシャ灣に至るの間に住したり。共に勇壯活潑なる人民にして、又「アリアン」人種に屬す。而て彼等其宗教根基の土地たる東北地方即ちオクススの上流、及びバクトリア等より、次第に西方に移轉して、遂には二種の人民は合して一のペルシャ人となれり。

蓋し「アリアン」人種は其初め、オクスス河の上流に住せしが、次第に移動して、一は西方に行きて歐洲に入り、一は南方に行きてペルシャ人となり、他は又東行して印度に入りしものならん。故に印度もペルシャも共に同一人種にして、宗教にも亦多く同一の點あるを見る。これ彼等の移轉するの前に於て、信仰し居たるものゝ分裂變化發達したるものにして、印度に入りては、「ベダ」教となり「バラモン」教となり、ペルシャに於てはザラッストラ教となりしなり。

余は今ザラッストラ教を述ぶるに先き立ち、其教祖と稱せらるゝザラッストラの小傳を記さんと欲す。

（一）ザラッストラ小傳

スピタマ、ザラッストラ（ゾロアストル、或はザルッスットとも云ふ）はザラッストラ教の開祖なりと稱

せらる。然りと雖其何れの土地に住し、何れの時に生卒し、又た如何なる生活を爲せしやに至ては、少も之を知るに由なく、只「アベスタ」經文中の諸處に其名の出で、散逸的の記事あるのみ。其在世の年代に就きては諸說紛々、或人は紀元前六千三百五十年とせるあり、これ最も上古に算したるの說なり。スピーゲルは紀元前二千年の頃にして、アブラハムと同時代の人なりと謂へり。二千年と六千有餘年と云ふが如き、其差非常なりと謂ふべし。されども、紀元前二千年或は千五百年頃となすは、最も眞に近きが如し。

時維れバクトリアは獨立王國にして、ザラッストラはバクトリアに住し、其經典「アベスタ」は又此地に成りたるものゝ如し。されども其著者の誰なるやは又全く知る可からざるなり。

ザラッストラ、父の名はポウルサスパと謂祭司を務め甚だ善良なる人なりしと謂ふ。ザラッストラは亦當時の最良最賢の人にして、よく耕作を勉勵し、勇氣ありて外敵を破り、又祭司の職に在りしなり。其宗教に屬せる人、ザラッストラを德として曰く『我れは彼れの信仰を拜せん、彼は太初に善を思ひ、之を行ひたる人なり。又太初に地を耕えし、太初に知ることを敎へ、神聖の語を有したる人なり。彼は太初の祭司にして又太初の軍人なり、農夫なり、惡魔を碎きし人なり』と。經典の記する所に由れば、ザラッストラの誕生の時は、萬物其の出生を賀して喜びたりと云ふ。

ザラッストラ、敎はザラッストラ以前既に存し居たるものなりと雖、ザラッストラに至りて大成したるものなれば、人呼びてザラッストラ敎と云ふ。而てこれ當時の國敎にして、之を信仰せざるものは異端邪宗を以て呼べり、ザラッストラは此宗教の祭司にして、神を祭り、供物を捧げ、思想言行の正直善良ならんことを祈り、常に太神を思ひ、聖語を念じ、高尙なる示現を得んが爲めに理會力を求め、聖語を人に敎へんが爲めに雄辨の舌を願ひ、現在將來の行爲の法則を敎へんことを神に祈り。又信者の爲めには信者等の、身には光輝を有し、身躰强壯にして豐かなる產業を營み、有德の子孫を產み、又人々長壽を得、此世の生活終れば、光輝あり、幸福なる聖處を與へんことを祈れり。

野に出でゝ穀物豐饒なるを見ては、人民の倉稟充ち、衣食足りて德義の全きを得、幸福多かるべきを喜びしならん。又牧場の軟草の綠に萠ゆるを見ては、これ太神の娘スペンタ、アルマイチ神の着れる新衣なりと想

ひ。雲の如きの群羊の彼處に跳り此處に戯れ長閑けき春の日に遊ぶを見てはこれミトラ神の賜物なりと謝し。牧場を濡ほしつゝ流るゝ小川の畔(ほとり)に立ち、其水の清浄なるを見ては、人も亦此くこそあれと感じ、そを人々に語りしならん。太陽昇りて萬物を照らし、又西山に隠るゝや、月又清き光を流す、ザラッストラ之を見て太陽と月との間、或は厚き友情あるものと考へ、月の光の優しきは、よく萬物を生育し、人に智識を與ふるものと考へ、新月の樹梢に懸る時、滿月の高く空に澄める時、彼れ必ず供物を捧げて幸福を祈りしならん。仰て天の穹蒼には星辰羅列し、其光輝の美麗なるを見ては、これアフラ、マツダの着玉へる衣服なりと思ひ、又南天に輝く所の「シリアス」の星を見ては、大チスツリア神此處にありて、天空の白馬に乗り玉へるの像なりと想ひしならん。

當時ベルシヤ人と他種人との間に戰爭ありしならん、是を以てザラッストラ神に祈るに其已れの屬する人種の勝利たらんことを以てせり。實に彼れの一生は戰爭なり、然り、彼れの宗教は始終の戰爭教にして、吾人人生は悪魔との戰爭中に送るべきものとなす。ザラッストラは神法を世に播め、神の世界(即ち善)を擴張し、以て悪魔の國を滅ぼさんとせり。されども人は常に誘惑あり、志氣堅忍なるもの能く此の誘惑に敵す。ザラッストラの悪魔の誘惑に會ひしこと載せて「アベスタ」經にあり、其大意を云はんに――悪魔の巨魁アングラマイニュー、ザラッストラの自黨に不利なるを以て、之を殺さんことを企て、悪魔中の最悪々魔を擇びて之を使はす、茲に於て悪魔北方地獄より突出し來りてザラッストラを殺さんとす、然るにザラッストラはマツダの神語のよく悪に敵する勢力あることを知れり、故に神語を唱へて曰く『神意はこれ神聖たるの法則なり。現世にありてアフラ、マツダに力を盡くし、神意に從ひて貧民を憐れみし人は、ボーフー、マノー神の富を得ん、ダイチヤの水に供物を奉さげ、マツダの法則を守る可し』と。悪魔此神語に恐れ、歸りて之をアングラマイニューに告げて曰く、我は彼を殺すこと能はず、彼は實に神聖なりとザラッストラ毫も悪魔を恐るゝことなく、起て手に大石を振り居れり、此大石は太神より得たる所のものなり。今度はアングラマイニュー親ら來り、石を振れるの理由を問ふ、ザラッストラ答へて曰く『これ悪魔を打亡ぼさんが爲めなり』と。悪魔曰く『我物を滅ぼすこと勿れ。且つ汝の信仰

を棄てよ、然らば我れ汝に古昔のアジス、ダハーカの如きの富を與へん』と。アジス、ダハーカとは古代の殺人者にして、不義の富財を得たる者なり。ザラツストラ斷乎として答へて曰く『否な、我決してマツダの法則を棄つることなけん、假令我身躰、我生命及び我精神は烈火の中に燒かるゝとも、我確信する所は棄てざるなり』と、アングラマイニユーー又問ふて曰く『汝は其等の語に由て我徒を滅ぼさんとするか』答へて曰く『聖曰（供物を捧ぐる時の器具）「ハオマ」（酒木の名）及びマツダの語はこれ我武器なり。此語に由て惡魔を退治せん、此語に由て汝等を拒がん』と。此くの如く、ザラツストラの一生は惡魔と戰爭し、善神の世界を擴張し、人民を幸福に導かんことを勉め、一旦事あるの日に當ては、兵を手にして戰塲に赴き、事無き時は農事を勵み、和樂の家庭を有したりしが如し。其子三人あり、皆有德の人となりしと云ふ。

（二）　敎理緖言

ザラツストラ敎は善惡の二原論を基礎として建設せる宗敎にして、世界を善惡二界に別ち、兩界共に其主神及び附屬の神及び萬物を有し、其兩界の間には主義の戰爭行はるゝとなす。其善世界の太神はアフラ、マツダ（又はオールマツド、又はホールマツドとも云ふ）と稱し、善世界を創造し、又之を主宰するの神なり。而て此神に附屬して多數の神あり。其中大なる者六あり、第一をボーフー、マノーと謂ひ、善思想の神なり、第二をアシヤ、バヒスタと謂ひ、最も神聖にして七神中最美の神となす、第三をクシャトラバイリヤーと謂ひ、仁惠及び慈善の神なり、第四をスペンタ、アルマイチと謂ふ女神となす、第五はハウルバタートと謂ひ、共に健康及び豐年の神なり。第六をアメレタートと謂ひ不死の神にして又五穀類牧羊の神たり。此他日月火水木金等の諸神無數なりとす。而てこれ皆太神アフラ、マツダの創造せる所にして善世界に屬せり。惡神アングラマイニユーー亦之に對して部下に屬すべき諸惡神を造り、自己の世界を以て善となし、他を以て惡となす。アフラ、マツダは所謂善を以て善となし、所謂快樂を以て快樂となすと雖、アングラマイニユーーは之に反し、所謂惡を以て善となし、所謂苦痛を以て快樂となし、所謂惡を行ふ者を以て最も德行なる者となす。アフラ、マツダは生くを以て主義となすと雖、アングラマイニユーーは死滅を以て理想となす。（宛も佛敎の如し）一方は曰く善（所謂）は我世界の實質なりと。他は曰く、

悪(所謂)は我世界の實質なりと。此くて兩者主義を異にし、道相同じからず、兩世界兩神は遂に調和せずして兩立せり。

ザラツストラの教へによれば、吾人々類は、盡くマツダの世界に屬すべきものと定まれるものなるを以て、吾人はマツダの世界に屬し、其教理を奉ずることとを告白し、以てアングラマイニユーに抵抗せるを宣誓せざる可からざるなり。故に人生は安眠或は涅槃的のものに非ずして、激烈なる戰爭たるなり。興起憤發、以て活動するの覺悟なかる可からざるなり。而て其戰爭の發端は、先つアフラ、マツダとアングラマイニユーとの間にありて、天地創造の太始より二原の戰爭は開かれたり。

(三)　善悪の戰爭

アフラ、マツダは全智全能にして永久より永久に存するの太神なり、彼れ善良なる世界を造れば悪神直に之を害して悪を造る。是を以て太神歎じて曰く『我れ世界を造れり、假令人心をして恍惚たらしむるの美なしと雖、其住者に向ては豈慕はしからざらんや。或は善良なる河のほとり、或は平野、或は堅固なる所、或は穀類豐饒にして垂穗旗なす美はしき所、或は山水明媚の地、或は湖水の邊り、或は牧場豐かなる所、或は輝き美はしき地、或は七河(印度インヅス河の支流パンジヤグの近く)或はガンガの溢るゝ所——是等の地には人民平和に生活し、主長等の統御を要せざるの地——を作れり。此他尚ほ山水平野の美麗なる所を造れり。然るに一切の死を集合せるアングラマイニユー其魔術に由り冬を作り、河水も土地も盡く冷却し、草木凋落し、悪疫流行す。彼れ又悪虫を作り河には蛇を作り、或は穀物を食害する蟻虫を作り、或は不信仰の罪、或は蚊、或は償ふ可からざる不自然なる罪を作り、或は屍躰を焼き(火葬は悪となす)婦女子に月經を作り、人には熱病を發せしめ、或は他國の壓制を作り、而て此善美の世界を損害せり』と、

此くの如くアフラ、マツダ善を造ればアングラマイニユー必ず之に對して悪を作る、是を以てアフラ、マツダ、イマと謂へる信神家に命じて此世界を守護せしむ。イマ神命を承奉して曰く『我れ汝の言を行ひ、此世界を守護すべし、我が此世界に王たるの間は、寒風なく熱風なく、又は病死もあらざるべし』と。而てイマの注意の下に、地は羊群人馬に充滿し、處挾きまでになれり。然るに、アフラ、マツダ、イマに敎ふるに一大

事を以てして曰く『今や嚴寒來らんとせり、霜雪强くして爲めに凡ての動物も死滅し、美麗なる地も忽ちに枯れ凋まん、汝爲めに大なる墻壁を作り、此處に汝及び人民を住はせ、或は群羊及び鳥類を來らせ、綠野碧水を其内にあらしめ以て、衣食に欠乏無からしめよ』と、これ即ち宗敎的樂園にして、此内に生活するものは、地上最善最美の男女、家畜、草木にして、各雌雄を爲せり、而て此處には瘦疱なく、疾病なく、愚鈍なく、貧乏なく、詐欺なく、卑劣なく、嫉妬なく、齒の抜くることなく、人々此内に在て至樂に生活し「カルシプタ」と謂へる鳥、鳥語を以て「アベスタ」經を教へたりと謂ふ。

然るに此後如何にしけん、イマも死し其墻壁も破れたりしか、悪は人類中に入り來り益々强盛となり、アングラマイニユーは悪思想の神アケンマノを造り、アフラ、マツダの造れる善思想の神なるボーフー、マノーに反對し、或は又九萬九千九百九十九種の疾病を作り、人類を悩まし、毒蛇毒虫を作り、草木を枯落せしめたり。是を以てアフラ、マツダは又之を治するに九萬九千九百九十九の方法を敎へ、千百の藥草を天より降らし地上に繁茂せしむ、其時の語に曰く『疾病よ去れ、死亡よ去れ、苦痛よ去れ、熱病よ去れ』と。ツリタと云へる人は、最も健全富有の人にして、病苦の治療法をカハツラ神（小刀のことなり、恐くは外科術ならん）より得て、アングラマイニユーの作りし凡ての疾病を治せりと云ふ。

（四）善悪

（一）悪――凡て不淨なる者は盡く悪の世界に屬す。死は終極の悪にして、一切の不德、不淨、不攝生三十衰弱、亂離、死滅に終らざるなし。而てザラツストラ敎に由る時は、身躰を離れたるものは盡く死にして不淨なり、爪髪の抜け落ちたるも死にして不淨なり、故に之を棄つるにも一種の咒文を要す。呼出せる氣も不淨なり、故に火は吹き消す可からず（火は神聖なり）疾病も不淨なり、月經も不淨なり、產後も不淨なり、故に火より遠ざかること三十歩（三歩の誤りに非ざるか）なれとなす。而て其不淨中の不淨なるものは屍躰にして、悪の人界に入るに最も都合よきは屍躰なり、故に一定の儀式に依らずして屍躰に觸るゝ時は、其人忽ち不淨となるとなす

火は最も神聖なるものにして、アフラ、マツダの子なりとなす、故に屍躰は火もて燒くことを禁ず、しか

のみならず、火に近づく可からずとなす。他はスペンタ、アルマイチと云ふ女神にして、アフラ、マツダの娘なり、故に屍躰を埋めて穢すことを禁ず。水は清淨の神なり、屍躰は之を水に流すことを禁ず。火に燒くべからず、水に流すべからず叉地に埋む可からず、然らば屍躰は如何に取扱へば可ならん。此教の屍躰を處置するの方則及び儀式は非常に嚴重なるものにして、細則甚だ多し、今一々之を記すべからざるを以て、只其大要を云はんに、屍躰は之を一定の場處に棄つるにあり。其之を棄つるの場處は或る高山の一定の處に墻壁を築ける屍躰遺棄所と云ふものにして、「ダクマ」と稱す。これ惡魔の居る所なり、而て棄つべきの屍躰は必ず裸躰なるを要す、衣を之に着けしむるは最惡となす。何となれば衣服は有益のものにして善の世界に屬すべきものなり、故に之を棄つるは不敬神にして且不經濟なればなり、故にもし一糸の屍躰に纒はるあらんか、此糸未來に蛇と化し、死者の精神は之れが爲めに要界に陷りて悲歎せん。故に屍躰は之を裸躰となし、眼は仰て日を見さしめ、天の光を以て衣となさしむべしとなす。犬或は人の死したる地には穀類を蒔く可からず。水に屍躰の流るゝを見れば衣を脱して水中に入り、直に屍躰を取り上げて乾燥なる地上に置くべし、然らざれば水神穢るべしとなす。

ガヒと云へる惡魔あり、其惡力甚だ大にして、彼れの顔面に由りて山より流るゝ水の三分の一は涸れ、美麗にして黄金の如きの植物は枯れ凋ぼみ、地神アルマイチの緑衣も枯る。彼れ人に觸るゝ時は人をして善思、善言、善行の三分の一を失はしめ、惡魔退治力の三分の一をも去らしむ。故に人は全力を以て惡魔を滅ぼすことを計らざる可からずとなす。叉動物にも惡魔に屬するものあり、蛇、鷲、龜或は其他甚だ少なからずとなす。

（二）善。――ザラツストラ教に由る時は、人は善惡の戰場なり、而てアフラ、マツダの世界に屬すべきものたるなり、故に吾人は決して此戰場を敵たる惡原理に委ぬ可からず、全身全力を以て惡に抗抵し、惡原理を人界より稜ひ去らざる可からざるなり。これ即惡と戰爭して善の領土を擴大する所以なり。惡に勝ち惡を拒ぐの方法及び儀式等甚だ種々ありと雖、其最も有効なるものは淸淨なるに若くはなし。『淸淨は至善にして生命の次に貴重すべきもの』となす。而て其淸淨とは、我一身より延て萬年に就て云ふものにして、之に由り

て以て身躰の健全を保ち、苦痛を遁れ、疾病を避け、悪疫を拒ぎ其他の災害を絶つことを得べし。今若し身躰清淨にして健康なるに於ては、精神も亦之に從ひて清く、且つ光輝あるの感あらしめ其反對たる暗黑、卑劣、陰險等を嫌ふに至らん。實に心身の清淨は、一切の悪を拒ぐの最良の方法と云ふべきなり。ザラッストラ教の清淨とは、單に肉躰のみに就きて言へるものなりと思ふこと勿れ、此教へは又精神の清淨ならんことを教ふ、故に曰く『此法(即ち神の教理)に由りて思想、言行清淨となり、其勢力の强大なることは洪水にも勝り、其善其美言語に絶へ、其高尚なることは巨木が森林を抜き出で、卓立せるが如く、其善其美形容めべからず』と、ザラッストラ教は、呪文に實力ありと信ぜり、故にもし悪に逢遇するとあらんには、呪文を口にせば其身忽ち清淨となり、以て悪を拒き之を去ることを得べしとなす、其咒文に曰く『マッダ及びスペンタ、アルマイチの神よ、願くは我等を悪より守れ。悪魔ドラグ(悪魔中に勢力あるもの)よ滅びよ、悪魔の種子よ滅びよ、悪魔の世界よ亡びよ。嗚呼ドラグ滅び盡くせ、北方に遁れ去れ、此神聖なる世界に死を與ふること勿れ』と。又悪に面し之を退治せんには左の咒文を唱ふ可しとなす、曰く『神意はこれ神聖たるの法にして、此世に在りてマッダの爲めに力を盡くし、マッダの意に從ひて貧民を憐れみし人は、ホーフー、マノーの富を得ん、ダイチヤの水(神聖古所)に供物を捧げマッダの法則を重んずべし』と。

ザラッストラ教は大に「言語」を尊びたり、故に神語其物は獨立的客觀的の存在を有し、其語自身に一種の功德或は勢力存せりとなす、故に此世をして最も進步せしめ、健康を益し、悪に敵し、幸福を與へ、憂苦なからしむるには聖語を唱ふへしとなす。聖語の中、其最も有力なるものはアフラ、マッダの名なりとす。之れに二十の異名あり、みな此教の理想及び德義の念を示めせり。アフラ、マッダ自ら其異名を教へて曰く『第(一)我名の名たるやを問ふ其質問なり、第(二)群羊を與ふる者、第(三)强者、第(四)全聖、第(五)聖教より來る所の一切の善、第(六)理會、第(七)理會者第(八)智識、第(九)智識者、第(十)幸福、第(十一)造幸福者、第(十二)君主、第(十三)慈善、第(十四)無害者、第(十五)勝つ可からざる者、第(十六)眞實を語る者、第(十七)全視者、第(十八)醫治者、第(十九)創造者、第(二十)全智者なり』と。

(未完)

雜錄

貧民救濟

石垣祐五郎

金殿玉樓に其飽暖を貪り、盛饌珍羞に其口腹を肥し、出るに金輪雲龍あり、入るに巧笑美目あり、綿繡の衣を着て、珊瑚の鞭を振り、一たび顰し、一たび笑へば、數十の便嬖忽ちに來りて、その使令に應ぜざるなし。是れこれを社會の寵兒なる富者の狀態となす。宿るに家なし、流離顛沛をいかんせん。食ふに糧なし、饑鬼のせまるをいかんせん。着るに衣なし、冱寒をいかんせん。學ぶに資なし、空擧をいかんせん。あはれ炎熱寒水、或る時は身凍え身煮らる。さるにても蓬頭垢面、その色灰の如くその色菜の如く、四時を路頭に呻吟して、沒廉耻に是れ安するものを、社會の繼子なる貧者の狀態となす。二者を併せ視たらんには、誰かその逕庭の甚しきに驚かざるものあらんや。かゝる狀態を稱して社會は獨文明と云ふか、もしこれをしも文明と云ふべくんば、余は斷乎として文明を排斥せんと欲するものなり。見よ文明の首府と歌はるゝ英都ロンドンは、その住民貧富の懸隔實に甚しく、家なく財なく、夫なく妻なく、兒なく親なきもの數十萬の多きに達せりと。若しこの事の果して眞なりとせば、余も亦ヘンリー、デヨルヂ氏と共に、今日の文明は、逆歩なり退歩なりと呼ばんのみ、否今日の文明とは、果して如何なるものをさして云ふか、余は甚だそを辨知するに躊躇するなり。あはれ人事もとより意の如くならず。されど世諺に所謂物の齊しからざるは、物の情なりと觀し來り觀し去るといへども、貧富の懸隔かくまでに甚しきを來し、貧者益々賤められ、富者いよ／＼貴ばるゝに至りては、吾人實にこの社會のために、一大長息を發せずんばあらざるなり。否これが救濟法を講ぜずんばあらざるなり。

吾人社會を通觀するに、一國の最多數を占むるものは、實に貧民にして、國家の盛衰を支配するものも亦貧民なりとす。この最多數なる貧民をして、救濟そのよろしきを得る時に於ては、國家の利益、國家の躰面實に著しき光輝を見るに至らん。これに反して彼等貧民を自然に放置せんか、國家の經濟を攪亂するのみならず、一國の躰面を毀傷し、國民の品格を失墜する實に夥しきものとならん。見よ海外出稼醜業婦のために、いかに我國民の品格を毀傷せられしか、いかに我國民の損

害を被りしかを。彼等醜業婦のために、確然獲らるべき國利上の機會も之を得ること能はずして、徒らに他邦人の壓倒する所となり、例へば崑崙に入りて片玉だも獲る能はざりし如き現象は、明に吾人の眼前に反射せられつゝあるにあらずや。

然らば如何にして彼等に允當の職業を與へ、文明の發達と共に從來の如き巨弊を未發に拒ぐことを得る乎。」抑も我國貧民救濟の方法は、古來の賢哲頗る論ずる所少からずといへども、時勢に應じて變通するものにあらざれば、また其の實効を收むる能はず。現今の第一手段は獨り彼等を新占領地に移住せしむるにあるのみ。貧民なるものは、種々なる原因より起れるものなれども、社會の狹小なるがため、彼等に供給すべき職業なきに因れるもの亦其一原因ならん。此の故に彼等に職業を與へんと欲せば、勢彼等を包容し得る所の社會に導かざるべからず。彼等は畢竟其のなすべき事、また爲し得べき事業のなきが故に、なさゞるのみ働かざるのみ。もし彼等に應分の職業を與へんか、漸次に其の緒に就き遂に、十分にその力量を伸張して、吾人に均しき事業を營むを得るに至るべし。獨り吾人と均しき事業を營むのみならず、或は余等の企て能はざる大事業を成功するやも未た以て圖り知るべからざるなり。如何となれば彼等貧民と雖も、先天の能力を有して産れ來れるものなり。苟くも氣力を鼓舞して勉勵する時に於ては、余等と何の異なる所なきものなればなり。

倩々瞽るに、彼の廣漠たる新占領地は、幾多の璞玉渾金を包藏して、吾人の來りて採堀せんことを待つもの、如し。彼等貧民をして彼地に移住せしめんには、漸次にして氣骨稜々たる黎民となるや疑ひなかるべし。果して玆に至らんには、是れまで蔑視せられたる會辱の耻を雪ぎ、豐穎なる國民とやならん。もしさらんには實にロンドンの弊俗に凌駕し、東洋の文明は特種の偉觀あるを、西洋諸國に誇示するを得ん。またこれ一大快愉の事にあらずや。

然りと雖も社會の繼子たる貧民は、實に不幸なるものなり。彼等もとより罪人にあらず。されど彼等は殆と罪人視せらるゝなり。一簟の食一瓢の飮も彼等のためには献するもののなきのみならず、却て嗟來の顏色を仰くあるのみ。「ロベルト、ボルンンス」は、貧民なる彼等に同情を表して歌へり、曰く、

彼の貧寠なる過勞の可憐児を見よ、何ぞかくの如く憐憫なるか、何ぞしかく野卑なるか、彼等は實に人

にして人にあらず、彼自身は禽獸の業を執ればなり。彼れ同胞の兄弟なる富者に向ひ、拜伏また拜伏して勞働の便を求む。彼れ同胞の虫なる貴族を見よ、請ふものゝ妻は、凍えて涙を垂れ、その兒女は飢えて泣くも、頑然として其の求めを拒絕せり。と、

この情態を觀察し來れば、實に彼等は憐むべきものにして、實に保護せざるべからざるものなり。而して彼の歌は外國の賤俗の詠じたるものなれども、不幸にも我國もまた殆と彼が同轍とふまんとする傾向あるは、慷して以て慨すべきことなり。故に余等は大に貧民救濟論を主唱せんと欲するものなり。而して之と同時に、世の大方の熟慮を請はざるべからざるものあり、曰く、貧民を永久の貧民として取扱ふ勿れ、彼等に貧民てふ醜辭を永く冠らすること勿れと。如何となれば貧民をして彼等を救助するは「肉躰的に之を救ひ、精神的に之を殺す阿片劑なればなり」。金員物品を貧民に惠むは彼等を永久貧民の階級に坐せしむるものなればなり。貧民たることを世に告白せしむるものなればなり、彼等の品彙資格を失墜せしむるものなればなり。彼等の廉耻心を消滅せしむるものなればなり。是に由て之を觀れば、眞に彼等を救濟せんと欲せば、須らく右手を以て彼等を職業ある世界に導くと同時に、左手を以て彼等を鞭撻して、現在の憎むべく耻つべき地位より離れしめざるべからず。眼前に職業ある世界を示して、彼等の惰性を皷舞し、この賤しむべく辱づべき階級より解脫して、彼の高尙なる世界に移らしめざるべからず。

貧民救濟は、金員物品を惠與するのみの意味を有するものにあらざるなり。不幸なる同胞のために巨額の金員を抛ちて、隣れなる貧民を救助する素より惻隱の心の發動にして、予與民の所謂仁之端也と云ふべくして、敢て一概に之を排斥すべきことにあらざるなり。然れどもかゝる目前の事にのみ盡力し、肉躰の救助にのみ力を致して、永久にして且つ精神的に救助するにあらずんば、企圖する所の好果を得ずして、却て疾悪する所の不結果を招くのみ。豈愼まざるべけんや。されば永久にして精神的なる海外移住產を能く施し能く行ひ、禮玉渾金の我等を渴望して、吾人の到るを待ちつゝある如き新古領地に貧民を送り、各自適當の職業を與ふる時に於ては、須臾にして豐頰皷腹の人民とならしむることを得べし。一視同仁に熱愛なる士は、須らく此等の策を講じて、彼等貧民を移住せしむることを圖ら

ざるべからず。

以上の言たる極めて其の大體を記述せるまでにして、未た十分の意志を盡さずと雖も、貧民救濟に對する吾輩目下の意向は、稍々之を以て急需の務たりと信ず。若し之を仔細に論述するに至りては、請ふ之を他日に讓らん。嗚呼今や貧富の懸隔日一日に甚しからんとす。憐憫頼るなきの貧民を以て、文明界に通有せる一般の傾向なりとして、これを雲烟と共に看過する能はず。是に於て乎自ら揣らず、鄙見を陳して大方の教を乞ふに至る。また是れ國民たる情感把りて、同胞たる貧民に推し及ぼしたるのみ。豈辨を好まんや、豈辨を好まんや。

基督教に於ける佛教の感化

（井上哲次郎）

若し試に基督教と佛教とを比較考察せば、其間に到底相容るべからざる差違あるに拘はらず、又顯著なる類似の點あるを發見せん、然るに其類似の點たるや、初め之れを思惟する時は、未だ大に注意を惹くに足らずと雖も、若し尚ほ推究討尋して、抑々世界の歷史上如何して斯く併行せるか如き事變を演せしかを思はゞ、其奇異なるに驚かざるを得ざるものあり、是を以て近世の學者中或は兩教の關係を尋念して基督教は間接に佛教の感化を受けたりとするものあり、既にして之れに賛同するもの漸く多く、遂に基督教は全く佛教より出でたりとするものあるに至れり、今日までの處にては種々なる點より基督教は必ず當に佛教の感化を受けたるなるべしと推測するに止まりて未だ正確なる歷史的事實によりて之れを證明するに至らざるなり、然れども其推測たるや、亦多少の根據なしとせざるなり、

今余の見聞する所を擧げんに、ショッペンハウェル氏曰く、「新約全書は如何樣にかして印度に淵源するものならざるべからず、其全く印度的にして、道徳を禁慾に導く所の倫理、其厭世、及び其化身主義之れを證す」と、氏は何等の歷史的事實をも擧げざれども、基督教の中に分明に印度的元素あるを見て、其如何にして然るかは知らざれども、兎に角、基督教は印度に出でたるに相違なしとせり、氏は遂に論斷して「總べて基督教に於て眞實なるものは又婆羅門教及び佛教に於て之れあり」と云へり、(Parerga und Parallipomena, Bd. II, S. 407—408) ルナン氏も亦其耶蘇の傳 (Vie de Jesus,

P. 101—102）に「エッセニアン」宗徒の事を記して左の如く云へり、

肉食、飲酒、女色を禁ずるとは默示者の試驗と見做されたり、人皆以爲く、宗派の長たるものは、敎會の創立者と同じく、特異の規律及び法則を有して、隱遁者とならざるべからずと、少年輩の師範も亦時ありては仙人の如きものにて、頗る婆羅門の「グールー」（即ち阿闍梨の事）に類せり、其實是等の點に於て或は間接に印度の牟尼の感化あらざりしか、佛敎の僧侶は後の初發の「フランシスカン」宗徒の如く、世界を歷遊し、外部に向ひて說法し、己れが言語を解せざるものを訓戒して化宗せしめしが、彼等が確にシリー及び巴比倫の方よりせしが如く、ジュデーの方より歩を轉ぜしにあらざるか、是れ何人も知らざる所なり、然れども巴比倫は幾多の時より佛敎の光燄を放ちし中心となれり、「ブダスプ」（即ち菩提薩埵）はカルデアの智者として又薩比敎の創設者として有名なりき云々、

ルナン氏は此の如く耶蘇の時に當りて已に佛敎の感化がパレスチナに及べるとを推測せり、リーー氏は千八百八十七年を以て「基督敎國に於ける佛敎」Buddhism in Christendom と題せる書を著はし、基督を以て彌勒とせり、氏以爲く、釋迦自ら預言して我滅後五百年にして彌勒世に出でんとせるに、果せるかな、釋迦は紀元前四百七十年に入寂し、基督は紀元後三十年始めて世に出でゝ布敎せり、然らば四百七十年と三十年と合して五百年なり、此れに由りて之れを觀れば、彌勒は卽ち基督に外ならずと、其說の妄謬、固より論を俟たずと雖も、亦基督敎に於ける佛敎の感化を認識するものなり、氏曰く「英國にありては新舊約全書の研究は人の最も鄭重にする所なれども、印度の宗敎に至ては殆んど之れを學修するものなし、然れども後者は前者に付與するに實に無限の光輝を以てするものなり」と、英國人にして敢て此言を發するに至る、時勢の變遷、以て知るべきなり、然るに頃ろ露國人にしてニコラス、ノトヴヰッチ Nicolas Notovitch と稱するもの西藏に於て耶蘇の傳 Vie inconnue de Jesus-Christ を發見せりと揚言し、耶蘇は曾て印度に至り、佛敎を學修せりと唱道し、一時世人の好奇心を動かせり、彼れの言ふ所、固より學者の一顧を價するに足らずと雖も、彼れをして事、此に出でしむるもの、亦基督敎と佛敎の間に何等かの連絡を求めんとする意あるが爲めに外なら

ず、彼れ偶〻衆多の代表者となりて社會の表面上に現はれ出でしのみ、マクス、ミュラー氏の如きはニコラス、ノトヴヰッチ氏の事蹟の信ずべからざることを辯明して最も適切なり、(Nineteenth Century, No. cc XII) 然れども氏も基督教に於ける印度の感化を否定するものにあらず、否、或は此の如き關係の途に發見せらるゝことあるべきを預言するものなり、カルス氏亦「一元論者」The Monist と題せる雜誌の第五冊第一號に「佛教及び基督教」を論じ、其末に云く、

吾人は佛教徒が其宗教を傳播する爲めに、焚ゆるが如き熱心を有し、彼等は世界の如何なる部分にも宣教師を派出せしを知る、若し佛教の宣教師が總べて其近傍の諸國に往き、獨りパレスチナのみに往かざりしならば、又聰明なる格言は他の言語に譯出されたるに、獨り其神聖なる文學の重要なる教義は然らずとせば、豈に奇怪と謂はざるを得んや、

氏も亦ニコラス、ノトヴヰッチ氏の妄謬を云へども、佛教が間接に基督教に感化を及ぼせることは疑はず、啻に之れを疑はざる而已ならず、又公然之れを主張するものなり、余も亦大抵カルス氏と其見る所を同うせり、耶蘇の曾て師事せるジヤン、バプチストの如きは蝗と蜜とを以て食となし、駱駝の皮を着て洞穴中に潜伏せり、其狀態は全く印度の「サンニヤーシン」Sannyasin に似たり、猶太教は元來樂天教の性質を有せるに、後、漸々厭世教の性質を帶び來たり、ジヤン、バプチストに於て吾人は厭世教を實行せる者の標本を認識す、而して基督の教義にありては此傾向の益〻發達せるを見る、若し能く是等の事を考察し來たれば、基督教の間接に佛教より受けたる感化は、如何なる人も容易に否定するを得ざるべし、然れども吾人は今尚ほ研究の途次にあり、聊吾人疑惑の存するを述べ、以て世人に新規の傾向如何を指示するに過ぎざるなり、

印度佛徒是唯物論者(アレナ雜誌より抄譯)

(『西藏佛教の探撿』を讀む)

東洋の思想、近來歐米人の耳目を聳動し、彼等の腦頭に映ずる所、變化し來るもの尠しとせず、中に或は東洋思想の深邃浩瀚を愕視し、西洋文明思想の如何にも皮相にして、祇だ物質的にのみ趨けるを自ら罵る、他山の石、磨くに足りて餘りあるかな。智識を獲得するは最上の慾望、眞理を闡明するは終局

の造詣なり、智識の發達や、恰も山巓に登攀するが如く然り、登るに從て眼界に映ずる世界益々廣く、益々廣きに從て先の觀念益々不完全なるを知り、其觀念不完全なるを悟りて而して緒論の益々不確實なるを見る。

西人の東洋思想に於ける探按、恰も斯の如し、虛實相ひ半ばして、未だ實相を詳審する克はず、東洋の思想、之れ思想界に於ける刻下焦慮の一問なり、蓋し近世世運の進渉に伴ひて、宗敎思想界を撼搖し來りたる素因は、思ふに物質界に於ける科學の進步、考古學上の發見、世界各國をして互に相ひ接近せしめ、所謂四海同胞の實現を促長したる機器の發明、心意現象の科學的核査、及び此等に繫連する諸勢力なるべし、而して東洋思想の探按、東洋宗敎の討究亦其一に居る、孔孟の道義、彼斯の『アヴェスタ』印度の『リグヴェダ』佛敎經文、ストイック派エピクテタスの道義等に於ける觀念、新探按の方法に因りて益々西漸し、人生の觀念、人生と無限との關係に於ける思想、漸々變化し、來る、然れども其間謬妄を提說する者、亦洵に鮮少なりとせず、『西藏佛敎の探撿』の如き亦然り。

余は印度玄妙の哲理を周透に討究し、心意現象を仔細に督核せしと玆に年あり、私に思ふ、我れ印度玄妙敎徒の眞相を知り、其正確の智識を得たりと、批評を試むるに當り、提說の典據を攄ぶるは强ち妥當を缺くにもあらざらんか。

博士ヘンフルトなる人あり『西藏佛敎の探撿』と題し、滔々數萬の言、臚列する所、有益の思想なしとせず、余が特に批評を試むるは其原理原則とも稱すべき條下にあり、批評を試むる所以のもの、祇だ或は科學の思想界、正確の智識界に裨益する所あらんかとの老婆心に出つるのみ。

氏は薩彌なる者の言とし記して曰く

劈頭第一に斐除すべきは物質に於ける迷想なり物質と云へる如きは存在する物にあらず稱して外界と云へるは那邊の岩影を毫も撰む所なし……之れ單に心意の發映なるのみ。

又

所謂外界なるものは實在にあらず……物質と稱するものは唯だ心意に存するのみ物を見物に觸るゝの事實は物其物の實在を證明するに足らず。

更に又

玆に今永劫の眞理に到達せり即ち所謂外界なるもの

は遂に之れ『マヤ』なり幻影なるのみ。

第一、之を數萬言中の骨髓、中樞の思想なり、余が觀察をなさんとするは此思想にあり『物質と稱する如き物は存在するものにあらず』『物質と云へるは單に幻影なるのみ』彼等は決して斯の如き思想を把持せず、其哲理とする所、亦斯の如きものにあらず。

斯く大誤解を來したるは抑も何故、余は之を知らんとを欲せず、然れども誤解たる、彼れ印度の僧輩を初め、其哲理及び敎理を誣ふるの太だしきものなるを知る、世間彼等の哲理に關し誤謬を傳ふる者往々之れありと雖も、斯の如く太だしきは未だ嘗てあらず、啻に哲理のみにあらず彼等が生活、風俗、習慣等をも誤傳するの結果、洵や彼等の眞想は拿獲し詳審せられざるなり。」言議をなすに當り提說の眞謬何如は一に讀者の判定に委す。强ひて余が說を信憑するを願はず、蓋し余が說と雖も斷々乎として全幅正確なりや否やは一問題たればなり、然れども氏が論文其自身に於て、既に著るしく抵牾し齟齬する所なり、讀者或は輕々看過する者あるべしと雖も、少しく注意せば必ずや之を認識すべし、請ふ試に其一二を指摘せんか。

薩彌の言に曰く

吾等(印度人)は米を食し多くは一日一食を以て滿足す食の質は一椀の飯に鹽を和して甘んじ久しきに堪ふる一片の布は吾等の要する衣服にして住所に至ては數个の竹片と椰子樹葉とを交接參錯すれば即ち足りて餘りあり。

斯の如き言が彼れ印度人の口唇より發したるものなるや否や、之を知らずと雖も、今試に『物質は幻影なり』との原則を之に應用し見ん、もし彼をして此原則と致を一にするの言を吐かしめしならば、彼れ必ず左の如く謂ひたるならんか。

我等想像的のもの(印度人)は幻像的の穀類(米)に於て生活し、多くは一日に斯る一幻像(一食)を以て滿足なり想像す、炊ぎたる穀類的幻像(飯)の一幻影(一椀)と想像的調味物の出現(鹽)は凡て我が假想的味覺を甘んぜしめ、幾多の時の幻影(永年)の間連續する誤想(布)は凡て吾等が要する虛無(衣服)なり、虛想(住所)に至ては數个の想像(竹片)に虛無(樹葉)を合すれば即ち足るに餘る。

又彼の言に曰く『卿等は男の爲に力を用ひたれど吾等は腦の爲に働けり』、然れども若し彼にして言を其幻影哲理と一貫せしめんと欲せしならば彼れ左の如く謂ひ

たるなるべし。

卿等は男と稱する形骸的幻影の中にある想像の爲に力を用ひたれど、吾等は腦と云へる想像の上に位する尙一層高尙なる幻影の爲に思考をなせり。

以上彼が言を修正翻譯し見るに、矛盾撞着の元素太だ多し、然れども余は博士を排斥せんが爲にあらず、祇だ彼れ印度人が自己の思想を現さんが爲に使用したる言語中、博士の論文の示せる哲理は炳然たる牴牾の存する事實を尙一層明瞭に解說せんが爲のみ、彼が口より出でし言語は一言片句、殆んど皆同樣の撞着齟齬あるを見る。

例之彼の言に西藏市の如き、喜馬拉の高サの如き、心の如き、富貴、榮華、家畜、獸性人類、カスミール谷の如き、手、耳、眼及び腦の如き、動物、岩石、樹木、物質の所有、財産及び萬古の星辰の如き、心の苦痛、精神上の性質より區別したる肉躰の苦痛、物質上の性質の如き、精神的修養と區別したる物質的進歩の如き、其他純然たる有形物の語太だ夥し、加之精神界にあらざる世界に實在するを認識するの語をも用ひたり、彼れ有形物質の性質を認識するの證跡、斯く畜積するにも關せず尙ほ『物質と稱する物は心に存するのみ』『物質と云へるは存在するものにあらず』と、何人と雖も彼が言と其哲理の原則との間に著るしき抵觸矛盾の存するを認むべし、僞論として非難を加ふるの餘地綽々たり。

第二、若し彼が言語のみより判斷を下せば、此學派の終局の目的は『物質の幻影』を除去するにあるものゝ如し、彼れ此幻影を以て幽思瞑想を凝す道を閉塞する一大障礙なりと云ひ、而して東西智識の比論に及び、東洋を以て勝れりとなす、彼か哲理の說明に從へば大悟徹底の域に達せんには先づ『物質の幻影』を脫却せざる可らず、『物質の如きは存在するものにあらず』の智識に進まざる可らず、且つや博士が『薩彌は恐らく大智識釋迦牟尼以降何如なる印度人も未だ曾て到達したるとなき殆んど完全なる玄妙智鍊に臻れる一人なりと』云へるに至て、口惜しや爲めに懷疑論者の鋒先も鈍ぶりて哀れなり、もし之をして眞ならしめんか、恰も夜ありて晝の臻れる如く、彼の到達せし域には『物質の如きものは存在するものにあらず』又至れるは必然の勢ひにして、彼れ亦多言を費して然か云へるなり、然れども需要を最底度に減殺したる後、彼自身も尙ほ米を食し、衣服を着し、而して竹片を椰子樹葉と交接し

たる家屋に住活す、此事實は何如に其哲理と相ひ調和するを得べきか、彼れ此等の物を以て其住活にすら必要なる物と云ふ、然れども米、衣服、竹片、樹葉は之れ何か、物質ならされは幻影なり、二者其一を取らざる可らず、もし之を物質なりとせば幻影哲理は打破し去られて、滅茶たらん、又之を幻影なりとせんか、薩彌は幻影を食し、幻影を着し、而して幻影の家屋に住することを確認するなる可し、之れ是認する能はざる所、普通以上の智識ある者は何人と雖も彼が思想の欠々たると、其哲理の謬妄とを認めざるはなし、二者何れの一を取るも遂に兩立する能はざる齟齬撞着を免れず。

第三、物質の實際存在せさる證據を覓めんとして博士彼に問ふて曰く『那邊にある千古の丘陵豊饒の原野も尙ほ實在にあらずして我心に存するのみと云へるか』博士を奇異に流眄し手を動かして後、薩彌答へて曰く『千古の丘陵かそは今何處にか存する』博士尙ほ記して曰く『余は眼眸を回らして白雪朧々たる喜馬拉の方向に一轉すれば虛空の外一物の眼を遮るものなきに一驚を喫したり千古の丘陵豊饒の原野も有耶無耶の間に消失し去て縹渺蒼茫祇だ大空の瞑中に漠々たるあるのみ身は地磐の上にあるを感ぜしも蛙下の巖石悠忽消て其影を歩ず氣魄驚て夢幻の中にあると八分乃至十分忽ち豁然として丘陵の形影摸稜吾眼界に來り又數分にして丘陵舊の實在に復して大荒に明なり』

之を見るに『夢幻の中にあると八分乃至十分云々』、博士は此塲合に於て丘陵の消失は幻影にして其再現は之れ實在なることを認識したるなり、之れ少くも眞理たるを失せず、此種類の感觸的幻影は實に普通の現象なり、然れども之を以て『物質は存在するものにあらず』となすは不替も亦甚だし、之れ寧ろ催眠術の眞理を證明するものなり。

余は既に云へり、近來玄妙敎徒の哲理、敎理の誤解及び彼等の生活、職務の謬妄甚だ多く世間の分流せられたりと、然れども薩彌の物質の存在を否定する斷言の如く、彼等を誣ひ、彼等の哲理を誤るものは未だ曾て之れあらず。此斷定たるや其哲理の原理原則を誤まるの餘りに太たしきを以て、余は簡單に之が眞相を述べざるを得ず。

『物質の如きは存在するものにあらず』『吾人が物質と稱する物は唯心に存するのみ』彼等は決して斯る事を信ぜず亦敎へざるなり、否彼等の哲理の基礎根本たる原理原則は物質は至る處に存在すと云へる一大普通の

眞理にあり。有形の世界は物質の世界たるのみならず、無形の世界も亦同しく物質なり、兩界共に物質なるは物質なる文字の示す如く然り、一箇人の精神が物質的有機躰なるは之れを展包する身躰の有機躰なると相同じ、兩者共に物質なり、唯異なる所は一は有形にして一は無形なるにあり、『有形的物質』及び『無形的物質』なる語は之れ彼等が物質の二界を區別する爲に使用する所なり。

若し兩界共に物質なりとせば、其差異は何處に存するや、斯る區別をなすは何の必要ありやとの問題自ら喚起せらるべし、一は純然たる有形物界に屬するを以て『有形的物質』なる至適の語を以て現はし、一は純然たる無形的物界に屬するを以て亦同じく『無形的物界』なる至適の語を用ふ、吾人が鑛物門に屬する物を『鑛物』とし、植物門に屬する物を以て『植物』とすると同一理なり、一の物質なるは尙ほ他の物質なると毫も異なるなし。

然れども此場合に於ては兩者共に有形物質界に屬するを以て唯だ門の細列なるのみ、有形物科學者が據て以て區別すべき金屬と植物との間に存する眞正の差違は如何なる點か、之れ何人も能く知る所なれば玆に擄べず、無形物科學者即ち彼れ玄妙敎徒は有形的有機體と無形的有機體との間に存する差異に據りて或一定の有機躰或は物躰が何れの物質界に屬するやを正確に區別し斷定するなり、然らば其區別の差異とは果して如何なるものか。

(一)區別の差異の一は物躰分子の細微の度、即ち一物躰を構成する各分子の容の相對的大小にあり。

請ふ少しく之を明断ならしめんか。

一器を取り之に盛るに通常玩具に供する大サの大理石球を以てし、器の口縁に至らしむ、之より多くは最早一箇をも容る能はずと雖ども、未だ之を以て充實せりとなす能はざるは甚だ明瞭なり、之れ其球間には許多の間隙の存するありて、此間隙より小なる物躰を之に投入するも敢て溢るゝことなくして收むるを得べければなり、即ち之に小銃彈丸を投入し、又更に砂粒を投入するを得べし、而して次に水を注入せば、水は以上の大理石球、彈丸及び砂粒の間隙に浸入し、外見恰も充實するが如しと雖ども、更に能く蒸溜したる酒精を注き入るゝに敢て溢れざるは、之れ水の分子間の間隙は酒精の分子より大なるが故なり、然れども之を以て全く充實せりと云ふ能はず、酒精の分子間には尙間隙の

存するあればなり、於是更に又流動電氣を注入するも倘溢るゝとなし、然るに此電氣なるものは抑も何物か、物質界に知られたる極微極小の分子より成れる液體にあらずや、電氣に至れば既に無形の限界に達し『細微の度即ち一物躰を構成する分子の相對的の容の極微』に近接す、之より以上に至れば即ち有形無形の限界を越へて、純然たる有形物質界より純然たる無形物質界の領土に入る。

(二)有形的物質と無形的物質を區別し得べき他の差異は合成體に於けるアトムの振動的運動の速力如何にあり。

試に今花剛石一片を取りて凝視するに、之を合成する箇々の結晶中、其振動的運動を認知するを得ず、吾人の視官を以てしては恰も靜止の狀態にありと雖も決して然らざるなり、科學の發見に據れば一箇の石を組成する各分子は間斷なく互に振動的運動をなす、然れども合成躰に於ける此振動的運動は石の塲合に於ては其速力甚だ小にして、吾人の視官を以て能く認知するを得、其結果として一片の花剛石は固定不動の物躰の如く見ゆるなり。

於是更に木片を取り、最も精密に肉眼を以て之を督査せんか、倘ほ之を組成する分子に運動の存するを認むるを得ず、然れども一たび顯微鏡を以て之を撿すれば、其各細胞に極めて微弱なる運動のあるを明に認むるを得べし、此運動の速力は石の塲合に於けるよりも遙に强大なり、强大なりと雖も未だ以て視官を感ぜしむるに足らず、從て其結果として木片も倘ほ石の如く、吾人の肉眼には固定不動の物躰の如く見ふ。

動物躰、膠等は其分子の運動する速力逐次强大となる、然れども冗長の恐あれば今玆に述べず、直ちに一躍して水の塲合に移るべし、水を組成するアトムの振動的運動の速力は石或は木の分子の運動より數倍强大なり、水の分子は相互の運動甚だ容易にして、且つ甚だ迅速なるが故に、吾人の視官は或度を超ゆれば之を追視する能はず、從て水は吾人の肉眼には透明に見ゆ。」

百尺竿頭一步を進むれば瓦斯なり、瓦斯と組するアトムの振動的運動の速力は水に於けるよりも一層强大なり、從て吾人の肉眼は全く之を認むるを能はず、之れ瓦斯を組成するアトムは吾人の視官の追視する能はざる速度を以て運動するが故なり、此事たる科學の原理原則にして疑ふ可くもあらず、若し疑ふの人あらば倘一層明晰の例を擧げん、銃丸の發射せらるゝや吾人が

肉眼を以て其進行する彈丸を見る能はざるは抑も何故ぞ、之れ彈丸運動の速力甚だ大にして吾人の視官が能く追視する能はざるに外ならず、更に又車輪に見んか、車輪にして靜止する時は完然明瞭に其車輻を認むるを得、然れども一度迅速に廻轉せんか、速力愈々强大となるに從て其車輻益々不明瞭となり、遂に全く消失して吾人の肉眼に映ぜざるに至る。

於是か有形的物質の最極端なる電氣と同じく再び有形物質と無形物質との限界に至る、此塲合に於て電氣と異なる所は、唯だ全然異りたる方面即ち物躰を組成する分子の振動的運動の點より其限界に近接するにあるのみ、之より一歩を越ゆれば直ちに有形界より無形界に入る。

以上二原則の外、尙ほ他に有形物質と無形物質とを區別すべき特性あり、科學者は之に據りて或一定の物質的有機躰を分類し、有形無形何れの界に屬するやを正確に判斷して誤らざるは尙ほ有形物科學者即ち物理學純者が然たる有形物質を分類して誤らざると毫も異なるなし、然れども此等の說明を重ぬるは最早徒勞に屬す、玆に余が明瞭ならしめんと欲するの事實は有形物科學者即物理學者は有形的手段を用ゆるのみにして、其範圍は有形物質界の科學的討究理論に限られ、物質の有形無形の間にある限界に踏止まり、之より一歩たりとも進む能はざるにあり。

然れども無形物科學者即ち彼れ玄妙敎徒は此限界より尙ほ一歩を進み、物理界を經て心理界の領土に入る、兩界に跨りて此問題を觀察するの便益なるは、其視官の唯だ純然たる有形物界に跼蹐する輩の意想し能はざる所なり、此所に至り物質の兩界より觀察を下せば、無形物質の法則は凡て有形物質の法則と相連繫するを見る、連繫して遂に破るゝ所あるなし、於是二界共に同一法則の行はるゝを知る。

以上陳述せし所は甚だ簡單なり、簡單にして或は未だ彼れ玄妙敎徒の物質問題に於ける見解を盡さゞる所あるべし、簡單なりと雖ども既に明瞭となりたらんには、彼等の哲理に於ける許多の誤解を矯正するを得るや必せり、而して又或は之より正確の方面に向て更に科學的討究をなすの資たるを得んか、請ふ彼等の哲理は最も正確なる科學に典據することを理解せよ、彼等は實在の大宇宙即ち最も明晰にして感觸すべき實在を是認する者にして最も正確なる科學の智識を無形界の法則に應用し、如何に秘奥に見ゆるものをも討査し盡して、

物質は存在すとの原理的事實を認むるなり、而して其哲理の典據する所は物質は單に存在すとなすのみにあらずして根本的實在なりとするにあり。

以上論じ來り論じ去りたる所は、彼れ玄妙敎徒の哲理の原理原則なり、博士の論文中此原理原則に照らして論議一番すべきの問題幾多あり、即ち狂氣、讀心術、默想幷びに精神啓發に用ゆる方術の如きは、皆多少の僞論にして一々説明するに非らざれば、讀者をして茫然歸する所なからしむ、然れども今一々此に論及せざるべし、論結するに當て余が此文を草したる精神目的の存する所を明瞭にせん、余は批評の精神を以て論じたるにあらず、寧ろ誤解を來すの恐あるを以て之を矯正せんが爲なり、近時斯學の討究益々盛なるに當り誤解の傾向愈々多し、一誤解は一誤解を生じ、遂に歸着する所なし、概すべし。

然れども今日秘奥に見ゆる現象も硏究磬椓の末は早晩之を以て玄妙の哲理として見ざるに至れるは吾人の深く信ずる所なり、彼れ印度の玄妙敎徒は誠實確固たる一協會にして、爾來幾千年、人生の爲に力を盡し、時に或は成功をもなし或は失敗をもなしたり、刻下を雖ども活機潑々として人生の究明に切々孜々たり、他日或は事理を究極して而して益々明なるの期あらん歟。

達賴拉嘛の談話にも亦太だしき謬妄あり、他日或は批評を試むべし。

時評

今後の佛敎界

嘗て歐化熱の盛なりし頃にありては、世間一般に歐米にて行はるゝ事物とさへ聞けば、如何なるものにても完全無缺なるものゝやう思ひ、殆どその適不適を穿鑿せずして之を輸入し、之を應用せんとする勢なりしを以て、宗敎の如きも亦た歐米人の信ずるものと云へば、何となく善く感ぜられ、慕はしく思はるゝことゝなりたるが如し。かゝる有樣なるを以て俄かに基督敎の會堂は繁昌を極め、ミッション、スクールは忽ち生徒を增加し、基督敎主義は思想界の一大流となり、吾人をして基督敎が神、儒、佛の三道を壓倒して、社會の大勢を支配する或は遠きに非ざるかとの感想を起さしむるに至れり。然りと雖ども是れ畢竟基督敎の眞質が我國民の發達に適合するが故に盛んなりしにあらずし

て、單に歐化熱の影響を蒙りて一時勢力を得たるものに過ぎざれば、近年歐化熱の漸次冷却し、國粹主義の代て興ると共に俄かにその勢力を減ずるに及べり。即ち今にして明治十五六年より二十二三年頃までの基督敎の形勢を回顧すれば、是れたゞ一時の流行に過ぎざりしを知るのみ。然るに基督敎の漸次勢を減ずると正反對に漸々力を得るに至りしものは佛敎なり。維新以來殆ど死したるものゝ如く見えし佛敎は一朝活氣を得て忽ち思想界の一運動たらんとするに至れり。是を以て久しく反古同樣に扱はれし佛典は俄かに學者の机上に上り、廢物の如く遇せられたる僧侶は一變して、學界に歡迎せられ、佛學の研究は日を逐ふて盛大に赴き、雜誌の發刊は月に增加する如き有樣とはなりしなり。實に此數年間は佛法研究の最盛なる時期と云ふも敢て過言に非ざるが如し。斯の如く佛敎が俄然復興するに至れりしは抑も何によるものなるか。請ふ吾人をして少しく之を尋ねしめよ。

近來國粹保存說、及び東洋主義の主張せらるゝに至りしは佛敎の復興に大に與て力あることゝなるべしと雖ども、尙ほ他に重要なる事情なくばあるべからず。然らば重要なる事情とは何ぞや。即ち、佛敎が深邃幽玄なる哲學思想を含有することと是なり。この特性は近來佛敎をして一方に於ては基督敎を排し、他方に於ては遙かに神、儒兩道の上に出でしめたる主要の事情たるなり。されど佛敎固より斯る特性を有すと雖ども、若し社會の狀態にして之に適合せざらんか、決して勢力を得る能はざるべし。然るに近年歐洲の哲學思想が一たび我學界に入りしより、之にインテレストを置くもの比較的に多く、幾くもなくして世間一般に哲學てふものは最高の權威を有する學問なりとの感想を起さしむるに至れり。固より一通り歐洲哲學の發達を知る如き人は未だ極めて少數の學者たるに過ぎざるべしと雖ども、多少の敎育あらんものは如何なる人も哲學上の問題に耳を閒け、其一端を學ばんとする勢とはなれり。即ち、哲學は近年我邦思想界の一大流行となり何事も哲學にあらざれば思想界の夜は明けぬものゝ如くなれるなり。是を以て宗敎上の事柄にても、道德上の問題にても凡て哲學上より論ずるに非ざれば價値なきものゝやう感ぜられ、たとひ三文の價なき事にても哲學上云々とさへ云へば大に世人の注意をひくに至りしなり。夫れ社會一般の傾向斯の如くなれるを以て、哲學思想、殊に幽玄なる形而上學的思想を含める佛敎は忽

ち思想界に歡迎せらるゝことゝなり、人々競ふて之を研究せんとするに至れり。而してたとひ自ら研究する能はざるものと雖とも、兎角に、佛教は哲學的宗教にして世界の諸宗教中最も高尚なるものとの感想をいだくに至りしなり。これ社會の大勢と佛教の特性とが遇々適合したるより起れる現象にして、即ち、社會の注意が哲學的思辨に向ひたるより本來哲學思想を含める佛教は勢を得るに至れるものと云ふべし。

然るに哲學流行の時代は決して永遠に續くべきものとは言ふべからず、既に社會は幾分か哲學上の空論に飽きて實際上の問題に傾けるが如き有様となれるに似たり。社會の形勢自ら斯の如くなるに、昨年以來戰爭の爲め社會人情の上に非常なる變動を起し、人心の傾向將來何れにあるか未だ充分定らすと雖ども、今日の事情を以て之を推測すれば、今後社會の大勢は萬事實際を重じ、實力を養ひ、愛國心を盛んにし、勇進敢爲の氣象を勵ます等の如き凡て實際上の問題に向はんとするが如し。若し夫れ我が邦にして將來世界の競爭場裡に立て獨立進歩を保たんには必ず斯くあらざるべからざるなり。而して今や我邦の有様は俄然として新境遇に入りたるものにして、之に順應する爲め極めて繁多なるものと謂はざるを得ず。是を以て今後我國民は、哲學、形而上學等の超絶的問題に意を注ぎ、空理空想を弄びて、靜寂なる快樂を貪る如き餘暇なきは勿論なり。朝野共に國民の實力を養成し、愛國敵愾の精神を盛にし、活潑進取の氣象をもやし以て國家の獨立進歩を計る爲めに全力を捧げざるべからざるなり。

斯の如くなるを以て是まで社會の流行が哲學に向ひたるによりて一時勢力を得たる佛教の研究は忽ち等閑に附せられざるを得ず。そは斯る超絶的の問題の爲めに費す閑日月は決してなかるべきを以てなり。是に於て佛教をして今後益々盛ならしめんとするには、これまでとは全く異りたる方面を以て社會に向はざるべからず。今や理論的佛教は既に用なければ、他の方面を以て社會の需用に應せざるべからざるなり。若し尚ほ依然として理論的方面を以て社會に立たんとする如き愚をなさば、遠らずして再び社會の識域以下に落ち去らんのみ。基督教が歐化主義の衰ふると共に勢力を減じたると毫も異なる所なかるべし。これ佛教家の大に警覺すべき點なり。然るに佛教中決して人物乏しきにあらず、八萬四千の法門社會の變に應ずるに不足なるにあらず。されば今後尚ほ依然として空理空想に固着し、

出世間の夢を結びて、無用の長物となる如き愚を學ぶことは萬無かるべしと雖ども、また一方より見れば吾人多少の疑なき能はず。世の佛敎家たるもの今後宗敎が社會に勢力を得るは形而上學的の思想によるにあらずして、社會的、活動的、進取的の要素を有し、實際社會を活動せしめ、進歩せしむる力の有無によるものたることを忘るべからず、之を要するに、佛敎界今後の盛衰は今日迄とは全く異りたる方面に關するものにして、佛敎家がその新方面を表はしてよく新境遇に順應するや否やによりて決するものなり。佛敎家の經營する所大に其趣を改めずして豈に可ならんや。

『明治淸敎徒』記者の所謂實驗

竹内生

「明治淸敎徒」第七號に於て同誌記者增野悦興君は「基督の完全」と題して基督を以て完全なる人と言ふは如何なる意義なるか、又其の完全なることを知る標準如何等を論ぜられたり。氏の說によれば、基督は宗敎學上、道德學上の知識を有する點に於て完全なるにあらず、恐らく是等の學問に於ては今日の大學卒業生が有する程の知識をも有せざりしならん。又基督は嘗に政畧家としてビスマルクに如かず、哲學的思辨に於てカントに及ばざりしのみならず、宗敎道德に關する事柄にても亦或點に於ては今のB. D. D. D. 乃至PH. D. 連中に若干歩を讓り、其知識全からず、其言に誤謬ありしとせざるを得ずとなす。然らば何れの點に於て基督は完全なるかと問ふに、人類を罪惡中より救ふ所の救主としてのみ完全たるなり。他の點に於て如何に不完全たりとも、此一點に於ては完全なる資格を有するものとなすにあり。是に依て之を見れば增野君が基督を以て完全なりと信ぜらるゝは決して尋常の基督敎が單にお有がた主義にて迷信するとは大にその趣を異にせるものたるや言はずして明かなり。基督敎徒の口より出づる說としては進歩の最高度に達したるものと見るも決して不可なかるべし。吾人固より多少異論なきにあらずと雖ども、基督敎を主張せらるゝ氏の意見と基督敎徒にあらざる余の意見とが多少の相異あるは云ふまでもなきことなれば此點に關しては茲に論ぜざるべし。然るに基督の完全を知る標準を論ぜらるゝ點に於ては少しく茲に辨ぜざるを得ざるものあり。そは氏が本題を論ぜらるゝに當り、嘗て余が「宗敎」紙上（第四十號）に於て「基督敎復活論」と題して基督論に關す

る卑見を述べたるものを引き、之に答へられたる所あるを以て、余の意見と大に關係する點あるによればなり。即ち余は「基督敎復活論」中に基督を以て完全なる人物なりとするは如何なる事情によるかを論じて、「幼稚より基督風の感化を受け、漸次腦中に一種の幻影を作りたる人にのみ基督は完全なる人物なりと云ふに過ぎず」と云ひたりしが氏は此斷言を以て不可となし、背理となさるゝなり。氏の說によれば、基督と稱する人物の完全なるか、不完全なるかを定むるは吾人の實驗と理性とによるとなすにあり。而して氏は理性と實驗とにさへよれば必ず確實なるものゝやう信ぜらる。固より吾人は實驗と理性とによりて物の眞僞を定むるより外に途なかるべしと雖ども、理性とか實驗とか云ふ如き語は極めて廣き場合に用ひらるゝ語にして、その意義甚だ曖昧なるを以て、たゞ漠然と理性と實驗とに由ると云ふのみにては如何に背理的の議論をも立つることを得べきなり。宗敎上、哲學上などに於ては同じく理性の判斷によるとするも殆ど反對の結論を生ずることあるにあらずや。若し論者ありて、理性とは論理の形式の如く純然たる抽象的概念なるを以て結論は如何に相違するも畢竟材料の變化に過ぎず理性自身は毫も變ずるにあらずと云はんか、之れ自殺的議論たるに外ならず。理性てふものに關しては余の言ひたきこと甚だ多しと雖ども、これ余が茲に論ぜんとする所にあらず。余が今少しく云はんとする所は記者が所謂實驗は一種奇粹たる意味の實驗にして決して科學上に謂ふ所の實驗と同種に見るべきものにあらざる所以を論ぜんとするにあり。今日は科學の盛なる時代なるを以て實驗てふ語は無上の權威を有し、實驗上云々とさへ云へば何人も忽ち服する傾あり。されど氏か所謂實驗は信仰的實驗と稱するものにして科學上に云ふ如き意味の實驗にあらざれば、之に信據する前に果して科學的實驗と同様に信據さる可きものなるか、如何と云ふことを明かにせざるべからず。

抑も眞理と虛僞とを別つは單に自ら斯々の事を實際經驗したりと云ふのみを以て定むべきにあらず。そは心身の狀態は人によりて相異し、時によりて變ずるものなるを以て、甲の人の經驗によれば甚だ熱しとか辛しとか定めらるゝものも、乙の人の經驗には然か現はれざることあり。又同一の人と雖ども時として大に知覺の度を異にすることあり。これ一通り心理學に通ずるものゝ能く知る所なり。是を以て眞理、即ち、客觀的

の實在と符合する觀念を得んには、境遇によりて相異する吾人の經驗にのみ任せおかずして、何れの時に於ても一定不變なる事情（コンヂシヨンス）を設け、其下に於て事實を撿することをなさゞるべからず。例へば、湯の温度の如きは身心の狀態によりて大に實際と相違するものなれば單に各人の感覺とか判斷とかに訴ふるのみにては確知すべからざるを以て、驗温器と稱する一定不變の事情を設け、五感中尤も變化の少き視感に訴へて、その比較的高低を確知するなり。故に眞理の標準となるべき性質の實驗は一定不變の事情の下に於て行はれたるものならざるべからず。これ吾人の經驗を制限する第一則なり。

次に吾人が實驗せんとするものは吾人が此事情によりて直接或は間接に撿測し得るものたらざるべからず。例へば、物質の運動などは不變なる事情の下に撿測し得らるゝ性質のものなるを以て、之を精確に實驗することを得べしと雖ども、直接にも、間接にも、斯る事情の下に置くべからざるものに至りては到底確實なる實驗をなすべからざるなり。即ち感情の量の如きもの是なり。

第三に必要なることは確正なる歸納方術なり。たとひ、外界に實驗すべき事件あり、又之を實驗するに適當なる事情の裝置ありと雖ども、若し之を實驗する方術にして確正ならざらんか、折角の勞力は水泡に歸せざるを得ず。これ一致方術を以て眞理なりと認めたることも、往々誤れることあるを以て、之と共に差異方術を施さゞるべからざる所以なり。故に實驗上云々と云ふも、歸納的論理學の上より見て正確なりとする實驗にあらざれば、以て眞理を示すものとなすに足らず。

科學上に所謂實驗とは上述の如き性質を有する實驗を指すものにして、斯の如き性質ありてこそ始めて實驗てふものに眞と非眞とを別つ價値あるなれ、若し此等の性質を具備せざらんか、實驗てふことは眞と非眞との標準としては毫も價値なきなり。斯の如き實驗は單に特殊の場合に於ける知覺たるに過ぎざるなり。されば「某の事柄は斯々なり、蓋し實驗上之を知るを以てなり」と云ふ場合に於て、某の事柄の實相を定むるに當りて價値ある實驗は上述の三則を具備するものに限る。而して若し之を具へざる實驗は科學上何の價値もなきものと知るへし。

然るに增野君の所謂信仰的實驗とは如何なるものなるか。即ち主觀的經驗にして、之を各自の心識に問ふよ

り外に途なきものなり。即ち、基督を信ずる人が心の中に基督に付きて斯々感じたりとか斯く思ひたりとか、斯く確信すとか云ふまでのことにして、毫も以上述べたる如き性質を具へざるや明かなり。基督の人物が救主として完全なるか、將た然らざるか（但し基督の正傳を知り得るや否やは別問題として）は如何に刻苦するも到底科學的意味の實驗によりて知るべからず、されば如何にして之を知るべきやと云ふに、枚擧法によるより外に途なし。即ち之を百人に判斷せしめて完全なりと云へば、此の百人に取て完全なること判然したるものなり、又之を千人に質して完全なれば千人に取りて完全なるものなり。されど未だ知らざる所に不完全と認むる人なきを保すべからず。況んや實際基督を以て完全なる救主と信ぜざる人あるに於てをや。されど若し氏にして「是れ信仰的實驗をなさゞるが故なり、一たび信仰するに於ては誰か基督の完全なる救主たるを實驗せざらんや」と云はんか、これ基督を信仰するものは基督を完全の救主となすと云ふまでのことにして、即ち余が謂ふ所の「基督教的感情を有する人にのみ完全なり」との事實を證するものに非ずして何ぞや。これ固より其人一個に取りては然らざるに非ず、余は決して「斯る實驗其自身を全然取るに足らず」と云ふものにあらず、飲酒家が酒を味ひて美味を感じ、下口が之を味ひて不快を感ずるが如き意味に於て、其人によりて各意味ありとするものなり。記者の云ふ通り、酒の美味は飲酒家によりて實驗せらるゝ如く、基督の完全なることは基督教ズキの人々に於てのみ實驗せらるゝものなり。斯の如き廣き意味に於て實驗と云ふ語を用ゆれば、單に自ら斯く感ずと云ふに過ぎずして、その個人に限りて眞實なるは勿論なれども、決して一般に認めらるべき眞理と非眞理との區別を立つる標準たるに足らず。即ち斯く信ずるから、然か思ふ云ふ一種の幻影に外ならず。然るに實驗てふ語は科學上の實驗てふことゝ同樣に聞ゆるを以て、「凡て實驗によるものは確實なり」との大前提を喚起し、記者が「基督を完全とするは實驗による」との議論を聞き、忽ち「故に基督を完全とするは確實なり」との斷定を下すものあらば實に大躁輕なるものと謂はざるべからず。

◎内務大臣の訓令

野村内務大臣は五月三十日神道各派、佛教各宗の管長に左の通り訓令せられたり。

◉内務省訓令第九號

神道各教派
佛道各宗派

神道佛道各宗教師は布教傳道の任に在るを以て學識徳行兼備し世上の崇敬欽仰を受くへきものたり故に其分限及等級を定むるに當り特に其手續を精確詳悉にし濫補の弊なからんことを期すへし然るに現今教師中無學悖徳にして其任に適せさるもの尠なからずと聞く斯の如きは啻に教師の本分を盡くす能はさるのみならす其弊延て教義宗旨の不振及徳義の廢頽を來し遂には教宗派の衰微を招き荼毒を社會に流布することなきを保し難し其弊源一にして足らずと雖ども主として教規又は宗制寺法中教師檢定に關する條規の不備に基くものとす是れ實に各教宗派に於て寸刻も其條規を改定するに躊躇すべからざる所なり殊に明治二十三年小學校令の發布以來滿六歳以上十四歳以下の兒童は該勅令第二十一條に該當する者を除の外は小學校其他に於て普通教育を受くるに至れり故に斯の如き人民に布教傳道する教師は教義宗旨に精通するの外尚尋常中學科相當以上の學識を具備するにあらざれば到底其任に適せず仍て各管長は此趣旨を體し左記の標準に據り教規又は宗制寺法を改正增補し若くは其細則を定め本年九月三十日までに明治十七年太政官第十九號布達に依り本大臣の認可を請ふへし

教師檢定條規標準

一　檢定の方法
教師の分限及等級を定むるに試驗に依るものと試驗に依らさるものとあるときは試驗に依るものには志願者の資格、各等級の試驗學科目竝に試驗の方法を記載し又試驗に依らさるものは志願者の資格及無試驗檢定に必要なる條件を記載すへし

二　檢定の時期及場所
其時期は定時なるや臨時なるや又其場所は何處なるやを指定すへし

三　檢定委員
檢定委員の員數資格權限任期竝に選任の方法を記載すへし

四　立會人
試驗に立會人を要するときは其員數權限及選任の方法を記載すべし

明治廿八年五月三十日　内務大臣子爵野村　靖

第四拾五號（明治廿八年七月五日）

社說

社會法則の性質

吾人の行爲、氣風、習慣等にして其影響己れ一人にのみ限りて弘く社會に關係を及ぼさゞるものあり、之に反して社會の生存、感情、發達等に密接なる關係を有するものあり。而して前の種類に屬する事柄は各自の自由にして、如何なることを行ひ、如何なる習慣を有するも毫も差支なく、決して他の制限を受くべき限りにあらず。固より其うちに自ら爲さゞるべからずと感ずることゝ、行ふべからずと思ふことゝの別あるべしと雖ども、これ單に我心識内に於ける慾望の關係に基くものにして、畢竟己れが一時の都合とか、多年の習慣とかより生ずることたるに過ぎざれば、之に從ふもまた從はざるも己れの自由なるのみ。その結果の他に及ばざる以上は、時の事情に應じて舊來の習慣を變ずるも可なり、又自ら立てたる規則を破るも可なり。これ畢竟己れが一身上の苦樂、利害に關するまでのことに外ならず。世人が道德と稱するものも主觀的に見れば可爲と不可爲との感覺より發するものに過ぎざれば、その中には上述の如き種類（單に己れ一身にのみ限るもの）少からず。主觀的方面に重きを置く倫理說に於ては、此道德的感覺を以て最上の命令となし、之に基きて倫理法則を確立せんとすれども、これ決して絕對普遍の法則、命令とは謂ふべからず。これらの法則中人によりて大に相異するものなき能はざるなり。斯くの如くその關係の他に及ばざる事柄にありては之を爲すも爲さゞるも、極まる所、己れ一個の範圍内に於ける利害の關係たるに過ぎずと雖ども、他の種類に屬する行爲、即ち社會の生存、感情、發達等と關係ある事柄に至りては決して然らず。夫れ吾人が行爲、氣風、習慣の最大部は社會と密接なる關係を有するものにして、其影響決して一身の上に止まらず、廣く社會の利

害に及ぶものとす。是を以て個人の行爲にして社會に關係を及ぼす者は、各自の隨意にのみ放任しおく可らず、社會に於て一定の法則を制定し、之を以て個人の行爲を制限せざるを得ず。而して此種の法則たるや、社會の必要より出で、その制裁力社會に存するものなれば、何人にても必ず一樣に實行すべきものなり。これ彼の個人的の倫理法則の如く、各自の隨意に變じ得らるべき性質のものにあらずして、社會が一般の人に可爲とか、不可爲とか命ずる普遍の命令なり。斯の如く社會の必要より出で丶各個人の行爲を規制する法則を社會法則と稱す。これ社會の生存を保護し、その發達を助けんとする目的より必然生ずるものなり。吾人が行爲、習慣の最大部は社會と密接に關係するものなれば必ず一々此法則を標準となさゞるべからず。されば此法則は吾人が社會的生活の理想となるべきものにして、一般の人々の行爲を規制する倫理法則たるなり。若し吾人の道德を主觀的方面より見るときは全く個人的のものとなり、極めて不定なるに至るべしと雖ども、之を社會的方面より見るときは普遍一樣なる定則を發見し、一般の人に向て此は爲すべし、彼は爲すべからずと命ずることを得るなり。

社會法則の依て出づる根原は如何なるところにあるか。即ち、吾人が社會法則として必ず從はざるべからざることは如何なる性質の事柄なるか。これ一は社會の生存を維持し、發達を助くる要具となり、又利益となる種類の事柄なり。又一は社會の感情に適合する性質の事柄なり。假ひ社會の生存、發達には殆ど關係なき如き事柄なりと雖ども、若し其社會が善しと感ずること即ち社會の理想には何人も同化せらるべきものとす。此理想は社會活動の結局となるべきものにして、事物の價値を定むる最終の標準とも云ふべきなり。即ち、此等二種の事情は社會法則の生ずる原則となり、根據となるなり(以上二事情の説明は本誌第四十二號社説二百五及六頁に明かなり)。然り而して此原則に基きて出づる所の法則に二種あり。一は社會の感情に全く抵抗する事柄及び明かに社會の生存を害するものと

認められたる事柄を禁じ、又社會の强大なる感情を滿足せしめ、社會の生存を保維するに缺くべからざる要具となるべき事柄を實行せしむる等の法則なり。これ即ち國家が明定する所の法則にして、法律及諸規則等の類を云ふ。他の一は國法を以て明かに制定せられざるも、社會の感情を滿足せしめ、その生存、發達に利益ある事柄なり。即ち、或は人民の風俗となりて現はれ、或は其時代々々の必要より識者の心に浮び、或は其時の輿論となりて現はるゝ如き種類の事柄を指す。社會法則とは以上の二種類を總稱するものなり。

以上述べたる法則は社會に起る萬般の活動を規制すべき標準、或は理想にして、行政の方針も之に依て定まり、司法の事務も之に照して行はるべく、教育の方針も之に基きて立つべく、宗教の教化も之を標準として施さる可きなり、各人をして此等の法則を辨へしめ、その行爲をして之と一致せしむるは特に教育、宗教の職となす可き所たり。夫れ教育と云ひ宗教と云ふ一見その作用を別にするが如しと雖ども、畢竟一定の方針に向て人を教化するを以て最終の目的となすものなり。即ち、或種類の氣習、品性を有する人を作らんとするものに外ならず。而して或種類とは如何なることを指すかと云ふに、社會法則に一致する氣習を意義するものにして、即ち、此等の理想を身に實現する人物を作らんとするにあり。然るに普通教育にありては心身の開發てふことを以て主眼となすにより、各自の天性に任せて自然に發達せしむる傾なきにあらずと雖ども、道德教育と云ふものに至りては必ず一定の理想を要するものにて、その理想は即ち社會法則の一種たるに外ならず。而して精神自然の發達を統一するものは德育上の理想たる此の社會法則を措きて他になかるべし。他語以て之を云へば、德育は個人の益々尨雜ならんとする傾向を社會法則によりて統一するものたるなり。

されば、宗教及びその他の德化事業が人を教化するや、社會法則を人の心に實現せんとするを以て目的となすべきなり。若し夫れ各人の行爲、習慣にして社會にそ

用して人を徳化する何の不可かあらん。然りと雖どもこれたゞ今日の社會法則に適合する理由によりて利用さるべきのみのことにして、決して敎祖の權威とか、天啓の權威とか云ふ如き故を以て特別に扱はるゝにはあらず。若し今日の社會法則と衝突する所あらんか、敎祖の遺訓、天啓の敎義何の假す所かあるべき。

論じて玆に到れば國民を敎化し、社會を整理する等の任に當る人に取りて最も必要なる問題は社會法則を明かにすることに外ならず。若し夫れ社會法則にして明確ならざんか、何を標準とし、何を理想として人心を開導すべきかを定むる能はざるべし。即ち、敎育上に於ては少年の心中に如何なる氣風を作るべきか、宗敎上に於ては吾人の爲さゞるべからざることは何なるか等の問題は殆ど確立せられざるなり。然るに斯の如く實際上必要なる社會法則は既に何人にも知れおるものにして、特さらこれが研究を要せずと信ずる人蓋し少からざるべし。これ一應道理ある思想の如しと雖どもその實決して然るにあらず。社會法則中既に多數の人に明かになりおるものは、從來行はれたりし一般の習慣、これまで實施し來れる法律、諸規則等の類に過ぎず。而して從來の習慣必ずしも悉く當時の社會法則たるにあらず、これまで實施し來れる法律必ずしも絶對的に有効なりとは云ふべからず。種々の習慣中には速かに改良せざるべからざるものあり、諸法律中には將來の社會に適せざるやうになりたるものあり、これらは只社會の慣例たるに止まりて決して社會法則たるにあらず。固より斯の如き慣例は過去の時代に於ては必ず必要なる事柄たりしに相違なきも、爾來社會の進化したる爲め今日となりては全く無用となれるなり。又特に外國の法律をそのまゝ應用し、今尙ほ實驗中にある如きものに於てはその結果如何によりて現行の法律と雖ども忽ち變せざるを得ざることあり。畢竟するに、社會は絶えず變遷して止まざるのみならず、又時としては我邦近今の如き著しき變動ありて大に世態人情を變ずるものなれば斯の如き變遷と共に社會法則は變化せざるべからざるものなり。されば有効なる社會法則

は決して自然に明かなるものに非ずして、何れの時代にありても充分力を盡して之を研究するにあらざれば決して發見する能はざるなり。社會上の關係に於て爲すべきこと、爲すべからざることは自ら明かなりなど、思ふはこれ凡俗の所見たるのみ。

社會法則の性質たるや、自然法則の如く始終不變なる自然界の關係を示すにあらずして、社會が種々の目的を達する爲の方法を定むる者なり。これ一個人に取りては可爲、不可爲との命令となる所以なり。さればこれらの法則は自然に定まれるものを吾人が發見するにあらずして社會の目的の爲めに吾人が發明して立つる所の規則たるに外ならず。茲を以て社會の事情の變化するに從ひ、吾人は絶えず新たなる法則を發明せざるべからず。而して如何なる法則が最良の法則なるかを定むるには充分の研究を要するなり。斯くありてこそ法律も完備し、道德も進歩して社會の幸福を速かに增進すべけれ、若しこれが研究を等閑に附し、自然の變遷に任せおかんか、決して文化の進歩をみる能はざるべし。然らば如何なる研究に基きて社會法則の制定をなすべきか。既に論じたる如く社會法則は社會の生存、發達に對する最良方法たるものなれば、この中に三種の概念を有するは明かなり。即ち、一は社會の慾望にして法則の目的となるべく、二は自然法則にして目的と手段との一般の關係を定むべく、三はその時の事情にして一般の法則に制限を附すべきものなり。これらの三種の概念結合して社會法則をなすに至る。例へば、社會の大勢が國權の擴張てふことに向はんか、これ社會に起りたる慾望たるなり。然るに之を遂げんとするには原因と結果との自然法則に基きて一定の手段を發見し、以て國權を擴張せんとするには云々の事情を要すてふことを確定するなり。されどこれのみに止まらば全く抽象的の想像にして未だ實行さるべき性質のものにあらず、其時の社會の事情に照して尙ほ之に制限を附し、以て「某國今日の狀態に於て國權を擴張せんとするには云々の事を爲さゞるべからず」と定むるに至りて始めて實地に應用さるべき完全なる實行上の知識

となれるなり。而してこの「云々の事を爲さゞるべからず」との斷定即ち社會法則たるなり。社會法則の性質斯の如くなるを以て、之を制定するに當りて必要なる知識概ね下に論ずるが如し。

第一に必要なるは社會に關する自然法則なり。夫れ吾人が事業をなすに當りて第一に缺くべからざるものは自然界の法則なり、若し之を知らざらんか、事物を使用する途に通ずる能はざるべし。然らば社會を整理せんとする法則を制定せんとするに當り、社會の變化する自然法則如何てふことを知らずして豈に可ならんや。

第二に必要なるは國民發達の歷史なり。自國の歷史によりて、國民がこれまで如何なる事柄を經歷して今日の狀態に達せしかを知り、その氣質を明かにするに非ざれば、何に依てその社會を整理し得ん。若し夫れ自國の歷史に基かずして、全く外國より輸入したる法律道德、宗敎などを其まゝ適用して自國の法則となさんとするに至りては盲も亦甚だしと謂はざるを得ず。

第三に必要なるは時勢の觀察なり。これ社會法則の制立に最も直接の關係を有するものと云はざるを得ず。若し夫れ社會學上の法則に基き、自國の歷史に照して理論上完全なる社會法則を發見するも、其時の社會の形勢に適合する所なからんか、一種の空理たるのみ。未だ以て社會に實行さるべきものとは云ふべからず。而して社會法則の性質たるや、全く實行を以て目的となすものなれば、實用にたゝざる法則は何の價値も有することなし。是を以て實際上價値を有する社會法則は其時々の形勢を察し、社會の狀態と一般の感情とに基きて其時代に必要なる社會法則を立てざるべからず。これ前に云ひたる如く、社會法則は社會の形勢の變すると同時に變ずべきものにして、決して萬世不易なるものにあらざる所以なり。何時も變ぜぬものは、唯だ法則の抽象的形式のみにして、例へば正義を守るべしとか、君に忠なれとか、父母に孝なれとか云ふ如きものに過ぎず。而して斯る形式的概念を有すればとて實行上殆ど價値なし實地にあたりて如何なることが

正義なるか、忠なるか、孝なるかとの問題が必要なるなり。而して斯る實地の問題はその時々の事情により て變するものなれば、如何なることが社會法則なるかは其時々の形勢を觀察して定めざるべからず。若し然らずば單に空理たるのみにて決して實行的性質の法則にあらざるなり。是を以て社會法則を制定するに最も直接の關係を有する知識は時事の觀察にあるや明かなり。

以上三種の研究より來れる所の知識を材料として社會法則を制定し、之によりて社會整理の方針を定むることを得べし。されど此法則たるや、既に說きつる如く各時代によりて變化すべきものにして決して萬代不易なるにあらず。故に其法則の指示する所もまた何時迄も正義たるにあらず、義務たるにあらず、その時代にのみ限るものと云ふべし。そは如何なることが社會の生存、發達を利すべきかは何時も同一なるにあらず、時代によりて變ずるを以てなり。されば各時代の必要を觀察して得たる社會法則はこれその時代の絕對的標準たるなり。然るに斯の如く時代によりて變化せざる所の標準を得んとする宗敎家或は學者なきにあらずと雖ども、斯るものはたゞ抽象的の概念たるに過ぎずして、實際の生活上に必要なる法則にあらざるなり。實際生活の規制となり、理想となり、以て各人を導く可きものはその時代の必要より生ぜる實形的の社會法則を措て他に得べからず。これ吾人が社會を德化せんとするに當り、不可變的性質を有する敎義、敎訓を固守して道德の標準となすに非ず、その時々の人情、形勢に監み、時勢の必要に應して社會法則を制定し、之と一致する氣習を人民の腦裏に作らんとする所以なり。

以上論じたる所によりて畧ぼ明なる如く、社會法則は吾人の社會的生活をなすに必ず實踐せざるべからざる理想にして、社會を整理し、人民を敎化する摸範となるものなり。吾人が有する萬般の知識は社會法則の形を取るに至りて其終局に達するものと云ふ可きなり。

論説

倫理の進歩と日本人

文學博士　加藤弘之

今日は先進學院の第二回の卒業式といふことで、此院に取りて最も祝すべき日と考へまする、それで此祝すべき日に當りて私に何か演說をしろと云ふことを餘程以前より御約束でありてそれで今日出てまいりましたが、別に面白い演說もありませぬ、併し此學校の學科の中に倫理學と云ふものがありて、隨分大切なる學科になり居るとのとを聞いて居りますから、其倫理學のことに就いて少し御話をして諸君の御參考に供したき積りであります、其題は「倫理の進歩と日本人」と云ふことであります

倫理のことに就いては東西餘程異りて居るやうに私は思ふ、東洋は概して倫理のことは隨分昔よりやかましき國である、忠信孝悌と云へることは支那に於ては古代より種々むづかしき說起りたれども、實際は議論程進みては居りませぬ、支那に限らず東洋一般に君臣、父子、夫婦、長幼の間の義務、即ち孝悌忠信の如き倫理上の義務に就いてはナカ〳〵やかましく言ふが、西洋の方を顧れば孝悌忠臣の如きことは餘程薄い、故にこちらの忠と云ひ、信と云ひ、孝と云ひ、悌と云ふ、字を飜譯しやうと思ふても、確然とそれに當る文字は西洋にはないことである、東西倫理の發達の仕方が異りて居る、そこで私の若き時西洋の學問を始めたる暫く後は、凡ての事皆西洋の方が宜いやうに思はれたけれども、唯忠信孝悌の如きことは西洋ではやかましく言ふて勸めないやうであるから此點は西洋の方が宜しくない、西洋の學問は唯技藝の上に限りたることで、道德のことは取るべきものにあらずと考へた、それから又追々年數を經て見ると少しく考が變りて、忠信孝悌の如きは宜いことなれども、東洋にては餘り下の方に義務を負はしむること多くして、上の方のみ威權を恣にする、例へば君臣と云ふても君の臣を責むること甚しく、君の臣に對する義務は薄くても免すと云ふが如きことがある、父子の間に於けるも亦左樣にして、子に孝を勸むること甚しくして父の子に對する行は疎でも免す、其他夫婦の間も長幼の間もそれと同じく、上の方にのみ權を專にせしめて下の方を責むること甚し

い、是に因りて考へるときは西洋にて餘り忠信孝悌を云はぬ方が、或は尤もか知れぬと云ふやうに私の考が變化して來ました、それから今一遍私の考が變化して來ました、其變化したることに就いて今日御話をして諸君の御參考に供したいと思ひます。

東西倫理に就いて大なる相違のある根源がなければならぬ、其根源は私の考ふる所にては、東洋の人民は比較的におとなしくして、西洋の人民は比較的に元氣が宜い、言を換へて之れを言へば西洋の人民は進取の氣象に富んで居て、東洋の人民は退守の性質を持ちて居る、それは一般の人民が悉くさうであると云ふのではないが、概して言へば左樣である、それは人種の違ひより起るのでもない、同じアリアン人種は進取の氣象があるとするならば印度人にも進取の氣象がありさうなるものなれども、印度人は違ふて居る、故に是は先づ東西に違があると言ふて置かねばならぬ、而して其の原因は種々ありませうけれども今日短小時間にそれを御話することは出來ない、そこで東洋の人間は比較的におとなしくして、西洋の人間は比較的に元氣が宜い、元氣の宜い人間は自己の力を張るとを主にし、おとなしき方の人間は自己の力を抑制して專ら他人の爲めにするやうな傾きがある、西洋の人民は自己のことを主にするに依り權利の思想が強くなり、東洋の人民は自己のことを主とせず、他人の爲めを圖るに依り自己の權利を抑制して、他人に對する義務を先きにするやうになる、そこで東洋の方では君臣、父子、夫婦の間等、相互の間の事も凡て義務を重もにするやうになりて、宗敎でも道德でも、亦其方を重もに敎へるやうになりました、併しそれが都合宜く行けば宜しいが、動もすれば上の人が權力を持つ故、上の方の人ほど義務を責むること少くなりて、下の方ほど義務を責むることが多くなる、忠信孝悌は善事なれども其方にのみ傾くときは、上より下に對する務は疎になり勝ちになる、之に反して西洋の方は義務を疎にして自己の權利を張るゆへ、君臣、父子、夫婦の間に於ても下よりも權利を張ることになる、即ち臣の君に對し、子の父に對し婦の夫に對する上に於ても、下よりも權利を張るやうになるから孝悌忠信が行はれ難くなる、斯の如く東西を比較するときは何れも一長一短がある、西洋の如く自分の權利を張るは善事なれどもそれが過ぎれば忠信孝悌の義務は疎になり易い、忠信孝悌と云ふことが西洋にも絕無とは言はず隨分感ずることもあれども、

比較的に少くして權利を張る方が多い、又東洋にては自分の權利を主張することが絶無ではないなれども、それよりも自分を無きものにして上に事へることを專らとする風俗で、何れも善い事はあれども一方に偏するときは宜しからざるものになる、尤も西洋でも耶蘇敎は博愛主義なるを以て義務を重もにして權利は餘り唱へないなれども、惟一の神を立て、最上の尊きものとなして人間は同胞兄弟で神の子である、人間の尊卑は唯社會上のものにて本來は全く平等の者なりと立ててあるゆへ、東洋の君臣、父子、夫婦の如き五倫の階級を餘り嚴重にせぬことである、併し此の如く東西何れも一方に偏するのは宜しくない、私が最初西洋には東洋の如く忠信孝悌の敎が嚴重でなきゆへよろしくないと考へたるも、亦後に東洋の如く忠信孝悌をやかましく言ふのは宜くないと考へたのも、孰れの考も間違ふて居たと思ふ、是れは結局此二者を取捨折衷して眞の倫理に適ふものを得るやうにならねばならぬことゝ思ふ、即ち東洋主義の如く孝悌忠信の道は成るべく十分行はるゝと共に又西洋主義の如く下の者に相應に其權利を持たさせねばならぬ、是れが即ち眞誠の倫理であらうと云ふ考が付いた、蓋し孝悌忠信の行はるゝは頗る美風良俗と稱すべしと雖も、下たる者が唯上たる者に盲從して其奴隸となるは、決して宜しきを得たるものにあらざれば、下たる者亦相應の權力を有せざるべからざればなり、そこで此調和折衷が出來て始めて宜しきを得るものになるには如何なる人民に依りて爲し得らるゝかと言へば、私は獨り日本人であらうと思ふ日本人を除きて決して他に賴みに思ふ人民はない、日本人は能く東西兩洋の長短を觀察して之を調和折衷するの大任を盡すの大任に堪ゆるものと思はるゝことである。

西洋人は凡て自己の事を此上もなき宜しきものと思ふて居る故、先刻の御演説にもありし如く社會學や何か論じて居る西洋の大學者でも謬見が多い、西洋人は外國は野蠻未開なる者のみと思ふて居る故謬見を來す、夫故に孝悌忠信を尊きものとして取るべき考は西洋人には起らない、重もに權利を主張することのみの考になる、そこで其間に立ちて此日本人の性質は先刻の御演説にもありし如く、古來特殊の美質ありて昔より好で外國の開化を取る人民である、儒道を取り、佛道を取り、又近頃は西洋主義を取り、凡て無形有形共に取る――或は取り過ぎて困るといふ必配のある程の人民

である、そこで倫理の上にも特殊の孝悌忠信の如き美德を保ちて、其上に西洋人固有の一個人たる權利と云へる人間の寶を取りて之を日本に程能く用うることが出來やうと思ふ、そこで東西の美德を取りそれを折衷して始めて宜しきを得るものにするのは、決して日本人を除きて他の人民には出來ない、之を今回の戰爭に就いて徵するも日本人の忠實武勇は世界の人も殆ど驚いて居る、而して戰術兵器は悉く西洋の物を取りて日本固有の美質を助けたるを以て此度の如き大捷を得た、是れは土耳其や支那には決して出來ないとである、土耳其は支那より少しは宜いやうなれども、嘗て土耳其が露西亞と戰爭を爲したるとき、露西亞に負けたるは當然である、土耳其が西洋の兵器軍艦を取りても兵法を取りても日本人の取るが如く思ひ切りたることは出來ない、唯支那人が西洋の法を摸倣するに少し優れる位である、之に反して日本人は西洋の物を取りて全く自己のものと爲すのみならず、却て未だ西洋人の經驗せざるとを海軍などでは行ふて十分の功を奏して居る、それは有形のことなれども無形の事もそれより推して考へるとが出來ると思ふ、日本固有の忠信孝悌といふ美德を具へて而かも夫が爲めに其弊を受くるに至らずして、又西洋固有の自己の權利を相應に主張する美質をも取來りて、それと調和折衷して始めて偏倚せざる倫理となり權利も立ち義務も立ちて宜しきを得たるものとなるであらう、而して是は日本人の務めてせねばならぬことであらうと思ふ、往昔日耳曼人が羅馬を滅したが、羅馬の國は一個人の自由は殆どなかつた、國民團結して大國を建ることは羅馬人種の長所であつた、之に反して日耳曼人種は一個人の權利を主張するとが盛んであるから大なる團結は出來難いなれども、それが羅馬を滅して羅馬の氣風を自國の方に酌取りて、自國固有のものと折衷して、日耳曼人はそれより益々固有なる一個人の權利自由を併有して併せて能く大國を建るやうになりました、斯の如きものであるから日本に於ても固有の美德を保ちて併せて他國の美質を取り之を調和折衷して始めて完全なる倫理を立ることが出來やうと思ふ、且つ是は務めて爲さねばならぬことゝ考へる、餘り長くなりますから今日は是丈の大意を述べて終ります（喝采）

健康性の宗教ザラツストラ教（續）

木村鷹太郎

（五）勇氣

人生は戰爭なり、戰爭には又非常の勇氣を要す。ザラツストラ教は德義上の戰爭を說くの教理なるを以つて、勇氣は其德義中にも高等なる位置を占むるものと謂ふべし。故に曰く『我等男子らしき勇氣、及び自己の職分を盡くすことを拜す』と。スラオシヤ神（神語の化身と稱す）の勇氣を讃美するの語に曰く、『彼れは恐怖せず、又脅迫に由て決して其頸を屈することをなし。彼れの前には惡魔は恐れて頭を垂れて遁走す』と。これ德義的勇氣、或は吾人の所謂浩然の氣を神としたるものなり。誠實も亦一種の勇氣なり、眞理を愛する勇氣の如き、又此教の大に尊ぶ所にして自己の確信して眞理なりとせる所は、身命をも顧みざるなり。故に曰く『余は此教理を確信せり、生命、榮譽、權勢、王位或は愛情の爲めに我信仰は棄つるなし、若し我信ずる教理にして、我身命を要すとせば、余は喜びて死に就かん』と。これ此教徒が此教理を確信するの誓言なり。而して善惡の戰爭中「最も强力なる勇士」は「眞理」なりとす。

茲に吾人の大に注意すべきことは此教理の健康を貴べることなりとす、これ健康は勇氣の基礎となるものなればなり。此教の所說に由れば、冬及び寒風は一種の惡魔なるを以て、吾人は又之れに敵對して勝たざる可からず。人若し健康ならんには、身に薄衣を纏ふとも、以て容易に寒風に面するを得べく、以て病死の矢にも勝つべし。健康の德それ此くの如く大なり。然りと雖人もし健康ならんと欲せば節生の道を盡くし、善良にして滋養ある食物なかる可からず。人もし身躰の健全を得たらんには、精神の强壯亦之に伴ふて生ずとなす。これ實に近世學術の證言する所にして又實にザラツストラ教の生々存々、健全有爲のものたるを示すものなり。之を彼の佛教の厭世主義にして肉食を禁し、乞食的生活をなす所の教理に比較せよ。何れか善良にして何れか有害の宗教なるやは言はずして知るべきのみ。

（六）信實

聞く、ペルシヤ人は最も信實なる人民なりと。ジヨン、ミルン氏曰く『ペルシヤ人は容易に人と約束するとなし然りと雖も一旦約束するに於ては、其信義を守るの堅固なることは、オリンプス山に於て、スチツクス

（地獄の神）の爲したる約束の如し』（スチックスの約束とは恐ろしきまで嚴重堅固のものなり）と。其ペルシヤ人の此に至りたるの原因に付いては、余は之を此國の敎儀の然らしむる所に歸せんとす。實にザラツストラ敎は信實を貴べるものなり。

經典に由る時は、信實はアフラマツタの世界に屬するものにして、詐欺は惡の世界に屬するものなり。故に人もし眞を語れば、これ善の世界を擴張するものにして、若し僞る時は死を此善世界に來らすものなりとなす。

信實或は約束に付ては、細則甚だ多し。今約束の種類を分ちて六種となす、即ち（一）言語の約、（二）手を打ちて承諾したる約、（三）羊を賭して爲したる約、（四）手を以て爲せし約、（五）人（妻及び子女）を賭して爲したる約、（六）田畠を以て爲したる約等これなり、人もし言語の約束を破りたる時は其上級なる打手の約にて之を償ひ、人を賭して爲したる約を破りたる時は、其上級の田畠を以て償はざる可からず。（妻子の價値は田畠よりも低しと云はざる可からず、奇なり）

右の順序に由る時は、言語約は最も輕きが如しと雖、他の部分に記する所に由れば最も言語約を重ぜり。これザラツストラがアフラ、マツダに問ひて得たる答へに由て知るべし――ザラツストラ問ふて曰く『人間の犯せる罪科中、何れが最も大となす』アフラ、マツダ答へて曰く『人の相互の間に語る時、これを知るは惟我れあるのみ、然るに彼れ己の語を履行せず「我これを知らず」と云ふはこれ我を欺くものなり、此くの如きの言語の破約を最大なる惡となす』と。是に由て之を觀れば、言語のみの約束も、亦決して輕きに非ざるを知る。

信實を以て相交はる結繩の度は、人々の種類及び道德的秩序に由て階級あり。今其度を言はんに――朋友及び親族の間は二十なり、仲間々は四十なり、夫婦間は五十なり、同師に就ける弟子間は六十なり、師弟間は七十なり、養父子間は百なり、他國民に對しては一千にして、マツダ信徒間は一萬なりとなす。

ミトラは眞實の神なり、故に『ミトラを欺かざるものは德義に富める子を生み、牧場は繁茂し、又其馬は强大ならん』、決して約を破る勿れ、信者に對し又不信者に對し、決して破約ある可からず、然らざればミトラ怒らん。『人若し僞はりて其言を行はざる時は、彼れ之を履行するまでは其心苦しかるべく、地獄に於ても

現世の如く苦しく、眞鍮の小刀を以て指を切斷するよりも強き苦痛を感じ、釘を身躰に打込むよりも苦しく、又百尺の斷崖より身を投ずるよりも苦痛あらん』と云ふ。而て其道德的宗教的の形而上學に曰く『僞りは世界に死を來らし、眞實は善の世界を擴大す』と。

（七）　友愛及び慈善

日出づれば萬物を照らし、諸物を成育し、健康を進め、萬物を清淨にす。日は一日の職を終りて西山に沒するや、月は出で丶夜暗を消散せしめ、人の神氣を爽快ならしむ。此くの如く日は晝を支配し月は夜を支配す、宛も兩者一心に出づるが如し。是を以てザラッストラは日月間に友愛の情の存するものならんとの觀念を以て『日と月との友愛を讃美す』と云へり。實にこれザラッストラ教中の最も美麗なる思想と云ふ可し。日月共に光輝あり、これ善なり、善を以て友たり。人亦善を以て友となり、互に助けて善を輔け、其交情の長久ならんことを期し、常に『温和中正にして、爽快なる神氣を存し、善良なる意志を有し、以て親切を盡くさざる可からず』。又『友の意に違ふことなく、友の好む所に從ひて交り、朋友（妻子兄弟等をも）を我に結合すること、我精神と我身躰との結合せる如くすべし』となす。ボーフーマノーは平和共住の神にして其呼吸の友愛なり。パーレンヂは友愛の女神なり、人々之を讃美す。よく友愛の思想、言語、行爲に富み、身は喜悦に充てる人は嘉みすべきの人なり。且つ善良なる行爲を有する人は、神と友たるを得べしとす、これ最も願はしきことに非ずや。

此教は又慈善を貴べり、故にアフラ、マッダの第十三の異名は「慈善」なり。クシャッラ、バイリヤーは仁惠及び慈善を神としたるものなり。凡て宗教の神名及び神性等は、能く其信奉せる人民の德性及び理想を反射するものなるを以て神名神性を以て其人民の德義及び理想を知るべし。而て此教の慈善を貴べるや、實に博愛的にして美麗なる感情を有せり、曰く『人間の事を考へ、又人類全躰の事を思ふは美事なり』と。賴り無きの貧人を憐れむは善行なり、貧人假令貧なりと雖、これ尙ほ『アフラ、マッダの貧人なり』、貧人に盡くすはマッダに盡くすなり、殊に同宗教の人に對しては一層の哀憐を加へざる可からずとなす。耶蘇が『兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり』と云ひしは、全く此意に外ならざるなり。

（八）　清淨

清淨は此教の最も重んずる所なるは、余既にこれを云へり、而て其次に貴ぶ所は勤勉にして、其之を奬勵するの大なる、殆ど他教に其比を見ざる所なり。實に此教に由るときは、人生は戰爭なるを以て、少しく怠る時は、忽ち惡魔の襲ふ所とならん、勤勉は則ち警戒なり、怠惰貪眠は惡魔の所爲なり、故に早起は善行となす。

（一）早起――此教は、鷄は聖語の化身にして、世界の一大動力なりとせり、味あるの言と謂ふ可し、而て此鷄、名をパロダルスと云ひ、惡口する人之をカルカタスと稱すと云へり。此鳥毎曉必ず聲を揚げて曰く「鳴呼人よ起きよ、而て惡魔退治の譚なる清淨を唱へよ。見よ、此處にブシヤスタと謂へる長手の惡魔あり、此に來りて汝を寢ねしむ。此惡魔世界の人の目覺むるや否や、直に之を寢ねしめんとして曰く「鳴呼、人よ寢ねよ、鳴呼、人よ寢ねよ、起くべきの時未だ來らず」と。されども人よ、長き睡眠は人間の爲すべきものに非ざるなり。常に善思、善言、善行を怠るなく、惡思、惡言、惡行を去れ』と。

此教は終夜薪火を絶やすことある可からざるなり、故に家の主人たるものは夜の初めの部分に於て起きて衣に帶し、手を洗ひて薪をとり、而て之を燃やさゞる可からざるなり、何となれば「ダエバ」の作れるアジと云へる惡魔來りてマツダの火を絶やさんとすればなり。次に農夫目覺む、其時鷄鳴くこと前記の如くす、茲に於て家人床に在りて互に語りて曰く「鷄鳴けり、我等起きん、最も早く起きて手を洗ひ、火を捧げたる者は、第一に極樂に往き、アフラ、マツダに喜ばれん」と。而て此く早く起くる人には幸福ありて、其人の牛は成長肥大し、子孫は繁昌し、よく契約を守りて信あり、一生安樂に善を爲すことを得べし、又鷄を愛養する人は未來に於て、無數の柱梁あり、明窓あり、日光豐かにさし入る美麗なる家屋を得、又一の詰問をだに受くることなく、直に極樂に行くを得べしとなす。

此教の早起を貴ぶこと此くの如し、早起は實に勤勉の手始めにして、能く精神を爽快にし、身躰を強壯にし、終日事業に樂しきを得ん。實にこれ此教理の健康有爲なる特性にして、苟も勤勉を貴ぶの人は、必ず此教の信徒たるべきなり。我國の神道、殊に黒住教は大に之に似たる所ありて、朝早く起き而て清淨なる空氣を吸ふことを教ふ、これを御陽氣を吸ふと稱す、これ人間の健康を增進するの上に於て少なからざる有益な

ることとなり。ザラッストラの信徒の、「朝」を神となし以て『讃美せし、汝大曙光よ』と云へる語には、吾人も共に聲を揃へて音を同ふするを猶豫せざるなり。

（二）農業――倉廩充ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知るとの格言は、ザラッストラ教之れを有せずと雖、此教の此主旨に基きて教へを爲せるは又著しき事實なり。たゞそれ農業を重んず、故に之を奬勵するの言に曰く『左右の手を以て地（即ちスペンタ、アルマイチ女神）を耕えす人には地は多くの收入を與へ、宛も新婦が其夫に由て子を産するが如く、地は豐けく果實を與ふべし、而て此かる人には地は此く言はん「嗚呼汝人よ。左右の手を以て我を耕へす人よ、我汝に多くの食物を與へん、穀類も亦豐饒なるべし」と。而て又左右の手を以て地を耕えさゞる人に向ては、地は此く言はん、曰く「嗚呼汝人よ、左右の手を以て我を耕えさざる人よ、汝は他人の門戸に立ちて食を乞ふべし、然りと雖遂に拒絶の外得る所あらざるべし」と』。

ザラッストラ教は、深く衣食住の充足と道德との關係あることを感じたるものなれば、農事に勤勉なるは大なる德義にして、之を以て殆と一切の惡を拒ぐの最良なる方法、或は人間の義務なりとなす、其農業を奬勵するの語に曰く『穀類を播くことはアフラ、マッダの教理を播くことなり。此かる人はマッダの教理を高く輝やかして肥大になすものなり』と。又一層面白く衣食住の充實と德義の關係とを云ふて曰く『小麥、穗に出づれは「ダェバ」は跳り上りて懼ろき、穀物列を爲して成長せは「ダェバ」は心を痛めて悶だえ苦しみ、穀物成熟して地に垂るゝに至れば「ダェバ」は遂に死せん』。故に曰く『かゝる所には「ダェバ」は居らざるなりと』衣食住の充實は世上の惡を減ずるや大なるべく、從て勤勉の重要なる德義たるや疑ふ可からざるなり。經文又曰く『重ねて云ふ、地の喜ぶ所は地を耕へすゆゑなり』と。是等の教義、是等の比喩、共に有益にして且愉快なる思想と云ふ可し。

此く農事を重んずるより、之に使役する所の動物は、又之を愛養せざる可からざるなり。牛、馬、牧犬の如きは殊に然りとなす。又犬は最も愛すべき動物にして、凡ての動物中最も德義の性質を有すとなす、其犬を記せるの語に曰く『彼れは食せる人の側に在るとも自ら食することなくして之を看守し、報賞を得ることとなしと雖能く家財を守れり。彼れ又た容易に滿足し、麵麭の碎片を食ひ、恩謝の念厚く、其質朴なること祭司の如

し。犬はよく敵の前面に進むものにして、其狀勇者に似たり。又走り戲るゝを好む、其狀宛も小兒の如し』と。犬は愛すべきの動物なり、人もし善良なる犬を殺すときは未來に於て多くの犬に苦しめられ、キンバッドの橋（未來世界にあり、後に說明す）を守れるの犬も亦彼を助くることを無かるべしとなす。

（九）　諸善及び敎戒

人或は云はん、ザラッストラ敎は思想甚だ幼稚にして、毫も高尙なる、精神的なる所、或は哲學的なる所なしと。然り吾人は此說に贊成するものなり、啻に贊成するのならずして、此くの如きの批評は却てザラッストラ敎の爲めに喜ぶべきものと信ず。何となれば論者の以て精神的或は哲學的となす所は、實は形而上學的の空想の謂ひにして、其以て高行なりとせる所は人世を卑しむの厭世主義に外ならず、而て其貴重せる所は、吾人の以て無益視せる所、其喜ぶ所は吾人の以て有害となす所にして、ザラッストラ敎はよく、此外觀の高尙にして內實の無益有害の性質を避け得たるを以てなり。實にザラッストラ敎が形而上學に傾かずして、世間行、實行的の方向に進みたりしは、これ永遠の勝利にして、佛敎及び「バラモン」敎主義の滅亡するの日は、ザラッストラ主義（ザラッストラ敎とは云はずして主義と云ふ。されども畢竟同一のものなり）の榮ゆべきの時なり。

ザラッストラ敎は形而上學的に非ずと雖又大に智識を貴びたり、されども其智識は無益の形而上的の智識を云ふものに非ずして、實用的の智識なり。其智識を求むるの熱心なるや、疑問心を以て神となし、又アフラ、マッダの名となすまでに至れり。故にザラッストラがアフラ、マッダに其異名を問ひしとき、アフラ、マッダ答へて曰く『我名の何たるやを問ふ其疑問はこれ我名なり』と。又ソクラテス的の知德同一論を爲し、大に德行上に知識の必要なるを云へり。曰く『凡ての善思、善言、善行は皆知識に由て爲され、惡は盡く無智より來る』と。其智識を貴ぶこと此くの如し、故に『前見の明』は又之を讚美し、知覺、智恵、理會、良心、男子らしき勇氣、精神の淸淨、雄辯、慈惠、不貪眠、光明、剛毅等を貴び、之を禮拜し、以て我物となさんことを勗む。又思想、言語、勤勉、記憶、精神及び理會等は人間の六大權力として之を讚美せり。

ザラッストラ敎は印度の諸宗敎の如く、沈思冥默を高しとなし、單に主觀的の善に恍惚して、人生に益せ

ざるが如きは其最も取らざる所にして、善良なる思想善良なる言語に兼ねるに又善良なる行爲を以てせざる可からずとなす。善思、善言、善行は常に必ず伴はざる可からず。是を以てザラッストラの經文の各章の首には大抵善思、善言、善行の語を記し、以て其章を始む。而て善思、善言、善行は、たゞこれ一時のものたる可からずして、不斷、心を此に存せざる可からざるなり。故に『寢ぬる時、起くる時、談話する時、乘車する時、如何なる時にも常に善思、善言、善行を擇び、惡思、惡言、惡行を去れ、これ衆善中の善にして、十倍百倍千倍の善なり』となす。

此他又種々の敎戒あり、曰く『光輝あるべし、增殖すべし、勝利なるべし、聖淨を行ふべし。心は善を思ひ、口は善を語り、行は善を爲し、惡思、惡言、惡行を去れ。汝の良心に從ひて行爲し、正直を以て汝の富を得よ。眞理を語り、友誼に厚く、人に對して親切を盡くすべし。殘忍なること勿れ、容易に怒ること勿れ、恥づべき事をなすこと勿れ、吝嗇なること勿れ、他人を侮ること勿れ、欲情を恣にすること勿れ、盗むこと勿れ、他人の妻を羨やむこと勿れ、吝嗇者と友たること勿れ。朋友の心に順ひて之と交はり、不名譽の人と交はること勿れ。公衆の前に立て語る時は、常に聖淨の語を以てせよ。如何なることありとも汝の母を憂へしむること勿れ。常に其身を清淨にし、太陽の如く、月の如く輝け。朋友、妻子、兄弟を心意と身躰との結合せるが如く結合せよ。常に善良なる氣質を有し、又太神を崇むべし』と。是等は日常心念に存すべきの箴言となす。

(十)　理想の幸福

ザラッストラ敎の理想とせる幸福は、最も質朴單純なるものにして、土地には山あり水あり以て風光の明媚をなし、牧場には滾々と流るゝの河ありて四邊を濡ほし牛羊繁殖し、田畝肥饒し、人は其地の清鮮なる空氣を呼吸し、明媚なる景色を樂しみ、豐饒なる牧場及び田畝よりは、十分なる收穫を得、因て以て健康を增し、躰力强大にして、友誼に厚く、剛毅にして智識を有し、富を得て廣大なる家屋を作り、妻は内に在て家の美をなし、而して愛すべき温順なる子女を生み、歡樂して一生を送くる。此くの如きは此敎徒の以て理想とする幸福にして、又若、能く神の命に從ひ、禮拜を怠らずして供物を捧げ儀式を守り、又よく德義を全ふする時は、神は其賞として現世に於て、己の欲する所

の幸福を與ふべしと信ぜり。又善良なる家族には、神は美麗なる少女と化し、來て祝福をなすと謂へり。

（十一）　未來世界

凡て他の宗敎の未來の信仰を有するが如く、ザラッストラ敎も亦此信仰を有せり。此敎に由る時は、若し善人死する時は、彼の靈魂は其頭の近くに來り「アフラ、マッダの意を得し者は幸福なり」と歌ふ、此くすること三夜、此間に一切の快樂を盡くし、第三夜の曉に至り、死者の靈魂は肉躰より離れて他界に赴く、時に靈魂は樹木欝蒼として佳香馥郁たる處に來るが如く感じ、南風吹き來りて死者の精神は何れより此佳香の來りしやを異しみつゝ清風を呼吸し彼の良心は風に吹かれて少女の姿と化して前面に現出す。少女色白くして丈高く、健康にして胸部は美麗に肥へ、年殆ど十五歳なるべく、高貴の人の娘子の如し。此少女は死者の良心なりと雖死者は自ら之を知らず、少女に向て問ふて曰く『汝は誰ぞや、我見たる女子の中にて最も美麗なる誰ぞや』と。少女答へて曰く『汝、善思、善言、善行、善宗敎の少年よ、我は汝の良心なり、今我汝の風姿を見るに、汝は實に善良にして佳香あり、勇氣あり、又よく悲哀を脱し得たりと我眼に見ゆ、而て人みなこれに由て汝を愛せん。汝、善思、善言、宗敎の少年よ、汝は吾が貞淑、善良美麗にして佳香あり、又勝利の力を有し、よく悲哀を脱せることを見ん、之に由て汝は我を愛するか。世人或は僞はり、或は惡行を爲し、又貧人を憐まずと雖、汝は常に善を行ひ、家にありては讃美を歌ひ、善水及び星辰を禮拜して歡喜する時は、我の美は、之に由りて、益々美となり、我の愛らしき所は之に由て益々愛らしくなるべし。汝の善思、善言、善行に由りて、我は善良なる坐に在るべし。我れ太神と共に、久しく談話を交へたるに由り、人々我を禮拜せん。凡て信徒の爲したる第一の事業は彼を善思の樂園にあらしめ、第二の事業は彼を善言の樂園にあらしめ、第三の事業は彼をして善行の樂園にあらしめ、第四の事業は彼をして無限の光明の中にあらしむへし』と。

死者の靈魂此處より進みてキンバットの橋に來る（此橋地獄の上に架せるものにして、極樂に往くべき橋なり、一書に由る時は、善人の靈魂此橋を通行する時は其幅廣くなり、惡人の靈魂此橋を通行する時は、此橋自然に糸の如く狹くなりて、惡人の靈魂は地獄に墮つへしと記せるあり）時に丈高く、健康にして美麗な

る少女、犬を伴ひて立てるあり、若し悪人の魄魂來る時は、其現世に行ひたる事業を詰問して審判して地獄に投ぜらる。然るに善人の靈魂は一疑問をも受くることなく、直に進みてハラ、バレザイチの山に登る、此山はこれ諸神の居る所なり。善人の靈魂此處に來るや、善思の神、ボーフー、マノー、神坐より立ちて、其來るを祝し『如何にして朽つべきの世界より不朽の世界に來りしや』と問ひ、大に死者の靈魂を歡待す。此くして人間の一生は、アフラ、マツダの教へに順ひ、悪の原理と戰爭し、以て其本分を全ふすとなす。茲に於て悪魔等之を見て周章狼狽、或は走り或は叫び、みな恐れて暗黒世界に去ると云ふ。

　ザラツストラ教の實行上の教理大畧以上に述ぶるが如し、尚ほ種々論ずべき或は布衍すべき所少なからずと雖、不幸にして今は時を有せざるを以て筆を此に擱いて以て他日の機を待たん。

日本祖先祭

蓮沼磐雄

左の一篇は先月十九日、唯一舘講堂に於て爲せる余が卒業演説の筆記なり、其通讀に便ならんがため之を普通文體に改めたり、

日本の祖先祭、即ち先祖祭りに就きて少く述ぶる所あらんとす。抑も日本の祖先祭は日本の國躰と相關係すること極て親密にして、而も日本の歴史と共に成長して日本人の特質を顯はすこと頗る大なるものなるにより、眞に能く日本と云へる國は如何なる國なるか、日本人と云へる人民は如何なる人民なるかを了解せんと欲するには、此日本の祖先祭の研究を疎外にするを得ざるなり。余をして、日本の祖先祭の性質及び發達に就きて論ずるに先つて、日本の祖先祭の研究が各種の學科の上に如何計り重大なる關係を有するかを陳べしめよ。

（第一）　社會學上の關係

世界萬國の中に就きて日本ほど祖先祭の完全に發達せし處なし。尤も支那の如きは日本に比すれば其建國も舊るくして、從て祖先祭に關せる諸制度も早くより完備せしには相違なきも、而も支那に於ける祖先祭の發達は單に其外形にのみ止りて、日本に於けるが如く祖先祭の眞正なる精神を實現するを得ざりしなり。蓋し日本の皇統は萬世一系なるに、支那は興亡相繼ぎて皇祖と稱す可きものは歴代相異り、日本の民種は單一にして天下一姓なるに、支那は血脈相異りて獨立せる雜

多の民種より組織され、且つ又た支那に於ては日本に反して、祖先の崇拜よりは天神の崇拜の方を重んぜし等の不便なる事情ありし故、支那に於ける祖先祭が日本に於ける祖先祭の如くに、純粹完全なる發達を遂ぐるを得ざりしは至當なることなりとす。

若し夫れ歐米の諸國に至りては、祖先祭は勿論祖先祭に類似せる所の慣例をも存することあらずして、從て其中に生ぜる社會學者の如きも、或者は之を以て野蠻の習俗にして歐洲に存せざりし所のものなりとなし、或者は曾て歐洲に存せしことを認むるも尙ほ之を以て未開劣等なる迷信に過ぎざるものなりとせり。

されど我國神代以來、數千年の後に至る迄、絕えず發達し來りたる祖先祭は如斯き迷信なりと云ふ可き乎。寧ろ歐米の社會學者が了解せざる所の意義を有するものに非る乎。凡そ一個の社會制度は人民の活動と因果を相爲すものなりとせば、日本をして日本たらしめしものと祖先祭との間には何等かの關係あるに非る乎。日本の萬世一系てふことの萬國に比類なきは人皆之を知る、是れ實に日本の特質として注意す可き第一の現象なり。日本の人民が如何に鞏固なる團結心を有する人民なるかは近く日清の戰爭に因つても世上に顯れたり、是れまた日本の特質として注意す可き第二の現象なり。而して日本に世界中最も完全なる祖先祭の存せしことたるや、是豈に前記の二現象と相關聯せる第三の特別現象として注意す可きものならずや。基督敎の十戒中第五戒に曰へるあり、爾の父母を敬せよ、さらば爾の國は長からんと。此戒を受けたる猶太人は、此戒を守ること能はずして流離顚沛せり。此戒を受くることなかりしも實際上此戒の精神を至極の程度迄實行し、啻に父母を敬するのみならず進んで父母の父母を敬するが爲め祖先祭を發生せる日本人は萬世一系なり。然らば則ち萬世一系と團結心と祖先祭とは因緣相連續せる三種の現象にして、若し萬世一系にして誇る可く、團結心にして尊ぶ可きものならんには、日本の祖先祭を硏究することは社會學上頗る重要なる事ならずや。

（第二）　倫理學上の關係

祖先祭の影響を受けて種々なる美德の養成せられしことは否み難き事實なり。彼の孝の如き、忠の如き、愛國心の如き、之を時間上より論ずれば祖先祭を發生し維持し來りたる所の動力なりと云ふ可きも、翻て此等の諸德が既に確定せる祖先祭の爲めに、如何に夥しき

培養を受けしかは論辨を待たずして明かなり。其他日本の祖先祭と道徳との關係を畧記せば、

(1)自己の祖先を敬するの情は自ら自己の家名を重んぜしめ、自己の家名を重んずる情は、一方に於ては、己が名譽心を涵養して、自重有爲の奮發心を發生せしむると同時に、又た一方に於ては、一種の制裁となりて、卑下賤陋なる言行の發動を制するの力あるものなりとす。彼の我國の古俗として我が名を名乘る時、常に先祖の系圖を述ぶるが如きは自己の家名を重んずるの感情より出でしものにして大田々根子が崇神天皇に其名を問はれし時

僕者大物主神娶陶津耳命之女活玉依毘賣生子名櫛御方命之子飯肩巢見命之子建甕槌命之子僕意富多多泥古

と云へるが如き、其他如斯き例極て夥しく、降て源平時代に至りては、武士が對戰するに當て『遠からんものは音にも聞け近くは寄て目にも見よ我こそは何某の何代の後胤云々』と仰々敷名乘を爲せしが如き、皆此名譽を重んずるの情の發現に非るはなし。延ひて又た普通農工商の間に於てすら、彼の『代々の御先祖に對して申譯がない』と云へる如き、又は『位牌に對して濟まぬ』と云へるが如き一種の感情の、如何に强大なる道德的制裁を爲して日本の道德を維持し來りたるかは世人の能く知る所なり。

(2)次にまた我國に祖先祭の行はれたる間接の結果として、極て貴重なる社會的道德の培養せられしことは決して看過す可らす。盖し歐洲の諸國は槪して個人主義に基くにより、一方に於て獨立進取の氣象の盛んなるは否む可からざることなるも、同時に彼國人が次第に利己的となり、不人情となり、遂に社會問題を惹起するの大難に陷りしは止むを得ざることなりとす。此弊や近來に至りて益々甚く、從て之を匡救せんとして呈出せられたる方策も二三に止らざることとなるが、此等の諸方策の歸着する所は要するに皆 solidarity（ソリダリチー）の境に達せんとするに外ならず。(「ソリダリチー」とは社會の各員が一致團結して、恰も肉身に對するか如くに社會を親めるの狀態なり。)然るに歐洲の諸學者が如斯に夢想せる「ソリダリチー」の境界の、既に已に我國に實現せられしものなるを知るは愉快なることならずや。日本人は常に己れと家族とを同視せり。延いて又た己れと國家とを同視せり。否な實に國家てふ文字が國と家との結合より成ることとたるや、是れ全く日本人が如

何に親く國と家とを同視するかを證するものならずや。日本人に取りて國家てふ觀念が如何に快き情を有するかは、到底 State 又は society を敵視し來りたる歐洲人に解し難きものなりとす。然るに日本の祖先祭は吾人に敎ふるに、皇帝陛下の御先祖は即ちまた吾人の先祖なることゝ、吾人の周圍にある日本人の比喩以上の眞正なる意義に於て吾人の同胞なることゝを以てして、啻に我が一時代の人を家族として親ましむるのみならず、猶ほ過去數千年間に生存せし人々を血族の情を以て追想せしむるものなるにより、此祖先祭が「ソリダリチー」を涵養するの重因たりしは疑を容れざることなりとす。

されば十九世紀二十世紀の新道德は「ソリダリチー」にありと叫ばれたる今日に當りて、世界中最も多く「ソリダリチー」を顯はさしめたる日本の祖先祭を研究するは倫理上趣味多きことなる可し。

(第三)　宗敎上の關係

日本人の宗敎思想に就きて多少の研究を試みたる人は屢々疑を起さゞるを得ず、日本人は到底宗敎思想に乏しき人民に非ずやと。日本人中無學なる部分の信ずる宗敎は多くは罪のなき慰み事の如きものにして。西洋の Sacrifice 又は worship の極て嚴肅なる意義を有するにも關はらず、日本の御祭りは實は面白き遊び、てふ概念の外延を爲すに外ならず。又た學識ある部分の日本人は極めて現象的、實際的なるが爲め、到底基督敎國の詩人、哲學者、神學者等が感じたるが如き猛烈なる宗敎心の發動を感ずるを得ざるなり。

是れが爲め現今一種の宗敎家の如きは大に憂慨を抱きて、日本は如何に諸他の點に於て進歩を爲すとも、日本の宗敎心にして斯如き劣等なる狀態に止まるものならんには、眞誠なる日本の精神的發達は到底達し難きものなりとなし、頻りに猛烈なる宗敎心を發生す可き方策を講究せり。之に反して他の種の非宗敎的若しくは放任的論者等は、日本人に宗敎心の少きは宗敎の不必要なる證據にして、今日に於ては強て愚民の奉ずる信仰を撲滅するほどの要なきも又た更に宗敎心を高めんとして積極的運動を取るの價値なきものなりと思考せり。

然るに日本人は果して宗敎心なき人民乎。日本人の宗敎心は果して劣等なるものなりと云ふ可き乎。日本の過去の精神的敎育は果して非宗敎的なりしと云ふ可き乎。是固より宗敎てふものに對する見解の如何により

て決す可し。されど祖先を敬し、同族を敬し、恩人を敬し、偉大なる人物を敬して、之を追慕し、之を祭祠するに至るの情は宗敎心に緣なきものなるか彼の大人を崇拜するカーライルの宗敎の如きは宗敎とするに足らざるものなるか。我日本を以て尊嚴なるものなりとなし、我皇室の隆盛即ち日本の榮譽の花を以て主上なる理想となし、我が同胞の爲に死するを以て無上命法と思はしむるが如き根本の感情は宗敎心と遠きものなるか。人或は曰はん如斯きは概ね現象にのみ止りて、深く現象の背部に透徹して大理を感得することあらざる故宗敎心とす可らずと。されど歐洲の所謂る宗敎心は惣ての人に於てその如く高尙なるものなるか。また我國の宗敎心は曾て現象以外の天に冲せしことあらざるか。彼の『秀爲不二嶽』『發爲萬朶櫻』而も『長在天地間、陰然叙彝倫』の妙用ある、磅礴として六合の間に充塞せる天地正大の氣の信仰の如きは、實際上吾人をして眞の宗敎的生活に近き生活を送らしめしものに非るか。勿論日本の宗敎心は神學的にはあらざる可し。されど是何ぞ妨げん。世界の大勢は次第に神學的宗敎心を拋棄して、之に反ゆるに一層純粹なる倫理的宗敎心を以てせんとしつゝあらざるか。果して然らば旣に充分に發達せる我國の倫理的宗敎心を拋棄して、却て歐洲の神學的宗敎心を輸入せんとするが如きは智なりと云ふ可きか。此等は日本の宗敎を論ずるものゝ硏めざる可らざる點にして、眞に能く之を硏めんとせば日本の倫理的宗敎心を養成するに預つて偉功ある、日本の祖先祭の硏究を疎外にするを得ざるなり。

如斯く日本の祖先祭は、種々なる點に於て大に注意す可きものなるにも關はらず、祖先祭の眞義の未だ充分に世間に知られざるは怪む可きことならずや。故に余は玆に第一に、祖先祭に關する最も有名なる學者の見解を論評し、第二に、我國に存せし祖先祭の發達及び變遷の有樣を略述せん。

宗敎上祖先祭の地位　附スペンサー氏の祖先祭論

祖先祭に關せる最も有名なる學說はヘルバート、スペンサー氏の見解なり。スペンサー氏は其有名なる社會學原理第一篇に於て、原始の人民が天地萬象に對して抱きたる觀念を硏究し人間社會に宗敎てふものゝ發達するに至りたる順序を述べられたり。卽ち氏の說に依れば、宗敎の根本は、天地間に幽靈てふものありとの信仰に在るものにして、原始の人民は自然界及び精神界の種々なる經驗より、一切の天變地異は悉く皆幽靈の

所爲なりと想像し、而して此幽靈は死人の身躰より脱け出てたるものにして、彼等の吉凶禍福を左右する能力あるものなりと信仰せり。隨つて此幽靈の怒を撫めて歡心を買はんが爲め、彼等は此幽靈に供物を捧げて禮拜するに至る可し。是れ即ち諸宗敎の大本たる祖先祭の起原にして、自餘の偶像敎、木石敎、動物敎、自然敎等を始め、各種の宗敎は皆此の祖先祭より發達せるものなりとせられたり。

以上は祖先祭に對するスペンサー氏の有名なる議論なり。氏の説の誤謬を指摘することは吾人に取りて極て容易なるにも關はらず、歐洲に於ては今日に於ても尙此説を歡迎するもの少しとはせざる也。彼の氏の後に出てゝ動學的(ダイナミック)、社會學(ソシオロジー)を著はして、多くの點に於て氏の説に反對せるレスター、ワード氏の如きも、スペンサー氏の論は自然の現象に據り人心の理法に基きて、根本的に宗敎の起原を究めたる始ての説なりとして之を稱讃せり。又我國に於ても始て社會學を著はされて有名なる有賀長雄氏の如きも、其『宗敎進化論』中に全くスペンサー氏の説を採られたり。即ち有賀氏は日本の祖先祭は鬼神誌時代より敎理時代に遷らんとするの際に維新の變動に遇ひて進化を中止したりと云ひ、同書四百八十四頁に於て左の如く記るされたり。

『抑モ鬼神時代ニ於テ祭儀神禮ヲ行フ所以ノ目的ハ第二部ニ於テモ述ヘタル如ク祖先ノ亡魂即チ鬼神ハ人ノ運命幸福ヲ左右スト信スルニヨリ避怒邀喜ノ爲めに飮食ヲ供獻シ人畜ヲ犧牲ニシ讃歌ヲ讀誦シ剃髮シ參詣シ自傷シ斷食スルニアリ。……』

此スペンサー氏流の祖先祭論に對して爲す可き批評は二三に止まらざることとなるが、就中其大なるものにして本論に關係あるは左の二點なり。

（一）祖先祭は果して自餘の諸宗敎の根本なりや

進化説に依れば原始の形狀は發達せしものよりも劣等なるものなるにより、祖先祭にして若し自餘の諸宗敎の根本ならんには、祖先祭は木石敎又は動物敎よりも劣等なるものなりと云はざるを得ず。極めて野蠻なる種族の中に於ては或は然らん。されど日本若くは支那に於て發達せる祖先祭を以て、如斯き劣等なるものなりとする説の不都合なるは論ぜずして明かなり。

且又スペーサー氏の論は宗敎の起原を以て、祖先を祭るの信仰より發生すとするの説なるが、宗敎の起原の何なりやに至りては大議論あるとにして彼のマクス、ミユーレル氏、又はハルトマン氏等の如きは言語學上

及心理學上の證據によりて既にスペンサー氏の說の成り立たざることを證明し居れり。余は此處に於て宗敎の起原を論ずるを得ざれども。確かに今日の宗敎學者中祖先祭起原說を信ずるものあらざるなり。

(二)祖先祭の起原は果して常に恐怖の感情に基つくか

祖先祭の起原は、スペンサー氏の云はれたる如く、果して常に恐怖の如き劣等なる感情に基くか。果して有賀氏の云はれし如く、避怒邀喜の如き卑む可き情に基くか。勿論或る塲合に於て或人物が恐怖の情よりして祖先を祭りしことは無之に非るべし。されど是獨り祖先祭のみならず、神の信仰に於ても屢〻恐怖の情の動機たりしことありしなり。若し夫れ祖先祭てふ格段なる儀式を生するの源泉に至りては、恐怖の如き下等なる感情にあらずして、人生最も高尙なる思想に基くものとす。此思想の何たりやは孟子既に之を論したり。孟子の墨者の夷子と道を論ずるや語て曰く、

『蓋上世嘗有不葬其親者其親死則擧而委之於壑他日過之狐狸食之蠅蚋姑嘬之其顙有睨泚而不視夫泚也非爲人泚中心達於面目蓋歸反虆梩而掩之……』

又た他の處に於て語て曰く、

『且比化者無使上親膚於人心獨無恔乎無』

蓋し蒙昧の世、家族の關係の定らざりし時に當ては、死者の遺骸は多分山谷に捨てられしことならんも、人の心の發達するに從ひ、忍びざるの心より、遂に死者の遺骸を葬るの禮を發生し、既にして家族制度の設定せらるゝに至りては、家族的愛情發達して葬式の儀式は益々複雜となり、終を愼むの情は一轉して遠を追ふの情となり、玆に祖先祭を發生するに至るは極て見易きの道理にして、更に恐怖の情の其中に介するを見ざる也。

乍併スペンサー氏が原始の宗敎なりと思へる祖先祭を以て、恐怖の情に基きて起りたるものなりと考へしにも無理ならぬ事情あり。そは基督敎の基礎たる猶太敎の神は、極て嚴烈にして且つ我儘なる神なるにより、猶太敎の信者等は此神の前に戰栗平伏し、常に其怒を撫めんと務めしものなるにより、從て基督敎にも如斯き思想の波及せしを以てなり。されど日本及ひ支那に行はれたる各種の宗敎には、如斯き恐怖の感情は殆んど皆無なり。そは歐洲の諸國には『祭』の字に匹敵す可き適當なる譯字のなきことを見ても知りぬ可し。英の Offering は餘りに具躰なり、又た其 Worship は餘りに

抽象なり。止むを得ずSacrificeを以て之に充つるの例なるが。此のSacrificeの中にはPropitiation(即ち神の怒を撫むること)若くはExpiation(即ち罪の贖をなすこと)等の意義を存するにも、『祭』の字の中には更に如斯き意義あらざるなり。尤も『祭』の字は肉と右の手と神との三分子より成り立つものにして、右の手に肉を捧げて神に呈する形を顯はせるものなれども、此肉は全く好意の印として献上するに止りて、歐洲の宗教の如く之に自己の罪惡を塗り付けて己が身代りに立つるが如き感情あらざるなり。

然ば則ち日本に行はれたる祖先祭の精神は、決して恐怖若くは避怒邀喜の如き感情に非ずして、始は孟子の云へるが如き不忍の情に發生し、終には孝心の發達と共に發達せしものなりとす。余は祖先祭が如何なる感情によりて發達せしやを顯はすが爲め、更に儒經の文章を引きて孟子の語に添加せん。

『孝子之事親也、居則致其敬、養則致其樂、疾則致其憂、喪則致其哀、祭則致其嚴、五者備矣然後能事其親』(孝經)

『孝子之喪親也、哭不依、禮亡容、言不文、服美不安、聞樂不樂、食旨不甘、……爲之棺槨衣衾以擧之、陳其簠簋而哀戚之、哭泣擗踊哀以送之、卜其安兆而安措之、爲之宗廟以鬼享之、春秋祭祀以時思之、生事愛敬、死事哀戚、生民之本盡矣、死生之誼備矣、孝子之事終矣、』(孝經)

斯くて親を祭るに至ては禮記に記せるが如く、

『齋之日、思其居處、思其笑語、思其意思、思其所樂、思其所嗜、齋三日、乃見其所爲齋者、』(祭義)

『祭之日、入室僾然必有見乎其位、周還出戶、肅然必有聞乎其容聲、出戶而聽、愾然必有聞乎其歎息之聲、…君子生則敬養、死則敬享、思終身弗辱也、』(祭義)

祖先祭は如斯き感情の鬱結して發現せしものに外ならず

(未完)

批　評

松本文三郎氏の『公孫龍子』を讀む

田　岡　嶺　雲

書を讀むに、徒らに文字言句を看るもののみなるはこ

れ眼に肉あるもの而已、眼光紙背に徹するものにして始めて標月の指を忘れ、得魚の筌を忘るへき而已。言に執し句に著して徒らに彫虫の末に拘らす、讀破萬卷して果して何の功かあるへき、天下書を讀むの人は多し具眼の人なきを憂ふ。目錄學者、活字引、滔々たる天下皆是れのみ。彼等何の見識かあらむや、何の領解かあらむや。術識の孔雀たらずむば、則ち好辯の噪蛙となる。術識のものは猶愍むへし、好辯の徒悪むに禁えたり。

好辯の徒、彼等の書を讀むや其皮想を見るのみ、作家の眞意は其識り得る所に非す、徒らに其言句の末を捉へて吶々す、彼等自家庸常の尺度を以て作家の意趣を蠡測す、彼等もと達識なるものなし、人を容れて己れの用となすを知らす、之を辯し之を論し、之を困揺せすむは則ちやまず。而かも彼等以て自ら高しとし、得々として謂ふ吾前人に勝ると一等と、何ぞ知らむ彼等は其意を誤解し、其旨を牽強し、故らに以て己か辯を強ひたるのみ。彼等盲如何ぞ全象を觀むや。

夫れ書を讀むは心眼を以てするを要す、何をか心眼を以てすといふ、同情の眼を以て之を觀るなり、何をか同情の眼を以て觀之るといふ、深く作家當時の境遇を察し、當時の感化を詳にし、寬恕の心以てこれに臨む、徒らに言句の表面のみはこれ見ず、更に意向の裏面を察し、以爲らく彼か言ふ所此の如しと雖とも、これ此の如きの情由ありて然るもの、其眞意は當さに此の如くなるへし、其眞意此の如くなるへしと雖とも、その言ふ所は此の如き所に誤りて、此の如きの言をなすと。此の如く觀來らば天下何の書か吾と同しからさらむ、吾將た何の所にか異を立てゝ辯を强ゐてせむ。彼の異を立て辯を好むの徒、彼等胸裡寸地の綽々なし、此の如くにして天下の書を讀まば彼等役々了てまさに其辯に弊れむ。然れとも彼等の終に此の如くにしてやむ所以の者は、その地歩を占むると一歩高からされはなり、彼等胸中もし達識あり達見あらしめは彼等は大海の如く幾多の涇渭を容れて餘りあるへき而已、もし一定の識見ありて而して天下の書に對す、天下の書悉く取て吾註釋となすへきのみ、自ら陸象山が所謂六經は吾注釋といへるこれのみ、一定の識見なし故に他の意を酌む能はす。左ノ右ヽ彼等常に躊躇たるか故に、彼等は到る所に四撞八觸する而已。

書を讀むと啻に然るのみならず、人を觀る亦同情の眼を要す、彼の人の爲めに傳を立つるもの亦然り、これ

なくむば彼等は深く心情徴妙の變遷を察する能はず、徒らに其行の蹟を執つて矛盾撞着すとなせとも、殊に知らす、其矛盾撞着も更に深く内奥に徹し得ば歴々として其經過の跡を尋ぬへく、矛盾なるものまた然らさる可らさる所以のものあつて存するを看む、此の如くにして初めて人を評すへし以て人の性行を說くべし。同情の眼を以てし、寛恕の心を以てす、天下何人か好からさらむ、東坡嘗て曰く天下不好的の人物なしと、此達觀あり以て人を觀るへく以て書を讀むへし。

天下今日這種の人少なし、徒に異を立て辯を好むの徒の跋扈を極むるのみ、井蛙の偏見を以て强て前人をみ其蠡測する所を强辯して勝を求む、彼等は自らの影と相撲ふもののみ憫笑に堪えんや。而るに今松本氏千歳の知己を期して東洋哲學に公孫龍子の詭辯に非さるを論す、氏か滔々たる俗流に卓異して、千歳の下龍子かために冤を雪かむとす、吾人豈に幽谷跫音の感なからむや、それ公孫龍は詭辯を弄するものとして天下の唾棄せるもの、然れとも蟷螂の頭猶珠あり、公孫龍子の說と雖とも豈に一箇の眞理なからむや、吾人嘗て白馬論を讀み感する所を記して筐底に藏す、敢て人に示さず、寧ろ異を立つるの名を嫌へはなり、今松本氏か公孫龍を讀むに及むて予か所見と相違ふものあり。言はむ乎、言はさらむ乎、言はさるは道の爲めに忠ならず、言へば紛々の辯を君如何む、嘗試みに唯一度之を言はむのみ、吾豈に辯を好まむや、辯を好まむや。

概念なるものあり、念ふ所あるか如くにして而かも念ふ可らす、念ふへきは箇象概念は思ふへきに非す、念はむと擬すれは即ち箇象心に現れて、遂に概念なるものを念ふを得す。得すと雖とも、これ有るか故に能く箇々相離れたる寫象を概括して其下に羅織するを得、しかも此の如しと雖とも、吾その何の故に能く然るかを知る能はず、吾人の識に現れ來るものは悉く箇象にして、概念なるものは箇象を統つて而かも識に現れ來らず。

馬といふとあり、白馬をいふに非す、黃黑馬をいふに非す、非すと雖とも白馬、黃黑馬皆馬なるものなり、馬なるものは白馬と黃黑馬とを該ねて之をいふ、該ねて之をいふと雖とも白馬は白馬にして馬なるものに非す、黃黑馬は黃黑馬にして馬に非す、然らは天下果して馬なるものなき乎、果して馬なるものなくんば如何ぞ白馬、黃黑馬を指して馬といはむ、既に之をいふ白馬黃黑馬の外別に馬なるものあるへき乎、既に馬なる

ものあれは馬なるもの白馬黃黑馬を除て何の所にか存する、嘗試みに之を念ふ、念へは即ち其心象に現れ來るものは白馬と黃黑馬にして馬なるものを念ふ能はず、馬なるものを念はむと擬すれば即ち必ずや白馬或は黃黑馬を念ふ、馬なるもの之を口にすといへども、之を口にするものその之を口にするに當てや、必ずや或白馬或は黃黑馬を念ふて之をいひ、而して之をきくものも亦之をきく時、必ずやまた或は白馬或は黃黑馬を念ふて之をきく、故に視聽に執するものは遂に馬を知る可らず、何そや馬なるものは主觀に存するのみの概念なる而已、白馬と黃黑馬は客觀に存する箇象なるのみ、概念なり故に箇象の外に存する有るが如くにして而かも箇象を離れて之を思ふ可らず、故に思ふへく識るべきは白馬と黃黑馬、馬なるものは思ふ可らず識る可からず、想を離れ識を絕して初めて馬を觀るべし、馬は冥契すべくして知解す可らず。

覆載の間森然として萬象羅列す、天地位を定め、日月かゝる、山は以て高く、淵は以て深く、獸は走り、鳥は飛ぶ、秩如として之を統ぶるもの有て存するが如し、何者か之を統ふ、吾其ものを見ず、無形無象、窈々冥々、強て名けて道といふ、而れども天地の間初より果して道なるものありて存せむや、吾にして天地萬有を統ふるの概念なるものなからしめば、宇宙は渾沌たるならむのみ、天地顚倒日月逆行未だ知る可らず、唯人此宇宙の間に生して識るとあり、天地萬有此識と共に我に生ず、我に現はるゝの天地萬有は即ち我の天地萬有なり、我なくむは天地なく萬有なし、我は識るが故に天地あり、萬法あり、而して、吾にあるの識は概念の下に立て統一さる概念よく識を統一すと雖とも、概念は識其物に非ず、識に非ず故に統一するとありと雖とも之を想ふ可らず、之を識る可らず、想ふ可らず識る可らずと雖とも、概念あるが故に吾識に現はるゝの天地靡然として統へられて其序をなす、彼の所謂道なるもの此概念のみ、主觀に存して客象に存せず、想にして實にあらず、故に道なるものは存する有るが如くにして而かも睹る可らず聽く可らず、何そや箇想に非ず箇象に非らざればなり、故に心外に道を求めは剖拆抓抉するも遂に得可らす、念想の間に求むるも亦得可からす、故に此道を觀んと欲するものは反光自照一念不起の始めを觀ざる可らず。

古來の哲學者が本躰といひ絕對といふまたこれのみ、吾人が識り得べきものは悉く是れ相對のみ、箇象のみ、

吾人は吾人の識り得る限り、想ひ得る限りに於て絶對をしる能はず、本躰なるものをしる能はず、吾か我を存するの間に於ての吾宇宙は現象の宇宙を除きて別に本躰なるものあるなく、相對の萬法を除いて別に絶對の眞理なるものなし、吾人が絶對を觀本躰を觀得たりといふは、湛然として一念起たず一想生せす、淸虛寂莫吾を喪ひ偶を忘れたる瞬時をいふのみ、之を稱して道と躰を合するともいふ。現象の天地何の所にか絶對あり本躰あり道なるものあらむ、現象の世界は吾か我あるの時の世界なり、絶躰本躰は吾か我を忘れたる時の狀態なり、我に有りて我自ら知る能はさるの概念なるのみ。

公孫龍の所謂馬なるものは此絶對をいふのみ、此本躰をいふのみ、所謂道なるもののみ、白馬黃黑馬なるものは相對の箇象のみ、宇宙の萬法をいふのみ、吾人か識り想ふ我たるの限りは、白馬黃黑馬を知るのみ、馬を識る可らす、馬を觀んと欲せば想を絶し言を離れて之を得、言に著けは白馬黃黑馬を知らむのみ、想に執すれば白馬黃黑馬を知らむのみ、幷子か天地一指也萬物一馬也とは、亦此裡の消息を洩せしの言なるのみ。論理の悖戾と憑據如何を以て徒らに公孫龍子を論するものは猶未た龍子の眞意を知るものに非す、徒にこれ龍子か言句を讀むのみ文字を知るのみ。

吾人は思ふ、龍子は松本氏のいへる如く『其論するものゝ意義を確實にし偏頗の論說を避けざる可らさるを感し以て一種の論辨法を按出』したるものに非すして、寧ろ當時の流行につれ、故らに難解の措辭を以て其論旨を澁晦にして自ら高しとせるものにして、決して『普通に用ゆる所の文字を以て平易に之を述へん』とせるものに非ざるを。夫れ周末哲學の通弊は文字の晦澁にあり、蓋し子氏百家の興作當時より盛なるはなし、深心强力の士各々人の唾餘を甞むるを耻ちて一家の言を掫めて以て自ら表見す、是に於て乎故らに言句文字の末を矯めて故らに異にせんとす、故に六書七籍百氏九原徃て反らず各其偏に趨せたりと雖とも、其指歸を統へ其始末を詳にせば未た必すしも會通の所なからすとせず、故に當時諸子の眞意に參せんと欲せば須らく其本源に徹透すべし、拖泥帶几切に岐路に彷徨するを忌む。

四書全書總目に。假指物以混是非借白馬齋物我といへるものは寧ろ龍子か眞意を得たるに庶幾し、龍子は寧ろ老莊の道に近きもの徒らに其言句の末を逐ふて而し

て其意を得んと欲せば、彌々行て彌々迷はん、其本に歸らんには如かず。吾人は世に徒らに字を讀むの肉眼者流徒に過多にして別に一隻の心眼を有るもの少きを慨す。

雜録

ナヽを讀みて

杉村縱橫

谿聲便ち是れ廣長舌、山色清淨身に非るはなし、思ふに實相は訓戒也、是れ眞是れ實、之を眞と見、之を實と知るに於て一種の訓戒は脉々として之に隨ふ、吾人は「ナヽ」を讀で特に其然るを覺ゆ、「ナヽ」は佛國現實派の泰斗エミールゾラの著はす所、

吾人は「ナヽ」に於て幾多の訓戒を得たり、人文學の天下を毒する所以を論すれば必づ自然派の小説を擧ぐ、自然派の小説を擧ぐれば必づエミールゾラを擧く、エミールゾラを擧ぐれば必ず「ナヽ」を擧ぐ、「ナヽ」はたとひ自然派の暗黑なる方面を代表すべき最悪の小説に非ずとするも兎に角近世の小説界に於て最も陋劣にして最も卑猥なる小説の一たることは否むべからず、而かも吾人は之に依て多少の訓戒を得たりといふ、人若し如何なる點に於てか得たると問ふものあらば吾人はナヽを生ぜる社會「ナヽ」が書かれたる筆法及ナヽの上に於ける事實に於て得たりといはんとす訓戒といふ語に語弊あらば之によりて一種の反省の端緒を得せしめたりといはんも亦可なり

請ふ先づナヽが如何なる筆法によりて書かれたるかを語らん、そも〳〵ナヽ一躰の結構はナヽなる女優が初めて巴里の劇塲に出でたる時より盛に巴里の交際社會に歡迎せられ皇族貴族銀行家軍人新聞記者俳優なんどゝ不潔なる關係を作り遂にナポレオン第三世の軍が普國に攻め入らんとする頃空しく巴里の客舍に死したるまでの事實を叙したるもの其間私通、姦淫、殺人、負債、醉酗、驕奢等社會の暗黑なる方面を寫すこと頗る詳密なるにも拘はらず其寫實小説としての危險の甚だ少なきはゾラがナヽを中心として書き出せる點に在り、我邦近時の小説中大なる寫實小説として見るべきもの二、一は二葉亭四迷の「浮雲」一は正直正太夫の「油地獄」是也「浮雲」は此處に緣もゆかりもなければ姑く措き試に正太夫が「油地獄」を執て「ナヽ」に比較せ

んか彼に在りては小歌とかいへる藝妓と一書生との關係を叙し此に在りてはナヽと諸種の人物との關係を叙したるものなれば趣向に單複の別こそあれ其結構に於て大に相似たるものなり左れども彼に在りて中心たるものは書生にして妓に非ず隨て妓に對してよりも書生に對して同情を惹くこと多し此に在りてはナヽが中心にして之に迷へるものは客位に在りゾラが此點に於ける筆法はまさしくナヽに對する同情の筆を以て寫されたるの故に醜陋なるナヽの心事境遇ありのまゝに畫き出されて人をして殆ど嘔吐を催ほさしめんとす、ナヽを客位に置き之に迷へる者を中心とすること「油地獄」の如くにしてこそ怪しからぬ實感を起して讀者が其主公に對する同情を加ふるに隨ひ知らず識らず遂に自ら之に迷うて悟らざるに至らんとする危嶮はあれ、然かく放縱にして然かく淫逸にして然かく驕慢にして然かく人を欺き然かく己を忘れたる淫婦を直寫しては讀者が之に對して最も多く興味を感ずる時是れ即ち最も甚しき反感情を生ずるの時也、吾人は此點に於て斷じてナヽの危嶮を識認することを能はず、

吾人元よりゾラを以て福音を傳ふる者と認むることを能はず然れどもゾラ豈に一片の理想なからんやナヽ豈に一種の訓戒を傳へずとせんやナヽは屢々其情夫を改め或時はスタイナルに或時はフォンタンに或時はムッファに或時はヂョージに或時はフヰーシェリーを其德操を賣りしにも拘はらずフォンタンに對する愛の甚だ深かりしこと其ヂルイに對する愛か始終變らざりしことの如きナヽ必しも無情冷腸の動物のみなるに非るを證す、ナヽはヂョーヂが己の爲に死したる時甚しく哀みきフォンタンに厭はれし時深く其不運を嘆きき彼れ必しも良心なきものには非りしなり此等焉ぞ惡逆無道の徒も心中自ら人類の美德を具へたることをいふものならざらん、ナヽがムッファを罵て「先づ其鏡に照らして己が顔を見られよ之にて御身の美が人の愛を引き得べきものとや思ひ玉ふ」といへるが如き左しも親しかりしものに對しても一旦其貧を見ては見棄つること敝履を棄つるが如き、若くはユージョン夫人が鄙吝の甚しかりし爲め其子が自ら財本を得ることを能はずして遂に一個の罪惡を犯すに至れるが如きいづれ隱約の意味を表はさぬはなけれどゾラが特に用もなきイルマダングレーといへる老婦人を畫き出し其老て益々天下に敬せらるゝに對してラレーヂポマーレといへる其昔全盛なりし女優の今は老いさらばひて見る影もなき一乞食

を對照せしめ之を見たるナヽをして己の末路を思はしむる邊(第十五章)及ナヽの死を特に天然痘によりて起りしものとし其枕邊に集れるものをして「さても恐ろしく見變はりしたるものかな」と嘆せしめたる邊(第二十三章)の如きは人をして

「あはれやげに古は憍慢最も甚う翡翠のかんざしは娜娜とたをやかにして楊柳の春の風に靡くが如し、また鶯舌の囀りは露を含める糸萩のかでとばかりに散りそむる花よりも優めづらしや、今は民間賤の女にさへ穢なまれ諸人に恥をさらし嘻しからぬ月日身に積つて百年の姥となりて候」

といへる謠曲卒都婆小町の一節を連想せしめゾラに多少の用意ありしことを疑はさらんとするも得ざらしむ然れども吾人は初より「ナヽ」に對して文學的批評を加へんとするものに非るが故に此等區々文字の上に表はれたる訓戒を傳へて足れりとするものに非ず、斯の如きは凡百の小説皆盡く之を備へて唯其分量に多少あるのみ吾人が特に「ナヽ」を讀で深き感慨を禁し得ざりし所のものはゾラの著述中の一人物なるナヽの上に非らずして佛國がナヽを生ずるに至れる社會の狀況に在り

實にやナヽは是れ一個の社會問題也暫くエミールゾラの手を離れてナヽを見よ、ナヽは佛國の一小説家が戯れに拈出したる女優に非ずして、前世紀末の佛國革命が生みたる一個の私生兒なり今先づ佛國革命なるものが如何にして起りしかを問ふを已めよ、そはギゾーのいへるが如くルーテル以來の改革者が宗教社會に於て得たる自由を政治社界に於ても得んとせる熱望よりも起りしなるべしそはデールボン王朝累代の壓抑に反抗して平民の立脚地を得んとせる熱望よりも起りしなるべしそはボルテヤ、ルーソーの危激なる思想によりても導かれたるなるべし、そは太洋を隔てたる亞米利加の新たに其自由を得たるを羨むの餘りにも出でたるなるべし、其のいづれが大原因にしていづれが小原因なりしとするも兎に角佛國革命なるものは階級打破といへる觀念より導かれたるものなることは疑ふべくもあらじ、佛國人民が其帝王の爲に其貴族の爲に又其高僧の爲めに壓服せられたるは一朝一夕の事に非ず、革命の暴火一時に第十八世紀末に燃え出でたるは年來の欝懷偶ま機會を得て爆烈したるのみ、此爆烈は是れ壓抑に苦みたる國民が上階級に反抗せんが爲に出でたるものにして革命の主腦は正しく此點に在りきバスチルの

破獄もダントン、ミラボー等の苛酷もギヨチンの慘も恐怖時代も皆な是れ此の熱望の結果に外ならず、斯くて戰爭は終りぬ、革命は去りぬ、國民議會は幾度か起り幾度か倒れたる後漸く其基礎を固めつ個人の權利も幾度かの脅迫を受けたる後やゝ其根抵を固め得るに至りき、是れ則ち今日の佛國を生せし所以而して又ナ、を生むに至りし所以なり、

凡そ久しく壓抑の下に屈せし者が一朝其羈軛を脫して俄に前日の所謂上流と比肩し得るに至りては前日の反動此等の者を驅て放縱驕傲の地に陷れさるもの殆ど希也遠くはピユリタンの嚴格なる制度を脫したる王政復古時代の英國人民近くは我邦維新以後に於ける或る社會の如き皆な然りき佛國は啻に此等と其境遇を同うしたるのみならず其はげしく感情的なる氣風とルイ十四世以來華奢なる生活に慣れたる點とより其運命を英日と同うしながら其程度に於て惜に一等を越えたるものありしなりあはれ上は皇族貴族より下銀行家新聞記者軍人俳優の徒に至るまで放縱淫逸に陷りて自ら悟る能はざりければこそ女優といへる一種の怪物が佛國の交際社會に歡迎せらるゝに至りたるなれナ、は實に斯の如くにして出でたり彼は眷顧を受くること多かりき勢豪奢ならざるを得ざりき彼は豪奢の結果金を要すること多かりき勢ひ放縱ならざるを得ざりき顧客を求むると廣からざるを得ざりき勢ひ雇主の壓抑を忍びて一種の惡職に就かざるべからざりき、既に惡職に就く、其人を人とも思はぬ、其家政の道を知らざる、其奴僕を役することの拙なき、其偶ま生れたる子の尫弱なる皆自然の結果也、吾人ナ、を讀で其不實にして其惰慢にして其奢澤にして容易く人を罵り容易く人に怒り容易く貞操（若しあらば）を賣るを見て敢てナ、を憎まず、却て社會が無邪氣なる可憐の女子を此境遇に陷れて自ら慰まんとする惡德を憎まずんばあらず、堂々たる朝臣をして犬の眞似熊の眞似とて坐敷を這ひまはらするナ、あるは姦夫の帽子が置き忘れありたるを見て彼女を咎めんともせず兩手を天に捧げて絕望の齒軋りをかみたる意氣地なきムツフワーあるか故に非ずや左しも親しげに交りし人に對して一朝其金なきを見るや「大根一把を買はんも乘合馬車に乘らんも母上許さずむ心のまゝならじ――否、錢なきは是れ何物もなき也」と罵れるナ、あるはあてにもすべからざる戀の成らざりしとて自殺せし無腸男子ヂョーヂあるが故に非ずや狂奔亂舞媚を天下に賣り姦夫と手を携へて面白氣に半日の

旅行をなしゝナヽあるは自ら賣られ自ら裏切られて悟る能はざるスタイチルあるが故に非すやナヽに罪の責むべきものあらは其責の過半は這個の駄人物に負はしめざる可らず天下はナヽをのみ責めて寧ろ社會を惘れむ、特に知らず這の如き社會あつて初めて這の如きナヽを生ぜるに非るかを、ナヽ必しも悪德の婦人に非ず、そは其子ルイ其情婦フヂンタンを愛するの情の如何にも切なりしが如き屢々激語を吐て人を罵りながら自ら其怒に乘せしを悔て直に之を慰むるが如き、又彼のイルマダングレーを見て敬虔の念禁する能はざりしが如きを見ても知りつべし左れとも一たび足を此の如き地に立つれば、雇主に對し世間に對して外觀を盛にせざるべからず、其資を得んが爲に醜業に就かざるべからず、嫖客其富を失ふ時に至れば之を棄てざるへからす之れを棄てゝ他を迎ふ此に於て節操を賣らざるべからず、斯の如くにして次第に彼は悪德に向ひ初は無罪の一女子なりしものが遂に忍ふべからざる罪悪を犯しはては眞心の至る毎に自ら其不德を責め其死後の禍福を氣づかひて、終夜眠ること能はずムッファーの宗敎談を聞きても倚安堵する能はず、共思百端遂に絶望の深淵に投せられて終るもの寧ろ憫れむべきに非ずや吾人は我邦の維新は佛國革命の如くなりしといはす我邦の社會は佛國の如くなるや否やを知らす又彼の女優なるものは醜妓と等しきものなりや否や此等此に論せんやうもなし唯夫れ假りに此の如きものが我邦に行はるゝとせば吾人は誠實に其ナヽなる者を責めすして其社會を責むべきに非るかを疑ふ、眞にナヽを滅さんと欲せば根抵より其社會の成立を着目せさるべからず、個々百萬を屠るともセントバーソロミユーの虐殺は遂に新敎徒を滅し得ざりければ也

以上縷述する所は是れ吾人かナヽに於て認めたる訓戒也吾人元より之によりて「ナヽ」が小説としての價値を評せるに非すと雖も吾人は之によりて慥に一個自然派の小説中に多少の訓戒を認め得たりと信ずシヱークスピーア歌して曰く

Sweet are the uses of adversity, which like the toad,
Ugly and venomons, wears yet a precions jewel in its head;
And this our life, exempt from public naunt,
Finds tonguls in trees, books in the running brooks,
Sermons in stones, and good in everything.

と吾人「ナ、」をよみて特に其然るを覺ゆナ、漫に一個の卑猥小說として看過すべきものならんや。

荀子の性惡論

孟子が人の性善なりと斷定したる考へ方は大に見るへき所なきに非ずと雖ども、また荀子が之と正反對に人の性惡、其善者僞也と主張して、孟子の性善說を攻擊したる考は尙ほ一層價値あるやう思はる。固より此時代の思想は、今日の思想と比較せば、甚た粗雜なるものにして、輕々に現時の倫理說などと對比すべきにあらざれども、荀子の性惡論は其性質近今の私學的思想と酷似する點あるが如し。さればこの說の趣旨を分解するは吾人に取りて興味なきことにはあらざるなり。

（一）、性とは如何なるものぞ——人の性に關する議論は支那哲學にありては極めて重要なるものにして、性とは如何なるものを指すかと云ふ問題を定むるは決して容易のことに非ざるべし。されど今茲に性とは如何なるものぞと云ふは一般の思想を論ずるに非ずして、たゞ荀子が見る所の人性を說かんとするのみ。荀子の說によれば、人の性とは人が生まれながらに有する自然の傾にして、學びて得るものにあらず、恰かも目の以て見るべく、耳の以て聽く可きが如きなり。即ち左の數言によりて明かならん。

凡性者天之就也、不レ可レ學、不レ可レ事。

不レ可レ學、不レ可レ事、而在レ人者、謂二之性一。

今人之性、目可二以見一、耳可二以聽一、夫可二以見一之明不レ離レ目、可二以聽一之聽不レ離レ耳、目明而耳聰、不可學明矣。

斯の如く人の性と云ふものは天の就にして、決して學習を假りて得る所にあらず。而してこの性は人によりて相違するものなるかと云ふに然らず、萬人一樣人たるもの丶必ずもつて生る丶所なり、如何なる聖賢といへども、如何なる凡夫といへども、その性に於ては毫も異なる所なし。故に汝曰く、

凡人之性者、堯舜之與二桀跖一、其性一也、君子之與二小人一、其性一也。

塗之人、可三以爲二禹一、曷謂也、曰、凡禹之所三以爲二禹一、以三其爲二仁義正法一也、然則仁義正法、有二可レ知可レ能之理一、然而塗之人也、皆有下可二以知二仁義正法一之質上、皆有下可二以能二仁義正法一之具上、然則其可三以爲二禹明

矣。

本來何人も同一なる性を有して生るゝものなりと雖ども生後の境遇によりて賢ともなり、愚ともなり、有德の人ともなり、無德の人ともなるなり。

然るに人の性とて先天的に定まりたるもの果して存するや否やと云ふに、吾人の思想を以てすれば、斯の如きものあるべくも思はれずと雖ども、荀子などの考へにては斯の如きもの確かに存するやう思へるなり。これ今日の如く人類に關する知識未だ廣からざりしによるものならん。この時代にありては人類の自然界に於ける位置なども未だ今日の如く明かならず、從て人類てふ概念も大に異なれるものなれば、その所謂人の性を現今吾人がこの語を用ゆると同意味に解することは無論できざるなり。

(二)、善惡の標準及性惡論——荀子の考によれば、人の生れたるまゝの性質は惡なるものなり。如何に聖賢と雖ども其本來の性情はと云はゞ全く惡なるものにして、不德不義の犯罪者と毫も異なる所なし。然るに惡とは如何なることを指すかと云ふ問題を先つ解するはこの考をあらはすに當りて至當なることゝ思はる。若し善惡の標準を明かにするに非らずんば、ヤツキとなりて人性は善なりとか、將た惡なりとか論ずるも、何の益もなかるべし。然らば荀子の所謂善とは如何なるものを指すかと問ふに、一言以て之を言はゞ、社會の秩序を守ることに外ならざるが如し。惡は即ちその反對にして社會の秩序を亂すことたるなり。人若し辭讓忠信にして禮義を守り、能く法度に從はんか、即ち善人たるなり。之に反して互に爭奪し、殘害し、禮義にそむき、國法を破らんか、これ即ち惡人たるなり。故に善惡の別を論じて曰く、

凡古今天下之所ㇾ謂善者、正理平治也、所謂惡者、偏險悖亂也、是善惡之分也已。

而して人は生れたるまゝにては自然に偏險悖亂の方に向ふものにして、決して正理平治の方に向ふものにあらず。人は本來自利、自慾の動物にして、この自然の性情によりて互に相爭奪し、殘害し、人倫を破り、國法にそむくに至るものなり。人の傾向自ら斯の如くなるを以て、人性これ惡なりと斷言するなり。即ちその謂ふ所左の如し。

今人之性、生而有好ㇾ利焉、順ㇾ是、故爭奪生、而辭讓亡焉、生而有疾惡焉、順ㇾ是、故殘賊生、而忠信亡焉、生而有耳目之欲、有好聲色焉、順ㇾ是、故淫亂生、而禮義文

理亡焉、然則從二人之性一、順二人之情一、必出二於爭奪一、合二於犯レ分亂一レ理、而歸於暴、故必將レ有二師法之化、禮義之道一、然後出二於辭讓一、合二文理一、而歸二於治一、用レ此觀レ之、然則人之性惡明矣。

されば人の本性は斯の如く社會の秩序を保ち平和の生活をなすに適せざるものなり。然るに實際今日の如く社會の組織整ひ、人倫立ち、禮義定まり、以て互に平和の生活をなすことを得るは抑も何によるか。西洋の利己的倫理說にありてはホッブスの如く、人民が君主を立て之に統治權を與へて、人民相互の爭亂を制止し社會の秩序を立てしむるによりて平和を維持することを得となすものあり、又進化論者の如く之を自然の進化に歸するものあり。自己的倫理說より云へば勿論、進化論の上より云ふも、人類の初代に溯れば全く自利自欲の動物たることは、荀子の性惡論と其要領に於て毫も異る所なし。然るに斯る自利的動物が進歩して今日の如き狀態に達したることを論ずるに當りて、荀子は如何なる方法を取るか。ホッブスの如く之を論ずるか、或は進化論者の如く之を說くか、これ荀子にとりては極めて重要なる問題なり。

(三)、其善者僞也——この問題を解くに荀子は僞の一字を以てす。僞とは何ぞや、曰く、僞は爲なり矯なり、其本性を矯むるなり。凡そ天性に非ずして人これを作爲するものは皆之を僞と云ふなり。人の天性は惡にして本來社會の秩序に適せざるものと雖とも、人爲の矯正によりてこれを善となし、社會的生活をなすに適するものとならしむ。只だ小人と君子と異なり、堯舜と傑紂と相違する所以は人爲の矯正を施すと然らざるとにあるのみ。これによりて始めて人倫立ち、禮義整ひ、社會の平治を保つに至る。これ恰かも枸木の檃括烝矯を待て始めて直きが如きなり。即ち之を論じて左の如く云へり、

今人之性惡、必將レ待二師法一然後正、得二禮義一然後治上、今人無二師法一、則偏險而不レ正、無二禮義一、則悖亂而不レ治、古者、聖王以二人之性惡一、以爲偏險而不レ正、悖亂而不レ治、是以爲レ之亂起二禮義一、制二法度一、以矯二飾人之性情一而正レ之、以擾二化人之情性一而導レ之也、使下皆出二於治一、合中於道上者也、今之人、化二師法一、積二文學一、道二禮義一者、爲二君子一、從二牲情一、安二恣睢一、而違二禮義一者、爲二小人一、用レ此觀レ之、然則人之性惡明矣、其善者僞也。

今人之性、飢而欲レ飽、寒而欲レ煖、勞而欲レ休、此人

之情性也、今人飢、見長而不敢先食者、將有所讓也、勞而不敢求息者、將有所代也、夫子之讓乎父、弟之讓乎兄、子之代乎父、弟之代乎兄、此二行者、皆反於性、而悖於情也、然而孝子之道、禮義之文理也、故順情性、則不辭讓矣、亂讓則悖於情性矣、用此觀之、然則人之性惡明矣、其善者僞也。

人間本來の性情たるや、目色を好み、耳聲を好み、口味を好み、心利を好み、骨體膚理愉佚を好むものにして、毫も禮讓の心あるものにあらずと雖ども、禮義法度の矯化によりて本來の惡性を矯め善なるものと變ずることを以上の語によりて充分明かなるべし。然るに人の惡性を矯正する所の禮義とか法度とか云ふ如きものは如何にして生ずるかと問ふに、これ聖人の僞る所となす。即ち聖人は禮義を起し、法度を立てゝ人の惡性を導き之を擾化するものなり。然るに前に云ひたる如く聖人と云ひ、君子と云ふもの本來常人と異なりたる性を有するにあらず、その惡たることと悉く一樣なり。然らば則ち如何にして聖人の心に禮義生じたるか、換言せば、本來惡性なりしものか如何にして禮義を起すことを得しやとの疑問を生せざるを得ず。これに對する荀子の思想如何にと問ふに、聖人たるもの自ら思慮を積み、自ら矯僞抑制して以て禮義を生ずとなすにあり。即ち論じて曰く、

凡禮義者、是生於聖人之僞、非故生於人之性也、故陶人埏埴而爲器、然則器生於工人之僞、非故生人之性也、故工人斲木而成器、然則器生於工人之僞、非故生於人之性也、聖人積思慮、習僞故、以生禮義、而起法度、然則禮義法度者、是生於聖人之僞、非故生於人之性也。

故聖人化性而起僞、僞起於性而生禮義、禮義生、而制法度、然則禮義法度者、是聖人之所生也、故聖人之所以同於衆、其不異於衆者性也、所以異而過衆者、僞也、夫好利而欲得者、此人之情性也、假之、人有弟兄資財而分者、且順情性、好利而欲得、若是、則兄弟相拂奪矣、且化禮義之文理、若是、則讓乎國人矣、故順情性、則弟兄爭矣、化禮義、則讓乎國人矣。

吾人が感ずるまゝに自然無爲に動くはこれ本性なり。而して斯く自然に無爲に現はる行爲は悉く好利欲得てふ方向に向ふに過ぎず。然るに自爲の感動に任せて動

かず、之に人爲的抑制を與ふるときはこれ即ち僞となるものにして、禮義を生ずるに至るなり。聖人の本性もと常人に同じと雖ども自ら思慮を積み制裁を加へて本性を變じ禮義を生ずるもの〻如し。さらば平たく云へば、禮義と云ふものは恰かも器が工人の僞に出づる如くに聖人の僞に生ずるものたるなり。

以上説くか如く荀子は人に善行の存する所以を説明するに、第一聖人の僞によりて禮義法度起るとなし、次に人々之れを學び之れに矯化せられて、以てその本來の悪性を變じ善をなすことを得るとなすものなり。然るに聖人の僞とのみにては未だ何のことやら充分明かならず、何を理想として禮義を制定せるものか、偶然に進化したるものか、それらの點につきては説明不充分なりと雖ども、兎に角この思想中には少からざる眞理を含めるものと謂はざるべからず。

(四)、進善の動機——荀子の説によれば如何なる人も一樣に仁義正法を知るべき質を有し、又之を能すべき具をそなふるものなれば、常に專心一志、思素熟察以てその修行を懈らざれば萬人悉く堯舜たるを得べしとなす。然るに斯の如き理あるのみにて本來の有樣は尙ほ未だ悪たるを免れざれば、自然善の方に進まんとする願望を起すものなり。本來無き所の禮義を得、善ならんとする欲望あるにより、彊學思慮以て益進歩するに至るものなり即ち曰く、

凡人之欲レ爲レ善者、爲ニ性惡一也、夫薄願レ厚、惡願レ美、狹願レ厚、貧願レ富、賤願レ貴、苟無ニ之中一者、必求ニ於外一、故富而不レ願レ財、貴而不レ願レ執、苟有ニ之中一者、必不レ及ニ於外一、因レ此觀レ之、人之欲レ爲レ善者、爲ニ性惡一也、今人之性、固無ニ禮義一、故彊學而求レ有レ之也、性不レ知ニ禮義一、故思慮而求レ知レ之也。

故に荀子の考へにては人の本性悪なればこそ善たらんとする願望もあるなれ、若し本來善ならんか、何ぞ進善の動機起らんやと云ふにあり。然るに是に於て質疑を起すべきは本來全くなき善を追求するは何故なるか。これ一の難問なるべしと信ず。人は本性悪なれども進歩して善となるべき本來の目的を有するものなりとど云ふ如き説明は此説の上にては決して許すべからざるなり。

(五)、統治の必要——人間本來の傾向は自ら偏險悖亂に向ふものにして、決して社會の秩序を保つ能はざるにより、之を統治する必要生ず。これホッブスの思想と大に類似する所あるが如し。而して荀子の説によれ

ば、若し人の性本來善にして自ら正理平治に向ふたちのものならば、何ぞ聖王、禮義の用あらんやとなす。

即ち論じて曰く、

今誠以ニ人之性、固正理平治ー邪、則有惡(マヽ)用ニ聖王ー、惡用ニ禮義ー矣哉、雖レ有ニ聖王禮義ー、將曷加ニ於正理平治ー也哉、今不レ然、人之性惡、故古者、聖人以ニ人之性惡ー、以爲偏險而不レ正、悖亂而不レ治、故爲レ之立ニ君上之執ー以臨レ之、明ニ禮義ー以化レ之、起ニ法正ー法以治レ之、重ニ刑罰ー禁レ之、使ト天下皆出ニ於治ー、合中於善上也、是聖王之治、而禮義之化也、今當下試去ニ君上之執ー、無ニ禮義之化ー、去ニ法正之治ー、無ニ刑罰之禁ー、倚而觀中天下民人之相與上也、若レ是、則夫彊者害レ弱奪之、衆者暴レ寡而譁レ之、天下之悖亂而相亡、不レ待レ頃矣。

これ社會學上の事實と一致する思想にして、大に吾人の意を得たるものなり。今日の文明國に於ては人間自然の傾向必ずしも悉く自利自愛のみにあらずと雖どもこれ全く社會の必要にせまられて進化したるものにして、古代にありて社會の結合尙ほ未だ徼小なりし時分には。人類の慾望全く自愛的、自利的のもの丶みなりしや疑ふべからず。而して斯る自利的のみの動物は社會的生活をなすに不適當なるを社會の進化と共に漸々愛他の感情を增すに至りしなり。然るに自利自慾のみの野蠻人を統一して漸次今日の文明に進ましめたる重もなる力は君主の統治力なり。而して尙ほ今日と雖ども自利のみを主張して互に衝突を起し、社會の秩序を亂す如き人民決して少きにあらず。今日の國家組織は斯る傾向を漸次減して全體の調和を計り社會の秩序を堅固にせんとするものなり。されば人類はその自然の狀態に於ては自利自慾の動物たりしものにして、社會の矯化によりて道德的のものとなれるなり。又社會の進化と共に偏險悖亂の狀態より漸次正理平治の狀態に進步するものなり。これ自然の狀態を人爲力の變するものに外ならず。荀子の思想は此點に於て大に取るべき所ありとす。人之性惡、其善者僞也との思想は事實に近しと云ふべし。

(六)、終始——孟子の性善說は墮落主義にして、荀子の性惡說は進步主義なり。そは前者の說く所は人生れながらにして仁義禮智を具ふるものなれども、情慾の爲めに掩はるゝを以て不善なる實際世界を現ずとなすにあり、之に反して後者の說く所は人の性本來惡なれども人爲の矯正によりて之を善となすことを得となす

にあるを以てなり。現實界を不完全なるものとし、之を矯正せざるべからずとなす點に於ては兩者共に一致すと雖ども、この現實界を見る方法は兩者全く相反するものと云ふべし。前者はプラトーの人生觀と大に類似する所ありて、後者は進化論と同じき所あり。然り而して荀子が人性は全く自利的のものにして、必然偏險悖亂に向ふものなりと確信せる所は少しく極端走るに嫌なきに非ず、又禮義は聖人の僞に生すとなす所その思想粗大に過ぐる感なき能はずと雖ども、吾人の立脚地より見るときは本說は性善說よりは數等、進步したる思想と謂はざるべからず。固より前にも云へる如く荀子の性惡說たるや、今日の思想より見れば甚だ粗雜にして、殆ど臆斷想像たるに過ぎずと雖ども、その中に大に吾人の意を注ぐべき所あり。左の三點は大に吾人の意を得たるものと云ふべし。

（一）社會の秩序を守るを以て善となし、之を亂すを以て惡となすこと。

（二）人は自然のまゝにて社會の秩序に適合するものにあらずとなすことと

（三）人爲を以て自然の狀態を變じて善となすこと。

此等の思想は社會進化の事實と適合するものにして、尤も吾人の注意すべき所なりとす。

雜報

◎ソクラテス降誕會

日本ユニテリアン協會に於ける四聖祭の一たるソクラテス降誕祭は先月十六日午前十時惟一館に於て開かれたり。來會者堂に滿ちて甚だ盛會なりし。當日の演題及び演說者左の如し、

祝詞　佐治實然

瑣氏の倫理思想　竹內楠三

◎先進學院卒業式

先進學院第二回卒業式は先月十九日午前九時より惟一館內に開かれたり。來賓甚だ多くして第一回に比せば一層の盛會なりし。今回卒業せられたるは、蓮沼磐雄、飯塚陽平の兩氏なり。當日執行の順次左の如し。

演說

一日本祖先祭　卒業生　蓮沼磐雄

一個人主義を論ず　卒業生　飯塚陽平

一卒業證書授與式　敎頭マツコレー
一演說　　　　　　　加藤弘之

◎眞律宗の分離獨立

五六年前來西大寺住職佐伯弘澄師より出願中なりし眞言律宗の分離獨立は先日許可せられたり今其理由を聞くに元來律宗なる者は分離獨立の者にして其原は中唐の鑑眞律師來朝し梵網經四分成本等を所依し十重禁四十八輕戒二百五十戒等の戒律を以て勸善懲惡の旨を僧俗の間に說示するに始まりしが嘉禎年中に至り叡尊國師（興正菩薩）は律宗の衰微を嘆じ自誓得戒して之を再興し且つ眞言を兼學せしめて西大寺派を興起す故に正意は律宗にして眞言を兼學するを趣旨とす是眞言律宗と稱する所以なり然るに太政官は第二百七十四號布告を以て法相宗、華嚴宗、律宗、兼學宗、融通念佛宗の五宗各派幷其他法宗内の別派獨立本山及無本寺等は各〻望みの宗內總本山へ所轄を仰付けられたり是れ監督上一時の便法に出でたるものなるべし因て今回出願者の云ふ所と其來歷とを取調べて眞言と律宗とは分離獨立すべきものとしたる次第なりと云ふ。

◎日本基督傳道會社の略歷

本年五月大阪に開きし第十回組合敎會總會にて滿塲一致を以て決議したりし日本基督傳道會社の獨立は吾人の深く喜悅する處なるが此際斯くの如き結果を見し原因を知るは吾人の亦忽諸にすべからざる處なるを以て左に其畧歷を揭けて讀者の一覽に供す

明治十一年一月二日京坂神及び兵庫三田等我組合九敎會の委員大阪土佐堀裏町梅花女學校に會合して傳道會社設立の議を決し名けて大日本基督傳道會社と稱す是れ本社の濫觴なり當時（新島襄）京都澤山保羅（大坂）今村謙吉（神戶）の三氏委員の撰に當り專ら事務を執られ岡山外七ヶ所に傳道の着手を爲す越へて十三年五月委員澤山氏病あり上代知新氏之に代る拾四年五月年會を京都に開く之より先き我傳道會社は米國傳道會社の寄附金を受け內國諸敎會の寄附金と併用し來りしが本年會に於て獨立の議起り議論頗る喧しかりしも遂に共同の議に決し內外寄附金の割合を二分八と定め地方傳道區を七個と爲し各個に委員一名を置く十五年五月年會を神戶に開き內外寄附金の割合を改めて四分六と爲し委員を置く十六年四月年會を京都に開き傳道區を廢し五名の委員を三名と爲す十八年五月年會を神戶に開き地方傳道を從前の四分六とし本局傳道を內外二分八の割合に復し又本局を二分して關東關西の兩部と爲す十

九年四月年會を京都に開らき社則を改め常置委員五名(關東二名關西三名)と專任委員二名を置き別に會計を設く廿年五月東京に於て年會を開き二分八の寄附金割合を三分七に改む廿一年五月廿四日本社設立第十年期祝會を大坂土佐堀青年會舘に開く同月年會(大坂)に於て內外國寄附金の割合を廢し外國よりは確定の年金を受け其他を內國の負擔と爲し會計を廢して書記を置き會計庶務を司らしむ又東西の兩局を合併して一局と爲す廿三年四月年會を京都に開き本社規則を改正して社長を新設し評議員八名を置き正員社友の寄附金法を行ふ是れ本社の組織に於ける一大革新なりき廿四年四月年會(岡山)に於て規則の修正を爲し昨年度の負債金一千百餘圓の償却方を決議す廿六年四月年會を東京に開き規則第十九條を追加し五月初週を克己献金の週間と爲し臨時寄附金を募集することに決議したり廿七年四月年會を神戶に開きしが茲に復び傳道會社獨立の議沸騰し遂に會社組織變更委員五名を撰び向ふ一ヶ年間に調査し廿八年度の總會に報告することとなりたり。

(基督敎新聞)

◎明治廿七年度同志社報告概要

先頃京都同志社より發せし明治廿七年度同社報告は社長小崎弘道氏の詳細なる報告を始めとし資產管理委員報告及創業以來生徒員數表、卒業生職業別表、現在生徒府縣別表、明治廿七年度各學校卒業生姓名表、財產一覽表、資本計算表、特別資金勘定表、負債償却勘定表、各學校經費決算表、寄附明細錄等一々明細に掲載する所ありしが今其槪要を摘記せんに昨年度各學校新入學生の總員數は二百十八人にして一昨年度に比して增員十八人なり又昨年末の各學校在學生徒員數は五百八十三人にして之れを一昨年度に比して比較增員二十七人なり又寄附金總額金九千百十九圓三十錢八厘にして支出總額金五千六百七十九圓十七錢又寄附物品は圖書一千冊、標本七百二十二點、器械十二個、什器三個、合計一千七百五十二點なりといふ又同社創業以來生徒員數男生徒入學二千七百七十五名內退學一千八百五十四人卒業四百三十五人年末現在四百八十六人にして女生徒入學六百六十九人內退學四百三十七人卒業百三十五人年末現在九十七人なり又卒業生職業別は敎育傳道商業修學最も多く新聞記者、官吏、運輸、雜業其他にして各學校現在生徒府縣別は三府四十三縣一道廳にして中京都最も多く八十六名岡山之に次ぎ六十名兵庫五十名愛媛三十八名大坂二十七人其他各府縣少きは一人

に斃れしもありしかど千年の苦汗漸く一滴の効を收めて第一回の傳敎者渡來後九年目にしてアンドリユー金は其遁匿地上海に於てフエロール氏に依て僧級に進められたり其後金氏は未曾有の危險なる大膽なる渡海によりて本國に入込みしに翌年縛せられて法廷に引出されしが其豪膽や遂に判官の一人をして左の言葉を發せしむるに至れり「可憐なる少年よ爾は如何に困難の中に人となりしよ」然れども其刑を免るゝ能はずして千八百四十六年九月十六日に於て朝鮮僧侶は其最初の一僧先つ血を以て洗禮せられたり其同學トーマス氏（韓人の敎名）は亦信仰心に富み傳道に十二年間從事せることに依て又僧級に進められたり其千八百六十年に死するやベルノー僧正は次の數語を以て氏を頌したり「土人の僧侶は實に余に取て頗る貴重なり余の部下に十八トーマスのを得たきものかな」。

ペイロン（朝鮮內地の一地名）に於る土人の敎校は其成功頗る宜しくボルチエー、ブチユラス二氏之に其全力を注ぎしが六十六年の大殺戮と其に一掃せらるゝの厄に遭へり村民は耶蘇敎徒が曾て住したりとの觀念を忘れん爲め村名を變ふるに至れり千八百八十二年に於て朝鮮の穌生を見る二十一人の年少朝鮮人は日本又は滿洲に向て窃かに乘船し次でピナンに赴くを得て初學を研究する得再び本國に入れり其七人は心中愉快に滿面笑を含みて死に就けり彼等は敎校の基礎として其生命を供したることを喜べり他の者は漸々聖位を得るの途に在り當時に於ては數多の分敎堂に歸り助手として布敎に從事するに至れり。

京城に近き龍山に於る分敎堂は一昨年三十六人の學徒を有するに至れり。

然れども傳道の業や巨額の費産を要し加特力敎が世界の名所に投ずるの額亦大なるを以て或は此朝鮮國の二三の分敎堂を廢するの不幸に陷るなきを保せず。

今や日清戰爭一たび始りて朝鮮は此問題の舞臺となれり信敎の業を爲す亦此機に在り吾人はムーテル僧正の企望の速かに成功すべきを熱望す。

◎臺灣島の基督敎

左の一篇は昨年發兌の萬國傳道評論に記載せられたるものに基き譯出したるものなりとて基督敎新聞の記する所。

臺灣島は長さ凡そ二百五十哩にして、幅凡そ七八十哩なり、支那大陸を去ること凡そ一百哩の位置にあり、該島の住民は二種の人種より成立ち、一は「モンゴリヤ」人種即ち支那人にして、他は「マレー」人種即ち野

蠻人なり、後者中凡そ四千人は多少開化せりと雖ども、尙ほ十萬餘の土人は全く野蠻人なりと云ふ、本島にありて既に廿有二年の久しき傳道に從事しつゝある宣敎師ジェル、マケー氏は、本年氏が故國なる英領カナダに歸省し、處々の敎會に於て臺灣傳道の實況を演說されしが、其の演說中重なる事實を抄錄せんに、抑も氏は淡水市に於て傳道に着手し爰に在ること僅かにして最初の一信徒を得たり、彼は爾來益々信仰にすゝみ多年マケー氏を助けて忠實なる働をなし、後遂に傳道者となり、今日は臺灣全敎會の總監督とも云ふべき位置に立てりと云ふ、マケー氏は一ケ所に永住傳道せず、四方を遊歷して福音を傳ふるを以て法とす、而して其旅行中恒に數十の學生を伴ひ行き、傳道の傍ら、彼等を敎へ、他日傳道師たるべき敎育を施す、氏は如斯にして全島を遍歷し、到る處に信徒を得また多くの敎會を興こしたり、既往廿年間に於て、氏は幾多の迫害と危險なる場合に遭遇したることありしと雖ども、今日まで無難にしてよく傳道に從事するを得たるのみならず、氏が熱信なる、働により、全島人民の上に及ぼしたる感化は誠に驚くべきものありと云ふ、殊に北方の大地方バンカー市の如き廿年前に於ては住民非常の暴威を振つてマケー氏を迫害したる至難の傳道地なりしが、今日は其狀一變して、昨年氏の同地を去りて歸國する時の如きは人々群をなして氏の許に來り、大に尊敬と愛心を表して氏を送るに至りしと云ふ、氏は淡水に於て傳道師養成學校一、女學校一、病院一、を有せり、千八百九十二年の氏の報告によれば、同年の受洗者九十七、信徒の總數千七百五十一人、土人にして按手禮を受けたる者二名、傳道師五十六人、旅行神學生二十二人、同年土人なる信徒が敎會の爲め出金せし總金額は二千弗以上なりしとぞ。

◎米國女子高等敎育の進步

米國女子の高等敎育を受くる者の增加する割合は實に著るしきものにして近來女子の中學に入り大學に移るものゝ頗る多く從つて女子にして醫師或は敎師となる者非常の速度を以て增加し特に敎師に女子を增加せしは最も著く今を距る五年前即ち千八百九十年には合衆國全國に於て男敎師十二萬五千五百十五人に對する女敎師の數は二十三萬八千三百九十七人なりしが其後二年を經たるに男敎師は三千九百七十四人を減少し女敎師は一萬四千三百八十三人を增加せり斯る傾向を以て進まば敎師と云へる藝業は全く女子に占領さるゝに至

正すべきは忽ち矯正し、擴張すべきは益々擴張するを得べく、政治家は之に基きて宗敎上の制限を立て、以て禁止すべきは速に禁止し、奬勵すべきは愈々奬勵するを得べく、敎育家は之によりて敎化の加減をなすとを得べく、學者は之を採て研究の材料となすとを得べきなり。然るに若し之に反して今日の如く、宗敎實地の勢は如何なるか、殆ど之を詳にせざるときは、種々の宗敎的運動にして假ひ社會の進歩に利あるもの存するも之を奬勵する能はず、又社會の進歩を害するもの在るも之を禁ずる能はざるにより、吾人は之を以て社會修整上の一大缺點とみなさゞるを得ず。即ち、宗敎實地の形勢に關する知識は敎育上、勸業上などの形勢に關する知識と同じく、社會の修整上缺くべからざるものにして、宗敎家たるものは云ふまでもなく、學者、政治家、敎育家などの決して度外視すべからざる問題たるなり。夫れ敎義上、空理上の問題に至りては、自ら之にインテレストをおくに非ざれば、之を研究せざるも、政治家又は敎育家として或は毫も差支なかるべしと雖ども、然れども實際社會に活動しつゝある宗敎の現況及びその社會の進歩に對する利害などの知識に至りては決して然るにあらざるなり。是を以て吾人は社會修整上の必要より宗敎の現勢を調査するの一日も忽にすべからざるを主張するものなり。

然るに論者あり、斯る知識は社會の修整上必要なるに相違なかるべしと雖ども、特に之を取調べざるも可なり、既に諸宗の僧侶、牧師は各々自宗の形勢を明知し、時々雜誌或は年報等によりて之を世間に報告するに非らずや、然らば何を苦で特に之れが調査をなす必要あるべきと言はん。されど斯の如きは始めて粗雜なる思想と謂はざるべからず。吾人は決して論者の云ふ如きものを以て眞に宗敎上の實勢と信じ、之に滿足する能はざるなり。固より內務省の統計によれば、神官僧侶の數幾何、寺院の數幾何などゝいふ位の神佛兩敎の極めて簡單なる形勢を知ることを得べく、又た基督敎各派の年報によれば、敎會、傳導師、信徒等の增減、金員の出入などの如き概要を知ることと得べしと雖ども斯

る單一なる統計を得たればとて、さほど益する所もなかるべし。そは此等の報告は極めて形式的のものにして、多くは實勢を示すにあらず單に虚形を示すものなり。例へば、基督教の教會の如き年報の上に於ては甚だ盛んなる如く見ゆるも、實際について之を撿すれば、眞に會員たる本分を盡し得るもの統計の示す數字の三分ノ一、五分ノ一或は十分ノ一を超えずその他は單に名簿上の會員たるのみなるものあり、或は教會の出金幾何の多きに上れりと云ふも、その多分は會員より出づるにあらずして、外國教師のパケットより出づるものあり、或は一ヶ年間の入會者幾名の多きに至れりと云ふも、實際その過半は單に洗禮を受けたるのみに過ぎざるものあるなり。又時としてはその報告單に虚形を現はすに止らずして全く實際と相違する如き場合なきにあらず。是を以て單に報告の示す所を信じて教會の實勢を卜する如きは愚の至りと謂ふべきなり。次に又た論者の言ふか如く、僧侶、牧師中自宗の形勢に多少明かなるものなきに非らずと雖ども、多くはその確知する所、僅かに己れが監督する教會内の現况たるに過ぎず。又た稀には普く自教の現勢に通ぜる如く見ゆる人あるも、その觀察甚だ漠然として極めて顯著なる點のみに過ぎざることあり、或はその見る所大に偏する如きことあり、到底これらの報ずる所は、其まゝ之を信用して科學的の價値を附すべきものにあらざるなり。

以上の事柄は單に宗教の現勢のみに關する觀察なるが、尙ほ一歩進で、宗教上の働が社會の進歩に及ぼす影響——即ち、基督教と國家教育との關係、天理教が社會衛生に及ぼす影響、極樂往生の信仰と自殺との關係などの如き——を發見するに至りては極めて困難なる問題にして、大に宗派的感情のその間に加はりて、公平なる判斷をなす能はざらしむること常なり。此種の事業は到底自ら一宗一派に偏するものゝよくなし得る所にあらず。毫も宗派的關係を有せざる公正なる觀察者が多くの事實を精細に調査したる上に於て始めてなし得らるべきものなり。以上論ずる所によりて之をみれば、今日各宗派に於て既に知れおる事柄は固より

調査の材料となすを得べしと雖ども、これのみを以て充分滿足なるものと思ひ、宗教の實勢を特に調査する必要なしなどゝは決して謂ふべからざるなり。

吾人が社會修整上の必要より切に求むる所の知識は上述の如き漠然信據すべからざる性質のものにあらず、極めて公正、確實、精密なるものなり。即ちその一は我邦現今の諸宗教の實勢を其儘に寫し取りたる寫眞の如きものにして、例へば、天主教とか、希臘教とか、組合派とか美以派とか、日蓮宗とか眞宗とか、天理教とか黒住教とか云ふ如き宗教的團躰が實際如何なる形躰を有し、如何ほどの勢力を有し、如何なる活動をなしつゝあるかを精密に且つ確實に知るにあり。即ち、各宗教の教義、信條の如き思想上のものを得んことを求むるにあらずして、社會に實在して、現に活動しつゝある團躰の眞相を明かにせんことを切望するなり。又他の一は此等の團躰が社會全躰の發達進歩に對して如何なる關係を有するかと云ふ事實を確實に認めんとするにあり。若し前の問題にして充分明かになり、或一團躰の活動する事柄定まりたる上は、その活動が他の事物の上に及ぼす影響は何々なるかを探究し、而してその結果が社會の進歩を利するか或は害するかを明かにすることを要す。例へば、日曜學校の學校教育に及ぼす利害とか、俗神道に於ける病者祈禱の悪弊とか云ふ如き問題を確定するにあり。今日若し我宗教界の現象を觀察すれば、斯の如き問題甚だ多からん。これらの關係を詳にし、以て適當なる處置を施すは社會修整の上に於て決して輕んずべきことにあらざるなり。要するに吾人が玆に切望する所の知識は(第一)現在我邦に行はるゝ諸種の宗教的團躰の眞相を明かにし、以て(第二)その活動が社會の進歩に對して有する關係如何を認むるにあり。若し此等の精確なる知識を得て社會に不良なる結果を生ずるもの明かになるときは社會の修整上忽ち國法を以て之を禁止するか、或は輿論に訴へて之を排斥することを得べきなり。即ち數年以前基督教徒が受けたる攻撃の如き、或は神佛兩道に對する本年五月の內務省訓令の如きその一例たるに外ならず

して、これ共に宗敎界に一段の進歩を與へたるものと云ふべし。されば宗敎の實勢に關する明確なる知識の有無は以て敎育上、社會改良上に著しき關係を有するものたるや明かなり。

宗敎上の現象にして著しく社會の表面に顯はるゝものあり。斯の如き種類にありてはその利害共に一般の人々の注意にふれ易きを以て、特別の調査を待たずして、既に明かなるべしと雖ども、然れども斯る種類は極めて僅少なるものと謂はざるべからず。宗敎的現象の多くは最も陰微にして、社會の裏面に潜伏するものなるにより、通常世人の思ひつかざる所に於て、密かに社會の進歩を助くることゝ、又之れを害することゝあるなり。而して社會の內部に潜める此等の勢力は通常何人も餘り心を留めざる所なるべしと雖ども、決して輕々に附すべきものにあらず。斯る事實を悉く穿鑿してその性質を明かにするに非らざれば、決して宗敎の眞相、實勢を詳かにしたるものとは謂ふべからず。是を以て宗敎の實地を知らんとするは、書物を讀み議論をたゝかはして、敎義の解釋、批評をなすが如く平易なる業にあらず。非常なる忍耐と鋭き眼光とを以て、極めて複雜、極めて陰微なる無數の事實を觀察し、調査せざるべからず。故に豫め觀察の範圍を立て、調査すべき事柄を定むるなどは到底なし得ざる所なりと雖ども、次に列擧する數項の如きは恐らく此種の硏究問題として最も主要なる所なるべしと信ず。吾人は此等の事柄を手始めとなし、漸次調査の步を進めんことを希望しつゝあるものなり。

（一）、各宗の制度、敎師、學校等の狀態――神道にても、佛敎にても、基督敎にても各々制度あり、組織あり。而してその中には眞宗の如き、天主敎の如き大に貴族的にして入組みたるものあり。又新敎の如き極めて平民的にして且つ簡單なるものあり。此等の宗制は宗敎が社會に行はるゝ上に於て著しき影響を有するものたるや疑なし。故に第一に調査せざるべからざるものは各宗各派の宗制なり。又之と共に最初に取調べざるべからざるは、敎師そのものゝ狀態、即ち、人物、敎

育等の程度如何と云ふことなり。若し夫れ敎義、宗制は如何に完備せるも實際活動すべき人物にして、無敎育ならんか、決して宗敎の社會を利すべき理なかるべし。無知、無德の宗敎家が社會に毒害を及ぼすことは世人の屢々見聞する所なり。その弊害の極遂に內務省をして訓令を發せしむるに至れるものならずや。又た宗敎の現狀と共に調査すべきは學林、神學校等の組織即ち敎師養成の方法なり。佛敎の諸宗に大、中、小の學林ありて僧侶を敎育し、基督敎の各派神學校を有して傳道師を養成す。又神道に於ても神宮敎の如きは敎校ありて敎師を養成するものゝ如し。要するに此等諸校の敎育法は果して社會の敎化を助くる程の人物を養成するに適せるか。これ大に注意すべき問題ならずや。諸種の宗敎學校に養成せらるゝ青年決して尠きにあらず、若しその敎育の方法を誤らばその結果如何ぞや。故にその敎育法を調査するは宗敎界の實勢を研究する上に於て極めて緊要なることならずや。以上の調査は宗敎の形躰、組織、活動力等を明かにすべきものなり。若しこれらの事柄にして詳かならずんば、その宗敎が社會を德化するに足る能力を有するか、有せざるか、決して知るべからざるなり。

（二）、眞宗、日蓮宗等の社會に及ぼす影響――目下我邦に存する佛敎諸派の數少からずと雖ども、實際社會に勢力を有し、一種の特色を與へおるものは眞宗、日蓮宗の二派たるに過ぎず。而してこれらの二宗が種々の方面に於て社會的生活の上に感勢を及ぼすことは決して少きにあらず。然るにその感勢たるや、社會の進步を利するものなるか、或は害するものなるか。是れ決して臆斷的に定むべき問題にあらずして、精密なる研究を要するものなり。

（三）、俗神道の社會に及ぼす影響――神道の本義は極めて善良なるものなりとするも、今日俗間に行はるゝ神道は大に之と相違するが如し。彼の黑住敎と云ひ、蓮門敎と云ひ、天理敎と云ふ如きもの果して民間に如何なる布敎をなしつゝあるか、如何なる功德を與へつゝあるか、これ吾人の未だ悉しく知る能はざる所なり。

然りと雖ども、之を精密に調査して其事實を明かにし、社會の進歩に對して如何なる關係を有するかを定むるは、社會修整の上に於て大に必要なることゝ信ず。

（四）、基督敎の事業幷に感化力——基督敎の諸派が敎育上、慈善上、矯風上に於て企てつゝある事業の形勢如何。傳道上の實況如何。家庭及び社交上に於ける感化力如何。國民敎育に及ぼす影響如何。此種の問題極めて多くして一々擧ぐべからず。而して此等の問題は何れも事實に基きて充分研究せらるべき價値を有するものなり。然るに基督敎の社會に關する問題については、種々の方面よりその利害を論じたるもの既に多しと雖ども、これ多く事實を觀察して公平に立てたる議論にあらずして、一種の偏見より出でたるものなり。即ち、自ら基督敎を信ずるものゝ感情より出でたるものか、然らざれば、之に敵する佛敎徒の思想より發したるものなるにより、事實に合せざる點少からず。故に吾人の切望する所は全く實地の調査によりて、基督敎の事實が日本國民の進歩に如何なる關係を及ぼすかを明確にせんとするにあり。

（五）、諸種の迷信——特に神道に屬するとも、又佛敎に屬するとも云ふべからざる一種の迷信自ら民間に行はる。即ち、運命、日の吉凶等に關する迷信、日月山川草木禽獸等の天然物に關する迷信の如き是なり。此種の迷信民間にありては今尙ほ盛なるものにして、日常の行爲を支配する力決して少きにあらず。殊に東京の如き占、神籤等の行はるゝ最も著し。然るに此等の迷信はその起源、或は神道にあるものもあらん、或は佛敎にあるものもあらん、或は儒道に出づるものもあらん。されどその起源を探究するは玆に必要なるにあらず。唯だ必要なるは此等の迷信が社會の進歩に及ぼす影響如何と云ふ事實を調査せんとするにあり。此種の迷信が敎育上、道德上に及ぼす弊害決して少からざるは世人のよく知る所なるべし。故に精細に之を研究して矯正の方法を發見せざるべからず。

（六）、祭禮と風俗との關係——緣日或は祭禮等が人民の風俗に及ぼす影響の著しきことは、既に明なる事實

なり。何れの地方に於ても。これに伴ふ所の弊害決して少からず。その甚だしきに至りては種々の犯罪を生ずるものあり。故によく此等の事實を調査して、その弊害の存する所を明かにし、以てこれが矯正の方法を求めざるべからず。

以上述べたる如き問題を觀察的に研究して、その實況を明かにし、社會の進歩に及ぼす利害如何を發見し、以て宗敎的團軆若くば宗敎的習慣の價値を定むべきなり。即ちその結果の社會進歩に利あるものは之を善良なる宗敎或は善良なる習慣として益々奨勵すべく、又た若し其結果の社會進歩に害あるものに至りて之を邪惡なる宗敎、或は邪惡なる習慣として排斥すべきものとす。これ社會修整の上より宗敎の價値を定むるものなり。彼の敎義を研究して宗敎の優劣を定むるは、專ら眞、善等の理想に訴へて、敎説上に判斷を下すものなりと雖ども、觀察的方法に於ては、即ち然らず、その研究せらるべき問題は宗敎の實地にして、その優劣を決する標準とするものは社會の進歩に對する利害てふことなり。此等二種の研究倶に進みて宗敎上の知識は完全に至るものと云ふべきなり。

論　説

今日の宗教は果して教育的勢力を有するや

ドクトル、オヴ、フイロソフイー　藏原惟郭

唯今會長から紹介を受けましたが私は近來熊本から東京に出まして東京の事情も又宗敎上の事、敎育上の事、其他の事頓と分らないので御座ります、夫で友人の御方からして玆に一塲の話をする樣にといふ御依賴で御座いましたけれ共成るべく御斷り申す積りで御斷り申したけれ共事情辭し難き所よりして今日玆に一塲の談話を致したい積りで參りました、豫め諸君に御斷り申して置きまするが私の玆に申上ぐる事は組織もありませぬ、順序も御座いませぬ、又た事新しき考へでも御座いませぬ、唯今日心に浮ぶ所のものを其の儘在軆に申上げたいと思つて居ります、ドウカ Fragment の儘申上げたい

諸君方は其邊の所は御推察ある樣に願ひます、此序言を以て私は唯今より今晩の演題たる所の「現今の宗教は敎育的勢力を有するや否や」といふ事に付て聊か心に浮ぶところのものを切れ〴〵なり共申上げたいと思ひます、

今日は諸君方も能く御承知になつて居りまする通り我邦に取つては一大變遷の時代であります、其變遷といふものは總ての部面の區域に及ぼさんと致して居ると思つて居ります、夫で今日の日本の政治上に致しましても社會上の考に致しましても敎育上の事に致しましても外交上の事に致しましても又宗敎其他美術の上或は又學術、工藝の上に於きましても今日は非常な變遷を經過しつゝある所の時代であらうと思ひます、殊に此際日本に於て著しき事は諸君方が御承知の通りに國民的運動である、國民的合同である、國民的生命を發揮する時であります、此中には種々なる分子を含んで居りまする、種々なる分子の中には必ず宗敎も其一分子にして其變化變遷をなす區域內に於て宗敎の分子があるといふ事は明かな事であります、去ながら此事は日本に行はるゝ所の宗敎が獨り變遷の時で今があるかといふにさうばかりではありませぬ、世界各國の現今の宗敎といふものは併せて變遷の時代にありまする、固より其變遷の時代にあるところの事は澤山ありますけれ共今晩私の論題たる所のものは宗敎の事が重もでありますから他の區域內には踏み入らずして宗敎と敎育との二つに付て考を述べる積りでありまするから今晩其變遷の事に付ても宗敎上の變遷、敎育上の變遷といふ事は御記臆ありたく願ひます、[illegible]宗敎は獨り日本に於ける所の宗敎が變遷の時代であるのみならず世界各國に於ける宗敎が變遷の時代になりました、固より宗敎といふものは古より今日に至るまで變遷を他の事柄と共に致して參りました事は明かなる事で、夫故に古の宗敎の中には既に消へ去つた所の宗敎もあります、又殆ど消へ去らんとするところの宗敎もあります、今日又勢力を有して居る宗敎も種々ある事であります、又今日以後新たに宗敎となつて社會に現はれ來らんとするところの宗敎も一にして足るまいと思ひます、宗敎といふものも必ず變遷を經ねばならぬ、變遷を經るといふ事は進化をするか退步をするかの二つであります、夫で今日の宗敎は變遷を致して居る事は明かなる事である、左らば變遷をして居るに

於て果して今日の宗敎が進歩をして居るか退歩をして居るか、今日大に研究を要する事であらうと思ひます、夫で併なから宗敎論に細か〳〵入りまするど唯ゞ獨り宗敎の變遷を叙述するに止まらず宗敎は果して何如なる性質のものであるか、如何なる根據を有して居るものであるか、如何なる關係を過去、現在、未來の人類に於て有すべきものであるか、斯う云ふ點までも考へなければならぬ樣になつて來まするど大變議論が太く（ふと）なりまして一朝一夕に盡すべきではありませぬ夫故に私の今晩御話申上げる所のものは其中の一部分なる所の即ち現今の宗敎といふものは敎育的の勢力を有して居るものかと云ふ事に限りたいと思ふのであります、さうして他日宗敎の何物たる事、宗敎は果して一個獨立して永く存在し得べきものであるか、夫等の點に於ては機會を得て詳しく細かに論じたいと思ひます、今晩申上げる所の即ち現今の宗敎といふものは敎育的勢力を有するや否や、其現今の宗敎といふのは獨り基督敎の中にある種々なる宗派を指すものでは御座いませぬ廣く佛敎も其中に入つて居ります、又馬哈迷敎も其中に入れて宜しう御座います基督敎は勿論、其他是等の下にあつて一種勢力を社會一般に有して居る所の迷信的宗敎も其中に入れて宜しう御座います、總て今日勢力を持つて居る生命を持つて居る、今日社會人類と關係を有して居る所の宗敎は大なると小なると皆悉く籠めて現今の宗敎といふ其中に入れたいと思ひます、而して其總てを籠めて居る所の宗敎は敎育的勢力といふものを有して居るか否やといふ事を研究致しまするが諸君は斯う云ふ問題を出した事に付て奇異の思ひを與へるかも知れませぬ、宗敎といふものは古より敎育上に於て大勢力を持つた所のものである、先づ印度に於て婆羅門敎及佛敎、……婆羅門の中に於ても種々なる宗派がある、殊に六大哲學の如きも一種の宗派である、さうして非常な勢力を思想上に於て國民の性質の上に於て政治上に於て社會上に於て數百年間、數千年間印度に於て其勢力を維持し來つて居つたといふ事は明かなる歴史上の事實であります、今日と雖も婆羅門敎は尙ほ勢力を有して居ります、其婆羅門敎の神學上の事は種々に異つて來て變遷を致して居りますが其形式に於ても多少異つて居りますけれ共今日尙ほ婆羅門敎及佛敎は印度に於て或部分に於ては勢力を有して居る、又日本に於ける佛敎、支那に於ける佛敎、緬甸あたりに於ける一種の佛敎、是等は古より今日に至るまで

非常な勢力を有して來て居ります、日本に於ても今日は佛敎の勢力が餘程衰へて居る樣に思ひますけれ共今より七八百年前に溯つて又近くは德川時代のとこで見ますれば佛敎の勢力、大に日本の國民の中に於て、政府部内に於きましても又日本の敎育界に於きましても文學の上に於きましても又美術の上に於きまして即畵像の如き又或は建築の如きものは大に佛敎のために感化されました、日本の美術、日本の建築といふが如きものは非常に佛敎のために大進步を致し大發明を致したに相違はありませぬ、總て日本人類の生活の上に於て佛敎が及ぼし來つた感化力といふものは之を一々分拆致しまするならば非常な事であらうと思ふ、私は佛敎は獨り日本の文學敎育政治其他美術に勢力を及ぼしたのみならず商事の上にも及ぼして居る事を信じます、農業の上にも及ぼして居る事を信じます、大伽藍の建てられたる所は必ず山の奥である、是等に通ずる道は數條無條に出來る樣になりました、大伽藍の側には必ず一つの町が出來る、人類が集つて來てそこに一つの Society をなす樣な有樣でありました、人跡の達すべからざる山の奥にも佛敎が這入り込んで遂に夫が種々なる社會の顯象を導く樣な機會を與へて居ります、夫で佛敎が日本社會に及ぼした勢力といふものは非常なものであつたといふ事は今日より想像さるゝ、獨り佛敎が日本に於て有した勢力の驚くべきのみならず、支那帝國に佛敎が這入りまして支那帝國に一種の宗敎を與へた、此宗敎といふものは支那人に新規なる思想を與へた又文明を助けた、文學は日本程支那に於ては助けては居りませぬけれ共餘程助けた、支那に無かつたところの新思想を文學界に吹込みました、果して支那の哲學の如きものに於てどれ丈け佛敎的思想といふものが吹込んで居るか夫は今日論ずべきではありませぬけれども餘程支那の哲學的思想を培養して居つた、學者に感化を與へたに違ひない、支那の文學に深遠なる思想を與へたるものは佛敎でありませう彼老子莊子の敎の如きものは勿論佛敎から出來つたとは云はないけれ共彼老莊の思想の如きものは必ず多少印度の思想と關係が無いといふ事は保證されぬものでありませう又蘇東坡韓昌黎王陽明其他佛敎に反對を致して居つた所の學者達にも知らず〳〵佛敎的思想を吹込んで自然に一種の味ひを支那の文學に加へました、少くとも色を着けたに違ひは無い、又彼道敎の發達の如きものも佛敎の感化力に依つて起つたかも知れない、固よ

り其發達といふものは佛教に獨立してあつた事は許す所でありますけれ共其發達の時代に於て佛教の爲に感化を被つたのは彼道教の如きものも必ず大なる影響を受けたといふ事は疑はれない事でありませう、兎に角佛教が支那國に於て日本國に於て政治上に於て又文學上に於て、其他人事上に大勢力を持つて居つた事は明かなる事であります、

獨り佛教が此の如き勢力を持つて居つたばかりでは無くして彼馬哈迷教の如きもさうであります、馬哈迷の腦髓より出來つて彼亞剌比亞國に於て非常なる勢力を有する如くに至つたといふものは是れも歷史上の事實で御座います、遂に馬哈迷の勢力は歐洲諸國にまで及んで來ました今日馬哈迷教は印度國にさへも尙ほ勢力を有して居りまして果して今日の馬哈迷教が此儘にして止まるものや否やもまだ分らぬ是より前き如何なるところに於て馬哈迷教が蔓延するかも知れませぬ、其形の上に於て馬哈迷教を維持する事は無くとも馬哈迷教の中にある一つ二つの神學上の思想といふものは、隱然大勢力を有するかも知れませぬ、今日こゝに御座る所の諸君方も馬哈迷の宗教の感化を毫も受けないといふ事も出來ぬかも知れませぬ、馬哈迷教は御承知の通り元と猶太教基督教が持つて居りました組織を改正して遂に極端なる惟一神教となす事が出來ました、さうして一種の馬哈迷教なる勢力を今日社會の多數の人民に有して居ります、今日こゝに諸君方が一神教といふものを頻に唱へらるゝ御方もありませうが此人達も馬哈迷教といふ實に非常に嚴格なる一神教の爲に多少間接直接の感化を受けられて居るかも知れない、基督教から馬哈迷教が出て來ましたけれ共其基督教の神といふものゝ性質を全く變へて仕舞つた、さうして却て基督教に勢力を及ぼす樣になつて來て基督教の神の考に付て非常なる反響を及ぼした事が中古の時代にあつた事は諸君も知つて御座る通りである、何故かといふのに其時代に於きましては基督教の神といふものは御承知の通り三位一躰であるのが遂に三身の如くなるやら又種々なる分子が這入つて來てマリヤの如き者を拜むとか或はセントの如きものを拜むといふ風になつて遂に基督教も其末多神教の有樣に變り來らんとして居つた、夫に反對したものは馬哈迷教です、即ち其結果は嚴格なる變化も無い一神を唱へたのである、遂に其神といふものは歐羅巴の哲學者の腦髓に入り來つて彼ディストの如きものになつて現はれたでありませう、

是等の點に於ては細密に論ずるの場合はありませぬけれ共大躰の論を致しますと左樣な關係であると論じて宜からうと思ひます、又馬哈迷敎が神學の外に及ぼした勢力はどうだ、亞剌比亞人の性質を造り成して仕舞ひました、さうして一種の宗敎的政略といふものを以て歐洲の天地を一時は震動せしめんとしたのであります、今日も馬哈迷敎は微々たる勢力に於ては無い隨分大勢力を有して居るといふ事は明かである。馬哈迷は死んで居りますけれ共馬哈迷敎の精神及馬哈迷敎の元氣といふものは今日は餘程存在して居る樣に思ひます、

今申上げた所の佛敎、馬哈迷敎の如きものゝ大勢力は此の如き者であるけれ共亦基督敎が有して來つた所の大勢力といふものは非常なものである、基督が彼ユダヤの地に於て一たび基督の敎を唱へて以來彼十二人の弟子といふものは火の如くに變つて來た、さうして基督に生命を捧げて基督の大主意を傳播する事になつて猶太地方は勿論保羅と云英傑に由て遂に羅馬に渡り希臘に渡り歐羅巴に渡り、米國に渡り日本に渡つて來たといふ樣な有樣で其間殆んど二千年非常なる勢力を有して居た事は明かなる事である、是等は過去の事である然るに今日是等の事實、重もなる宗敎が今日の此十九世紀の終り方に當りまして如何なる勢力を有して居るか、實際如何なる勢力を社會の精神に於て、又社會敎育の顯象に於て有して居るかと考へて見たい、即ち今日現今の宗敎は敎育的勢力を有して居るかといふの一問題であります、

私は Open heart を以て諸君に申します「今日現今の宗敎は敎育的勢力を有して居らない」と申しますそこで玆に一つの考へが起つて來ませう、敎育的勢力を有して居らないといふのは如何なる事であるか、宗敎といふものが社會に存在するものは何の爲であるか、宗敎は果して敎育的勢力を離れて敎育的價値を離れて獨立して存在する直打のあるものであるかといふ事は諸君は必ず考へられて居るであらうが考へねばならぬ事でありませう、宗敎家たるところのものは深く今日考へねばならぬ事であらうと思ふ、宗敎といふものが敎育的勢力が無くして獨立して行く事が出來るならば宜しけれ共敎育的勢力、敎育的價値といふものを離れて宗敎といふものは左して直打が無いものであるといふ事が明かに分りましたならば今日の宗敎界の人々は大に警醒をせねばならぬ顧慮をせねばならぬ時であ

持たない所のものには一切 sympathy を持たないのであります、何故か、既に生命が無い、既に其中に味ひが無い、其中に既に生命が絶へて仕舞つて居るのであるからであります、左らば今日の宗教といふものは教育的勢力、教育的價値を有して居るのであるかと云ふ……古の宗教は此の如く教育的勢力、感化力、價値を以て社會に現はれて來て社會に大勢力を有して居ります、即ち昔にある佛教基督教馬哈迷教皆その起るやそこの humanity に於て無くてならない所の元氣があつたからであります、其實に社會の需要を充たす丈けのものが中にあつたからであります、生命があつたから遂に起つて來てさうして其時代の者を導いて敎へて來たのであります、今日の佛教、基督教並に馬哈迷教といふものは實に其度に於て種々違ひがあり其性質に於て違ひがあり其組織に於て多少異る所がありますが何れも是は實に古い宗教である勢力あつた宗教であるが今日果して社會に行はるゝ所の歐米各國日本に行はるゝ基督教は教育的旨趣、教育的感化力、教育的生命、即ち開發的社會を文化にならしめ社會を段々に清めて行く之を高尚にして行く、即ち智惠に於て情に於て其他生命ある意力に於て總て人類の中に含んで居つて humanity を組織する所の元素を悉く滿足せしめて是等を開發して行き是等を敎化して行くところの教育的勢力を有して居るのでありますか之を他の言葉で云ふならば今日の基督教及佛教其他の現今の宗教は實に社會の進歩に伴ふて居るか伴ふて居るばかりでは不可い之が社會の勢力となり感化力を把持しやうと思ふならば社會の今日の進歩の水準よりも遙かに進んで居るのでなければなりませぬ、然らずんば社會を教育して行き社會を感化して行き社會を啓發して行き社會を先導して行く所の任に堪へない所のものであります、果して今日行はれて居る宗教一般に教育的感化力を持つて居るのであるか、私は玆に絶對的に此宗教は教育的感化力を持たないと云はない、社會に interest の無いものであるといふ事は云はない、社會に常に生命的活力を持つて居ないものであるとは云はない、或部分に於ては許しますけれ共大躰上から云ふならば今日の基督教佛教其他實に迷信的宗教……社會の中に行はれて居る種々の迷信的宗教抔にあつては宗教的勢力を有するもので無くして教育的價値を持たないものであるといふより外にありませぬ、固より是は大躰の論であります若しも之をさうであるといふ事を許しましたならば

どうでありますか、其時は諸君よ宗敎といふものは此十九世紀の終り方に於きまして目を瞑さねばならぬものであるといふ事を承知せねばなりませぬ、こゝが諸君方の飽くまで抗論をすべきところ、飽くまで諸君方が即ち宗敎は敎育的勢力を有するものであるといふ事を明かにせねばならぬ、又諸君方が宗敎といふものは敎育的勢力を離れて獨立獨存して行くものである、社會の進化に伴はずして居るべき所のものである、所謂人智の進步開發所謂變遷進化の法則に全く離れたる所の完全無缺なものであるといふ所の活路を開くか、或は諸君は今日の宗敎は尙ほ敎育的勢力を開化の上に持つて居るといふ事を主張する事が出來ますか、或は今日の宗敎は十九世紀の此實に進步的 humanity に取つては目を瞑さねばならぬものである、又夫に滿足する事が出來ぬならば即ち二十世紀を敎育して行くべき一大…實に一大宗敎を發明する、人物が出て來るでなければなりますまい、左らば今日宗敎を傳へんとし今日宗敎を以て己れの友とし社會の一元氣なるところの此宗敎を以て人類發達の上に於て須臾も缺くべからざる事猶ほ道者不可須與離也といふが如き感情と確信と責任とを持つて居る人は飽くまで今日奮ひ飽くまで智囊を叩き飽くまで心力を凝してこゝに硏究を積むべきの時ではありませぬか、徒らに一言一句の論爭をなし徒らに宗派の爭ひを爲して居り、徒らに敎會の信仰とか敎會の改革とか或は進步とか保守とか云ふ樣なる瑣々たる事、徒らに日本の傳道西洋の傳道といふが如き細かな所の競合ひをして徒らに東洋の、西洋のといふが如き細かなる實に兄弟墻に鬩ぐ樣なる卑屈な議論を致して此の實に千載遇ふべからざる宗敎の一大事なる時を看流がしてたまるものでありまするか、歐羅巴諸洲の學者中此邊の消息を看破して居るものは誠に少ない併ながら此處に一つ彼處に一つチラ〳〵して居るばかりでありますが是れは實に二十世紀に於て開發して活動する所の humanity と互に立つて humanity を導く事が出來るや否やといふ事を心に考慮して居る人達で實に未來宗敎界の先導者であると私は信じて疑はない果して我邦に於て是等の點に於て晝夜眠らずして思想を凝して居る神學家、宗敎家が如何なる宗派に於ても、如何なる所に於ても構ひませぬ、ユニテリヤンであらうが、ユニボルサリストであらうが、メソヂストであらうが監督であらうが或はプレスビテリヤンであらうがちつとも構ひませぬ、佛敎の中からでも又其他

の迷信的宗敎の中からでも搆ひませぬか、ら此の如き大問題を考へて此實に十九世紀の終り方に於ての人類の叫びに應へ、二十世紀に悖發せんとする所の humanity の大波濤を制して之を導いて宜しきに至らしめ之を敎化し之を敎導し之をして實を結ばしめる事が出來る樣なる事を考へる所の人であるならば誰でも搆はない、friend of humanity と私は稱へるより外はありますまい、併ながら是までの學者も宗敎家も多く皆誤つた考を持つて居つた樣に思はるゝことがある隨つて是に私は諸君方の注意を仰がねばならぬことがある夫は外で無い、宗敎は果して real life であるか或は宗敎は一箇の妄信であるかといふ事であります、其考と私が茲に持出したところの現今の宗敎は敎育的勢力を有するや否やといふ事を較べて結んで考へて見たいと思ひます、社會、文明……社會と云ひ文明といふも即ち其中にある一大活物が是を現はしたる一種の顯象でありませうか、即ち是は humanity と云はうか何と云はうか知らないけれ共茲に之を humanity と云ふて之を人生の活動進歩と云ひませうか、斯う云ふものがあつて其進化の度に隨つて其發達の度に隨つて社會を作つて來ます社會の種々なる程度を拵へて來る、又種々なる文明を拵へ社會を拵へ其周圍に於て千變萬化の働をなして顯象を現はして居りますけれ共其中に於て誰でも見違はないところのものは古より今日に至るまで humanity といふものは常に絶間なく進歩して居る開發して居る、時代は時代と進んで居る尙ほ其次の時代は前の時代よりも進んで居る變遷をするといふ事に於て決して退歩して居らぬ進んで居る、果して直線に進んで居るか、或は多少斜めに進んで居るか、或は個人的に進んで居るか如何なる方針軌道を取つて居るか、私が茲に論ずる限りでは無いけれ共歩一歩進んで居る事は確かなる事である、進んで居る時には中に澤山の富を充たして行き居る、深うして行き居る、淸めて行き居る、太つて行き居る、發達して行き居るといふ事は明かなる事であります、夫で私は茲に今一度短刀直入諸君方に申上げたいと思ふ、

私の此宗敎は果して是が實に humanity の life iteself であるか生命夫れ自身であるか、但は humanity が是の一箇の機關であるか、instrument であるか一箇の方便であるか、どちらか、是は實に重大なる問題である是に於て謹嚴に私は考へる、亂りに私は茲に放言をしたくないけれ共今晩私が諸君方に演説をする所のものは

私の心の中に浮ぶ儘を申上るといふ事にありますが私の心に浮ぶ儘、私の心より得らるゝ丈けの事を申ますれば宗教は一箇の方便だ、宗教といふものは即ち生命夫れ自身では無くて humanity 夫れ自身では無いと斯ふ申します、併ながら是まで東西兩洋の神學者哲學者中に追々其説を述べるものがあるサテ總て人間の進化をして行き居るには度がある、種々なる度がある、初めは植物的、動物的、即禽獸的生涯である、夫から感情的である、或は智的である、遂に精神的生涯である遂に religious life である、pure spisitual life である、其最上に進んだ宗教的生涯といふものは人類が數千年間に於て又實に數萬年間に於て達すべき最大目的である、是が始である、是が終であると斯う申します或は又總て現世のものは現象で變り易い、變化變遷すべきものである、併ながら人生と共に萬世萬古に變り無きところのものは生命夫れ自身即ち宗教的生命であると斯う云ふ、私は取らない、さういふ考を私は長くして居りました、併ながら神學を研究し又哲學を研究し尚ほ進んで世界の比較宗教を研究し其比較宗教の上より哲學を考へ、哲學の上より宗教を考へ、比較宗教の上より又宗教を考へ種々樣々に考へて見て遂に私は種々なる宗教上の變遷、經驗を經て今日私が有する所の考は宗教といふものゝ生涯は諸々の人生の生涯中の一部の生涯にして人生自身でも生命自身でもないか惟人生の一部一種の生活の仕方でありて此宗教的生涯を以て人生生涯の全部と見誤り甚だしきに於ては宗教的生涯の外は眞正なる生涯はない尚ほ甚だしき誤解は一種一部の生涯たる宗教的生活を人生其自身即 Humanity 全躰の理想的實現と心得て躍起となりて居ります樣な事であるか私の考では左樣でない宗教は一箇の方便である、一箇の instrument であるといふ事を明かに玆に申したいと思ふ、併し是は新規な議論とも思はれますまい、けれ共能う考へて拜領(はいれう)したいと思ふ是まで宗教といふものは一箇の實躰である之を潔いものとし犯すべからざる所のものとし又宗教といふものは夫れ自身（形は變じて來て居るけれ共）即其 substance は reality itsself である、萬古變らぬものであるといふ議論は西洋諸國の神學者も日本の神學者も喋々唱へて已まざる事は事實でありませう、私は言ひます、私共宗教といふものは人生の中の一分であるから人生と共に長く存在する所のものであるけれ共宗教たるものは一つの機關であります、此一つの機關といふものは人類を開發し人類

を進歩せしむる機關である即ち humanity といふものゝ進歩を助け之に意味を與へるであるinstrument即ち一つのorgan（機關）である、之を惡く云ふならば方便である、宗敎を方便、機關等の地位に持つて來たといふならば貴君方は宗敎の神聖を直ちに犯すものと見らるゝかも知れませぬけれ共さうで無い、宗敎のintentionといふものは宜う御座います、宗敎の精神といふものは實に同意をする、飽くまで同情を表する、今日社會の人々が宗敎と intention 宗敎の精神、宗敎の區域といふものを一般の人々、殊に學者諸君が承知して下さる事を希望するのであります、併ながら其宗敎の區域を忘れて宗敎を以て或は宗敎的思想を以て人生の主腦と考へ或は之を以て全躰の生命と思ひ宗敎は絕對の價値を有し他如何に價値の高きものと雖も宗敎的價値に比しては有難くはない樣に想像して一箇の奇妙不思議なる神聖なる實躰の如く見て此宗敎と云ふ者は何時も變らぬものであるが如く考へ來たる時に於ては其宗敎の形に現はるゝ上から云ひ又宗敎の精神の上から云つても私は同意をする事が出來ませぬ、形の今日社會の變遷といふものと共に變化して行くのは當然な事であります、何故か宗敎は人類の心の中より浮び出でたる現象でありまして併せて是は人類を導く一の機關であります、主觀的から云ふならば宗敎は humanity の中より來りたるものでありませう、之を客觀的から云ふならば宗敎と云ふものは humanity を發達進歩せしむる機關でありませう、夫故に私は宗敎を以て一箇の實躰と云ひ、宗敎的生涯を以て一箇のrealityといふが如き見方は好みませぬ、何故かといふに其弊の及ぼすところはどうである、敎會といふものが出來て來て一つの社會をなしそこに於てdoctrine 信仰箇條といふが如きものが出來、目的といふものが出來、一つの立派な組織となつて居ります、其立派な組織となつて實に之を以て世の人々を導かんとし化せやうとする甚しきに至つては夫を化せやうとする方便、方法、機關に使ふのみならず敎會夫れ自身が神聖なるものゝ如く見て仕舞ふ、宗敎的生命は：：生涯はspiritual, religious life は人世達すべきの極點である、是は人類の目的である是は社會進歩發達の中心である、是があれば總てのものが意味を持て來る是が即ち總てのものに價値をなすべきものである之に歸せねばならぬ之が爲に動かねばならない總てのものは此目的を達する迄の用である是が實に總てゝある、是が終である是が始である是が人生

の大目的であるといふ樣な說は取らない、直ちに私は宗敎といふものは其の己が持つべき地位に置きたいといふのである、宗敎中にも種々宗敎は種々の天職必要を持て居る故夫れそれ擔當の地位に安して居てもらいたいでのある、其社會進步の上に付て働くといふ事は共同の働きでありますゝ其共同の働きの中に於て種々なる働くべき役目がある、機關がある、其中の一つの機關は宗敎である、然るに其一つの機關を以て總ての機關に代へやうとし總ての機關をば其一つの機關を以て之が價値を測らんとし遂に夫を變更し之と交換しやうとするものは即ち宗敎家が之を monopolize するのであります、其專賣を謀る事をするのであります、宗敎の精神より離るゝ事甚だ遠いではありませぬか、宗敎といふものは宜しく其區域を認め其社會に及ぼす感化力を認めて其の敎育の大切なる事を承知せねばならぬ、初めは宗敎なるものは其の自から humanity 而も社會が何もかも來たす所の一の機關であるといふ事に甘んせねばなりませぬ、一箇の方便であるといふ事に甘んせねばなりませぬ而して宗敎中諸宗旨の如きは機關中の一小機關であるとを承知せねばならぬ夫で貴ふべき所は何處にあるか、敎會にあらず宗敎にあらず神學にあらず信仰箇條にあらず humanityにあります、併ながら humanity を總て宗敎の爲に sacrifice するといふ樣な事があります、humanity より宗敎に重きを置かす樣な事があります、私は夫れは取らない、宗敎は humanity を助けねばならない、開かねばならない、導かねばならない事又宗敎といふ者は humanity の千變萬化なる文明的開化的の働きをなさしむる爲に働くところの即ち humanity の一つの機關であるといふ事を忘れてはならぬ、機關たる所に甘んじて而て humanity の用ゐる所の機關は千差萬狀而して是等の物か相須つて相調和して初めて實に社會の改良進步、開化文明即ちCulture, Educutionといふもの、目的を達する事が出來るものであるといふ事を今日の宗敎家、敎會牧師、信者の人々が悉く喜んで認識する所に宗敎家の實の見識價値、及その貴ぶべき所といふものがあらうと思ふであります、社會から今日の基督敎信者、佛敎信者其他宗敎を主にする宗敎學校抔が地位に於て容れられないのも即ち玆に原因して居るのであります、(未完)

露國の理想と其地位

カンザダット、テオロギー　小西増太郎

一

露國の理想は快絶ならず敏捷ならずとて、之を度外視するは當今の通弊と謂ふて可なり。然れどもたゞ快絶敏捷を缺くてふ一事により、露國理想を拋棄するは策の得たるものに非らず。如何となれば快絶の談敏捷の論必ずしも眞理たるへきに非らず、因循遲鈍の論議必らずしも價値なしとは斷言し難ければなり。

抑も一利一害は物の數、天下の通患なり。快絶敏捷の論は茫として涯なき理想界に迷惑し易すく因循遲鈍の談は坦々平たる論壇にも疾速なり難し。眞理を得るに適當せる理想は着實妥當一時の快を貪らず、姑息因循に流れず、一意目的に向て鋭進するものならさるへからず。而して露國理想の現狀はこの大目的に歩を進めんとしつゝあるものゝ如し。

露國理想の沿革に就き考察を下すに見るべきもの少なく、取るべきもの稀なり。既往かくの如しとして、將來必ずしも其躰面を改めず、發達なく、進歩なくして終らんとは斷言する能はず。加之露國今日の理想界には活動あり、運動相ひ始まりしに於てをや。もしこの現象により將來を卜せんか、然らは露國の理想取るに足らずと言はんより、寧ろ稍望ありと言はさるを得さるなり。

哲學史を按ずるに、理想の興廢と國家の存亡盛衰とは殆んと相離隔すべからざる關係あるに似たり。國盛んにして理想大に起り、國衰へて理想も亦た凋衰す。其盛んなるに迨んで理想の名簿に己れの名を載せ、一民起り己れの得し理想を後進に傳へ以て使命を全ふす。埃及人は己れの得し理想を後人に遺こし、希臘人は之れに己れが千辛萬苦のうちに得し理論を加へて羅馬人に與ふ、羅馬人も亦た之れに己れの得し處を加へて、獨佛英以其他の國々に分與せり。而して列國は己れの使命の存する處に從ひ、之れに既に得たりと思惟しつゝあるものを加へんとせり。而してこの名簿中未た露國の名なし。假令既往は微々、殆んと無きと一般なる露西亞理想は己れの名をこの名簿に掲載するを得る發達を見ずして消滅に歸せんとは思想し難たし。かれも亦た獨佛英の國々の如く、已れの記念を人類の理想界にとゞむるに至るとあるべし、と余輩は信して疑はざるなり。

露國理想にして將來望あるものとせんか、然らば如何なる方向に發達すべきか、また如何なることをなし得べきかとの疑問をこらん。今日にしてこれを決するは實に難事中の難事なり。然れども若し露國理想の根基は何處にあり、また歐洲各國の理想との關係、其地位は如何との問題を決するを得ば、幾分かこれを明白ならしむるに庶幾きか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

二

家庭教育の影響は個人の生涯に及び、之れが傾向方針を定むるに於て一大勢力たり。若し社會心理學が說く如く個人の心理も、社會の心理も同一の法規によりて開發するものとせば、社會發達の爲めにかの個人に於る家庭教育の如きものなしとは言ひ難たし、否、この理なからさるを得さるなり。歐洲各國は羅馬の先導により開進の道に就きしとなれば、今日に至るも猶ほ之れが影響を蒙りつゝあるが如し。歐洲大陸は羅馬の風俗習慣になれ、其文字語法を用ゆ。是れ畢竟外形たるに過ぎざれども、中世以降の理想遷移のあとに就て考察せば羅馬の理想が歐洲各國の理想を育成し、現今に至るも猶ほ其影響の幾分を維持しつゝあるを見るなり。露西亞は歐洲各國と文化の源を異にす。往時希臘の敎導を受け、開明の德澤を慕ひ、進步の道に就くに至りし露國なれば希臘の事物は悉とく皆な露人の甘受する處たりしなり。風俗習慣の如きも稍希臘風を帶ぶるに至りたりき。彼得大帝以后は歐洲の文物浸々として露國に入り、上下社會に汎濫たるが如きも、かの希臘風を脫し羅馬化するには至らず、當今に於ても尙ほ露國理想は歐洲理想と相異る、一種の特色を帶びつゝあるものゝ如し。

然れども露國の理想を以て希臘理想完實の繼續者とは爲すを得ざるなり。露人は希人と其天禀を異にし、其傾向を異にす、故に理論的のとも、德義的のとも、實業的のとも其趣き同しからず、其歸するところ一ならず。羅馬の文化か獨逸に入りては獨化し、英吉利に入りては英化し、佛蘭西に入りては佛化せし如く、希臘の文物は露西亞に入りて露化したり。之によりて希臘理想の敏捷にして間々空理に失し易く、妄想に陷り易かりしその露國の因循遲緩と相和合し、やゝ沈着となり、活潑にして躓き易かりしものは露國の姑息と相和合し、前後を顧み、左右を窺ひもつて徐ろに步を進め

んとするに至りき。露人にして若し鋭意黽勉もつてこの特質を磨き、發達進歩して止まずんば、蓋し得る處なしと云ふへからさるなり。

三

露國の理想は希臘の敎導により始めて開進の道に就きしとて、歐洲理想を排棄して顧みす、或は之れを相調和すること能はさるものには非ずして、却て之れが長處を採り、之れが結果を等閑に附せさるを以て、己れの本色となすもの丶如し。歐洲各國の思想界に起る波瀾は必す露國の理想界に反映し、運動を喚起し、或は物議囂々たらしむることあり。然れどもこの波瀾反映は露國理想をして眩目、己れを忘れ、是非曲直を辨別せずして之れに唱和するか如きには至らざるなり、獨に、英に、佛に各己れの得所あり、一定の趨向あり本色ありて之れを遺忘して他に赴むくことは到底望むべからさる處なれども、露國には未だ一定の趨向なく、本色なく、現時これを造り出さんとしつ丶あることなれば、一方に偏し或は一の定義を固執して動かずと云ふ如きこと少なく、己れの得所を述べんとして、却て眞理を傷くるか如き弊稍稀なり。加之露國理想は歐洲理想の波瀾外に己れの根據を占めつ丶あるを以て、直接の影響なし、唯だあるものは反映に外ならされば、容易に其是非を論し、其可否を糾だし、而してのち之れが採否を決するを得。換言すれば露國の理想は（我國の理想の如く）歐羅巴の理想に對し、研究批評を盡してのち之れを取捨するを得る地位にあるものなり。

露國の理想がこの好地位を充分利用して、好成蹟を得へきや否やの問題に至ては、未だ容易に之れか判斷を下すこと能はず。然れども今日露國の理想界か呈せる現象を通觀する時は全く望みなしとは斷言し難かるべし。

露國には五十有餘の官立高等學校あり、哲學心理論理學等の如き理想的の學問の敎授を專任する輩十を以て數ふべし。この輩悉く己れの好地位を自覺し、拮据之れを利用するに怠たらざるものとは言ふ能はされども、彼等が漸を以て歩を進め發達の道に就かんとしつ丶あることは疑ふへからさる實事なり。近年に至りソロウィヨフ氏なる哲學者出で、實利主義を評論し、その根基を碎き、有神主義の理想を發揮し、トルストイ伯出て丶倫理宗敎の二門の根本的問題を敲き之れか革命をはかり、また心理學會（モスクワに於て）なる結團をこり、諸種の思想家を糾合し、露國哲學思想の活動を發

達せしめ、以て所謂露國哲學なるものを組織せんとす。豈に露國理想は華なく果なくに凋衰に歸し去ると斷言するを得んや。

獨逸の碩學ハルナリ氏（ベルリン大學教授）曰く「モスクワ（の學者界）を見よ、彼れを蔑視するの時は既に過ぎたり、注意せよ」と。獨逸の碩學既に之を唱ふ、吾人豈に輕々看過して可ならんや。

日本祖先祭（續）

蓮沼磐雄

日本に於ける祖先祭の發達及變遷

今や進んで我國に於ける祖先祭の發達及變遷を略述せん。蓋し祖先祭てふもの、起原にして果して前文に論せるが如く、死者の遺族が死者に對するの愛情、即ち愼終追遠の念にありとせば、斯の如き情念の盛んなるは即ち祖先祭の精神の盛んなるの證據なり。知らず日本の舊記は如斯き情念の盛んなりしを證する乎。試に記紀に載する所を見るに左の如き事實あり。

創造の女神、伊邪那美命の難產の爲に死去せらるゝや、夫神、伊邪那岐命が悲嘆の狀を古事記に書して曰く、

『故再伊邪那岐命詔之、愛、我那邇妹命乎、謂易子之一木乎、乃匍匐御枕方、匍匐御足方、而哭。』

と。輾轉慟哭の情何ぞ夫れ深摯なる。又其後文に付書して曰く、

『故其神避之伊邪那美神者、葬出雲國與伯伎國堺比婆之山也。』

以て創造の時既に埋葬の禮の存せしを知りぬ可し。

次に又た伊邪那岐命の黃泉比良坂を出て玉ふや、穢を除くが爲めに

『到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐原而禊祓也』

とあり則ち神を敬するの情よりなせる「ミソギ」「ハラヒ」杯の如き儀式のまた此荒邈なる時代に存せしや疑なし。

以上は我國創造の時に於て見る可き祖先祭的精神の概況なるが、其後天照太神の御世に至り、天稚彥の死せし時の如き、其妻下照姬の哭きの有樣を書紀に記るして、

『哭泣悲哀聲達于天』と云へり。

古事記には此時稚彥の葬式の有樣を記して、

『於是在天天若日子之父、天津國玉神及其妻子聞而降來、哭悲、乃於其處作喪屋、而河鴈爲岐佐理持、鷺爲掃持、翠鳥爲御食人、雀爲碓女、雉爲泣女、如此行定、而日八日夜八夜以遊也。』

此處へまた稚彦の生時の親友、味耜高彦根神の弔に來りしことをも記るしあり。

此に依りて之を見れば、當時喪祭の禮は、已に充分なる程度に迄發達し、種々なる供物もあり、種々なる附人もあり、一家親類相集りて、數日の間追善供養を營みしこと明かなり。

之より先き天照太神の岩戸籠りの前に、素戔嗚尊が天照太神に對して亂暴を働かせ玉ふ時、太神が新宮(古事記には聞看大嘗之殿)及齋服殿に居玉ひしことは記紀共に記るせる所なるが、書紀の註に據れば新宮は待神之處にして、齋服殿は織神衣之殿なる故、此事實によりて考ふれば天照太神の時、已に早や一種の祖先祭の存せしものと思はるゝなり。

次に天孫天降りの段を古語拾遺に記して、

『吾兒視此寶鏡、當猶視吾、與同牀共殿、以爲齋鏡、仍以天兒屋命、太玉命、天鈿命、使配待焉、因又勅曰、吾則起樹天津神籬、及天津盤境、當爲吾孫奉齋矣、汝天兒屋命、太玉命二神、宜持天津神籬、降於葦原中國、亦爲吾孫奉齋焉、……　……宜太玉命率諸部神、供奉其職如天上儀。』

勅して天上の儀式の如くせよと曰ふ、乃ち知る、天上に於ても、如斯き儀式の既に已に備はり居りしものなるを。此時よりして天兒屋命は中臣家を創め、太玉命は忌部家を起し、代々朝廷の祭事(政)を司りて重要なる職官を立つるに至りたり。

其後、神武天皇が即位の四年に、天ッ神を郊りて大孝を申べんとて、靈畤を鳥見山中に立てゝ、皇祖天神を祭られし次第より。綏靖天皇が極て勇猛なる資質に御坐せしにも關らず、孝性純深にして、御父神武天皇の崩御の時、『悲哀無已』、特に御心を哀葬の事に留められ、庶兄手研耳命の陰謀ありしにも關はらず、諒闇事終る迄之に應ずるの策を運らさるゝことなかりしと。(書紀の記事にして若し信ず可きものなりとせば、安寧、懿德を始め以下各代の天皇は、先帝崩御せられしより一年若くは二年を隔てし後、即ち御即位の事務の略々端緒に就きし後、改めて其先帝の正葬を執行せらるゝを常とせり。)崇神天皇が其御名の表せるが如く、如何に神事に御心を留められて、祖先祭の上にも大改良を施されしかと云へること其他垂仁天皇の時と云ひ、應神天皇の時と云ひ、代々の御代に於て種々なる成長を經て、遂に大化の改新に一大進歩を爲し、文武天皇の

時に至て大寶令の制定ありしより、就中大寶令中の神祇令、儀制令、假寧令、喪葬令等の爲め、我國の祖先祭が一層確定して、忌服等の制度も大に進步し、又其神祇官を百官の上に置かれし爲に、我國特種の政躰の一層明かになりしこと。降てまた德川氏の時代に至りては、封建制度と相關聯して、祖先を重んずるの情は又一層强盛となり、就中武士の家に至りては、何藩にても、夫々『由緖帳』を大切に始末して、祖先の忌日命日を忘るゝことなく、士農工商を論ぜず、日本國中を擧げて、如何に貧き家にても位牌を備へて、日々の禮拜にも、盆參り及年忌にも、多少の儀式に從て先祖の靈を祭りし事柄より。學理上に至てはまた種々なる硏究あり、水戶義公の如き、林羅山並に鳳岡の如き、野中兼山、山崎闇齋、熊澤蕃山、三輪執齋の如き、若くは母の喪に國に歸りて三年間廬を結びたる高山彥九郞の如き、又は山陵志並に職官志を著はして皇室の祖先祭の振はざることを慷慨せる蒲生君平の如き、其他種々なる國學者及神道家の如き、祖先祭てふものゝ爲めに思辨經營せし所の人の決して少からざりし事實に至りては、其大躰の處は世人の熟知する所にして、微細なる點に至りては此處に述へ盡すを得ざるなり。

（一）日本祖先祭對儒教

之より日本の祖先祭と儒教との關係を一言せば、日本の祖先祭は頗る儒教の影響を受けしに相違なく、朝廷の制度の如きも殆んと全く周官等に基ける支那の組織を摸倣せしものなるが、尙ほ其間に截然たる區別ありて存するなり。

そは支那に於ては祖先よりも天を崇べども、日本にては祖先と天とを分離して、祖先より天を尊しとすることなく、只た後に至りて皇室の御祖先、卽ち吾人が本家の大祖先たる天照太神が一部の人によりて天てふ觀念と同視されしのみ。然るに支那にては、天を祭るの權は、獨り天子の手にのみ存するものにして、『報本反始』の大義を敎へ込むにも關はらず、庶民は單に自姓の族長を拜するのみなり。而も支那は日本の如く天下一姓に非る故、自己の族長を拜することゝ、皇帝を拜することゝ、天を崇むことゝは別々の事にして、此三者の間には更に何等の關係もなし。而るに我國に於ては則ち否らず、天は卽ち天照太神也、天照太神は卽ち吾人の祖先也、祖先より離れて別に天なるものあらざりしなり。故に祖先を祭るは卽ち天を祭る所以にして、天を祭るは卽ち祖先を祭る所以なり。されば支那には郊社

の禮と宗廟の禮とを區別して、『郊社之禮所以事上帝也』『宗廟之禮所以祀乎其先也』となし、『孝莫大於嚴父、嚴父莫大於配天』と教ゆれども、日本には父を天に配するが如きことの行はる可き理由なし。

然るに此區別たる、儒教の傳來より以來、我國有名なる儒者によりても屢々誤解され、其極や久米邦武氏の如き、神道は祭天の古俗なりと云ひ、天を祭るを以て我國の古俗となし、人鬼即ち祖先の靈を祭るは神道の本旨に非ずと云はれたり。然れども余が上來の所説にして大過あらずんば、人鬼を祭ること即ち祖先祭こそ神道の古俗にして、祭天の如きは單に支那の古俗に過ぎざるのみ。

其他の神、儒間の差違は他日を期して論究せん。

（二）日本先祖祭對佛教

次に日本の祖先祭が佛教に對する關係は如何なるものなりし乎。是頗る注意す可きことなりとす。蓋し佛教が日本に及ぼせし影響は極て夥しく、詩歌と云ひ、文章と云ひ、美術と云ひ、宗教と云ひ、極て微細なる日常の習慣に至る迄殆んど佛教の勢力を被らざるものはあらざるほどなるが、扨て此祖先祭と佛教との關係は如何なりしやと尋ぬるに、極て愉快なることには、日本の祖先祭は、佛教よりして如何なる變化をも受けざるのみならず、却て佛教をして佛教の本旨を曲げて、我日本祖先祭の精神を遵奉せしめたり。

若し葬祭に關する佛教の所説の何たるやを知らずして、單に我國現在の佛教徒等が守れる實際上の儀式、幷に寺院の慣例等を見て判斷を下すことあらんには、日本の佛教も亦た祖先祭を重んずるものなりとの決論を下さゞるを得ざる可し。日本の佛教徒は皆其佛檀の中に先祖の位牌を備へ、朝夕の禮拜にも概ね先祖の靈の冥福を祈念せり。死者を弔ふの儀式も頗る重く、七々の中陰は云ふも更なり、百ヶ日、一週、三回忌、七年、十三年、十七年等より、概ね七五三の數にて年忌を定め行き、遂に百回忌、二百回忌等の法事を修することも珍らしきことにならず。其他毎年各地に行はるゝ盆參りの如きを見るも、佛教が祖先を崇ぶことは頗る盛なるが如くに思はるゝなり。然るに是實は佛教の本旨に非ずして、佛教の經典中には一として祖先祭の大義を教ふるものあらさるなり。佛教は啻に『追遠』の情の發顯たる祖先祭を説かざるのみならず、又た更に『愼終』の情の發顯たる喪葬の儀式を述べざるのみならず、却て積極的に僧侶が在家の葬儀に關係すること

を嚴禁し(善見律及資持記等)、尙ほ一層進んで死人を葬るが爲に用ふる器物を、寺院の近傍に持ち來るものを輕垢罪に處する由を明記せり(梵網經)。

佛敎の敎義が祖先祭的精神に反對すること既に斯の如し、即ち佛典を研究して佛敎化せられたる人物に、非祖先祭的言行あるは怪むに足らざる也。されば親鸞上人は死する時其弟子に遺言して『親鸞閉目せば加茂川に入れて魚に與ふ可し』と云はれたり。又た彼の佛敎の大保護者として有名なる檀林皇后は、特更に遺命して其死骸を京の西の郊の草原に捨てさせて、犬狼に喰はれ、腐敗し糜亂せる、いと淺間敷姿を衆庶の眼に露らされたり。又た山科連署の記の記する處に依れば、蓮如上人は『あと吊ふと云ふて位牌率都婆を立つるは輪回するものゝすることとなり』と云はれたり。日本にて始て火葬を行ひしは道照和尙なり。又た櫻町中納言が曾て少納言信西の十三年忌を營んとするや、其弟なる高野の明遍之を排して曰く、斯の如き年忌を修するは佛典の名に背くと。

翻て日本の佛敎徒間に行はるゝ儀式を察するに、佛敎本來の儀式にして一も祖先祭に關係あるものなく、其の關係あるものは概ね佛敎以外より採用せるを常とせり。

成程中陰の如きは佛經より出てしものなるも、こは決して死者を思ふの情に關係あるに非ずして、佛敎に說く所の四有の一なる中有の事なり。死して此世を去りて來世未た定らず、現世と來世との中間に魂の彷徨せる有樣、即ち歐洲の Purgatory の如き境界を云へるのみなり。

其他百ヶ日、一周、三回等の年忌に至りては、無論如何なる佛典にも載せざる所なり

又た彼の位牌の如きも佛敎の儀式に非ずして、神道の「ミタマシロ」即ち儒敎の「神主」の摸造に過ぎざるなり。而して其位牌の屋根を宮殿に形りて臺坐を蓮臺の形になせるが如きは頗る趣味ある現象と稱す可く、最も克く本地垂跡的の性質を顯はせるが如くなり。

如斯く佛敎は、其敎義の中に、少しも愼終追遠の精神を存せざりしにも關はらず、寧ろ斯如き精神に反對す可きものなりしにも關はらず、却て遂に日本祖先祭の爲めに變化せられしは如何なる故なる乎。是幾分は行基、最澄、空海等の識見家が、非常の英斷を以て、調和的方策を取りし爲なりと云ふ可きも、又た幾分は三輪明神の託宣、德川の奉佛命令等の外部の事情ありし

爲なりしと云ふ可きも、畢竟する處、我國に勃々たる祖先祭の精神の、如何にしても撲滅し難きものありたればこそ如斯き變化を起こせしなれ。

以上、日本祖先祭の研究は如何程の價値あるものなるか、泰西の學者は祖先祭を如何なるものなりと思ひしか、日本の祖先祭は果して後怖心に基ける劣等なる宗敎なりと云ふ可きか、古代に於て我國に存在せし國產の祖先祭は如何程のものなりしか、日本の祖先祭は儒敎に對して如何なる關係を有せしか、又た佛敎に對して如何なる關係を有せしかに就きて其の槪要を記述せり、固より極々の大意にて所感を盡くすに足らざれども、之か爲めに幾分か日本の祖先祭に注意せらるゝ人ありて、特に祖先祭の將來に關する思索と爲さるゝことあらんには幸甚の至りなり。

余は玆に結末に臨んで一言を述へんとす。そは余は前記の事實は別に吾人に敎ゆるに、左記の如き二個の重要なる眞理を以てすと思ふなり。

(第一)は日本は決して或人の思へるか如き、物眞似のみに止りたる國民に非すして、萬國に比類なき思想及制度の往古より今日に至るまで依然として存せしものあることなり。

(第二)は佛敎の大組織すら、日本のものとなるには日本化せられさるを得ざりし故、今後とても外國の宗敎なれ道德なれ政治なれ、之を日本に遷さんとするに當りては須らく日本化せざるを得ざること、即ち行基等が爲せる本地垂跡的の精神を學ばざる可らずと云ふことなり。

(完)

個人主義を論ず

飯塚陽平

個人主義と云ふものあり、或る一派の人々は政治、社會上萬般の事此主義を以て解釋せんとす、政治社會上のことは何事によらず皆此個人主義に合すると否とによりて其是非を決せんとす、然れとも個人主義のみによりて凡ての社會政治上の事は解釋し得へきや、又斯く解釋するは社會の進步に最も利益ある解釋なりや否や試に之を研究せん、

抑も個人主義とは何そや、之を簡畧に言はゝ一方にては個人の自由を尊ひ之を以て天賦の權にして動かすへからさる基礎に立つものなりとし、他方に於て政府の職務を限りて人民の生命、財產、自由等の諸權を保護するに止め、政府の立法、命令、悉く此範圍を出つ可

からず、此範圍以外の干渉は悉く非なりとし人民の自由に一任すべしと主張するもの是なり、而して此主義の理由とするところに二あり、一は經濟上の理由にして個人主義を以て最も社會を益するものとし、他は道義學の上に根據を有するものにして個人主義を以て最も正しきものとなすものなり。

先つ第一の經濟上の理由に曰く政府の干渉は排せさるべからず何んとなれは政府か人民の爲に其利害を感んするは人民か各自の利害を感んするより薄くして且誤り易し、故に政府か人民の爲に圖ることは多くは人民の利害に適切ならずして誤り易く間々人民の自由と衝突して社會の進歩を妨害することあり、之を以て政府は其職務を人民の生命、財産、自由を保護するに止め以下皆人民の自由に放任するに加かず、人民の自由に放任すれは競爭隨て起り、競爭盛なれは需要供給の法則行はれ、需要供給の法則行はるれは、個人の利益と社會の利益とは自然に相一致すと玆に於て個人の幸福以て望むへく社會の進歩以て期すべしと、而して尙ほ一歩を進めて如何に需要供給の法則によりて個人の利益と社會の利益とか相一致するやと問ふに曰く社會は一方に於ては消費者となり勞力及ひ生産物の需要を起し社會に有用なる度に應して他方に於ては生産者となり經濟的に是等を供給せん、而して若し或る種類の勞力又は生産物の需要か之に反對する供給に超過せは物價騰貴し、騰貴すれは人民は此種の供給にのみ集り以て其價格下落せしめ、若し之に反して供給需要に超過せは價格は下落し、去て他種の供給に從はん、玆に於て價格は常に平均に歸し例外の高價もなく又例外の低價もなきに至るへし之れ則ち消費者も出來得る丈の最低價にて生産物を得、生産者も出來得る丈の高價にて物品及ひ勞力を供給せしなり、個人としても社會としても最大の利益を得たるなり、故に人か最も大なる自己の利益を得んとせは必す之を需要供給の法則に從はさるべからず、而して此需要供給の法則によりて得たる利益は人か得らるへき最大の利益にして若し之の法則に從はざらんや其勞力は必ず失敗にして其勞力に對する報酬は得る能はざるべし、然るに個人に最大の利益を與ふる需要供給の此法則は又社會に最大の利益を與ふるものなり、故に個人の利益と社會の利益は一致するに至るなりと、之れ經濟上より個人主義を是とする理由の大要なり

道義學上より個人主義を正しとするものあり其理由を

問へば曰く天は人類の幸福を欲す、而して此幸福を得るには吾人の官能を完全に働せざるべからず、官能を完全に働かせんとせば行爲の自由を要す、天已に人類の幸福を願ひ幸福を得るに自由を要すとせは自由の權の天賦なるや明なり、故に吾人は他人の自由を害せざる以上は總ての自由を有す、而して吾人か自己の自由の幾分を制限して社會を造り國家を成す所以のものは之に依りて尙多量の幸福を得んとすればなり國家は吾人の自由を制限して吾人幸福の基礎たる生命、財產、自由等の諸權の保護を托する爲めに造りしものなり故に國家の發する法律命令も各人の自由の相衝突することを防ぐを以て其本旨とし其行爲の範圍は生命、財產、自由の諸權を保護するに止まるべし、是より以外は決して國家の干涉すべきものにあらず、若し此範圍を脫せは國家は其本分を越へたるものなり、前に述べし如く國家は各人の利益を求むる意志より成りしものなれば若し國家の行爲にして其自由を妨害し其幸福の增進を妨ぐるとある時は各人此國家を無視するの權利を有するものなり、元來自由なるものは各人の幸福を增進する最良のものなれば國家は之に干涉すべきものにあらず、只各人相互の自由權の衝突を避くるに注意せは可なり、之を再言せは自由は天賦の權にして且つ最も各人の幸福を增進するものなり、社會は吾人が尙多量の幸福を得んが爲めに形造りしものにして國家とは吾人が此社會にありて利益を追求するに當り便宜の爲めに設けしものなり、故に國家は其委托せられたる本分を守り敢て他に干涉すべきものにあらず、而して斯く國家か其本分を守るに依りて各人の幸福は最も增進するを得べしと之れ道義學上の理由なり、

以上は個人主義を主張する重なる理由なり今徐に此理由の正當なるや否やを撿せん、

先つ第一の經濟上の理由を考ふるに其所說大要下の二斷案に歸着するが如し曰く各人自己の利害は政府之を見るよりも人民各自に之を見る方、より多く正確なり、曰く個人の利益と社會の利益とは自由競爭に依りて全く相一致するものなりと、第一の斷案は文明の或る程度以上の國民に就て言ふ時は當れるが如し、各國の政治歷史は大概此斷案の眞なるを證明するが如し、然れとも第二の說に至つては少しく早計に失したる斷案に非ざるか、個人主義か、自由競爭によりて需要供給の法行はれ、需要供給の法に依りて人か此社會に於て得らるヽ丈最大の利益を得、社會も同しく最大の利益を

得故に社會の幸福と個人の幸福と相一致すと云ふことは互に勞力或は勞力の結果を交換して生計を營む各個人の間には適用するを得へきも個人と社會との間には間々適用し得ざることあり、假令は茲に一の大なる森林を有する人あり、此森林は其所有主には左程の利益を與へざるも雨量を増し氣候を補ふ點に於て大なる利益を社會に與ふとせん、此塲合に於て個人の點より考ふれは森林を採伐して賣拂ふ方利益ならん、然れとも社會は之れに依りて雨量を減し氣候を害して大なる損害を蒙るべし、是れ個人の利益と社會の利益と一致せさる一例なり若し此塲合に於て社會か其森林より得る利益の報酬として所有主か森林を賣却して得る丈の利益を與へは所有主は尙ほ森林を採伐せすして保存すへきも社會か之を爲さゝる以上は（現今の社會は之を爲さゝること屢なり）必す之を賣却せん、然らは社會の利益と個人の利益とは是非とも衝突せさるを得す、之れ需要供給の法則の行はれさる個人と社會との間には間々有る例にして右は只其一例に過ぎず、個人主義の人々か右等の事實を考へずして只需要供給の理のみに依りて絕對的に個人の利益と社會の利益と一致すと云ふは少しく早計の論斷と云ふべし、又需要供給の行はるゝ個人と個人の塲合に於ても個人主義の論者か言ふ如く行はるゝは必すべからず、假令へは不正品を販賣して一時の利益を貪るに當り需要供給の法に從へは顧客は去て他に行き其商業は衰退すべき理なしとも商人の狡猾なる巧に社會を欺きて利を得ること屢見るところの例ならずや

一歩を讓りて個人主義の論者の云ふ如く需要供給の法必す實際に行はるゝとするも尙ほ個人主義の論者か注意せさるへからさるものあり、經濟上にて個人の利益と社會の利益とか一致すれはとて直に進て故に個人の幸福と社會の幸福とは相一致すと論定すへからず、幸福と經濟上の利益とは精密に同一なるものにあらず、言ふまてもなく幸福とは精神上の快樂、嗜好を含むものにして經濟上に言ふところの物質上の幸福より廣き意味を有するものなり、是れ實に明白なることなれとも推論上間々誤謬を生することあり。

以上述ふるか如く個人主義の論者か個人の利益と社會の利益と相一致すと論定せしの誤なると明なれは自由競爭にのみ一任するの不可なるは言はすとも明白なり、已に個人と社會との利益一致する能はされは國家は社會全躰を代表して社會全躰の利益を圖る社會的政

策を施さゝるへからず、決して生命財產の保護を以て滿足し得へきにあらさるや明なり。

次に第二の道義的の理由に就て考ふるに天は人類の幸福を願ふと云ふと及ひ自由の權は天賦なりと云ふ頗る議論の有る說なれとも之は倫理學及ひ社會學上の問題として擱き玆には只個人主義の論者の個人の自由及び國家に關する說を評せんとす

此道義的理由の大要も又二個の重なる斷案に歸着す、則ち各人の幸福を最も多く增進するものは自由なりと云ふと、及び社會は個人の利益的集合にして國家は各人の利益を保護する爲に造りし便宜的のものなりと云ふこと是なり、第一の斷案は知識の程度進步せる人民に就て言ふときは眞なるを失はず、然れども第二の說に至りて深く考へざるへからず、個人主義にあつては社會及び國家を以て個人の利益的集合と爲す如しと雖も之れ歷史上の事實と合せざる說なり、歷史上に顯はれたる形跡より考ふれば人か無意識的(アンコンシャスリー)に利益を以て集合せるは事實なれども個人主義の論者か考ふる如く各人皆同等の權利を有し平等の地位にありて結合せるものにあらず、優者あり劣者あり、劣者は優者に征服せられて大家族となり、强大なる種族は弱少なる種族を征服して以て漸々大なる社會を形造りしものなり、故に劣者が優者に服するは抵抗するよりも利益なるを以てなれば利益を以て集りしと云ふも不可なしと雖も決して各人平等の地位にありて集まりしものにあらざるや明なり、(又個人主義の論者は元來人間には自由の權ありと云ふと雖も若し右の塲合に强者に抵抗するよりも服從するを以て利益なりとの意志にて決斷したる故服せしと云はゞ自由の權あれども若し已を得ずして服せしとせば自由の權は無かりしと云はざるを得ず歷史上の事實は已を得すして服せしことを證するか如し、)國家の成立を以て個人の利益的集合なりとするは假令歷史上事實なりとするも之を今日に國家に適用して同しく個人の利益的集合なりと解釋するは穩當なる解釋なりと考ふる能はず國家の成立は如何にもあれ、今日の國家を解するには最も善く社會の進步に適する解釋法を採らざるべからず、國家は永久不變の眞理を躬して進むものにあらず、否眞理あるべしと雖も十九世紀の今日にては未だ明に知れざるなり、故に國家を解釋するには社會の進步に最も適するものを以て最も正しき解釋とせざるべからず、然るに今個人主義の解釋に從へば種々の難點を生ずべし、

第一、國家を以て個人の利益的集合なりとせば全部の人の勞力の結果を取りて之を一部の人に與ふる政策は總て之を拒まざるべからず、個人主義より言はゞ國家は只各人自己の勞力の結果を安全に享受するを得る樣に之を保護するの義あるのみ、決して一人の勞力の結果を取りて之を他に與ふるの權利なし、今日の國庫支辨を以て普通教育を施す如き又は貧民救助法の如き之を個人主義より認むる能はざるべし、

第二、國家は生命、財產の保護に止まり他は人民の自由に放任すへしとせば總て人民の自由契約に干渉する政策は之を拒まさるべからす、雇主と勞働者の自由契約に成りしものなれは其勞働時間は如何に永くとも其取扱は如何に殘酷なるも國家は之に干渉する能はさるべし、然るに此等は社會に害毒を流す甚たしきものなれは社會の進歩發達上是非とも國家の干渉を仰かさるべからす、現今歐洲諸國にて職工條例、工場條例、强迫保險法等を布くを以ても知るを得べし、

第三、嚴密に個人主義に從はんとせは一個人の國家より受くる利益と之に對する報酬とを精密に比較せさるべからさる故に社會全躰の利益を目的とする政策は大に困難を感んすべし、國家の狀勢に依りて農、工、商の一部を保護し又は海運を奬勵すへき必要起ることあり、此等の場合に於ては一個人の保護より受くる利益と之に對する國家への報酬は比較すること困難なるべし、

第四、國家か國家として他の國家に對し自己の尊嚴を維持し自己の光榮を發揮する總ての政策は個人主義より之を認むる能はす、假令へは美術を勸め文學を奬勵するか如き皆個人主義の認むる能はさるものなり、然れとも之等は皆國性の發達に欠く可らさるものなり、

第五、國家が國家に勳功あるものを賞するの權、及び國家的事業の或る部分は嚴密なる個人主義に於ては之を認むる能はず、

以上は個人主義より生せる難點の重なるものを擧けたるものなり、然るに右等の政策は社會の進歩上是非とも之を認めさるへからさるものなれは個人主義が國家を解釋する正當の說に非さるや明なり、而して尚ほ玆に注意を要するは個人主義は人間性情の一方面則ち利慾の方面のみを觀て說きし說なれは其弊の至るところ遂に利己的の行爲を奬勵するの傾向あることと是なり、之れ强ち個人主義か受くへき正當の批難には非らされとも其の自然の傾向利己的の行爲を奬勵し遂に各人自

己の利益のみを追及するに急にして社會全躰の利益を顧みさるの弊に陥るに至れり、今日の貧富懸隔は個人主義か奨勵せし自由競爭の結果なることは明白の事實なり、

以上述ぶるか如く個人主義を今日の社會に適用すへしと云ふは誤謬の論なりと雖も個人主義全く誤謬の理論のみにあらず其個人の自由を尊び政府の干渉を排して各自進んで事に當り、獨立の氣象を起し企業心を奨勵し、人間の行爲を自然の發動に任し開發的に人智を進むるが如き實に個人主義の精髓なり、アダム、スミス、か貴金主義を打破して外には自由貿易を唱へ内には自由競爭を叫びたる如き、佛國革命か王政の壓制を顚覆し萬民平等、天賦人權を呌破したるか如き、之れ皆個人主義の發動せしものなり、爾來歐洲諸國は此個人主義に依つて精神的に物質的に駸々乎として進歩し來り遂に今日の文明に達せり、個人主義の功決して沒すべきにあらず、今日の文運個人主義に負ふところ實に大なり然れとも今日は是れ已に個人主義の弊に苦しむの時なり、個人主義か奨勵せる自由競爭放任主義は貧富の懸隔を生せしめ今や之を醫するの策に窮せるの時なり、今日に於て尙ほ個人主義を適用せんとすれは大人に向て小兒の衣服を着せしめんとするか如し、此貧富懸隔の問題を解釋して今後社會の進歩を圖らんとせは國家社會主義を以て現今文明國の社會を解釋するを以て稍正理に近しと信んす、國家主義とは則ち國家を以て發達せる有機躰とし自己の維持發達を以て目的となすもの是なり、此主義に依らは個人主義の受けたる難點は總て之を排除するを得へし、貧民救助問題以て解くべく國家の發達以て期すべし、國家社會主義に就ては他日詳論することあるべし、

批評

加藤博士の一論文

載せて一昨月の哲學雜誌にあり題して「佛教に所謂善惡の因果應報は眞理にあらす」と云ふ

佐村德介

佛者の之に反抗するは更に怪むに足らず一種の倫理學者が異議を提供する亦當然なり曰く「禪宗」（未完）曰く「佛教」曰く「六合雜誌」（論評の簡短なりしは頗る遺憾なり）予輩は謹んて諸氏の評論を閲讀して其の意義を

明かにし得たるを信す予輩初め加藤博士の論文に接したるや自家の所見を精言明説せられたるが如く感したるの箇所多かりし是れ固より該論文を私解したる所に依る該論文以外に於ける博士の意義と理由との如何なるやは之を推測すること固より容易ならず而も予輩は自家の所見を表明するに當ては博士と同樣の言辭を使用せざるを得ざるの點あり乃ち茲に博士の言辭に負ふ所ありて以て予輩の鄙見を開陳せんとす雄健なる博士の答辨若し出つるあらば鈍劣なる予輩の所見は自から判別せられんのみ

抑も自然界とは客觀界を謂ふ是れ感覺智識感情を以て眞實となすものたり世或は念若しくは心てふ言辭に依りて感覺及び感情を假虛となす此種の論固より攻擊するの値なきにあらず而も本題は自然界道德界に關するものたり感覺感情の眞實を承認したる以後の論議たり敢て之が眞實如何に關して茲に辨するを須ひす故に予輩は善若しくは惡と稱すべき行爲あらんか之を解剖して或種の擧動（無論人類界に就て言ふ）と之れに對する所の感情となす乃ち客觀的擧動（是れ倫理の基本なれば倫理及び其價値は客觀的に判定すべきものとす）と主觀的感情とに判別す而して客觀的即ち自然より觀察せば擧動は物質作用のみ善惡感情は主觀的には趣味其者たるも一種の精妙現象として之を客觀するに毫も抵觸せす眞に公平なる實驗主義の精神に合するものたり又道德の事たる所謂意思の自由と關聯する所あり今必然的（自然的）解明を施せば是れ道德自身を滅沒するものにあらずやとの俗論起らん去れど是れ予輩が嘗て本誌に於て畧論したる所なれば復た茲に贅せす要するに斯かる俗論の起るは主客兩觀に就て究明する所淺薄なるがためのみ

或は言ふ加藤博士の道德論を以て今日の所謂科學的精神の正當の結果なりと云はずと加藤博士固より「吾人が正當の行爲をなさんと欲するの自由心より之れを爲すにあらす邪惡の行爲をなさんと欲する自由心より之れを爲すに非ず」と云ふ而して夫の論文に於ては自由意思の主觀的方面に言及せす是れ果して客觀的（自然的）に偏して善若しくは惡をなさんとするの自由心を談する主觀的方面を排却するの意か若し然らば此點に於て科學的なりと言ふを得ざらん然りと雖も以上の博士の言は「人類を單に天地間の一動物として考ふる時の義ならん即ち所謂客觀的（自然的）說明に於て限れるならん然らば加藤博士の論文は其陳述せる限りに於て

科學的に正當なりと云ふべし（後段一缺點ならんも知れずと指摘したるの外）、

或は言ふ自然的説明は道德界を取て自然界に沒入せしむと然り而も是れ物理學者が色を光線作用に歸すると何ぞ異ならん其沒入や學理上に於てのみ身自から主觀の境にありて道德を談するに於ては道德界は無論現然として存す猶ほ物理學者が眼感に紅橙等の差別を滅沒せざるに同しきのみ

或は言ふ或意味に於て道德界は自然界の結果なり……其眞意其目的の發展したるものとしての結果なりと然らば或る意味に於て道德界は自然の結果にあらずとするか主觀的善惡界は客觀界の結果にあらずとの義か極言すれば精神現象は物質運動の結果にあらずとの意か唯物説唯心説物心二元説の價値如何は予輩茲に論及せず唯た天則必然を以て經緯とせるの世界を自然界とする予輩の見地は道德界精神界をも自然の結果なりと言ひ得るの餘裕ありと云はんのみ又自然の目的とは何の謂ぞ詩歌的に自然を感想したるの謂か將た自然の目的を知識したるの謂か若し前者なりとせは是れ一種の主觀のみ若し後者なりとせば（目的を知識したるの謂）則ち山は高きが一目的ならん川は流るゝが一目的ならん地球は廻轉するが一目的ならん而して貧乏人は貧乏するが一目的ならんか茲に至つて目的の意義一變す蓋し其意識の有無不可知なる自然に目的を附すればなり而して自然界の根本を以て道德的と見做すべきや否やは亦た是れ道德の意義を一變するにあらずんば予輩客觀的必然界を談するに於て之を問ふも無益ならん，

或は言ふ善惡なる全躰の區別は常に實在すと而して要は善惡なる判然たる區別ありて存すること明かなりと言ふに過きす然れとも誰か善惡二種の感情に差別なしと言はん之が區別を滅沒せんとする者は精神病的形而上論者自身のみ而も善惡の區別の存するは是れ主觀的のみ其の客觀的存在を僭するを許さす

或は言ふ「社會に取りての利不利則ち善惡は自然に存し人力を以て如何すべからず是れ善惡が自然に存するに依るにあらすや」と其所謂「自然に」とは必然の義ならん而して予輩亦善惡なる行爲の必然的なるを認む自然界の事物何事か必然的ならざらん客觀的に事物の存するも主觀的に感情の生するも皆相當の天則に依るものたり而も一種の行爲が善若しくは惡たりとも即ち善惡の感情生したりとも是れ一種の主觀のみ客觀的に善惡の存するなどゝは固より思想上の迷執たり予輩固よ

り「社會の維持と進歩とに利あるものを正善とし不利なるものを邪悪となす」と云ふ是れ主觀的斷案を言表したるものゝみにて客觀的には或種の擧動と一種の精神現象あるのみたるは言を待たず此邊鋭利なる判識を要す加藤博士の意義果して斯くの如きや否やを確知するを得す若し然らずして社會的善悪てふものゝ客觀的に存在すとせるとせば固より博士に取て一缺點たりと言はさるを得ず

或は言ふ佛教にも亦た善悪無差別を說くの理躰界ありと然り而も是れ科學上の自然界と天地の差あり乃ち予輩の所謂自然界は佛教の所說にては正に事法界に屬すべきものにして斷して理躰無差別界の義にあらず假に佛教の無差別主義を成立せしめんか活動變化の自然界茲に沒滅して平等一如の境となる是れ自然界に合せんと欲して却て自然界を隔絶するものたり然らば夫の所謂平等界とは差別を沒却せさるもの即ち理事無法礙法界の謂なりとせんか而も其義は平等界差別界と觀するも實は圓融無礙なりと言ふに在れば其の實を主張する者は予輩と同じく自然界に善悪なしと言切るを得ず到底自然的觀察と相容るゝを得ず彌縫策却て自ら失敗を招くのみ若し夫れ加藤博士が善悪の客觀的一定說を攻擊したるを誤解して善悪てふ想念の上には一定の區別ありと言ふが如きは抑も迂論のみ予輩の駁破せんとするは自然界の出來事が絶對的に宿善宿悪を開發して以て人生の榮枯を致すとするの點にあり即ち某か某時某所に於ける（個々の善悪業一定せさるは言はずして可なり）悪（若しくは善）業が必定禍報（若くは福）を受くると言ふの點にあり緣生無性を說くも或は可ならん唯た其の轉變が應報的禍福を來すと言ふは不稽のみ主觀的形式と客觀的事物とを混同せるは妄斷のみ夫れ科學的觀察を以てすれは客觀的事物の運行は必然的事情に依るあるのみ善悪の感情が分子運動をして人身を激動して物質的變動を加ふるにあらざれば其の事物の運行は善悪によりて實際上影響せらるゝことなし而して縱ひ人力を經由するも人力は自然界の一微動のみ到底他の斷行必至する運行は如何ともする能はす故に時には善業に福利の來るともあらんも亦た時には禍害の加はるともあらん絶對的（必然的）應報說は固より挫折せざるを得ず社會的應報の如きも存すと雖も亦た絶對的にあらず

或は言ふ佛教の眞如は自然法則と同一義なり而して佛教は眞如に合するを善となし然らざるを悪となす故に

其應報は必然的なりと假りに之れを同一義とするも夫の應報説は依然失敗たるを免れず今若し自然法則上福利を來すべき因業を正善とし否らざるを邪惡とせんか暴戾富貴を得たるを善人となし慷慨困苦に陷れるを惡人とせざるを得ざるの奇怪もあらん蓋し自然の運行が必然的に禍福を以て善惡業に正應せざるは上に述べたる如くなればなり

或は言ふ利すべき業因を修して之に報ふるの利を享受するは天則的必然の結果なりと然り初めより善業とは善果（福報）を來すものと假定せば善果は善業に因らん而も之れ實は一概念を反復したるに過ぎずして利するものが利すると言ふに止まるのみ知識上幾何の價値かある或は善惡の應報は主觀的なりと言ふ者あらんか即ち人類各自ら善若しくは惡（せねばならぬ若くはしてはならぬ）と感する所を有し（其の善惡の標準如何に拘らす）其の善と感する所を行ふに於て快感を得其惡と感する所を行ふに於て苦感を得而して其の快苦の感は善惡の感の度に比例すと而も此種の應報は客觀的作業に因るにあらずして作業に對する各自の感情に基す故に同種の惡事を行ふも道德上の苦痛を感ぜざる程に墮落したる者は其の苦少なくして道德心の敦き者は其の苦多し是れ善惡人の業報と言ふを得ず、然らば各自の善惡業と感するものは各自に取て相當なる善惡業なりとせんか是れ倫理（行爲を以て基とせる）の原理に背反するのみならず善惡標準を個々に放任して各正當なりとするは則ち社會を混亂するものたり固より排斥せざるべからず

顧ふに應報説に於て攻擊せらるべきは獨り佛敎に限らずして科學的知識以外に僭越を行はんとするものは皆同樣たるべし而も予輩は倫理を重ずるに於て自ら他に讓らざるを期す予輩は倫理を以て社會上の權義より觀察するを至當なりとす蓋し個人的制裁とは人類相互の間より視れば一種の得手勝手に過ぎざればなり然りと雖も予輩は各個人の道德的希望を看過するものにあらず夫の社會的倫理及其發達も素と玆に由來す而して個人的希望として何を善とし何にを惡とすべきかの標準に就ては其の社會の維持近步（即ち幸福を）に對する利不利を以てせる加藤博士の高見に服す維持進步てふ言辭の表示する所固より精確ならず是れ實際社會の實際問題たり思辨に一任すべきものに非らす之れか解釋屢々困難なりと雖ども敢て維持進步を標準とするを妨たくるものにあらず予輩は宗敎家敎育家たる者の此の個

人的善惡感を正當に敎導涵養せんことを奬勵せざるを得ず而して予輩は善惡の應報若しくは賞罰を以て人類が正義に關する至上の理想なりとなす正義の眼より視れば善は賞せられ惡は罰せられ邪は禍を招き正は福を伴ふべきものたりとなす而して此の正義の理想即ち道德的希望を或は社會的應報に或は國家的（法律的）應報に實現せんことを努め以て倫理の進歩を圖らんとす

雜錄

西園寺文相の談話

過般西園寺文部大臣がその官邸に於て各師範學校長の前になしたる一場の演説は計らずも新聞社會、雜誌社會の一議論となり、ひいて全國敎育家の腦中に一大騷擾を起せし者の如し。吾人嘗てその演説の要旨を傳聞せしに、これ通常のことにして何にも特に主義の變化などゝして注意すべき程のものとも覺えざりき。然るに世界主義云々とひて敎育社會に一波瀾を起したるもの、要するに、或人々の臆測揣摩に基きて、眞にその意のある所を誤解せしによるならん。近頃開發社の一員、大臣の眞意を確認して世人に告げんため、その官邸に推參して、親しくその談話を聞くことを得たりと云ふ。その談話載せて敎育時論第三百七十號にあり。若しこれを一讀せば、世界主義云々との一波瀾は全く誤解に出でしものなることを明かにするを得て疑の雲忽ち晴れん。故にそのまゝ茲に轉載することゝなせり。

近頃閣下が主張さるゝとして世に傳ふる世界的敎育主義云々の件につきては、世上に彼是と評論するもの多きが如し。されども多くは臆測に依りて說を立つる者のみにて、閣下の眞意に通ずる者は、誠に少きが如し。就ては此の事につき、猶確乎たる閣下の意見を承はらん爲に推參せり、但今日は御多忙の際と見受け奉れば、長坐せんも恐多し、願くは簡單になりとも、御話ありたしと、大臣に申し出でたるに。

大臣云はるゝやう、此事につきて、世間にては、彼是と評論する由なれども、今更別に改めて言ふべき程もなし。元來世界的敎育主義などゝ言ふことは、余が口よりは、一度も發せしことなし。從て世間所謂世界的敎育主義とは、如何なることなるや、余自ら其の義を知るに

苦むなり。然れども世界的云々につきて、余の見解を述ぶれば、廣く世界を一家と見做すは、宗教より出たる考にして、教育は宗教とは全く之を分離すべき筈なれば、教育上に世界的云々と主張すべきやうなかるべし。宗教とても、總ての宗教が、皆世界的なるにはあらずして、佛教、基督教、回教等が、先づ今日に至りて、世界的となれりと云ふまでなり。是等宗教さへも、始より世界的なりしにはあらず、佛教は印度の教にして、基督教と回教とは、共に猶太の教より來れり。其の基督教及び回教と爲りし後に至りても、始は猶頗る地方的の性質を有したりしが、次第に變化して、今日の如く世界的となるに至りしなり。此の三大宗教の外なる他の宗教に至りては、多くは地方的若くは國家的の性質を帶びたり。例へば我が國の神道の如きは、之を宗教に屬せしむべきや否や、大に議論のある事なれども、假に之を宗教と見做すも、決して世界的の性質を有する宗教とは見るべからざるなり。宗教さへも、全く世界的なる者は多からず。況や教育の如きは、宗教とは全く別にして、大には國家に關し、小には一身一家に關する事業なれば、是を以て單に世界的と見做すべからざること、言ふに及はず。然るに世間の論者が、世界的教育主義などゝ言ひ騒ぐは、如何なる理由なるや、更に解し難し。余をして果して世界的教育主義を執る者ならしめば、如何なる事を爲して然るべきか、余は自ら其爲すべき事柄にさへ惑ふなり。要するに、世界的云々と云ふ事は、或論者の誤解にして、如此説に對し今更辨明すべきにあらず。尤も余が平生人にも語り、自らも信ずる所によれば、此十九世紀の活劇場に當り、國を宇内列國の間に建つるは、容易の業にあらず、殊に日清戰爭の結果により、我が國民が、他の國民に注目さるゝこと、一層深くなりたれば、我が國民たる者は、常に宇内列國の形勢に注目し、世界の文明に伴ひて、國運を長進せしむることを圖らざるべからず。若し然らずして、長く東洋の狹隘なる思想を墨守し、唯我獨尊の氣象によりて、他の國民を凌蔑し、又は世界の文明と共に發達することを忘るゝときは、必ず國家に不幸なる結果を來すことあるべし。況や向後、外には商權を擴張し、内には内地雜居を實施する日に至り、國民の多數が、海外の狀況に通ぜざるときは、實際上の不便甚しきのみならず、時としては、無益に外人との間に事端を生じて、結極我が國民の不利益となるべきこと、疑を容れず故に近代の文明に後れざることゝ、

海外の事情に通ずることゝは、我が國民が後來に務めざるべからざる所なりと信ずるなり。余が此の如く説くを以て、國家主義に反する者なり抔と言ふ者なれども、是れ實に解し難き所なり。何となれば、余が國民に向て、近代の文明に後るゝ勿れ、海外の事情に通曉せよと云ふは、深く我が國の將來を慮るより出でたる言にして、我が國を忘れたるより出づるにあらず。余にして我が國を忘れなば、國民に向て、かゝる勸告を爲すべき必要はなき筈ならずや。人或は余が大和魂の養成と云ふ如き事を主張せざるを以て、國家主義に反せりと云はんか、是れ亦た不可なり。大和魂は固より之を養成せざるべからず。我が國民が數千年來養ひ來れる忠勇の氣象は、固より大切なれば、之を重せざるべからざるは、言ふまでもなけれども、國民の發達は、是のみにて可なる者にあらず。玆に一人あり。渾身大和魂を以て成れるも、其人若し銃を放つ術を知らずして、敵と戰はゞ、銃丸は遠慮なく飛び來りて、敵の爲に射殺さるべし。故に大和魂は失ふべからずと雖、銃を放つの術も、亦知らざるべからず。今其の人に向ひ、銃を放つ術を學べと勸告する者を以て、大和魂に反對したりと思ふは、甚しき誤ならずや。

抑世人が、余を世界主義云々と言ひ始めたるは、向きに尋常師範學校の校長等を、此の官邸に招集して、數ヶ條の演述を爲せしに基く者の如し。其要旨は學校生徒の衛生上の事に、今一層注意すべしと云ふこと、寄宿舍の管理方は、成るべく器械的に過ぎざる樣注意すべしと云ふこと、女子の教育は、稍退歩の色あれば、之を奬勵すべしと云ふこと。外國語の教授は從來とても等閑視したるにあらざれども、今後は尙一層奬勵を要すべしと云ふこと、幷に前に述べし如く、成るべく近代の文明と幷進し、世界の形勢に通ずるやう心掛くべしと云ふが如き事項に過ぎず。是れ誠に平々凡々たることにして、何人も言ふ所なれば、此點より余の意見を非難するならば、其の理なきにあらざれども、余が危險なる意見にても有するが如くに評論するに至りては、少しく意外なりき云々。（教育時論第三七〇號）

佛教界の革新期

過る五月三十日、突然、內務省訓令第九號の發布ありしより、神佛兩教の諸派に於ては、俄かに周章狼狽の姿を呈し、如何にしてこの訓令に適應すべきやに日夜苦

心焦慮せるもの丶如し。而して神道諸派にありては之に應ずるに如何なる計策あるか、たゞ近々一大會議を開き大に評議する所あるべしとの噂あるのみにして未だ何の手始めもなきやうなれど、佛教諸宗に於ては既に學制改革とか、教育擴張とか、宗制改革とか云ふ如き問題を提出し、大に協議をこらし、着々歩を進むる勢なり。今玆に一二の例を擧げ、以て其形勢の一班を示さん。

本派本願寺に於ては、今回の訓令に基き、大學林文學寮其他地方諸教校の學科程度に修正を加へん爲め、法主の特撰により同派僧侶中學識富贍、德望隆卲なるもの三十名を會員となし、去月二日より向ふ十日間の豫定を以て教育諮問會と稱するものを開きたり。その召集されし會員は、大洲鐵然、小田佛乘、利井明朗、島地默雷、香川葆晃、安國淡雲、赤松連城、水原慈音、志津里得隣、足利義山、小山憲榮、伊井智量、松島善海、前田慧雲、菅了法、藤井宣正、園田宗惠の諸師、其他總末寺會々員等にて、赤松連城氏は議長に、藤岡法眞氏は副議長に撰ばれたり。而して其學制方針を聞くに、初め本山の原案にては凡て學校は教師教校となし、普通學は唯だ尋常中學の程度に止め置く都合なりしも、議員は此原案を排棄し、別に査定案を作り、去る五日より同案の議事に取掛りし由なるが、其査定案の方針なりと云ふを聞くに、西京には矢張今日の文學寮を保存し益々程度を高めて、終には大學と稱して耻かしからぬ迄に至らしめ、次に三個の中學寮を設け、一は廣島に、一は九州に、一は北國に置くことにし、此中學寮にては相當の專門科に文學寮の二年級まで、即ち所謂尋常中學科程の普通學を教ゆることにし、次に其小學寮と云ふに至ては、預め數を限らず、全國適宜の地に自由におくことを得せしむる方針なりと云ふ。尙經費の處は一ヶ年大凡五萬圓と見積り、此内一萬五千圓をば文學寮に費し、其他は高等專門を教ふる大學林、及び三中學寮の經費に當つる豫算にして、已上の議案は十中八九迄は通過の見込なりしと云ふ。（傳燈第九十七號による）

又高野山大學林に於ては先月二十五日より評議會を開き、內省務令に對する協議をなせり。即ち議員は高野山より水原弘榮、法性宥鑁、西京本山より釋玄猷、地方は第一區小川光義、第二區土宜法龍、第三區缺席、第四區鎌田觀應、第五區荒共興嚴、第六區

恩德行聖、第七區藤村密應の九師より組織せられ、番外には佐伯宥純、杉本孝順、加藤諦見、藤井津梁、高岡隆心、密門宥範の諸師及び學務課員にて總理、副總理も日々出席し、而して内務省訓令第九號の件は異議なく中學林學科中に編入することに定まり、隨て中學林に高等、尋常の二科を置くことゝし、來る二十九年一月より改正實行の見込を立て總理の許可を得たりと云ふ。尙ほ、大學林擴張の建議あり、宗立學林設置の建議あり、中學林を京都若くは東京に移さんとする議論ある、など其形勢極めて盛なるか如し。（以上は傳燈第九十七、九十八の兩號に依る）

斯の如く諸宗に於ては、内務省訓令に所謂、「敎師は敎義宗旨に精通するの外尙尋常中學科相當以上の學識を具備するにあらざれば到底其任に適せず」との趣旨に基き、從來の學制を增補し、學校組織を改良し、以て一般の僧侶をして尋常中學科相當以上の普通敎育を受けしめんとの方策を講ずるに至れり。これ我が宗敎界の爲め歡喜措く能はざる所なり。固より佛敎に於ては大に神道と異りて從來とても決して僧侶の敎育てふことを忽にしたるにあらずと雖ども、其學制たるや多くは敎義を敎ふることにのみ偏して、普通敎育を授くる目的に出でたるものにあらざれば、その學林より出づる僧侶は敎義に精通するも、普通の知識に至りては大に缺くる所ありしなり。是を以て所謂敎育ある僧侶と雖ども之を社會の常識より見るときは、即ち精神上の不具者たるを免れずして、その說く所世間一般の道理に戾り、殆ど狂氣に類する如きもの少からざりしが、若し目下の計畫にして實行せらるゝを得ば、恐らく斯る憂はなきに至るべし。これ吾人の日夜刮目して待つ所なり。

以上擧げたる本願寺の敎育諮問會、高野山の評議會等に於て議決したる如き計畫にして、漸次その實施を進むるに至らば、遠からずして僧侶一般とは云ふべからざるも、その多數は中等程度の普通敎育を有するものとならん。然るに若し僧侶の多數にして普通敎育を有するに至らんか、佛敎界の輿論は大に其趣を改め、從前のものとは餘程其性質を異にするに至るべきは明かなり。若しその輿論にして一朝變動することあらんか、その結果として佛敎界には一大變動起りて、その敎義、敎訓、宗制等著しく變するものあらん。これ僧侶社會の進步に伴ふ必然の結果にして、豫め今日より期するを得へきなり。夫れ今日の佛敎はその敎義に於てもま

た道德的敎訓に於ても決して近世思想の大勢と衝突する所少きに非ず。固より一派の論者が主張する如く、佛敎中には近世の哲學と符合する高尙なる思想もなきに非ずと雖ども、これ單に或一部分の思想を抽象して見たる上の事にして、決して佛敎の敎義は悉く合理的なるにあらず、また華嚴宗とか、天台宗とか、日蓮宗とか、眞宗とか云ふ如き宗派の敎ゆる所一々合理的にして、且つ高尙なる敎義なりと謂ふべからざるは勿論なり。若し此等諸宗の敎義、道德を持ち出して近世思想の光に照さんか、不合理、不適當にして今日の世界に毛厘の價値なきもの蓋し多きにおらん。されど此等の敎義が尙ほそのまゝに保存せらるゝ所以は抑々何によるかと云ふに、未だ佛敎界と近世思想界との關係左程親密ならずして、世界思想の朝流が佛敎の流に影響することの少きによる。即ち、佛敎內に新思想を有する人々尙ほ少數にして無知無識なる頑迷の僧侶多數を占め、此等の思想、感情が結合して一大勢力となれるものなり。然るに今日の形勢はその港を開きて、世界普通の思想と相交はらんとするものなり。普通敎育てふ橋梁を以て近世思想界に通ぜんとするものなり。若し一たび此交通を親密になすを得んか、近世思想の大勢は滔々として佛敎界に入り來り、忽ち之を同化せんとするや疑ふべからず。されば、その敎義も、道德も、宗制も悉く近世思想の影響を受けて大に變形するに至るべし。今日までの狀態に於ては僧侶の多數無知無識なればこそ、舊來の敎義、道德を墨守なしたれ、若し僧侶の多數中等以上の敎育を有するに至らんか、決して舊來の制度に安んじ、舊來の敎義に默從する能はざるべし。斯の如く普通敎育の普及するに至れば、今日の如く僧侶中に、佛敎には一種特別の眞理ある如く思ふものなく、世界思想の大勢と國家の必要とに從ひて新敎義を立て、新敎訓を作り、新制度を定むるに至らん。これ佛敎の一大革新にして、普通敎育が與ふる所の賜なり。今日の形勢を以て察すれば佛敎界に斯る革新期を見る決して遠きに非ざるべしと信ず。

宗敎心の制限

吾人に種々の感情あり、種々の慾望あり。而して此等の感情或は慾望の力が互に衡權を保ち、以て調和的活動をなすときは、これ即ち吾人が精神の常態を現はすものにして、健全なる又普通なる精神作用と云ふべき

なり。然るに吾人の精神界は何時も斯の如く、調和的活動をなすにあらず、時としては恰かも暴風起りて海面に怒濤を現ずるが如く、物に觸れ事に感じて大にその衡權を失し、忽焉として一種の感情激動することあり。通常之を「情に動かさる」と云ひ、或は「熱心」と云ふ。若し此狀態にして餘り過度に至らざるときは、人をして困難に打勝ちて一事業を成就せしむる力となるものなり。されど若し餘り過度に達するときは、人の人たる常態を失ひ、醜となり、悪となり、狂となり、以て己れを害し他を傷ふに至る。精神病者と稱するもの多くは斯る狀態が常習となりたるものに外ならず。熱心と狂とは只だその度を異にするのみ。

如何なる感情、如何なる慾望にても其善なるは他の感情或は慾望に對して適當の位地を保ち相互の間に力の權衡を有し居る時のみに限るものにして、若し一たびその活動にして過激なるに至らんか、忽ち悪と變ずるなり。例へば愛情は善且つ美なるものに相違なしと雖どもその善たる美たるは他の感情と調和し居る時のことにして若し一朝餘り熱度を高むるに至らんか、忽ち醜となり、悪と變ぜん。又利己的慾望は通常悪しきものに定まれるが如く思ふ人ありと雖ども、これ他の慾望との權衡を失したる時の結果をのみ見るものにして、若し適度に働くときは決して悪なるにあらざるのみか、反て各自の生存を保ち發達をなすに缺くべからざるものなり。されど千變萬化の世界に處し、何時も感情の調和を得、慾望の權衡を保ち、以て精神界の平和を維持するもの極めて少し。利に走る人あり、愛に溺るゝ人あり、美に浮るゝ人あり、理に偏する人あり。中庸を得る實に難しと云ふべし。

これ如何人に宗教心と稱する一種の感情、慾望あり。これ如何なる心狀なるかと云ふに、神に對し、未來世に對し、己れの運命に對する等の感情或は慾望を總稱するものなり。この感情、慾望の發動する、即ち宗教的運動の起る所以にして、古來何れの國に於ても凡そ宗教的現象の起りし以上はその裏面に此心力の發動なきは非ざりしならん。然るに此心狀たるや、多數の宗教家が信ずる如く、先天的に最高の權威を有し、獨り吾人の心界を押領して、之に王たるべきものにあらず、財産の慾望、名譽の慾望等と同じく矢張り一種の慾望にして、實際の生活に於てその勢力を得べきものなると然らざるとは理性の修整によりて定まるものなり。換言せば、宗教的感情が如何程の價値を有し、如何程の權力を有

す可きものなるかは反省作用によりて定めらるべきものなり。宗教的感情、即ち神とか絶對とかに對する感情なればとて、感情そのものが本來神聖なるにあらざるなり。

されど、若し何れの宗教に於ても古來の信仰史を繙かば、忽ち宗教心が獨り勢力を恣にして、他の感情を壓伏し、心情界に甚だしき不權衡、不調和を生じたる事實を見ることを得べし。又現在行はる宗教の實地につ いて之を見るも、斯の如き事實決して少きにあらず。彼の基督教のリバイバルの如き、眞宗或は日蓮宗の迷信の如き、天主教徒の悔改、斷食の如き、俗神道の狂信の如き皆これが實例たるなり。斯の如きは之を局外より見れば實に不調和極まる所行にして、正しく一種の狂たるに相違なかるべし。卽ち、彼等の心狀を窺へば、彌陀の功德が有難しとて泣くものあり、己れが神の前に汚れたりとて泣くものあり、聖靈を受けんとて狂するものあり、神恩を受けたりとて躍るものあり。何れも一種の感情、慾望等が過度の勢力を得、心情界の調和を破りて活動せるによる。斯る狀態にして若しその人の常習とならんか、これ即ち宗教狂と稱する一種の精神病者となるなり。此類の人は佛教に於ても、また基督教に於ても吾人の屢々目擊する所なり。

宗教心にして若し他の慾望と相關係し、互に調和して活動するときは、甚だ善良なるものにて、人生を利し、社會を益すること少きにあらずと雖ども、之に反して過度の勢力を得、全く諸他の感情を制伏するに至るときは極めて有害なるものとす。斯の如きは心情の簡單なる人々、或は病的狀態を有する人に於て盛に行はる所なるが、心情の益々發達して理性の修整力漸次加はるに從ひ、追々減少するに至る。これ他の諸種の感情、慾望等大に發達して勢力を得、以て宗教的感情の發動を制限し、過度に達せしめざるによる。故に宗教心は物にふれ、事に臨みて一時非常なる活動を現はさんとするも、忽ち他の强大なる感情現はれて之に抵抗し勢力の權衡を回復するを以て、不調和の活動をなすが如きことなきなり。斯の如く宗教的感情、宗教的慾望が自覺の範圍に入り來り、理性の修整力に支配せらるに至るときは之を合理的宗教心と稱す。これ即ち高尙なる神に對するの感情にして、その性質極めて平靜、毫も不調和なる狂氣的行爲を起すものにあらず。斯る程度にまで發達せる宗教心は大に其の人の品位を高尙にし實際の生活を利する決して僅少にあらざるべし。

文明の社會に於て現はるべき宗敎心は制限的、平靜的の性質を有するものにして、決して過度の熱度を有するものにあらず。故に基督敎に所謂リバイバルの如きは到底進步したる社會に於て得らるべきものにあらず、たゞ無智なる人々、或は病的の人々の間にのみ起るべき現象なり。されば今日本邦の基督敎會に於て七八年以前の如き活々たる熱心を見る能はざるに至れるは、大に信徒の心界が發達せるによるものならん。彼等の信仰は以前と比較せば今後何ほ一層冷然たるに至らんも知るべからずと雖ども、これ進步せる社會に於ける宗敎心として蓋し止むを得ざる所なり。これ共に活動する諸他の感情の爲めに其勢力を制限せらるゝによるものなればなり。吾人は勉めて一般の宗敎心をして不調和的、狂氣的、盲目的なる狀態より調和的、平靜的、合理的なる狀態に進步せしめんことを勉むるものなり。

上述の如く一個人の心界に於て、宗敎的感情が專制的なるより調和的なるに進步する如く、社會に於ける宗敎の活動に至りても亦た不調和的、狂氣的、盲目的なる狀態より、漸次調和的となり、平靜的となり、合理的となるものゝ如し。夫れ未開なる社會にありては宗敎はその權勢を恣にし、殆ど社會全躰を抑領し、以て他の事物の活動を自由ならしめざる如きこと多し、即ち、政治も宗敎の爲めに束縛せられ、學理も宗敎の權下に屈し、美術も宗敎の奴隷となり、敎育も宗敎の方便となれるなり。然るに社會の進步するに從ひ、各要素發達するに至れば、各々己れの勢力を擴張して、遂に宗敎の力に制限をつくるに至る。今日の如きは、政治、敎育、學說、美術等各々獨立の方向を有しながら、互に調和して活動するなり。是を以て宗敎の如きも亦自己の本領を有し、之に從ひて全躰の活動に調和し、他の諸要素と相助けて進步すべきなり。吾人は今後一般の宗敎的運動をして、益々調和的、平靜的、合理的たらしむるやう勉めざるべからず。

釋迦は如何なる種族なるか

（博士井上哲次氏所說）

左の一篇は文學博士井上哲次郎氏が近頃學士會院に於て講述せられしものゝ要旨にして、毎日新聞の記載せし所なり、これ極めて精細なる研究にして大に宗教家の參考となるべきものと信ず、

釋迦は如何なる種族なりや、人或は余が這樣の問題を出したを見て奇怪を覺ゆるものもあらん、然れども釋

迦とは果して如何なるものを意味するや、如何なる者を稱して釋迦とは爲すや、深く研究し來れば事瞭然たるものあるが如くにして實は頗る判然せざる難問題なり。世人釋迦と曰はゞ佛敎を開きたる宗祖其人なりと思惟するもの多しと雖も決して然らず、佛敎を開きたる大豪傑はゴータマシッタルタァ則ち是也、而して釋迦とはゴータマシッタルタァの血族を總稱せる種族の名稱なりとす、釋迦は一人の名にあらずして種族の名稱なる事は既に佛書に於ても之を認むるを見る、一册の阿含を繙かば能く之を知るを得べし、釋迦牟尼と曰ふが如きも後世に及びてゴータマシッタルタァ其人を尊敬し乃ち別に加えたる名稱に過ぎず、牟尼とは智者といふの意味なればゴータマシッタルタァを稱して釋迦牟尼なりと呼ぶもの必竟釋迦種族の中の智者といふの意を表白せしものと知るべし。

釋迦は如何なる種族なりやを論ぜんとする前に於て爰に四姓の事を述ぶるの要あり。印度に四个の社會的階級ありたり、其區劃の嚴なるや我國の華士族平民の階級に於けるよりも一層嚴にして酷なるものなりし、第一ブラフマンス（通俗バラモン）第二クシヤットルヤス、第三バイシヤス第四シユドラス是なり。ブラフマンスは宗敎を司る僧侶の階級にしてクシヤットルヤスは政治を統ぶる帝王の階級、バイシヤスは商人の階級にしてシユドラスは階級の最下なりと爲らるゝ農夫の階級なりとす、是れマヌー法典に於て劃然規定せらるる所なり。而して佛敎典にては之と少しく相違するものあるを注意せざる可らず、第二のクシヤットルヤス階級を以て第一の階級と爲し、則ちブラフマンスの上に置く、ゴータマッシタルタァ其人はクシヤットルヤスより出でたるを以てにあらずとせんや。

何を以て印度に然かく四个の階級ありしぞ。オクスス今（アルダジヤム河畔）の北方に當りてブカラーと曰へる國ありたり、是れ後世アリヤン人種祖先の住めりし處と稱せらるゝもの。今より四千年前アリヤン種族に大異動あり西方に擴りたるは歐羅巴人種にして西南に出でたるはエラニヤン種族（これペルシヤ人の祖）、而して東南罽賓（カブール）國を經て先づ印度西北部パンジヤブに入りたるものは則ち印度アリヤン種族なりとす、印度人は北處を根據として四方に膨脹せしものといふ。パンジヤブとは所謂七河の事にして就中其大なるものはインドス河とす、印度の名稱も蓋し此河名に由來せしものなりとなり、印度の名は最初シンドスなりしが後ち

インドスと呼ぶに至りたり、而して印度の意味は大洋といふ事にして則ち廣く見ゆる河といふの意なり、天竺といふが如きも或は此意を誤り傳えられたるものにあらざるなき歟。爰に別に印度アリヤン人種を外にして既に以前に西北より入りたるドラビデヤンと稱せる人種あり、則ち土耳古、ハンガリヤ、フインランド、蒙古、滿州、我日本人種迄を含めるトラニヤン人種に屬す、印度アリヤン人は深く印度の內地に侵入すると共に件のドラビデヤン人種を伐ち其居城を奪ひ言ふ可らざる悲慘の境に彼等を陷れ、爰に印度アリヤン人種は戰勝者となりてドラビデヤン人種なるもの全く戰敗者とはなりたり、是に於て印度アリヤン人種に一の社會的階級を作し優なる者ブラフマンスとなりクシャツトルヤスとなり、下れるはバイシャスとなりて乃ちアリヤン人種の間に三階級を見るに及び、彼の戰敗者たるドラビデヤン種族はシュドラスと呼ばれて最も下級の底に沈み、殆ど一般よりしては我日本に於ける穢多よりも尙ほ甚しく蔑視せらるゝに至りたり。是れ四姓階級の由て來れる所以なりとす。

釋迦種族は果して如何なる人種に屬すべきや。ゴータマシッタルタアは英人佛人と同じくアリヤン人種なりとは今日迄世人の思惟する所なり、好し今日と雖も多數の學者概ね之に同するもの丶如しと雖も余は之に首肯し得ざるもの有り、爰に其所思を述べて敢て先輩諸子に敎を請はむとす。

抑も釋迦と曰へる語は能力ありといふを意味す、よく英語のエーブルに適合せる者の如し、即ち釋迦種族が勝れたる性質の種族なりしといふを推すを得べし。爰に古代印度に於て二者の人種ありたるを見る、曰くスウリヤバンサ、曰くチャンドラバンサ。スウリヤバンサは所謂日子にしてチャンドラバンサは月子とす、而して釋迦は此スウリヤバンサの系統に屬す、古來釋迦を以て俗間太陽の子なりと倣すもの豈故なからんや。今ま日子月子の詳細を知るを得ずと雖も、爰に印度の古代を記せるエピックポエムとも曰ふべきもの二つあり、則ち一はマハーブハーラタにして他はラアマーヤーナ是れなり、而してマハーブハーラタは月子の事を記しラアマアーヤーナには日子の事を記せしものなり、此ラアマアーヤーナに依りて多少日子族を想像する材料を得るものあるが如し。

世人は釋迦を以て錫蘭(セイロン)に生れたりと爲すは謬れり釋迦の祖先はヒマラヤに近きウード地方のカピラワストウ

と呼べる町に居城したるプロゼンスにてありたり。傳記に由れば其祖先たるマヌーヴァイヴァスヴァターより釋迦牟尼の子羅睺羅に至るまで百十五代を經居れりといふ、而してイクシュヴァクー（懿摩王）はマヌーヴァイヴァスヴァターの後なりとぞ。一說に由れば甘蔗氏釋迦種屬を從ひ都を遷し、乃ちウード地方に移りたるものと爲す、龍樹の佛所行讃經に偈となりて斯の如き事あり、

甘蔗之苗裔　釋迦無勝王　淨財德純備　故名曰淨飯

佛教を尊信せる人の著述なるを以て或は少しく形容に失するものあるべしと雖も亦た以て參考と爲すに足らん、且つ印度に於て釋迦種族の優强なるものありたるを知るに足るべし。

知らず此種族は果して是れアリアン種族なる歟、或は他に別なる種族にてはあらざる歟。

而して今日種々の說有り、釋迦種族は西藏若くは東方亞細亞より來れりと稱ふるもの有り、サミュル、ビール氏の如き則ち然り、併しながら氏が說は歷史的事實を缺くもの有るを以て直に之に同する能はず、或は希臘時代より歐羅巴に知らるゝ所のスキュティン種屬なりと爲すもの有り、ヘルマンケル氏の如き其人なり。謚しスキュティン種族に四種あり、サルマーテン・スコロテン・マツサゲーテン・サアケン、希臘のスタラボン氏はサアケンをサカイ或はサアカーと呼べり、而してサカイ種族なるものアラル海南方の平原より出でゝ印度に進み馬來半島にまで及び居れり。件のサカイ種族なるものこそ即はち釋迦族と同種なりと爲すものゝ如し、思ふに釋迦はサアカー、サカイと義を同ふす。或は然らずと爲るものありと雖もパリー語（佛典多く此語を以て記せらる、釋迦牟尼が說法に用ひたる語も同じく是なり、此時既にサンスクリットは古文辭となり居りしなり）に據れば同じく一樣の語をサーキ・サーカー・サアキゴと三个の異なる音を以て呼ばるゝを見ればサのシャに變化せるものありとするも別に異と爲すに足らず。

今ま暫く語原を探ぐるを止め眼を轉じて、支那の書は釋迦種族に就き如何なる事を記し居れりやを見ん。

漢の西域傳上八右に曰く、大月氏西君ニ大夏ニ而塞王南君ニ罽賓ニ塞種分散往々爲數國自疏勤以西北休循捐毒之屬皆故塞種也。而して爰に塞種といふに注目す可し。唐の顏師古塞種を解して曰く、即所謂釋種者也亦語有輕重耳と。熟々塞の古音を尋ぬるに彌沙塞はMahisasaka

にして烏婆塞は Upāsaka と爲す、塞のサカーと同音たるもの宜しく意を留む可し。

爰に當時の種族が變遷を見るに、今日稱する所の西藏の西南に塞種住めりし、大月氏匈奴に攻められ逃げて西方に來り、乃ち塞種を攻む、塞種亡びて南方若くは西南に移住す。玆に大月氏塞種を亡ぼせしと雖も更に烏孫の爲に攻められ、大夏に走りて之を征し乃ち國を爲したり、大夏は即ち今の亞富汗坦とす。大月氏なる者は如何なるものなりやを詳にせずと雖も、匈奴と同じくトラニヤン人種にはあらざる歟、或は之に近似せるものにあらざる歟。顏師古特に烏孫を擧げて、烏孫西域諸戎、其形最異、今之胡人、青眼赤須、狀類彌猴者、本其理也と爲すものあるを見れば、大月氏或は匈奴の青眼赤須にあらざりしを知るに足るものあらん、而して余は塞種を以て大月氏匈奴に類したらんを信ぜんとす。

余は敢て塞種を以てトラニヤンの一種族なりと斷言するものにあらずと雖、實に塞種のトラニヤン族ならざるかを疑ふて止まざるものなり、寧ろ塞種のアリアンと爲すよりもトラニヤンと爲すの理に於て便なるを覺ゆ、而して爰に塞種を以て釋迦種族なりと爲すことを忘る可らず。

長阿含に古傳説を載す、固より信ずるに足る可からずと雖も亦た以て參考となるものあらん、左に摘録すべし、蓋し西洋に於ては既に此書の飜譯あり多く學者の愛讀を受く。

乃往過去有王名懿摩、王有四子、一名面光、二名象食、三名路指、四名莊嚴、其主四子少有所犯、王擯出國、到雪山邊住直樹林中、其四子母及諸家屬、皆追念之、即共集議詣懿摩王所、白言當知我與四子別久、欲往看覩、王即告曰欲往隨意、時母眷屬聞王聽已即詣雪山至直樹林、到四子所、時諸母等各爲其婿、後懿摩王聞其四子生子端正、王即歡喜而發此言、此眞釋子能自存立、因此名釋名、在直樹林故名爲釋、懿摩王即釋種先也。

獨乙の學者クリスチヤン、ラスライン(生地諸威)は曰へり、釋迦は古代印度人及び波斯人に於ては正にトラニヤン人種を總稱する名なりと。クリスチヤン、ラスライン氏はゴータマヽシツタルタア即ち釋迦牟尼を以てトラニヤン人種とは爲せしなり。

日本人種は雜種なり、最後の移住は西南の方面よりにてありたり、其前にはトラニヤン人種に屬するもの西

北より多數入り來りしは拒む可らざる事實なり、若し釋迦種族をしてトラニヤン種屬なりとせば、則ち釋迦は日本人種と屬を同ふするものなり。今日に於て能く之を確言するを得ずと雖、余が思ふ所を以てアリアン族なりとする普通説に優れるもの有らば、正に余輩日本人たるもの印度の大聖人に對して大に面目を改むべきものあらむ歟。

彙報

◎日本ゆにてりあん協會

ユニテリアン第一協會の狀況に就ては屢ば本誌に報道せし所なるが近時に至りて其の發達殊に著しく日曜日の演説會には來會者常に百五十名を下らず入會の申込も續々之れあるよし從來該協會は主として會長として佐治氏幹事として神田氏の斡旋に係り今日の盛况を致したるは專ら二氏の協力勤勉に依るもの也聞く所によれば今般二氏の發議に依り組織及規則上に非常の改革を施し大に其事業を擴張して廣く天下同志の士を糾合せんとの計畫完く整ひ、規則は佐治會長躬ら起草の勞を採られ神田氏等の熟議を經て更らに七月廿六日會員總會議に附せしが文句上二三の修正ありしと雖も大躰の點に於ては大賛成を以て通過し茲に新規則完成せり元より今回の改革は根本的のものなれば其の規則に於て非常の變更ありたりと雖も先つ其の中の主要なる點を擧ぐれば會名を變更して日本ゆにてりあん協會となせし事及び社會慈善事業を獎勵する事等あり、又た役員としては佐治實然氏は會長に神田佐一郎氏は幹事に原權四郎氏は會計に當撰せられ常置議員としては小松、立花、青柳、小南、竹內、田中の六氏當撰せられたり規則の改良と云ひ熱心なる役員諸氏の當撰と云ひ皆な以て其將來の隆盛を卜するに餘りあり。

◎佛教員夏期講習會

第四回講習會は七月八日より相州三浦郡三崎町に開かれ同地圓照寺を事務所に光念寺を講堂に大乘眞福聖福淨證寺等を寄宿舍に宛て日々講筵を開き來りしが出席會員の數百餘名講師には大內青巒、釋宗演、村上專精、釋興然の諸氏出席二十一日閉會せりと云ふ

◎基督教員夏期學校

第七回基督教夏期學校は七月四日より京都同志社に於て開かれ、小崎弘道氏校長たり。講師は増野悦興、淺

田榮治、森田久萬人、藤生金六、浮田和民、大島正健、湯淺吉郎、海老名彈正、宮川經輝、岸本能武太、阿部磯雄、大西祝、小野英次郎、アルブレクト等の諸氏にして、生徒の總數二百八十名を越え、極めて盛會なりし。明年の校長を本多庸一氏、副校長を押川方義氏と定め、十五日閉校の式を行へりと云ふ。

◎神道管長の奔走

神道各派の管長諸氏は臺灣島へ各派の事務所を設け各教職を派遣し同島へ我國教を弘通せしめんとて目下夫々奔走中なりと云ふ

◎眞宗大谷派本願寺の紛議

眞宗大谷派本願寺にては近頃將に一大波瀾を引起さんとすといふ今由來を尋ぬるに往年同派の執事に石川舜臺師なる人あり深く佛教の不振を慨き是れ全く僧侶の無學に原因せりとて即ち大教校を起して大に教育を盛んにし普通學を基礎として傍ら西洋哲學を研究せしめ然る後眞宗の佛義を修めしむることゝなせしかば果して人物續々として輩出し遂には南條文雄、笠原研壽、井上圓了、德永滿之の諸氏を出すの有樣とはなりぬ斯くの如く一方に於て教育の目的を以て始めたるの事業は頗る好結果を得たるにも係はらず一方に於て宗門大に衰微し負債は愈々多く堂宇は破壞し僧侶の取締綏漫にして統一行はれざるの有樣となりけるゆゑ心あるものは窃かに心痛し居る折柄渥美契縁師代て執事の職に就くや先づ宗内の改革を斷行し法主の權力を强盛にし負債を返却し堂宇を新築する等の事に專ら力を用ひ着々功を奏すると共に教育の如きも力を用ひ先づ教校を分て二部となし第一部は專ら佛教の教義を究めしめ第二部は普通學を教授し効績益々見るべきものありしも宗內の所謂固陋派は却て之れを喜ばざりしと然るに玆に不思議なるは執事渥美師にして師は斯くまでの改革を斷行したるにも係はらず今や又大山門の新築抔を企て居ると共に從前の方針を更めて全く固陋派に組し曩に設けたる第二部の普通學派を全廢せんとて先づ講師中の硬直家を以て目せられたる澤柳政太郎氏を解職し南條文雄、德永滿之、井上豐忠、稻葉昌丸、今川覺神、柳祐信、清川圓誠氏の如きも漸次閑職に移す等獨斷の擧動を始めたるゆゑ折角盛んならんとせし同派の教育も玆に一頓挫して却て退歩せんとするの狀況に立至りしかば東京に在る同派の有志及び帝國大學、第一高等學校、慶應義塾、專門學校等に在學せる青年の僧侶信者一大團結して京都の同派に向て一大抗議を加ふる事

に決したりといふ曹洞宗の紛擾漸く止んで今又此紛擾を見んとす宗教界も又多事なるかな

◎東本願寺新門主の婚儀

京都東本願寺新法主大谷光演師は七月六日三條章子と結婚の式を擧げたり今其儀式の模樣は同日午後三時三條家の御假宅と定めたる別莊枳殼邸内燕申堂より馬車三輛にて兄君公美公、母堂治子の方及び章子を始め媒妁人なる岩倉公爵の代理同家々扶岩崎茂元氏及び隨行の侍婢等と共に同寺臺所口より玄關へ着し此處にて婚儀掛(男女)の出迎へを受けて黑書院に入り暫時休憩夫より阿彌陀大師兩堂の禮拜終りて再び黑書院に入り花の間に於て結婚の式を行ひ終はんぬ

◎日蓮宗の朝鮮布教

日蓮宗は朝鮮國民を濟度せんとて一方ならず力を盡し去年は脇田堯貫師等を派し今年二月には管長代理として佐野前勵師等を派したるに世間にて兎や角言觸らすものあれど孰れも狡兒の揑造にて同宗が去年來盡力せる成蹟は大抵左の數ヶ條なりといふ

一僧侶入城の禁を解きたり朝鮮現王室の祖李成珪が開國の初め僧徒と快からず且つ僧徒の強盛專橫を憎みて大に之を懲罰し竟に僧の京城に入るとを嚴禁したり日蓮宗は之を以て彼の國佛教の衰退、人理の不振なる原因と爲し本年四月佐野氏より此の禁を解かんとを韓廷へ建白したるに幸ひに韓廷は之を聞屆けたり依て佐野氏は各道の僧徒五百餘名を宮闕の別殿に會して祝禱會を執行し賓牘を韓王へ奉呈したり

一經傳及び香爐を韓王へ献納せり世間にては此の香爐を黃金と稱して献納したれど鍍金なりなど非難する者あれど勿論黃金にもあらねば黃金として献納せしともなし之に對して韓王よりは敬感の餘り宣旨及び細籐四掛、別造火爐一坐、彩簾三、虎皮一枚を下賜相成つたり

一朝鮮京城に一寺を建立し朝鮮人を濟度せんとし其の建築費五千圓を支出するとに此の頃の會議にて決定したり

一朝鮮より十五人の少童を伴ひ來り靜岡縣に於て敎育せんとて其の費用毎年一千圓とし先づ日本語普通敎育を敎授し後に宗法を敎誨せんとて今實行中なり

◎名和海淵氏の歸朝

今春京都本願寺より南征從軍布敎使として比志島混成枝隊に從ひ澎湖島に赴きたる特派使四名の内三氏は上陸の後ち間もなく虎病に罹りて死亡し獨り名和淵海氏

のみ生存したりしが爾來氏は同島に在りて千二百餘名の戰死病沒者の葬儀を施行し且つ遺骨並に遺物は夫々其筋の手を經て送還することゝなし法名を記したる過去帳を携へ今回歸朝したりといふ

◎米國傳道會社の特派員

日本組合教會に關係ある米國アメリカン、ボード傳道局にては本邦傳道上の實况を視察せんがため且つ將來に於ける傳道の方針又は組合教會との關係上に付協議する所あらんが爲に三名の委員を特派することゝなり多分來る八月下旬には來航さるべしとの事なり右三名の内二名は同局理事博士バルトン氏、常議員の一人なるボストン府實業家エリソン氏と確定し他の一名はエール大學校教授博士フイシヨル氏又はミシガン大學校長即ち前清國駐劄公使たりしエンヂエル氏兩名の中ならんと云ふ又組合教會よりは右に對する應接委員として小崎弘道、原田助、安部磯雄の三氏撰擧され傳道會社長長田時行、常議員長宮川經輝の兩氏は職務上委員を補助さるべしとなり

◎以太利の新教會

以太利人殊に學識ある者が次第に羅馬教會を去り其多分の者は全く宗教を放擲するの傾きある事は人の知る處なるが數年來同國の重もなる首府に於て新教の教會を新設し大に福音の傳道を試みたるに結果は孰も好况を呈し各地とも愈其必要を感ずる事切なりと同傳道事業は多く米國人の手になれるものにて以太利福音教會補助會社と稱す其第六年會は去る五月九日ブルツクリン府に於て開かれ演說報告等ありしと云ふ

◎暹羅國王佛典を贈る

暹羅國々王チユラレコルン第一世陛下は其治世二十五年紀の紀念として「パーリー」語の佛典を暹羅語にて編纂出版せる者數十卷を取揃へ今回我外務大臣の手を經て淨土宗本山宛にて寄贈し來りたる由なり

◎大谷光尊師病院見舞

法主光尊師は去三日島地默雷藤島了穩氏を從かへて半藏門前の陸軍豫備病院を訪ひ院長松島一等軍醫正の案内にて各病室を巡り慇懃の慰問を爲して金百圓を贈與せしが翌四日には又澁谷の第三分院を慰問し立山院長の案内にて各病室を見舞たりと云ふ

◎朝鮮の佛教

是は朝鮮八道を跋涉して宗教的探撿をなしたる高田栖岸師が調査したる者なりとぞ

◎宗旨　朝鮮の佛教は凡て十宗あり即ち曹洞宗、淨土

宗、圓覺宗、法華宗、地論宗、華嚴宗、金剛宗、唯摩宗、榜嚴宗、臨濟宗とす

◎派別　碧波教派、太古派、僧門派、臨濟派、曹洞派、大國派等の七派にして此の大國派と稱するものは何の宗派に限らず清國に入り法服を授かりし者は皆大國派と自稱す

◎本山　本山三個寺ありて佛、法、僧各其本山を異にす佛の本山は全羅道全州松廣寺にして此寺に丈け三十尺に餘る彌陀、觀音、勢至、三尊の端坐佛あり是を朝鮮の大佛と云ふ法の本山は慶尙道挾川海印寺にして此寺には横三十間に縱十二間の經論律大藏經版の寶藏二字あり壯觀實に驚く可し僧の本山は慶尙道梁山の通度寺にして此寺には釋迦の遺骨舍利を納むる寶塔あり僧も千人許ありて寺も宏大なり但し本山と稱するも唯名稱のみにして一般寺院に向て本末の關係を有するものにあらず一寺一本寺の制と云ふべし

◎僧侶の階級　僧侶の階級を三等に分ち參禪、看經念佛諸佛供養とし諸佛供養は尤も下等にして經理を解せず文字を知らず經を讀むも音誦のみなり其の業とする所は農工商にして朝夕は禮拜供養して冥福を祈る尼僧も亦諸佛供養僧にして經理を學ぶなく洗濯紡績等を常職とす

◎布教　看經念佛最も如法に勤むると雖も自利の修行にして一般他を敎化して益を與るの精神なく所謂聲聞根性と云ふべし

◎目的　或人曰く古の韓僧は道を好んで僧となり今の韓僧は供養を求めん爲めに僧となる

◎寺數　京畿三十八管四百八十個寺忠淸五十四管大寺百十二小寺三百慶尙七十一管百十個寺全羅道五十六管三百個寺江原二十三管二百個寺黃海二十三管二百個寺平安四十二管百三十個寺咸鏡二十三管三百〇六個寺合計二千三百三個寺なり

◎柴田禮一氏の歸京

神道家中の改進家を以て目せらるゝ實行敎管長柴田禮一氏は淸韓の野に出征せる我軍隊の吊祭慰問と其道の布敎等を兼ねて去月下旬廣島に赴き直ちに遼東に渡航せんとせしも當時征討總督府將に出發せんとせる折柄其混雜の爲め渡航の意を果さず心ならずも先づ朝鮮に押渡り守備軍隊の慰問と分局設置（京城）の運動とに奔走する旁ら同地の情況を視察しつゝある中媾和談判は平和に終局して遼東半島は還附することに爲りたれば今は滿淸の野に入るも詮なしとて歸朝の途に上り歸途九州地方に布敎傳道して幾多の信徒を得たる末廣島を經て一昨四日東京に歸着せしが同日は其部下信徒の之を歡迎する者頗る多かりしと云ふ

社說

佛教に所謂『諸法無我』を論ず

佛教に三法印と稱するものあり、一に曰く諸行無常、二に曰く諸法無我、三に曰く涅槃寂靜是なり。抑も此三法印と稱ふるものは、昔時印度に於て、佛說と世間說とを分判する印證となされしものにて、古來佛教の教義中極めて重要なる眞理たりき。今茲に論ぜんとするは即ち此三大眞理の一たる諸法無我の說なり。諸法無我とは如何なる意か、曰く、諸法とは一切の萬有と云ふ義にして、全宇宙實我と稱すべきもの決してあることなしと我境を拒否して無我の眞理を表はすにあり。これ世間一般に我てふもの實在すると思ひ、固く之に執着すれども、其實斯るもの存するにあらず、たゞ迷見妄情たるのみと說きて人我實有の見を破るものなり。然るに此說は宗教上の主義として幾何の價値を有するものなるか、又社會進步の上に及ぼす感勢如何、これ吾人が本論に於て考察せんとする所なり。

人各々「我」てふ觀念を有す。然るに果してこの觀念に對する實躰、即ち眞實の我存在するものなるか。或は實際その如き本躰存するにあらずして、この觀念たるや種々の觀念より抽象的に出でたる概念なるか。或はこの觀念は單に凡俗の迷見妄情より生ずる一の幻想たるに過ぎざるか。之に對する學者の說未だ以て一樣といふべからず。古來一種の論者あり、靈魂論者と稱せらる。その說く所によれば、我てふものは、靈魂と稱する實躰にして、全く形骸と別立し、一切の精神活動の主宰たるものとなす。また之れに反する學者あり。伴生學派（アツソシエシヨナリスト）及び唯物論者の如き是なり。即ち伴生學派の說によれば、精神現象の原素たる實在は個々の感覺なるを以て、我てふ觀念も畢竟種々の感覺の結合たるに過ぎず、決して別に我てふ實躰存するにあらずとなす。唯物論者に至りては尙ほ一步進みて、此等の感

覺を以て悉く物質原素の作用に歸し、靈魂と云ふも、我と云ふも物質の外、別に實體あるにあらずとなすなり。然るに佛敎の説く所固より唯物論と同一なるにあらず、また件生學派と同説なるにもあらずと雖ども、小乘に於て敎ゆる所の無我説の如きは大に此等の學派と趣を同ふする觀あり。即ち、その説たるや、「人は地、水、火、風の四大と受、想、行、識の四蘊との和合によりて、暫く實在の如く現はるゝものなれども、その實、永住なるにあらず、若し一たび此等の因縁離散するときは、忽ちもとの四大四蘊に歸るべきものにして、決して別に我てふ實體存するに非ず。されど、凡夫は迷見妄情の爲めに此因縁を悟る能はざるを以て、實我あるものゝやう思ひ、種々の慾情を生じ、罪業を造りて苦界に迷ふ。故に身はこれ色心和合の相にして、諸法無我なることを觀ずるを以て究局の悟道となす」にあり。これ因縁和合によりて人の生活を説かんとするものにして純然たる無我論なり。

小乘にありては、客觀的に考察して諸法無我の理を説くものなりと雖ども、大乘に於ては主觀的に推窮して諸法無我を悟るものなり。大乘の初門たる、法相宗に於ては唯識主義を採りて、小乘にありて實有と説く所の四大四蘊も畢竟假有實無、一切の萬法悉く識の所變ならざるはなしと論ずるなり。然るに本宗の旨義たるや、森羅萬象唯識所變と説き、三界唯一心心外無別法と立てゝ心識外の諸境を空するものなれども、心識そのものを破るにあらざるを以て、一たび之を聞けば、恰かも我の實有を許すが如く思はれざるにあらず。されど、玆に注意すべきは心識と我とは決して同一なるにあらざることなり、即ちこの意味の我とは個々差別の實在にして、法相宗に所謂、識或は心とは宇宙の萬象を包括する絶對無差別の體となす。故に心と云ひ、識と云ふも通常吾人が「我が心」、「我が識」など云ふ塲合とは全然相異するものにて、萬象の實體たるこの心、この識に對しては、彼我の差別あることなく、一切平等たるなり。畢竟するに我も人も悉くこの絶對心の上に現ずる一波たるに過ぎず。さればこの絶對の識を離

れて我あることなく、平等の心の外に我なきこと固より云はずして明かならん。

次に三論宗の說く所によれば、倚ほ進みて能變の識、能現の心をも悉く空となし、一切法無不是空者と云ひ、凡所有相皆是虛妄と立てゝ以て一切の諸法悉く虛、一としてその實躰あるに非ず、有と思ふはこれ迷情のみ、妄念のみとなすにあり。これ物も心も全宇宙を擧て悉く虛無の中に投ずるものにして、その諸法無我たるや極めて明白、毫も我執を起す憂はなかるべし。

然るに三論宗の皆空說の如きは未だ以て大乘の極致に達せるものとは云ふべからず。その奧に倚ほ眞如緣起の說あり、圓融相即の理あり、一念三千の法あり、以て大乘甚深の實理を敎ふ。而して華嚴、天台等大乘至敎の說く所に隨へば、一切の衆生妄心あるを以て、念々分別して眞實に相應せざるが故に、說て一切皆空となすと雖ども、若し妄心妄念を離るれば決して空すべきなく、常恒不變なる眞心の存するありて本來無漏性功德を具足す。これ不生不滅平等無差別の眞如にして萬象の實躰、本源なりと云ふ。又た一切有情皆有本覺眞心、無始已來常住淸淨、昭々不昧、了々常知、亦名佛性、亦名如來藏と說きて、萬法の實相を立つるのみならず一切衆生悉く佛性を有すとなすなり。之によりてみれば、大乘の極に達すれば、一見恰かも實我の存することを許すもの丶如く思はれざるにあらず。果して然らば大乘實敎に於ては諸法無我の思想なきか。曰く決して之なきにあらず。涅槃の大我など云ふことあるも斯の如きは既に無我中の我にして、個々差別の我とは全然異なるものなるべし。抑も一切衆生に悉く佛性ありと云ひ、本覺の眞心ありと云ひ、如來の智慧を具ふと云ふは、これ正しく各人に實我の存するを示すものにはなきやと問ふに、その實、之とは大に趣を異にするものにて、眞心と云ひ、佛性と云ひ、如來藏と云ふ一として絕對平等の眞如を離れて存するにあらざるのみか、之れ即ち眞如たるなり。衆生是眞如にして眞如是衆生たり。華嚴に於て理事融通無礙の妙理を說きて眞如是萬法、萬法是眞如と云へる如き、又倚ほ進

て眞如と萬法と同一なるのみならず、事々無礙の關係を說きて法界の事々物々互に融即無礙たることを敎ふるが如き、又天台に於て一念三千の妙法を立てゝ我等が一念の心に本來三千の法を具すと云へるが如き、皆な以て萬法一如平等無差別の理を現はすものにあらずして何ぞや。されば大乘の所說に於て時に或は實我の在を許す如く見え、殆ど靈魂說と同種のものゝ如く思はるゝ所なきにあらずと雖ども、その實彼れと此れとは大に趣を異にせるものなり。即ち大乘佛敎の深意は離言絕慮なる眞如の妙理に存するものにして、純理哲學的無我觀と云ふべきなり。

以上略述する所を以て大過なからしめば、その小乘たると大乘たるとを問はず、佛敎の所說は悉く無我說にて、各人が有する彼我の差別は畢竟假相上の見たるに過ぎざることを敎ふ。若し天台に云ふが如く、五時の順序を追ひ、小乘より大乘始敎に入り、大乘始敎より大乘終敎に進みて、その無我說の發達を味はゞ、漸次その旨義の深遠に趣けることを知らん。而して此說たるや、靈魂說の如き平々凡々たる俗見にあらずして、實に哲學上の卓說と云ふべきなり。是を以て若し之を純理上より批評せば決して少からぬ價値を有する思想たるに相違なし。即ち、之を純理哲學上の思想として見るときは、極めて興味あるものなり。充分の論理的價値を有するものなり吾人も亦純理的方面に於ては佛敎の如く實我の不可得なることを信じ、諸法無我說に同意するものなり。單に之を人生の說明たるのみに止め、純理的のものとのみ認めおかんか、近今の思想界より見れば此說固より至當にして毫も怪むべきにあらずと雖も、若し此說を在りの儘に宗敎、倫理の上に應用し來り、人類の我執を破して無我の境界に到らしめんとするに於ては、吾人は到底之に同意する能はざるのみならず、力を極めて之を排擊せざるべからず。然るに佛敎は單に哲學たるにあらずして宗敎。この無我觀を主張するや、たゞ純理として之を說くにあらずして、實際之を人生に應用せん爲めに主張しつゝあるものなり。若し假りに人類を以て冷淡無味の死物となし、

社會の進步、文化の發達を以て煩惱界の一夢に過ぎずと諦むべきものなりとせば、佛教の所說、或は宗教、倫理として相應の價値あるべけども、之に反して人類は社會の進步、文化の發達を以て目的となすべきものとせば、佛教の無我觀は極めて有害たらずんばあらず。故に吾人は純理として之を許すも、宗教上、倫理上の主義としては勉めて之を排斥せざるを得ず。何を以て然か云ふか、乞ふ之を論ぜしめよ。

夫れ吾人の有する我の觀念たるや、純理上よりみれば、假有實無、所謂無躰隨情の我にして、たゞ迷情に隨ひ妄念によりて有なるが如く見ゆるに過ぎずとするも、倫理上より之を見るときは、この幻想妄見は極めて重要なる觀念なり。實際の生活にとりては大乘に言ふが如き、純理的我はあるもなきも左程關係する所にあらず、反てこの迷情的、妄想的の我即ち何となく存するやう思はるゝ我が最重要の位置を占むる者とす。凡そ社會の進步と云ふも、文化の發達と云ふも、畢竟我執妄見の强きより起る現象にして、若し人みな佛智見を開き諸法の妙理を悟り、毫も世界の事物に執着する事なきに至らんか、社會の文化は望むべからざるのみならず、人界の存在は忽ち絕するに至るべし。そは社會の生存と云ひ、文化の增進と云ふ悉く人類が我が生命を維持し、我が權利を擴張し、我發達を遂げんとするより起る活動の結果たればなり。之を換言せば、人類が迷情妄念の我に執着し、益々その範圍を擴張せんとして、種々の煩惱を盛んにするものに外ならず。長壽健康の欲望、財產名譽の欲望、國權擴張の慾望等是みな所謂煩惱にあらずして何ぞや。若し夫れ將來社會の進步、文化の發達を計らんとするに於ては、大に國民の活動を盛んならしめざるべからず、而して國民の活動を盛んにせんとするには各人の腦中に我てふ觀念を益々强大ならしめ、萬人一樣に我が力量を表はし我が發達を計らんとする活氣をもやさゞるを得ず。熟々我國民の性情を考察するに、之を歐米人に比較すれば、我てふ觀念の力尙ほ著しく弱きが如し。歐米人が智力及財力の競爭場裏に立て、一方に於ては益々己れの權利

を擴張すると同時に、他方に於ては己れの責任を重んじ、能くその義務を全ふする氣質を有するが如きは重に我てふ觀念の發達によるものたるや蓋し疑ふべからず。將來我が帝國が世界の列國と相並びて、國權を張り國產を增し以て益々文化の度を高めんとするには、須く其原素たる一個人をして各々我てふ觀念を圓滿に發達せしめ、固く之に執着せしむべきなり。

斯の如く人各々我てふ觀念に執着して、其範圍を擴張せんとするは、個人發達の上より見るも、また社會發達の上より見るも、極めて重要なる動機たるにより、教育若くは宗教の力を以て大にこれが發達を計らざるべからず。之れ社會進步の必要上より起る問題にして實我の存すると否とは毫も茲に問ふ所にあらさるなり。若し夫れ社會は單に純理のみのものとすれば、人々哲學的説明のみを以て滿足すべけれども、決してその如き單純なるものにあらずして、種々の慾望を有する極めて複雜なるものなれば、一部の理性的滿足の爲めに全躰の進步を害せざるやうなすを要す。然るに佛教の無我主義の如きは我見、我執を以て諸惡の根本となし勉めて之を破棄せんことを勉むるものたれば、實行上に於て大に社會の必要と衝突する所あり。吾人固より自然界の説明として純理上諸法無我を説くは同意する點なれども、本來我の實躰なきが故に、彼我の差別をなし之に執すべからずと斷ずるに至りては倫理學上容易に許すべからざる説なりと信ず。これ「斯くある」てふことゝ「斯くある可き」てふことゝを混じたるものにして、即ち、天則と人則との別を明にせざる思想と云ふべし。事實上にては諸法無我なればとて、既に各人の心に具はれる我てふ觀念を倫理上に於て滅す可きものとなす必要は萬あるべからず。佛教が諸法無我の倫理を説くは唯理に偏して、實際に遠かりたる一弊と云ふべきなり。これ明かに人類生存の原理、社會進步の動機と衝突するものに非ずして何ぞや。

然るに以上の所説に反對して「佛教に於て無我主義を主張するは人々自尊自大己れが權利を擅にして强欲非道に陷る弊害を防ぎ、虚心平意己を忘れて他を愛する

德を進めんが爲めなり、夫れ人の性情として自ら自利自欲に流れ易きものなるに、若し我情を抑ゆることなく、反て之を發達せしめばその結果如何ぞや」と云ふものあらん。此言一應理あるが如く聞ゆべしと雖ども、再思すればこれ何の價値もなき空言たらん。そは自利に流れて他を害すべからずとか、己れを忘れて他を利すべしとか云ふに至りては決して無我主義に止まりおるにあらず、何時しか無我主義の範圍を脱して、實我主義を取れるものなり。若し諸法無我とすれば、他人もまた無我なるに相違なし、何ぞ己れ（實は無き）を忘れて無我なる他人を愛する必要あらんや。又人は本來自利に走り强欲非道に陷り易き性質のものなれば、若し尙ほ我の觀念を發表せしむるときは、その極恐るべき結果を生ずるに非ずやとの憂なきに非ずと雖ども、斯の如きは甚だ不完全なる病的發達にして未だ以て我の圓滿なる發達とは思ふべからず。彼の無慈悲、殘忍等の如きは我てふ觀念の未だ極めて幼稚なるより起るものにして、若し之を圓滿に發達せしむるに於ては決して斯る悪心の生ずることなかるべし。思ふに我てふ觀念の高等ならざる人間にありては、自ら重じ自ら愼み自ら進む如きことなきを以て到底有用有德の人物たること能はざるなり。畢竟するに我てふ觀念は吾人が精神活動の中心となり、君主となりて一切の欲望を整理し、統一するものにして、若しその發達圓滿なるときは、空間的には全世界の廣きに涉り、時間的には數百年の未來に達するに至らん。斯る人にありては自愼、自重の念益々厚く、決して一言一行も忽にせざるべし。即ち、我の發達は其人の行爲に秩序を與ふる源にして、その度の高きに從ひ、その言行をして益々有德たらしむ。我の觀念は道德に害あるものとなし、之を壓抑せんとする如きは古代の謬見にして、之れ反て德性の修養を害するものたるや明かならん。されば不德を以て我てふ觀念の强き結果と誤認し、將來我邦の道德界に於ては大に我執の情を養はざるべからずとする吾人の意見に反對する如きは決して取るに足らざるものなること知るべきなり。

茲に以上論じ來りし議論の要點を明かにし以て本論を結ばんとす。心理的若くは純正哲學的に考察するときは我てふ實躰は畢竟不可得にして、佛敎に說くが如く諸法無我なるに相違なし。然りと雖ども、人類普通の常識によれば、何となく我てふ常住不變の實躰ありて一切の思想、感情等を支配するものゝやう思はるゝなり。而して吾人は常に此我てふ心識を中心として一切の行爲をなすものとす。即はち、我の存在とか、我の發達とか、我の義務とか云ふ如き觀念に動かされて働くものと云ふべし。若し此心念を取り去らんか、人の人たる意義は全く消失するのみならず、實際人類社會の生存、發達てふことは全然滅するに至らん。されば其の實は無けれども何となく有るらしく思はるゝ假有實無の我、即ち佛敎に所謂無躰隨情の我は、倫理的に見るときは、極めて重要なる現象なるにあらずや。之を圓滿に發達せしめ、その活動をして益々盛んならしめんとするは文明的敎育の要とする所なり。然るに佛敎の無我主義は全く此主義と反對なるものにして、我見、我執を排斥し、以て人類の積極的活動をして益々弱らしむるもの、その進歩を絕し、生存の範圍を漸々縮少するものたるに外ならず。畢竟佛敎に於ては人生てふものを迷と觀ずるより、斯の如き倫理主義を生ずるものなれども、本來獨り形而上的迷霧中にさまよひて差別界を妄想と見、人生を迷情に過ぎずとなす如きは極めて有害無益なる世界觀と謂はざるべからず。されど詩歌的に斯る世界觀を有するのみならば、尙ほ可なり、之を其まゝ道德主義となし以て實際に應用せんとするに至りては決して恕すべからざるなり。倫理主義としての無我說は極めて有害の思想たるを以て全然之を變ぜざるべからず。若し然らずんば到底一種の厭世敎たるを免れざるなり。近來佛敎革新の聲四方に起る。その所謂革新は如何なるものか、吾人未だ之を知らずと雖ども革新者此に注意せずして豈に可ならんや。

神道實行教

管長　柴田禮一

近時漸く宗教が志士論客の筆舌に上り來り、社會の大勢亦た漸く思想界の潮流を激し來らむとす、此時に當りて身を宗教界に置くもの、意を思想界に留むるもの、其の究むる所、見るところを以て、深遠幽玄なる眞理の光明を仰がんとする、また喜ぶべきの現象ならずや、」予は素と筆舌に長ぜず、言辭を好まず、我教の本旨亦た反つて此にあらず、躬行實踐、所謂不言教なるもの、以て布教し教導す、外宗教家の本分及び目的、また必らず言ふにあらずして行ふにあらむを信ず、而して予が今茲に言説せんとするものは、記者が懇切なる請に應じて、唯だ我教の要義に予が多年の宿志を附記して、以て聊か其責を塞がんとするなり、

我神道とは其字義よりいへば、神の道、即ち帝國の祖神より傳はりて、吾人の擧て履み行ふべきの道なり、此道や、我歷史に基き、地理人情に依りて、古來傳承したるものにして、萬世一系の帝室及び國體と共に、其源を同くし、之れと共に永久離るべからざるものなり、謹で按ずるに世界の初、神祇ありて天地萬物を生じ玉ふ、殊に伊邪那岐、伊邪那美の男女兩神、此下土に天降り玉ひ、其地を修理固成して、國土を經營し、諸神を生じ玉ふ、中に就きて天照太神は、英靈圓滿の神にましませば、天上高天原を知ろしめされたり、天照太神は其皇孫邇々藝命に、親ら八尺勾璁、八咫鏡、及草那藝劒の三種の神寶を授けて詔はく「豐葦原瑞穗國は吾子孫の王たるべき地なり、寶祚の隆まさむこと天壤のひた無窮」と祝し玉ひ、又天兒屋根命、天布刀玉命等を副へ侍らせて、天降し玉ひ、其主となし玉ふ、是則ち皇統連綿として相紹續き、君臣の分一定して離るべからざる所以なり、邇々藝命の皇孫神武天皇、國内平定の後、首として皇祖天神を祭りて大孝を申へ玉ひ、歷朝皆祭祀を重して政治を敷き玉ふ、臣民も亦た此意を躰し、敬神尊王を以て本務と爲せり、應神天皇の時儒教始めて傳はり、欽明天皇の朝佛教初て世基督教漸く傳はると雖も、國民は曾て神道

義に違ふものなし、然して祭神の儀式等は、上古の制に則り、就中天祖傳來の三種の神寶中、勾璁は宮中に齋き奉り、神鏡は伊勢太神宮の神靈と仰き、神劍は尾張國熱田神社に齋き祀れり、天皇親ら宮中に於て天神地祇を拜し、及ひ歴代の皇靈を祭り玉ひ、各地に數所の官幣社ありて、全國之を祭り、其下に國幣社ありて、一國之を祭り、其下に郷社産土神社ありて、郡村之を祭る、然して其神として齋き奉るものは、則ち皇祖、皇宗以下、國家に勳勞ある忠臣、賢相、若くは武將、及ひ一地方に功績ある、義士偉人等にして、皆吾人の祖先として仰く所なり、其子孫たる者は、諸神社の氏子として、最寄の郷社産土神社に詣で、併せて他の諸神社を祭る、其祭日には職業を休み、同郷者は相協力して祭儀を營み、國家の安全を祈る、此神道は實に我國特有の美風にして皇室の尊嚴、臣民の忠實、國家長久の根本たり、

我國家皇室に連帶せる神道の大義は、上に述ふるか如く國民的道義なり、所謂宗敎心なるもの、或は歸依心なるものにあらずして、國家君主に對するの道義として、將たまた祖先に對するの道義として、遵奉せさる可からざるもの、即ち奉公、盡忠、致孝の大道こそ、我が唯一の神道なれ、

次に予が實行敎とは、其敎名已に示すが如く、虚文虚飾を去り、空理空論に走らず、專ら實行を旨とし、其説く所簡易にして、諸人に理解し易く、人の人たるべき道を實行するを敎ふる一新派にして、時に應じ、世に随て漸次、改良し來れるものなり。我敎の奉する神は多神なりといふ可からす、古事記及日本記等に傳はる、天地生發の初に、單獨の眞神あり、天御中主神と申す、此神は天地萬物を生み出し、則ち之を主宰するの神にして、天地に先ちて存し、終る所なく、此一眞神の大元靈發動して、男女の徳性を備へたる二神に別れ玉ふ、之を高皇産靈神、神皇産靈神と申す、此二神は一眞神天御中主神の用に外ならすして又一神に歸するものなり、之を造化の三神と名づけ、我敎は單に元の父母と稱し奉れり、(三神造化説別にあり)道祖が願行の結果、豁然として大悟するや、靈夢神告に感し、天神の所在を富岳となし、富岳を以て地球の腦髓と認め、

然して人類は此の眞神の分魂（わけみたま）を得て生れ出つるものにして、眞神最愛の子なるを信し、所謂神隨（かむながら）とて、眞神の規定の儘にし、玲瓏たる富岳に則とり、身を修め心を潔くし、又此山の形容四面同一なるか如く、何事も表裏なからむを期す、我教の重んする所は來世にあらすして現世の實行にあり、我信徒は先つ皇統の無窮を禱り、次に國民の安寧を祈り、德は孝を以て本とし、躬行は分を守り、業務を勵み、奉教の自他を問はす、讎に酬ゆるに猶ほ恩を以てし、一致協力、努めて諸般の公益を謀り、以て神恩國恩に報せんとするの外、他念あらさるなり、

予は序を以て玆に予か教派の傳統を概述すへし、道祖を長谷川角行雲神と稱す、紀元二千二百〇一年肥前國長崎に生る、應仁以降天下は麻の亂るゝ如く、所謂戰國時代にして、天變地妖あり、饑饉病癘ありて、生民塗炭に苦しむの時に當り、道祖は西陲の地に生れ、深く之を慨き、年十八、初めて家を出て、偏ねく天下の靈場を巡拜し、其の富士山に臻るや、或は麓の人穴に入り或は絶頂に登りて祈願し、終に神の感應に因て、該山は眞神の所在なるを大悟し、一新教派を開きて海内に布教し、天壽百六歲、人穴の中に於て神逝しぬ、其の教義を傳ふるもの十代に至り、大に中興の業をなせり、之れ則ち予か父柴田花守翁なり、家翁は紀元二千四百六十九年を以て、肥前國小城に生れ、恰も道祖と同しく、十八歲にして此教を聽き、其師三志翁に隨從して天下を周遊し、學ふ所神儒佛の三道を兼ぬ、偶々明治維新の時に遭遇するや、其齡既に六旬なるも、東奔西走、以て斯道の擴恢に最め、傍ら書籍を著はして微妙の教旨を明にし、以て今日に適應すへき一新教となすに至りぬ、其教名の不二教といふを改めて、實行教となせる、亦た其の實を取れるにありき、享年八十二にして天壽を完ふし、予は其跡を嗣ける者なり、

以上を我教の教旨並に開創以來の概畧なりとす、而して予は最後に、予か宗教に對する卑見を述べむ、我教義に隨へは、天地間の物、皆な三神の産（むす）び給ふ所なれば、人類は勿論、森羅萬象、悉く其德を具へざる者なし、就中、人類は其最愛の子なるを以て、神に對して最も公平に、最も誠實ならざるべからず、故に博く之を愛し、互に相輔け相挈へ、異人種、異宗教と雖も、決して厭忌敵視すべきものにあらず、想ふに各國の所

謂宗教なるもの究極する所、必らずや、同一の目的にして同一の原理を含むこと、蓋し疑を容れざるなり、然りと雖も其枝葉に至り、宛かも他の人事の如く、其の歴史、地理、人情等に適應して殊別なるもの、之をして合同一致せしめんとするは言ふ可くして行ふべからざるものなりとす、故に予は唯ゝ各宗教の、互に相敵視するの陋心を去り、各自宗教の上に存する眞理を比較研究して、原理の中心點に於て、互に相和し相合するの道を求め、而して克く其の國躰人情に戻らざるの教を布くを望まんと欲す、而して吾人は神意を繼紹し、世界の公衆をして、各安心立命の地を得せしむるの義務を盡さゞる可からず、之れ神慮のある所にして、之に仕ふる宗教家が、宜しく任じて以て先導すべき所なるべし、是れ實に富岳の向ふ所表裏なきが如く、八面玲瓏たる我教の本旨に副ふ、

今日の宗教は果して教育的勢力を有するや（續）

ドクトル、オヴ、フイロソフイー　藏原惟郭

尤も今日日本が支那を征服致して段々と支那人を擒にして仕舞つて支那の地を取り償金を取りさうして非常な戰勝國として無茶苦茶に喜び隨つて心の中に貯へて居らるゝものを皆出して仕舞つて日本膨脹力を容觀的にばかり早くして仕舞つた宗教家も亂りに己れの區域を全躰に及ぼし己を社會の中心と考へ總てあるものゝ始となり終となり、總て己が精神で外が物質世界の如く看做す事がありますと遂に諸君が宗教を早く擴めんとするものに向つて非常なる嫉妬心を起してさうして其極實に宗教の爲に不幸を被る樣な事が起つて來ます、夫故に私は今日深く宗教家たる所の人々は茲に着目致して宗教夫れ自身の區域と本分と其働きの方針を程々に取るべきものであらうと思ふ、然るに今私は宗教は一箇の reality itsself で無くして phenomena である即はち實躰なるものゝ一つの現象であつて之れを humanity が總て社會の機關を用ゐる上に於て云ひますると一つの機關である、人類を開發し導く所の教育的機關である、機育的機關の一つであるが教育的機關といふものは唯ゝ宗教ばかりに由らずして澤山あるものである乎を即ち是に於て承知をせねばなりませぬ、」私は尙ほ立返つて申しまするが宗教といふものは大躰

敎育的旨趣を持たねばならぬ、敎育的旨趣が無くなつた時には社會に無用なものであるからして社會が崩すか自から崩すかでなければならない、併ながら夫は宗敎ばかりでは無い、政治家も美術家も學者も總て社會のもの皆悉く Education 又 culture、此敎育的旨趣と云ふものを持たねばならぬものであらうと思ふであります、總てが敎育的旨趣の下に集つて來ねばならぬ夫で是まで宗敎家が宗敎といふものゝ下に總てを籠めやうとしたけれ共今日は少しく違つて宗敎といふものが歩を大に讓つて今日はボツ／＼高尙なる意味に於て深い意味に於て敎育といふものが其地を占めて來て敎育の中には宗敎も入つて來る、其觀念の中に政治も入つて來る、美術も入つて來る、工藝も入つて來ねばならぬ、何もかも入つて來ねばならぬ、總て是等のものが敎育といふ觀念の中に入つて來て是等のもので價値を有する事は何かと云ふと敎育的勢力、敎育的旨趣を持つ其度に隨つて是等のものが價値を持ち社會に其地位を占めて來るのでありませう、而して此敎育的總ての機關といふものが相揃ふて如何なる事をするかといふに人類の働きを助ける、人類の開發進步といふものを來たす即ち之を一トロに云ふならば humanity を perfect-ifying する即完全にするのであります、humanity の中にあるものを圓滿にし殘りなく其智能を發達及活動せしめ其力を實現せしむる所の方針を取らなくては不可いと思ふ、夫で政治も敎育的旨趣を持たねばならぬ、宗敎も敎育的旨趣を持たねばならぬ、其他百般の事悉く此意味の下に相集つて行かねばならぬ、是が私は今日十九世紀の終り二十世紀の始めに於て漠然として居る考にあらずして一大勢力、現象となつて世界の表面に出ねばならぬ、此に於て私は我日本に於て殊に賢明なる此四民の集在する所の東京の此中心より此の如き一大現象、一大勢力が現はれ來つて宗敎にも敎育的旨趣と勢力を持たしめる樣に建て直し今日の政治、政黨も此位地に至らしめ此國中に於て力を得せしめ、其中の意味を深く致さしめ、其中の目的に依つて彼等が方針を取る樣にする、一大勢力を玆に起さねばなるまいと思ふ、即ち humanity の叫ぶところの聲を代表する演臺、代表する所の大なる總て機關の機關たる所ののが現はれて來ねばならない、而して今日は實に偉大なる意味に於て唯ゞ獨り學校の壁內の敎育計では無い唯ゞ獨りチヨツトした宗敎ばかりの敎育でない、政治ばかりの敎育ではない、總ての物をして敎育的旨趣を

持たしめる。教育的意味を持たしめる。教育的勢力、教育的價値を持たしめるのである、即ち人事皆教育的勢力を持つて共に教育される所の已に自能力を尙ほ發達せねばならぬ時であります、我邦は非常に發達進歩の時であります、發達進歩の時代に於て缺くべからざるものは何か、保守の宗教では無い、保守の政治でも無い、保守の黨でも無い、今日は實に humanity の駸々として進む事の其蹶蹉となり之を妨げるものとなるにあらずして之を助けて之を危くせしめず、其中に含蓄して居る旨趣を完全圓滿に發達せしむる所の大方針にあるのであります、

果して日本が humanity の聲を代表して之を實現する platform 演壇となり、世界の演壇となることが出來るや否や、是は實に我日本國民が大に私は考へねばならぬ所である、若し之が出來なければ如何に日本が外交上の政策が發達し日本の或一部分が政治上に其技能を發達し或は兵備上或は商工上の一部分が宗教上に於て發達しても駄目だ、社會の humanity といふ者は決して偏頗な者ではありませぬ、宗教にも偏頗はしない政治にも偏頗はしない、語學にも商賣にも或は實業上の事に於ても總ての事に於て偏頗はしないのである、總ての物が此 humanity 夫れ自身に取つては偉大なる言ふべからざる價値を持つて居るから之を卑いとしない之を賤しいとしないのである唯々 humanity を進歩せしむる所に於て力がある即ち教育的旨趣を持ち教育的勢力を持つて居るといふ所を取るのであります、之を持たないものは humanity は今日の二十世紀の進歩の世の中では要すまい、夫で私は宗教といふものは教育の一部分だ其一部分たる宗教を以て傳道致して居る宗教家といふものも教育の勢力といふものに反對をしない樣に注意を要するのであります、政治界といふものも皆悉く此教育といふ所の大理想の一部分である故に、一大機關であるが故に其目的を駸々として達するでなければなりませぬ、我日本　天皇陛下が賢明にして實に教育上に付て勅語を下し玉ふたのは是は實に誠に難有い事と思ふのであります、此の如き所の一つの日本帝國を代表して御座る　天皇陛下の働きといふものは實に我邦に於て humanity の叫びの聲を初めて聞かしめたるところの一の證據として可なる事であります、此の如く教育上の觀念の中に總てが含まれて居る、常に含蓄して居る、願はくは我國民が之を奉戴して尙ほ駸々として已むなく此教育的勢力、此教育的價値を

以て總てのものに價値を與へ總て日本にあるものは悉く此の如き勢力を有する樣に否日本國自身力世界人類教育の大勢力となる樣に希ふさうして教育的旨趣と教育的勢力を以て活動して居る如くなるならば、日本の國民皆銘々夫に依つて滿つる時に於ては必らず日本國は社會の先導國となるでありませう、世界を支配する人民にもなれる、道理上彼等の educator を以て彼等を enlighten して行く大機關たる事を完うする事が出來るであらうと思ふのであります、尙ほ此邊の事に付て詳しく御話を申上げて置きたいと思ひますけれ共今晩は時も大分耽りました上に細かい御話を申上げる積りでもありませぬから大概にして置きませう、

併し一言基督教信者に向つて注意を請ひたい事があります、夫は一つの大事なる事……諸君は御考があらうが……基督教の一大勢力と御考になるものは基督教の教義中、其聖書中に於て何であるかと尋ねる、又今日我々信者の土臺として居り將來實に基督教の發達すべき時に於て望多きところのものは何處にあるかと尋ねる、と、love 愛といふ事を申します、併し私は考が違ふ、成程基督教の長所は love にあるか知れない、けれ共基督教の長所よりもまだ短所が其の love にあるといふ事を悟つて貰ひたい、そこで私は申上げる、是よりさき基督教が社會の大勢力となつて教育的機關になつて行くには love を保守して行くか love といふものを捨てはせぬけれ共之れを第二第三に於て尙ほ基督教の上に偉大なる勢力を有すべき力を取るの方針を執るか如何といふ所であります、是れはチョットした議論の樣にありますけれ共基督教の盛衰興廢存亡にして humanity の開發進歩の上に及ぼす所の大關係があると思ふ、或人は humanity の中心は愛であると思ひませう、愛も是は實に大切なる humanity の一つの現象でありますけれ共私は思ふに愛といふ所のものは是まで考へた樣に夫程 humanity の上に於て非常の味を持つて居るものでは無いと思ふ、又果して之を以て教會を神聖にする事が出來るか又人類をも之を以て神聖にして行く事が出來るかといふにさうで無い、博愛とか love とか church とかいふ樣なものは深く研究して來るならば宗教の大本旨とし宗教の心とすべき價値の無いものであります、夫で愛といふものに目を奪はれますと宗教の大事なる所に目が屆かない、淺薄なる皮想の上に心が浮んで來まして其の上に何か立派なる大理石か、或は立派なる象牙を以て敷いてある所の堂の上

に於て玉を轉かす樣な鹽梅にして遂に轉けるか飛んで居るか分らぬ樣な有樣、少しも深く入る事は出來ますまい、總て宗教界の精神が衰頽するのも思想が淺薄にとゞまつて居るのも此宗教家の生命といふ者が健全に至らずして一種の蒼白したる薄弱なる書生の如く健全ならぬ元氣と生命と活動力とを以て發達し一種の實に sentimental life を送るやうになるのも玆にありませう、又宗教家のボンヤリした而も一向定まりの無い、實のdreamの中にありimaginationの中にある樣になつて確かならぬ生涯を送らしむる樣になるのも此愛であります、或は又丸るで宗教より離れて極端に馳つて宗教より反對の生涯をしやうとする所の宗教家が今あります、是即ち愛と云ふ考を廣く實行せんとして遂に夫を實行する事が出來なかつたのでありまする愛といふものは誠に結構なる、誠に旨いものである如くにして其實深き根を持つて居るものでは無い、深き根を持つて居ります事は居りますけれ共、そこに宗教の一大勢力となるべきものが無い、といふ事を私は基督教を研究し又段々其の他の事をする事に依つて發明したと思ひます、諸君方の中にも段々其邊の事は御考の方もあらうと思ひますけれ共、何故私が愛といふものはさう云ふものであるかと云ふに愛といふものは約翰が「神は愛なり」といふたが間違ひの甚しき事である、神といふものがあるならば其神といふものは何で約翰が、どういふ理由、どういふ權利、及 authority を以て「神は愛なり」といふ事を云ふたか、通じない、夫から基督教の果して本當に大精神の據つて居るところは基督教の基礎となつて居るところのものは果して基督が愛といふものを以て其中に一種の繫ぐところの關節の機關としたであらうか、或は又之をして實に堅い所を雜合はせる、調和を致すところの一つのものとしかしなかつたであらうかと思ひます、そこに深く基督の大事なる教、基督が宗教を教を立てたものがあるだらうと思ひます、約翰が甚だ誤つて「神は愛なり」といふたのは殆んど私の目から見るならば實に神といふものを潰して居る、何故なれば「神は愛なり」といふ樣な言葉を以て神を蔽ふて仕舞つて神の姿を知る事が出來ない樣にして仕舞つたのである、愛といふ所の者は誠に人情の誰でも附き易い所でありますけれ共愛といふもの程淺薄なものは亦無いといふ事を知らねばならぬ、又毒のあるものであるといふ事を知らねばならぬ、然るに「神は愛なり」といふ樣な不都合な言葉を以て約翰が言ひ

立つて仕舞つたよりして深く神といふ觀念を翫味して之を研究する事、之を明かにする事、之を照らす事、之を實に完うすといふ樣な事を妨げたのであります、一トロに云へば愛といふものは實物夫れ自身でなくして愛といふものは一箇の現はれてある、夫は愛といふものは即ち本とで無くして本との一つの結果である、といふ事を知らねばならぬのであります、「神は愛なり」といふが如きは神なる所のものゝ結果を捉(つかま)へて是が即ち神だ、人間の誰でも見れる其皮想の一のphenomena を捉へて是が「神は愛なり」といふ樣な事を云つたのであります、又愛といふものを能く考へて御覽なさい、愛といふものゝ性質は博愛といふものと伴ふて居るが、愛は博愛といふ言葉と繫がれるものと考へて見ねばならぬ、所が愛といふものは深くなればなる程狹くなつて來ます、愛といふものは博くなればなる程薄くなつて來ます、indefinite になつて來ます、ボンヤリ致します、試みに愛の度を感じやうとして御覽なさい、愛の味ひを味はうとして御覽なさい、此愛といふものは二人に傾けるよりも一人に傾ける方が深い、三人に傾けるよりも二人に傾ける方が味ひが多い、愛の本當の性質たるや區域を立つのにあります、決して博愛抔といふボンヤリした愛があるものでは無い、愛といふものは定めて箇人的のものである、箇人的ならずんば愛の本性を失ふて來るものであります夫で貴君方が自身の心を愛に集むるに熱心になるといふものは之を一つに集めねばなりませぬ、集めて夫を三人四人に注ぐよりも一人に注いで御覽なさい、其愛といふものは初めて深く初めて味ひがあつて初めて厚くなつて來ます、夫故に此愛といふものを以て百人に及ぼす時には少なくなる、淺くなる、味ひが薄くなる、千人萬人、人類人般に掛かる時に愛の特性といふもの即ちindividuality といふものを失ふて仕舞つて彼の哲學者なるもののいふが如く、愛は實にタッタ表面になつて居るものであります、遂に愛の愛たるものが分らぬでボンヤリになつて來る、そこに於て種々なる解説が出て來ます、是はどうしても實際の上から道理の上から己を得ないであらうと思ひます、夫でどうです、其證據には先づ神學者の一つの考として、どうかと云ふに愛といふものは必ず一人一箇の狹くなるものである、さうして愛の中には必ず嫉みを含んで居る煩惱といふ樣な意味を含んで居る、無智と云ふ樣な意味を含んで居る常に保守といふ樣な考を含んで居ります、此中に

於ては實に intellect, とか intelligence, とか reason とかさういふ關係といふものは殆んど滅して來ねばならぬ、其考が出て來ない、pure intellectual life といふものもありませうけれ共、夫は本當に我々が玆に云ふ愛では無い、基督教の神學の眞正の愛といふものは斯う云ふ風に取らねばなりませぬ、總ての人を愛せよと云ひます兄弟の如くせよといふ、兄弟の如くといふ考は實に宜い考、私は是が基督教の上に於て一の大法則と思ふけれ共兄弟といふ觀念は近く親まねば起る事は出來ませぬ、さうして近く親んでそこに初めて互に容れ合つて愛といふものが出來ます、夫で夫婦の愛の如き親子の愛の如き又朋友の親み、朋友の愛の如きものに較ぶるならば總ての人を愛せよとか、博愛とかいふ樣な事は誠に冷々淡々たるものであります、若しも本當に愛といふものを起さうとするならば夫を personify せねばならぬ、之を一箇の人とせねば愛といふものは起らない、併ながら夫を一箇の人とした時に於ては其愛といふものは間接になつて來て居ります、種々なる變遷變化を致して來て居りますから丁度火に燃した址が燒けて居る樣な有樣で無くして夫が種々樣々の塀を通して來つたものである、熱さが違ふのであります、

夫で夫婦の愛の切なるに如かず親子の愛の切なるに如かず朋友の愛は一種奇妙にして夫婦の愛よりも親子の愛よりも違つた所がありますけれ共本當に之を云ふならば夫婦、親子の愛に及ばざる事甚しい事と思ふ、是は夫ならば博く及ぼして夫婦の愛、親子の愛、朋友といふものに違ひのある筈はありませぬ、唯ゝ度の違ふ丈けでありませう、夫で區域を博くしやうとする時には淺くなり其質が薄くなる、其區域を狹くすればする程愛といふものゝ味ひが多くなる、夫でどうです、一つ玆に實際上の事を云ふならばこゝに男があつて一人妻を持ち其上妾を三人置たならば其妻を愛する心といふものは必ず其數に依つて減ずるに違ひない、減ぜねばならぬ、貴君方が朋友を持つのに二人三人よりも一人の朋友に注ぐ愛は深い愛を注ぐ事が出來る、さういふ鹽梅にして愛といふものと博愛といふ樣なものを結び付けるのは大なる誤り、神か何かでなければ其通りに深く博く厚く誠に總ての物を愛する事はナカ／＼出來ませぬ、世界中のものを愛するといふ樣な事は出來ませぬ其上愛といふものは決して本とではありませぬ愛……愛するといふ事は愛の起らねばならぬ理由がなければなりませぬ、愛の本つかねばならぬ道がなけ

ればなりませぬ、其道の如何に依つて愛の性質が異つて來る、こゝを能く考へて御覽なさい、愛に種々の性質がある、其愛の本躰は一にしても愛の色を以て來るときには色々な働きをなす、其色々の活動に於て其顯象に於て大に異つて居ります、何で異るかと云へば清い愛もあり、汚い愛もあり濁るものもあり雜るものもあります、愛程混合物の多いものは無い、愛程奇麗な如くにして深く入つて見ると汚くなるものは無い樣に思ひます其中に利己即ち egoism 又は selfishness といふものが大分あります、愛を混淆してはなりませぬ、喩へば高尚なる宗教に較べて迷信的普通宗教の下等なる如く普通の生涯に較べて見れば實に愛的生涯といふものは最も淺薄な汚いものであるといふ事を知らねばなりませぬ、夫で愛といふものはどんなに清めても夫は individual を愛するもので universal を愛するものではありませぬ、是は箇人的のものであつて全躰的のものではありませぬ、且又愛は實躰にあらずして實物の働きに依らねばならぬものである、其働きの結果であるといふ事は決して忘れてはならぬと思ふ、且又愛といふものを教育の主意として一つ教育して御覽なさい、愛といふものを頓と教育の大躰の目的、宗教の大躰の目的として教育して見る、私は青年を教育する上から、實際の上から云ふても愛といふものを教育の大方針として愛を以て人の道德を修めて行くと實にどうも仕方の無い生徒が出來る、元氣を失つて來る又進歩的觀念が無くなつて來る、何もかも柔順的になつて何もかも女子のやうな鹽梅になつて氣が附く、利口にはなります、賢しく敏捷くなつて來ます、才氣といふ樣な力はある、併し他の能力機關が發達して來ない、是は教育の經驗の上から云ふ、さうして其人の他の弊害を云ふならば實に煩惱的になつて來て遂に汚い所の愛に飛び込む樣になつて來ます、どうしても之を喩へて云はゞヌラ／＼したるものである、之を清めて之を高尙にして種々なる汚い分子から淘汰して之を高潔にする方に偉大なる觀念を持つて有爲の氣象と不撓果斷なる、而も眞理を慕ふて夫が爲に生命を捨てゝも搆はないと云ふ勇氣も、義烈も無くして、さういふ精神といふものは薄くなつて來て薄情なる、禽獸的、又煩惱的、愛の上にァワ／＼として泳いで居るのであります、又之を輕薄に云ふならば其愛といふものは板敷の上をスラ／＼飛び廻つて居るのであります、奇麗に見へる、立派に見へるけれ共其實際は此人類の進歩的、人類の

開發的に於ては非常なる勇氣と果斷と熱心と元氣とを要せなければならない、其進歩的生涯の上に於てはさういふ空氣の中に教育された青年は役に立たない、今日私は愛といふものを排斥しは致しませぬ、愛といふものが無くなつたならば砂糖の樣になるかも知れない私は飽くまで愛の必要なる事を許すけれ共愛を以て宗教の根本として約翰が如く「神は愛なり」といふに至つては本と末とを忘れたのであります、原因と結果とを忘れたのであります、實躰と顯象とを忘れたのであります、即ち大なる思想の一部分を以て其全躰の思想と代へやうとしたのであります、左らば私は今日諸君方に宗教といふものは二十世紀の範圍内に至るまで人類開發して來る上に於ては宗教の上に於て基督教の中に於て一つの言語を組織して居る、其勢力ある分子は愛である、併ながら此愛なるものは結果である、末である必ずや其基礎がある、之を高尚にして理に適はしめ之を社會の一大勢力となすに於ては充分なる鍛錬を經ねばならぬ、又充分に其他の經驗を經た後でなければ役に立たぬ、鈍の刀であるといふ事を承知して貰ひたい、而して諸君方は萬代動かす事が出來ずして社會の開發と共に教育的勢力を有し教育的旨趣を持つべき宗教といふものに道德の源を置かねばならぬ、根基を置かねばならぬ、淺薄なる愛の如きものに滿足して居るのが今日教會が一大勢力を有すべくして有せない單簡なる理由であるといふ事を私は承知して貰ひたい、先づ之を問ふて御覽なさい、貴君方が愛といふものを一番唱へて居る時が一番不道德な時である、一番迷が多い時である一番諸君方の腦髓が種々なる者を以て滿されて居る時である、一番活潑の無い勇氣の無い時である、深思熟計が燃へて居る時で無い社會の一大勢力となつて居る時で無いのであります、是が私は茲に實に切れ〳〵の話でありますけれ共是よりさき大に諸君方の考慮を煩はさなければならぬ宗教上の一大問題、宗教上に於て此基督教に於て愛は實に essential element であるか、本當の基礎を置くべきものであるか、或は又他に求めて基督教の中にあるものを諸君が發達して此二十世紀の世の中に應ずるか、而して其次の二十一世紀の事もそんな鹽梅にし限りなき活動と進歩と變遷と膨脹力といふものを持つて宗教家、教會信者といふものが行つたならば宗教といふものは社會の生命の存在と共に長く紀念せられて何時も教育的勢力教育的旨趣を失なはぬ樣にして行く事が出來るだらうと思ひま

す、此邊の事に付て私は尚ほ研究を凝して諸君の前に立つて充分論ずるの機會を得たいと思ひます、併せて諸君の高聽を煩らはして敎を請ひたいと思つて居ります

(完)

性善惡說を評す

山本眞吉

人性が本來善なりや惡なりやは、支那學者の大古より議論せる所なれども、其他の諸國にては甚だ之に注意せざりしに似たり。蓋し人性を善若くは惡なりと言へば、先づ善惡とは如何なる義なりや、性とは何ぞや、如何なる意義にて其善惡を言ふやを明にせざれば、議論到底周到なる能はざるに、支那人は全く之を遺れ、善惡を既に定まりて疑ふべからざる者とし、而して未だ明に定義せざる人性が、果して善に傾くや否やを研究す。是を以て議論百出して容易に決すべからず、西洋倫理學者が必ず善惡の標準を說きたると同く、支那哲學者は殆ど擧げて性善惡に論及せり。支那哲學に於いては、性善惡論は實に其心理倫理の骨髓なり。今此文を草するに當りて、大古より近代に至るまでの諸說を悉く列擧せんとすれば、事太だ大にして、遍く支那學者の說を捜して一々研究するに非ざれば不可なり。是れ一知半解の輩の能くする所に非ざれば、余は唯宋以前の諸說のみを列して、時に吾が意見を加ふべし。宋以前にても、余は道家諸子に於いて窺ふ所少し、是を以て之に及ぶと自ら疏ならざるを得ず、他日博く求め深く探りて之を完うせんことを期す。

人の始めて生るゝや、内に一定の思想なく、唯外界の刺戟を受けて之に感應するのみ。日出づれは起き、烏鳴けば歸る、餓ゆれば則ち食を求め、求めて腹に滿つれば則ち眠る、其行動豚犬と異なる所なし。其の外界の刺戟を受くること多きに從ひて、外界の外、別に内界を生じ、直に外界に感應せずして、外界の刺戟は一たび之を内界に止め、是非を判定して而して後之を復た外界に見はす。受動の外に施動を生じ、物の外に我を生ず。我の世界始めて宇宙に見はるゝに及んで、自動的活動生じ來り、眞正の人間的世界現出す。固より此の如く言へるは唯形容的の語に過ぎずして、我と無我との境界は明に截斷し得べき者には非す。人間の尙發達せざる有樣は、例へば兒童の如し、兒童の極めて幼なるや、其精神上の狀態は全く禽獸と同く、絕えて人間と看倣すべき所なし。經驗を積むに從ふて漸く心の

諸能を發達し、一能に一能を積み、漸進して遂に我の念を有するに至る。然れども其の果して五才なるか、七才なるか、抑も五才何ヶ月なるかは決して分明にし易からざる所にして、又實際上斯る分明なる境界あるに非ざる也。心は物質と異にして、連綿として不斷に變化進歩し行く、其某の狀態を捉りて某と名づけ、某の性質あり某の能力ありと言へども、是は唯抽象的解剖のみの名にして、實際に斯る者か箇々別々に生存するには非ず。されば道路に一里塚あると同く、心にも亦明なる境界ありとは謂ふべからず。箇人然り、社會亦然り。

支那に在りては、此思想の發達、我念の形成は何時に在りしや、此れ詩歌人情を精密に研究するに非ざれば明言する能はざる所にして、元と社會學上歷史上の問題に屬し、余が穿鑿せんとする所に非ず。余は唯序論として、左の粗麤なる不科學的の言を以て足れりとせん。凡そ事物を批評するとは、既に事物の外に批評する者の在るを豫定す、批評する者なければ批評固より起るべき理なし。批評すべき者の在るには、多少外界と獨立し自ら思考し得る者なかるべからず。是れ天然と起臥する人種間には倘哲學なき所以也。少く進めば、目に見、耳に聞く所の者を擧けて之を其儘に觀察し、敢て高尙なる理想より之を論斷するとなし。故に一切諸物を觀て以て善となし、己只之に適應せんとをのみ努む。兒童が自ら樂天の傾あるは之を以て也。思想更に進んで、理想を作るか力愈發達すれば、自ら主客兩觀界に於ける差異を發見し、內外の不調和を來たす。是に於て其不調和を去らんとして思考百端、或は人性を惡と斷じ、或は宇宙を苦と觀し、又或は萬物を善とし、人生を樂とし、各其の苦樂善惡なる所以を説く。人生觀の形は或は前と同からんも、其精神に至ては全く異也。前者は自然的にして我の作用甚だ少く、一種の受動的受感に過きさるのみ。後者は即ち人間的精神の見はるゝ所にして、思想發達の端緒なり。

同く性善若くは惡と曰ふも、其中二種の美あり、一は第二期に屬する者にして、一は第三期に屬す。其の善惡を言ふは同けれど、其の善惡を言ふ所以は即ち異也。第二期は言はゝ兒童的の意見にして、唯箇々の塲合に應し、其の見聞する所を取つて之に命題の形を與ふるのみ。是故に其命題は時に全證（ユニベルサル）に類するとあれども、實は部證（パーチキユラル）に過ぎざるのみ、之を以て一箇の説とはなすべからず。次期に至りては更に一層深く入り、詳に

諸種の場合を研究し、萬般の事實を集めて之を一に歸せしめんとし、綜合して普通の命題を成す、理論的組織的也。性説歴史にて第一期の何時なりしは言ふを要せず、何となれば第一期には哲學未だ成らざれば也。文字成り、思想少く發達してより、三代までを第二期とすべし。周末に至て第三期的の説出て、而して老莊思孟實に其首となる。而れども此より後も尚學者往々第二期的の意見を有し、非學理的の言を吐く者往々にして在り。

第一期は言はず、第二期に在つては唯人の生れながら有すると思はるゝ如き所を取りて之を性と稱するのみにして、能く推して之を究むれば、如何なるを性と曰ひ、如何なるを性以外と曰ふを窮めず、漫然之を善惡するに過ぎず。而して兒童に自ら以て惡となす者なきと同く、皆自身の存在よりして推して自身の善を認め、決して性惡を説く者あるべき理なし。ポープの「萬物皆善」は正に此期の思想を寫す者。されは詩の大雅に

天生蒸民、有物有則。民之秉彝、好是懿德。

とあるは、孟子以后學者か常に性善説の準據とする所にして、我國の伊藤長胤か古今學變上にて、

胤按、此詩雖言不及性道、而性道之藴固具乎此。……孟子引以證性之善、性善之説、其權輿於此乎。

と曰へるか如きは、畢竟蛇足の辨に過ぎず。されども長胤は決して淺薄の學者に非す、此間の理は充分に之を知る。故に又曰く、

胤曰、大抵當夫子之時、心性垂善惡之説。然同人之性也、書又曰、斯民也三代之所以直道而行也。則其把人性以爲善、固不待孟子而知矣

と。夫子の時すら尚ほ善惡の説なし、何ぞ其以前に此説あらんや。其以前に在りし所の者は唯性善の意見のみ、以て説とはなすべからず。此る零語を捉へて以て性善説となすを得は、更に是より明なる性惡説の例證を示すも亦難からざるべしと信す。夫れ一たび意に合ふとあれば人は善なりと云ひ、一たび戻るとあれば惡なりと云ふは固より兒童の常にして、而して大古に在つては決して奇とするに足らざる所。箇々の場合のみを言へる命題を把りて、之を全證命題となすは、余其の當れるを知らさる也。

蓋し嘗て之を思ふ、夏殷以前は支那未開の時なり、周に及んて國漸く廣くして民漸く衆く、前の極簡易なりし種族政治、今は則ち稍複雜なる政躰となり、法を定め式を制するに非されば民をして各則る所ある能はざ

らしむ。人文の進歩蓋し止むを得さる者ならん。孔子か禮義三千、威儀三百と曰ひ、盡美矣未盡善矣（論語八佾第三）と曰ひ、周監於二代、郁郁乎文哉（仝上）と曰へるが如きは、皆周か政府らしき政府を以て、政治らしき政治を行ふに至れるを謂へるなるべし。桃源塲裡の夢破れて、世は多事煩忙となり、無爲閑靜の世變して物質的開化大に盛なり。或人は其時に乘して青雲の上に登り、以て其志を成せとも、人心の習慣を改め難き、或る者は獨り蝸牛の廬中に局促し、白眼以て世事を冷視す。老莊の起れるは蓋し是が爲也。彼等は哲學者として甚だ高尙の地に達せり、而れども其大躰の傾向は實に退隱主義也。彼等は文質制度の文明に飽き、此文明が必ず生する罪惡危險に倦み、如何にもして此物質制度罪惡危險を去り、超然其外に立たんと希ふ。是故に勉めて無爲淡泊を主とし、苟も爲すあるの心あれば、則ち之を撲滅すべしと說く。斯る傾向を取る時は、自然主義は必ず來らざるべからずして、唯本然若くは自然に歸れと云ふより外なき也。道家の流派後に大に分れたれども、其要旨は實に老子の

常德不離、復歸於嬰兒（第二十八章）。

に歸するのみ。莊子か

形躰保神、各有儀則、謂之性。性脩反德、德至同於始、同乃虛、虛乃大、合喙鳴、喙鳴合、與天地爲合。其合緡々、若愚若昏、是謂玄德、同乎大順。（天地第十二）

と曰へるも正に之を敷衍せる也。然れども莊子は其論大に過激、決して老子の止まれる所にて止まるを欲せす、更に歩を進めて曰く、

駢拇技指出乎性哉、而侈於德。附贅縣疣出乎形哉、而侈於性。多方于仁義而用之者列於五藏哉、而非道德之正也。……彼至正者、不失其性命之情、故合者不爲駢、而技者不爲跂、長者不爲有餘、短者不爲不足。是故鳧脚雖短、續之則憂、鶴脛雖長、斷之則悲。故性長非所斷、性短非所續、無所去憂也（駢拇第八）。

性は其自然に任ずべくして決して短長すべからざるを謂ふ。此よりして更に仁義と性との關係を述べて曰く、

夫小惑易方、大惑易性、何以知其然邪。自虞氏招仁義以撓天下也、天下莫不奔命於仁義、是非以仁義易其性歟。……伯夷死名于首陽之下、盜路死利於東陵之上、二人者所死不同、其於殘生傷性均也。……吾所謂臧、非仁義之謂也、臧其德而已矣。吾所謂臧、

非仁義之謂也、任其性命之情而已矣（同上）。

夫植木之性、豈欲中規矩鉤繩哉。（馬蹄第九。以上引く所の莊子の句は明に周の筆に非ず。然れども亦周秦以後の者にあらざれば、今姑く之を莊子の筆とす。）

仁義は性に非ずと曰ふ可也、然らば則ち性とは如何なる者なりや。生れながら有するを性と曰ふと云ふ。然れども人が生れながら有する所は、唯某々と爲り得る能力のみにして、固より一の現實なる者あることなく。若し潛蟄せる能力をも含むとすれば、何ぞ仁義を外とせんや。潛を謂ふとすれば事實を悉さず、現を謂ふとすれば淺薄にして理に合はず。自然主義の弊は常に此に在り。且つ仁義の境を離れ道德の撿束を脫したる人は、固より高尙の人に相違なけれど、其の仁義道德と異なる所は唯有意と無意の差のみ。有意に事を成さず、自然に道と冥合するは、自然主義の理想、之を仁義道德と相反すとなすは不可也。莊子の言往々意外に出づるとあれども、其本意を推究する時は、決して自然的性善說の外に出でず。

管子墨子に關しては、翟氏灝考異に

管子戒篇、仁從中出、義爲外作。墨子經下篇、仁之爲內外也、愛利不相爲。內外所愛利、亦不相爲內外。其爲仁內也義外也、擧愛與利也 ‥‥

とある由、焦孝廉の孟子正義卷第十一に見えたり。余は各其本文を見ざれば（此文は鎌倉轉地中の稿にかゝる）、二子の眞意を充分に解するを得されども、其言語上より察すれば、稍英國の學者が、正義は人工的なりと云へるが如きか。人性の本來仁心を有する者なるか、其の內に在る仁と外界に在る事情と相反應して、此に義を爲すの念起る。之を外より來ると謂へるには非ざるか。人が生れながら有する德は皆其潛能力のみにして、此能力を刺戟して其の能くする所を實在するは、皆外界の事情による。外界の事情なくは人心終に發達せざる也。此內に在る能力を仁と云ひ、外と反應して成りたる結果の德を義と云ふとすれば、二子の說は余其の毫も間然する所なきを見る也。但語法通常と異にして、誤解を來たすの憂あるを不可とするのみ。若又兩者共に實在の意義にして、仁は生れながら實在し、義は生れて後に生する者なりと云はゞ、是れ現實潛藏の區別を遺れたる反理の語、取るに足らず。

楊朱も亦少く性を言へども、固より一箇の定說を成せるに非ず。而して其語調は稍自然主義に傾く。今たゞ

其語を引き出さん、

生民之不得休息、爲四事故。一爲壽、二爲名、三爲位、四爲貨。有此四者、畏鬼畏人、畏威畏刑、此謂之遁人也。可殺可活、制命在外。不逆命何羨壽。不矜貴何羨名。不要名何羨位、不貪富何羨貨、此之謂順民。……今有名則尊榮、亡名則卑辱。尊榮則逸樂、卑辱則憂苦。憂苦變性者也、逸樂順性者也（列子巻三楊朱）。

以上述べたる所は皆諸子九流の説にして、支那正統學派の多く重きを置かざる所。性の本説は常に儒家が專ら教ふる所にして、儒を離れて性説なきの觀さへ有るに至れり。然れども孔子は多く性を言はず。子貢曰く、夫子之文章可得而聞也、夫子之言性與天道不可得而聞也（論語公冶長第五）と。唯日常實際の間、事に當り身を處するの法を數ふるのみ。是を以て其哲學の淺深は容易に計るべからず。されど姑く其言語に依つて之を考ふれば、其の性善を主とせるや疑なし。曰く

性相近也、習相遠也（論語陽貨篇）。

一陰一陽之謂道、繼之者善也、成之者性也（繫辭傳）。

孔子直傳の高弟曾子は亦曰く、

父子之道天性也（孝經）。

性習は人の性に就いて之を言ひ、陰陽云々は天地の大性に就いて之を言ふ。二者稍異なれども、其の性善に傾くは則ち明也。後者は哲學的にして萬物本然の理性を言ひ、前者は心理的にして人々氣質之性を言ふ。曾子の説に至ては、其の本然を言へるや明也。孔曾の時固より本然氣質なる名目上の差別はなけれども、孔子の心中此別ありしは明也。但孔子が天地の大道を説けるは唯易のみに於いてし、其他に於いては決して此深玄に及ばざりしを以て、人往々、氣質以外の性は孔子の思ひ及ばざりし所となすのみ。若し易大傳を外にして、獨り論語に在る所のみを取らば、則ち孔子の性を言ふや淺薄卑近、唯其の事實を正しく述べたるの取るべきのみ。是豈能く孔子を知る者ならんや。

子思に至つて始めて性命の理を窮め、之を詳論す。其の中庸の冒頭に

天命之謂性、率性之謂道、修道之謂敎（第一章）

と曰へるは、中庸全篇の大意を概括せる者にして、而して又子思哲學の大本也。性とは天命也、而れども天命主に知るべからず、之を知ること如何。

自誠明之謂性（二十一章）。

唯天下至誠爲能盡其性、能盡其性則盡人之性（二十

二章）。

唯一心の誠だにあらば我能く我性を盡すを得、是れ所謂直覺論者の說也。此く唯一心の誠を以て得たる性より、自ら發し來れる者を道と云ふ。道とは何ぞや、

天下之達道五、所以行之者三、曰君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之友也、五者天下之達道也（第二十章）。

五倫の天下に存在する所以は、人の性之をして存在せしむるに傾く者あれば也。性に無き所は決して之を見はすべからず、見はれたる者は必ず見はるゝべき理由即ち性あるに由る。五倫の存在を認むれば、人に五倫の性あるを認めざるべからず。是れ子思か性善說を取れる所以にして、孔子に比すれば大に思想の緻密を增せり。流石は孔門の正統、其の說く所皆平易妥當、荀子戾性說の僻に似ず。子思の說を能く玩味すれば、直に荀子を容すの餘地なきに思ひ至るべし。子思を繼ぎて更に性善說を大成せるは孟子也。

孟子の之に關せる說は、主として告子に答へたる者にして、告子の說は初より確立一定せるにはあらじ、唯孟子を詰問して其辯難に敵するを得ず、屢其の論鋒を變じ、或は例を杞柳に取り、或は白石に取り、又は內外の義を引き、諸說を以て之を究めんとせる者なれば、之を一種の懷疑者とすべきも、一定の說ありとは言ふべからず。されば今此に告子の說なる者を設けて之を說くを要せず、直に孟子に入るべし。孟子は機敏の好才子、其の告子の難に對して辯明せると極めて妙、而れども妙に過ぎて反つて言語を弄するとあり、後人亦之を言ふ者あり、今其詳細を說くの要なし。孟子の說は之を概括すれば左の數箇に歸す。

告子曰、性猶湍水也、決諸東方則東流、決諸西方則西流。人性之無分於善不善也、猶水之無分於東西也、孟子曰、水信無分於東西、無分於上下乎。人性之善也、猶水之就下也。人無有不善、水無有不下。今夫水搏而躍之、可使過顙。激而行之、可使在山。是豈水之性哉、其勢則然也。人之可使爲不善、其性亦猶是也（告子章）。

此に性と云へるは宋儒之所謂本然之性にして氣質のにはあらず。本然の性より言へば、「人無有不善」と云ふ固より當れり。司馬光か之を評して、

孟子曰、人無有不善、此孟子之言失也。丹朱商均自幼及長、所日見者堯舜也、不能移其惡、豈人之性無不善乎（疑孟）。

と曰へるは、誤つて氣質の性となせる者のみ。然れども孟子の言亦少し誤る。孟子は水無有不下と曰ふ、是固に然り。水は必ず下きに就く。然れども上下は畢竟水の就くと就かぬとに由て定めたる名にして、一毫の水なき以前に既に上下の名ありしには非ざる也。水の就く所を取つて之を下と命じたるのみ。人も亦然り。宇宙の初よりして既に一定不變の善なる者の在りしには非ず、人性の趣く所を取つて、之を善と命したるのみ。宇宙の目的法(テレオロジー)より論すれば、善なる者は一人の生れざりし前よりして既に定まりしなるべきも、人の智識より論すれば、善あつて人之に趣くに非す、人か趣く故に善と命せし也。

されば其本然の善性が見はれたる所は如何、

公都子曰、告子曰、性無善無不善也、或曰性可以爲善、可以爲不善、是故文武興則民好善、幽厲起則民好暴。或曰有性善、有性不善、是故以堯爲君而有象、以瞽瞍爲父而有舜、以紂爲兄之子且以爲君而有微子啓王子比干。今曰性善、然則彼皆非歟。孟子曰乃若其情則可以爲善矣。乃所謂善矣。若夫爲不善、非才之罪也。惻隱之心人皆有之、羞惡之心人皆有之、恭敬之心人皆有之、是非之心人皆有之。惻隱之心仁也、羞惡之心義也、恭敬之心禮也、是非之心智也。仁義禮智非由外鑠我也、我固有之也(告子章)。

仁義禮義に由て性善の端を知るべし、人として之を有せざるはなし。

人之所不學而能者其良能也、所不慮而知其良知也。孩提之童無不知愛其親也、及其長也無不知敬其兄也。親親仁也、敬長義也、無他、達之天下也(盡心章)。

生れながら有する故に人は性善なりと曰ふ、一見明瞭なるが如し。然れども是實に孟子の最も弱點にして、此論法を推して之を窮むれば、反つて他の反對說に趨かざるを得ず。今若し此實際に現はれたる事實よりして論ずる時は、善も自然に在らんも、不善も亦同く自然に在り。生れなから在る性質を比較すれば、善と云ふべき者よりは、寧ろ不善と云ふべき者の多きは、兒童に爲己的念と行爲との多きよりして知るべく、而してホッブス、ショペンハウワーの說も此等事實のみを說明する者としては、余其の誠に當れるを感ずる也。而して孟子の如く性善の說明とは爲すべからず。人性の善なるは、善と謂ふ所の者を爲さゞれば、充分の生活を爲す能はざるに由て之を知る。人が生れながら善なる性質を有するを以て、之を知るには非ざる也。論

據に於いては余孟子に反して、唯其主義のみを取る。

孟子と反して性惡說を取れるは荀子也。荀子は孟子の、人が生れながら善良なる傾向を有せるが故に性善なりと曰へるに正に反して、人は生れながら惡なると多ければ、之を性惡と謂ふべしとす。其論大に精細にして緻密、孟子の論法に據る時は必ず至らざるを得ざる所に至れる者にして、科學的研究としては一歩孟子の上に在り。其の孟子の說を見しや否やは論せず、孟子の弱點を捉へて之を駁撃せる議論としては、眞に精鋭當るべからざる者あり。但其の解剖の不充分なる、洞察の不足なるは却て孟子の下に在り。其言に曰く、

凡性者天之就也、不可學、不可事。禮義者聖人之所生也、人之所學而能所事而成者也。不可學不可事而在人者謂之性、可學而能可事而成之在人者謂之僞、是性僞之分也(性惡論第廿三)。

然らば則ち生れながら有し、勉强せずして至る所を性と云ひ、苟も修錬して至るべき者を僞と云ふ。然れども此差別元來充分ならず。西洋にも自然主義を取り、自然なるを最善となす人あれども、其の所謂自然とは如何なる者なるか。人爲を待たざるが性なりと云へば、則ち性は自然なりと云ふと同じ。人爲を俟たざるとは何の謂なるか。出生以前は姑く言はず。兒が初めて母躰を離れて此世に來る、此れ自然なるか人爲なるか。兒が生るゝと云へば則ち自然なれども、兒を生むと云へば則ち人爲也。兒生れて、之に乳を與へ、之に衣を被せて之を保養するは、果して自然か人爲か。獨り乳を欲するのみか自然にして、子に乳を與ふるは自然ならざるか。獨り保養せらるゝを欲するのみか自然にして、親が保養するは自然に非ざるか。是の如く論じ行けば、二者の區別甚だ不明瞭にして、決して之を劃然截斷すると能はざるべし。然るに

今人之性而有好利焉、順是故爭奪生而辭讓亡焉。生而有疾惡焉、順是故殘賊生而忠信亡焉。生而有耳目之欲、有好聲色焉、順是故淫亂生而禮義文理亡焉。然則從人之性、順人之情、必出於爭奪、合於犯分亂理而歸暴(仝上)。

今人飢、見長而不敢先食者、將有所讓也。勞而不敢求息者、將有所代也。夫子之讓乎父、弟之讓乎兄、子之代乎父、弟之代乎兄、此二者皆反於性而悖於情也。然而孝子之道禮義之文理也。故順性情則不辭讓矣、辭讓則悖於性情矣(仝上)

と曰へるが如きは、甚だ解剖の至らずして、理義明瞭

ならざる獨斷的命題也。且つ人をして自然に果して惡ならしめば、何に由て善なる傾を有するか。荀子は之を解して曰く、

聖人積思慮習僞、故以生禮義而起法度。然則禮義法度、是生於聖人之僞、非故生於人之性也。……聖人化性而起僞、起而生禮儀、禮儀起而制法度、然則禮儀法度者是聖人之所生也(同上)。

人之性惡、故古者聖人以人之性惡、以爲偏僻而不正、悖亂而不治。故爲之立君上之勢力以臨之、明禮儀化之、起法正以治之、重刑罰以禁之、使天下皆出於治合於善也。是聖王之治而禮儀之化也。今嘗試去君上之勢、無禮儀之化、去法正之治、無刑罰之禁、倚而觀天下民人之相與也、若是則夫彊者害弱而奪之、衆者暴寡而譁之、天上之悖亂而相亡、不待頃矣(同上)。

是れ聖人を重ぜん爲の語にして、元と禮記王制の「司徒修六禮以節民性」、倘書召誥の「節性」より來れる者。易大傳にも亦太古の聖人の功を頌するの餘り、動もすれば是に類する語勢あり。荀子の此言全く準據なきには非ざれども、然れども人に本來全く缺けたる所は、聖人にも有るべき理なく、假に聖人獨り之を有てりとするも、聖人何に由て性に反して事を爲すを得たりしや。若し聖人能く人の性を曲げたりと言へば、人には曲がるべき性ありと謂はざるを得ず。我より全く能力を去りて、而して獨り外力能く我を化すとなす、是れ物理の明に許さざる所。荀子亦能く之を知り、詭辯を以て之を覆ふ。

問者曰、禮義積僞是人之性、故聖人生之也。應之曰、是不然。夫陶人埏埴而生瓦、然則瓦埴豈陶人之性也哉。工人斲木而生器、然則器木豈工人之性也哉。夫聖人之於禮義也、辟亦陶埏而生之也。然則禮義積惡豈人之本性也哉。凡人之性、堯舜之與桀跖也、其性一也。君子之與小人、其性一也。今將以禮義積僞爲人之性耶、然則曷貴堯禹、曷貴君子矣哉。凡所貴堯禹君子者、能化性能起僞(同上)。

此言甚だ告子杞柳說と相似たり。翟氏灝考異亦之を言ふ。瓦埴器木は固に工陶の性に非ず、然れども埏埴斲木にして瓦器を生ずるは、即ち工陶の性、而して工陶の手に由て瓦器と爲るは、亦埴木の性也。仁義禮法は人之を生時に現には有せざらん、然れども相當の訓育を受くれば現出せしめ得る能力は、即ち其の生時若くは生前より有し得る所あらざるべからず。荀子全く之なしとす。是故に全篇唯獨斷的に之を言へるのみにし

で、絶えて一たびも如何にして聖人が禮義法度を制し得しやを說明する能はず、千萬言の大議論も空く架空の說となれり。

荀子は此の如く議論周到なれども着眼淺薄、大に後人の非難を受けたり。今其一二を述べて以て其長短を示すべし。蘇東坡は其中庸中に於いて論じて曰く、

夫聖人之道、自本而觀之、皆出於人情。……今夫五常之敎、惟禮爲若彊人、何則人情莫不好逸豫而惡勞苦、今吾必也使之不敢箕踞而磬折。百拜以爲禮、……此禮之所以爲彊人。而觀之於其末者之過也。盍亦反其本而思之。今吾以爲磬折不如立之安也、而將惟安之求。則立不如坐、坐不如箕踞、箕踞不如偃臥、偃臥而不已、則將裸袒而不顧。苟爲裸袒而不顧、則吾無乃亦將病之。夫豈吾獨病之。天下之匹夫匹婦莫不病之也。苟病之、則是其勢、將必至磬折而百拜。由此言之、則是磬折而百拜者生於不欲裸袒之間而已。

程子曰く。

人之性果惡乎、則聖人何爲能反其性以至於斯也。(性理會通第廿九に據る、原書を知らず。)

徐積も亦同樣の意を敷衍して曰く、

荀子非也。且人之性既惡矣、又惡知惡之可矯而善之可爲也。矯性之矯、如矯木之矯、則是杞柳爲桮棬之類也、何異于告子哉(荀子辯)。

夫欲行其實者必先正其名、名正則敎行矣。禮義之僞與作僞之僞、有以異乎、其無以異乎。在人者必此謂之僞、則何事而不言僞(仝上)。

焦循も亦曰く、

荀子能令烏讓食乎、能令獸代勞乎、此正率性之明證、乃以爲悖性之證乎(孟子正義卷第五)。

是れ皆荀子の、人に生れながら現實なる善なき爲に、合せて潜蟄せる善もなしとせるを反駁せる者。假に荀子の如く衆生は皆不善なりとするも、聖人は何に由て自ら善の念を得しか。善を行ふ人は、先づ善を行ふべき能力なかるべからず、此能力は何處より得たるか。何點より上るも、能力は常に現實の一步上に在り。能力を去れば現實なく、現實を是認すれば能力は決して否認すべからざる也。莊子が聖人を以て仁義道德を制したる者となせるは、聖人の累を爲さんが爲にして、荀子は之を以て聖人を貴ばんとす。其目的は異なれども、其論法は則ち同じ。荀子の說の保つべからざるは、即ち莊子の說の保つべからざる所以也。性惡論は斷じて事實に反す。

（未完）

批評

田岡嶺雲氏の評論に就きて

文學士　松本文三郎

余資性魯鈍、學淺して才疏なり、二十年來日に書を鈔し、月に筆を弄すと雖も、而も未だ人に長ずるところなし、唯學を好むに至りては、自から思ふ敢て多く人後に落ちずと、乃ち自から度らず、時に愚見を草して天下に公にし、以て君子の高評を仰げり、而して未だ曾て一人の之に酬ゆるものなし、余世人に負くか、世人余に負くか、竊かに以て恨となせり、向きに余井上文學士の需めに應じて「公孫龍子」一篇を草し、以て「東洋哲學」第二編第四號に掲載せり、而も亦未だ始めよりして多く君子の手に融るゝことを望まざりき、而るに豈に圖らんや、七月五日發行「宗教」の紙上に於て田岡氏の批評を見んとは、田岡氏は所謂當世の青年文學者と稱せらるゝもの、今其の批評を臺る、自から思ふ必らずや大に余を啓發するものあらんと、之を讀過する一再、而して悲ひ哉余をして啞然自失せしめたり、何となれば是れ一篇詈罵的の文字、哲學研究の上秋毫の價値を有せざるものなればなり、余は固より此の如き文學に對して答辯を試みるを屑とせず、世の眼あるものは當さに自から是非のあるところを知るべければなり、然りと雖も其の一度び世に公にせらるゝや、誼一言なきを得ず、請ふ少しく余をして其の思ふ所を言はしめよ、

氏は先づ口を開きて曰く、世の盲目好辯の徒、自から其の才の短なるを測らず、時世人物の如何を究めず、古人が幽遠の説を管測し、以て吾其の眞意を解すとなす、實に慨すべきなり、苟も古人の説を看んと要せば、須らく同情の眼あるべしと、田岡氏が若し此言を以て余に誨るところあらんとならば、余は深く氏の志を鳴謝せざるを得ず、而も此簡單なる理論の爲めに費せる一千有餘の文字は、失禮ながら尉斗の儘にて之を氏に返上すべし、何となれば是れ余の既に業に熟知するところにして、秋毫他人の忠言を要せざるのみならず、余が常に人に向つて勸説し、及ばずと雖も又自から之に負かざることを期すればなり、然りと雖も余が思慮の短なる、或は未だ足らざる所のものあらん、田岡氏若し余が文に於て其の未だ足らざる所のものゝ存する

を發見せば、盍ぞ一々之を指摘せざる、何の處か果して是れ皮相の見なる、何の說か是れ盲目のところなる、將た何の點か是れ四擡八觸の所なる、余は氏が篇中に於て、竟に一言の之が理由に涉るものを發見する能はず、是に於て乎余をして反て之を以て氏に疑はざるを得ざらしめたり、而して氏は唯滿口の嘲笑詈罵一時に吐き盡さると見へ、余は至る所として其の痕迹を認めざるなし、詈罵嘲笑と眞理とは何の關係かあらんや、詈罵は以て人をして屈せしむるに足るとなすか、嘲笑は以て眞理を表するに足るとなすか、凡そ吾人が意見を吐露するや必ず苟もする所あるべからず、一言一句皆以て天下萬人を敵とするの覺悟なかるを得ず、何ぞ況んや一私人の嘲笑をや、何ぞ況んや沒理的の詈罵をや、

次に氏は諄々として概念の講釋を爲し、馬とは概念にして白黑馬等とは箇躰的表彰に過ぎず、具躰的表彰と概念とは異なり、故に白黑馬は馬にあらずとの旨を述ふ、此處凡そ二千言、是れ心理學初歩を窺ふものゝ熟知するところ、余の淺學と雖も何ぞ此の如き多言を俟ちて而る後知る所となさんや、余は未だ然く老耄せざるなり、而して氏は忽ち之に接して曰く「論理の悖戾と憑據如何を以て徒に公孫龍子を論ずるものは、猶未だ龍子の眞意を知るものにあらず、徒にこれ龍子か言を讀むのみ、文字を知るのみ」と、嗚呼是れ何等の言ぞ、余は殆んど其の意の何たるを解する能はざるなり、余は公孫子の辯證法を論し、白馬非馬辯の正當なる論法なることを辨せしのみ、公孫子が思想の結局如何を見んと欲するものにあらず、一歩を讓りて子が哲學を以て辯證法なりと云ふも、余は秋毫其の不可なる所を見す、何となれば辯證法は亦是れ子が哲學の全提なればなり、田岡氏は哲學を以て辯證法の外にありて存すと考らるゝが如し、若し果して然りとせば是れ非常の謬見なり、「ソクラテス」「ヘーゲル」の辯證法は即ち是れ其の哲學にあらずや、兩氏の辯證法を棄てゝ以て其の哲學如何と見は思ひ半ばに過ぎん、且つ夫れ吾人が眞理を得る所以と之を表彰する所以とは、必らず論理によらざるを得ず、吾人が思想のある所は即ち是れ論理の存する所なり、而して他人が言論思想の謬誤と否とを論ずる、又論理を措て更らに道なきなり、田岡氏は中古時代に於ける所謂形式的論理學を以て、唯一無二の論理と考ふるに非らざるなきか、余此に疑なきを得ず、記憶せよ形式的論理學は唯一の論理にあらざる

ことを、論理を泛して以て事を談し理を考んと欲せば、是れ非眞理のみ、否、豈に啻此に止らんや、氏は所謂冥悟默契と云ふも、論理の然るべきなくしては如何にして其の必然的の性を得來るべき乎、

氏又曰く「吾人は思ふ、龍子は松本氏のいへる如く其論するもの〻意義を確實にし、偏頗の論説を避けざる可からざるを感し、以て一種の論辯法を按出したるものにあらず」と、古人云ふ、匹夫も志は奪ふべからずと、氏若し此の如く思はんと欲せば氏自から之を思ふべし、余之を奈何ともするなきなり、然りと雖も苟も余が言を否定せんとならば、須らく其否定する所以の理由を明了にせざるを得ず、理由なく單に感覺によりて以て之を否定するは、所謂是れ獨斷的なるもの、哲學上秋毫の取るところなきなり、而して氏は「當時の流行につれ、故らに難解の措辭を以て、其論旨を湓晦にし、以て自ら高しとせるもの」となせり、然りと雖も是れ寧ろ寃と謂はざるべからず、固より周末諸子百家の興起する際に當りては、庸陋の才を以て徒らに古人の瀕に傚はんとせしものも之なきに非らざるべし、而も公孫子の才の秀逸なる、決して此等の鼠輩と日を同ふして論ずべきにあらず、才已に秀、識已に高し、其の識見を吐露して以て世人を服せしむる、卓々然として廳さに餘裕あるべきなり、而るに何を苦みてか、故らに其の措辭を湓晦にし以て自から高しとするを要せんや、古來の漢學者流多くは是れ思想粗雜の輩、唯文字に迂曲して以て其の意を迎へんと欲す、是故に終生讀て而も之を解すること能はず、己に之を解すること能はざるや、自から其の識見の足らざるを思はず、反て公孫子の故らに其の措辭を湓晦にするを疑ふなり、哲學の端緒を窺ひ、文字章句を解し、以て我哲學を知り盡せりとなすものは、今世尚ほ少しとせず、況んや古代に於てをや、而して田岡氏は公孫子が決して普通に用ふる所の文字を以て、平易に之を述べんとせるものにあらざるを云へり、記臆せよ余が所謂平易に述ふと云ふものは、科學的套語を造り出さずして、通常吾人の使用する言語を以て言ひ顯せるの義なることを、田岡氏は能文の士なりと聞く、請ふ氏自から身を周末に措き、彼か如き文字、彼が如き思想を以て、公孫子と同一なる思想をば、子よりも一層明了平易に彰はし見よ、氏の力或は之を能くせん、然りと雖も余は實に其容易の業にあらざるを知るなり、氏若し所謂「同情」の眼を以て地を換へて之を觀は、自から悟る所あるべ

きなり、

終りに氏又曰く「四庫全書總目に、假指物以混是非、借白馬齊物我といへるものは、寧ろ龍子か眞意を得たるに庶幾し」と、而して其の何の故なるを辯せず、氏の意を按ずるに或は白黒馬の如き具躰的表彰は、概念の馬に於て悉く包含せらるゝが故に、是れ物我を均ふし是非を混するなりと思惟するものならん、若し果して然りとせば、是れ蓋然と云はんよりも、寧ろ想像的見解と謂はざるを得ず、何となれば公孫子の論辯には、固より辯證の方法は一なりと雖も、而も綜合的と分解的との別あり、余が「公孫龍子」に掲げたる例證中、堅白同異の辯は即ち綜合的論法を示すものなり、而して白馬非馬の辯は是れ徹頭徹尾分解的論辯法を明らかにするものなり、然らば則ち決して子の辯を以て是非を混し物我を齊ふすと謂ふべからざるや明らかなり、

加之、氏が小論文中哲學上の誤謬一二にして止らず、其の叙述の法亦實に哲學的にあらず、依然として　漢學家の口吻を脱せざるは、余の實に遺憾に堪へざる所なり、余は田岡氏の漢學家なるを聞けり、未だ哲學者なることを聞かず、漢學家に向つて哲學の論争を爲すは余の好まざるところなり、然りと雖も氏が苟も哲學の論壇上に立ちて此の如き言論を爲す以上は、余亦一言之に付きて注意する所なかるを得ず、蓋し止むを得ざるに出つるなり、故に此には單に疵瑕を指摘するに止まるのみ、

氏曰く「概念なるものあり、念ふ所あるが如くにして而も念ふ可らず、念ふべきは箇象概念は思ふべきにあらず」と、此に所謂思ふと云ひ、念ふと云ふものは果して何の意か、思念の字に付きては古來の用法頗る曖昧たるものゝ如し、或は思考の意に用ひ、或は表彰の意に用ひ、甚しきに至りては想像の意にも用ゆ、氏が意は果して其何れに歸すや、而して氏は「遂に概念なるものを念ふを得ず」と云へり、念の字若し想像表彰の義ならば或は氏の言の如くなるべし、然れども思考の義ならば、吾人が抽象的の概念をも考へ得ずと云ふことなかるべし、加之吾人は具躰的の表彰によりて以て抽象的のものを表彰せしむることと之なきにあらず、要するに哲學上の論文は尤も其の用語の意義の精細明了なるを欲す、此の如き曖昧的文字は斷して哲學的と謂ふべからざるなり、

氏又曰く「故に思ふべく識るべきは白馬と黄黒馬、馬なるものは思ふべからず識るべからず、想を離れ識を

絶して、初めて馬を觀るべし、馬は冥契して知解すべからず」と、是れ果して眞なるか、吾人は表彰によりて以て馬を考ふを得るにあらずや、氏は表彰を離れて能く馬を考へ得となすか、

氏は又概念は「能く識を統一」する力ありと考ふと雖ども、識を統一するは即ち主觀の力にして自覺の作用なり、概念は唯表彰を綜合したるものに過ぎざるのみ、且つ夫れ道なるものは主觀に存して客觀に存せずと云ふ、道如何にして主觀にのみ存すべきか、眞理は果して吾人の心理にのみ存するものなる乎、近代哲學史上に於て「フィヒテ」哲學の誤りたる所の果して何の點に存するかを看よ、

氏が四一二頁に述ぶる所を以て之を見れば、氏の說は全然主觀論たるを免れず、然らば知識の起原、眞理の標準、知識の外物に對する確否等、其の他知識論上に於て講究する諸種の問題は、如何にして之を說かんとするか、余は固より氏が答辯の如何を見んと要せず、唯自から之に對して熟考せられんことを欲するのみ」

氏又曰く「現象の天地何の處にか絶對あり本躰あり道なるものあらむ」と、然らば則ち絶對と云ひ、本躰と云ひ、道と云ふものは、果して孰れにか存在する、顯象の世界何の處か絶對にあらざらん、本躰にあらざらん、道にあらざらん、若し其れ顯象とは絶對にあらず、本躰にあらず、道にあらざるものゝ稱なりと云はゞ、是れ同一命題のみ、是れ無意義の言のみ、

其他仔細に之を研究すれば數葉文字の能く盡す所にあらず、余は田岡氏と一面の識なきにあらず、最も此言を爲すを忌む、然りと雖も氏が評論の結果は、余をして次の決論を生ずるの止むを得ざるに至らしめたり、曰く田岡氏の評論は、其用語、其論旨、共に余輩をして滿足を感ぜしむること能はず、加ふるに嘲弄的の口吻を以てせられたるは、實に學者として、氏の爲めに惜まざるを得ず、漢文のことは氏能く之を知るべし、哲學のことは談豈に容易ならんや、唯讀書の能くする所にあらず、氏若し斯學に志あらば、余と共に研磨數年の後、文壇上更らに相見るの機會あるべし、

日蓮上人

史傳

笹川羯磨

松杉暗き池上の骨堂に六百年の夢穩やかに眠れる稀世

の快頭陀が一生を觀ずれば、英姿勇髯として彼が當年の意氣と壯志とを憶はずんばあらず

一宗の開山として、御祖師樣として、幾萬法華宗徒の崇拜嚮ならざるにも係はらず、一方に於ては彼は殆ど罵詈嘲笑の間に沒せられたり、山師として、將(はた)惡比丘として、彼は所謂物識の間に於て唾せられぬ、彼れ生れて六十一年、其間短しと云ふべからず、轗軻不遇、流離困頓、洽く苦楚を嘗め、備に辛艱を經たり、此間に於て用ゐたるの方便手段は殆ど山師に類するものもあり、然も落々たる雄心は水に遇て溺れず、火に遇て熔けざるなり、法華宗宣布に於て一意力めたるの精神に至ては彼は誠に人中の傑、若し彼を稱して高僧大德と云ふは未だし、彼は一種の横着者なり、若し彼が言を假れば日本國にそこばく持扱ひたる曲者なり、然れども譬へ横着者なるにせよ、厄介ものなるにせよ、其稀世の英傑なるに至ては疑ふべからず、

清澄山峰明に、妙の浦水媚ぶるのほとり一簇の漁村あり、枯椿數隻の小船を纜ぎ、疎羅一張の魚網を晒らす、所謂安房の小湊なるもの即ち是れなり、貞應元年二月十六日日蓮上人は此に生れぬ、本化高祖年譜によれば、姓は藤原、其先四郞、諱は政直なるもの邑を遠州貫名に食み、因て貫名を以て氏とす、其曾孫次郞重忠事に坐して房州長狹郡に謫せられたりと云ひ、蓮公薩埵略傳によれば父祖平氏の逆を避けて東海房州に謫すとあり、然れども彼か斯る名族の後なるやに至ては疑なきに非ず、其父の貫名重忠なるものは信ずべし重忠が事に坐し、若くは平氏の逆を避けたりと云ふに至ては、英雄其出を美にするの類なきに非るなきやを疑ふ、上人自ら稱して旃陀羅の子と云ふ、旃陀羅は屠者の義なり、恐らくは漁者の子なるべし、日蓮註畫讃に父自ニ遠州一竄ニ安房州長狹郡東條鄕片海市河村小湊浦一成ニ漁叟一とあり從ふべし、其母淸原氏每に旭日を拜して念誦す、一夕日輪蓮華に乘じて其胎に託すると夢みて身めりと云ふは、波が名に因みての虚託なるべく、誕生の日門前靈泉迸ると唱ふるは有難連の作話なるや必せり、生れて岐嶷、容貌凡ならずと云ふは蓋し然らん、其一生の事業より察するも、彼が幼時に才發慧敏なりしは推想するに足るべし、年十二にして郡の淸澄寺に入れり、正に是れ彼が佛道修行の第一步なり、十八歲薙髮し、師道善に號是生を受く、日蓮は彼が自ら名くる處なり

〔蓮公薩埵略傳〕[illegible]天狗物頭華（此云黃蓮華）因ニ涼月一而開矣、芬陁梨華（此云白蓮華）因ニ烈日一而敷焉、因ニ涼月ニ譬ニ歡喜教

化一、因ニ烈日一比ニ遍惱敎化一、今以日蓮爲ニ謹名一者以表ニ烈日折伏一也

彼が日蓮の稱號は斯くの如き因緣に出でたるや否は余が知らざる處、然も其烈日折伏は彼が一生の眞面目たるべし、既に眞言を修め、鎌倉に遊び、淨土宗を學び、二十一、一たび故鄕に歸り、再び幼時の夢を繰返せり、然も彼は又吳下の阿蒙に非ず、既にして鎌倉に赴き、叡山の僧尊海に從て、四明嶽に上り、天台の敎を受く、歲二十五泉涌寺に至り、宋の僧道隆と相見、又書を讀む、歲二十七南都を訪ひ、高野に攀ぢ、其後東寺に學ぶ、此間に在て彼は儒學に和歌に修むる處あり、立脚の地漸く成る、彼が燃えんとするが如き野心は此間に於て育せられぬ

往て鎌倉に遊ばんか、建長寺の甍高くして、道隆の譽中外に轟けり、柳營の歸依は淺からず、上下の渴仰は少からず、豈日蓮胸裡の焰に油を注ぐなからんや、去て洛を訪はんか、六波羅密寺に善男善女の影婆娑として、梵唄讀經の聲日夕絕えず、東山三十六峰の麓、伽藍堂塔の林の如きを見る、日蓮たるもの心中無限の感慨なからんや、高野の彩麗、延暦の偉觀、盡く彼が抱懷する野心を刺衝せざるはなし、法華經八卷讀了し、悟て三昧に入る、勃々たる功名心は今や萬丈の氣焰を吐けり

〔本化高祖年譜〕　歸ニ淸澄寺一構ニ室寺傍一、四月二十二日入ニ三昧一二十八日從ニ三昧一起而向ニ旭日一高唱ニ法華題名一、實本化迹日弘法之權輿也

彼は世上を睥睨せり、氣虹の如し

〔蓮公薩埵略傳〕　建長五癸丑年　四月　稔入斯日　何侯乎、師始大悟、止々不レ須レ說我法妙難レ思、然而知而不レ說是佛法中怨ニ最後斷種人一也、九思三省謂曰夫能仁者忍土往來、八千友矣、或代ニ鳩命一或救ニ虎餞一豈我重レ身輕レ法耶、何恐ニ小烏之酷嚴一能轉ニ閻羅之極苦一哉、今我所說眞獅子吼、他所說者是野干鳴也、卽入ニ善公之南面一集レ衆開講所レ謂念佛是阿鼻等也

嗚呼是れ彼が三十二の時、人生最も有爲の期に屬す日蓮は先づ其豆大の故鄕を離れぬ、事を爲すべきの地は星月夜鎌倉の都に在り、先づ中堅を衝て以て其の敎を播かざるべからず、此歲五月鎌倉に入る、彼が目的とする處は禪、律、念佛、眞言の諸宗を排し、自家稱ふる所の法華宗を施かんとするにあり、嗚呼一個の行脚比丘豈能く幕府の歸依渴仰する禪宗を壓倒し得べけんや、天下信徒に富める律、念佛眞言の諸宗を排擊する

は到底其力に非るなり、世間は冷遇し、高僧は嘲笑し、幕府は之を顧みず、彼が勢は屈せざるべからず、豪邁不撓は彼が特性なり、權謀術策は彼が利器なり、静に時機を待てり、然も其間に於て悠々策を講じぬ、名越松葉ヶ谷に於ける破衣寒食の僧は狂瀾を雙手に覆さんとす、正元元年四月彼が十法界因果抄は成りぬ、文應元年五月其法華題目抄は稿を脱せり（蓮公大師年譜）共に布教の一方便に過ぎず、既にして時や到れり、比年天災つゞき、地妖多し、

〔吾妻鏡〕　正嘉元年八月廿三日乙巳晴、戌刻大地震有音、神社佛閣一宇而無全、山岳頽崩、人屋顛倒、築地皆悉破損、所々地裂、水涌出、中下馬橋邊地破裂、自二其中一火炎燃出色青云々

〔同書〕（同年）九月四日乙卯小雨降、申刻地震、去月廿三日大動以後至レ今小動不二休止一云々

〔同書〕（同年）十一年八日巳未大地震、如二去八月廿三日一

〔北條九代記〕　二年八月一日大風雨、天下損亡云々

〔吾妻鏡〕（同年同月）廿八日甲辰天晴、戌刻熒惑犯二南斗第五星一、同時大流星長四尺幅四尺自レ乾至レ巽、今日評定、將軍家上洛延引云々

〔同書〕　正元元年十月十六日辛卯、子尅月蝕不二正見一

〔北條九代記〕（同年）今年天下大飢饉

〔安國論御勘由來〕　正元元年巳未大疫病同二年庚申四季二大疫不レ已、萬民既超二大半一招レ死了

〔吾妻鏡〕　文應元年六月一日丁酉、疾風暴雨洪水、河邊人家大抵流失、山崩人多爲二磐石一被レ壓死

〔如是院年代記〕（同年）八月十四日大風

嗚呼是れ乘ずべきの機なり、馬子は疫病の流行を以て佛罰の報となせり、宗教は人の弱點に投ず、疑懼百出の際は布教最良の時機なり、日蓮は之を觀破せり、文應元年七月彼が心血を絞りて著せる立正安國論は松葉谷窟中に成れり、時に歳三十九、其十六日幕吏宿屋太衛門光則の手を經て之を前相模守時頼の下に致せり

立正安國論滔々七千五百餘言（正中山寺本に從ふ）、反覆辯難すと雖畢竟言を天變地異に托し、以て自家の法華宗を布かんとするの意に外ならず

旅客來嘆曰、自二近年一至二近日一天變地夭、飢饉疫癘遍滿二天下一廣迸二地上一、牛馬斃レ巷、骸骨充レ路、招レ死之輩既超二大半一、不レ悲之族敢無二一人一、然間或專二利劔即是之文一唱二西土敎主名一、或持二衆病悉除之願一誦二

東方如來之經ヲ、或仰ニ病即消滅不老不死之詞ヲ、崇ニ法華眞實妙文ヲ、或信ニ七難即滅七福即生之句ヲ、調ニ百座百講之儀ヲ、或因ニ秘密眞言之敎ニ、灑ニ五瓶之水ヲ、有ニ全ニ坐禪入定之儀ヲ、澄ニ空觀之月ヲ、若書ニ七鬼神之號ヲ而押ニ千門ニ、若圖ニ五大小之形ヲ而懸ニ萬戸ニ、若拜ニ天神地祇ヲ而企ニ四角四界之祭祀ヲ、若哀ニ萬民百姓ヲ而行ニ國主國宰之德政ヲ、雖レ然唯摧ニ肝膽ヲ彌逼ニ飢疫、乞客溢レ目、死人滿レ眼、臥レ屍爲レ觀並レ尸作レ橋、覩夫二離合レ璧、五緯連レ珠、三寶在レ世、百王未レ窮、此世早衰、其法何廢、見依ニ何禍ニ是由ニ何誤ニ矣

是を其冒頭に於けるの辭となす、而して彼は此等天變地異を以て何にか歸せんとする

倩傾ニ微管ヲ、聊披ニ經文ヲ、世皆背レ正人悉歸レ惡。故善神捨レ國而相去、聖人辭レ所而不レ還、以レ是魔來惡來、災起難起、不レ可レ不レ言、不レ可レ不レ恐

天災地妖は彼が自家藥籠中のものとなれり、他宗排擊の好武具なり、或は金光明經を引て疫病流行、彗星數出、兩日並現、薄蝕無レ恒、黑白二虹表ニ不祥相ヲ、星流地動、井内發レ聲、暴雨惡風不レ依ニ時節ニ、常遭ニ飢饉ヲ、苗實不レ成、多有ニ他方怨賊ヲ、侵ニ掠國内ヲ人民受ニ諸苦惱ヲ、土地無レ有ニ可レ樂之所ヲと嚇し、或は大集經を抄して諸有井泉池一切盡枯涸、土地悉鹹鹵、敗裂成ニ丘澗ヲ諸山皆燃、天龍不レ降レ雨、苗稼皆枯死、生者皆死盡、餘艸更不レ生雨レ土皆昏闇、日月不レ現レ明、四方皆亢旱、數現ニ諸惡瑞ヲ、十不善業道、貪瞋倍增、衆生於ニ父母ニ觀レ之如ニ獐鹿ヲ、衆生及壽命色力威樂滅、遠ニ離人天樂ヲ。皆悉墮ニ惡道ニと脅かす、百川の朝する處は海に在り、災妖は擧げて之を他宗の所爲に歸せり、痛罵至らざるなし、如レ是不善業惡王惡比丘毀ニ壞我正法ヲ損ニ減天人道ヲ、諸天善神王悲ニ愍衆生ヲ者棄ニ此濁惡國ヲ皆悉向ニ餘方ニと唱え、夫四經之朗、萬人誰疑、而盲瞽之輩、迷惑之人妄ニ信邪說ヲ、不レ辨ニ正敎ヲ、故天下世上於ニ諸佛衆經ニ生ニ捨離之心ヲ無ニ擁護之志ヲ仍善神聖人捨レ國去レ所、是以惡思外道成レ災致レ難矣と論ず、其當世を罵るや、佛閣連レ甍、經藏並レ軒、僧者如ニ竹葦ヲ、侶者似ニ稻麻ヲ、崇重年舊、尊貴日新、但法師諂曲而迷ニ惑人倫ヲ王臣不覺而無レ辨ニ邪正ヲと誣り、法然の如きは詬罵飜弄其極に達せり、淨土念佛は彼が正面的大打擊を蒙りぬ、法然を罵ては一代の聖敎を破り、遍く十方の衆生を迷はす、と喝し、曇鸞道綽を嘲ては權に就き實を忘れ、先に依り後を捨て未だ佛敎の淵底を探らずと極言す、虛實法を盡し、辨難術を換え、八面攻擊す、而して其自らを稱

するに當ては予少量なりと雖忝く大乘を學び、蒼蠅驥尾に附して萬里を渡り、碧羅松頭に懸て千尋を延び、弟子一佛の子を生じ、諸經の王に事ふ、何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さゞらんやと說く、謙するが如くにして然も慢せり、其一步を進むるに當ては全是れ頑愚、敢て賢を存せざらん、唯經文に就き聊か所存を述ぶ、抑も治術の旨內外の間其文幾多、具に擧ぐべき難し、但し佛道に入り、數ば愚案を廻らすに謗法の人を禁じ、正道の侶を重ずれば國中安穩天下太平なりと唱ふ、彼れ自ら推擧するなり、法華經に云く、若人不レ信毀ニ謗此經一即斷ニ一切世間佛種一乃至其人命終、入阿鼻獄と、彼は三面六臂此利器を運用せり

法華涅槃之經敎者一代五時之肝心也、其禁實重、誰不ニ歸仰一哉、而謗法之族忘ニ正道一之人、剩依ニ法然之選擇一彌增ニ愚癡之盲瞽一是以或忍ニ彼遺體一而露ニ木畵之像一或信ニ其妄說一而彫ニ莠言之模一弘ニ之海內一翫ニ之廓外一所レ仰則其家風所レ施則其門弟也、然間或切ニ釋迦之手指一結ニ彌陀之印相一或改ニ東方如來之雁宇一居ニ西方敎主之鵝王一或止ニ四百餘廻之如法經一成ニ西方淨土之三部經一或停ニ天台大師講一爲ニ善道講一如レ此群類其誠難レ盡、是非ニ破佛一哉、是非ニ破法一哉、是非ニ破僧一哉、此邪義則依ニ選擇一也、嗟吁悲哉、背ニ如來誠諦之禁言一哀哉墮ニ愚侶迷惑之麤語一早思ニ天下之靜謐一者須レ斷ニ國中之謗法一矣

悲哉日本國皆出ニ正法之門一而深入ニ邪法之獄一愚矣上下萬人各懸ニ惡敎之綱一而鎭纏ニ謗法之網一此依ニ曚霧之迷一沈ニ彼盛焰之底一豈不レ愁哉、豈不レ苦哉

鐵面皮にも、臆面もなく、彼は自己の抱懷する處を云ひ放てり、威嚇し、脅迫し、曲辯し、他宗を訶罵し、法華宗を讚嘆し、併せて自己を推撰せり、何等の恠僭、罵倒せられたる幕府は赫怒せざるを得ず、翌る弘長元年五月十二日彼は終に伊豆の伊東に謫せられたり、彼が卓落不羈の志は一敗に遭て屈せず、此間に於て勘氣抄を著し、風雲の際するを待てり、配所の月を眺め、

客杭濤聲を耳にすること三年、弘長三年二月廿二日一通の赦免狀は彼を謫所より救ひぬ

〔本國寺古文書〕　日蓮法師可レ有ニ赦免一由被ニ仰出一候更ニ可レ被ニ召返一候也仍執達如件

霜月十一日　　　　敎　家　花押

　　　　　　　　　久　家　花押

彼は悠々世運を傍觀せり、然も敎を布くに於て敢て倦まず、弘長元年七月には法華眞言勝劣抄を著し、同九月には會佛者無問抄を作る、虎視耽々一步を轉ぜざるなり

（未完）

雜　錄

女學雜誌記者の自由派に對する評論

女學雜誌第四百十二號に於て、同記者は「敎界評論の道」と題し、宗敎界近時の批評の警語は、一に正統不正統なり、二に信不信なり、三に自由非自由なりと云ひ、以て此等の批評に對する批評を與へられたり。惟ふに、記者の所見たるや、極めて着實、敎界近時の弊を指摘すること適切にして、全躰の上より見れば大に敬服し、同意するところなきに非ず。吾人は、宗敎界の評論として着實、至誠なること此の論の如きもの、多からんことを希望す。然るに自由派に對する評論に至りては、特に吾人の警戒となり、また敎訓となるべき所にして、大に注意すべく思慮すべきものなるが、その中少しく吾人の意を得ざる點また無きにあらず。是を以て其評論中より自由派に對するもののみを玆に揭げて、聊か吾人の愚見を附せんとす。記者自由と非自由との判別につき論じて曰く、

「彼の自由派が、他の異派の人を難ずるや、常に「自由」を以て、自己獨得の洪量卓識の如く言ひ做し、局促を脫し、執迷を離れ、眞に能く敎義の進步せる要理を味わひ得るものは、他に存することなしと斷定する也。夫れ、何如なるが、自由にして、將た何如なるが非自由なるかは、大ひに硏究すべきことなれども、抑も早く自己を以て自由を味はひ得るものと判定し、他を以て否らざるものと識斷するは、元來、「自由」の主旨に適せりや。斷定は、尙ほ可なり。斷定と共に待遇を定め、獨り自己が認めたると同樣の事を認たむるもの耳を以て、初めて能く宗敎を味はひ得たるものと種別するに至りては、非自由も亦た太甚しからずや。

又自由派の敎義打破を評して曰く、

「彼の自由派が敎義僻を打破せんとするは、一應、聞えたれども、之を打破せんとするの餘り、即はち之に僻し、敎義を破して、而して『敎義を破することを主旨とするの或物』を代へて建設するの態あり。抑そも、敎義を餘り切要なりとせずば、即はち之を切要なりとせずして放任するを以て可とせずや。之を放任して、重んずるものには、重んぜしめ、輕んず

るものには、輕んせしむ。此れ即はち切要なりとせざるの道にあらずや。然るに、之を切要とせずとし乍ら、之を打破するを切要とし、乃はち、其打破に專らにして、他に緊要の事あるを放擲するが如きは、何事ぞ。

（以上女學雜誌第四一二號五、六頁但圏點は原文の通）

第一、自由と非自由――若し夫れ自由派に屬するものにして、自己獨り自由を味ひ得るもの、他は悉く然らざるものと判定し、又、自己と同樣の事を認め、同一の信仰を有するものゝみを以て始めて能く宗敎を味ひ得たるものと種別する如きに至りては、固より記者の難ずる如く、反て非自由の甚だしきものにて、局促執迷の極と謂はざるべからず。然りと雖ども、惟ふに自由派の主張する所決して斯の如く狹隘、斯の如く固執なるにはあらざるべし。吾人の解する所によれば、自由と非自由との別は何も記者の所謂「道」を味ふ點に於て差異あることを主とするにあらずして、寧ろ敎理を解説する上に於て狹く制限すると然らざるとより起れる區別ならんと信ず。夫れ記者の言ふ如き「道」を味ふてふ妙味の度に至りては固執なる儒者も、磊落なる禪家も、頑固なる天主敎徒も、自由なるユニテリアンも恐らく固執と自由とによりて差別あることなかるべしと思はる。そは「道」を味ふと云ふ如きことは全く主觀的の事柄にして、彼のシェリングが所謂『絶對の妙境』に達せりと自ら云へるが如く、極めて神秘的の現象なれば或は寧ろ固執的信念を有する人の勝る所ならんかも知るべからざればなり。敎理の解説上、制限せらるゝ所なければとて、決して記者の所謂「道」の神韻を探知する如きことに優れたるにはあらざるべし。要するに自由と非自由との區別は『宗敎の妙味を味ふ』と云ふ如き感情上の問題にはあらずして、單に宗敎の研究、敎義の解説などの如き知力上の區別たるなり。自由派が固執派に對する議論は專ら論理的の問題たるのみ。如何なる思想が合理的にして如何なる敎義が不合理なるかの判斷にあるのみ。これ決して「自由を味ふ」と云ひ、「宗敎を味ふ」と云ひ、「道」の神韻を探味すと云ふ如きことを主要として云ふものにあらず。畢竟「自由そのもの」に誇るにあらずして、合理をとり不合理を排するにあり。

第二、敎義打破の要と不要――記者は敎義を打破するを以て不必要なることゝなして曰く、「抑そも敎義を餘り切要なりとせずして

放任するを以て良しとせずや。之を放任して、重んずるものには、重ぜしめ、輕んずるものには、輕んぜしむ。是れ即ち切要なりとせざるの道にあらずや」と。而して敎義を切要ならずとしながら之を打破するを切要とするは抑も何事ぞやと難ぜらる。これ一應、尤もなる言ひ方なり。されど記者よ、請ふ一考せよ、自由派特にユニテリアンが敎義を打破する傾向あるはたゞ敎義は切要ならずとの主意のみを以て之を打破せんと勉むるものにあらず。若し單に切要ならずとのことのみならば何を以て之を打破する爲めに無益の勞をとらん。記者の云ふ如く、之を自然に放任する亦た可なり。然るに、專ら之を打破せんことに力を盡すものは、切要ならざるのみならず、有害なるを以てなり。夫れ敎義を以て人の思想を制限し、自然の發達を妨ぐる既に有害なるにあらずや。然るに尙その敎義中には特に敎育上、社會發達上弊害あるもの少なからざるにあらずや。若し自ら社會の進歩に害あり、理想の發達に妨げある敎義を迷執し、尙ほ之を社會に傳播せんとするものありとせば如何。苟も社會の改良に志あるものならんには誰か之を傍觀し、之を自然に放任することを得ん。若し之を打破し、之を改革するものなくんば、何に依て思想の進歩を見るべき。夫れ古來學理の進歩し、宗敎社會の發達せるもの、蓋し數多の打破者あり、改革者ありて、血を流し、命を捨てしによるものならずや。今日自由派の敎義を打破するや、單に打破することを喜ぶものにあらず、その弊害を自ら認め、之を改革して一段の進歩を計らざるべからずと切望する所あればなり。豈に無益の勞をなして他の信仰を打破せんとするものならんや。又、記者は「其打破に專らにして、他に緊要の事あるを放擲するが如きは、何事ぞ」と言はるれど、これ思はざるの甚だしきものならずや。吾人も亦自由派が社會になすべき事業の多きを知る。されど社會は自ら分業にして、一手を以て萬事に當ることは到底望むべからざればなり。惟ふに記者が斯の如き言を吐かるゝものは、思想界の進歩を助けんが爲めに不合理的、迷執的の弊害ある敎義を打破することを切要と認めざるに依るものなるべしと雖ども、自由派に於ては斯る必要あることを確信するものなり。

又記者は敎義を打破せんとするの餘り之に僻して『敎義を破することを主旨とするの或物』を代へて建設するの態ありと難ぜらるれど、斯く見ゆるは、蓋し止むを得ざる所にして、起信論に所謂、因言遣言と同類

なり。若し教義を破せざるべからずと云はゞ「教義を破せざるべからず」と云ふ一種の教義を立つるものなりと云はゞ吾人たゞ默せんのみ。

思想の生涯

若し嚴密なる意味に於て云はんか、吾人の識に現ずる一切の事物は、その內界に屬すると外界に屬するとを論ぜず、一として全く同じきものあるなし。たゞ其關係に於て此れと彼れと互に接近することあるのみ。然るに思想の上より見るときは、同一なるものあるべき筈なり。若し一切の諸物悉く異なりとせば、斷定てふものゝ起ることなく、隨て知識は生ぜざるべし。然るに實際吾人が知識を有するは事實なれば、若し果して同一なる實物なきに於ては、何か彼と此とを結び付けて同一なるが如くなすものなかるべからず。これ即ち心の統一的傾向と稱するものあるを以てなり。この傾向たるや、識の本性とも云ふべきものにして、恰かも物質界に引力ありて一の物躰と他の物躰とを引きつくるが如く、一の念と他の念とを結合するなり。抑も斯る傾向の現はるゝは、精神てふ一個の實躰ありて、種々の尨雜なる念を統一するによるものか、又たその如き實躰あるにあらずして、たゞ物躰と物躰と相ひくが如く、感覺と感覺と相引くに過ぎざるものか。これ實躰論者と伴生學派との說の相異する所にして、極めて根本的の議論に屬すれば、今茲に何れとも言はざるべし。そは斯る根本的の問題に立ち入らざるも、本論には毫も差支なければなり。

夫れ吾人に現はるゝ一切の感覺は、その質或は量に於て彼れと此れと異なるものにして、一として同一なるにあらずと雖とも、本來、精神に上述の如く統一的傾向あるを以て、その關係の互に接近せる所より之を統一して同一躰となすなり。斯く統一したる結果を稱して概念と云ふ。若し精神の活動あらんか、何時も此傾向を以て働かんとするにより、少しにても機會あらば、絕えず統一の範圍を廣めんとするなり。是を以て最初極めて實際に近き統一より漸々進みて益々實際に遠ざかるに至る。例へば、初めは數本の筆を統一するより、進みて二三種の筆を統一するに至り、尙ほ進みて筆全躰を統一し、又尙ほ進みて筆も硯も墨も悉く統一して文房具てふ同一躰となすに至る。之を換言せば、外延の狹き概念より起り、漸々進みて、益々外延の廣きに達

するものなり。斯くの如く狭小なる統一より起りて、漸次廣大なる統一に達する、即ち思想の發達と云ふべし。然り而して此傾向大に發達するときは遂に物界、心界、宇宙等の如き廣大なる概念を生じ、尚ほ進みて、有と無との概念を生じ、遂に佛教に所謂、非有非空亦有亦空の眞如と云ふ如き平等無差別の境に達す。既に此點に達すれば、統一的傾向の極に至れるものと云ふべく、全く不可念、不可説の境界にして概念とも何とも名稱すべからず。これ離言絶慮と云ふ所以なり。

斯くの如く、統一的傾向進歩してその極に達すれば、全く識に浮ばざるに至るものにて、知識思想の死滅と謂ふべし。然るに思想の進歩たるや、恰かも形躰の發達が漸々進み遂に自ら死に達して止む如く、發展し又發展して漸々高度に達し、遂に自ら無識てふ死滅の境に至らずんば止むものにあらず。又其起源に溯れば、最初全く統一作用のなき時代にありては一切無差別にして、毫も知識てふものあることなし。然るに統一的傾向の萠芽を發するに至りて始めて知識思想の光明現はれ、漸次此の傾向の進歩と共に進歩し、その極點に達するに至れば遂に知識を空し、思想を絶するに至るものなり。無より出でゝまた原との無に歸る。識の光明あるは只だその中間なるのみ。之を思想の生涯と云ふべきか。

何人の思想も必ず此域にまで發展するものと云ふにはあらず。そは此極に至らざる前に身すでに死す人多ければなり。されど思想そのものゝ生涯は本來斯る形式によりて進歩するものと云ふべきなり。若し之を哲學史に徴せば、自ら明かならん。古來哲學的推究の極は遂に絶對てふ境に至らざれば止まざりしにあらずや。之を一神と云ひ、本躰と云ひ、實在と云ひ、理と云ひ、心と云ふなどその語相違するも、畢竟統一的作用の究局に達せる、平等無差別の境にあらざるなし。されど斯の如きは純然たる思想の形状たることを忘るべからず。若し客觀界より來る事實多くして、精神は寧ろ受身の位置にあるときは、決して斯の如きに至らざるなり。これ厖雜なる個々物の爲めに妨げらるゝを以て思想自らの作用を恣にすることを得ざればなり。これ即ち、實驗を主とする科學が上述の如き統一的境界に至らざる所以なるか。されど實際の知識は思想自らの虚形的進歩にあらずして。統一の不充分なる科學なることを忘るべからず。

布教上の二大標準

佛教者は佛教を以て國民を教化せんとし、基督教者は基督の福音を傳へて國民を開導せんとし、また神道家は惟神の道に基きて國民の發達を計らんとす。各々其依る所を以て教化の任務を盡さんとする固より可なり。然りと雖ども、その傳ふる所、單に自教の教義にのみ偏し、之を以て唯一の標準と認め、毫も他を顧るなきに至らば、國民の開導とならざるのみか、反てこれが進歩を害し、發達を防ぐる如き憂を生ぜんことあるべし。固より古代にありては、尙ほ未だ今日の如く學理の進歩なかりしを以て、經典の教ふる所を以て絕對的の大道となすより外に道なかりしが、既に社會の進歩したる今日となりては大に之と異にして、自教の外に一般社會の認めて眞理となすもの存するにより此光に照して教義上の判斷をなし迷妄に陷らざるやう意を用ひざるべからず。是に於て布教上の標準とも云ふべきものを明かにし、佛教を布くにも基督教を傳ふるにも凡て此標準に照してその教旨の善惡を判別せしむるは極めて必要なることゝ信ず。若し然らずば各々自宗の僻する所にのみ流れて中正を失することあるべければなり。故に吾人はその佛教たると、基督教たると、又神道たるとを問はず、苟も傳道界に立たんとするものならんには、必ず依て以て標準となさゞるべからざる一定の原理を定めんとするものなり。その原理とは何を云ふか試みに之を述べん。

第一、國民の信念を最も確實と認めらるゝ學理と一致する方向に導く可き事

今日の知識を以て自然界の萬象に關する法則悉く明確になりたるものとは云ふべからず、また何れの學科に於ても尙ほ未だ議論の決せざる點甚だ多ければ、今日の假說を取て萬代不變の眞理などゝは決して思ふべからずと雖ども、然れども大躰の上より云へば、學界の輿論、定說と見るべきもの全くなしとは云ふべからず。而して此等の定說は何れも各專門家の中に於て最も確實と認めらるゝ所にして、將來之に優る學理の發見せらるゝ迄は、先づ之を以て眞理と假定しおかざるべからず。そは之を措て他に尙ほ確實なる知識を得る能はざるを以てなり。萬世不變と云ふ如き眞理は固より何人も切望する所なるに相違なしと雖ども、今日の科學的研究に於ては斯る性質のものは極めて尠しと云ふも不可なるべし。故にその時代に於て專門家の中に最

も確實なりと認めらるゝ所によるより他に途なきなり。

今日までの宗敎上の狀態を觀察するに、佛敎にても基督敎にても、その敎義中には物質界に關し、精神界に關し、社會に關し種々の迷信的觀念混じおりて、今日の學理と衝突する所決して尠からず。隨て之を信ずるものゝ信念を大に誤らしむることあるは勿論なり。又た人民の腦中には自ら種々の迷信を遺傳し來れるものなるにより、一般の人々の信念には不合理なる點極めて多し。されば宗敎家はその時代の學理を標準となし、一方に於ては敎義上の迷信を正し、又一方に於ては人民の誤想迷信を破り、以て正確なる信念を發達せしむるやう注意せざるべからず。これ何人にも既に充分知れおる所なるべしと雖ども、實際に於ては之に反すること多きは甚だ悲しむべき次第なり。今日の宗敎家にして若し此標準を重ぜざる如きものあらば、之れ社會の進步、人知の發達に反する有害無益の徒と謂はざるべからず。

第二、善良なる日本臣民を養成するを以て德化の目的となすべき事

今日の知識より考ふれば、敎育も宗敎も悉くその國の性質と調和すべきものにして、その敎化の目的、方法たるや、宜しく之に準ぜざるべからず。故に宗敎家が國民を敎化するに當りて第一に念頭におくべきは己れが說く所の敎は果して善良なる日本臣民を養成するに適せるか如何と云ふことなり。固より佛敎にあれ、基督敎にあれ、共に殆ど二三千年も以前に異國に於て起り、爾來諸國に傳はりて種々の變化を受け來りしものなれば、その敎義、道德の現今の日本に適せざる所あるは止むを得ざる次第なり。是を以て、之を傳へて人民を敎化せんとする活人がその敎義道德の適するものと然らざるものとをよく判別したる上にて實地に施さゞるべからず。若し日本臣民たる德義に反する如きものあらば、忽ち此點は退けざるべからず。又今日民間に行はるゝ風習にして、將來國民の發達を妨する如きもの決して尠きにあらず。されば宗敎家たるもの、一方に於ては自ら說く所の敎が果して日本臣民の德義を養成するに適するかを省み、又一方に於ては現在行はるゝ風習の善惡を察し、以て善良なる日本臣民をつくり得るやう力めざるべからず。若し此標準に反するに至れば、忽ち宗敎と國家との衝突を生ずるものにして、その宗敎は惡宗敎と認められざるを得ず。

若し布教上に於て以上の二標準をよく守るに至らんか、宗教は學理と一致し、國家と調和し、教育と相伴ふに至るべし。斯の如くして始めて眞正の教化をなし得べきなり。僧侶たり、傳道師たるもの之を實地に省みずして豈に可ならんや。

教界改革の困難

近來頻りに先覺の士は教義の陳腐を認め、實地の弊害を憂ひて、宗教改革の必要を唱ふるに至れり。佛教内既に革新論者多く、基督教内また乏しからず。神道に於ても一二先覺の士は切に之を感ずるものゝ如し。是れ社會の大勢に刺戟せられて自ら起る現象にして、敎義、宗制の力よく之を支へ得る所にあらず。遠からずして教界一般の上に一大變動のあるべきは、識者を待たずして、今日より豫想し得べきなり。吾人は斯る革新的一大變動の一日も早く現出し、教界の弊風を矯め、新宗教の起らんことを刮目して待つものなり。然るに教界革新のことたるや、決して容易の事にあらず、種々の困難經へるを以て革新的勢力が之を斷ち得る程に增大するにあらざれば、一大快事を見ること能はざらん。夫れ佛教には佛教の困難あり、基督教には基督教の困難あり、神道には神道の困難ありて何れも革新論者をして歎息の聲を發せしむるが如し。

その困難たる各教とも種々あるべしと雖ども、其主要なるもの各一つを擧ぐれば、佛教に於ては、僧侶の多數は無知盲目、有力なる信徒は悉く老年の愚夫愚婦、而して此兩者よく結合するにあり。されば少數の微力なる革新論者が如何に東奔西走すればとて容易に之を動かし得ることはできざるべし。

基督教にありては大に之と趣を異にして、傳道者の多數は相應の教育を有し、社會の大勢に感應せざるにあらず。又その信徒も多くは血氣の青年にして、革新的の精神に富むものなり。されば困難は玆に存せずして他の點にあり。即ち財政上の關係より來る困難なり。そは財政上の權力は悉く固執なる外國宣教師の手にあり、而して彼等は本國傳道會社の使命を負ひて來れるものにて、本國の信仰箇條、教會條例は一點一畫も變ずる能はざれば、到底日本の革新論者に同意する筈なく、同意せざるに於ては資本の出所なく、資本なければ運動はできずと云ふ次第なるを以てなり。故に先づ財政上の獨立をなし得るにあらずんば、宗教上の革新

は覊束なしと思はる。然るに近頃獨り組合教會は外國指定の傳道費を謝絶して全く財政の獨立をなしたり。これ基督教界の一大快事ならずや。組合教會こそ革新の先鞭者たるべきものなれ。

次に神道にありてはその教師の多數極めて無教育、卑劣、加ふるに宗教を以て純然たる一種の營業となしおるにより、若し之を改革するに至らんか、無論、祈禱をなし神符をひさぐ等の營業はできざるを以て到底革新などに同意することはせざるべし。故に一二の慷慨家は恰かも反響なき曠原に叫ぶが如し。

教界革新の困難、此に非ずんば彼、彼にあらずんば此。噫革新の成効をみる夫れ難いかな。

彙報

◎内務省令第十號

府社縣社以下神社神職登用規則

第一章　社司及社掌の資格

第一條　社司社掌試驗に及第したる者にあらされは社司社掌に補することを得す

第二條　左項の一に當る者にして直接税年額二圓以上を納むる者は試驗を經すして社司に補することを得

一　明治元年以前に於て五代以上引續き其神社に奉祀したる者の子孫

二　神宮皇學舘本科及專科を卒業したる者

三　皇典講究所六等以上の學階證書を有する者

四　滿二年以上判任待遇以上の職に在りたる者

第三條　左項の一に當る者にして直接國税年額二圓以上を納むる者は試驗を經すして社掌に補することを得

一　明治元年以前に於て五代以上引續き其神社に奉仕したる者の子孫

二　神宮皇學舘本科及專科を卒業したる者

三　皇典講究所八等以上の學階證書を有する者

四　滿二年以上判任待遇以上の職に在りたる者

第四條　官國幣社神職及神職たりし者は試驗を經すして社司社掌に補することを得

第二章　社司及社掌候補者の推薦

第五條　神社に神職の闕員あるときは北海道廳長官府縣知事は十五日以內に氏子氏子なきときは信徒總代に候補者の推薦を命すへし

第六條　第五條の場合に於て氏子(氏子なきときは信徒)總代は命令を受けたる日より一箇月以內に其候補者の履歷書及資格證明書を具し北海道廳長官府縣知事に推薦すへし

第七條　社司及社掌の候補者は闕員の二倍とす

第八條　氏子(氏子なきときは信徒)總代に於て候補者を推薦したるときは北海道廳長官府縣知事は其履歷及資格を調査し學識德行其任に適するものを選擇して其職に補すへし

第九條　第八條の場合に於て候補者其任に適せすと認むるときは北海道廳長官府縣知事は更に第五條の規定に依り氏子(氏子なきときは信徒)總代に候補者の推薦を命すへし

第三章　附則

第十條　此規則は明治二十八年九月一日より施行す

第十一條　此規則施行前より在職の者は引續き其職に在ることを得

第十二條　明治二十五年三月十七日當省訓令第五號其他此規則に抵觸す

る命令は總て此規則施行の日より廢止す

◎先進學院

先進學院は昨年以來著しく進歩し來りしが、來學期より尙ほ一段の改良を加へ、大に規模を擴張して世の需用に應ぜんとす。更に敎師として松本文三郞、岸本能夫太の兩氏を加ふるに至れり。詳細は本誌の廣告中にあれば玆に贅せず。

◎日本ユニテリアン協會

同會每日曜日の演說は例年の通り、炎暑の爲め先月中休會せしが、本月第二日曜日の學術講談會を始めとして以後引續き每日曜午前九時より開會することゝなれり。

◎日本宗敎第二號

「今や、各宗、宗に僻し、各派、派に偏す。互に大道を私して、小岐に入る。人心、未だ安んぜざるに、法士先つ爭ふは、豈に救世の慈悲ならんや」と時弊に慨し、自ら不偏不黨の位置に立ち、一切の宗敎の精美を尋ね、大公至中の法敎を要めんとて世に現はれたる日本宗敎は既に先月十日第二號に達せり。社說には宗敎論あり、論說には釋雲照、加藤弘之兩氏の寄書あり、史傳には戶川氏山崎闇齋、靑柳氏の支那回敎に關する記事等あり、雜纂には元良勇次郞氏の參禪日誌、などもありて、實に讀むべきもの多し。又思潮欄内には各宗敎雜誌に現はれたる名說卓見とも云ふべきもの一々摘要して漏すことなし。その他新著批評、雜誌評論、雜誌目錄、時流などの部類あり。その躰裁よく整備し一として缺くる所なきか如し、「佛敎」記者が宗敎雜誌中の「早苗田文學」なりと評せるは實に至言と云ふべし。記者の苦心察するに餘あり。之を初號に較ふれば一段の進步あるが如し。吾人は本誌の益々强健にして、我國宗敎界の光たらんことを望む。

◎天台宗座主の遷化

前比叡山延曆寺主職大僧正赤松光映師は舊と竹林坊と稱し戊辰の際輪王法親王（北白川宮殿下）を奉して一旦陸奧へ立退き歸順の後ち大僧正に補せられ天台宗の座主となりしが先月十五日比叡山の別室に於て七十七の高齢を以て遷化されたるよし

◎管長認可

臨濟宗相國寺派管長荻野獨園師辭職し相國寺副住職一等敎師中原東嶽師を以て管長に定め度旨出願に付去る八月廿一日内務大臣より認可あり

◎日本傳道會社の特別寄附

同社の寄附金は通常特別共にます／＼增加の模樣なり常議員の巡廻は孰れも熱心の贊成を以て迎へられ好結果を奏し今や特別寄附豫約は總計三千八百圓を超えたりと云ふ

◎本願寺惣集會

本派本願寺廿九年度定期集會は來る九月十日より開議することとなり仝九月六日召集する旨を先般全國各會衆（議員）へ達せりと云ふ

◎天主教の二大建築

一は豫算經費四萬圓にて長崎西上町元大村屋敷に一は十一萬圓にて同浦上山里村に建築せんとて西上町の分は內中町山下某一切を受負ひ既に工事にかゝり浦上山里村の分亦專ら經營中なるが甲は純然たる天主教會堂にして乙は宗教的學校に供すると云ふ

◎日蓮宗僧侶の數

日蓮宗宗務院より內務省へ屆出たる僧侶現數は四千〇六十六名なりと云ふ

◎米國傳道會社派遣員の出發期

前號に記せし「アメリカン、ボード」より本邦に派遣する四名の委員は彌よ來る九月十二日サンフランシスコの瀛船コプチツク號に乘込み來航すべき豫定なりと此程博士バルトン氏より原田助氏宛通報ありたりと

◎本願寺と北海道

東本願寺が北海道に於ける布教事業と云ふを聞くに安政六年同本山僧侶の者函館奉行堀某に向て桔梗郡開墾の事を請ひ越前加賀能登等北國門徒を諭し農民夫婦あるもの男女一百餘人を此地に移住せしめ玆に東本願寺開墾塲に寄寓せしめ其食料をは悉く本山より給與し一百餘萬坪の地を開墾し八十六萬坪の耕地を起して是をは桔梗村と稱するに至る次て聖德太子の堂祠を建て開拓事業を進め堂舍道塲を增設したり明治二年八月始て北海道と稱せられたるに際し朝廷同本山に對し北海道新路開通の綸旨を賜ひしかば翌明治三年六月今の門主大谷光瑩師未だ法嗣にて齡十七歲に在はせし頃英氣勃々乃ち砂原より函館に至る道路及び蛇田より札幌に到る三十餘里の道路をば十一ヶ月を出ずして竣工せしめられ又此間橋梁三十五ヶ所を架したり同十四年門主光瑩師再び北海道に巡錫し今の函館、札幌、江刺の三別院を置き全道事務出張所を函館に設け玉ひぬ然るに連枝をして住職せしむるの別院は全國六十ヶ別院の內近々長濱、河內八尾、伊勢桑名、美濃大垣、越中井波、越中城端の六別院なりしを北海道は明治新開布教地なるを以て前門主光勝師親ら刀鐫を採り去る二十二年齡七十三歲にて見眞大師其影を彫刻し開眼の式を行ひ之を

函館別院に安置されたり尙ほ同別院をして別格として連枝を住職せしむることゝなり今の門主光瑩師三男超眞院大谷瑩相師を同別院住職とされぬ

◎同志社の變動

近頃同志社に一大變動起り、理化學校敎頭たりし下村孝太郎氏は去て大阪に行き工藝所を開かんとし、市原盛宏氏も亦去て日本銀行に入らんとすと云ふ。これ基督敎の倫理を同志社全躰に及ぼさんとする計畫ありしに二氏の意見が合はざりしより起れる結果なりと云ふ。

◎回々敎徒の叛謀

支那甘肅省に蜂起せし回々敎徒の動亂は該敎徒兩派の軋轢に源じ勢中々猖獗なりしにも拘らず回々將軍の努力により一時鎭定の模樣に成行たりしが其後北京に於ける回々敎族の出來ごとに關し該將軍北上せし隙を狙ひ叛亂又復た續起し將軍の家族を殺し家財を奪ひ加之說諭勸告に週旋したる淸國官吏等を屠りて遂に鎭撫の支那兵をも擊退せり動亂の形勢滔滔として黃河を決したる如く猛烈容易に當るべからざるものありといふ嗚呼何ぞ淸國の多事なる

◎征淸紀念銅像

渡邊京都府知事は先月十九日各宗管長及數十名の有志者を待賓俱樂部に招き件の事柄に付き協議せしに何れも是擧を賛して發企者たる事を承諾したり而して是の銅像は最も巨大なる大佛を鑄造し奈良の大佛と好一對たらしめんとするにあり

◎世界の人口

圜輿球上生息する所ろの人間の總數幾何ぞ、最近の調査に據れば殆んど十五億人と算せらる、泣くも笑ふも將た生きるも死ぬるも此の人間にして馬鹿も利口も亦た此の內なり富貴に飽き勢權に輝く人も貧困に沈み落魄に歎ずる人も亦此の中に在り得失何事ぞ貧富何物ぞ幸と不幸と何かあらん邦國何者ぞ唯是れ此の十五億人が蠢々として働くのみ先づ之を大別すれば左の如し

歐洲	三六〇、〇〇〇、〇〇〇人
亞細亞	八三二、〇〇〇、〇〇〇
亞非利加	一七一、〇〇〇、〇〇〇
濠洲及太平洋群島	六、〇〇〇、〇〇〇
北及中央亞米利加乃至西印度	九三、〇〇〇、〇〇〇
南亞米利加	三八、〇〇〇、〇〇〇
合計	一、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇

是れ其大數なり更に宗敎を五大洲に據て區別せんか左の如し　（左表ハ單位ヲ千人位トス）

	歐洲	亞細亞	亞非利加	亞米利加	濠洲及びニユーギニア
猶太	五、五〇〇	二六〇	四三〇	三〇〇	一五
マホメツト	五、七五〇	一六〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	—	二五
ヒンヂコー及シイク	—	二〇七、〇〇〇	二〇〇	一〇〇	—
佛敎其他	一六〇	四三〇、〇〇〇	—	—	一四
パガンス	二五〇	二五〇	—	二〇〇	三〇

類別すべからざるもの派	二〇	一五,〇〇〇	一二五,〇〇〇	一四,〇〇〇	一,六〇〇
非耶蘇教合計	二,七八〇	八一二,五一〇	一六五,七三〇	一四,六〇〇	一,六八四
舊教	一五六,〇〇〇	八,五〇〇	一,二〇八	五七,〇〇〇	八五〇
新教	八六,〇〇〇	一,〇〇〇	八二〇	五九,〇〇〇	三,一三五
オーソドックス、ゲリークス	九二,〇〇〇	六,〇〇〇	三〇	—	—
アーメニアンス	三〇〇	三,〇〇〇	三,〇〇〇	—	—
類別すべからざるもの派	一四,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—	三〇
非耶蘇教合計	三四八,三〇〇	一九,五〇〇	五,〇五〇	二六,〇〇〇	四,〇一五
累計	二六〇,〇八〇	八三二,〇一〇	一七〇,七八〇	一三〇,六〇〇	五,六九九

◎科學界の出來事

最も喜ぶべきは新元素アーゴン（Argon）の發見なり吾人が呼吸する空氣は酸素と窒素との混合のみならずして別にアーゴンなる元素の加はり居ることを知れり此發見は世界の化學者寧ろ科學界を聳動せり發見者はレーフーフ卿及びラムセー敎授の二氏なり次で最も悲むべきは英の碩學ハツクスレー氏の死去なり氏は科學界に於ける有數の人物にして深遠なる科學上の學理を平易に通俗に說明し科學を一般に傳播するに於て有効なる文筆と辯舌とを有せし人なり六月下旬享年七十有一にして逝く

◎日本男子と女子との躰格

我國生命保險業の開祖なる明治生命保險株式會社の被保人中十五歲より六十歲に至る健康の男女子の格躰統計を同社診査醫長醫學士印東玄得氏が專心取調べたるに左の如し

	男二萬人の平均	女子三千人の平均
身丈	五尺二寸	四尺八寸二分
躰量	十四貫〇六十七匁	十二貫三百四匁
胸廓の周圍	二尺七寸八分	二尺六寸七分
胸廓の前後徑	六寸二分	五寸九分
胸廓の横徑	八寸三分	七寸九分
肺量	三千〇十二立方仙米	二千二百八十四立方仙
呼吸の數（一分間）	十九	二十
脈搏の數（一分間）	七十四	七十七
腹圍	二尺四寸一分	二尺三寸二分

◎日本正教會

昨二十七年八月より今年七月に至る一ヶ年間の日本正教會に屬する教會、神品等の統計は左の如しと云ふ

教會	二百二十（前年に增一）
神品	二十九｛外國神品主教一、司祭一、補祭一、本邦神品司祭二十一、補祭五、（前年に增一）
傳教者	百六十八（前年に增八）
信徒	二萬二千二百七十三（前年に增五百六十一）
受洗者	八百十一（前年に減二百〇八）
婚配	三十一（前年に減十）
就寢	二百五十（前年に增二十八）
會堂	百六十五（前年に增一）

宗教　第四拾八號（明治廿八年十月五日）

『社說』を廢す

本誌は日本ゆにてりあん弘道會の發行する所なりと雖ども、その性質たるや、本來一宗一派の機關にあらずして、普く宗教、倫理、社會等に關する諸種の問題を自由に論議せんが爲めに備へられたる公共的論壇なり。故にその紙上に現はるゝ諸家の論說に對しては、寄送者各々その責に任ずべきものにて、本誌は毫も之に關する所なし。然るに從來社說と稱するものあり。是れ畢竟其時に編輯の任に當れるものが自已の所見を述べたるものに過ぎずして、敢て日本ゆにてりあん弘道會を代表したる一定の意見と見るべきものにあらず。さればその責任も亦た雜誌そのものゝ上にあるにあらずして、當に記者一已の負ふべきものたるや明かなり。然るに世間往々本誌を以て一派の機關と誤認し、その社說中に現はるゝ意見を以て日本ゆにてりあん全躰の意見を代表せるものと想像する人あるに似たり。斯の如き誤解を避けんが爲め、今後社說と稱するものを廢して、一切記名の論說のみに改むることゝなれり。是れ本號以下に社說を除去する所以なり。茲に聊かその次第を述べて讀者諸君に謹告す。

編　者

論説

飲食法

藹々　大内青巒

心に信ずる所これを身に行ふ、其信は極めて高尚遠大なるべく其行は極めて卑近なる所より之を實踐すべきなり、蓋し卑近なる履踐を以て之を高遠なる道理に照して而して慚る所なく、高遠なる講究を以て之を卑近なる行爲に應用して而して樂しむ所あらば、吾人生れて佛教信者たるとを得たるの能事畢ると謂ふべし、故に余は今聊か飲食の法に於て吾人佛教信者たらん者は如何なる心得ならざる可からざるかを考究せんと欲するなり、蓋し吾人日夜卑近の行爲甚だ多しと雖も、飲食ばかり卑近なるは無し、如何なる貧人賤夫にても僅に頭を聚むれば先づ食いる食いぬと云ふとを談ぜざるは無く、如何なる愚鈍幼稚なる者にても飲食を得て喜ばざるは無し、而して世の常の諺に「箸の上げ下ろしにも」など云へるは甚だ瑣細なることを言ひ顯はすの套語となり居れり、此の如く瑣細にして卑近なる飲食の事に就きて、佛祖は如何なる教訓を垂れ置かれしや、吾人は如何に其教訓を實行しゆく可きや、世の基督教を奉ずる人を見るに、食卓に就きては必らず手を額にあて何やら祈念する所あり而して後に箸を取る者の如し、余常に之を見聞して其道を信ずるの篤きに感服せり、佛教既に世界の最大宗教と稱し、其教ふる所また甚だ高遠幽玄なりと爲す、而して其教を奉ずる者豈他の基督教徒の行爲に如かずと爲すべけんや、按ずるに佛教徒飲食の作法たる、佛々これを說き祖々これを承け、各宗各派これを相傳して其支末の如きは互ひに異同出入する所なきに非ざるも、其本源に至りては毫髮ばかりも異なる所なし、然りと雖も其法古來單に僧侶の間にのみ行はれて、之を在家信徒の間に行はしめたることは甚だ稀なり、抑も大乘佛教の要點は初より出家在家を隔てざるに在て存ず、飲食の作法また豈出家僧侶に局れりと爲さんや、故に余の如きは身の出家僧侶に非ざるにも拘はらず、常に妻子と倶に應分の食作法を行ひ來れること此に二十餘年、自から大乘佛教の信徒たることを喜こぶや切なり、故に自から喜こぶ所を以て亦た他を喜こばしめんと欲するが爲めに聊か此事を講究せんと願ふなり

食法に二大要門あり一は飲食を造るの心得にして一は飲食を喫するの心得なり、先づ初めに飲食は何の爲めに要するぞと參究すべきなり、僅に此臭皮袋を滋養せんが爲めに之を要すとならば、禽獸も尚ほ且つ之を爲す、何ぞ萬物の靈長たるに有らん、蓋し聞く「人身は受け難し今已に受く佛法は聞き難し今已に聞く此身今生に向て度せずんば更に何の生に向てか此身を度せん」と、其れ然り此身直に是れ佛法の根原なり、故に之を聖胎と稱し道芽と名く、此身あればこそ佛法をも悟り得るなれ。此身あればこそ佛身をも成就するなれ、然り而して飲食は實に是れ此聖胎を長養し此道芽を保育する所の藥餌なるときは、飲食即ち聖胎なり道芽なり、豈また之を尊重せざる可けんや、維摩經に曰く若し能く食に於て等なる者は諸法も亦た等なり、諸法等なる者は食に於て亦た等なりと、承陽大師之を釋して曰く方に法をして食と等ならしめ食をして法と等ならしむ、是の故に法若し法性ならば食も亦た法性なり、法若し眞如ならば食も亦た眞如なり、法若し一心ならば食も亦た一心なり、法若し菩提ならば食も亦た菩提なり、名も等なり義も等なり故に等と言ふと、又馬祖道一大師の言を引て曰く法界を建立すれば盡く是れ法界、若し眞如を立すれば盡く是れ眞如、若し理を立すれば盡く是れ理、若し事を立すれば一切法盡く是れ事なり、然らば則ち等は等均等量の等には非ずして是れ等正覺の等なり云々、應に知るべし飲食は是れ直に正覺の法なることを、故に保寧の勇禪師曰く眼睛なる常什物(米鹽菜蔬の類)を護惜して、之を敬重すること御饌草料(天子の供御)の如くし、生物も熟物も倶に此意を存せよと、承陽大師曰く是の如きの供養ともに敬重すること懇ろなり、能く天上人間の中に極重の敬禮を用ゐ。至極の尊言をして敬ひ奉りて飯饌等の供養の備を造作するなり、謂ゆる粥をば御粥と申すべし朝粥とも申すべし、粥と申すべからず、齋をば御齋と申すべし齋時とも申すべし、齋と申すべからず、米白げまゐらせよと申すべし、米搗けと云ふべからず、米洗ひまゐらするをば淨米しまゐらせよと申すべし、米かせと申すべからず、御菜の御料の何物擇りまゐらせよと申すべし、菜擇れと申すべからず、御汁の物しまゐらせよと申すべし、汁煮よと申すべからず、御羹しまゐらせよと申すべし、羹せよと申すべからず、御齋御粥は熟せさせたまひたると申すべし、齋粥入れたてまつらん調度、皆此の如く敬ふべし、齋粥を調のへま

みらするとき、人の息にて米菜および何れの物をも吹くべからず、米を撰りまゐらするより乃至飯羹に作りまゐらする經營の間、身の痒き所抓きては必らず其手を洗ふべし、大凡そ米菜鹽醬等の色々の物おわしますと申すべし、米あり菜ありと申すべからず云々、大師は常は佛を罵しり祖を呵し十方三世を呑吐して假借する所なきの口を以て、是の如きのことを言ひ是の如きのことを書し、且つ結末に誡めて曰く、右條々佛祖之命脈、衲僧之眼睛也、外道未レ知、天魔不レ堪、唯有二佛子一、乃能傳レ之と、其深意あるところ沈思默考して冷煖自知する所なかる可らず、已に其食料を敬重すること此の如し故に之を作るに於て更に鄭重慇懃なるべきは固より論なし、既に作り畢りては之を案上に安置して香を焚て九拜し、而して後に之を佛及び衆僧に供養するなり、而して之を掌どる者を禪林に在ては之を典座と稱す、典座は釋尊の時より之を置く「摩河僧祇律」の中に典座の九事を明せり志あらん者は就て見よ「禪苑清規」に曰く衆僧を供養す故に典座あり、須からく道心を運らして時に隨て改變し大衆をして受用安樂ならしむべしと、故に古より有道高德の人この職に當り來れるなり、承陽大師嘗て天童山に在りし日、佛殿の前に苔を晒す者あるを見る、手に竹杖を携へて頭に片笠なし、天日熱し地甎熱す、汗流徘徊すれども力を勵して苔を晒らす稍や苦辛を見る、背骨は弓の如く龍眉は鶴に似たり、即ち天童山當時の典座なり、大師近前して便ち尊齡幾許ぞと問ふ、典座曰く六十八歲、曰く如何ぞ人工を使はざる、典座曰く他は是れ吾に非す、大師曰く老人甚た如法然れども天日此の如く熱するを如何、曰く更に何の時をか待つべきと、他は是れ吾に非すと云へるの一語豈啻典座の職務のみならんや、然れども此の如きの人にして而して始て典座たるべきのみ、豈啻禪林の典座のみならんや、我等在家の妻女たるもの宰隷たらんもの皆亦た此の如きの心操なくんは有る可からざるなり、昔しは在家の男女と雖も應分に其心得ありし者たらんことは、今も僻遠の地に老朽ちたる翁媼の如き米を稱して菩薩と呼び、一粒をも苟且にせすして口に勿躰なしと言ひ、膳に向ては合掌し箸を戴きて而して後に之を喫する者少なからざるを以て證すべく、其藹然たる古風尤も以て敬重すべきならずや、然るに近來青年の人等頻りに佛教を講究し佛敎を信奉すると稱する輩を見るに、唯其高尚遠大なる道理をのみ學習して、毫も之を日夕卑近の行事に履踐する

こと無く、其信する所を問へは幽玄微妙の眞理なるべきも、其行ふ所を見れは禽獸を去ること遠からざる天魔波旬の徒と擇ふ所なきに於ては、謂ゆる名目佛法議論佛法に陷りて佛敎を講究し且つ信奉するの所詮何くにか有る、僻遠の地の村翁野媼にも耻ちざらめやは、一莖艸を拈じて丈六の金身と作し、一微塵を破て大經卷を出だすは謂ゆる高遠幽玄なる道理にのみ止まらんや、一粒米を見て直に之を禮拜恭敬し南無〱と稱して之を頂戴するの行事なくんは、何ぞ能く佛を呼て乾屎橛と爲し、祖を呼て柏樹子と爲すの機要を得んや、眞實に佛敎を修證せんと欲する者は、洗面一回し來て如何と見よ、

（未完）

宗敎家の進退

布川靜淵

世の宗敎家と稱するものが薄志弱行にして彼等が墮落したるの一事は、今や明白なる事實となれり、如今皇國の運隆々として高まり、民人大に進歩したるの時に際し、内務の一訓令を宗敎界に發したる一事、外面上些少の出來事なれば世人未だ之に注目せず、世の學者亦輕々に附し去り、敢て之を口外するものなしと雖も、現今の如き國運隆盛の期に近つきたる折柄、此の如き現象の宗敎界に横はるを研究するは、頗る興味ある問題たり、從て微妙なる社會法則を味ふことを得るものなり、何が故に敢て之を言ふか。

第一、宗敎家か世間に尊敬せらるゝこと大且つ強なる時代は、世間即ち一般社會の道德の進歩せざる時なり。

此原則は少しく學識あるものゝ熟知する所、社會學者が宗敎的信仰的時代と稱するは、即ち古代のことにして人智概して幼稚なる時を云ふ、宗敎家の獨舞臺は此時代のことなり、我國史に徵するも、支那さては西洋各國の史に照すも、不可動の事實たり、後世の神佛多くは當代の豪傑肌の宗敎家のみ、亂神怪力を談じ神子と稱し、人衆の尊重する所となり、時には政敎一致の神政府を現出したることもありし時なり。

第二、社會稍進歩し、各族各團躰の慾望強大にして、社會に爭亂の連續し、社會精神の一致せざる時代は、宗敎家は退隱し厭世するものなり。

歐洲中古の暗黒時代に、思想界の微光を保持したるは、退隱的僧侶なりき、細微なる文運は寺院内に潜匿したりき、我國に於て武家の世となり、武人專ら爭亂を事

とし、無學者の世となりたる時、同じく僧侶若しくは僧侶の如き、退隱的厭世的の人士中に、文學者なるもの殘りたりき、爭亂の强盛なる時代は、宗教家の退隱時代なり。

何故に(第一)宗教家獨り跋扈するか、此時の宗教家とは一種の勇者なり豪傑なり、人衆を統御するに當りてそが性情の弱點を察し、或者に依り或者を拜するの慾望を洞察して、爰に宗教的組織を成立す、故に人衆は之に從服し之を拜するに至る、今日に於ても多少開化せる人士が、野蠻人の地に至りて其行爲の驚嘆さるゝに均し。

又社會が退歩して、國家組織の亂れ、國運衰頽に傾き、病的現象の過多なる時代は、最も宗教家の跋扈する時なり。

何故に(第二)宗教家は退隱するか、或者は競爭場裡に立つて、爭亂を平定するの能力なきが爲め、或者は理想高尙にして爭亂社會の現況の己れを滿足せしめざるが爲め、或者は亂爭社會を厭ふて天地の風光を樂み其美を味ふて遂に之に耽溺し人生社會を忘れたる爲め、或者は文學に形而上學に心を寄せたる習慣の現實社會の場裡に立つより極めて愉悦を與ふるとを感じたる爲め等、種々あるべし、現に今日に於ても名山に退隱する僧侶の如き即ち是れ以上の一に居るものなり。

されば宗教家が獨り社會に敬畏せられ、尊重せらるゝ時代は社會道德の甚だ幼稚なる時なり、而して宗教家の退隱する時は社會一般が、物力的競爭に忙はしく、或は支配權の掠奪に急にして爭亂の斷へざる時なり。」

第一の塲合は宗教家の跋扈時代、第二の塲合は厭世時代にて、共に宗教家として名聲を殘すに足る時なれども、第一の塲合は稍進步したる社會の許容せざる所、如今第二の塲合にある者と、更らに進んで第三に至らんとしつゝあるは、十九世紀後半期の大勢なるが如し、我宗教界の如き亦此傾向を表はし來れり。

夫れ宗教家が跋扈して其權力を振ふとも、はた退隱して厭世的たるとも、共に社會進步上の一現象にして、何れの國にも存在する所のものとす、さりながら斯の如き現象の存在する間は、まだ社會進步の幼稚なるとを發表するものなり、何となれば人衆が餘りに愚昧なるが爲めに神佛の談に籠絡せられ又人衆が太たく爭鬪するが爲め、獸行禽心の徒とし、交るに足らずとして退隱したるものなればなり、故に此二つの現象は共に社會の爲めに賀すべきものにあらず。

第三、人生社會の生活進み、其構造漸次複雜し來りて各分業の法與り經濟機關も整理して、社會は漸々有機的となり、其組織秩序稍整然たる時は、一般人民の道德も相應に進步し敎育も開けたる時代なり此時代の宗敎家は一般社會に近つき衆人と共に社會を利せんとするに至るものなり。

一國內に高德など稱せらるゝもの〻痛く敬畏せらるゝものあらば、そが民人の道德低度なるを現はす者也、高德など稱せらるゝものが、一般社會と交涉せずして世上に超然たると尙ほ慕はるゝ時代は、其社會の不健全たるを發表するものなり、而して今や高德の巢窟と妄想せられし宗敎界大に衰弱し、無學悖德として現に排斥せられつゝあり、此現象は社會進步の徵として見るべきものとす、

然れども無學悖德と云ひ墮落といふも、これ身ら敎職にあるの故、普通下等社會の者に比すれば先づ概して勝れるものなり、然るに從來の習慣は、神佛敎師の如き即ち宗敎家を見て、神聖なるもの〻如く妄想し來りたるを以て、社會が認めて不道德となす所を行はざるは勿論、社會の師表たれかしと希望するは、多數人民の常なり、さるに普通人衆と同一樣の行爲あり、同一樣の學識なりせば豈に師表として立つを得んや、爰に於て乎特に無學と云ひ悖德と云ふ、素と是れ普通人に比較したる言ならざるを得ず、

何故に第三の場合の如き、所謂宗敎家の墮落は喜ぶべき現象なりとするか、曰く是れ社會道德の進步を表するものなるが故のみ、病あるもの獨り醫師を要す、腐蝕するもの獨り防腐劑を要す、所謂宗敎家なる職にある輩が、無學悖德となるも一の無用物とし榮譽職として局外視し、是等の輩を煩はさずして敎育し、又發達するに至りて、宗敎家何處にあるやを知らざるが如き國民は極めて健全のものなりと認めざるを得ず。

今之を我敎界に徵せ、內務大臣は各宗に敎育ある國民を誘導するに足るの學識德望なしと明言したり、然り敎外の士は彼等敎師よりも概して進步せし、是れ不可掩の事實たり、而て此の如き時に於ては宗敎家は社會人衆と共に事を爲さんと欲するに至る、何となれば彼等の中、超然として自ら高德を以て許すものも、社會の習性漸く改進して、國家の生活愈增進するの時に當りて、退隱するは決して世の賞せざる所、社會に交涉せざるの高德者は、蓋し無用の長物者となりたるのみ。

然れば宗敎家の無學悖德即ち墮落は、社會普通人と共

智德行爲に於て大差なきに至りしもの、換言すれば宗敎家などと稱するに足るべき特殊の優勝なる點殆んど之れなきに至りたるものなり、此の如くなりて始めて衆人と親み易く、慣れ易く遂に衆人俗社會といふものに投じて、共に事業を爲さんとするに至る。

試みに今日の輿論を聞け、彼等は知らずして言ふもの、而かも東西文明國の潮勢の一波動たるなり、『佛敎』記者云はく、佛敎々育界の方針は益世間に近づき大に世間を知らしむるにあり」と。紀州高野なる『同學』記者云く「今一層諸氏が身を俗人社會に投ぜよ、是れ佛者最大の急務たり」と。又云く「俗に近つけは俗に染むといふ如き、抑薄志弱行の甚だしきもの、高僧碩德の諸氏は須く起つて今一層身を俗社會に投ぜよ」と。『傳燈』記者は社說欄に於て云く「諸師は以後精神を一轉し從來の如く唯葬祭の如き儀式的職務のみを以て滿足せず、進んで自ら智識を磨き道德を修めて村内の敎化に力を致し村内の喜は共に之を喜び村内の憂は共に之を憂へ村内の人民を見る恰も慈親の子女に對するが如く熱愛し」云々、寺院を以て田舍の快樂の源泉とせよとなり。

又『六合雜誌』に「宗敎と社會の關係」なる一文あり、曰く

社會を二分して聖と俗となし、寺院以外を以て俗界とし僧侶以外を以て俗人とし宗敎を以て寺院、僧侶の專有となし以て社會の一部の組織に止まらしめむとするは二原說思想の結果なり、今の聖俗說を執るものゝ亦上帝を以て世界半面の主宰となさんとするもの、彼の物質を卑とし社會を俗とする如きは聖書の主意を去ること遠しと

而して米國に於ける近況を說けり、彼のキッドの『社會進化論』亦た宗敎を以て社會進化の要素とし原動力と說くもの、此書非常の喝采を受けつゝあり、以て其大勢を窺知すべし

『敎界詳論』なる雜誌に「米國基督敎會の潮勢」を報するものあり、曰く、

近時社交的の氣味を帶び來り日に其勢を增すは少しく眼を社會の變遷に注ぐものゝ直ちに認め得る所、敎會事業に於て其社會的傾向を帶び居るを見るべく又社會學の講究基督敎徒特に神學生の間に大に其流行を見るが如きも其明確なる現象なりとす、十年以前は斯の如きを耳にせざりき、其起因は二あり一は社交主義、二はヒユーマニタリアン主義なりと、

又云く、人は宗敎的たると同時に世俗的たらざるべからず否な世俗的の事を進捗するは宗敎的の事を進捗する所以なり、是近世ヒユーマニタリアン主義なり、「世俗的のものは神性的のものなり」といふ原理は我も深く之を信ず云々」と。又或る雜誌には「樂天的基督敎」

等を説き、漸くにして社會に投じて社會の人々と共に社會を利するの主義に傾きしは、目醒ましきとにして、宗敎家の第三時代に蹈み入らんとするの時ならすや。以上叙述したる所を概言すれば、第一は一般社會が智德幼稚慾望野卑なるに乘じて少しく勝れたる人々が、宗敎的化粧を有し若しくは宗敎家となりて支配する時、第二は社會の現狀と宗敎家の理想と相反する爲め退隱するとき、第三は智德行爲上、衆人と大差なく却て劣るが如き樣に至り衆人と平行して、社會の事業に從事するに至ると是れなり。(七月十八日稿)

講　演

日本人種と商業術

飯田旗郎

本日は學術講談會と云ふ名前で私にも御賴みがあつて是迄參つて何か饒舌らうと云ふ積りですが私は現在學者でも何でもなし又學者の資格を備へて居らぬ、で其口から何か御話することは學術講談會と云ふ名前に背くかも知れませぬ殊に今哲學と云ふ高尙な六ケ敷立派な御話があつた跡で商賣卽ち近頃迄下司下郎の仕業として居つた商賣のことに就いて御話をするのは甚だ仕にくい譯で皆樣が洗いで一杯酒を上つた後とで牡丹餅で御馳走を差上る樣なものであつて甚だ私は御話しにくいのですが此節は商賣の事が社會に位置を進めて來て一の學問として成立つて來た樣な世の中ですから同じ御考で聽いて下さるとが出來やうかと思つて(喝采)御話しする積りでありります

世の中に此日本の國民程幸に生れた國民はなからうと思ひますそれは戰後の今日に於て云ふのでない一躰――抑も此日本と云ふ國を考へて見ると是程幸に生れた國はなからうと思ひます、一方から云ふと井の中に這入つた蛙見た樣な人間だとも申しますが本統を云ふと是程幸な人間はないのです、試みに歐羅巴を見たらどうか歐羅巴といふ國は御承知の通り日本を十二三倍も寄せた大きな一の原野である其處へ生れ出た人間はどんな人民か赤いのもあり白いのもある種々雜多の人種が生れて其處で以て互に生きて此世の中に立つていかなければならぬといふ六ケ敷位置に坐つて居る人種であるので丸で一の大きな箱へ犬だの猫だの狼だの虎だのを入れた樣な者競爭で他を凌いで自分が其上に立つ

て暮して生きていかなければならない次第である吾が東洋の支那などもさうである御承知の通り支那の歴史を御覽なさると解る國が廣く今は支那と云ふ一國であるが實に一の大陸で此處に種々の種類の人間が集つて來て互に優勝劣敗で生存の爲に競爭して上に出やう出やうとして居るのだから戰國だの春秋だのと云つて始終戰爭をしまして代が變つて又倒れ生きては又倒れると云ふ風に片時も人間が靜にして此世の中を送ることが出來ない世の中であつたのですそこで此日本はどうかと云ふと日本は東洋の極端一番外れにある處の一の島國で今迄國が成立つて以來外國人に犯されたこともなければ又此方から外國に出て行つたことも一二度はあつたけれども出て行つたとは云はれない僅に日本に接近して居る朝鮮半島に出掛けた位で大陸に出掛けて行つたこともなかつた、外國にも犯されず又此方からも出て行かずに眞に日本と云ふ一の國の中へ這入つた切りでそこで穩かに育つて來た人民である、そうして元來日本の國土と云ふ者はどう云ふ國であるかといふと誠に景色は善し氣候は善し外に出ないでも濟むと云ふ位の善い所であるさう云ふ所に育つた人民だから人の頭は如何にも大樣で如何にも奇麗で優美で高尙で美術に富んで居つて美術の點から云へと世界に比する者がないと云ふ位に大樣な大家の子息見た樣な育ち方をして來た國民である、それでそう云ふ風に高尙、優美他に眞似の出來ない樣な持つて生れた美くしい氣性を備へて居りまするそれと正反對に、他を凌ぎ他に打勝たふと云ふ實利的の競爭に關する頭に就ては日本は全く今迄持つて居らなかつた、大家の子息と似て居つて人の言ふ儘にされて居つたと云ふことは斷言しても差支ないことであらふと思ふ、それで、維新國を開いてからもさう云ふ風な有樣で維新以來今日に至るまでの景況を考へて見ると長いことを饒舌るに及ばない丸で大家の中に閉ぢて居つた子息が人中に出たと云ふ有樣でやつて來たのであつて其模樣は其一言で分つて仕舞つて居る、それだから兎に角人の心は優美で高尙で大樣な處があるけれども甘く働いて此の世の中に生存して他に打勝つて往ふと云ふ精神に非常に缺けて居る外の國民と違つて其點に於て劣つて居る私が御話しやうと云ふ

私が專門に研究した商賣と云ふことはどうも日本人は甚だ拙劣である國を開いて今日に至るまで日本は美術を以て名前を世界に出したけれども商賣の方では非常に名前を墜して仕舞つた、今日迄どうしても商

賣では外國人に敵し得ない又支那人にさへも商賣では負ける吾々が實に世界の劣等人種——殊に今度の戰爭で見ては尙更劣等人種と云ふべき支那人に對しても商賣には負けると云ふ現象を來して居る今日戰爭に勝つた處で商賣にはどうかと云ふと商賣の戰ひでは支那人に負けて居る一度は支那人が戰爭の騷ぎで逃げて往つたが又歸つて來て商賣の戰爭をして日本人をずん／＼打倒して往くと云ふ有樣になつて居る、斯ふ云ふ風に日本人は美術其他の側の方では大變優つて世界に比類ない人間であるが商賣の方は最劣等人種である

今度の戰爭、今度の戰爭は種々の處に日本に利益を與へましたが戰爭の模樣から考へて日本の兵隊——軍人が向ふで非常な忠烈な行をしたと云ふ點から考へて見ると日本人種は商賣にも優等な働をしだすに宜からうと云ふ考が今度始めて吾々の頭に出て來た、乍併元と日本は前申す樣に大樣に育つた子息さん風に育つた國民であつて兎に角日本と云ふ一の國に縮まつて居つたから心持はどうしても小さいそれを一度國を開いてから外國から來る書物等に依つて學んだから世界と云ふことを知つて日本は他の國に對して一國民として他の國と競爭しなければならぬと云ふ考を得たのである兎に角日本人は心が小さいと云ふことは免れない日本と云ふ一國で他の國に對して往く樣にすると云ふ所謂國が世界の一の分子であると云ふ考は今日の處でも甚だ少ない、それで、其證據はどう云ふのかと云ふと政治社會に藩閥主義だとか何とか云ふことがあるが是が獨り政治社會のみでない社會のものが凡て藩閥流義で成立つて居るです即ち昔から士農工商と云ふもの丶別が非常に嚴しかつた殊に商業者と云ふものは一番別をひどくされて商業者と共に居ることを嫌つたと云ふ風に商賣社會は一般の社會より疎まれて居つた今日でこそ多少此實業社會と他の立派な社會と一緒になつて來たやうなものですけれども此頃まで商業社會の人は卑しめられて下司下郞百姓町人と一口に云はれるやうになつて居つた其他の世の中の者も都て別け隔てが付いて居つて書生は一種書生の風がある町人は町人の一種の風がある官員は官員らしい風があると云ふ風に皆其別け隔て藩閥主義藩屛主義が日本人の頭の中に堅く出來て居る然るに公平に考へて見ると斯う云ふ理屈はないので書生でも番頭になつて居る者もあり平民でも大臣になる者もあり華族にも今日では其人の力次第でなれると云ふ風に藩屛と云ふものは出來て居らない三尺帶

を締める書生が番頭を働き人力車夫迄が書生の專賣であつた君だの僕だのと云ふ言語を用ゆると云ふ風に世の中が段々藩閥主義を去つて推し並べて同じ社會になつて來る是と等しく日本と云ふ國も仕舞にはさう云ふ風になつて來るだらうと思ふのです即ち日本と云ふ國が一に纒つて廣く外國に――海外の澤山の國を相手に世の中に立つと云ふ風に一方に傾いて來ると云ふことは獨り日本のみならず世界がさうであらうかと考へるそこで日本人が商賣と云ふことに眼を付ける樣になつたのは此頃の話で商賣と云ふことが世の中の事業の最も完全なものであると云ふことが此頃に至りて大に廣つて皆隨分八釜敷云ふ樣になつて來ましたのです只今日では此事が社會全般の人の頭に達したとは云はれないで之を達しさせるのは即ち吾々の任務であつて即ち商業敎育などに從事して是の一方に掛らなければならぬのであり升それでそんならば日本は商賣を盛にし外國と交通をして此戰爭後の處置をやつて往くのにどう云ふ風にしたら宜いか今度通商條約で蘇州とか杭州とか方々開港場にさせたから其處へ日本人が行つたり又製造業を支那で開き得る事を約束したから日本人が行つたらどうかと云ふとを唱へる人があるが實際其處へ出掛けて往つて商業に從事される人はない樣だ徒に日本人が血を流して開港場にさせたり製造業を許す樣にして其利益を外國人に取らせる樣にしてやつたばかり外國人に道を開いてやつた樣なものであるそんなとではいかぬから日本人は奮つて出ずんばあるべからずと新聞などで喋々云ふ者がありますけれども私の考では中々口で云つたそれ丈けでは人は外國に出て行くものでなからうと思ひますそれは何ぜかと云ふと日本はまだ人間が少な過ぎて日本丈けの事業にも足りない位であるから況して外國などへ出稼ぎに行つて仕事をすると云ふ樣なとは出來ない事であると思ふ獨り人間のみならず金がさう無い日本は中々新しい國で鐵道も拵へなければならぬ電氣鐵道も拵へなければならぬ器械場も起さなければならぬ瓦斯も引かなければならぬ日本では未だ〳〵仕事に最も利益を以てする事が出來る中々資本を要する今日であるから殊更外國に出て其金を持つて行つて其金を外國で働かすと云ふとは誰しも仕ないに相違ないです、西洋人などは金が澤山自分の國にあり餘つて仕樣がない一年の利足が二分か三分だと云ふ風に餘つて居るからそれを持つて日本人が開いた所へまで來て商賣を始めると云ふ樣になつて居る人間

も亦左樣です向ふでは物が高くて食ふに困るとか物が高くて婚姻をすることが出來ぬと云ふ位で仕方なく外國に出で行つて生計の途を求むる然るに日本は人も足りなければ金も足りない北海道へ行つて見た處が人が僅かしか居らぬ外務省の調べに依ると日本では一年三十五萬か四十萬――三十五萬許り人間が殖えて居ります此分で往つては人間が多過ると云ふことを憂へて或筋では殖民を大變に主張して居ることですが私の考ではまだ／＼足りなくて仕樣がないと思ひます人間と云ふものはまだ其國に餘裕があつて働かなくても一通り生活をすることが出來ると云ふ樣な有樣では尻を擲いても中々出で行かぬものと思ひます、其國で食へぬ位に困らなければ外國に出で行かない、今玆にどの位に人口の割合がなつて居るかと云ふことを調べて見たならば日本は一キロメートル立方に就て凡そ百人少し多い位である然るに之を他の國と比べて見たならば支那が一「キロメートル」に九十人それから英吉利が百八十何人佛蘭西が八十人獨乙が百廿人それから和蘭が百三四十人白耳義が二百四人ある此中で英吉利白耳義等は一番多い白耳義の如きは日本の倍である例へば此「コップ」の中に百人居る所へ白耳義は二百人這入つて居る是等から考へると一「キロメートル」に百人では足りない彼の白耳義では二百人で困つて居るかと云ふと綽々として餘裕ある、物産益す殖え人は賃銀を得て暮して往く唯資本と云ふものと勞働との差が昨今少しひどくなり掛つて來て同盟罷工をしたり鐵道を打壞したり殘酷ないやな現象がありますけれども兎に角二百人で綽々として餘裕ありと云ふ風です、即ち人口がそれ丈けあつても國は年々益盛へて往く形になつて居る、日本はそれから比べて見ると百人位で足りやう筈がない日本國でさへ隅々に人が行渡つて居らない北海道に往つても一立方里何百人位の者で況んや今度臺灣でも取つた日には中々人が足りないでせう、そんな風な有樣であるのに無暗に殖民をしなければならぬと主張して見たり濠州へ殖民しろとか布哇へ行けとか云つて居りますけれども日本内地でなくて困るのであらうと思ひます、或人が今は日本で人が有り餘る樣な考を持つのはそれ丈け國が開けないで人力曳などが何萬あつたりなどするからであるので工業を盛にして人民がそれに就く樣に工風してやつたならば人が不足だらうと思ひます、其結果は人が殖えて歐羅巴の如くになり白耳義の如くなつて仕方なしに外國に出て往くことが出來て尻を擲

かんでも危險を冒して出る樣になりませう支那では內地に人口が多くはありますまいが九十人の平均でありますが支那の東の上海廣東香港天津邊りの人口の割合は中々一「キロメートル」に二百人ではきゝますまい食ふに困ればこそ南洋に稼ぎに出るとか暹羅へ行くとか安南に行くとか亞米利加は何處へ行つても支那人が充ちて居ると云ふ風に生活の必要に迫られてなつて居る私の考では商賣を盛にし國の富を造らうと思ふに第一に人口を增殖する考を立てなければならぬと思ひます此順序で行けば合せて工業が盛になり又人口が殖えて生計に困るから人が外に出る、外に出た者が日本を形くつて商賣が盛になると云ふ風で人口增殖を計つて殖民が盛になる殖民が盛になれば商賣が盛になる順序だらうと思ひます之は支那の今日の有樣に徵してさうであらうと思ひます今日殖民が必要であると云つても誠に人がないのに此國の者を減して出すことは出來ませぬ其人口を殖すには種々の方法がありませうが今の樣に工業を盛にして助けることが必要と思ひます

日本人民は商賣は甚だ下手であるそれで殖民でも大變殖さなければ商賣が盛にならぬとは前申通りでありますがさうかと云つてそれ一方に商賣を盛にする方法を期して置く譯には往きませぬから他に種々の方法を考へなければならぬ併何ういふ風に商賣を仕出していつたらばよい乎凡そ商業貿易主義に出稼主義と坐賣り主義とある所で日本人は出掛けて往つて商賣をすることが出來ぬから內に坐つて居つてゞなければならぬ一躰日本に居つて坐つて商賣をするとなれば人に賴まなければならぬ自分で物を賣るにも買ふにも人に賴まなければならぬ凡そ一の仕事をするに人に賴めばそれ丈け其報酬をしなければならぬ唯賴まれる者はない手數料を拂はなければならぬ車に乘れば賃銀を拂はなければならぬ人に物を賴めばそれ丈け損であると云つて宜しい外國の商賣人に自分の國の物を輸出し又向ふの者を持つて來ることを賴めば百圓に付いて二圓なり三圓なり取られる非常に損でこりやァ到底止めなければならない方法である、然しながら又茲に坐つて居つて商賣をしなければならぬと云ふ種々なる道理がある正則の道理から云へば人に賴めば手數料を拂はなければならぬから一も二もなく外國に出て行つて商賣をするが宜しいのでそれが道理でありますけれども一概にさう往かぬ點が澤山あります、誠にどう云ふ譯で日本人が內に坐つて居る方が德用であるかと云ふことを考へて見

たならば日本人が自分の品物を外國に持つて往つて相手にしやうと云ふ人間は世界の最も遠い所にある人間で商賣をするのには其處まで日本人が出掛けて往かなければならぬ、進んで商業家にならうと思ふには出掛けて往かなければならぬ其處まで出掛けて往くには獨り自分の身躰に危險があるのみならず商品を持つて行くと海の上で氣遣ひがあるかも知らぬ又向ふに行くに四十日も五十日も掛るから途中で物品の性質が變化するかも知らぬ、さう云ふ危險があるから內地で商賣をするのが安心で好い尤も今まで知らない闇の世の中が自由になつたから多少の事は知つて居るが其他のことは西洋とはどんなものかと云ふ空想的心配が多くて外國に出ることは中々容易に出來ないさう云ふ點から云ふと內地に止つて商賣をする方が宜いには違ない

それから日本人は此國に父母先祖代々住馴れたものであつて他國の侵害を蒙らず自分も强て求めず易々と睡つて居つた人間であるから其住み馴れた故郷樂しい善い氣候の處を出るのは誰しもようしないことで尻ツポを擲いて商賣をしろ國の爲だからなど云つても空想に止まるので誰しも自分の家を捨てゝ行くと云ふ者はない、義理に迫つて徵兵にでも應する樣に送られる者はありもしませうが自分が進んで往くと云ふことはしない西洋人でもようしますまい是が日本人が外へ出ない一の理由」夫から外國に出て商賣をしやうとなると闇で分らない處へ以て往つて外國は物が高くて其處へ商店を開き出張店を置くとなると始から費用が要るそれは行商か何かで歩いて商賣をするのなら宜しいが大きな商賣をしやうと思ふと店を持なければならぬ店を持つには中々費用が掛る外國人も雇はなければならぬさう云ふことを日本人が出來るかと云ふと中々金が足らぬから大きな資本を持つて仕事に往くことは出來ぬ然るに日本に坐つて居つて商賣をすれば一文も要らない位なものである

偖又外國に出て往くと外國の法律に從はなければならぬ是は何處でも法律のある所は同じ事で小便をすれば罰金を取られる往來の木を折れば罰金を取られる之は何處でも同じでありますが商賣上に至ると種々違つて居る外國に出て商賣をするとなると夫丈け心得てしなければならぬ是が中々面倒で殊に言語が違ふと夫等のことに通曉することが出來ぬ是事なども外國に出て困難な一の理由です

それから內地に坐つて商賣をするのは向ふから來て居

る外國人を捕へてするのだから易い、金を拂はなければ其處で捕へることが出來る、然るに外國と直接に商賣をすることになると詰り空を摑む樣なもので泣いても笑つても追付かない金のやり取り商品の受渡に甚だ不安心なことが多い荷爲替等の金を取る方法が銀行にござりますけれども所が離れて居るから荷物も思ひ切つて送つてやれない向ふから金でも先に送つてよこして置かなければならぬ、然るにそれが出來ない先づ品物を送つてからでなければならぬ所が日本人は金を受取つて置かなければ出さぬとなるから御互に仕樣がない向ふでは劣等人種と思ひ此方でも不信用な人種と思つて居るから纒りが付かない

今御話したのが日本人が內地に坐つて商賣をする方が利益であると云ふことです坐つて居るのが利益だと云ふことはお解りになりましたらう

それから此他にどう云ふ理由があつて日本人が引込んで居る方が宜いか態々歐羅巴まで出掛けて行かぬ方が宜いかと云ふことを今度は天然の位置上から考へて見ると、先程申す通り極東日本は日の出る國と云ふことで唐天竺と云ふ風に今迄西洋人とは交通の不便である世界の反對の側にある人種と見做されて居つたので、それが日本人が商賣に從事することが出來ない一の理由であります、西洋人と云ふものは互に境を接して歐羅巴に十幾ッの國がある一歩跨げば隣の國へ出る少し遠くへ旅をすれば直く稅關を通らなければならぬと云ふ風に國の形勢上なつて居つて便利です所が日本が其西洋へ行くには四十日も掛つて行かなければならぬ實に不利なことであるから出稼商人は滅多に出掛けられない尤も今日では汽船の便利で四通八達と云つても宜しいが向ふに行くには四十日も三十四五日も掛るそれが非常な損日本がもつと西洋と近いとか西洋の眞ん中にでもあれば日本も商賣が盛になることもある然るにそんなに遠いところへ加ふるに島國となつて居るから大變違ふ島國となると交通が不便である一足行けば外國に出ると云ふ所であると外國に出る考があるが島國であると交通が不便で商品の交換が少ない商品の交換が少なければ人間の交通が少なくなるから島國と云ふものは不便なことがあります殊に日本の如き極樂淨土見た樣な善い國であればそれを捨て、殊更出で行くと云ふことは先程申す通り仕惡い

それから其次に困つた話は日本人種が誠に少ない人種で世界に何億と云ふ人種の中極く／＼少ない人に知ら

れない人種である、亞米利加に行ても歐羅巴に行つても支那人と間違へらるゝことが十の八九能く間違られて西班牙の右の方の人種位のもの日本人は人に知られて居らぬ支那人と間違へらるゝ程人に知られて居らないから野蠻人民だと云ふ考を持つて居られる實際今日の樣に立派な人種であつても知らない者は劣等人種と思ふのは人情です見ないで名前を聞いて居る中は劣等と思ふのは當然の理で日本人は今度の戰爭でこそ分つて來たのであるが今迄は支那の一部分だと云ふ風に思つて居られた何處にそんな國があるか知らんと思つて居つた位で日本自身は世界に有名な立派なものと思つて居るがそんな有樣であるから世界に信用はなし對等の交際はして呉れず日本の品物は南洋の物產でも持つて來た樣な心持で珍重して居つたと云ふ有樣それだから滅多に日本人が商賣に出掛けて行くことが出來ぬ殊に土地が隔つて商賣の緒を開くことが出來ぬそれが人種に就いて不便な話です

今度は言語がどうか、丸で違ふ、片一方は横片一方は縱人間は横に匍匐ふのでないが横に書くのと縱に書くのと違ふ言語は人間の關係を結ぶ唯一の方法殊に商賣と云ふものは獨りで出來るものでない賣る者と買ふ者があつて御互に口を利いて商賣が出來る其賣る者と買ふ者が結び合ふにどうするかと云ふと啞の眞似ではいかぬから言語を巧にして賣らせ買はす樣にしなければならぬ昔希臘時代には饒舌りくらをして商賣をしたと云ふ話があります仲買の事を能辯家と稱へて巧に相手に此方の利益を說いて利益を知らしたのが本統の商賣の上手として居た今日でもさう賣手と買手とは始終旨く高く賣り旨く安く買ふと云ふ考言葉ではないが言葉を形に現す文字新聞の廣告を見ても非常に商品の効能を載せてある今朝も一寸氣が付いたが都新聞を見ると「是を讀めば商賣繁昌疑なし」と云ふことが書いてあるあれは言語を務めて相手方に氣に入つて買はせやうと云ふ手段であるさう云ふ風に言語が能く出來て居らぬと相手に買はせることが出來ぬそれだから商賣人は手紙を書くことが一番必要であります手紙の書き方で信用も得れば失敗もする私共商業敎育で經驗を持つて居りますが今迄手紙の書き方はどうでも宜いと云つて居つたが昨今では高等商業を敎へる所でも手紙を一番重にしてある手紙を甘く書かなければならぬそれで言語が日本と西洋とは全く違つて居るからそれを結付けることが大變出來ない度々私が經驗して居りますが或る

商會へ外國から斯く〳〵の物を御前の處で拵へるさうだからそれを買つて常得意になりたい私の店は歐羅巴で五本の指に折られる店で御前の處から買ひたいから是から取引をしやうと云ふ金儲がそこに見へて居る事を言かくる此方の會社ではそれが盲目でどう云ふ風に云つてやつて宜いかどう云ふ條件で取引をすると云つて宜いか分らぬ金がブラ下つて居るが其儘取りそくなう返事をやらずに仕舞つたと云ふことがありますが言語が違ふ爲に日本人が商賣をすることが出來ないと云ふ例は甚だ多い、外國などでは言語が違ひますけれども多少同じい橫に行くＡＢＣは皆ＡＢＣで唯音の出し方が違ふ丈けでありまして多少違つた所はありますけれども大同小異と云つても宜い位のもので商賣はスラ〳〵と往く極く盛な倫敦とか巴里とか伯林邊りに行くと英語と佛語と混ぜて手紙に書く樣なことで一の商法言葉が出來て居る始めは或人が萬國語を拵へた者がある簡單なる各國の文字を撰つて一の萬國語を拵へた者があるが英語でも知つて居ればそれを態々習ふ必要がないと云つて立消へになりましたが商賣をするに言語が必要など云ふことは分つて居る、所で日本はさう云ふ風に獨り六ヶ敷のみならず、用ゆる人の區域が狹い僅に日本に住んで居る四千萬の人口のみ外の人は知らない英語は如何である乎英吉利語は三千九百萬の英吉利の人が話す外に亞米利加の七千か八千萬かの人が話す印度人も話せば何處へ行つても話す今日では二億近くの人が話すです日本は僅に四千萬人で一歩外へ出れば其語を話す人がないと云ふ位でありますから實に商賣の取引上是程損な位置に居る者はない一つ出版ものを拵へてもさうです日本人が本を拵へて出版すると云ふと四千萬人のみを相手にしなければならぬ原稿でも安くしなければならぬ西洋では一寸本を拵へても其原稿料十萬弗とか二十萬弗と云ふ日本では御客樣が少ないから二十圓か三十圓で賣らなければならぬさう云ふ風に日本人が品物を拵へて商賣に持出して賣らうとしても得意が少ないから仕樣がないそこで英語などを盛にしなければならぬと云ふ必要が起つて來る兎に角言語の爲にどの位日本人が損をするか分らない

それから其次にはどう云ふことかと云ふと日本は極樂淨土是丈け善い氣候の處今日の如きは二百十日だから仕方がないが實際斯ふ云ふ景色の善い好い天氣の處はない雪も降れば夏は熱くて堪らぬことがある四季揃つて居る草花もあり景色は善し斯ふ云ふ處に穩に居付け

て居つた人擦れない生存競爭に當つたことのない安らかに育つて居つた者は何も必要がなければ外に出掛ることは仕ない又物產とてもさうで大概の物產は出來る日本で出來ぬものは先づない地勢は丁度緯度の眞ん中熱躰でもなければ寒躰でもないさう云ふ風に天與の善い土地に住ふことが出來た人民だから必要がなければワザ〳〵外へ行くと云ふことは仕ない、それから是は氣候等から感觸が來たのでありますが氣候が善し眼に見るものが宜いから人間の頭と云ふものはそれから發育して來て人間の心もそれと共に穩かな景色の善い頭が出來て仕舞つた溫和な頭が出來て虛無黨の樣なことをする人間でない穩かな美風を備へて居るものが出來て仕舞つた夫等が自然天然に日本人が外に出て英國人の樣に外國貿易を營まない譯であります

其他にどうかと云ふと日本人は二千五百年來內國に這入つて外國の事を知らぬ外國は闇で昨今漸く寫眞でも見て分る位なことで外國は闇である吾々の眼から見ると西洋人は怪物か本統の異人の樣なものに見へるどんな家に住むかどんなものを食つて居るかどんな物を着て寢るか此頃漸く分つて來たので夫れも先づ都會人丈けで內地の百姓などが見たら異人さんでどんな怖い毛唐人か分らぬと云ふ位であらふと思ひます能く外國の事を知つたのは都會人士丈けでありますさう云ふ風に內國と外國と事物が異り有樣が異るからして商賣をするに一樣でやることが出來ぬ內國の商賣は內國の商賣外國の商賣は外國の商賣としなければならぬ、處が一の物を賣買するには變りはない物を賣つて金を受取れば宜い外國から內國に達しても外國に出ても變りはない然るに外國の事は闇だから外國商賣となると遣り方も違ふだらうと云ふ考が自然外國を知らなければ湧いて來る樣だが本統はさうでない內外の區別はない物を高く賣つて安く買ふと云ふのは商賣の原理で何處へ往つても違つたことはないそれを今迄日本が內にばかり閉ぢて居つたものだから外國商業となると違ふだらうと云ふので滅多に人が手を出さない

それから其次には社會の有樣が違ふ是はどうも仕方のない譯であります向ふでは大變物が高い此方で扇子が一本三錢すれば向ふでは十錢すると云ふ風に種々の程度が違つて居るからドン〳〵外國に出て行つてすることが出來ないそれが向ふでは金が有り餘つて一年に二分かそこらの利です日本では一割位の者八分の違ひがある向ふでは百圓借りて二圓拂ふ處は日本では十圓拂

ふと云ふ風に金銀の相違があるから其金銀の相違の處へ行つて賣買することは考へて計算を立てなければ合はない外國貿易を內國で營むにも外國に金融の機械を拵へなければならぬ此方から向ふへ金を送る機械がなけはばならぬ向ふで賣上げて其金を此方へ持つて來る金融機關が出來て居らなければならぬ是等が日本の商賣がまだ殊に東洋に盛に起らない理由で上海へ正金銀行の支店か出來てそこで融通にあり付いて品物を抵當に入れゝば金を貸すと云ふものが出來たなら商賣が盛になりますがそれが止つて仕舞つて運融機關がなくなると十錢に賣らうと思つたものも持堪へることが出來ぬと八錢に負けても賣つて仕舞ふと云ふ風に見す〳〵損をすることになる損をするものだから仕方がなくもう一遍日本に歸つて商賣をしやうと云ふことになるそれで銀行は奮つて立つたら宜からうと云ふて銀行に相談すると銀行は危險が多いから私共も行かない金が日本に澤山利益を以て廻すことが出來るから出かけるにも及はぬと答へるツマり金が不足だからいかぬ

其次には交通機關が備つて居らぬことゝ、是等も日本人がさう浮かと外國貿易を國家の爲だと云ふ考で前後も考へず差引相場も當つて見ないで外國にノコ〳〵往けないと云ふ理由でありますそれをしも知らないで日本商人は意氣地がないとか奮つて出て行かぬかと云ふのは是は出來ない相談で正當の理由はない唯無茶苦茶に聽いて居れば心持のいゝ議論だが實際出來ないそれで日本は今日迄仕方がない商賣が下手である所へ持つて往つて交通の機關に欠けて居るから坐つて商賣する樣になつた日本人の輸出入の高が二億五六千ありますが其八割餘と云ふものは皆西洋人がして儲けて居る西洋人が持つて來て吳れる西洋人が日本の生絲を買つて往て吳れる日本人は坐つた切りで手數料と云ふものは西洋人に取られて仕舞ふそれで誠に割に合はない話であるが何處の國も斯う云ふ風な有樣でやつて居りますかと云ふとさうではない日本ばかりこんな馬鹿らしいやり方をやつて居るかと云ふとさうでないのみならず歐羅巴の大きな國でも斯う云ふことをやつて居る、佛蘭西と云へば世界第一の金持の國である其國では商賣をどう云ふ風にするかと云ふと日本の樣に出掛けて往つて商賣をする人種でない坐つて居つて金を儲ける工風をして居る佛蘭西人は日本人に甚だ能く似て居る人種でありますが矢張忠義の爲に死ぬと云ふ名譽の爲に活動して居る人民で支那人見た樣な奴でない日本人に能く

似て居る命を捨ることを何とも思はない決闘を能くやつて居る大臣と云はれる人でも議會で侮辱の言を受けると他の大臣を差添人にして決闘する一寸日本人に似て居るさう云ふ風な人間で世界中至る所領地を取つて領地を占領して往きますさて其占領地の商賣の利益は自分が取るかと云ふと英人が來て商賣する獨乙人が來て持出して往くと云ふ風に自分が一生懸命血を流して拵へた利益は他の國人に占領せられて居る日本が今度蘇州、杭州を開いたる今日の景況では外國人が來て利益を取りさうである佛人はさう云ふ人民であつて商賣が下手だそれだから商業人民でない然るにどう云ふ譯で金持になつたかと云ふと佛蘭西では坐つて居つて商賣をすることが中々甘い人を呼寄せて自分の店に呼寄せて商賣をすることが甘い歐羅巴の奢侈物は佛蘭西で作る世界の奢侈物は皆佛蘭西から出て往つて賣る樣になつて居る博覽會を開いて世界の美術を示して其利益を占めて居る前年の博覽會に於て何十億の金が佛蘭西に落ちたか分らないそれであるから佛蘭西人は自分が外へ危険を冒して出て往くに及ばぬ坐つて居つても其處へ買ひに來る其代り巴里あたりには外國人か多い自分の店に人を寄せて勸工場などは大したもの御世辭を云ふことは甚た旨く買はせる樣に云ふ商賣は下手だが小賣商業に長けて居る今日佛蘭西は歐羅巴で一番富の大きい國世界で大きな國となつて居りますが其富は商賣で取つて來た富でなくて坐つて居つて出來た富であります其點から云ふとエライです

英吉利はどうかと云ふと御承知の通り世界を家として居る何處へでも行く自分の內の資本が多いので內で儲けることは出來ぬと云ふので歷史上の關係もありますが世界を家としてやつて居るさうして占領地は世界至る所に在りて英吉利の占領地に太陽の照らぬ處はないと云ふ風に至る所英吉利の土地だから交通が便利でありまして外國に出る器械が多い軍艦も四五百艘ある商船も何千あるか分らぬ夫だから外へ出るのが易い其英吉利が商賣に上手かと云ふと下手だ佛蘭西人の店へ行つても御世辭が宜いので買ひたくなるが英吉利人の店では買ふのも嫌ひになる位で小賣店で物を買ふと腹が立つ位嫌やなら御止しなさいと云ふ風だ支那人も御世辭も何もない嫌やなら御止しなさいで小商業には下手だが大きな商業にはどう云ふのか甘いそれは占領地も澤山あり物産も澤山持つて居るし品物も安くする安ければ人も買ふ樣になるです

今茲に擧げたのは英吉利と佛蘭西でありますがさう云ふ風に國に依つて强ち商賣が外に出てやるのが宜いと云ふ譯でなければ又内に坐つて居るのが宜いと云ふ譯でもない其國の形勢に依つて貿易の主義が異つて居るどれが善いどれが悪いと云ふことは出來ぬ道理上から云へば手數料を損するから自分がやる程宜いことはないが歴史上の關係國の形勢上から一概に云ふことは出來ぬ

今度は内で云つたらどうか即ち假に大坂と東京と比べて見たらどうか大坂と云ふものは英國人に似て居る一寸店に居つても甚だ無愛嬌である大坂の人が此處に居れば御差合で御免を蒙るが誠に無愛想でありますそれで大きな商業には長けて居る彼處は天然の位置が宜い位置が宜いのに相違ない大きな商賣は上手だ例へば米相場の米の價などは東京の取引所で價が付くのでない大坂の取引所で價が付いてそれが全國に行渡つて東京の米相場などが出る二十錢臺三十錢臺と云ふ風に價が付く大坂で九圓五十錢なら東京では九圓七十錢になると云ふやふに大坂の相場に基くと云ふ風に商賣に權力を持つて居るさう云ふ風に總て大きな商賣をすることが上手で土地の商賣は甚だ下手だ其代り東洋貿易、朝鮮貿易、支那貿易などは大阪人が自慢にやつて居るさう云ふ風に大阪人の氣性は英國に似て居る烟突なども昨今行くと非常に多く見へる商工業には英國人の如く長けて居る京都はどうかと云ふと巴里に似寄つた所で極く山水明眉で美術品に富んで人を其處に引付けて金を置いて往かせる一方で佛蘭西人に似て居る今度の博覽會には餘程金を儲けたでせう殊に奢侈品が多いのは佛蘭西に似て居る京都の土産には何を貰ふかと云ふと絹の切れとか白粉とか裝飾品とか巴里の物品見た樣なものです偖終りに東京はどうかと云ふと東京は政治上の首府であつて諸官省もあり立派な役所があつて兵隊も住んで居る商業の町でないと云ふことは明かなことで東京市を商業の町にしやうと云ふのは東京人の企であるが果して商賣町になるかどうか分らぬ兎に角東京は商賣の土地でない其代り貴顯紳士や雲上人が居るから遊んで金を使ふ娯樂の器械が備つて居るそれだから例へば勸工場を拵へて品物を並べて金を取る坐つて居つて錢を取る巴里人に似て居る

今京都、大阪、東京の三つを較べて見ると英國と佛蘭西の違ひがある樣に其形勢に依り色々違つて居る何方が善いとも云へない自然の歴史の關係政治上の原因其

他其處に住んで居る人種の性質如何に依つて何れが善いと云ふことは云へないそれで一括して見れば即ち日本と云ふ國は今の處ではどうしても奮つて外國などへ行つて商賣をすることが出來ぬ國であつて矢張內國で商賣をするより仕方がない唯日本人は商賣をすることとはどうしても他國人に敵はないかと云ふと決してさうでない戰爭等の結果で大商業人民に適する人民であるだらうと思ひます是は即ち滿州の戰爭で大勝利を現した如くあの勇氣は商業にも備へて居るあの心を持つて居れば吃度商業にも元氣が出るだらうと思ひます日本人種は決して商業人種でないと云ふことは言へぬ外國新聞に恐るべき商業人種と書きましたがまさか左程でもないが今の樣な方法でやつたならば尻を打つて外國に出て往けと云はれぬでも獨りで商賣は盛になつて往かうと思ひます

哲學の話

松本文三郎

此頃は哲學と云ふことが大變日本に於て流行する樣になつて西洋の哲學は云ふに及ばず東洋哲學即ち支那哲學とか印度哲學と云ふ名稱が盛になつて研究される樣になつて來たそれに就きまして又哲學上の言葉と云ふものも今では澤山用ひらるゝ樣になつて來ました殆ど用いないで宜い處まで哲學で所謂學問上の言葉を用ゆる樣になつて來ました是は一方から見れば憂すべき事柄と云はなければならぬけれども時として其中に於て非哲學の事柄に於ても非常な謬見を以て其事を論ずる人が時として起つて來ると云ふことを私は方々の雜誌や新聞で見るそれは流行に連れて居る知らない人が口を出すことであつて元來哲學と文學と云ふものは其深邃な所に至ると云ふことは餘程六ヶ敷い六ヶ敷い代りに誰でも其片端に口を入れることが出來るものである西洋の哲學書のみならず支那の儒書でも諸史百家の書或は印度の佛書でも其他の書物でも夫等のものを少し讀み噛ると幾分か哲學の事に口を入れることが出來るものである丁度文學に於て少しでも文學を論ずることが出來ると文學に口を入れることが出來ると同じであるさう云ふ人であると時として非常な大なる誤りを來すこともあるそれで私は今度哲學と云ふ題で其哲學と云ふものはどう云ふものであるか哲學と云ふものはどんな性質を持つて居るものであるどうして哲學と云ふものが起つて來たものであるかと云ふ樣な事柄を此處

で少し御話致さうと思ふのであります哲學でも御研究になつた御方は疾くに御存知のことでありませうけれども若し又諸君の中にも哲學を勉强なさらぬ或は其他の學科に從事して御出なさる方ならば多少の裨益があらうと思ひます

哲學と云ふものはどんな學問であるか此問に對しては私は斯う云ふ答を與へやうと思ふのであります哲學と云ふものは宇宙の萬有に科學的説明を與へ吾々人間をして滿足を感ぜしむる所の者であると云ふ定義を與へたいと思ふのであります此定義は唯是丈けでは未だ十分に御分りになるまいと思います是に就いて科學と云ふものはどう云ふものであるかと云ふことを存じなければならぬが科學と云ふ言葉は英語で「サインス」と云います之は皆樣御存知であらうと思ひますから之に特別の解釋を致しませぬ但し科學に二通りの意味があつて廣い意味と狹い意味とあります廣い意味に於て科學と云ふ字を用ひますと日本で學と云ふ學は皆科學に入れなければならぬ哲學も廣く用ひたならばスッカリ科學の中になつて仕舞ふ狹い意味に科學を用ひた時には哲學丈けが抜けて仕舞つて外の學問と哲學とが相對して立つと云ふことになる哲學と云ふものが一方にあつて其外の總ての吾々の今日所謂學と云ふものが其他の方にあると云ふことになるそれでは未だ十分に御分りになるまいと思ひますそれなら哲學と科學即ち狹い意味に用ゆる科學と云ふものはどんな區別があるかと云ひますと範圍に於て廣し狹しがある其目的に於て大變違ひがある一躰此科學が研究する處の事柄と云ふ者は總ての世界の現象と云ふものであるそれなら總ての世界の現象と云ふものは盡く科學と云ふものが一つで研究するかと云ふと決してさうはいかない世界の現象と云ふものには非常に種類がある種々雜多の現象と云ふものがある吾々の眼から見ると云ふと色々の種類に別つことが出來る例へば物理界の現象であれば物質互の間に於ける現象動植物學の論ずる所ならば植物界の現象動物界の現象の如く科學と云ふものは其澤山に別つた現象の一部の間に行れて居る所の關係を論ずるものである即ち物理學は物理的現象の原理化學は化學的現象の中に行るゝ原理と云ふものを研究する總て其通りであります此世界の現象一般の上に渉つて居る其原理と云ふものを研究すると云ふ科學は決してないそれを爲すのは即ち此哲學である哲學はさう云ふ安排に宇宙の現象一般の事を論じて往くものであるから其中の色

々の現象の原因結果の關係とか云ふ樣な細かなことに至つては素より論じないそれは皆一々特別の科學に讓つて論じない大躰の事ばかり論じて往く科學にあつては其澤山の分類した現象がある其中の原理と云ふものを研究して往くのであるから植物の方は植物ばかり動物の方は動物ばかり物理學は物理學ばかり化學は化學ばかりと云ふ風になつて各其方に普通なる元理を研究して居る物理學で研究した原理は必ずしも化學の範圍に行ることを得ず化學で研究した原理は必ずしも動植物學に應用し得ると云ふ譯には行かず自分の研究する所は自分の研究する範圍に於て十分普通であればそれで澤山である科學に於て研究する原理は比較的に普通的のものである何ぜ比較的に普通的のものであるかと云ふに外の者に應用することが出來やうが出來まいがそれには構はない唯自分の範圍丈けで普通なれば宜しい哲學では全躰を引続べて其普通的の元理を研究するのである故に哲學は科學に對して絶對的正確なものであると云ふ要するに科學と云ふものは世界の一局部を取つて研究するものであるのに哲學は全躰を取つて研究するのであるさう云ふ相違がある是が即ち其範圍に廣し狹しがあると云つた所以である即ち澤山の現象が別々にあるとそれを幾分か範圍を限つて其現象を研究して原理を發見するのが科學の力それを一つに纏めて一般の上に於て其の原理を見るそれが哲學の原理であるこう云ふ風に論じて來ると又次の樣に云ふ人があるかも知れぬ此一々の局部の研究と云ふものが十分出來て來れば其全躰の事柄は問はずして明な譯である局部の研究か出來ればそれを集めさへすれば全躰の研究が出來るそれだから科學があれば十分だ哲學を別に研究する必要がないと云ふ人があるかも知らぬ是れは一應尤な議論である乍併是には又一の誤つた考が付いて居る凡そ物を分拆的に研究すると云ふに例へ何程精密に其分拆が行届いたとしても此物躰の組織を知り得たと云ふことは出來ない例へば人間と云ふものを研究すると云ふ人間を荒ッぽく云へば首なり手足なり胴なり一々切り離して仕舞ふ而して先づ首ばかり研究する其次に胴それから手足と云ふ風に一々研究して往くそれを合せて皆人間と云ふ一のもの丶總ての知識が得られるかと云ふと決してさうは往かぬ一躰分拆的研究と云ふことは其物を殺しての研究である一つ〳〵離して研究したものであるから其物躰の完全な纏つたものは最早壞れて仕舞つて居る吾々人間の如くに生きた働をし

て居らない生きた活潑々地なる働きは分らぬ何程分拆的研究が精密に出來ても物理界に於て生理學とか其他の科學の研究が精密に往くと云ふことは今迄の處には出來ないが例へそれが出來たとしても十分に全躰のもの丶智識を得ると云ふことは出來ないそれで科學と云ふものが幾ら澤山あつて宇宙の現象を分類して一ッ一ッの研究をして見てもそれを集めて世界と云ふもの丶智識が知り得たかと云ふと決してさうは往かない元來宇宙の現象には現象自身として區別がある譯でない一の完全なる世界を種々の現象が集つて來て居るそれを唯吾々の見解の點から種々に別るので元來自分の方に何も區別はないので唯吾々の方からそれを分拆して往ふとするのであるだから丁度人間を分拆的に切り離して研究すると同じであるそれで世界全躰の智識と云ふものは外に存在する所がなければならぬだから此哲學のことを昔から言葉を換へて宇宙一切の萬有の絶對的原因を研究する學問であるとも言つて居るのであります絶對と云ふのは相躰の反對である色々の科學であると云ふと皆相躰的の原理原因と云ふものを研究する例之へば物理學では物質とか勢力とか云ふもの即ち物理界に行はる丶顯象の見解動物學なり植物學なれば又動物植物の間に行れて居る原理を研究する總てさう云ふ風に此方に行れて居るものと他の方に行れて居る原理と相對して立つて居る一般にそれに行渡ると云ふ樣な原理と云ふものは少しも分らない然るに哲學の研究する所の原理と云ふものは尙一層それから抽象して來て其世界現象と云ふもの丶一般普通な元理を研究しやうと云ふのであるだからそれは彼と是と相對すると云ふことは少しもない全く其相對と云ふ範圍を脱して居る所のものである哲學と云ふものは是迄から絶對的の原理を研究するものとなつて居るさう云ふ風に哲學を研究する所の原理と云ふものは絶對的のもの即ち少しも相對と云ふ範圍に關係なくそれを離れた總ての現象に行渡つて居るものであるだからしてどんな時代に於て現れて來た哲學と云ふものであつても皆其哲學の學說と云ふものは其時代に於ける所の絶對的の原理を現して居る其時代に於ける絶對的の原理其時代に吾々が到着して居る智識の範圍に於て最も完全したる最も終極の原理を哲學が現して居るものであるだから昔から哲學の系統は非常に澤山あるそれは後世になつて見れば段々變化されて居るどんなエライ豪傑の學說でも今迄其儘で殘つて居ると云ふものはない幾分か後世の人に

依つて變化されて居る又吾々の智識が進むと共に變化されなければならぬものであるけれども其哲學の學説と云ふものは其當時に於ける智識の極つた終極したものであると云ふことは如何なる學説に於ても一樣なものである吾々の智識はズン〳〵進歩して是で終ると云ふとはないからそれを集めて段々絶對的の原理に合するから智識が廣つたのでそれが精密になれば絶對的のものも變化して往かなければならぬ即ち哲學も變つて往かなければならぬ變るのが當然の話どんな哲學でも其時代に行れたものならば必ずそれは其時代に於ける所の智識の終極を現して居るものであると云ふことは疑ないことである乍併倚此に私が一つ注意を惹いて置かなければならぬことがあるさう云ふ風に吾々の智識が進歩すると共に哲學と云ふものもズン〳〵發達して止まないものであるけれども一代に出て來た哲學と云ふものはどんな時代でも構はない次の時代に於て全く消滅して仕舞ふ謬論と見做されて仕舞ふと云ふことは決してない段々變化して往くから變化して往くと後の方が正しく前の方は皆研究せぬでも宜い前のものは皆誤つて居つて新しいものは善いと云ふ風に解釋されるか知らぬけれども哲學はさうでない科學の發達であれば新しいのが正しいと見做される一番後のが正しい前の學説は段々變化するから變化されたものは後のよりも正しいと見做すと云ふことは出來ぬが哲學は決してさう云ふことはないそれは哲學の科學と違つた所であります一躰哲學と云ふものが發達して往くと云ふのは前のものが潰れて仕舞つて前のものは誤りと見做されて新しく出來て來るのでない始め哲學と云ふものは例へば希臘の時代から始つたが其哲學が出るとそれは其時代の智識の終極を現して居る眞理を見て居る如何に不十分でも其時代の智識の終極を認めて居るから後に出たものであつてもそれを潰して仕舞ふと云ふことは到底出來ない然らばどうしてそれを改良進歩せしむるか眞理に會つたならばどうして改良することが出來るかと云ふと唯それを大きくする丈けのことである即ち其次に顯れて來る哲學には前のを中心として元素としての他ものをクッ着けて大きくする其次に生れたものはそれを一の元素としてそれを大きくするそれが哲學の發達であるだから前に出て來たものゝ消滅することもなければ誤りと云ふこともない哲學は皆其時代の智識の終極を現して居るから眞理を認めて居る其眞理は何時まで往つても何千年經つても變ると云ふことはな

い多少の眞理を認めて居るのである唯それが大きくなつて往くのでそれが即ち發達である通常の學問の發達と云ふものはさう云ふものでない通例の學問の發達とはそこが違つて居る哲學の學説が一つ起つて其次のものが起ると云ふと前のものが倒れる前のものが倒れて後のものが起ると云ふは決して正當の解釋でない大きくなつて生れて往く是だけであるだから哲學と云ふものは昔から不變のものはない必ず變つて往くに違いないけれども又それが滅亡する丸でなくなつて仕舞ふと云ふことはない極く近頃の學説と古い學説例昔の希臘のターレスの學説とカントの學説とか其他現在のハートマンの學説とかを互ひに相比較すると非常な違がありますけれども違ひのあるに拘らず其多くの違ひの中に於て吾々が昔の人の漸次發達して來た學説を研究して見ると其中に昔の説が依然として含まれて居ることを發見することが出來るのである哲學を研究するには哲學史を研究することが必要だと云ふことは此點にある昔の人の言つたことは何年經つても香氣が殘つて居る唯字句バカリを解釋したのではいかぬ仔細に研究して往けば今の學説に於て矢張り其眞理を發見することが出來るヘーゲルと云ふ人が哲學史と云ふものは千載不朽であつて何時も活潑なる處のことを論ずるものであると云て居る誠にそうでありますそれだから哲學史を研究することが必要である斯の如く哲學と云ふものは絶對的の原理と云ふものを研究するものでありますから哲學の得る所の原理と云ふものはそれを終極の原理とも云ひ又始源の原理とも云ふ終極と始源とは全く反對であるが吾々は何方を云つても差支ない何ぜ始源の原理と云ふかどうしたら始源になるかと云ふと總べて世界の現象と云ふものは際限なく澤山あるそれに大原理が存在して居る其大原理があつてそれに依つて總て物が支配されて居る總てのものが規定されて始めて此宇宙の現象が發生して來る此に一の物が落ちるとどうしてそれは落るかと云ふと落る事情があつて、例へば地球の引力とか何とか云ふものがあつて落ちなければならぬ其時に於て落ちなければならぬ事情があつて落るどんな小さいものであつても大きなものであつても理法と云ふものがあつて其理法に依つて支配されて始めて其現象が現れて來るのである而して宇宙の現象の理法と云ふものは哲學の大原理に依つて方々の學問の研究した者を疊んで綜合するから大原理に依つて統一——纒められて來る者であるだからして哲學の大原理

と云ふもの矢張總ての現象を發生する所以の原理である其原理があつて始めて總ての現象が起つて來る其點から云へば始源の原理それがなければ起つて來ないから始源の原理と云ふのである然らばどうして終極の原理と云ふかと云ひますと吾々が理法を發見すると云ふものは始めから非常な抽象的の原理を發見することは出來ない單一なる現象を研究してそれを推廣げて複雜な所になつて科學の原理になり仕舞に哲學の原理になつて來るのであるだからして吾々は先づ單純な所から複雜に渉ると云ふのが一般の原則である哲學の原理と云ふものはさう云ふ風にして單純な點を始めやつて來て仕舞に出來たものである智識の終極に得た原理である最も範圍の廣い所であるから最も智識の出來上る歷史的の順序から云へば終りに出來るものである始めは一時の現象しか知らぬがそれが集つて大きな應用を有する原理となるだから終極の原理であると云はなければならぬ詰り終極の原理であると云ふのは吾々の智識の歷史上の發達の點から云つたものである吾々の智識はどうして出來たかと云ふ歷史的の觀察の點から云ふと終極の原理である乍併論理的の方から云ふと始源の原理である現象が出來る其現象が出來るのは唯出來るのでない發生する十分な理由が備つて居るから出來て來たのであると云ふから後に吾々が智識の上では現象が見へて原理があると云ふことを知るが論理的に云ふとそれが出來るには原理がなければならぬと云ふ所から論ずるからそれが始めである是までの學者は哲學はどう云ふものかと云つて研究すると是まで私が述べた邊に止つて居ると思はれるプラトゥ、とかアリストートルとか云ふ昔の古い學者の說は姑らく置き近頃の學者ヘーゲル等が哲學と云ふものは辨證法に依つて進步開發して往く絕對の學であると云ひヘルバルトと云ふ人は槪念の意味を明確にするのが哲學の職であると云ふユーベルウエッヒと云ふ人は（哲學史を書いて居ります）原理の學と定義す此頃獨乙で有名な學者のウントと云ふ人は科學に於て得たる智識を綜合することは哲學の目的であると云ふ又ウルリチーと云ふ近來獨逸で有名な學者も思考と實在と云ふことの兩方の根本的の原理を研究するのが哲學であると解釋して居ります昔の哲學者の解釋は是まで云つた通り科學で研究したとを綜合して終りに得るべき原理を研究するのが哲學の目的である職分であると考へて居つた樣に思ふ併私の考に依ると云ふと哲學と云ふものは唯夫程の單純なも

のでない其目的としては尙一層廣大なる所の尙一層人間に切要なる所の職務を負ふて居るものであると考へるのでありますそれはどんなことであるかと云ふと前の定義の後半分に云つた事で即ち吾々をして滿足を感ぜしむると云ふことである啻に宇宙萬有の科學的說明を與ふると云ふのでなく後半分として人間に滿足を與ふると云ふことは大切なことである其事は哲學と云ふものはどうして起つて來たものであるかと云ふ起源を尋ねて見れば最早其哲學と云ふものゝ目的は人間の安心を得ると云ふことにあると云ふことは明かなことである元來吾々人間には宇宙の現象を見て疑を起すと云ふと其疑を自心で解釋せんとする性を有つて居るものであり假令ひ不十分な說にてもそれに解釋を付けやうと掛るものである若し其事に就いて疑が解けない時には吾々の心は非常に苦痛を感ずる若し其結果は其疑が解ける樣になつた時には例へ其解釋は誤つて居つたにしても何かそれに一應の解釋が與へられることが出來た時分には吾々の精神の狀態は安んずることが出來る樣になつて來る而して其事柄が愈々吾々に直接の關係を持つて居ることであると云ふと愈々吾々がそれに就いて解釋を得んと欲する念が強くなつて來るのでありますす何も吾々に直接の關係がない外の事に就ても分らぬことがあると解釋を付けるのが人間の性質であるのに況んや自分の身に直接の關係を持つて居れば尙更重大なる思ひをなす例之へは吾々の死生の事なとは直接に吾々に關係するのみならず非常な重大なる關係を持つて居るものであるから此考が吾々の心の中に起つて來ると最早安んじて居ることが出來ぬ何かそれに就いて十分な自分丈けの解釋を與へそれで安心を得る樣にすると云ふことは歷史に於て分つて居るそれで其天下の事柄を段々觀察し宇宙にある所の色々の道理と云ふものを吾々が研究してさうして自分の心に於て抱く所の疑團を解釋して往くと云ふことは哲學の大目的とする所である是は後に哲學の起原のことを云ふ時に尙ほ一層明了になりますが此點は宗敎と云ふものと其目的を一にして居る所でありますが唯其方法に至りては大に違ふのです此の如く哲學は吾々の實際上の思辨から起つて來たものであるから哲學と云ふものは吾々の心に於て自然に起つて來なければならぬものであると云はなければならぬ或は世界の人は哲學を十分知らぬものであると無稽の事を論ずる無用の學問であると考へる人がある是は哲學を知らぬ人が云ふことである哲學と

云ふものは人間の命と云ふものがあらん限りは無くしやうとしても無くすることが出來ない何故無くすることが出來ないかと云ふと其哲學上の思辨と云ふものが人間の心に發すると云ふのは避くべからざる處の必要に基いて起つて來たものである即ち一方にはどうしても考へねば居られないと云ふ有樣で心の必要に迫られて起つて來たものである第二は其哲學の形式と云ふものも吾々が特に拵へるのでなく吾々が心に於ける自然の働から出來て來たものであるだからして哲學と云ふものは人間の心が此通りである限りは哲學はどうしても滅しやうと欲しても滅することが出來ないものである要するに哲學は一方には科學的の性質を持つて居る何となれば世界のものに科學的解釋を與へるから又一方から云へば宗教の性質を持つて居る即ち人間に安心を與へると云ふことを持つて居るから言を換へて言へば哲學と云ふものは眞理と云ふものを求めて之を實行することを以て目的とするものである或は理論ばかりを研究し或は實行ばかりを目的とすると云ふものは未だ哲學を知らざるものであります倚ほ實際と理論とは合一であるまいと云ふことがありますが餘り議論が長くなりますから是は他日に延して此には略して置きます是からは哲學の起原に付きて倚ほは少しく申し上げます

哲學は一躰どう云ふものかと云ふことを申しましたが倚ほ其起りを論ずる所に於て其定義が一層明になる然らは哲學はどうして起つて來たかと尋ねますと是れは總ての學問の如くに吾々の智識が不完全であるから起つて來るのであります世界の現象を見ては吾々がそれを知り盡すと云ふことは出來ない吾々が十分に其物を知り盡すことが出來ればどんな現象を見ても驚くこともなければ怪しむと云ふこともない所が吾々は無學な者だから野蠻な吾々程發達しないものは何か現象が起るのを見ると不思議に感ずる元來不完全で無學であると云ふ所からして怪しい疑ふと云ふ念慮と云ふものが起つて來るが其怪しい不思議だと思ふことがあれは兎に角それに解釋を與へたいと思ふそれが起りとなつて居るのであるけれども不完全であると云ふことのみが哲學と云ふものを起す元であると云ふ譯にはいかない不完全であると云ふことは吾々人間のみならず總ての動物でも不完全と云ふことはある然るに動物には研究すると云ふことはない假令ひ之ありとしても吾々程にはないと云ふことは確てある吾々人類事物を研究する

と云ふ意志を有るを以て見れば人類と云ふものは即ち思考的動物考へる所の動物であると思ひます道理を考へてどうかして現象を説明せんとする傾向を始めから與へられて居る者であるそれが哲學の抑も起つて來る元であるだから前にも一寸申しましたが吾々が何か玆に不思議な現象を見ると云ふと吾々の心の中に於て十分にそれを解釋することが出來ないと云ふことがあるさうするとどうかして解釋を與へやうと云ふ考が起る不十分でも何か其事に就いて解釋を與へ自分丈け安心しやうと云ふ考が起るそれは其元はどうしてさう云ふことを考へるかと云ふと吾々の智識を磨いて吾々の心に滿足することを得たいと云ふことから起つて來る即ち自分の心に安からんとがあれば何時も苦痛を感ずる誰でも苦痛は嫌やだから苦痛を取れば滿足の境涯になるそれを得やうとするそれは自然のことと是はアリストートルもさう云つて居るアリストートルの純正哲學の始めの方に書いてあります吾々の五官と云ふものは吾々が幸福を得んとする目的を以て使用するのである例へば或る道を歩く時に此道は危險かどうか惡いものがないかどうかと云ふことを見て歩くと云ふのは吾々に幸福と云ふものを與へるが爲に吾々の危險を避ける爲に使用するのであるが然し吾々には此の如き利益のない時にも時として使用する例へば眼の働に於て見ると云ふと十分に分る吾々に實際上の目的が何もない自分もどんなことをしやうと云ふ考もない時に於ても吾々が絶へず眼を使用して居る今此物を見てどんな役に立ると云ふことの考がない又見ることが必要であると云ふこともないが唯茫然必要のない時に於て吾々がヂッとして居らぬで何か見廻して居るとか或は又手足を動かすと云ふことがあるそれで必ずしも利益の爲に五官を使用すると云ふことはないことは明らかである而して此ことは眼に於て最も著るしい是は智識の入口の最も著るしいものであり萬物の性質がそれに依つて明に分ることが出來る眼と、云ふものは最も正確に物の性質を知らし最も精密に萬物の有樣を告ぐるものであるから眼と云ふものを必要でない場合に於て用ゆると云ふことがあるのである卽ち自然的に吾々が智識を得たいと云ふ性質がある證據でありますそれで吾々が世界の不思議なことに出會へばそれには何か考へないで居ると云ふことは出來ない丁度吾々の饑餲に迫る時には何か物を食ふたり飲むだりすることを欲する如く吾々がそれを解釋し説明せんとする

念は失せない吾々の饑餓に物を求むる如く勢どうしても制することが出來ない哲學と云ふものは必要に迫られて此世に現れて來たのである此點はアリストートルが委しく述べて居りますが述る暇がありませぬから述べませぬアリストートルは怪しむと云ふことより哲學が起つたと云ふカントも矢張さう云つて居りますカントは純正哲學は成立たぬと云ふことを證據立てやうとした人でありますから哲學の方から云ふと大變いけない方であるが哲學と云ふものは自然の性情に基いて起つて居ると云つて居る吾々が至り限りある智識を無限に應用せんとするのが自然の性質でさう云ふ風に生れて來て居るから吾々が誤りを犯して有限の智識を無限に應用せんとして居ると云ふことを云つて居る無限に應用すると云ふのが純正哲學である元來カントは純正哲學は誤りであると云つた人であるが乍併兎に角哲學の傾向は人間自然に與へられた性質で天性に基いて起つて來たのであると云ふ證據になるさう云ふ風に此哲學と云ふものは起つて來たのである哲學の起りは智識の愛から起つたので哲學は人間の性情の上で止むことを得ぬ處から起つて來たものであるからして吾々人間を哲學的の動物即ち「アニマルメタフイヂクム」とも稱するのであります哲學はさう云ふ風に吾々の性情止むを得ぬ處から起つて來たものであるから是に於て定義は明になる人生の安心を得ると云ふことは元來の目的である哲學はどう云ふ時に於ても安心を得ると云ふことを一の目的としてやつて往かなければならぬ唯口先ばかりの議論では眞正の哲學と云ふことは出來ない今迄述べたのは論理上の起原から哲學と云ふものはどうして起つたかと云ふことを述べましたがもう一つ序に歷史上の起原を述べたいと思ひます

歷史上哲學は何時から起つたものであるかと云ふと是迄西洋の歷史家であると希臘に於けるターレスと云ふ人を以て哲學の始祖であるとして居る此人は紀元前六百年頃の人であります「ターレス」と云ふ人と殆ど同時に於て七賢と云ふ人があつた其人々の名は確に定つて居らぬ四人ばかりは分りて居りますが其他の三人は明でない人々に依つて違つて居る兎に角七賢人と云ふのがあつて其論ずる所のことも哲學的の樣なこともあつたけれども其中特にターレスを以て其始祖としたと云ふのはどう云ふ譯でさうであるか元來ターレスと云ふ人は自分で何も書物を著したと云ふ人でない紀元前六百年頃であるから希臘でも開けない時代であるから自分

で書物を書いたと云ふことはない其言葉と云ふものも今から見ると澤山殘つて居ると云ふ譯でもないアリストートルは希臘の哲學者の最も有名な人であるか其人の著はしたる純正哲學と云ふものには古代よりの哲學々說の歷史か付て居りますアリストートルの書物の中には「ターレス」の言葉が一言殘つて居る御存知の如く此人は萬有の元は水であると云ふことを考へた人である萬有の大本は水であるとそれ丈けアリストートルの書物に書いてあるアリストートルは其後附加へて斯う云ふ風に云つて居る世界の物は總て水を得て生活して居る吾々の身躰を見ると云ふと血と云ふものが循環して居る血と云ふものは水である（ターレスの水と云ふのは液躰とか流動躰と云ふものゝ總稱と見做して宜い）此血と云ふ水がなくては吾々人間は一日も生活すると云ふことが出來ない植物も地面の下にある水を吸上げて生活して居る其水をやらなければ忽ち枯れて仕舞ふ其他總て世界にある萬物又種子は總べて水から出來て居るから萬物が死ぬと云ふと其物が又水に歸着する元は水から出來たから又水に歸して仕舞ふ是れターレスが水を以て萬物の元とした所以である地水火風此四ッは希臘人が四元素としたものである希臘人は此四元素があつて總ての物が此四ッから出來て居ると云ふ考であるか其中でも地と云ふ者は即ち水が凝集して出來たものである空氣とか火とか云ふものは水が稀薄になつて出來たものである斯う云ふ考水が重であつて其他のものは水の變形で出來て居るだから萬物は水から出來なければならぬと云ふ考であるターレスの說は斯う云ふ風に極く單純な粗雜なものであるそれが哲學の歷史の中に於て始祖と云はれて居ると云ふものはどう云ふ所に依つてさう云ふことがあるか前には哲學と云ふものは宇宙現象の原理即ち總ての物の原理と云ふものを研究するさうして一の大きな原理に歸着して仕舞ふと云ふのは即ち哲學の本職である即ち澤山の現象を研究して一の原理を見るのが哲學の本職其外、界から見ては大變に違つたものでも其中に於て缺くべからざる性質即ち本性を統一して纏めて仕舞ふと云ふことがなければならぬそれで哲學上の原理と云ふものは必然と普通と此二ッの性質を持つて居ることになる種々の現象は總べて統一して仕舞ふから萬有に普通になる總てのものを統一して總てのものに歸着するから哲學上の原理は普通と云ふ既に普通であつて總てのものが其原理に從はなければならぬから必然でなければならぬ科

學の方では比較的必然哲學では絶對的必然の性質である希臘古代の思想はターレス以前の希臘の哲學思想と云ふものは哲學に類した所も隨分あるがそれには宗教上の元素は加つて居ります又世界の現象を說明すると云ふことはあるけれども其萬有の原因とする所は偶然に出來て居る所の事實を以て元であるとして居るそれ故に斯の如く普通と云ふことゝ必然と云ふことの二ッの性質を持つて居ない此原理が普通と必然の二ッの性質を持つて居らないから哲學と名を付けるとが出來ない一躰哲學と云ふものゝ起りは偏見邪說の爲に吾々の心が支配されると云ふことがなくしてどんな現象を見ても吾々が其現象を仔細に研究して自然的原因と見做さねばならぬと考へる所のものに歸着するそこで始めて哲學と云ふものが起つて來る歷史上から云ふと吾々の心が束縛されるとか是迄の從來の偏見に依つて其心が束縛されて居ると云ふことがあると十分の討究が出來ぬから哲學が起らない之に反し自由に吾々が研究の出來ることになると始めて哲學が起るターレスの說いた所は極めて粗末なものであるが水と云ふものを取つて一般萬有の基礎である總ての物がそれに依つて出來て居ると云ふのであるから水と云ふ一の物を以て總ての萬有を說き去らうとした即ち宇宙の萬有の普通的の解釋を與へたものと云はなければならぬ是が古來の哲學に於てターレスの說を以て哲學の始祖であると云ふ所以であります

是からは哲學と宗教の關係に就いてもう少し申述べやうと思ひますが餘り長くなりますし時間も遲くなりましたから今回は是丈けにして置きます又機會がありましたら述べることと致しましやう

批　評

諸法無我の難に答ふ

高木笠天

近來東洋學流行の結果として、學者の佛敎を批評する者漸く多きを加へ、各是とする所によりて紛々たる毀譽をなす、其の說く所を觀るに、佛敎の敎理を以て高倘深遠なりとするに異議ある者殆んど稀なり、只だ疑ふ所は、「此深遠なる敎理を以て釋迦一人の所說とすべきか」又「此高倘なる敎理は社會に應用して幾何の實益あるべきや」の二點にあるが如し、前者は即ち大乘

非佛說の起りし所以にして、後者は即ち佛敎を厭世敎として擯斥する一派の人士を生じたる所以なり、玆にも記者足下は亦佛敎の實益如何を疑はれ、第四十七號の社說に於て、佛敎三法印の一なる、諸法無我の說を評せられたり、其の說始めに佛敎の所論を具陳して、諸法無我の眞理なることを示し、終りに實際社會に應用したる上にて若干の弊害あることを指摘せらる、今や佛敎專門家の或者は註疏の末に汲々として、唯だ古人の糟粕に甘んじ、消息杳として社會の表に顯はれざるに反し、知名の學者が有力なる批評を佛敎に加へ、近世の學理に照らして、其眞否を論定せんと擬する者、續々として輩出し、而かも其所論往々にして病所に命中せるやの感あるは、佛敎の爲寧ろ大に慶賀すべし、此勢をもて進行せば、或は恐る、佛敎は居士の手により て革新せられ、今日の緇徒は革新の大業に與ることを能はざるべきを、余も亦僧侶にあらざれども、屢々僧侶と往來して、常に此徒と談論するを樂とすれば、佛語自から耳に親し、乃はち聊か所思を攄べて記者の批評に答へ、佛敎に所謂諸法無我は社會の進歩を害せざるを辯ぜんとす、是れ固より門外よりの批評なれば、佛敎家果して我說に首肯すべきや否やを知らず、只だ我觀の佛敎を陳ずるのみ

記者足下は既に諸法無我の眞理を確認すと云はる、されば今更ら眞否を此點に爭ふの要なからん、問題は唯だ實益上の事なり、若し佛敎にして、平等一如の外は、一切の差別を斥け、我も眞如のみ、彼も眞如のみ、自他の區別は全く妄念なりと、說く者ならしめば、優勝劣敗の活世界に應用すべからざるは云ふまでもなく、有道の國＝儒者の所謂＝にも適用すべからず、何となれば、自他の別を湮滅すれば、自他所有の區別もなく、自國外國の差別もあらざるが故に、盜賊も之を非とするに由なく、敵國の用をなすも、不忠とすることを能はざればなり、斯くの如きは道德を無視し、社會の秩序を紛亂するの毒物のみ、然れども佛敎は、しかく愚說を爲さゞるなり

今佛敎の道德が實用上の適否を知らんとせば、須らく佛敎の目的を尋ぬべし、若し目的明瞭ならば、其の社會を害すると益するとは、直に判別せられん、然らば則ち其所謂目的とは何ぞや、曰く涅槃なり、小乘にては之を灰身滅智の寂境とし、大乘にては圓滿具足の樂地となす、我國の佛敎は大乘に限れるを以て、今暫らく小乘を措き、大乘の涅槃に就て論せんに、大經には、

涅言不生、槃言不滅、不生不滅、名大涅槃、とあり、楞伽經には、我所説者、妄想識滅、名爲涅槃、とあり、其他種々の解釋ありと雖も、要するに妄分別を遮遣して、有差別の此心身、直に無差別絶對の眞如に到達吻合するの義なり、蓋し宗教は無限を以て其對境とし、有限の心身を以て無限に合することを目的とせざるは鮮なし、佛敎も亦此外に出でず、目的とする所は無限絶對の境にあり、即ち無明の惑によりて、無限世界より流轉したる者、是れ有限世界なれば、無明を斷盡して、無限世界に復還することを目的とす、是れ流轉還滅の二門を別つ所以なり、然れども其還滅とは、妄念無明の斷滅を意味するものにして、眞如の法躰及び其實相を、撥無するの謂にあらず、而して法躰は平等なること論なしと雖も、實相は歷々として差別相を呈す、故に涅槃の境にも、差別の相は滅するものにあらず、是れ佛敎の還滅流轉が、簡單なるemanation及びabsorptionと大に異なる所なり

人若し絶對に吻合したる涅槃の境にも差別相ありと聞かば、大に怪訝する者あらん、余は玆に絶對と相對、差別と平等との關係、或は涅槃の境に尙ほ差別相を存ずるとの可否を議論せず、唯だ佛敎の所説には、涅槃の境にも尙ほ差別相を存ずる者あることを示し、以て佛敎の目的は、自他の區別を都滅する所の、遍空の無我にあらざることを明かさんとす

佛敎には一切萬法を類別して、遍計所執性、依他起性圓成實性の三性と定めたり、圓成實性は平等一如の實躰にして、萬象の所依本源たるべきものなり、佛敎には之を眞如と云ふ、依他起性とは現象世界の謂にして、一實平等なる本躰眞如の上に、因緣によりて現出したる差別相なり、然るに吾人は平生現象世界を見て、唯だ其の差別の相に迷ひ、其躰平等一如なることを悟らず、彼此隔歷の妄見を起す、此に於て平等躰より出でたる差別相は、吾人の主觀に於て一種特別なる存在と成る、之を遍計所執性と云ふ、故に遍計所執性と云ふは、吾人の妄見を以て依他起の實相を照らし、依て以て主觀の上に現出したる一種の現象に過ぎず、此現象や妄見を離れざる凡夫に取りては現實の有なれども、一旦妄見を遮遣し去れば、又殘留し得べき者にあらず、然れども依他起性は眞如の實相なるを以て、眞如の確實なると等しく確實なり、故に觀心覺夢杪の三種自性の條に曰く

遍計所執、躰性都無、但是妄情計度爲有故、名情有理

無之法、依他起性、如幻假有、衆緣所成、其躰不空、圓成實者、眞實如常、其性凝然、非假非無、今此二性、聖智境界、非妄情境、故名理有情無之法、此に依他起性を如幻假有と云ふは、眞實如常に對したる者にして、誠に夢幻なりと云ふにあらず、因緣生の依他起性は、生滅するの邊より夢幻と云ひしなり、其下に此二性は聖智の境界とあるを以て、依他起性の夢幻にあらざるを知るべし、天台にも即空即假即中と談ず、其意吾人が妄情を以て見る所の差別相は、吾人の智眼未だ實躰に達せずして、遍計して執する所の現象なれば、固より情有理無なれども(即空)、一旦實躰と現象との關係を悟了せば、差別を見ると同時に其躰一なることを忘れず、性相の關係廓如として明かなるを以て、差別の相に對して妄念計度せず、萬法歷々として其眞相を露呈す(即假)既に眞相を看破すれば、其躰朗然として物の蔽ふものなく眞性立どころに顯然たり(即中)一塵一法と雖も、即空にして即假、即假にして即中ならざるはなしと、されば空假中別あるにあらず、觀察の趣異なるを以て、或は妄念より生じたる空法とし或は實躰より出でたる假法とし、或は實躰其物なりとするなり、而して遍計所執性は、妄念によりて起りたる者なれば、妄念斷えたる覺境には固よりあることなしと雖も、依他起性は實躰の相なれば、實躰の有らん限りは存ずるなり、世間相常住と云ふも亦此意に外ならず、此に知る、佛教の目的は平等なる實躰に歸入するにありと雖も、其の所謂平等は、差別を斷滅したる平等にはあらで、差別と相離れざる平等なることを、既に差別を全うせる平等ならば、之が爲に自他の別を湮滅混亂し、社會の秩序を紊亂顚倒するの恐あるべからず、且つ佛教に無我と云ふは、遍計所執を斷ぜんが爲に說くものなれば、一たび遍計所執を離るれば、假和合の我相眞にあるべきなり、夫の佛教にて、遍有遍空を嫌ひ常に中道を說く所以の意、亦唯だ妄念計度の我執と、無差別無秩序なる平等論者とを、破せんとするに外ならず

更に佛教に於ては、阿賴耶識の存在を說きて、假和合の我ありと許せり、阿賴耶識とは一切の種子を包藏する識の義にして、佛教にては一切世間の相即ち現象は、此識が包藏する所の種子より、顯現するものとなす、而して阿賴耶識は因緣和合によりて、眞如界中に現はれたる一現象なれば、絕えず前滅後生し、刹那の裏に三千の生滅あれども、其の相續の關係は決して斷ゆる

となく、過去現在未來の三世を通じて繼續す、例へば吾人の肉躰は、日々營養を外界より取りて、新陳代謝の機能を行ひ、去年の肉躰は今年の肉躰と、其の構成分子を異にすれども(分子の性質は同樣なれども)、去年の我肉躰と今年の我肉躰とは相續の關係絶えざるを以て、決して他人の肉躰とせざるが如し、既に相續の關係絶えざるを以て、現在にて見聞覺知し、運爲行動したる所は、之を阿頼耶識中に包藏し、之を原因として未來の世界を發現す、夫の輪廻と云ふも、此阿頼耶識が相續するを以て、過去の犬、今生の馬となり、今生の馬、未來の人となる、等と云はるゝなり、若し犬馬人の間に連絡するものなくんば、此三全く別物となり、輪廻と云ふと能はざるべし、故に佛教に所謂阿頼耶識は、頗る靈魂と類する所あり、但だ靈魂は我と云はるべき實躰ありて、常住不變なりとするに反し、阿頼耶識は因緣生の現象にして絶えず生滅すと云ふの差あり、しかく常住にあらず實躰にあらずと雖も、相續の關係絶えざる邊より見れば、常住不變の我躰と相去ること一歩のみ、されば解深密經にも、我於凡與愚不開演、恐彼執爲我、と説けり、是れ豈に阿頼耶識が、世間に所謂靈魂若しくば常住我と、酷肖するものあるに由らずして何ぞや、而して此相續する所の假我は遍計所執性にあらず、固より因緣生の依他起性なれば、眞如海裏の一相にして涅槃の境にも絶無とならず、佛にありては報身般若と云ふ、且つ此阿頼耶識は實躰にあらざるが故に個々性の者にして、人々各別の阿頼耶識あり、故に或意味より云へば、之を我と云ふも妨げなし、元來佛が無我と説きしには、種々の意味あるべけれども、一つは當時印度外道中に、我諦論師と稱する者ありて、我と云はるべき常住不變の實躰ありと主張し、以て之に執着したるを惡み、其妄念を呵したるものなり、因緣所成の假我を破したるにはあらず、今日に在りて之を見れば、我諦論師の如き常住不變の我ありとする者殆んどあらざるを以て、佛教にて無我と云ふは、恰かも敵なきに矢を放つの感あり、何となれば世間に所謂我も、精神上には統一せる心念の集合を意味し、有形上には筋骨臟腑の和合せる組織を指す者にして、佛教に所謂假我と等しく、亦是れ因緣所成の假和合物なればなり

斯く論じ來れば佛教を以て個人の發達、社會の進歩を害する恐ありとする論者は、或は疑を解くとあらん、然れども他の一方には、之を以て我執を起すの恐れあ

りと非難する論者もあるべし、請ふ之を辯ぜん、抑も遍計所執性は空無の法なりと雖も、之を起さしむべき原因は決して無にあらず、依他起性の現象あるを以て、能く妄計執着するを得るなり、但だ同一の現象にして或は依他起性の妙法となり、或は遍計所執の妄想となるは、現象の本躰たる眞如に覺して、實躰と現象との關係を、悟ると悟らざるとによる、若し一旦實躰と現象との關係を悟らば、差別の相に惑はされず、從ッて之に執着することなし、即ち執着は遍計所執に於てあり、依他起性に於ては曾てあることなし、佛が遍計所執の我を破斥して、依他起性の我を問はざりしも亦之が爲めなり、今若し我本躰固と平等一如の眞如にして、他の本躰亦平等一如の眞如なるを悟らば、彼我隔歴の妄見（即ち遍計所執の我）消えて慈眼視衆生の大悲心、油然として萠すべし、此に至らば、我の發達は法界一部の發達にして、即ち又全法界の發達なることを知ると共に、彼も亦眞如の一現象なれば、其發達は全法界の發達なることを知らん、既に彼我の發達融通して、同して全法界の發達なることを知らば、彼の發達を希ふは、我が發達を望む所以にして、我發達を計るは彼の發達を圖るものたることを悟るべし、此に於てか自他平等に利益して、全宇宙の發達を企圖するの最大道德心を發揮す、是れぞ佛教道德の眼目とする所なれ、要は三界の衆生を悉く救ふて、全宇宙の圓滿完成、即ち全法界の大涅槃を實現するに在り、蓋し全宇宙悉く圓滿完全ならすんば、其一部たる我も圓滿なる能はざればなり、之を以て佛教には自利利他を偏廢せす、自利即ち利他にして、利他即自利なることを知り、我發達決して忽かせにせず、他の發達は必ず圖らさるなし、不知此くの如きの世界觀尙ほ之を病的と謂ふか、此くの如きの大悲心、尙ほ之を我執と謂ふか

松本文學士に答ふ

田岡嶺雲

予もと不文淺識、敢て大方君子の議論を評隲し是非を相闘するの潜越を爲さむや。然れども性の憨率なる腹藏する所あるを得ず、思ふ所を將て直に之を吐く、而してもと禮に嫻はず、辭讓の婉美は吾よくする所にあらず、故に文を爲て其事の他人に渉るあり、往々にして罵詈とせられ、嘲弄とせらる、嗚呼吾亦誠未だ足らざる乎、將た行文の未だ至らざる乎、吾心底より出づるの語且つ常に人に嗔らるゝを免れず。

吾人が曩きに公孫龍子に就て一言するや、もと敢て特に松本學士の所論に關して云々せしに非ず、學士が所論を讀み、端なく枝癢の感に禁えずして吾懷抱する所の如此たるを述べしに過ぎざりしのみ。況んやまた敢て學士と相爭はむか爲めに然るをせんや。故に其(四一一)頁より(四一三)頁の上段に至る迄の所論は、予が嘗て龍子に就て其所感を記し篋底に藏せしの一節のみ。予は一私人として松本氏に面識あり、又予か前進として平生氏に服するものなり。吾人は寧ろ平生無二無三に前進のものに觸撞して自ら高しとするもの丶禮に於て缺くる所あるを悪む。故に予は故らに予が所見の氏と相違するの點を指摘抉抓するを避け、單に予が意見のかくかくなるを擧げ、讀者をして氏が所論と對照して其相違の點の何れにあるを首肯せしめんとを望みしのみ、故に勉めて是非の批判を挾むを避けて、一に之を讀者の意に任したりき。唯一言(四一三頁)の下段に氏の言をとりて之に反對せるにも、故らに『吾人は愚ふ』の一語を下して自ら卑下したりき。(而かも此謙讓の一語却て學士の一叱を被りたるも亦妙なり予が行文の往々人に誤らる丶寧ろ自ら憫む)故に批評の文としてはもとより此一篇或は氏に心ならざるものあらん、然れども前進に對するとしては、予其禮に於て盡したるを信ず。圖らざりき學士が叱責を受くる此の如きならむとは。

學士は予の文を以て『一篇罵詈的の文字、哲學研究の上秋毫の價値を有せざるもの』となす。予はもとより氏の如く哲學專攷の學士に非ず、予が所見の哲學上秋毫の價値なしといはる丶ともそは甘じて之を受けん。唯一篇罵詈的の文字といふに至ては少しく辯ずる所なかる可らず。氏がいふ所は盖し重に四一〇頁に於ける一節に存するや明けし、而して此一節や予は二三年來に於ける學界の風潮に慨するあり平生異を立て自ら高しとするものを悪むの過甚しきや、會此篇を草するに當て其情淋漓として迸り出で、不知不識、或は語の矯激に失したるにはあらむ、予が平生を悉くせるものは予か文の常に情に駈られて矯激するを知る、予か文は特に學士を捉へて之を諷嘲せんとせしに非ず、予は寧ろ學士が此時流に卓異して公孫龍子に同情し之が爲めに其冤を雪がむとせられたるを多しとして『吾人豈に幽谷跫音の感なからむや』といへり、予は松本氏が怒を鎮めて今一應四一一頁の上段に於ける下半部の一節を熟讀せられむとを望む。而かも猶予か意の貫徹せざ

るあらばこれ予が不文の致す所、唯歎息してやまむのみ、予は氏に呈上せざるものを、氏より熨斗のまゝにて返上せらるべき謂れなし。『吾事と鰡の逃る根芹かな』。學士は亦曾て此俳士の一吟を聞けるとありや否や

學士は予が馬を概念なりといひ、白馬を箇象なりといひたるを以て、是れ心理學初歩を窺ふものの熟知する所といはる、固より然るべし。予が意にして若し學士の如き哲學專攻の人に說かむか爲めなりしならば、此の如き娓々の言辭を費さざりしなるべし。然れども天下皆學を好むこと學士の如くならず、識に富むこと學士に似るもの寡きを如何む。知らずや、古來幾多の人は此公孫龍が死語に着して其馬の一語に幾多の腦漿を費し、幾何の苦心を用ゐたるを、常識のもの卒然として白馬は馬に非ずときかば誰れか其異に駭かざらむ。天下皆松本學士の如くならば、予は寧ろ口を閉ちて唯花を拈りたらむのみ。

且つや眞理なるものは必ずしも高遠の所に存ぜず、平坦々の裡却て眞理ありて、而して其餘りに近きに過ぎて人却て知らざるもの往々にして是。予の語が心理の初歩を窺ふものゝ知る所たりとするもそれが爲め必ずしも其眞理上に於ける價値を減ずべしとはいふ可らず。且やこれの學士が三段論法に約して說き出したる白馬は馬の一種なり云々といふことの、論理學の初歩を窺ふものの知る所たると何の擇ぶ所ぞ。說明し了りて後こそ造作もなけに見ゆれ、白馬の、黃黑馬の、馬のと、同意義(形式に)の字の錯雜參差せる、これはしか〳〵なりと分叙するに非ざれば、中々に讀む者は解し難きに苦まむ。予は白馬論を解き來るに、形とか色とか實躰とかの如き文字を用ゐんよりは、寧ろ概念箇象等の文字を用ゆるの更に明晰にして寧ろ科學的に非さるなきかを疑ふ。嗚呼々々、今智慧の環を解きわづらふものありて人にしか〳〵すへしと其法を敎えられて始めて之を解き得ながら、而かも此法の餘りに無造作なるを罵るが如きは天下往々にして然るものなり。

予が『論理の悖戾と憑據如何を以て徒に公孫龍子を論するものは。猶未た龍子の眞意を知るものに非す、徒にこれ龍子か言を讀むのみ、文字を知るのみ』といひしは、必すしも論理を泛して以て事を談し理を考へ得らるべしといふには非ず、龍子が眞意は形式のみに拘して知る可らさるをいへるのみ。天下何の所にか正當の推論法によらすして辯論するを得可けんや、然れとも亦辯論の際に於ては故らに其の論法を詭怪にして、

其根柢に於ては正當の推論法なから猶外見に然らさるか如きものなきに非さるを知らさる可らす。そも〳〵此の說に謬れりといふは論法に誤らずとも思想に謬れるをいふなり。學士は其形式を論して『其思想の結局如何を見んと欲するに非す』といひ、予は其思想のある所を探て、形式を其末なりとす、二人の趨く所既に異なり、然らば如何に相辯するもこれ水掛論たらんのみ。而して學士は『他人が言論思想の謬誤と否とを論する。又論理を措て更らに道なし』といはるれとも、而れとも予が同情を要するといふ所實に茲にあり、(假令學士は吾人のいふ所は、既に之を熟知すといはるれとも、暫らく其耳を假すことを許せ、)吾人は寧ろ先つ其眞意如何と直參し、而して其眞意によりて其論法の如何の邊に謬り、其議論の何の所に不十分なるかを正さんといふにあり、これ予と學士とが其所見の絕對的に相反する所、もし論式の正否によりて眞に其思想の正謬を律せんとせば、寧ろ何の所にか徹視的の同情の眼を要すべきや。

哲學專攻の士たる學士が諄々として門外漢なる予に辯證法の事を敎えられたるは予が感謝に堪えざる所なり。然れども翻て東洋哲學に於ける學士が所論を見るに、全篇數千言、辯證法なる一語を着けず、予は哲學專攻の士たる學士にして、唯に『此の如き一種の論辯法を按出したり』云々と一掃し去て、細かに綜合的又は分解的辯證法なる哲學的用語を使用するなくして、却りて予等の如く(氏が所謂)用語の意義精細明瞭ならざる曖昧的文字の哲學的にあらざるものを使用したるを怪しまざるを得ず。

冥悟默契の事に至りては予は見地の根本的觀念なり、(哲學專攻の士に非さるも猶哲學的思索は之を爲すを得へくむばこは予が哲學的見地の第一旨義たり)、故に之を論せんとせは徒に紙白を塡むるの嫌なき能はず。煩はしくとも、予は學士に予が從來宗敎紙上に揭げ來りし二三の論文によりて予が意見の一斑を知られんとを望む、(せめて本年一月に於ける『神秘敎に於ける接神を論す』の一文にても、)唯予は茲に絕對は無我に存し、無我の境界は時と空間と因果法との外に超逸すといふを以てやまむのみ。

次ぎに予が龍子を以て當時の流行につれ難解の措辭を用ゐたりといふ、或は獨斷的たるを免れざらむ。而かも氏が然るに非ずといふも豈にまた獨斷的にあらざるなき乎。

吾人は寧ろ才氣餘りあるの徒却りて故らに難解の措辭を弄して世人を瞞し去らむとするあるなき乎。嘗試に龍子が當時を想ひ見よ、彼の縱橫の士、辯を弄する何れか才氣俊邁の士に非らざらむや。且つや辯を鬪はし辭を弄するは此の如き俊邁の士雲興し各其の信する所をとつて相爭ふに際して免れ難きの數なり、龍子をして當時に生れず獨り天下に立て其信ずる所を唱へしめんには固より如此論鋒を用ゆるを要せざりしならむ。予は更に學士に當時四圍の境遇と地を換へて、吾人をしてこゝに在らしめは如何ならむかを一考せられんとを望む。彼の孟子すら猶時に他と相辯するに當ては、詭辯を弄せしの嫌なからざるにあらざりしに非ずや。嗚呼今時の學者を以て自任するもの、徒らに形式の末に拘して、直に眞意に參することをなさず、文字によりて意を迎へんとす、是れ豈に寧ろその終生讀て而かも其眞意に參する能はざる所以に非さらむや。

龍子か馬の字や指の如き全義の文字をつらねたる其眞意に徹悟したる上に於てこそ、此の馬は何の義にして此の指は何なり、この馬は何にしてかの指は何なりと、一々首肯するは容易ならむ。而れども彼の如く同樣の（形式的に）文字を列擧し來るを以て故らに言語上の詭怪を弄して猶庸衆を駭かさむとするに非ずといふを得べき乎。

予は、龍子を以て老子か旨を得て而して之を述ぶるに澁解の措辭を以てするものと信せり、故に四庫全書提要のとく所を以て龍子の意に庶幾しといひしのみ、吾人は決して子の辯の是非を混し物我を齊ふするにありといふに非す、その意の存する所の然るにあるをいひしのみ、予は學士か更に予か所論を仔細に讀一過せられんとを望む。

予か用語の曖昧なるは命を聞く、唯予は予の聊か學ふ所の漢學にありて而して學士か論せられたる公孫龍子の支那哲學者たるの故を以て、一度予か所見を吐きしのみ、予豈に學士の如き哲學者に對して哲學的論諍を敢てするといはむや。

而れども哲學的用語を使ひ能はざるもの、必すしも哲學的思索より禁せらるべしとは信せず、唯吾人は前にいへる如く、龍子に對する哲學上の所論は、單に予か懷抱を陳したるのみにして、哲學專攻の學士と衡を相爭はんとせしに非す。唯吾人は末段に於て即ち哲學上の論議と相渉らさる所に於て一度學士の論に吻を容れたるのみ。予は寧ろ謙讓に出てたるを信するなり、嗚

呼々、傲負は由來美德に非す。

氏は表彰によりて馬を考ふるを得るといふ、馬なるものの果して考ふるを得るか、箇象を除て果して吾人の念頭に浮ふるを得る乎、吾人は白馬黃黑馬の如き箇象を念ふとなくして、果して能く馬なる概念を浮ふるを得へき乎。馬なる語はこれあり、念頭に上るとき猶馬ある乎。且氏は概念は表彰を綜合するに過きさるのみといふ、之を綜合するもの果して客觀に存する乎、將た主觀の力に存すへき乎、主觀論は予か見地の第一旨義なり、予は哲學史によりて哲學を學はず、フィヒテの哲學の何の所に謬れる乎、吾人は之を知らず。吾人は之を自に問ひ自に答へ自に決して自らの見地を造り出せるのみ。吾人はとゝに枝葉に渉りて子か見地を喋々するの要なし。吾人は前にいへる如く、更に氏に一たび予は二三の所論を見るを煩はさむとす。而して後更に筆を新にして學士と相見えんのみ。予假令哲學專攻の士に非ずして其論斷に誤謬あるにもせよ、猶や〻自ら信する所あり、幸に學士の指導を煩すを得ば喜び何ぞしかんや。

時と空間とに律せらる〻現象の因果世界、相待を除て別に絕對あるか。現象の外別に本躰ある乎。所謂絕對なるもの果して主觀の一心理狀態にあらざるなき乎、本躰なるもの亦これにあらざるなき乎。

龍子に對するの一論もと予が懷抱の一端をこれに對して吐露し來りたるもの、仔細に學士が反駁に答へんとせば、更に予が根柢の意見より說き起し來らざるを得ず、そは玆に贅するの要なしと信ず。唯予の言の敢て罵詈を弄したるにあらざるを學士に知らしめ得ば則ち可なり。而れども予は强て辯疏せんとするに非ず、學士更に予が文を一讀過猶罵詈なり嘲弄なりといはゞ、予が知る所にあらざるなり。末段の一語、三國の忠言にあらざるも予は唯感泣して學士の厚意を謝し奉らむのみ。

雜錄

レヴイツト氏の誤解に對するマツコーレー氏の書翰

本年六月刊行の『宗敎』紙上に於て余は「日本ユニテリアン協會の目的を論じて世人の誤解を正す」と題し、ユニテリアン主義に關する意見を公にしたるこ

とありき。之れ固より余が一己の私見に過ぎずして、日本ユニテリアン全躰を代表したる意見とみるべきものにあらず。従て之に對する責任も亦余一人の上に歸すべきものにして、ユニテリアン全躰の上にあるものにあらざるや明かなり。然るに宗甫神教の宣教師レヴィット氏は之を以て日本ユニテリアン全躰の意見が現はれたるものゝ如く速斷し、その一部分を英譯せしめて之を米國に通信し、以て日本ユニテリアンの機關雜誌たる『宗教』は彼等の位置を宣言して斯々云へりと云ふ。之れ畢竟氏が『宗教』を以て日本ユニテリアンの機關にして、その社說に論ずる所は即ち全躰を代表せるものと誤認せしによる。而して氏が通信の米國クリスチアン、レヂスター紙上に現はれたるものをみるに、余が原論の主意と相違する所極めて甚だし。是を以て余はその相違の點を指摘して、米國ユニテリアンの代表者たるクレイ、マツコーレー氏に報ず。氏は之に對してレヴィット氏が懐ける如き世人の誤解を防がんが爲め、左の一書を送らる。玆にその原文を掲げ、又之を和譯してその尾に附し、以てレヴィット氏が所見の誤れるを明かにし並せて世人をして此種の誤解なからしめんとす。(レヴィット氏の通信は以下に掲載せる「レヴィット氏に質す」と題せる文中にあり)

竹　内　楠　三

(原　文)

Tokyo

Sept 26, '95

Dear Mr. Takeuchi,

On my arrival home I find your letter of the 23rd inst, in reference to the "Christian Register" article and Mr. Leavitt's strictures upon Unitarians in Japan. I shall soon write a letter to the "Register" and, in my letter, make free use of your letter to me. With regard to what you say, I shall speak more at length by and by; but to-day I wish to send you a word or two which may be used in the next issue of *Shukyo*, to be published in a few days.

Mr. Leavitt should understand that *Shukyo* is not the *organ*, or *responsible agent*, of any one man, or of any organization, but that is a magazine published by the Unitarian Mission in

Japan, as an arena for the free expression of thought on religious, ethical and social questions, limited only by the rational, moral and literary qualities of its contributors. The Unitarian organizations in Japan, that is, the Unitarian Association, the Post Office Mission., etc, and, also, organizations supported by the Mission, such as Senshin Gakuin, have the magazine at their disposal, to use for the announcement of their plans and work; but the magazine should not be considered by any one as committing any of these organizations to a definite policy or dogma, except as each organization, in its own name, may announce in its columns such policy, or dogma. Editorially, therefore, the magazine is conducted to serve this general free purpose. Editorial articles, therefore, should be regarded as only the expression of their individual writer, *not* of any organization back of the writer.

In America, the "New World" which is a review supported by Unitarian money, is not bound by the opinions expressed by any of its writers. Its editor is its manager rather than its mouthpiece. So it is intended that *Shukyo* shall be. For this reason the misunderstood name "*Unitarian*" was dropped four years ago and "*Shukyo*" substituted for it. And I think that the position of *Shukyo* in this respect should be made so clear, that neither Mr. Leavitt, nor any other person, could make the mistake that Mr. Leavitt made last spring. Mr Leavitt was all wrong when he held the Unitarians as a body responsible for what you as editor may have written. Your editorial articles should be signed by you in person, and you as writer should be regarded as only one among the many contributors to the magazine, not as the authoritative voice of the magazine itself. I think, therefore, that all anonymous editorial leading articles should be replaced by personally signed articles, and that, at the head of the magazine, it should be clearly announced that the magazine

is "*an arena for the free expression of reverent thought upon religious, moral, and social questions; and that the various writers of the articles, not the magazine itself, are to be considered as responsible for the opinions expressed.*" The general consensus of Unitarians is best exhibited by the principles and declarations appearing on the cover page of the magazine. If *Unitarians as a body are to be judged*, that page is the page they should be judged by, however much Unitarians as individuals may vary from what appears on that page. This matter is of so great importance to the Unitarian movement in Japan, that I wish you would publish this letter in the next *Shukyo*, both in English and in translation. Such critics as Mr. Leavitt, and others I have heard of, must have no excuse for misunderstanding, or of misrepresenting, what we are laboring so hard to make known to the people of this empire.

Yours very truly

Clay Mac Cauley

Representative of the

A. U. A. in Japan.

（譯　　文）

拜啓、クリスチアン、レヂスター雜誌の記事並にレヴイツト氏の日本ユニテリアンに對する誣言に係はる本月二十三日御差出の御書面歸宅早々拜見仕候。レヂスター雜誌へは早速一書さし出し可申、尙ほその書中には貴論摘採可仕候間左樣御承知下さるべく候。御申越の件に就ては不日尙ほ申述べく候へども、近日發刊に相成るべき次回の宗敎の用に供へんため、今さし當り二三言申上度候。

レヴイツト氏の當に了解すべきは、『宗敎』は決して一個人若くは一團躰の機關には無之、宗敎、倫理、社會等の問題に關する思想を自由に發表せんが爲めの論壇として日本ユニテリアン弘道會の發刊する所に有之、その制限とては單に寄書家の合理的、道德的、文學的の性質如何にあるのみなる事に御座候。日本に於けるユニテリアンの諸團躰、即ちユニテリアン協會、郵信部等、並に先進學院の如きミツシヨンによりて保持せらるゝ團躰はその計畫及び事業を告示せんが爲めに本誌を使用し得るものに候。然りと雖ども此等の團躰が本誌を使用するにはその名義を有する頂内に於て各自の方策若くは敎義を告示し得るの外、此等の團躰中何

れの一たりとも一定の方策若くは敎義の爲めに本誌を專用するものとは思ふべからざる義に御座候。故に本誌は編輯上此の普通にして且つ自由なる目的に適ひ得るやう掌理せらるべきものに有之候。されば社說の如きもこれ單に起草者一个の意見を發表したるに過ぎずして決してその後に立つ團躰の意見を發表したるものには無之候。米國に『ニユー、ウォールド』と稱する雜誌有之候。此雜誌はユニテリアンの資金を以て保持せられ居候へども、その記者中何人が發表せる意見にも限定せらるゝものには無之候。その編輯者の如きも意見の代表者たるにあらずして寧ろ管理者たるに過ぎず候。『宗敎』も亦た斯の如き企圖に出づるものに有之候。故に世人の誤解を惹きし『ユニテリアン』と稱する名は四年前之がため除去せられ、『宗敎』てふ名稱を之に換へられたる次第に御座候。されば本紙の位置は此點に於てレヴィット氏にも、またその他の人々にも、當春、同氏が起したる如き誤謬は毛頭起さるまじき程明瞭なるべきものと被存候。レヴィット氏が貴君の編輯者として書かれし所に對してユニテリアン全躰の責任あるものとなしたるは全く氏の不正なる所に有之候。貴君の書かれし社說は貴君躬ら之れに記名すべきものに有之、又貴君は記者としては單に數多の寄書家中の一人とみなさるべきものにて、雜誌そのもの丶責任者とは見らるべきに無之候。故に拙者は一切無記名の社說を記名の論說に置きかへ、又雜誌の冒頭に「本誌は宗敎、倫理、社會等に關する敬虔なる思想を自由に發表すべき論壇にして、本誌に現はれたる議論に對しては諸家各々其責に任ずべく、雜誌そのものは毫もその責任を負ふべきものにあらざる」ことを明かに告示するは然るべきことゝ存ぜられ候。又ユ敎徒全躰の合同一致する點は本誌の表紙に揭載せる主義及び宣言の最もよく示す所に御座候。假ひユニテリアン中一個人としては其表紙に揭載せる所と大に相違することあるにもせよ、若しユニテリアン全躰が批判せらるゝに當りては、その依て批判さるべきものは表紙の面に有之候。此事柄たるや、日本に於けるユニテリアンの運動上、重大の件に有之候へば、拙者は此書面を原、譯合せて次回の『宗敎』に揭載なし下され度所望に御座候。吾人が帝國人民に通曉せしめんとして盡瘁せる所に就てはレヴィット又その他拙者が聞き及びたる如き批評者の誤解若くは誣言は實に容赦すべからざるものと存ぜられ候。

千八百九十五年九月廿六日　クレイ、マッコーレー

米國ユニテリアン協會代表者

竹內楠三殿

レヴァイツト氏に質す

竹内楠三

我邦在留の宇宙神教宣教師にしてレヴァイツトと稱ふる人近頃日本ユニテリアンの景況をその本國なる一雜誌に通信したりとて、その文八月十五日發刊の米國クリスチアン、レヂスター雜誌に轉載せらる。之を一讀するにその云ふ所、多くは誤解と誣言なるが如し。氏が斯の如く事實と相違せる通信をなし、米國人をして我邦に於けるユニテリアンの運動を誤解せしむるに至れるは抑も如何なる理由なるか。これ氏の誤聞若くは誤解に出づるものか、將た又故意に事實を曲げてユニテリアンの運動を妨害せんとする邪惡の念に出でたるものなるか、吾人之を知るに由なしと雖ども、何れにあれその責任は氏の免るべからざる所なるべし。苟も他人の事業を批評せんとするには極めて精察、謹愼ならざるべからず、若し他人の重大なる事業に對し無責任なる妄評をなすに至りてはその罪決して恕すべからざるなり。假ひ誤聞若くは誤解に出でたりとするも、已れの粗漏より他人に蒙らせたる損害に對してはその責を免るべからざるや明かなり。白痴瘋狂にあらざる以上は誰か之を感ぜざらん。況んやその身、宣教の任にあるものにして如何に商量かなきとは云へ、他人の事業に對し無責任の妄評をなして豈に可ならんや。

吾人は今クリスチアン、レヂスターに轉載せられたる氏の言を擧げ、その事實に合するや否やを證せんとす。氏の言に曰く、

Our Unitarian brethren have declared their position as simply promoting free thought on religious subjects. One need not be a Christian in order to be a Unitarian. One may be a Christian, or he may be a Buddhist, or he may be neither, only provided he is a free thinker. Some of the teachings of Jesus, of Buddha, of Confucius, are wrong and harmful to the moral and spiritual development of the Japanese people; and we will do all we can to drive them from the land (so says a late issue of *Shukyo*, the Unitarian magazine). In the same article it is declared that they oppose no one's opinions nor pronounce them wrong nor heathenish nor heretical, but would freely learn from all, and that they themselves profess no fixed principles.

第一、氏はOur Unitarian brethren have declared their position as simply promoting free thought on religious subjects と云ふと雖ども、ユニテリアン教徒はいつ斯の如き「デクラレーション」をなしたることありや。固より宗教上の問題に於ける自由思想てふことはユ教徒の大に重ずる所なりと雖ども、單に之れを傳播するのみを以てそのポヂションとなすものにあらざるなり。吾人は未だユ教徒が單に宗教上の問題に於ける自由思想の傳播のみを以て己れがポヂションなりとデクレアーせしことあるを聞かず。然るに氏が以上の如く云ふもの必ず依る所なくんばあらず、これを明示するは氏の責任たるなり。

第二、氏は近刊の宗教がSome of the teachings of Jesus, of Budha, of Confucious, are wrong and harmful to the moral and spiritual developmentof the Japanese people; and we will do all we can to drive them from the land と云へりと云ふ。これ余が去る六月發刊の「宗教」第四十四號に於て「日本ユニテリアン協會の目的を論じて世人の誤解を正す」と題したる論文中に我邦今日の狀態に於ては教義(dogma)の無益有害なることを述べたる一節中より誤譯せしものならん。玆に余の原文を擧ぐれば、

夫れ釋迦の教義とか、孔子の教義とか、基督の教義とか云ふ如きものが思想の自由を束縛し道德の改革を妨げて社會の發達を遲々たらしむることは吾人の日常目擊する事實ならずや。是を以て日本ユニテリアン協會は一切教義と云ふ如き衆人の思想を強ひて束縛せんとするものを我邦の思想界より排斥せんことを勉むるものなり。(宗教第四十四號三百二十二頁)

と云ふにあり。氏の言を之と比較するときは其間に差異なしと云ふべからず。他の點は暫く措くも教義を英語の teaching と譯せるは余の大に迷惑を感ずる所なり。若し教義てふ語の意義を取違ふれば以上の句は何の用をもなさゞるや明かなり。故に余は此大切なる語を誤解せられざらんが爲めに、同文の始めに既に『ドグマ』てふ假名を附しおきたり、(同號三二〇—三二一を見よ)。尙ほ之をも顧みずして勝手にteachingと變じたるは如何ぞや。夫れdogmaとteachingとは凡俗の心には何れにても左程異ならざるやう思はるゝやも知らずと雖ども、宗教學上に於ては二者の區別極めて重要なり、決して混同すべからず。余が原論の主意はドグマの有害無益なるを論ずるにあり。然るに之を變じてteachingとなすに至りては全く原文の主旨を失ふや明かなり。他人の議論を引くに當り原文の主意を失はざ

るやう勉むるは學者の義務なるにも拘らず、漫りに余が原論中の主要なる語を變ずるに至りては極めて不正なりと謂はざるべからず。普通の敎育あるものならんには余の原論を一讀して誰か所謂敎義のdogmaたることを知らざらん。されど余は尙ほも讀者の誤解を恐れ特にドグマてふ假名を附し置きしなり。然るに之れをteachingと變ずる如きは故意に出でしものにあらずして何ぞや。レヴイツト氏以て如何となす。

第三、次に氏はIn the same article it is declared that they oppose no one's oppinions nor pronounce them wrong nor heathenish nor heretical, but would freely learn from all, ……と云へり。余は同文中何れの部分に於て斯の如く云ひしか確かに知る能はずと雖も、恐らく序言中に

> 敎權の强盛なる時代にありては、各人若くは各派が已れと反對なる意見に對して異端、邪説、外道など云ふ如き惡感情を起すものなりと雖ども、今日の如き研究的精神の活々たる時代に於ては決して斯の如きことあるべからず。若し已れの未だ思ひつかざる如き異種の説を聞くことあらんか、忽ち之を異端、邪説などとして排斥せざるのみか、却て已れが研究の好材料として歡迎すべきなり。是れ各人が到底已れ一個の境遇に於て得べからざる性質のものにして、社會が附與する特種の賜とこそ云ふべけれ。苟も今日知識の進歩を計らんとするものならんには、反對の意見、異種の學説を度外視して豈可ならんや。故に吾人は日本ユニテリアンとして固より獨立の意見を有するものなりと雖ども、已れの意見のみを以て獨一無二萬世不易なる眞理と確信し、一切他の意見、批評、勸告等を排斥して顧みざる如き固陋の徒にあらず、汎く世人の思想に注意して漸次自己の不完全を補はんことを勉むるものなり。(三一七―三一八)

と云ひたるに基くものならん。余が序言の主意たるや、吾人は世の論者の加へらるゝ批評を度外視するものにあらずと雖も、是まで吾人が屢々受けし所の批評は日本ユニテリアン協會の目的を誤解するより出でたるもの多ければ、世の論者暫く批評を止めて先づ吾人の主張する所を明かにせよと云にあり。而して以上の句はその前半たるに過ぎず。議論の片端を捕へてその説を是非し、以て斯々デクレアーせりなどゝ云ふは不當も亦甚だしからずや。是を以て尙ほ正當に他人の論説を解し得たりとなすか。斯る妄評家に出逢ひては如何なる名論卓説も三文の價値なきに至らん。

第三、終りに氏は又同文中にthey themselves profess no fixed principlesとデクレアーせりと云ふ。抑も是れ誤解か、將た誣言か。その何れたるを知らずと雖ども全く虛妄の言なり。夫れ余の原論たるや、徹頭徹尾 three principles の説明に外ならず。之を反復せ

る前後幾回なるを知らず。原論を一讀せるもの誰か本論がユニテリアンの三大主義を論義し、說明するものたるを知らざらん。然るに之を以て自己に一定の主義なしと宣言せりと云ふ誣言も亦甚だしからずや。余が論文の何れの部分に於て余は斯る宣言をなせしか、In the same article it is declared とレヴィット氏が云ふ以上は無論余が論文中の何れにあるかを知れるや明かなり。レヴィット氏之を示さずして豈に可ならんや。」レヴィット氏の引用たるや、極めて曖昧なるのみならず、議論全躰の趣意を見ずして僅かにその一端、而かも未だ議論の本領に到らざる途中のみを捕へて、ユ敎徒は斯々宣言せりなど、評するものなり。若し眞に余が原論の主旨を捕へ、日本ユニテリアン敎徒は斯々の宣言をなせりと米國に通信せんとならば何故余が積極的に日本ユニテリアン協會員個の目的は斯々なりと論ぜし所(三二五—三二九)に依らざる。若し然らずして十四ページの長文中單にこゝかしこより攻擊の種になりさうなる所のみを引き出し、尙ほ之に己れが偏見を加へ以て何も知らざる米國人に向ひ日本ユ敎徒は斯々宣言せりなど、吹聽するは誣言惡口に非ずして何ぞや。レヴィット氏たるもの反省せずして豈に可ならんや。

彙報

◎大谷派本願寺改革

大谷派本願寺は大に寺務所職制の大改革を斷行することゝなり在來の寺務所職制を九月限り廢止し十月一日より改正寺務所を以て施行することゝせり從來寺務所內に敎學、會計、內事、再建の四部あり又其部內に諸科ありしが其部長は皆執事渥美契縁師の兼務たるより內外に苦情多かりしが今回改革の要旨は條例を定め一派を統轄するの所とし所內に左の役員を置くと

執事、參務、准參務、顧問、議事、贊事、贊衆、錄事、贊事補、承事

而して上局、本局、式務局、內事局、議事局の五局を置き上局に文書監正の二科を屬し本局に敎務、學務、庶務、地方、財務の五部を屬し局長部長は兩三日中に任命あるよし右にて舊各部長を一人にて兼務するの廉は洗除するを得べし而して新設の議制局と云ふは議員を贊衆と稱し二十人を定員とし半數以內は執事參務、准參務議事を以てし他の半數は現に本山寺務所各部の事務に

關せざるものより特撰して之れに充つることとし賛衆の任期たるや執事以下役務を以て兼任するものは無期限とし其他は三ヶ年とし議長は賛衆中より法主の特命とす凡そ條例の制定廢止及改正等は審議會の議を經て議制會議に提出するを得べく總て重大の事は議制會議を經て決行することとす左れば此二十人の賛衆の半數十人は在野の舊寺務役員たりし現任の渥美執事と十年以前には本山にありて渥美氏と同等の勢力を有したる加賀の石川舜台能登の篠塚不着などを或は入て賛衆たるやも知れずと云へり新任局長部長は早速任命あるとの事なり

◎眞言宗長者の選擧

眞言宗現任長者高志大了師は明年七月にて滿期なるも病氣の爲め其の滿期前に辭任したるを以て全國の同宗末寺より後任の選擧を行ひ先月十二日京都教王護國寺法務所に於て開票を行ひたるに泉涌寺長老鼎龍曉氏多數にて當選したりと云ふ。

◎教師撿定條規の認可

神宮教々院にては去五月下旬内務大臣より神佛教師登用撿定方に付訓令之れありたる以來其主旨に基き詳細なる取調をなし該條規の認可を出願中なりしが先月五日同大臣の聞屆くる所となりたる由元來同教は教師採用上濫撰の事なき樣注意し居りし由なるが爾來益々其撰擇宜しきを得るならんと

◎救世軍

近頃我邦に渡來せる救世軍は今を去る十數年以前より起りし基督教傳道の一手段たる者にして其本協會は英國に在り目的は世に慈善を教へ福音を傳ふる者にして其協會は一の會社組織を爲す者なり其世界各地に派遣せられ居るものは數隊ありて皆出發の際には同會社より旅費を借受け目的地に至りたる後其國の風俗習慣に從ひ傳道の傍ら音樂裁縫等の業を以て金を儲け必ず之を返濟するの規約なり又其軍と稱し大尉中尉士官等の名稱あるは異教者を降伏するの軍隊と云ふ意味にて一般の兵士に形取り救世軍と任ずる者なり從來我國に於ける基督教師は傳道上未だ充分の功を奏せし者あらず救世軍果して日本國民を救ひ得るや否や

◎臺灣と本願寺

東西本願寺は臺灣島鎭靜を待て臺北府に別院を創設し其他各要地に說教所を立て大に布教を圖るよしにて近々僧侶數名を派し實地の調査をなすといふ

◎佛教博愛舘病院

神田錦町の佛教博愛舘病院は今回院務を釐革し總理に浩然居士宇野大太郎氏院長に正四位勳二等松本順氏を推し大に天下の佛心を集め追ては醫學校をも設立する筈なりといふ

◎浦鹽斯德港の布教

本派本願寺にては數年前より浦鹽斯德港の布教に從事し、佐賀縣の多門速明氏を遣はし、既に說教所の新築を爲したるが今回彼の報効義會に盡力し、郡司大尉に同行せし里見法爾師の來京せしに付、更に同師に浦鹽斯德布敎巡視を申付、師は去月六日出發せられたり

◎南美以敎會第四日本年會

去る八月廿九日午前第九時神戸美以敎會に於て南美以敎會第四日本年會を開かれ種々討議等ありたるよし左に掲ぐるは同會統計委員の報ずる處にして同派の敎況なり

●地方傳道者十五名●信徒五百十一名●小兒受洗者四十一名●大人受洗者五十三名●「エプヲルス」同盟會一●同會員十八名●日曜學校數五十八●同敎師數七十一名●同生徒數千四百五十五名●監督俸給寄附金卅一圓十四錢●會堂八棟●傳道地十四●牧師舘六棟其價九千百十七圓●關西學院價格四萬四千六百六十圓九十五錢●同敎師數十二名●同生徒數七十名●廣島英和女學校價格六千圓●同敎師數五名生徒數七十名●幼稚園小兒四十五名●保姆三名●牧師俸給寄附金四百六十五圓六十一錢●傳道費寄附(外國傳道の分)卅二圓九十四錢(内國傳道の分)二百廿圓五十二錢●會堂建築寄附金八十五圓三十三錢

◎日本基督敎會敎情調査委員報告

第一　敎會

敎會の總數は七十二個にして前期より一個增加せり而して第一東京中會に屬するもの廿一個第二東京中會十六個、鎭西中會六個、浪華中會十六個、宮城中會七個、山陽中會六個なり

第二　講義所

講義所の總數は七十九個にして前期より三個增加せり而して第一東京中會に屬するもの廿一個、第二東京中會十六個、鎭西中會七個、浪華中會十四個、宮城中會十五個、山陽中會六個なり

第三　人員

人員合計は一萬七千七百八十七人にして前期より減ずると

三百三十一人（その重もなる原因は數寄屋橋敎會の脱會ならん）なり、其中第一東京中會に屬するもの三千六百四十三人、第二東京中會二千三百五人、鎭西中會六百十八人、浪花中會二千百八十七人、宮城中會一千四百七十八人、山陽中會五百六十四人なり

第四　受洗者

受洗者は大人六百三人小兒九十八人にして合計七百一人なり而して前期より減ずると五百九十五人なりとす受洗者總數を各中會に區分すれば第一東京中會二百二十六人、第二東京中會七十七人、鎭西中會四十六人、浪華中會百四十九人、宮城中會百七十三人、山陽中會三十人なり、而して敎會若しくは講義所中にて最多の受洗者を出したるは海岸敎會にして其數八十三人なり次は高知敎會にして其數四十五人なり

第五　金員

金員は惣計壹萬六千貳百貳拾三圓八拾錢にして前期より減ずると八千四百七拾參圓四拾錢なり（此減額の重もなる原因は前期は一ヶ年半にして本期は一年なる事ならん）惣金額中第一東京中會の分四千九百三拾八圓〇九錢、第二東京中會の分二千九百二拾四圓六拾三錢四厘、鎭西中會の分八百六拾九圓二拾六錢五厘、浪華中會の分四千六百九拾貳圓五拾壹錢九厘、宮城中會の分壹千九百拾四圓七拾五錢四厘、山陽中會の分八百八拾四圓五拾參錢八厘なり

第六　安息日學校生徒

安息日學校生徒惣數は四千七百八十四人にして前期より四百七十二人を增加せり而して其中第一中會の分一千二百八十五人、第二東京中會六百四十六人、鎭西中會四百二十八人、浪華中會一千二百四十一人、宮城中會九百四十八人、山陽中會二百三十六人なり

第七　敎師

敎師の數は七十五人にして前期と同數なり其中第一東京中會に屬するもの十四人、第二東京中會十八人、鎭西中會七人、浪花中會十七人、宮城中會十八人、山陽中會九人なり

第八　傳道者

傳道者の數は一百十三人にして前期と同數なり而して第一東京中會所屬の者三十六人、第二東京中會十五人、鎭西中會十六人、浪花中會二十八人、宮城中會九人、山陽中會九人なり

（福音新報）

明治二十九年五月廿八日印刷
仝年五月卅一日發行

定價貳拾五錢

東京市芝區三田四國町二十六番地
發行人兼印刷人　神田佐一郎

東京市麴町區飯田町三丁目十番地
編輯人　竹内楠三

發行所　日本ゆにてりあん弘道會
東京芝區三田四國町二番地第六號

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

宗教定價表

一冊	六錢	凡ベテ郵
六冊（半年分）	三十錢	税ヲ要セ
十二冊（一年分）	五十錢	ズ

廣告料

一行五號活字廿四字詰	一頁六十二行
一行以上	一回八錢

送本弁に廣告料共一切前金にて申受候事
郵券代用一割增の事
郵便爲替は東京芝區三田郵便支局へ向けユニテリアン弘道會宛振込の事
前金切れたる節は包紙を朱書きに致置し候間早速御送金願上候